

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第146集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集

多胡蛇黒遺跡

古墳・奈良・平安時代の集落跡の調査

《本文編》

1993

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第146集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集

多胡蛇黒遺跡

古墳・奈良・平安時代の集落跡の調査

《本文編》

1993

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団



多胡蛇黒遺跡と周辺の地形（北朝上空より）



遺跡内出土の紡錘車・未製品・銅片

序

昭和62年度より着工されました上信越自動車道（藤岡市一佐久市間）の工事も完成し、この3月に供用開始となりました。関東地方と長野県の時間的距離は一段と縮まり増々便利になってまいりました。これによって人的交流、経済効果は計り知れないものがあるといえましょう。また、上信越自動車道建設に伴う発掘調査整理事業も順調に進みまして、ここに通巻で16冊目を刊行する運びとなりました。

ここ多胡蛇黒遺跡は吉井町市街地の南の緩やかな斜面上にあって、吉井インターチェンジの西側に位置しております。また、この遺跡は「八田郷」「物部郷長」といった文字資料を出土した矢田遺跡の西側につながっており、遺跡の広がりをとらえる上でも大きな意味があると思います。

調査の結果、旧石器時代から奈良・平安時代に至る多くの遺構・遺物が発見されました。特に古墳・奈良・平安時代の住居跡からたくさんの紡錘車が出土しており、矢田遺跡と共にこの地域が古代織物の産地であった事をうかがわせる貴重な遺跡といえましょう。

本報告書が県民各位・研究者・各教育機関で広く活用され、この地域の歴史の解明の一助となることができれば幸いに存じます。

また、発掘調査・整理事業を行うにあたり、日本道路公団・群馬県教育委員会・吉井町教育委員会をはじめ多くの方々からいただきました御指導、御鞭撻に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「多胡蛇黒遺跡」（調査時の事業名称「中山遺跡」）の発掘調査報告書である。
- 2 多胡蛇黒遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字多胡字蛇黒（247～256番地ほか）・字善樹（256～269番地ほか）字中山（551～560番地ほか）を中心に所在する。遺跡名は遺構の多く検出された字蛇黒を代表とし、大字の多胡と小字の蛇黒を用いて多胡蛇黒遺跡とした。
- 3 発掘調査は、日本道路公園の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者

(1)発掘調査	調査期間	昭和63年4月1日～平成元年4月25日、平成2年5月14日～平成3年6月21日
	調査担当者	小林敏夫(昭和63年度、専門員、現藤岡市教育委員会事務局市史編纂室主査) 右島和夫(平成元年度、専門員) 中沢 悟(平成2年度、主任調査研究員) 井川達雄(平成3年度、主任調査研究員) 小野和之(昭和63年度、主任調査研究員) 菊池 実(昭和63年度、平成3年度、主任調査研究員) 富田一仁(平成2年度、調査研究員) 関口博幸(平成2・3年度、調査研究員) 飯塚初子(昭和63年度、調査研究員、現群馬県教育委員会学校保健課主事)
(2)整理	整理期間	平成3年4月1日～平成5年3月31日、整理担当者 中沢悟
(3)事務	常務理事	白石保三郎(昭和63年度)、邊見長雄
	事務局長	松本浩一(昭和63年度)、近藤 功
	管理部長	田口紀雄(昭和63～平成2年度)、佐藤 勉
	調査研究部長	上原啓巳(昭和63年度)、神保信史
	関越道上越線調査事務所所長	井上 信(昭和63年度)、高橋一夫(平成元・2年度) 阿部千明(平成3年4月～11月)、松本浩一(平成3年11月～平成4年3月兼務) 吉田 肇
	総括次長	片桐光一(昭和63～平成元年度)、大澤友治(平成2・3年度)
	次 長	徳江 紀(昭和63～平成2年度)
	課 長	鬼形芳夫(昭和63～平成2年度)、依田治雄
	庶務課 係長代理	黒澤重樹(昭和63年度)、宮川初太郎(平成元・2年度)
	主 任	関定 均(昭和63～平成元年度)、笠原秀樹(平成2・3年度)、吉田有光
	臨時職員	山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、本城美樹、後関玲子、 田中智恵美、高田千恵、吉田登志子

6 報告書作成関係者

編集 中沢 悟

本文執筆 第1章第1節 依田治雄、第2節 小林敏夫・中沢 悟、第2章第1・2節 中沢 悟、第3節 富田一仁、第3章第1節 関口博幸、第2節 菊池 実、第3～9節 中沢 悟、第4章第1・2節 中沢 悟(第2節(4)除く) 第2節(4) 高島英之、第3節 永嶋正春、第4節 中沢 悟

遺構写真 調査担当者

遺物保存処理 関 邦一(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師)
小材浩一(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員)
樋口一之(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員)

遺物写真 たつみ写真スタジオ

遺物観察 関口博幸(旧石器時代)、菊池 実(縄文時代)、中沢 悟(旧石器・縄文時代以外)

整理補助 秋元経子、宇田川千恵、臼井美江子、黒澤 汎、斎藤文江、清水千代、関口 満、田嶋紀代子、難波洋子、峯岸貞子、安田越子、横堀裕美子

委託関係 【航空写真】 藍青高館 【遺物写真】 たつみ写真スタジオ 【遺構測量、遺構・遺物トレス】 藍調設 【石材鑑定】 陣内主一氏にそれぞれ委託した。

7 陶磁器については、九州陶磁文化館 大橋康二氏にご教示いただいた。

8 本書使用の地形図は、国土地理院発行 2万5千分の1(「高崎」「藤岡」「富岡」「上州吉井」)吉井町役場発行の2千5百分の1の地形図を使用した。

9 出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

10 報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。(敬称略、50音順)

吉井町教育委員会、大上周三、大橋康二、小林昌二、坂井清治、坂井秀弥、陣内主一、関 和彦、大工原 豊、田野倉武男、寺島俊郎、仲山英樹、平川 南、古郡正志、茂木由行、矢野健一、矢島 浩渡辺 一

9 発掘調査従事者

(1次調査)

新井すみ子、安藤さく、安藤庚申、飯島 栄、浦辺ふさの、浦辺保司、大沢美千枝、大竹幸子、折茂すい、折茂七郎、柿田久枝、加藤秀子、金田あい子、加部恵美子、加部まき江、岸 今朝義、木村利雄、工藤博子、黒澤章一郎、黒沢千代子、黒澤フジミ、古口三郎、小林きん、小林美枝子、齊藤栄子、齊藤淑江、酒井とし子、芝塚なみ、清水直美、白井さ津き、神保和子、神保君江、神保京子、神保利政、神保光明、須田シグ子、関口いちゑ、関口伸江、高橋幸子、高橋時枝、滝上光代、田中和満、田中みつ江、田村初子、千代延八重子、塚越 進、寺尾久吉、寺尾フジエ、富田房三郎、中澤一郎、中野しづ江、南雲まさ子、西 みよ子、林 かつ、春山さき江、春山ふさ江、春山米子、福田一男、福田とみ、古館 明、古館繁男、堀越伴吾、堀越智子、堀越美恵子、堀越よし、真加部鈴枝、松本季基、三木伴次郎、峯岸百合子、矢島百合子、齋原慶子、山崎 明、山崎常夫、吉田一二三

(2次調査)

青木いせ、天田文子、新井幸子、新井まつ子、新井 緑、新井富貴子、飯塚初代、飯塚 房、井上静江、今井 好、岩田ハヤ子、浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、岡田あい子、落合君子、鬼形田鶴子、金井はる、金沢友次、神山青示、神戸ハツエ、神戸 啓、喜多川源道、木村ハナ子、工藤きみよ、栗原 清、黒沢京子、小林愛子、小林きよ子、斎藤英子、志賀シヅ子、島田八千代、神宮好子、神保すみ江、神保 進、杉田きくの、鈴木ふさ子、須藤富江、高田 嵩、高田三枝子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、田中みき江、佃 満、寺尾克代、中村いち、髙島静子、野口節郎、野口照子、長谷川高子、藤本ひろ子、堀井ミキ、松本タツノ、三ヶ島富二郎、三木時一、三木幹枝、森 基司、山崎孝子、湯浅安代、横尾さかえ、吉井コネ、吉田キノ、吉田澄江、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子

(敬称略、50音順)

上記以外にも、多胡区長小林 博、鑛川用水の地元管理者篠崎 昭氏をはじめとした、多くの周辺地域の方々のご協力を受けた。

凡 例

- 1 各遺構実測図の縮尺は次の通りである。

住居跡 1/60、竈・貯蔵穴等付属施設 1/30、掘立柱建物跡・土坑 1/60、石列 1/160、溝・道路状遺構 1/200で溝と道路状遺構のセクションとエレベーション 1/100を原則に、基準としてスケールを配している。

- 2 遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海拔標高を表す。

- 3 遺構実測図の方位記号は、座標北を示す(国土座標第Ⅸ系)。

- 4 遺物実測図の縮尺は、次の通りである。

土器については、坏・埴・皿等は1/3、甕・羽釜・甌・壺等は1/4、瓦1/4、紡錘車・土鍾1/3、磁石・鉄製品1/3を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。

- 5 遺構及び遺物実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。

(遺構)  遺構下部  焼土  粘土
(遺物)  灰陶陶器施釉部分  黒色・焼し処理部分  磁石使用面

遺構図面に関しては、必要に応じ遺物分布のドット図を作成したが、シンボルマークは下記のことを示す。

● 土器 ▲ 鉄製品 ■ 石製品 ★ 石製紡錘車(未製品・剥片含む)

- 6 出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。遺物の残存は図示できた部分の比率である。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。こも石については観察表と写真を用いて示し、実測図は省略した。
- 7 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年度版を使用している。
- 8 本文中の石材名は、陣内圭一氏の鑑定による。

本文編目次

巻頭カラー図版 多胡蛇黒遺跡と周辺の地形（北側上空より）
遺跡内出土の紡錘車・未製品・刺片

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
抄録

第1章	発掘調査に至る経緯と経過	3
第1節	発掘調査に至る経緯	3
第2節	発掘調査の方法と経過	4
(1)	調査の方法	4
(2)	調査の経過	5
第2章	地理的環境及び歴史的環境	7
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	8
第3節	遺跡の層序	12
第3章	検出された遺構と遺物	13
第1節	旧石器時代の遺構と遺物	13
第2節	縄文時代の遺構と遺物	24

第3節	古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物	33
第4節	掘立柱建物跡	427
第5節	土坑	434
第6節	溝	443
第7節	石列・道路状遺構	452
第8節	グリッド及び遺跡内出土遺物	454
第9節	陶磁器	459
第4章	調査成果の整理とまとめ	462
第1節	遺構について	462
(1)	遺構の検出状況	462
(2)	竪穴住居の面積・貯蔵穴・柱穴・配置の問題について	462
(3)	古墳時代から平安時代に至る集落の変遷について	464
第2節	遺物について	471
(1)	遺物の取り扱いについて	471
(2)	時代別出土遺物一覧表について	471
(3)	グリッド遺物について	471
(4)	多胡蛇黒遺跡出土の墨書土器と漆紙	481
(5)	こも石について	484
付表	群馬県内出土の紡錘車一覧表	488
第3節	科学分析	513
	多胡蛇黒遺跡出土の漆紙について	513
第4節	まとめ	515
	発掘報告書抄録	
	付図 多胡蛇黒遺跡全体図	

挿 図 目 次

第 1 図	多胡蛇黒遺跡全体図 ……………(折込)	第 31 図	4 号住居跡竈及び 出土遺物実測図 ……………	42	
第 2 図	多胡蛇黒遺跡調査区及び グリッド配置図 ……………	4	第 32 図	5 号住居跡及び床下実測図 ……………	43
第 3 図	周辺の遺跡分布図 ……………	9	第 33 図	5 号住居跡竈実測図 ……………	44
第 4 図	基本層序概念図 (Ⅲ区) ……………	12	第 34 図	5 号住居跡出土遺物実測図(1) ……………	44
第 5 図	旧石器時代全体図 ……………	14	第 35 図	5 号住居跡出土遺物実測図(2) ……………	45
第 6 図	第 1 文化層石器分布図 ……………	15	第 36 図	6 号住居跡実測図 ……………	46
第 7 図	1 号・2 号ブロック 器種別石器分布図 ……………	17	第 37 図	6 号住居跡竈実測図 ……………	47
第 8 図	第 1 文化層石器実測図(1) ……………	18	第 38 図	6 号住居跡出土遺物実測図 ……………	47
第 9 図	第 1 文化層石器実測図(2) ……………	19	第 39 図	7 号住居跡実測図 ……………	48
第 10 図	第 1 文化層石器実測図(3) ……………	20	第 40 図	7 号住居跡竈実測図 ……………	49
第 11 図	第 2・第 3 文化層石器分布図 ……………	21	第 41 図	7 号住居跡出土遺物実測図(1) ……………	49
第 12 図	第 2・第 3 文化層石器実測図 ……………	22	第 42 図	7 号住居跡出土遺物実測図(2) ……………	50
第 13 図	1 号土坑及び出土遺物実測図 ……………	24	第 43 図	8 号住居跡実測図 ……………	51
第 14 図	2 号土坑及び出土遺物実測図 ……………	25	第 44 図	8 号住居跡床下実測図 ……………	52
第 15 図	調査区出土石器実測図 ……………	26	第 45 図	8 号住居跡竈実測図 ……………	52
第 16 図	調査区出土石器及び 石製品実測図(1) ……………	28	第 46 図	8 号住居跡出土遺物実測図 ……………	53
第 17 図	調査区出土石器及び 石製品実測図(2) ……………	29	第 47 図	9 号住居跡実測図 ……………	55
第 18 図	調査区出土石器及び 石製品実測図(3) ……………	30	第 48 図	9 号住居跡竈実測図 ……………	55
第 19 図	調査区出土石器及び 石製品実測図(4) ……………	31	第 49 図	9 号住居跡出土遺物実測図 ……………	56
第 20 図	1 号住居跡及び床下実測図 ……………	33	第 50 図	10 号住居跡及び竈実測図 ……………	57
第 21 図	1 号住居跡竈実測図 ……………	34	第 51 図	10 号住居跡出土遺物実測図 ……………	58
第 22 図	1 号住居跡出土遺物実測図 ……………	34	第 52 図	11 号住居跡実測図 ……………	59
第 23 図	2 号住居跡実測図 ……………	35	第 53 図	11 号住居跡出土遺物実測図 ……………	60
第 24 図	2 号住居跡竈実測図 ……………	36	第 54 図	12 号住居跡実測図 ……………	61
第 25 図	2 号住居跡出土遺物実測図(1) ……………	36	第 55 図	12 号住居跡床下及び竈実測図 ……………	62
第 26 図	2 号住居跡出土遺物実測図(2) ……………	37	第 56 図	12 号住居跡出土遺物実測図 ……………	62
第 27 図	3 号住居跡実測図 ……………	39	第 57 図	13 号住居跡及び竈実測図 ……………	63
第 28 図	3 号住居跡竈実測図 ……………	40	第 58 図	13 号住居跡出土遺物実測図(1) ……………	64
第 29 図	3 号住居跡出土遺物実測図 ……………	40	第 59 図	13 号住居跡出土遺物実測図(2) ……………	65
第 30 図	4 号住居跡実測図 ……………	41	第 60 図	14 号住居跡実測図 ……………	67
			第 61 図	14 号住居跡竈実測図 ……………	68
			第 62 図	14 号住居跡出土遺物実測図(1) ……………	68
			第 63 図	14 号住居跡出土遺物実測図(2) ……………	69
			第 64 図	15 号住居跡実測図 ……………	70
			第 65 図	15 号住居跡竈実測図 ……………	71

第66図	15号住居跡出土遺物実測図(1)	71	第103図	30号住居跡及び床下実測図	104
第67図	15号住居跡出土遺物実測図(2)	72	第104図	30号住居跡竈及び 出土遺物実測図(1)	104
第68図	16号住居跡及び竈実測図	73	第105図	30号住居跡出土遺物実測図(2)	105
第69図	16号住居跡出土遺物実測図	74	第106図	31号住居跡及び床下実測図	107
第70図	17号住居跡及び竈実測図	75	第107図	31号住居跡竈及び 出土遺物実測図	107
第71図	17号住居跡出土遺物実測図	75	第108図	32号住居跡及び竈実測図	108
第72図	18号住居跡及び竈実測図	77	第109図	32号住居跡出土遺物実測図	109
第73図	18号住居跡出土遺物実測図	78	第110図	33号住居跡実測図	110
第74図	19号住居跡及び 出土遺物実測図(1)	81	第111図	33号住居跡竈実測図	110
第75図	19号住居跡出土遺物実測図(2)	82	第112図	33号住居跡出土遺物実測図	111
第76図	20号住居跡及び竈実測図	83	第113図	34号住居跡及び床下・竈実測図	112
第77図	20号住居跡出土遺物実測図	83	第114図	34号住居跡出土遺物実測図	113
第78図	21号住居跡実測図	84	第115図	35号住居跡及び出土遺物実測図	114
第79図	21号住居跡竈実測図	85	第116図	36号住居跡及び竈実測図	115
第80図	21号住居跡出土遺物実測図	85	第117図	36号住居跡出土遺物実測図(1)	116
第81図	22号住居跡実測図	86	第118図	36号住居跡出土遺物実測図(2)	117
第82図	22号住居跡竈実測図	87	第119図	37号住居跡及び竈実測図	118
第83図	22号住居跡出土遺物実測図	87	第120図	37号住居跡出土遺物実測図	119
第84図	23号住居跡実測図	88	第121図	38号住居跡及び床下実測図	120
第85図	23号住居跡出土遺物実測図(1)	88	第122図	38号住居跡出土遺物実測図	121
第86図	23号住居跡出土遺物実測図(2)	89	第123図	39号住居跡及び竈実測図	123
第87図	24号住居跡実測図	90	第124図	39号住居跡出土遺物実測図	124
第88図	24号住居跡竈実測図	91	第125図	40号住居跡実測図	126
第89図	24号住居跡出土遺物実測図(1)	91	第126図	40号住居跡床下実測図	127
第90図	24号住居跡出土遺物実測図(2)	92	第127図	40号住居跡竈実測図	127
第91図	25号住居跡及び出土遺物実測図	93	第128図	40号住居跡出土遺物実測図(1)	128
第92図	26号住居跡及び竈実測図	94	第129図	40号住居跡出土遺物実測図(2)	129
第93図	26号住居跡出土遺物実測図	95	第130図	41号住居跡実測図(1) 及び出土遺物実測図	130
第94図	27号住居跡実測図	95	第131図	41号住居跡実測図(2)	131
第95図	27号住居跡出土遺物実測図	96	第132図	42号住居跡及び床下実測図	132
第96図	28号住居跡実測図	97	第133図	42号住居跡竈実測図	133
第97図	28号住居跡竈実測	98	第134図	42号住居跡出土遺物実測図	133
第98図	28号住居跡出土遺物実測図(1)	98	第135図	43号住居跡実測図(1)	134
第99図	28号住居跡出土遺物実測図(2)	99	第136図	43号住居跡実測図(2)	135
第100図	28号住居跡出土遺物実測図(3)	100	第137図	43号住居跡出土遺物実測図	135
第101図	29号住居跡及び床下実測図	102			
第102図	29号住居跡竈及び出土遺物実測図	103			

第138図	44号住居跡及び 出土遺物実測図	137	第172図	56号住居跡実測図	170
第139図	45号住居跡及び 出土遺物実測図	138	第173図	56号住居跡出土遺物実測図	171
第140図	46号住居跡及び 出土遺物実測図	139	第174図	57号住居跡実測図	171
第141図	46号住居跡電実測図	140	第175図	57号住居跡出土遺物実測図	172
第142図	47号住居跡及び電実測図	140	第176図	58号住居跡及び 出土遺物実測図	172
第143図	47号住居跡出土遺物実測図	141	第177図	59号住居跡実測図	173
第144図	48号住居跡及び出土遺物実測図	142	第178図	59号住居跡出土遺物実測図	173
第145図	49号住居跡実測図(1)	143	第179図	60号住居跡実測図	174
第146図	49号住居跡実測図(2)	144	第180図	60号住居跡電実測図	175
第147図	49号住居跡新旧電実測図	144	第181図	60号住居跡出土遺物実測図	175
第148図	49号住居跡出土遺物実測図	145	第182図	61号住居跡実測図	176
第149図	50号住居跡実測図(1)	146	第183図	61号住居跡電及び 出土遺物実測図	177
第150図	50号住居跡実測図(2) 及び床下実測図	147	第184図	62号住居跡及び電実測図	178
第151図	50号住居跡電実測図	148	第185図	62号住居跡出土遺物実測図(1)	178
第152図	50号住居跡出土遺物実測図(1)	148	第186図	62号住居跡出土遺物実測図(2)	179
第153図	50号住居跡出土遺物実測図(2)	149	第187図	62号住居跡出土遺物実測図(3)	180
第154図	51号住居跡実測図	151	第188図	62号住居跡出土遺物実測図(4)	181
第155図	51号住居跡出土遺物実測図	151	第189図	63号住居跡実測図	183
第156図	52号住居跡実測図	153	第190図	63号住居跡電実測図	184
第157図	52号住居跡電実測図	154	第191図	63号住居跡出土遺物実測図(1)	184
第158図	52号住居跡出土遺物実測図(1)	154	第192図	63号住居跡出土遺物実測図(2)	185
第159図	52号住居跡出土遺物実測図(2)	155	第193図	64号住居跡及び床下実測図	187
第160図	52号住居跡出土遺物実測図(3)	156	第194図	64号住居跡電実測図	188
第161図	52号住居跡出土遺物実測図(4)	157	第195図	64号住居跡出土遺物実測図(1)	188
第162図	52号住居跡出土遺物実測図(5)	158	第196図	64号住居跡出土遺物実測図(2)	189
第163図	52号住居跡出土遺物実測図(6)	159	第197図	64号住居跡出土遺物実測図(3)	190
第164図	53号住居跡実測図	163	第198図	65号住居跡及び出土遺物実測図	191
第165図	53号住居跡出土遺物実測図	164	第199図	66号住居跡実測図	192
第166図	54号住居跡及び床下実測図	164	第200図	66号住居跡出土遺物実測図	192
第167図	54号住居跡電実測図	165	第201図	67号住居跡及び電実測図	193
第168図	54号住居跡出土遺物実測図(1)	165	第202図	67号住居跡出土遺物実測図	194
第169図	54号住居跡出土遺物実測図(2)	166	第203図	68号住居跡実測図	194
第170図	55号住居跡実測図	168	第204図	69号住居跡実測図	195
第171図	55号住居跡出土遺物実測図	168	第205図	69号住居跡貯蔵穴及び 床下実測図	195
			第206図	69号住居跡電実測図	196

第207回	69号住居跡出土遺物実測図(1)	196
第208回	69号住居跡出土遺物実測図(2)	197
第209回	70号住居跡及び竈実測図	199
第210回	70号住居跡出土遺物実測図	199
第211回	71号住居跡・竈及び 出土遺物実測図	200
第212回	72号住居跡実測図	201
第213回	73号住居跡実測図	201
第214回	73号住居跡出土遺物実測図	202
第215回	74号住居跡実測図	202
第216回	75号住居跡実測図	203
第217回	75号住居跡竈及び 出土遺物実測図	203
第218回	76号住居跡実測図	204
第219回	76号住居跡竈実測図	204
第220回	76号住居跡出土遺物実測図	205
第221回	77号住居跡実測図	206
第222回	77号住居跡竈実測図	206
第223回	77号住居跡出土遺物実測図(1)	206
第224回	77号住居跡出土遺物実測図(2)	207
第225回	78号住居跡実測図	208
第226回	78号住居跡竈実測図	208
第227回	78号住居跡出土遺物実測図	209
第228回	79号住居跡及び竈実測図	210
第229回	80号住居跡実測図	210
第230回	80号住居跡竈及び 出土遺物実測図	211
第231回	81号住居跡実測図	212
第232回	81号住居跡床下実測図	213
第233回	81号住居跡竈実測図	213
第234回	81号住居跡出土遺物実測図	214
第235回	82号住居跡実測図	216
第236回	82号住居跡竈実測図	216
第237回	82号住居跡出土遺物実測図	217
第238回	83号住居跡及び床下実測図	220
第239回	83号住居跡出土遺物実測図	221
第240回	84号住居跡実測図	222
第241回	84号住居跡竈実測図	222

第242回	84号住居跡出土遺物実測図	223
第243回	85号住居跡・竈 及び出土遺物実測図	224
第244回	86号住居跡実測図	225
第245回	86号住居跡竈実測図	225
第246回	86号住居跡出土遺物実測図	226
第247回	87号住居跡及び竈実測図	227
第248回	87号住居跡出土遺物実測図	227
第249回	88号住居跡及び床下実測図	228
第250回	88号住居跡竈及び 出土遺物実測図	229
第251回	89号住居跡実測図	230
第252回	89号住居跡竈実測図	231
第253回	89号住居跡出土遺物実測図(1)	231
第254回	89号住居跡出土遺物実測図(2)	232
第255回	90号住居跡・竈及び 出土遺物実測図	233
第256回	91号住居跡及び竈実測図	234
第257回	91号住居跡出土遺物実測図	235
第258回	92号住居跡実測図	236
第259回	92号住居跡滑石 出土状況実測図	236
第260回	92号住居跡竈実測図	237
第261回	92号住居跡出土遺物実測図(1)	237
第262回	92号住居跡出土遺物実測図(2)	238
第263回	92号住居跡出土遺物実測図(3)	239
第264回	92号住居跡出土遺物実測図(4)	240
第265回	93号住居跡実測図	242
第266回	93号住居跡出土遺物実測図	243
第267回	94号住居跡実測図	244
第268回	94号住居跡竈実測図	245
第269回	94号住居跡出土遺物実測図	245
第270回	95号住居跡及び 出土遺物実測図	246
第271回	96号住居跡実測図	247
第272回	96号住居跡竈実測図	248
第273回	96号住居跡出土遺物実測図	248
第274回	97号住居跡及び床下実測図	249

第275図	97号住居跡電実測図	250	第312図	110号住居跡及び床下実測図	281
第276図	97号住居跡出土遺物実測図(1)	250	第313図	110号住居跡電実測図	282
第277図	97号住居跡出土遺物実測図(2)	251	第314図	110号住居跡出土遺物実測図(1)	282
第278図	97号住居跡出土遺物実測図(3)	252	第315図	110号住居跡出土遺物実測図(2)	283
第279図	98号住居跡実測図	254	第316図	111号住居跡及び床下実測図	284
第280図	98号住居跡電実測図	255	第317図	111号住居跡電及び 出土遺物実測図	284
第281図	98号住居跡出土遺物実測図(1)	255	第318図	112号住居跡実測図(1)	285
第282図	98号住居跡出土遺物実測図(2)	256	第319図	112号住居跡実測図(2)	286
第283図	99号住居跡実測図	257	第320図	112号住居跡床下実測図	286
第284図	99号住居跡出土遺物実測図	258	第321図	112号住居跡電実測図	287
第285図	100号住居跡及び 出土遺物実測図	259	第322図	112号住居跡出土遺物実測図(1)	287
第286図	101号住居跡実測図	260	第323図	112号住居跡出土遺物実測図(2)	288
第287図	101号住居跡出土遺物実測図	260	第324図	113号住居跡実測図	289
第288図	102号住居跡実測図	261	第325図	113号住居跡電実測図	290
第289図	102号住居跡出土遺物実測図	262	第326図	113号住居跡出土遺物実測図	290
第290図	103号住居跡実測図	263	第327図	114号住居跡及び床下実測図	291
第291図	103号住居跡新旧電実測図	264	第328図	114号住居跡電実測図	292
第292図	103号住居跡出土遺物実測図(1)	265	第329図	114号住居跡出土遺物実測図(1)	292
第293図	103号住居跡出土遺物実測図(2)	266	第330図	114号住居跡出土遺物実測図(2)	293
第294図	103号住居跡出土遺物実測図(3)	267	第331図	115号住居跡及び電実測図	294
第295図	103号住居跡出土遺物実測図(4)	268	第332図	115号住居跡出土遺物実測図	295
第296図	104号住居跡実測図	270	第333図	116号住居跡実測図	296
第297図	104号住居跡電実測図	270	第334図	116号住居跡床下及び電実測図	297
第298図	104号住居跡出土遺物実測図	271	第335図	116号住居跡出土遺物実測図(1)	298
第299図	105号住居跡実測図	272	第336図	116号住居跡出土遺物実測図(2)	299
第300図	105号住居跡出土遺物実測図	272	第337図	117号住居跡及び床下実測図	301
第301図	106号住居跡実測図	273	第338図	117号住居跡電実測図	302
第302図	106号住居跡出土遺物実測図	274	第339図	117号住居跡出土遺物実測図(1)	302
第303図	107号住居跡実測図	275	第340図	117号住居跡出土遺物実測図(2)	303
第304図	107号住居跡床下実測図	276	第341図	118号住居跡実測図	304
第305図	107号住居跡電実測図	276	第342図	118号住居跡電実測図	305
第306図	107号住居跡出土遺物実測図	277	第343図	118号住居跡出土遺物実測図	305
第307図	108号住居跡実測図	277	第344図	119号住居跡実測図	306
第308図	108号住居跡電実測図	278	第345図	119号住居跡出土遺物実測図	306
第309図	108号住居跡出土遺物実測図	278	第346図	120号住居跡・電 及び出土遺物実測図	307
第310図	109号住居跡実測図	279	第347図	121号住居跡実測図	308
第311図	109号住居跡電及び出土遺物実測図	280			

第348図	121号住居跡床下実測図	309	第384図	134号住居跡電実測図	337
第349図	122号住居跡実測図	310	第385図	134号住居跡出土遺物実測図	338
第350図	122号住居跡床下実測図	311	第386図	135号住居跡及び電実測図	340
第351図	122号住居跡出土遺物実測図	312	第387図	135号住居跡出土遺物実測図	340
第352図	123号住居跡実測図	313	第388図	136号住居跡実測図	341
第353図	123号住居跡電実測図	313	第389図	136号住居跡床下及び 出土遺物実測図	342
第354図	123号住居跡出土遺物実測図	314	第390図	137号住居跡及び床下実測図	343
第355図	124号住居跡及び 出土遺物実測図	315	第391図	137号住居跡出土遺物実測図	344
第356図	125号住居跡及び床下実測図	316	第392図	138号住居跡及び床下実測図	345
第357図	126号住居跡実測図	316	第393図	139号住居跡実測図	346
第358図	126号住居跡電及び 出土遺物実測図	317	第394図	139号住居跡床下実測図	347
第359図	127号住居跡実測図	317	第395図	139号住居跡出土遺物実測図	348
第360図	127号住居跡床下実測図	318	第396図	140号住居跡実測図	349
第361図	127号住居跡新旧電実測図	318	第397図	140号住居跡床下実測図	350
第362図	127号住居跡出土遺物実測図	319	第398図	140号住居跡北・東電実測図	351
第363図	128号住居跡実測図	320	第399図	140号住居跡出土遺物実測図	351
第364図	128号住居跡出土遺物実測図	321	第400図	141号住居跡及び床下実測図	352
第365図	129号住居跡実測図	322	第401図	141号住居跡電実測図	353
第366図	129号住居跡電実測図	323	第402図	141号住居跡出土遺物実測図	353
第367図	129号住居跡出土遺物実測図(1)	323	第403図	142号住居跡実測図	354
第368図	129号住居跡出土遺物実測図(2)	324	第404図	142号住居跡出土遺物実測図	355
第369図	130号住居跡実測図	325	第405図	143号住居跡実測図	356
第370図	130号住居跡電実測図	326	第406図	143号住居跡電実測図	357
第371図	130号住居跡出土遺物実測図	326	第407図	143号住居跡出土遺物実測図	357
第372図	131号住居跡及び電実測図	327	第408図	144号住居跡実測図	358
第373図	131号住居跡出土遺物実測図	328	第409図	144号住居跡電実測図	359
第374図	132号住居跡実測図	329	第410図	144号住居跡出土遺物実測図	359
第375図	132号住居跡電実測図	330	第411図	143・144号住居跡床下実測図	360
第376図	132号住居跡出土遺物実測図(1)	330	第412図	145号住居跡実測図	361
第377図	132号住居跡出土遺物実測図(2)	331	第413図	145号住居跡出土遺物実測図	361
第378図	133号住居跡実測図(1)	333	第414図	146号住居跡実測図	362
第379図	133号住居跡実測図(2)	334	第415図	146号住居跡電実測図	363
第380図	133号住居跡新旧電実測図	334	第416図	146号住居跡出土遺物実測図	363
第381図	133号住居跡出土遺物実測図	335	第417図	147号住居跡実測図	364
第382図	134号住居跡実測図(1)	336	第418図	147号住居跡新旧電実測図	365
第383図	134号住居跡実測図(2)	337	第419図	147号住居跡出土遺物実測図(1)	366
			第420図	147号住居跡出土遺物実測図(2)	367

第421图	148号住居跡実測図(1)	369	第458图	162号住居跡実測図	404
第422图	148号住居跡実測図(2)	370	第459图	162号住居跡出土遺物実測図	404
第423图	148号住居跡床下実測図(1)	370	第460图	163号住居跡実測図及び 床下実測図	406
第424图	148号住居跡床下実測図(2)	371	第461图	163号住居跡実測図	407
第425图	148号住居跡実測図	372	第462图	163号住居跡出土遺物実測図	407
第426图	148号住居跡出土遺物実測図(1)	372	第463图	164号住居跡実測図(1)	409
第427图	148号住居跡出土遺物実測図(2)	373	第464图	164号住居跡実測図(2)	410
第428图	149号住居跡実測図	374	第465图	164号住居跡床下実測図	410
第429图	150号住居跡実測図	375	第466图	164号住居跡実測図	411
第430图	150号住居跡出土遺物実測図	376	第467图	164号住居跡出土遺物実測図	411
第431图	151号住居跡実測図	378	第468图	165号住居跡実測図	412
第432图	151号住居跡実測図	378	第469图	165号住居跡実測図	412
第433图	151号住居跡出土遺物実測図	379	第470图	165号住居跡出土遺物実測図	413
第434图	152号住居跡実測図	380	第471图	166号住居跡及び 電実測図	414
第435图	152号住居跡出土遺物実測図	380	第472图	166号住居跡出土遺物実測図	414
第436图	153号住居跡及び 電実測図	381	第473图	167号住居跡実測図	415
第437图	153号住居跡出土遺物実測図	382	第474图	167号住居跡実測図	416
第438图	154号住居跡実測図	383	第475图	167号住居跡出土遺物実測図	416
第439图	154号住居跡電及び 出土遺物実測図	384	第476图	168号住居跡及び 出土遺物実測図	417
第440图	155号住居跡及び 電実測図	385	第477图	169号住居跡実測図	418
第441图	155号住居跡出土遺物実測図	386	第478图	169号住居跡出土遺物実測図	418
第442图	156号住居跡及び 電実測図	388	第479图	170号住居跡及び 電実測図	419
第443图	156号住居跡出土遺物実測図	389	第480图	170号住居跡出土遺物実測図	420
第444图	157号住居跡実測図	390	第481图	171号住居跡実測図	420
第445图	157号住居跡電実測図	391	第482图	171号住居跡電実測図	421
第446图	157号住居跡出土遺物実測図	391	第483图	172号住居跡実測図	421
第447图	158号住居跡実測図	393	第484图	172号住居跡電実測図	422
第448图	158号住居跡出土遺物実測図	394	第485图	172号住居跡出土遺物実測図(1)	422
第449图	159号住居跡実測図	396	第486图	172号住居跡出土遺物実測図(2)	423
第450图	159号住居跡電実測図	397	第487图	173号住居跡実測図	425
第451图	159号住居跡出土遺物実測図	397	第488图	174号住居跡及び 電実測図	426
第452图	160号住居跡実測図	398	第489图	174号住居跡出土遺物実測図	426
第453图	160号住居跡電実測図	399	第490图	1号掘立柱建物跡実測図	427
第454图	160号住居跡出土遺物実測図	399	第491图	2号掘立柱建物跡実測図	428
第455图	161号住居跡実測図	401	第492图	3号掘立柱建物跡実測図	429
第456图	161号住居跡出土遺物実測図	402	第493图	4号掘立柱建物跡実測図	430
第457图	162号住居跡実測図	403			

第494図	5号掘立柱建物跡実測図	431	第510図	8・9・11号溝実測図	—(折込) 449・450
第495図	6号掘立柱建物跡実測図	432	第511図	1・2号溝出土遺物実測図	451
第496図	7号掘立柱建物跡実測図	433	第512図	石列実測図	452
第497図	3・4・5号土坑実測図	435	第513図	1・2号道路状遺構実測図	453
第498図	6～14号土坑実測図	436	第514図	グリッド及び遺跡内 出土遺物実測図(1)	454
第499図	15～23号土坑実測図	437	第515図	グリッド及び遺跡内 出土遺物実測図(2)	455
第500図	24～32号土坑実測図	438	第516図	グリッド及び遺跡内 出土遺物実測図(3)	456
第501図	33・34・35号土坑実測図	439	第517図	グリッド及び遺跡内 出土遺物実測図(4)	457
第502図	5・6・8・14・21・22・23号 土坑出土遺物実測図	441	第518図	遺跡内出土陶器実測図	460
第503図	26号土坑出土遺物実測図	442	第519図	グリッド出土遺物分布図	480
第504図	1号溝実測図	443	第520図	こも石の長さ重量分布図	484
第505図	2号溝実測図	444	第521図	こも石個別分布図	485
第506図	3号溝実測図	445	第522図	こも石住居別分布図	485
第507図	4・5号溝実測図	446			
第508図	6・7号溝実測図	447			
第509図	10号溝実測図	448			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	10
第2表	時期別による住居規模の変化一覧表	463
第3表	時期別による貯蔵穴の有無及び貯蔵穴の深さとの関係一覧表	463
第4表	時期別による柱穴の有無及び柱穴の深さとの関係一覧表	463
第5表	住居規模と貯蔵穴の有無及び貯蔵穴の深さとの関係一覧表	463
第6表	住居規模と柱穴の有無及び柱穴の深さとの関係一覧表	463
第7表	時期別・地区別住居軒数の推移一覧表	464
第8表	住居規模一覧表	465
第9表	古墳時代住居出土遺物一覧表	472
第10表	奈良時代住居出土遺物一覧表	475
第11表	平安時代住居出土遺物一覧表	477
第12表	時代特定のできなかった住居及び住居以外の遺構別出土遺物一覧表	479
第13表	時代別出土遺物一覧表	479
第14表	多胡蛇黒遺跡出土の墨書土器一覧表	483
第15表	住居別こも石の一覧表	486
第16表	群馬県内出土の紡錘車一覧表	489

抄 録

1 遺跡の概略

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字多胡字蛇黒に位置する。本遺跡の調査は、昭和63年11月から平成元年4月までの1次調査と、平成2年5月から平成3年6月までの2次調査とに別れて行われた。整理事は平成3年4月から平成5年3月までの2年間で実施された。

本遺跡は多胡段丘と呼ばれる段丘面に位置し、この段丘は鍋川によって生成された東西方向に連なる河岸段丘面の1つである。この段丘面には群馬県下でも有数の遺跡地帯として知られており、関越道上越線建設に伴い調査された多くの遺跡と、それまでの調査成果と併せて徐々にその内容が明らかになりつつある。

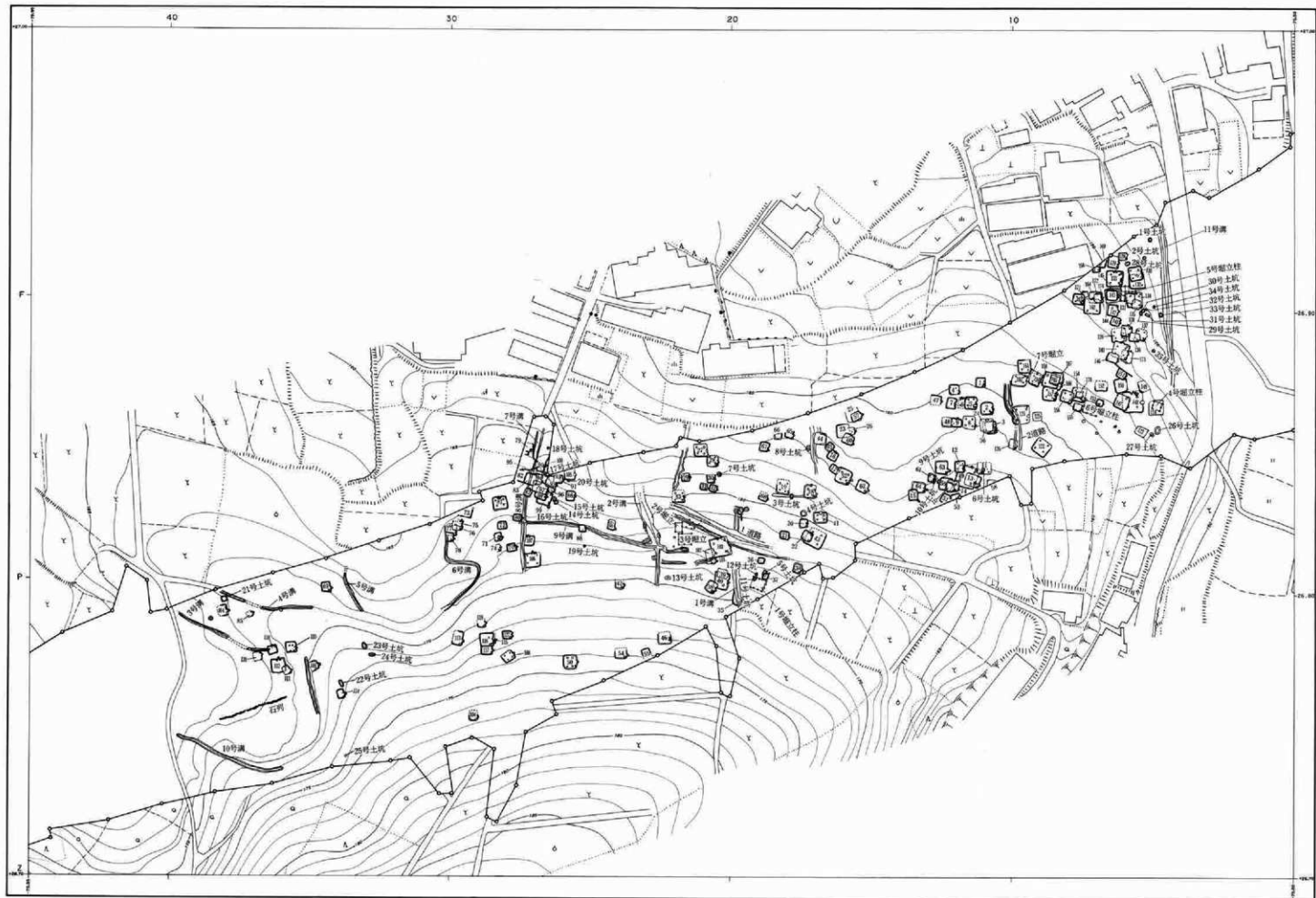
調査の結果、古墳時代～平安時代の住居を主とした集落遺跡が検出された。今後近接する矢田遺跡の調査報告書刊行の進展に伴って進む研究と併せて、両遺跡の違いや共通点等について比較検討し、遺跡のまつ地域史の中で果たした役割や意味について次第に明らかにされてゆくものと思われる。

2 遺構数量

種別	時代	数量	備考
石器ブロック	旧石器時代	2	第1文化層。
竪穴住居跡	古墳時代	69	後期の時期であり前期は無し。
	奈良時代	50	暗文をもつ土器が多い。
	平安時代	44	住居規模が小さく残の悪い住居が多い。
	古墳～平安時代	11	出土遺物が少なく時代が特定できない。
竪穴柱建物跡	古墳時代以降	7	
土坑	縄文・奈良・平安	35	
溝	近世ほか	11	今日の地域と多くの部分で一致している。
その他、石判1、道路状遺構2基が検出されている。			

3 まとめ

- ① 旧石器時代の石器が西谷川を望む遺跡東端のⅠ区と遺跡西端のⅣ区の台地上で出土している。出土位置は暗褐色ローム層と、始良丹沢火山灰(AT)を含む暗褐色粘土層の中からである。
- ② 縄文時代の遺構は、住居は全く検出されずに土坑が2基検出された。遺物として土器と石器が出土しているが量は少ない。
- ③ 弥生時代の遺構と遺物は全く検出されていない。
- ④ 古墳時代前期の遺構と遺物は検出できなかった。後期の住居が69軒と最も多く検出されており、この段階からこの遺跡では集落が営まれ始めたものと思われる。
- ⑤ 奈良時代の遺構は50軒の住居と少しの土坑が検出されている。本遺跡では時期幅が最も短いにもかかわらず住居数は多い。遺物として暗文をもつ土器が多く出土している。
- ⑥ 平安時代の遺構は44軒の住居と少しの土坑が検出されている。電の煙道に土器器蓋を使用した住居も検出されている。
- ⑦ 特徴的な遺物として奈良時代と平安時代の住居から紡錘車を製作して行く段階で出来たと思われる滑石の剥片が多く検出された。また遺跡内より紡錘車の未製品も多く検出されているため、この遺跡は、紡錘車の製作に深い関係があったものと思われる。
- ⑧ 奈良時代の住居内より出土した須恵器環の中より漆紙が出土した。残念ながら紙の部分はほとんど残ってなく、文字の検出もできなかった。この環には「甘」と墨書されていた。この環は漆作業時におけるパレットとして使用されていたものではなく、この環の中に漆紙が捨てられたものと考えられる。



第1图 多明蛇黑遗址总体图

多^た 胡^こ 蛇^{じゃ} 黒^{ぐろ} 遺^い 跡^{せき}

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

関越自動車道越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。起点を東京都練馬として新潟県上越市まで総延長280km(内練馬～藤岡間は関越自動車道新潟線と併用)である。今回建設される藤岡インター～佐久インター間は約69kmで群馬県藤岡市(5.6km)、吉井町(6.3km)、甘楽町(4.3km)、富岡市(11.6km)、妙義町(2.5km)、松井田町(19.5km)、下仁田町(5.3km)、長野県佐久市(11.9km)の各市町を通過する。

群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町(東部)・松井田町(東部)。同57年松井田町(西部)・下仁田町(西部)・長野県佐久市までの路線が発表された。

関越自動車道越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次のとおりである。

昭和49年度 藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけること、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度 県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道越線関連公共事業調査報告書」として群馬県(企画部交通対策課)より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度 県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・薄い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した。(後の試掘により52遺跡に変更)そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

- ① 発掘調査終了年度を昭和66年度末(平成2年度末)とする。
- ② 群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③ 事業団の出張所(上越線調査事務所)を開設し、整理作業も併せ行う。
- ④ 機関別対応面積は次のとおりとする。

埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。

調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 4月埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人体制で発足。以後、6班22人体制(昭62)、9班36人体制(昭63)、12班45人体制(平成元)、12班45人体制(平2)。平成2年度までに一部を残し発掘調査は終了した。整理作業は昭和63年度より併行して実施していたが、平成3年度からはほとんど整理作業のみとなり、平成8年度終了予定である。

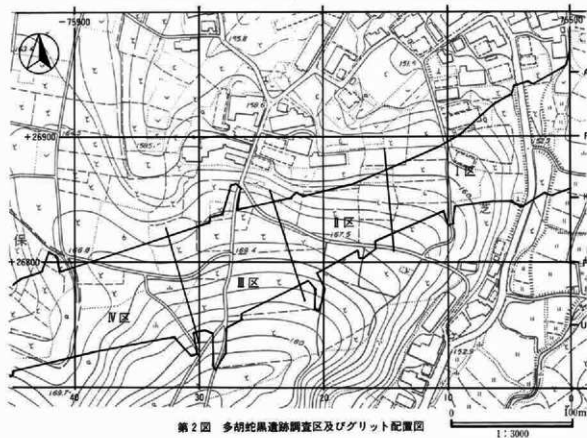
第2節 発掘調査の方法と経過

(1) 調査の方法

本遺跡は、吉井インター・チェンジ予定地域西側に位置し、建設工事用測量杭のSTAN113～118がほぼ多胡蛇黒遺跡の調査範囲に該当する。昭和62年に行われた試掘調査によって、24,000㎡が調査対象地となっている。調査は建設される道路敷地内の、幅47～80m長さ390mの範囲である。調査地域の呼称と測量のため、調査区全体を網羅するように調査区北東端に近い国家座標 $X=+26,950$ 、 $Y=-75,500$ と南西端に近い国家座標 $X=+26,000$ 、 $Y=-75,950$ の2点を基準とし、2点を通る東西南北の軸線に囲まれた長方形の範囲を設定した。北東の交点を起点とし10m毎に東西方向で0～45、南北方向にA～Zのラインとする方眼状調査区を設定し、東西南北のラインに囲まれた10m四方の範囲を1グリッドとし、北東の交点をもってD-12グリッドのように呼称した。発掘区域内は北側が高く南側に向かって低くなる傾斜地である。この斜面を挟るように3本の浅く小さな谷地がある。そこで谷地を境とし東からI区～IV区に区分し調査区を呼称した。

発掘調査は昭和63年11月～平成元年4月までの6か月間の一次調査と、平成2年5月～平成3年6月の14か月の2次調査に分けておこなわれた。一次調査は神保富士塚遺跡を終了した調査班が担当し、2次調査は矢田遺跡の調査班が矢田遺跡・神保下城遺跡・白倉下原遺跡と一時期平行して調査し、中断した時期もあった。

このように調査が中断したり多くの他の遺跡と平行して調査が行われたのは、他の遺跡の調査が緊急を要し応援が必要であったことと、当遺跡調査区内に2ヵ所土地問題が解決していなかったことによる。その土地は県道に面する調査区域内の東端(約3464㎡)と中央部(約1702㎡)である。中央部の土地問題が解決し調査できるようになったのは平成2年8月(引き渡し後の調査により24軒検出された。)であり、西端部分が解決し調査できるようになったのが平成3年1月(引き渡し後の調査により53軒検出された。)であった。この



第2図 多胡蛇黒遺跡調査区及びグリッド配置図

1:3000

土地の面積は全体の約22%であるが遺跡全体の中で占める割合は住居数で見ても174軒中77軒で約44%を占めている。1次調査で68軒終了しているため、調査に入ったとしても土地問題が解決しない限りわずか29軒の住居を調査できるだけであった。

調査区域内には鍋川用水（鍋川土地改良区管理）と呼ばれる農業用水（直径300～450mm）が、東西方向に長さ約250mにわたり敷設されている。地元の用水路管理者の篠崎 昭氏の協力により、現地で本管の位置と用水本管から3本の個人的に引き出した用水路が、調査区を南北方向に横切るように埋められていることを教えていただく。重機をもちいて表土掘削を行えば、これらの用水路は破壊する恐れが非常に高い。そのため表土掘削の前に、全ての用水の位置と深さを知るための試掘調査を実施した。試掘の結果本管は全て表土から1.5m以上深く埋められていたが、個人的に引いた用水路は20～40cmと浅いことが明らかとなった。これらの成果を基に調査を進め、用水路を破壊する事なく調査は終了することができた。

(2) 調査の経過

①発掘調査

1次調査（昭和63年11月～平成元年4月）

昭和63年11月 調査事務所を設置し調査を開始する。表土掘削を始める。遺構確認調査、基準点、水準点の設定、測量のための杭打ち。1～8号住居及び土坑と溝の調査開始。

12月 I区～Ⅲ区の調査を同時に進行させる。大部分が古墳時代～平安時代の住居跡であった。I区では1～10・12・13・14・24号住居、II区では16～19・21～23・30・33号住居、Ⅲ区では34～40号住居調査。

昭和64年1月 I区では2・7・8・10～13・24・47～49号住居、II区では18・19・21・22・23・29・30・31・32・34・41・43・44・45号住居、Ⅲ区では38・39・40・42・46・50号住居及びI区とII区間の谷地に多く出土したグリッド遺物の実測と取り上げ、土坑の調査等を行う。20日は雨23日は雪24日は雪をどけながらの調査となる。

2月 I区では3・6・10～15・24・47～49・51・59・61号住居、II区では23・27・28・30・33・41・43・52号住居、Ⅲ区では36・38・39・40・42・46・50・54・55号住居及びI区とII区間の谷地に多く出土したグリッド遺物の調査。

3月 I区では3・6・7・11・14・15・24・47・49・51・56～64号住居、II区では27・28・29・30・33・43・44・45・52・60・62・64号住居、Ⅲ区では37・55号住居及び掘立柱建物跡や土坑等の調査を行う。3月22日調査区全域の航空写真撮影を実施する。下旬に担当1名と多くの作業員とで隣の神保植松遺跡の調査にでかける。

4月 10日より現場作業を開始する。本年度計画では、昨年度調査に着手し終了していない遺構と旧石器調査を行った後、調査を一時中断し緊急を要する白倉下原遺跡の調査を行うこととなった。そのためI区では4・7・51・53・63号住居、II区では62・64号住居、Ⅲ区では39・40号住居及び土坑等の調査を終了させ、その地区の旧石器時代の試掘調査を行う。調査終了した地区は危険防止のため埋め戻した。

2次調査（平成2年5月～平成3年6月）

平成2年5月 1次調査を実施した調査班は、白倉下原遺跡の調査終了後戻り2次調査を行う予定であったが、調整により調査地域が拡大し本遺跡の調査は不可能となる。一方隣の矢田遺跡では、調査5年目に入り終盤にさしかかっていた。そこで一時期平行しながら調査を行ない、矢田遺跡終了後、当多胡蛇黒遺跡の2次調査を実施することとなった。土地問題の解決しているⅢ・Ⅳ区の表土掘削を重機を用いて行った。

6月 白倉下原遺跡の調査が緊急を要し、調整により応援に行くことになり調査は8月16日まで中断する。

8月 16日より調査再開。しかし重機による表土除去と遺構内の清掃は一部行すが、調整の結果調査の主体は遺跡地西に接する神保下條遺跡の調査となる。遺跡中央部分のII区西端とⅢ区北東部の、土地問題の解決していなかった土地が解決し表土掘削を行う。

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

- 9月 下旬になり神保下條遺跡の調査が一段落し、本格的な調査が開始される。
- 10月 高速道路建設に伴い遺跡内に敷設されている鍋川用水の敷設換えの工事が決まり、その部分から調査を終了させ引き渡すこととなり、Ⅲ・Ⅳ区の北側部分から調査を始める。Ⅱ・Ⅲ区73～83・105・106・108号住居、2・6号溝、多くの土坑、旧石器の試掘、Ⅳ区58・84・85号住居、旧石器の試掘、石器出土に伴い部分的に拡張して調査、全体図作成、高所作業車を用いての高位置での写真撮影。
- 11月 Ⅱ・Ⅲ区83・88・89・90～104・105・106・108号住居、2・9号溝、2・3号掘立柱建物跡、多くの土坑、旧石器の試掘、Ⅳ区旧石器の試掘、石器出土に伴い部分的に拡張して調査、全体図作成、Ⅱ・Ⅲの鍋川用水の敷設換えの工事部分をバルーンを用いた高所からの写真撮影。工事用地の全ての調査終了により引き渡す。
- 12月 Ⅱ・Ⅲ区103・104・107・108・113・115・116・117・119号住居、7・8号溝、多くの土坑、旧石器の試掘、Ⅳ区109・110・111・112・114・118・120号住居、10号溝、石列の調査、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の調査の終了していなかった北側部分のバルーンを用いての高所からの写真撮影。
- 1月 土地問題の解決していなかった調査区西端のⅠ区東側部分の土地が解決し、始めに南側部分が後に北側部分が引き渡された。Ⅲ区の113・116・117号住居の調査とⅢ・Ⅳ区の旧石器の試掘調査を終了。Ⅰ区以外の調査全て終了。Ⅰ区121～126・128・129・130・136号住居、土坑、4号掘立柱建物跡、Ⅰ区東側の北側部分をバルーンを用いての高所から写真撮影。
- 2月 Ⅰ区東側で県道に面した部分で橋脚工事を始めたいと要望が公団からあり、調整の結果県道から20m幅の調査を先行させることとなった。Ⅰ区128～134・136・137・141～144・146・147号住居、土坑、11号溝、Ⅰ区中央部の道路を移動し道路下の調査、全体図作成。
- 3月 Ⅰ区131・133・134・139・140・146・147・148・149号住居、土坑、6号掘立柱建物跡、全体図作成。Ⅰ区中央部の道路を移動し道路下の調査、全体図作成。橋脚工事部分の25m幅を中心とした地区をバルーンを用いての写真撮影。旧石器調査を終了させ引き渡す。
- 4月 9日より現場作業再開。150～172号住居調査、旧石器の試掘を行い石器出土により本調査を実施。全体図作成。当遺跡の報告書作成のための整理事業が上越線調査事務所にて開始される。
- 5月 154・156・163・166・167・173・174号住居と7号掘立柱建物跡の調査終了、14日にて旧石器の調査以外終了。旧石器の調査で彫刻刀形石器や石器ブロックやナイフ出土。
- 6月 遺構調査が調査終了し、作業員の多くは3日より20日まで天引向原遺跡に応援。基本整理終了後、21日にて現地における調査終了。

②整理作業

整理作業は、平成3年4月から平成5年3月の2年間にわたり、吉井町南陽台の上越線事務所内の整理棟で担当1名・補助員7名で行われた。その概要は以下の通りである。

平成3年 4月上旬 整理作業諸準備。4月中旬～7月下旬 遺物の分類・接合及び復元 遺構図面修正
8月 遺物実測開始。9月 遺物写真撮影。10月～1月 石材鑑定 遺物のトレースを始める。2～3月 遺物実測終了。3月 遺構原稿書き始める。

平成4年 4月 拓本終了。5月 遺構仮版組 版下作成の準備に入る。6月 写真版組の準備始める。100号住居までの仮版組と遺構原稿終了。遺物のトレース一部外注 版下作成を進める。7～9月 土器観察表書きはじめる。写真及び遺構遺物の版組を進める。10～11月 版下図版の作成と縮小コピーを行い印刷所へ渡せる準備を始める。遺構原稿・遺物観察表作成 写真図版終了。12月 遺構・遺物図版終了。土器観察表終了。22日入札 1月以降校正・取蔵等諸作業。

第2章 地理的環境及び歴史的環境

第1節 地理的環境

1 鍋川と河岸段丘

本遺跡は群馬県多野郡吉井町大字多胡に所在する。吉井町は群馬県の南西部に位置し、当遺跡は吉井町の中央部南側に所在する。当遺跡は鍋川南岸の、多胡段丘面と呼ばれている河岸段丘に立地する。

当遺跡の立地する吉井町は、中央部を鍋川が蛇行しつつ東流しており、鍋川右岸に発達した多くの段丘面に集落が営まれている。この鍋川の源流は、西牧川・南牧川であり、それが下仁田町で合流し東へ流れる。その途中で栗山川・野上川・高田川・雄川・下川・星川・天引川などを合わせ、さらに吉井町に入ると大沢川・矢田川・土合川などと合わせ、高崎にはいり鮎川・鳥川と合流する。発達している多くの河岸段丘は川の侵蝕と堆積によって形成されたものである。

鍋川における河岸段丘は、北方から流下する西牧川と南西方から流れる南牧川とが下仁田町南西地点において合流する付近から東方へ広がり、鮎川の合流点付近に至るまでの間によく発達している。これによって鍋川流域の段丘を大別すると、流路に沿って上位段丘と下位段丘との二段に分けられる。上位段丘は鍋川南岸において下仁田町より東方に発達して、藤岡市白石付近まで断続的に分布している。その標高は270～120mとなっている。いずれも河床からの比高は50m前後である。さらに解析谷は浸食が著しく進んで深く、多くは北方へかなり傾斜している。段丘の基盤を構成している岩石は、おもに砂岩および頁岩の互層からなる新第三系（富岡層群）である。この上位段丘の礫層の上に必ず1～2mの厚さをもった関東ロームの堆積物が保存されている。

吉井町周辺の上位段丘面は、西から長根段丘・神保段丘・多胡段丘・深沢・白石段丘面があり、当遺跡は多胡段丘面に立地する。多胡段丘面は大沢川と土合川に挟まれた段丘で標高140～160mであり河床よりの比高約60mになっている。その基盤岩盤は、富岡層の砂岩・頁岩及び凝灰岩であって、その礫層の厚さは10m内外である。礫質は安山岩・秩父系・結晶片岩であり、礫層の厚さは約14～15mで安山岩礫が最も多く含まれている。

（註）横田公雄「第2章 地形」『吉井町誌』吉井町誌編纂委員会 昭和49年を多く参照とした。

2 多胡蛇黒遺跡の立地

当遺跡の立地する多胡段丘は、中央部に南北に流れる矢田川により東西の2つに別れる。西側の段丘面に多比良迫野遺跡が、西側の段丘面に矢田遺跡と当多胡蛇黒遺跡が立地する。当遺跡は他の段丘と同じように南側が高く、北側の低い傾斜となっており、また調査区中央の標高が最も高くなっている。小さくて浅いわずかな浸食谷が調査区内に3本存在し集落を区画している。最も住居の多く検出された地区は東向きで傾斜の緩やかなⅠ・Ⅱ区（調査区東側）とⅢ区（調査区中央部）南側であり、傾斜の強い斜面とならかな傾斜でも西向きの傾斜面では検出数が少なかった。住居検出数の多いⅠ・Ⅱ区からは東側に近接する古代の大集落遺跡である矢田遺跡がよく望める。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺は、上野三碑の一つである「多胡碑」の存在や多くの古墳等が知られ、古くから地域の歴史に深い関心ももたれている。最近では開発に伴い多くの遺跡が発掘調査され、調査報告書も多く刊行されている。それらの研究成果と当遺跡の発掘成果から、地域史における当遺跡の位置付けがなされる必要がある。ここでは、他の報告書等を参考にしつつ周辺遺跡を簡単にまとめてみた。

旧石器時代

吉井町周辺においての調査例は少ない。発掘調査された遺跡として多胡蛇黒遺跡をはじめ神保富士塚遺跡・矢田遺跡・多比良追部野遺跡等がある。始良丹沢火山灰(AT)を含む時期の粘土層中を中心として多くの石器が出土している。特に甘栗町の天引向原遺跡・白倉下原遺跡で大量の石器の出土が認められた。また、藤岡市内では北山遺跡が良好な内容を示し、緑野遺跡群でAT層に伴う剥片が確認されている。

縄文時代

当遺跡からはこの時代の土器や石器は出土したが、住居跡は存在していない。隣の矢田遺跡では数が少ないが住居跡が検出されている。他に遺構の発掘調査された遺跡として多比良追部野遺跡・入野遺跡・神保植松遺跡・神保富士塚遺跡・長根安坪遺跡等が知られる。しかし吉井町内においては大きな集落遺跡は発掘調査されていない。発掘調査されていない遺跡を含めた、鍋川中流域の縄文時代の遺跡分布については、鬼形芳夫・内木真琴「鍋川右岸下流域段丘における縄文時代遺跡分布調査」『群馬の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団昭和63年が詳しい。

弥生時代

当遺跡からはこの時代の遺構遺物とも確認されていない。この地域で多く発掘調査されている遺跡では、黒熊遺跡から多くの住居と方形周溝墓が、川内遺跡からは20軒の住居と方形周溝墓、長根安坪遺跡から36軒の住居がさらに甘栗町天引狐崎遺跡で40軒の住居と4基の方形周溝墓の検出が知られる。このように規模の大きな集落が点在する一方、当遺跡や矢田遺跡また長根羽田倉では、大規模調査にもかかわらず全く検出されず、また他の多比良追部野遺跡や神保植松遺跡等の遺跡では検出されても極めて少ない。このように、大きな集落遺跡と、小規模な遺跡が分布するといった遺跡の在り方が想定される。

古墳時代

前期に於ける集落遺跡の規模は、弥生時代同様に大きくはないようである。近くの遺跡としては神保下條遺跡や矢田遺跡、また神保富士塚遺跡や長根羽田倉遺跡等で知られるがいずれも2～4軒と少ない。しかし後期になると集落遺跡の数と住居数は爆発的に拡大してくるようである。当遺跡ではこの時期より住居が作られるようになり、隣の矢田遺跡や多比良追部野遺跡等でもこの時期をもって一気に集落が大規模に形成されてゆく。また入野遺跡や黒熊遺跡群においてもこの時期に多くの集落が営まれている。墳墓としての古墳も群集墳として多胡古墳群・垣I・II古墳群・山の神古墳群をはじめとして、多胡蛇黒周辺にも多く認められるようになる。なおこの地域の古墳に関しては右島和夫「遺跡の立地と環境」『神保下條遺跡』1992に詳しい。

奈良時代・平安時代

古墳時代後期の大きな集落遺跡は、多比良追部野遺跡のように奈良時代・平安時代になると住居数が減少する遺跡も認められるが、当遺跡や隣の矢田遺跡のように多くの遺跡では住居数が大きく増減することなく、継続的につくられ続けているようである。住居以外の遺構として黒熊中西遺跡において平安時代の寺院跡が検出されている。礎石建物が6～7棟、テラス遺構9面からなり、礎石建物は寺院の主体となる堂宇、テラ



(国土地理院 1:25,000「富岡」「上野古井」「高崎」「蕨岡」を縮小して使用)

- 1 川福遺跡 2 多明跡 3 塚原古墳群 4 富岡遺跡 5 東吹上遺跡 6 本郷古墳群 7 道六神遺跡 8 片山古墳群
- 9 白石古墳群 10 竹冠遺跡 11 黒船栗崎遺跡 12 黒船八幡遺跡 13 黒船中西遺跡 14 黒船遺跡群 15 祝神古墳群
- 16 入野遺跡 17 東沢遺跡 18 中ノ原古墳群 19 多比良迫部野遺跡 20 榑谷戸遺跡 21 矢田遺跡 22 柳田遺跡
- 23 山の神古墳群 24 川内遺跡 25 多明古墳群 26 多明蛇馬遺跡 27 神保下降遺跡 28 塩I古墳群 29 塩II古墳群
- 30 神保古墳群 31 神保榑松遺跡 32 神保富士塚遺跡 33 長根羽田倉遺跡 34 長根安坪遺跡 35 長根宿遺跡 36 西馬橋遺跡
- 37 安坪古墳群 38 下五反田塚跡 39 滝の前塚跡 40 未沢I塚跡 41 未沢II塚跡 42 下日野・金井塚跡群 43 金山瓦塚跡
- 44 雨場台塚跡(推定)

第3図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献その他
1	川福遺跡 (吉井町馬庭)	奈良・平安時代の住居跡5軒、溝2基等、土器集中地点あり。8世紀前後の炭素 器蓋を多く出土。	吉井町教育委員会1986「川福遺 跡調査報告書」
2	多胡跡 (吉井町池)	吉井町大字池字御門に所在。日本三碑の一つに数えられる。和暦4年(711)多胡 郡設置に関する記念碑とされる。	「吉井町誌」1974「群馬県史・ 資料編4」1985ほか
3	塚原古墳群 (吉井町池)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。	平成元年、蛇塚を調査。
4	富岡遺跡 (吉井町吉崎)	縄文時代中期の遺物包含層。平安時代住居跡4軒、浅間B群石の地層堆積。	吉井町教育委員会1989「富岡遺 跡」
5	東吹上遺跡 (吉井町吉崎)	縄文時代前期、中期、弥生中期、後期包含層。古墳時代後期住居跡1軒、平安 時代1軒。	群馬県立博物館研究報告第8集 1973「東吹上遺跡」
6	本郷古墳群 (吉井町本郷)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基をあげている。	
7	道六神遺跡 (吉井町本郷)	平安時代住居跡1軒、溝6条等。	吉井町教育委員会1986「道六神 遺跡」
8	片山古墳群 (吉井町片山)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
9	白石古墳群 (藤岡市白石)	古墳時代中期から後期にかけての大塚前方後円墳と後期の大群集墳からなり、 終末古墳も含む。	
10	竹沼遺跡(藤岡市 西平井・緑葉)	旧石器時代の石器、縄文時代中期住居跡3軒、弥生時代後期から古墳時代前期 4軒、古墳時代後期17軒、滑石工房址9軒ほか。	藤岡市教育委員会1978「F1群 馬場藤岡市竹沼遺跡」
11	黒麻菜崎遺跡 (吉井町黒麻)	古墳時代と平安時代の住居跡と小竈跡、独立柱建物跡、平地神社跡等。	08群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989「年報7」
12	黒麻八幡遺跡 (吉井町黒麻)	旧石器時代の石器、縄文時代埋蔵土器、奈良・平安時代の住居跡130軒以上、礎 石建物、独立柱建物跡等検出。	08群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991「年報10」
13	黒麻中西遺跡 (吉井町黒麻)	古墳～奈良・平安時代住居跡78軒、平安時代の礎石建物跡6棟、平安時代の道 路遺構7条、井戸、土壇、瓦見、経輪跡等出土。寺院跡を特色とする遺跡。	08群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992「黒麻中西遺跡」
14	黒麻遺跡群 (吉井町黒麻)	縄文・古墳・奈良・平安時代の大集落。	吉井町教育委員会1981～85「黒 麻遺跡群調査報告書」33/4等
15	祝神古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では11基をあげている。	
16	入野遺跡 (吉井町石神)	縄文時代前期、古墳時代前期・後期の住居跡、中世の基壇。	尾崎喜左衛門1962「入野遺跡」他 吉井町教育委員会1985、1986
17	東沢遺跡 (吉井町多比良)	古墳時代後期、奈良・平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1987「東沢遺 跡・折渡東遺跡」
18	中ノ原古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
19	多比良追部野遺跡 (吉井町多比良)	旧石器時代の石器類430点出土。縄文・古墳・平安時代の住居跡、平安時代の水 田、江戸時代の畑地等。	08群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991「年報10」
20	椿谷戸遺跡 (吉井町矢田)	縄文時代中期、古墳前後期、奈良・平安時代の住居、中世土坑等。	吉井町教育委員会1989「椿谷戸 遺跡発掘調査報告書」
21	矢田遺跡 (吉井町矢田)	旧石器時代の石器・縄文・古墳～平安時代の住居跡、独立柱建物跡、埋蔵等。 古墳～平安時代の住居が中心。「物部郷長」「八田郷」等線刻紡錘車出土。	08群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990～93「矢田遺跡1～Ⅳ」
22	柳田遺跡 (吉井町矢田)	古墳～平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1989「柳田遺 跡」
23	山の神古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
24	川内遺跡 (吉井町吉井)	縄文時代中期の土壇、弥生～平安時代の住居跡、弥生時代の方形溝溝墓。中世 の井戸。	吉井町教育委員会1982「川内遺 跡－図版編一」
25	多胡古墳群 (吉井町多胡)	古墳時代後期を中心とした群集墳。上毛古墳総覧では91基をあげている。下塚 1～3号墳を含む。	
26	多胡蛇塚遺跡 (吉井町多胡)	本遺跡。	
27	神保下塚遺跡 (吉井町神保)	5基の古墳。古墳時代前期3軒・奈良3軒の住居跡。中世の館跡・溝等。大量の 須輪・古墳時代前期の住居より鏡・鉄斧・鏃・管玉・ガラス玉等出土。	08群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992「神保下塚遺跡」
28	堀1古墳群 (吉井町堀)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
29	堀2古墳群 (吉井町堀)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では12基をあげている。	

30	神保古墳群 (吉井町神保)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群寛では63基をあげている。	
31	神保稲松遺跡 (吉井町神保)	縄文～平安時代の住居跡。中世を主とした掘立柱建物跡・土庫・井戸・堀の堀、古墳時代の方形周溝墓等。遺物として椀・石臼・土器等出土。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990「年報8」
32	神保富士塚遺跡 (吉井町神保)	縄文・古墳・奈良・平安時代の住居跡。掘立柱建物跡・溝・土坑・土器集積帯跡等。出土遺物として石器・紡錘車・勾玉等。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993「神保富士塚遺跡」
33	長根羽田倉遺跡 (吉井町長根)	古墳～平安時代の住居跡13軒。掘立柱建物跡11棟、井戸11基、土坑93基、溝18基、竪穴遺構3基等。出土遺物として滑石製模造品・紡錘車等の滑石製品。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990「長根羽田倉遺跡」
34	長根安坪遺跡 (吉井町長根)	縄文～平安時代の住居跡。古墳時代の方形周溝墓、古墳、土坑、配石遺構等。遺物として勾玉・紡錘車・鉄鏝・ガラス小玉・金環等。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990「年報8」
35	長根宿遺跡 (吉井町長根)	中世の溝2条検出。	吉井町教育委員会1987「西場脇・長根宿遺跡」
36	西場脇遺跡 (吉井町長根)	古墳・平安時代の住居跡、奈良時代の遺物集中心地点等。	吉井町教育委員会1987「西場脇・長根宿遺跡」
37	安坪古墳群 (吉井町長根)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳群寛では44基をあげている。古墳群南側の一部を、長根安坪遺跡で平成元年に発掘調査。	
38	下五反田窯跡 (吉井町多比良)	3基あったと思われる。2基発掘。1号窯は全長7mの地下式無段無煙登窯、2号窯は、全長5.5mの地下式無段登窯、坪・壘・瓦・風字磚・羽釜等出土。9～10世紀。	国士館大学文学部考古学研究室 1984「考古学研究室発掘調査報告書」
39	滝の前窯跡 (吉井町多比良)	窯跡あるいは灰原の一部と思われる部分が露出。坪・壘・文字瓦出土。9世紀末～10世紀前半、瓦は上野国分寺に供給されており、国分寺補修期の瓦生産窯。	須田茂1989「吉井町・滝の前窯跡の採集遺物とその性格」『群馬文化』
40	末沢1窯跡 (吉井町多比良)	2～3基あったと思われる。林道設置で一部切断されている。1基を発掘調査。窯体の北約5mは無い。地下式無段無煙登窯と思われる。壘・坪・壘・壘・瓦・土鈴等。8世紀前半代を中心としている。	国士館大学文学部考古学研究室 1984「考古学研究室発掘調査報告書」
41	末沢2窯跡 (吉井町多比良)	1と同様に、道路拡張により窯体の一部が2基、灰原と思われる一箇所が確認されている。	
42	下日野・金井窯跡群 (藤岡市下日野・金井)	藤岡市教育委員会により、ゴルフ場建設に先だって分布調査が行われ、地点ごとにa1・a2・c・d・f・gと表記され、発掘調査が行われた。a2地点で3基、a1地点で1基、c地点で4基、他に2～3基の窯体が存在していると思われる。d地点で1基、他に製鉄遺構3基調査、g地点で5基の計16基の窯跡が調査された。8～10世紀。	近日中に報告書が刊行される予定である。発掘担当者、吉田正志氏の御教示による。
43	金山瓦窯跡 (藤岡市金井)	3基の窯体が存在し、2基が発掘調査されている。1・2号窯ともトンネル式無段登窯で、全長4.4～4.5m。壘・字・男・女瓦・文字瓦のほか、須臾器壘等出土。上野国分寺の建造に伴って開窯されたものと考えられている。	坂詰秀一1966「上野・金山瓦窯跡」
44	南陽台窯跡(推定) (吉井町南陽台)	南陽台団地造成時に、大量の須臾器坪・壘・壘が出土。山間地であり菓落遺跡ではなく、窯の存在が考えられる。8世紀代を中心としている。	

ス遺構は付属的な施設や工房あるいは空間面等と考えられている。また黒熊八幡遺跡・多比良道野遺跡・長根羽田倉遺跡では、天仁元年(1108)に降下した浅間噴出のB軽石下の水田遺構が調査されている。「多胡碑」は当遺跡北東約2.7kmに位置する。この碑は多胡郡設置に関する記念碑とされ多くの研究がなされている。古代律令制下における動きの一つとして、上野国分寺に供給した瓦生産に見られるような古代窯業生産もこの地域で開始される。県内の須臾器生産窯はそれ以前の限定された地域での生産と異なり、8世紀前後をもって各地で窯が築かれて多くの製品が生産されるようになってゆく。この地域では吉井町多比良から藤岡市下日野・藤岡市金井の一帯にかけての山林部分を中心として多くの窯が築かれるようになる。この地域では8世紀前後から10世紀にかけて11カ所27基前後の窯が確認または想定されている。その中の21基が発掘調査されており、この地区には更に多くの窯の存在が想定される。これらの窯は須臾器と瓦を生産し、金山瓦窯跡で焼成された瓦は上野国分寺創建時に築かれ、また滝の前窯跡においては国分寺補修段階において多く瓦が生産された事が指摘されている。また条理制の存在についても研究が行われており、関口功一「釧川流域の条理制地割」『条理制研究』2、1986に詳しい。

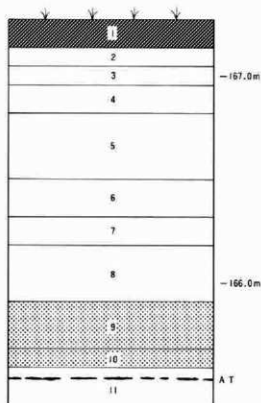
第3節 遺跡の層序

本遺跡は前章で述べたように、鋼川右岸の多胡段丘と呼ばれる上位段丘面上に位置している。南から北へ向かって傾斜している段丘面のため、雨水や季節風等による表土の流失が多く表土の堆積が薄い。そのため耕作土を20～30cm除去すると関東ローム層となる。遺構の掘り込みはローム層上の暗褐色土層からであるが耕作による攪乱を受けている。そのため多くの遺構確認は暗褐色土下層からローム層にかけての層であった。

耕作土及び住居や溝の覆土中に多くのA軽石を含み、Ⅲ区とⅣ区間の谷地周辺と5号溝南端部分に寄せ集められたと思われるA軽石（浅間山噴出1873年天明3年降下）が認められたが、純層は確認されなかった。また遺構内よりB軽石（1108年天仁元年降下）と思われる軽石も検出されたが、1つの層としての明確な区分は出来なかった。

以下に、各層について簡単に記しておく。

- 1層 黒褐色土層（耕作土）少量のローム粒子と多くの白色軽石（A軽石）を含む軟質な層である。層は地点により厚さが異なるが10～20cmである。
- 2層 暗褐色土層 少量のローム粒子と白色軽石（A軽石）粒を含む。
- 3層 暗褐色土層 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- 4層 黄褐色土層 3～5mmの板鼻黄色軽石層（YP）を含むローム層。
- 5層 黄褐色土層 軽石はほとんど含まない。粘性があり、やや暗い橙色を呈するローム層。
- 6層 黄褐色土層 赤褐色の板鼻褐色軽石層（BP）を少し含むローム層。
- 7層 黄褐色土層 赤褐色・灰褐色の板鼻褐色軽石層（BP）を多量に含むローム層。
- 8層 暗褐色土層 少量の室田軽石（MP）を含み粘性をもつローム層。ここから出土した石器群を第1文化層とした。
- 9層 橙褐色軽石層 室田軽石（MP）を主とする軽石層である。風化して粘性を持っている部分もある。
- 10層 褐色軽石層 室田軽石（MP）下層。風化して一部粘土化して色調も褐色を呈する。
- 11層 暗褐色粘土層 堅い粘土層で、0.5～2cm程の礫を含んでいる。上部に始良丹沢火山灰（AT）が1～2cmの厚さで純層ないし、ブロック状に堆積する。ATの上下から石器が出土し、AT上の石器群を第2文化層、AT下の石器群を第3文化層とした。



第4図 基本層序概念図(Ⅲ区) 1/6

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代の遺構と遺物

1 調査の概要

旧石器時代の遺物は西谷川を望む遺跡東端のⅠ区と遺跡西端のⅣ区の台地上で出土している。Ⅰ区では上層から、室田軽石層（MP層）と板鼻褐色軽石層群（BP層群）に挟まれた暗褐色ローム層、室田軽石層直下でAT上の粘土層、AT下の粘土層の3枚の土層中から石器群が出土している。また、Ⅳ区ではAT下の粘土層から出土している。ここでは、暗褐色ローム層出土の石器群を第1文化層、AT上の粘土層出土の石器群を第2文化層、AT下の粘土層出土の石器群を第3文化層として扱うこととする。

2 第1文化層

(1) 文化層の概要

室田軽石上層の暗褐色ローム層中に含まれる文化層である。出土地点は西谷川を望む遺跡東端のⅠ区台地上で、Ⅱ区～Ⅳ区の台地上では石器の出土はなかった。石器の総数は18点で、その内訳はナイフ形石器1点、彫刻刀形石器2点、楔形石器2点、石核1点、敲石1点、剥片9点、砕片1点であり、他に礫片が4点出土している。ブロックは2カ所検出したが、攪乱が及ぶ部分もあり遺存状態は良好なものではなかった。

(2) 石器（第8図1～第10図17）

ナイフ形石器（第8図1）

1. ガラス質安山岩製の縦長剥片を素材とするが、器体上半部は欠損している。調整加工は左側縁の基部主要剥離面側に施されている。これに対して右側縁は折断によって整形されている。打面は残置され、左側縁部には微細剥離痕が観察される。1号ブロック下の室田軽石層の中からの単独出土であるが、第1文化層に帰属すると判断した。

エンドスクレイパー（第8図2）

2. 黒色安山岩製の厚みのある縦長剥片を素材とする。急斜な調整加工によるスクレイパーエッジは右側縁の一部を除いて全周に作出され、打面はこれによって完全に除去されている。

楔形石器（第8図3, 4）

3. 黒曜石製の寸詰まりの縦長剥片を素材とした彫刻刀形石器を転用していると考えられる。素材打面とこれに対向する端面に両極剥離痕が観察される。右側面には微細な調整加工が施されている。

4. 黒色頁岩製の寸詰まりの縦長剥片を素材とし、打面部側とこれに対向する端面側に両極剥離痕が顕著に残り、これによって素材打面は完全に取り除かれている。

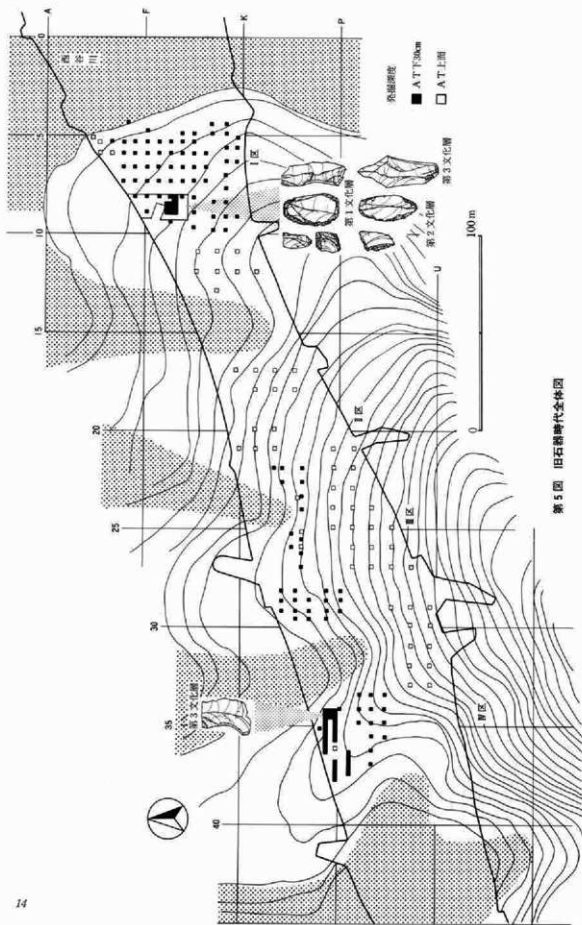
彫刻刀形石器（第8図5, 6）

5. 黒色頁岩製の石刃を素材とする。彫刻刀面は左側縁で3条、右側縁で1条が作出されている。また、彫刻刀面の作出に際して、左側面では1枚の剥離面で打面が作出され、右側面では素材打面にさらに調整加工を加えて打面を作出している。しかし、本石器は石刃をリダクションした石核の可能性もある。

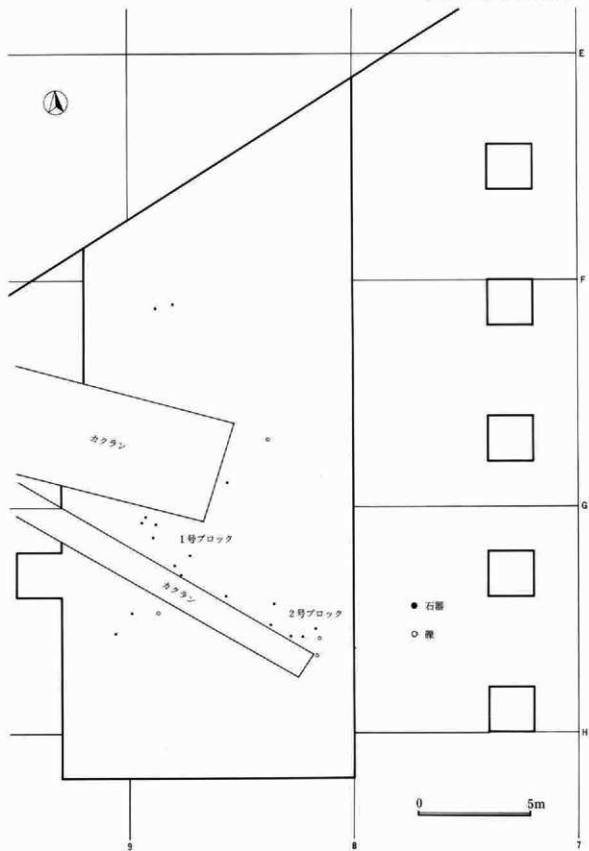
6. ガラス質安山岩製の横長剥片を素材とする。彫刻刀面は素材打面を切るかたちで2条施されている。彫刻刀面作出のための打面は主要剥離面に直交する背面剥離面をそのまま用いているが、打面調整が一部施されている。本石器も横長剥片をリダクションした石核の可能性はある。

石核（第8図7）

7. チャート製で、単剥離面打面から1枚寸詰まりの剥片が生産される。12、16の剥片と同一母岩である。



第5図 旧石器時代全体図



第6図 第1文化層石器分布図

第3章 検出された遺構と遺物

敲石 (第9図8)

8. 安山岩製で、扁平な礫を用い端部には敲打痕が顕著に認められる。また、平坦な表表面には一部敲打痕と擦痕とが認められる。

剥片 (第9図9～第10図17)

9は黒色安山岩製の縦長剥片で、石刃素材の石核からリダクションされた可能性がある。13は下半部を欠損した安山岩製の縦長剥片で、打面調整が施されている。14はガラス質安山岩製の幅広の縦長剥片である。16はチャート製の比較的厚手の石刃である。打面は自然面で、調整加工は施されていない。端部にも石核底面の自然面が認められ、比較的小振りな母岩を用いていることが分かる。また、背面は主要剥離面と同一の加撃方向と180度異なる加撃方向の剥離面で構成されており、上下対向する自然面に打面を設定していることが看取される。17はガラス質安山岩製の種付きの縦長剥片で、上半部を欠損している。

(3) ブロック (第7図)

1号ブロック (第7図)

G-8グリッド北西部に位置し、総数11点の石器群と1点の礫によって構成されるが、ブロック中央部と北側に攪乱が及ぶため全容は不明である。石器群の内訳はナイフ形石器1点、エンドスクレイパー1点、彫刻刀形石器2点、剥片6点、砕片1点である。ブロック内での接合関係はない。

2号ブロック (第7図)

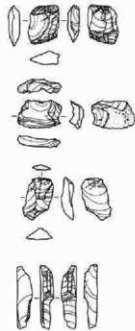
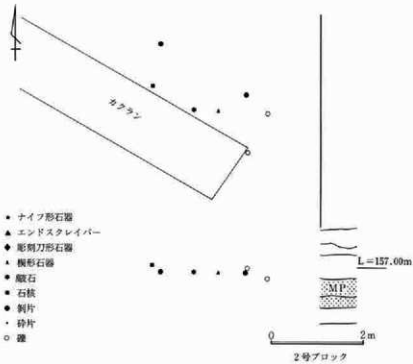
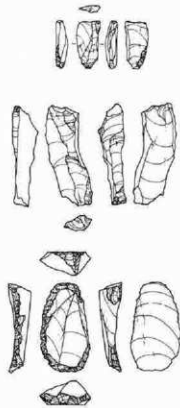
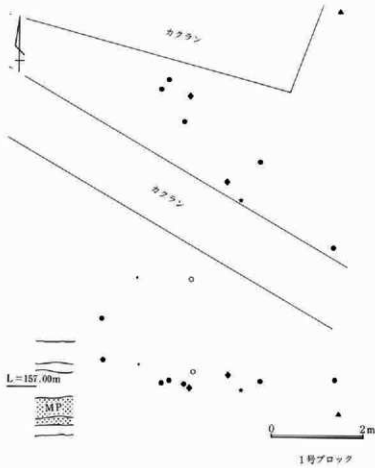
1号ブロックに隣接するようにG-8グリッド南東部に位置する。総数5点の石器群と2点の礫によって構成されるが、1号ブロックと同様南側に攪乱が及ぶため全容は不明である。石器群の内訳は楔形石器1点、石核1点、敲石1点、剥片2点である。ブロック内での接合関係はないが、Ch-1、BSh-2の母岩別資料が1号ブロックと共有関係を持っており、両ブロック間の共時関係性が捉えられる。

(4) 第1文化層石器群の編年の位置付けについて

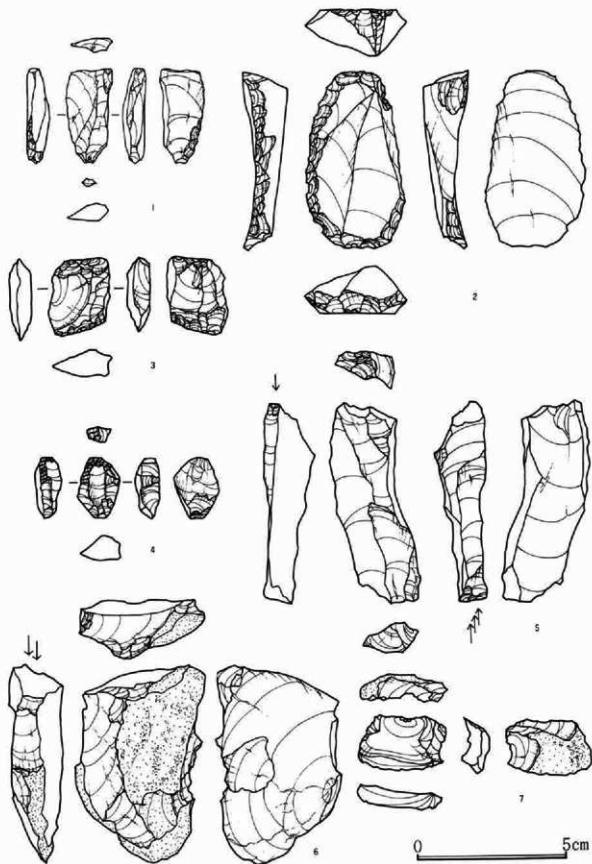
第1文化層の石器群には、背面構成に両設打面石核による石刃技法の展開を思わせる彫刻刀形石器 (第8図5) や縦長剥片 (第9・10図9・16・17)、背面が主要剥離面と同一加撃方向の剥離面によって構成されるナイフ形石器やエンドスクレイパー、そして縦長剥片 (第9図10・13) 等の存在によって、剥片生産技術に石刃技法を保持していることが推測される。さらに、層位的にB層群中のローム層より出土していることを考え合わせれば、砂川期石器群に比定することも可能である。しかし、これらの石器群には楔形石器や前述の剥片以外にも大型の横長剥片を組成していること、逆に砂川期石器群に典型的に組成している石刃素材の二側縁加工と部分加工ナイフ形石器を伴っていないこと、さらに本報告内では彫刻刀形石器としたが、石刃のリダクションを想起させる石器 (第8図5) やその素材と思われる石器 (第10図16) が存在することは砂川期石器群とは多分に異質で、南関東の砂川期に積極的に比定していくことは困難である。

さらに、石器群の廃棄パターンを見ると、各母岩別資料はCh-2を除いて全て砕片を伴わないことから、石器類は遺跡外からの搬入品であることが理解でき、本遺跡内では剥片生産及び器種製作を含めた石器製作作業は全く行われていない。つまり、本石器群には石刃技法の保持が推測されながらも、それが本遺跡内で展開された痕跡はなく、これらの石器類がある地点で集中的に生産されたことが想起されてくる。

鍋川流域における他の旧石器時代遺跡では、第1文化層石器群と同一出土層準を持つ石器群は全く確認されていないのが現状である。第1文化層石器群の編年の位置付けに関しては種類の増加を待って今後さらに検討していかねばならないが、ここではエンドスクレイパーの存在を積極的に評価して南関東のV層段階に推定しておきたい。

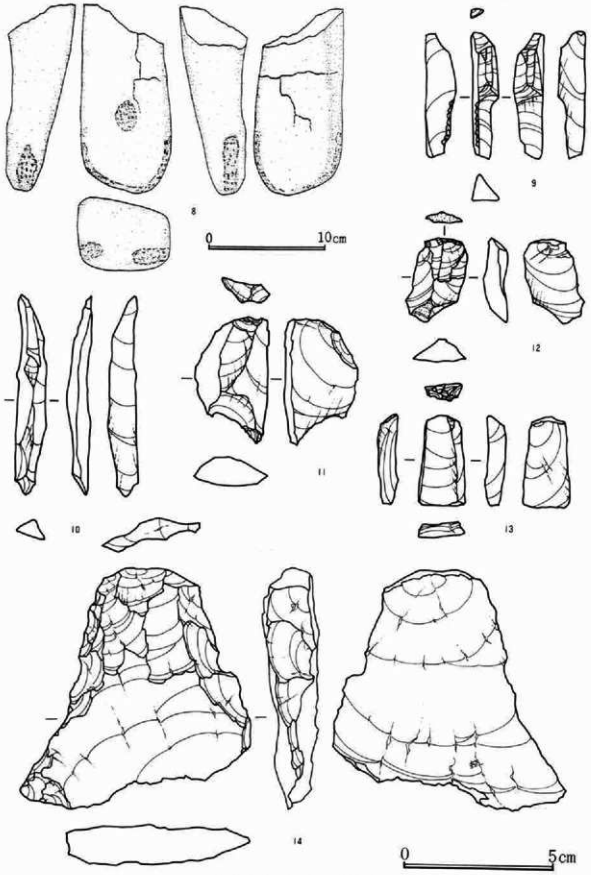


第7図 1号・2号ブロック器種別石器分布図

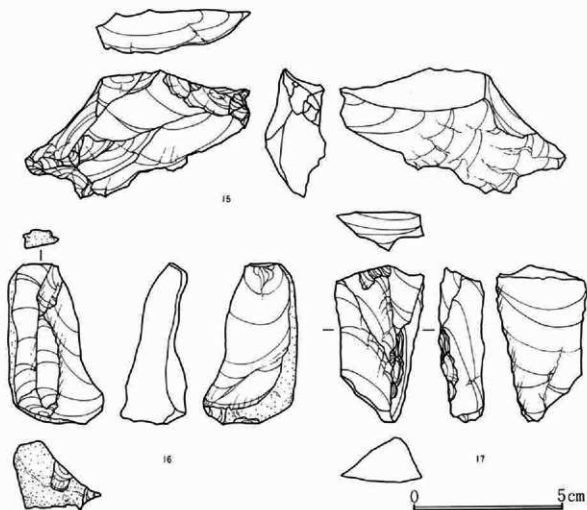


第6図 第1文化層石器実測図(1)

第1節 旧石器時代の遺構と遺物



第9図 第1文化層石器実測図(2)



第10図 第1文化層石器実測図(3)

3 第2文化層

(1) 文化層の概要

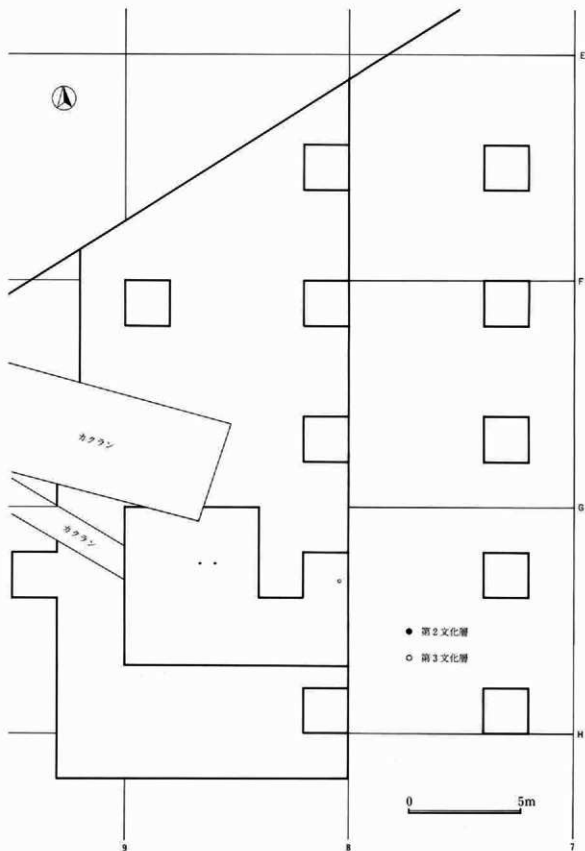
A T上の粘土層に含まれる文化層である。石礫出土地点は第1文化層と同様、遺跡東端のI区台地上であり、II～IV区での遺物の出土はなかった。出土した石器の総数はナイフ形石器2点(内破片1点)のみで、周辺部を拡張したがブロックとしての広がりはなかった。いずれも、室田軽石層直下の粘土層上面から出土している。

(2) 石器(第8図1, 2)

ナイフ形石器

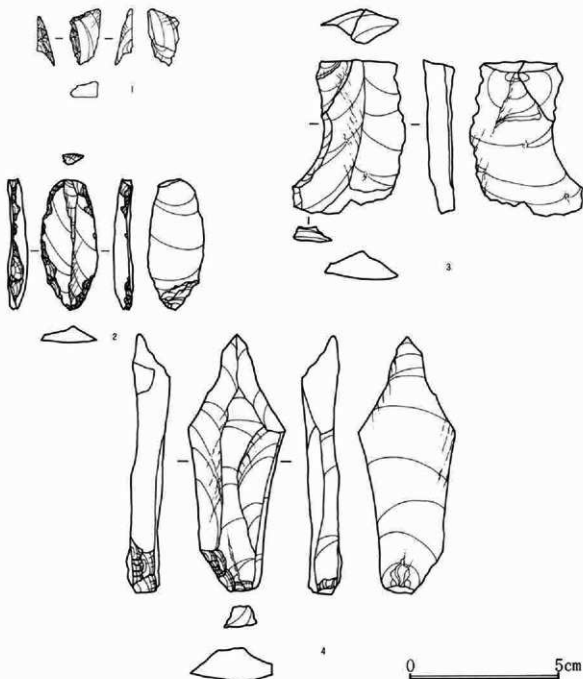
1. 黒曜石製の石刃を素材とし、先端部を一部欠損する。ブランティングによる調整加工は左右両側縁の基部と先端部に施されている。主要剥離面の基部には、ブランティングに切られる樹状剥離痕が1条見られ、彫刻刀形石器を転用している可能性がある。

2. 硬質泥岩製のナイフ形石器の破片で、ブランティングによる調整加工を残している。調整加工と素材縁辺部は直交し、器体は台形状を呈していたものと考えられる。



第11図 第2・第3文化層石器分布図

第3章 検出された遺構と遺物



第12図 第2・第3文化層石器実測図

4 第3文化層

(1) 文化層の概要

A T下の粘土層に含まれる文化層で、石器はA T下約20cmほどの層準から出土している。出土地点はI区とIV区である。I区ではナイフ形石器が1点、またIV区では後背部に山翼の迫る上位段丘面最南端部の2本の埋没谷谷頭部に挟まれた小舌状台地から剥片が2点（接合後1点）出土したのみである。I区、IV区とも周辺部を拡張したがブロックとしての広がりはなかった。

なお、I区とIV区は直線距離にして約260m離れているが、同一層準から出土しているため相互に時間的隔たりは殆どないと考え、両地区の石器とも同一の文化層として扱うこととした。

(2) 石器 (第8図3, 4)

1. ナイフ形石器 (第8図4)

黒色頁岩製の縦長剥片を素材とする。調整加工はブランディングで、左側縁の基部に施されている。先端部は一次剝離で得られた左右対称の尖鋭部をそのまま活かしている。

剥片 (第8図3)

2. ガラス貫安山岩製の縦長剥片で、右側面に微細剝離痕が認められる。IV区O-34グリッド出土。

第1文化層石器・礫一覧表 (図版番号78・79)

番号	器種	形断面	石材	図記番号	ブロック	接合	X	Y	%	N-S (cm)	E-W (cm)	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図記番号
1	横形石鏃	黒曜石	Ob-1	F 8	1		105			801	156.27	2.0	1.5	0.8	2.16	8区4	
2	剥片	○	黒色頁岩	BSh-3			F 8	2	117	872	156.30	4.2	2.4	0.9	10.50	9区11	
3	礫		チャート	F 8	3		701			390	156.76	3.1	2.5	1.1	7.66		
4	ナイフ形石器		黒色頁岩	BSh-2	1		F 8	4	931	562	156.49	5.8	3.4	1.6	26.90	8区2	
5	剥片		チャート	Ch-1	1		G 8	1	90	946	157.07	5.4	3.3	2.3	28.89	10区16	
6	剥片		ガラス貫安山岩	GAa-2	1		G 8	2	74	912	157.14	4.2	7.2	2.9	56.84	10区15	
7	横刃形石鏃	○	ガラス貫安山岩	GAa-2	1		G 8	3	100	852	156.95	6.6	4.2	1.9	34.90	8区6	
8	剥片		ガラス貫安山岩	GAa-1	1		G 8	4	164	875	157.05	7.7	6.8	1.9	93.54	9区14	
9	横刃形石鏃		黒色頁岩	BSh-1	1		G 8	5	280	792	157.22	6.7	3.0	1.7	36.89	8区5	
10	剥片	○	ガラス貫安山岩	GAa-3	1		G 8	6	217	707	156.12	5.2	3.0	1.6	22.72	10区17	
11	ナイフ形石器	○	ガラス貫安山岩	GAa-4	1		G 8	8	303	677	156.94	4.1	1.5	7.5	3.32	8区1	
12	剥片		チャート	Ch-2	1		G 8	10	460	988	157.42	1.0	0.6	0.1	0.11		
13	礫		石英		1		G 8	11	460	852	157.28	1.6	0.8	0.4	0.44		
14	剥片	○	ガラス貫安山岩	GAa-3	1		G 8	12	407	361	157.18	2.9	1.7	0.7	4.20	9区13	
15	石核		チャート	Ch-1	2		G 8	13	320	369	157.22	1.9	2.9	0.9	4.92	8区7	
16	剥片		黒色頁岩	BSh-2	2		G 8	14	438	344	157.09	4.5	1.0	1.0	2.55	9区9	
17	横形石鏃		安山岩	Aa-1	2		G 8	15	678	206	157.12	15.5	8.1	5.9	828.70	9区8	
18	横形石鏃		黒色頁岩	BSh-2	2		G 8	16	577	222	157.04	2.6	3.1	0.8	4.30	8区3	
19	剥片		チャート	Ch-1	2		G 8	17	553	182	157.13	2.8	2.1	0.7	3.68	9区12	
20	礫		結晶片岩		2		G 8	18	580	156	156.98	4.9	2.6	1.1	16.71		
21	礫		石英		2		G 8	19	605	185	157.18	2.8	2.5	1.3	17.24		
22	剥片		黒色頁岩	BSh-3	1		G 9	1	563	61	157.58	6.6	1.0	0.7	3.82	9区19	

第2文化層石器一覧表 (図版番号79)

番号	器種	形断面	石材	図記番号	ブロック	接合	X	Y	%	N-S (cm)	E-W (cm)	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図記番号
1	ナイフ形石器		黒曜石	Ob-2			G 8	7	248	666	156.73	4.2	1.9	0.6	4.57	12区2	
2	剥片		黒頁岩	HMb-1			G 8	9	248	600	156.62	1.9	1.1	0.6	0.96	12区1	

第3文化層石器一覧表 (図版番号79)

番号	器種	形断面	石材	図記番号	ブロック	接合	X	Y	%	N-S (cm)	E-W (cm)	標高(m)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図記番号
1	ナイフ形石器		黒色頁岩	BSh-4			G 8	20	328	38	156.45	8.5	3.3	1.4	29.82	12区4	
2	剥片	○	ガラス貫安山岩	GAa-5		○ O 34	1	482		344	167.00					12区3	
3	剥片	○	ガラス貫安山岩	GAa-5		○ O 34	2	472		472	166.97					12区3	

第2節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は西谷川を望むⅠ区北東端の台地上から検出されている。土坑2基の検出のみで、住居跡の検出はなかった。縄文時代の遺構の分布は、調査区の北側へ延びているものと考えられるが、たとえ住居跡が存在したとしても小規模な遺跡と考えられる。遺跡地東に西谷川が流れ、すぐ西側には小規模な谷が入り、また傾斜が比較的きつこと等の条件から、集落を展開させるには良好な占地場所であるとはいえないであろう。

検出された2基の土坑は、出土物から判断して縄文時代中期の所産である。しかしその用途については判断としない。墓塚であるのか貯蔵穴か、あるいは他の用途の土坑なのか、遺物の出土状況や覆土の堆積状態、遺構の形態からだけでは残念ながら決定しなかった。

1号土坑

Ⅰ区北東端に位置し、C-5グリッドに属する。2号土坑の北北東約7mのところから検出された。上面の規模は112cm×102cm、底面の規模は96cm×86cm、深さ48cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分かれ、縄文土器片3点が出土し、また剥片等が出土している。

当土坑の検出面はローム層上であるが、実際は上層から掘り込まれていたものである。出土遺物や土坑の形態・覆土の状態から判断して、当土坑は縄文時代の構築にまちがいないであろう。



土層堆積 (1号土坑)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
 ② 茶褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
 ③ 黒褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
 ④ 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。

第13図 1号土坑及び出土遺物実測図

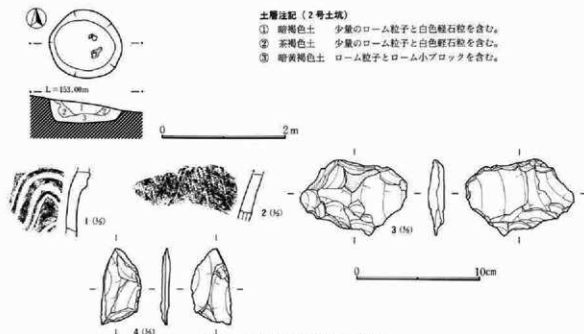
1号土坑出土遺物観察表 (挿図番号第13図 図番号80・81)

番号	部位	①出土 ②構成 (遺存状況)	成形・表面調整の特徴と色調	文様 (その他)	出土状況				
1	口縁部片	①雲母・細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。壁厚4mm~1cm。内面は丁寧な調整が行われている。内外面の色調は褐色色。	地文に縄文施文。原体はL(Ⅱ)。半截竹管による平行沈線による区画。区画内に三角形印刻文。中期。	1号土坑 覆土				
2	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。壁厚6mm~8mm。内面は横方向の調整が行われている。外面の色調は赤褐色。内面は褐色色。	地文に縄文施文。原体はL(Ⅱ)。隙帯と半截竹管による平行沈線を施文。中期。	1号土坑 覆土				
3	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。内面は横方向のミガキが行われている。外面の色調は赤褐色。内面は褐色色。	地文に縄文施文。原体はR(Ⅱ)。半截竹管による平行沈線を縦位に施文。中期。	1号土坑 覆土				
番号	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
4	剥片	覆土	4.6	8.2	1.3	54.0		熱変成岩	
5	剥片	覆土	4.6	6.8	2.5	70.0		熱変成岩	

2号土坑

I区北東端に位置し、C-5、D-5グリッドに属する。1号土坑の南南西約7mのところから検出された。上面の規模は118cm×110cm、底面の規模は100cm×80cm、深さ20cm～34cmの楕円形を呈する。底面は平坦である。覆土は3層に分かれ、縄文土器片2点が出土し、また剥片等が出土している。

当土坑の検出面は1号土坑と同様にローム層上であるが、実際は上層から掘り込まれていたものである。また斜面に構築されていたために、底面までの深さに差異が生じている。出土遺物や土坑の形態・覆土の状態から判断して、当土坑は縄文時代中期の構築にまちがいないであろう。



第14図 2号土坑及び出土遺物実測図

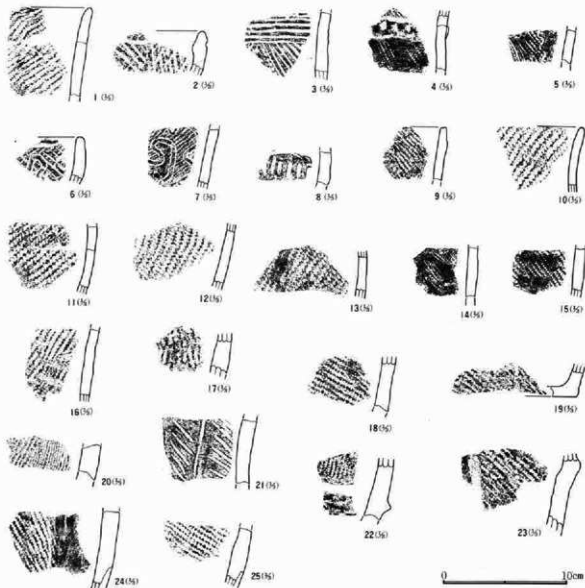
2号土坑出土遺物観察表 (挿図番号第14図 図版番号80・81)

番号	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様 (その他)	出土状況				
1	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～1.1cm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は褐灰色。	隆帯に沿って半截竹管による沈線が施されている。 中期。	2号土坑 覆土				
2	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm～1cm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色、内面は赤褐色。	地文に縄文施文。原体はL(Ⅱ)。 半截竹管による平行沈線を2条斜行させている。中期。	2号土坑 覆土				
番号	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	保存状況	石材	特徴
3	剥片	覆土	6.0	8.5	1.2	51.0		熟成成岩	
4	剥片	覆土	6.0	3.2	0.6	12.0		熟成成岩	

縄文遺構外から出土した土器片の多くは、古墳時代から平安時代の住居跡覆土中から出土したものが多く、前期の土器片も少量みられるが、主対となるものは中期五領ヶ台式土器片であった。

石器では石鏃、打製石斧、凹石、石皿、多孔石等が出土しているが、土器片と同様に古墳時代から平安時代の住居跡の覆土中からのものが圧倒的に多かった。

第3章 検出された遺構と遺物



第15図 調査区出土土器実測図

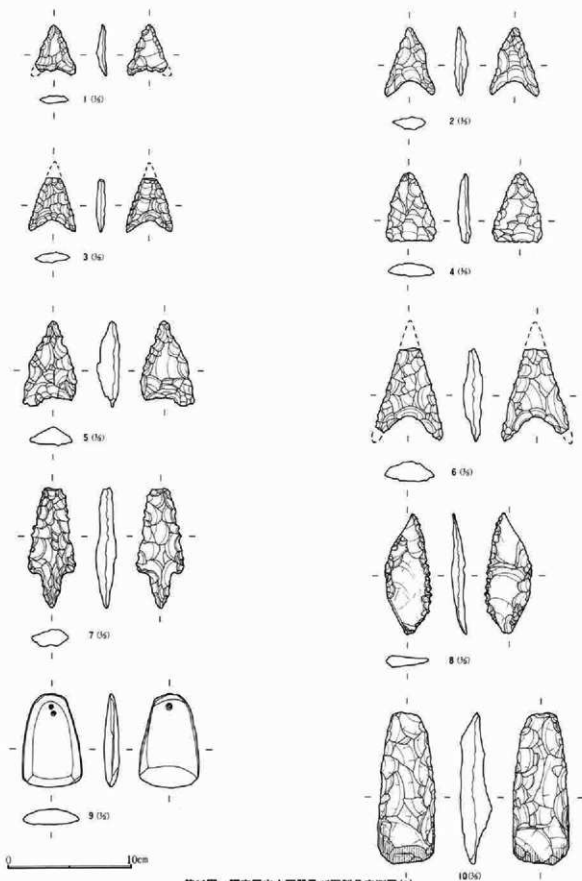
調査区出土縄文土器観察表 (押図番号第15図 図版番号80)

番号	部位	①胎土 ②焼成 (産 存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様(その他)	出土状況
1	口縁部片	①繊維を含む ②粗粒の砂を混入	深鉢形土器の口縁部片。器厚6~9mm。 内面は横方向の調整。繊維状が認められる。 ②良 外面の色調は赤褐色。内面は明赤褐色。	縄文施文。原体はL(フ)横ころがし。 前期黒沢式。	37号住居 覆土
2	口縁部片	①金雲母を含む ②粗粒の砂を混入 ③良	深鉢形土器の口縁部片。器厚5mm~1.1cm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はよい褐色。内面はよい褐色。	半載竹管状工具による集合沈線文。 中期五箇ヶ台式。	130号住居 居覆土
3	胴部片	①雲母を含む ②粗粒の砂を混入 ③良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm~1cm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 内外面の色調は灰褐色。	半載竹管状工具による集合沈線文。 刺突が施されている。 中期五箇ヶ台式。	43号住居 居覆土
4	胴部片	①中粒の砂を混入 ②非常に良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は暗赤褐色。内面は赤色。	地文に縄文施文。原体はL(フ)。 隆帯上に刺突が施されている。 中期五箇ヶ台式。	128号住居 居覆土
5	胴部片	①粗粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8mm。 内面はやや丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はよい褐色。	原体L(フ)の結節縄文を縦方向に施文。 中期五箇ヶ台式。	130号住居 居覆土

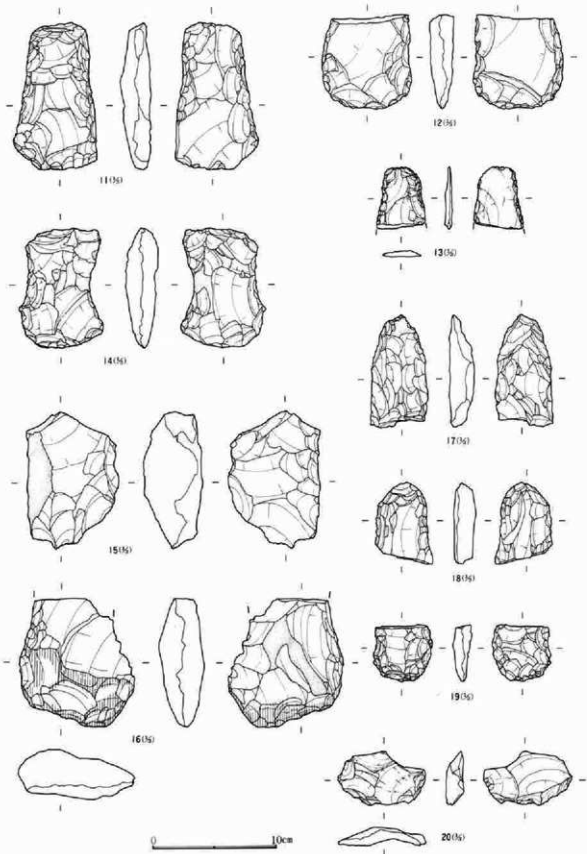
調査区出土縄文土器観察表 (採回番号第15図 図版番号80)

番号	部位	①胎土 ②焼成 (遺存状況)	成形・器面調整の特徴と色調	文様 (その他)	出土状況
6	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7mm-1cm。 内面は横方向の調整が行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	半鉾竹管状工具による集合沈線文。 同工具による文様が描かれている。 中期。	133号住居層土
7	胴部片	①金雲母を含む 細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7-8mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調は灰褐色。内面は褐色。	地文に縄文施文。原体はL(Ⅱ)。 半鉾竹管による文様が描かれている。 中期。	134号住居層り方層土
8	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚9mm。 内面は横方向の丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は灰褐色。	棒状工具による沈線が施されている。 中期。	2号住居層土
9	口縁部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚5-8mm。 内面は縦方向のミガキが行われている。 内外面の色調はにぶい赤褐色。	縄文施文。原体はR(Ⅱ)横ころがし。 口唇部は平埴。 中期五領ケ台式。	132号住居層土
10	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚5-8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は赤褐色。内面はにぶい赤褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)横ころがし。 中期五領ケ台式。	148号住居層土
11	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7-8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面は赤褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)横ころがし。 中期五領ケ台式。	148号住居層土
12	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚6-8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は赤褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)横ころがし。 中期五領ケ台式。	148号住居層土
13	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7-8mm。 内面は横方向のミガキが行われている。 外面の色調は灰褐色。内面は赤褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)横ころがし。 中期五領ケ台式。	148号住居層土
14	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8-9mm。 内面は横方向の調整が行われている。 外面は暗赤褐色。内面は褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)縦ころがし。 中期。	144号住居層土
15	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚8-9mm。 内面はミガキが行われている。 外面の色調は暗赤褐色。内面は暗赤褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)縦ころがし。 中期。	132号住居層土
16	胴部片	①雲母を含む 細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚7-9mm。 内面は粗い調整が行われている。 外面の色調は黒褐色。内面はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)横ころがし。 中期。	164号住居層土
17	胴部片	①雲母を含む 細粒の砂を混入 ②やや良	深鉢形土器の胴部片。器厚1.1-1.3cm。 内面は粗い調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR(Ⅱ)横ころがし。 中期。	一括
18	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1-1.1cm。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)縦ころがし。 中期。	4号住居層土
19	底部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の底部片。底径不明。 内面は丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	縄文施文。原体はR(Ⅱ)横ころがし。 平埴。 中期。	148号住居層土
20	胴部片	①雲母を含む 細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1.5cm。 内面は丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい赤褐色。内面はにぶい褐色。	黒糸L施文。中期。	130号住居層り方
21	胴部片	①中粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1-1.2cm。 内面は横方向の粗い調整が行われている。 外面の色調はにぶい褐色。内面は灰褐色。	縦位・斜位の沈線が施されている。 中期。	一括
22	口縁部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の口縁部片。器厚1.2-1.4cm。 内面は非常に丁寧な調整が行われている。 内外面の色調はにぶい黄褐色。	楕円区画内に縄文施文。原体はR(Ⅱ)横ころがし。 沈線を垂下している。 中期加曾利E3式。	170号住居層土
23	胴部片	①細粒の砂を混入 ②不良	深鉢形土器の胴部片。器厚1.3-1.4cm。 内面は荒れている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は淡黄色。	黒糸L施文。中期。 原体はL(Ⅱ)縦ころがし。沈線を垂下している。 中期加曾利E3式。	表録
24	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1.1cm。 内面は非常に丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面はにぶい褐色。	黒糸L施文。中期。 原体はL(Ⅱ)縦ころがし。 中期加曾利E4式。	7号住居層土
25	胴部片	①細粒の砂を混入 ②良	深鉢形土器の胴部片。器厚1-1.3cm。 内面に非常に丁寧な調整が行われている。 外面の色調はにぶい黄褐色。内面は淡黄褐色。	縄文施文。原体はL(Ⅱ)縦ころがし。 中期加曾利E4式。	6号住居層土

第3章 検出された遺構と遺物

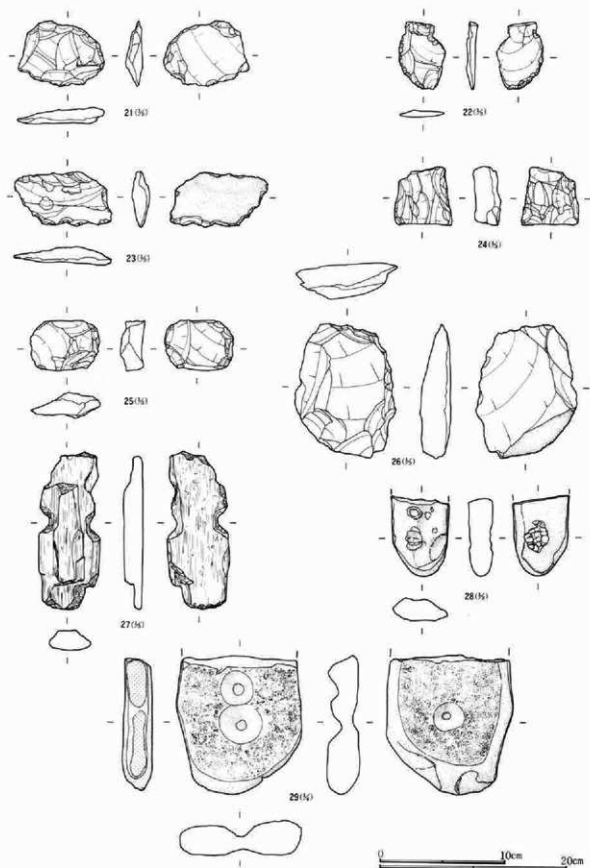


第16図 調査区出土石器及び石製品実測図(1)

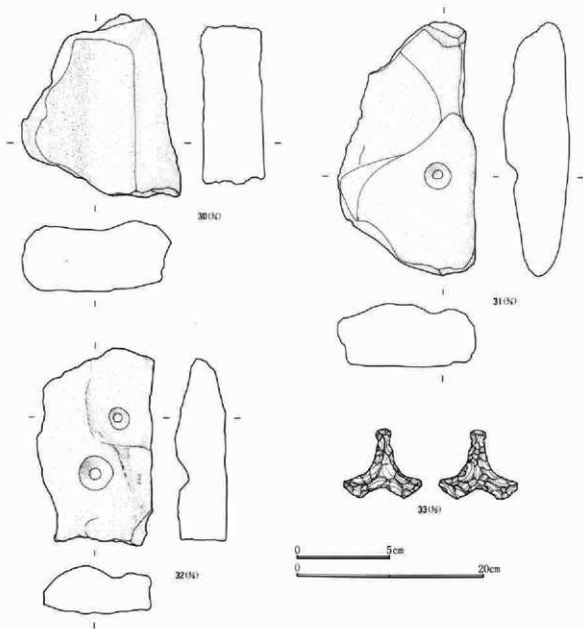


第17図 調査区出土石器及び石製品実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第18図 調査区出土石器及び石製品実測図(3)



第19図 調査区出土石器及び石製品実測図(4)

縄文石器観察表 (挿図番号第16図 図版番号81)

番号	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
1	石鏃	49号住居 覆土	1.3	1.1	0.2	0.2	基部欠損	黒曜石	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆U字形をなす。
2	石鏃	63号住居 覆土	1.8	1.3	0.3	0.4	完形	黒曜石	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆U字形をなす。
3	石鏃	108号住居 覆土	1.4	1.3	0.2	0.3	先端部欠損	黒曜石	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りは逆U字形をなす。
4	石鏃	I区表採	1.8	1.4	0.3	0.6	完形	黒曜石	側縁はほぼ直線をなし、基部の扱りはない。

縄文石器観察表 (押図番号第16・17・18・19図 図版番号81・82・83)

番号	器種	出土位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存状況	石材	特徴
5	石鏃	D-5グリ ッド	2.3	1.4	0.6	1.3	完形	黒曜石	側縁は中央部で外側に彎曲し、基部の 挟りは逆U字形をなす。
6	石鏃	103号住居 覆土	2.4	1.8	0.5	1.3	先端部欠損	熱変成岩	側縁はほぼ直線をなし、基部の挟りは 逆V字形をなす。
7	石鏃	I区表探	3.2	1.3	0.5	1.7	先端部欠損	熱変成岩	
8	石槍	S-31グリ ッド	9.4	3.7	1.0	27.0	完形	熱変成岩	
9	垂飾品	170号住居 覆土	7.3	4.7	1.2	64.0	完形	ヒスイ	両面に孔を穿つが貫通はしていない。
10	打製石斧	T-25グリ ッド	12.0	4.5	2.4	139	完形	熱変成岩	バネ型。
11	打製石斧	64号住居 覆土	11.6	6.6	2.3	200	完形	石英安山岩	バネ型。
12	打製石斧	田区表探	7.5	7.1	1.9	137	基部欠損	熱変成岩	分刺型。
13	打製石斧	N-18グリ ッド	4.9	3.9	0.5	12.2	刃部欠損	熱変成岩	バネ型。
14	打製石斧	49号住居 覆土	9.5	6.7	2.5	161	基部欠損	熱変成岩	分刺型。
15	石核	150号住居 覆土	10.8	7.3	4.6	389.0		熱変成岩	
16	打製石斧	U-34グリ ッド	10.1	9.2	3.6	332.0	基部欠損	熱変成岩	分刺型。
17	打製石斧	S-31グリ ッド	8.9	4.5	1.9	81.0	刃部欠損	安山岩	短冊型。
18	打製石斧	92号住居 覆土	6.4	4.5	1.7	55.0	刃部欠損	熱変成岩	バネ型。
19	打製石斧	81号住居 覆土	4.5	4.7	1.3	32.0	刃部	熱変成岩	短冊型。
20		169号住居 覆土	4.3	7.0	1.3	34.0		熱変成岩	
21		表探	5.1	6.8	1.3	46.0		熱変成岩	
22	石匙	101号住居 覆土	5.3	3.7	0.6	12.0	完形	熱変成岩	縦型。縦長削片を素材とし打面残。
23		表探	4.3	7.7	1.4	45.0		熱変成岩	
24	打製石斧	134号住居 覆土	4.6	4.6	2.0	54.0	部分	熱変成岩	バネ型。
25		81号住居 覆土	4.0	5.5	1.9	40.0	部分	熱変成岩	
26	石核	5号土坑	10.6	8.1	2.5	225.0		熱変成岩	
27	打製石斧	U-32グリ ッド	16.2	6.5	2.1	280.0	一部欠損	網曹母石黒片 岩	分刺型。
28	凹石	22号住居 覆土	8.0	5.6	2.6	140.0	欠	石岩	両面に3個の凹みがある。
29	凹石	7号住居 覆土	14.6	13.2	3.7	900.0	欠	砂岩	両面に3個の凹み。最大の凹みは長・ 短径約4cm、深さ1.5cm、磨耗してい る。
30	石皿	51号住居 覆土	19.1	15.6	7.0	3.3K	破片	点紋網曹母片 岩	磨面は浅く湾曲している。全面磨け ている。
31	多孔石	89号住居 覆土	26.8	14.6	7.1	3.0K	完形	砂岩	片面に1個の凹みがある。凹みは長径 2.6cm、短径2.4cm、深さ8mm。一部 磨けている。
32	多孔石	160号住居 覆土	29.5	12.2	5.1	1.6K	部分	砂岩	片面に2個の凹みがある。最大の凹み は長径3.6cm、短径3.4cm、深さ1cm。
33	異形石器	II区各地	3.6	4.3	0.4	4.3	完形	熱変成岩	左右対象で細部調整加工が両面を覆う。 上端部につまみ部を作出している。

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物

1号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版9 遺物写真図版84

位置 I区西側に位置し、H-10・11グリッドに属する。

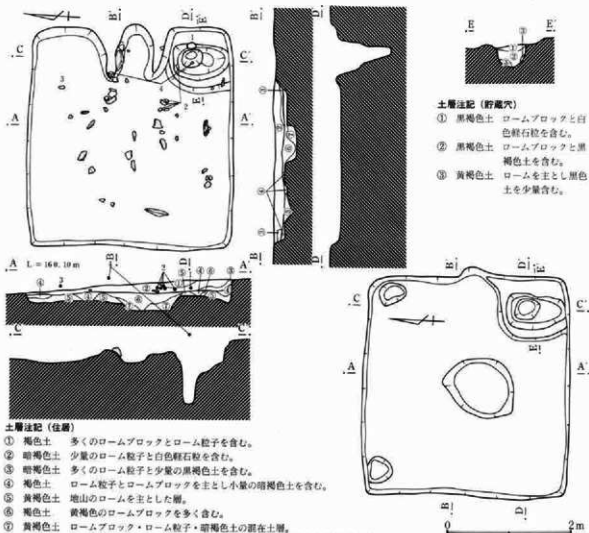
概要 後世の耕作と表土の流出により遺構の残存状態が悪い。竈の残りも良好でない。特に住居北側の壁面付近の残存状態が悪かった。

構造 床面は、ロームブロックを主体とし、黒褐色土が混入した土で堅く踏み固められていた。柱穴及び溝は検出されなかった。竈右側に円形の貯蔵穴が検出され、貯蔵穴の回りには褐色土の土手状の高まりが一周していた。

規模 東西3.45m、南北3.30mで、東西方向にやや長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良い東壁で15cmで、残りは悪い。貯蔵穴は、歪んではいるが直径60cm前後でほぼ円形を呈し、深さは床面より約80cmと非常に深い。一周している土手状の高まりの高さは5cm前後である。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の坏や甕が出土しており、竈周辺の遺物は残存状態が良好で図化できる遺物が多かった。

床下 床面中央部に0.9m×1.1mの楕円形を呈し、床面からの深さ27cmの床下土坑が検出された。

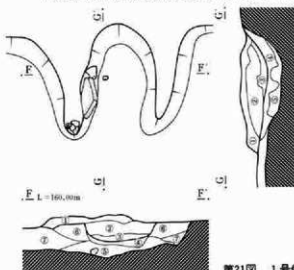


第20図 1号住居跡及び床下実測図

1号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央部の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られており、左袖の芯材として用いられたと思われる1個の石が検出された。燃焼部床面付近からは、多くの焼土粒子が検出された。



規模 煙道方向90cm、両袖方向60cmであった。

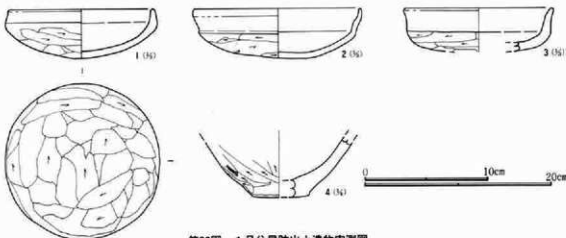
遺物 土器器の斐底部と胴部の小破片が出土している。

土層注記(竈)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 赤色土 多くの焼土粒子と少量の黒褐色土の層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含むやや軟弱土層。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土と暗褐色土を含む。
- ⑦ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土を含む。

0 1m

第21図 1号住居跡竈実測図



第22図 1号住居跡出土遺物実測図

1号住居跡 出土遺物観察表(押印番号第22図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
1住-1 84	坏 土器器	3.9 11.8 - 床面+2	丸底の坏であり、縁は明瞭でない。口縁部が短く内 彎する。口唇部は磨耗が多く、残りが悪い。やや内 傾するようである。磨りは底部中央から周辺部へ。	①に濃い褐色②酸化③完形④1mm外の 砂粒を少量含む⑤内外面炭状
1住-2 84	坏 土器器	4.0 13.3 - 床面+4	丸底の坏である。底部との境の縁は明瞭で、V字状 の沈線が稜直上で1条内側で1条認められる。底部 へ丸削り。底部中央に重畳の圧痕あり。器内厚い。	①褐色②酸化③2/3④赤褐色土を少量 含む⑤内外面炭状なし
1住-3	坏 土器器	(3.5)(12.0) - 床面+10	狭い坏であり、底部中央は平底気味。弱い縁がある。 口縁部は直立後、弱く外反する。器内が厚い。	①に濃い褐色②酸化③1/5④赤褐色粒 と砂粒を少量含む
1住-4	甕? 土器器	- - 6.0 床面+20 貯蔵穴内	底部周辺のみが残存であるが、甕の底部と思われる。 調整が悪いため、輪郭部で割れている。内面はて いねいに整形。	①明赤褐色②酸化③底部周辺1/3④赤 色粒と白色粒を多く含む⑤内面に磨き 痕あり

2号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版9 遺物写真図版84・85・147

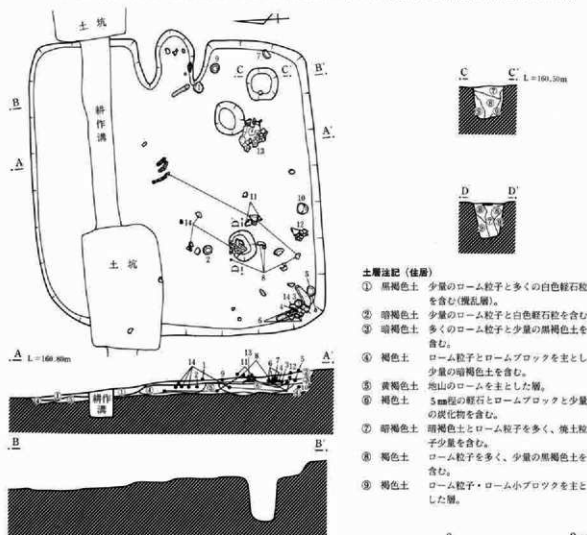
位置 I区西側中央部に位置し、1号住居の南約5mでI-10・11グリットに属する。

概要 1号住居跡同様に遺構の残存状態が悪く、竈の残りも良好でない。更に住居北側は、東西に走る耕作溝と通称イモ穴と呼ばれている土坑により床面下まで深く掘り込まれている。

構造 床面は、ロームブロックを主体とし、黒褐色土が混入した土で堅く踏み固められていた。柱穴は東西方向に2本検出された。おそらく4本柱であり、他の2本は耕作溝及びイモ穴により掘られて検出できなかったものと思われる。竈右側に円形の貯蔵穴が検出され、貯蔵穴の回りには褐色土の土手状の高まりがわずかではあるが検出された。

規模 東西4.7m、南北4.6mで、ほぼ正方形である。壁高は最も残りの良いところで15cmである。貯蔵穴は、竈内ではいるが直径50cm前後のほぼ円形を呈し、深さは床面より約70cmと深い。柱穴1は直径50cm深さ73cm、柱穴2は直径45cm深さ68cmである。

遺物 住居中央から南側の床面や覆土中より多くの土師器の坏や甕や瓶が、破片としてでなく完形物が破けたような形で出土し、その多くを図化することができた。また竈周辺でない南西コーナーにほぼ完形の坏4点と甕がまとめて置かれていたことが注目される。床面中央部より炭化材が出土している。



第23図 2号住居跡実測図

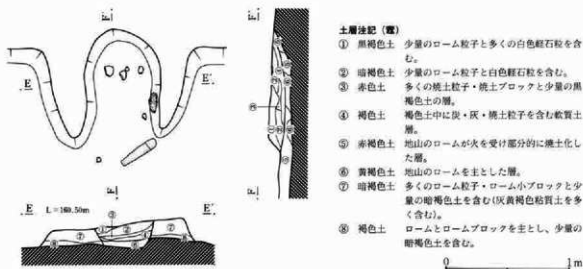
2号住居跡（竈）

位置 住居東壁中央部の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。

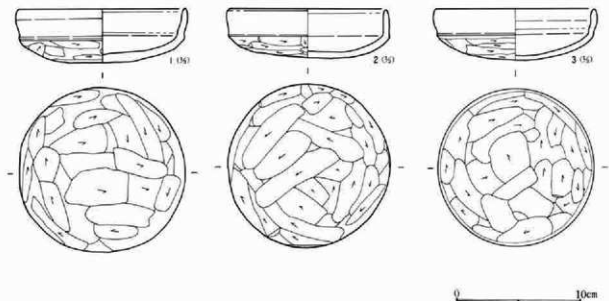
構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られており、右袖の芯材として用いられたと思われる1個の石が検出された。燃焼部床面付近からは、多くの焼土粒子と炭が検出された。

規模 煙道方向100cm、両袖方向60cmである。

遺物 土師器の甕の胴部4片と環の口縁部が1片出土している。

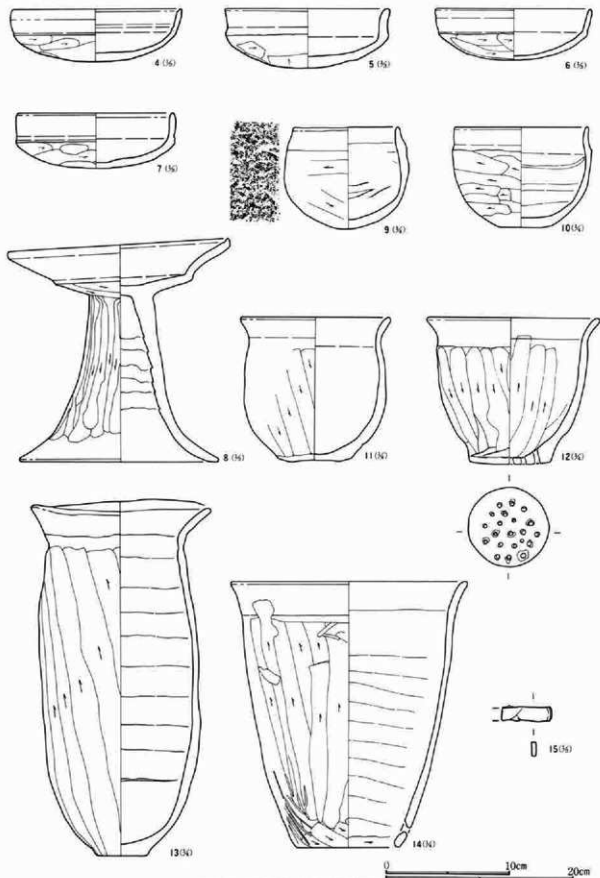


第24図 2号住居跡竈実測図



第25図 2号住居跡出土遺物実測図(1)

第3期 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第26図 2号住居跡出土遺物実測図(2)

2号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第25・26図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②吸炭③吸灰④胎土⑤備考
2住-1 84	坏 土師器	4.3 13.5 - 床面+18	丸底の坏である。底部と口縁部との境の境は明瞭で、V字状の沈線が横直上で1条、内側で1条認められる。口縁部はゆるやかに内彎しつつ上がる。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化・硬質③完形④1mm以下の砂粒を多く含む
2住-2 84	坏 土師器	3.9 13.0 - 床面+3	丸底の坏であるが底部は平底に近い。底部と口縁部との境の境は明瞭で、V字状の沈線が横直上で1条、内側で1条認められる。口縁部はやや内彎する。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化・硬質③完形④1mm以下の砂粒を少量含む
2住-3 84	坏 土師器	4.1 13.0 - 床面+5	丸底の坏である。底部と口縁部との境の境は明瞭でV字状の沈線が横直上で1条、内側で1条認められる。口縁部は内彎しつつ立ち上がり、中央部でさらに内彎する。口縁部横ナデ、底部ヘラ削り。	①褐色②酸化・硬質③完形④1mm以下の砂粒を少量含む
2住-4 84	坏 土師器	4.2 13.5 - 床面+12	丸底の坏である。底部と口縁部との境の境は明瞭であるが、横直上の沈線が横直上で1条、内側に1条、その上にさらに1条認められる。	①にぶい褐色②酸化・硬質③完形④1mm以下の砂粒を多く含む
2住-5 84	坏 土師器	4.8 13.2 - 床面+6	丸底の坏である。底部と口縁部との境の境は明瞭であるが、横直上や内側に沈線が認められない。器内が厚い。他の6個の坏と異質。	①にぶい褐色②酸化・良好③完形④1mm以下の砂粒を大量に、3~4mmの石英粒をわずかに含む
2住-6 84	坏 土師器	4.1 12.4 - 床面+10	丸底の坏である。底部と口縁部との境の境は明瞭でV字状の沈線が横直上で1条、内側で1条、口縁部中位でさらに1条認められる。	①褐色②酸化・良好③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を少量含む
2住-7 84	坏 土師器	4.4 12.6 - 床面+17	丸底の坏である。底部と口縁部との境の境は明瞭でV字状の沈線が横直上で1条、さらにその上に1条、内側で1条認められる。底部ヘラ削り。	①にぶい褐色②酸化・硬質③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
2住-8 84	高坏 土師器	17.7 17.6 15.9 床面	胴部の長い高坏である。坏は底部が残く口縁部が大きく外反する。口唇部が直立気味に立ち上がる。胴外面はいいいなヘラナデ、底部横ナデ、胴内部に7段の輪椋模が残る。	①褐色②酸化・良好③胴部④1mm以下の砂粒を少量含む
2住-9 84	小型壺 土師器	10.7 11.4 - 床面+15	丸底の小型壺である。高~胴部ナデ整形、口縁部横ナデ、内面ナデ整形、胎土中に大量の砂粒や小石を含むため、ヘラ削りは一部分以外行なわれていない。器表面の荒いさあめで特異な壺である。	①褐色・表面全面にわたり吸炭②酸化③完形④1~2mmの砂粒を大量に、4~8mmの小石を多く含む
2住-10 84	小型壺 土師器	10.6 14.4 5.6 床面+20	底部は平でナデ整形、底部に近い胴下半部ナデ整形、他の胴部は全面にわたりいいいなヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ整形、吸炭は全く認められない。	①褐色②酸化・良好③完形④1mm以下の砂粒を多く含む
2住-11 84	小型壺 土師器	15.2 16.0 8.0 床面+20	平底を呈し、底部と胴部との境に明瞭な段を持つ。口縁部はなだらかに外反する。胴部ヘラ削り、内面縦方向ナデ整形。	①褐色②酸化・軟質③1/5④1~2mmの砂粒を大量に含む
2住-12 84	甗 土師器	15.5 18.4 8.6 床面+21	平底を呈し、底部と胴部との境に明瞭な段を持つ。胴部~口縁部にかけてなだらかに外傾し、最大径は口縁部にくる。胴部上~下へのヘラ削り、内面ナデ整形、底部に21個の穿孔を持つ。穴は制作段階において外面から内面に向けて穿孔されている。	①褐色・内面灰褐色~灰白色②酸化・良好③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を大量に含む
2住-13 84	甗 土師器	37.5 (19.2) (5.0) 床面+18	長胴の甗である。胴部は細長くゆるやかに内彎する。最大径は胴中央部にくる。口縁部は大きく外反する。底部は胴内が厚い。器表面に大小の小石が目立つ器面の荒い壺である。	①にぶい褐色②酸化・軟質③ほぼ完形④1~2mmの砂粒を大量に、3~7mmの小石を少量含む
2住-14 85	甗 土師器	28.3 (25.4) 11.0 床面+2	大型で底部全体を欠く形の甗である。胴部はわずかに内彎しつつ外傾し、口縁部がなだらかに外反する。胴部外側は底部から口縁部へ向かうヘラ削り、特に下半分の削りがいいいであつた。内面横ナデ、接合破片の一部が特に吸炭により黒色を呈しているため、破片の2次利用が考えられる。	①にぶい褐色・一部分吸炭により黒褐色②酸化・良好③口縁部1/2・胴上半部2/3・下半部完形④1~2mmの砂粒を多く含む
2住-15 147	鉄	長さ4.0 幅1.1 厚さ0.3 重量5.6g	用途不明。側面端が折り曲げられている。錆は縦目状にはいつている。覆土。	

3号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版10 遺物写真図版85・147

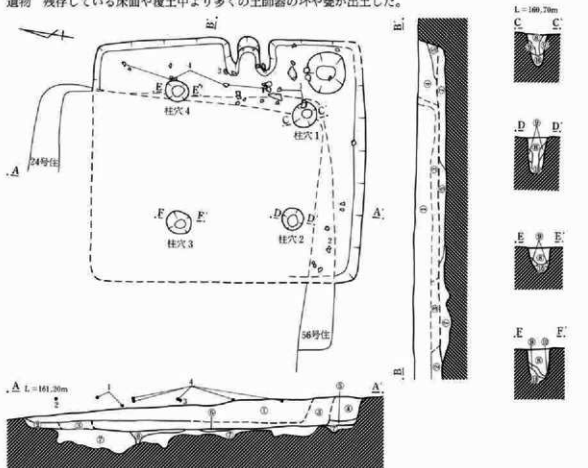
位置 Ⅰ区西側中央部に位置し、2号住居の南約3mでI-10、J-10グリッドに属する。

概要 24・56号住居と重複しており、3軒とも古墳時代に属し、新旧関係は3→56→24号住居の順である。竈を含む東側部分と南側部分のわずかな床面と壁面以外は後代の2軒の住居に削り取られている。調査段階において新旧関係を誤認して3・56号住居を先に掘り進めたため一部に調査の不備が認められた。

構造 床面は、ロームブロックを主とし、黒褐色土が混入した土であったが、軟質である。また重複部分の床面は更に軟質であり良好な状態で検出できなかった。柱穴は床下調査段階において4本確認された。竈右側に円形の貯蔵穴が検出された。

規模 東西3.85m、南北4.25mで、南北方向にやや長い長方形を呈する。壁高は18cmで残りは悪い。貯蔵穴は直径65cm前後のほぼ円形を呈し、深さは床面より約55cmと深い。柱穴1は直径40cm深さ64cm、柱穴2は直径35cm深さ68cm、柱穴3は直径40cm深さ54cm、柱穴4は直径35cm深さ53cmである。

遺物 残存している床面や覆土中より多くの土師器の坏や甕が出土した。



土層表記 (住居)

- ① 24号住居覆土
② 24号住居床下覆土
③ 56号住居覆土

- ④ 暗褐色土 少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
⑤ 暗褐色土 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

- ⑥ 褐色土 ローム粒とロームブロックを主とし少量暗褐色土を含む。
⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
⑧ 暗褐色土 ロームの小さいブロックを少量含む。
⑨ 褐色土 黄褐色土を少量含む。
⑩ 黄褐色土 砂質のロームを主とした層、軟質。

0 2m

第27図 3号住居跡実測図

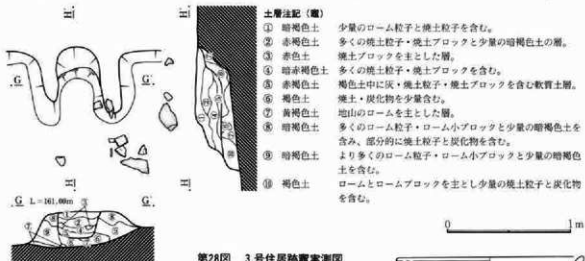
3号住居跡(竈)

位置 住居東壁やや南寄りの壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。

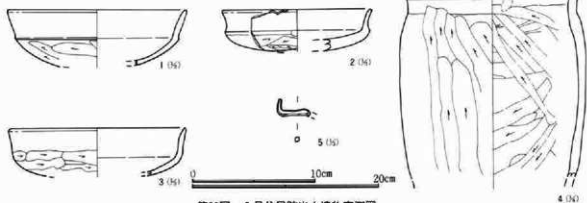
構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られており、右袖の芯材として用いられたと思われる2個の石が検出された。燃焼部床面付近からは、多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向65cm、両袖方向35cmである。

遺物 土師器の甕の胴部1片が出土している。



第28図 3号住居跡竈実測図



第29図 3号住居跡出土遺物実測図

3号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第29図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
3住-1	環 土師器	— (14.4) — 床面+36	丸底の環であり、底部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は長くゆるやかに外傾する。底部外側へタフリ、口縁部横ナデ、内側底部ナデ整形。	①褐色②酸化・良③口縁部1/3・底部1/4 ④砂粒を少量含む
3住-2	環 土師器	(3.3)(12.0) — 床面+44	浅く丸底の環であり、底部の器内が特に厚い。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁部が外反。	①に多い褐色②酸化・良③小破片④密・砂粒ほとんど含まず
3住-3	環 土師器	(3.8)(14.2) — 床面+42	浅く丸底の環であり、口縁部が長い。底部と口縁部との境は、フリと横ナデの違いで区別しており、明瞭な線は認められない。	①に多い褐色②酸化・良③口縁部1/3・底部周辺1/4・中央穴④密
3住-4 85	甕 土師器	— (20.0) — 床面+42	長胴部の小破片であり、全体に器内が厚く雑な作りである。胴部外側は底部から口縁部に向かうへタフリ、へタは一部胴部をフリ込んでいる。砂粒を多く含むため表面が非常に荒れている。口縁部横ナデ。	①に多い褐色②酸化・軟質③口縁部1/5・胴部1/4④1~2mmの砂粒を多く、3~5mmの石英粒を少量含む
3住-5 147	鉄	長さ2.6 幅0.4 厚さ0.3 重量1.2g	用途不明。断面はほぼ正方形を呈する。覆土。	

4号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版10

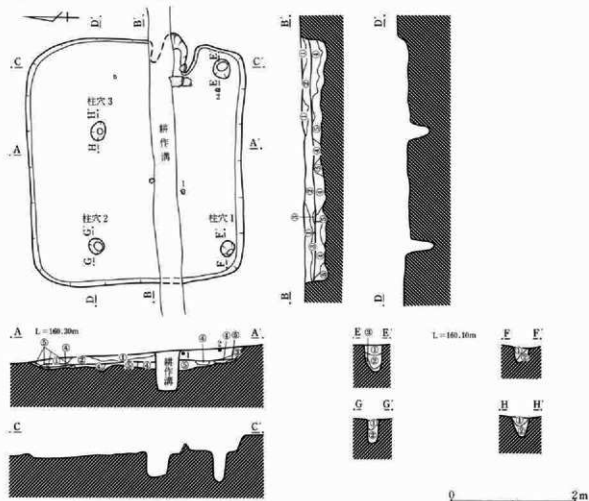
位置 I区西北部に位置し、1号住居の西約6mでH-11・12グリットに属する。

概要 住居を東西に横切る後世の耕作溝と表土の流出により遺構の残存状態は悪い。特に住居北側の壁面付近の残存状態が悪かった。竈は耕作溝により北半分が削り取られている。

構造 床面は、ロームブロックを主とし、黒褐色土が混入した土で堅く踏み固められていた。柱穴は3本で残りの1本は確認できなかった。竈右側に円形の貯蔵穴が検出された。

規模 東西3.9m、南北3.5mで、東西方向にやや長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良い東壁で15cmで、残りは悪い。貯蔵穴は小規模で歪んでいるが、直径30cm前後のほぼ円形を呈し、深さは床面より約50cmである。柱穴1は直径25cm深さ30cm、柱穴2は直径25cm深さ50cm、柱穴3は直径25cm深さ44cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の环や甕、須恵器の环や甕の破片が出土したが、固化できる遺物は少ない。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子和多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子和白色軽石粒を含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子和少量のロームブロックを含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 堆山のロームを主とした層。

土層注記 (貯蔵穴・柱穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子和含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子和ローム小ブロックを含む。
- ③ 黄褐色土 ロームを主とした層。

第30図 4号住居跡実測図

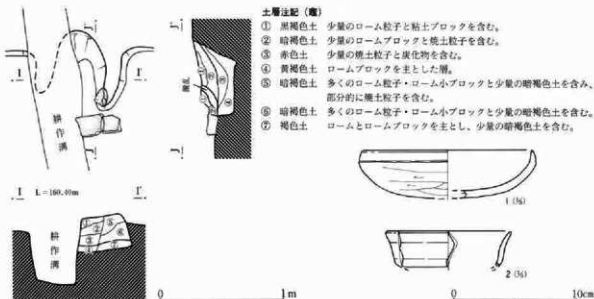
4号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央より少し南寄りの壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られており、右袖の芯材として用いられたと思われる1個の石と焚口付近から天井石と思われる大きな石が検出された。燃焼部床面付近からは、多くの焼土粒子と炭化物が検出された。

規模 煙道方向65cm、両袖方向推定40cmである。

遺物 土師器の頸部部の小破片が出土している。



第31図 4号住居跡竈及び出土遺物実測図

4号住居跡 出土遺物観察表(押図番号第31図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
4住-1	土師器 環	(3.8)(14.0) 床間+7	丸底の環であり、縁は低い。口縁部は非常に短く直立する。底部外側へ削り、内側ナデ整形。	①にぶい褐色②酸化・硬質③1/4残存・少量の砂粒を含む
4住-2	土師器 環	(10.0) 床間+14	丸底の環と思われる。底部と口縁部との境の縁は低く明瞭でない。	①褐色②酸化・軟質③小破片④彫状の胎土

5号住居跡(古墳時代) 遺構写真図版10 遺物写真図版85・86

位置 I区西側に位置し、2号住居の西南約1m、4号住居南東約2mでH-11、I-11グリットに属する。

概要 6号住居と重複しており、2軒とも古墳時代に属している。新旧関係は5号住居が新しい。住居内を東西に走る2本の耕作溝と竈南側に掘られた大きな土坑により多くの部分が壊されている。

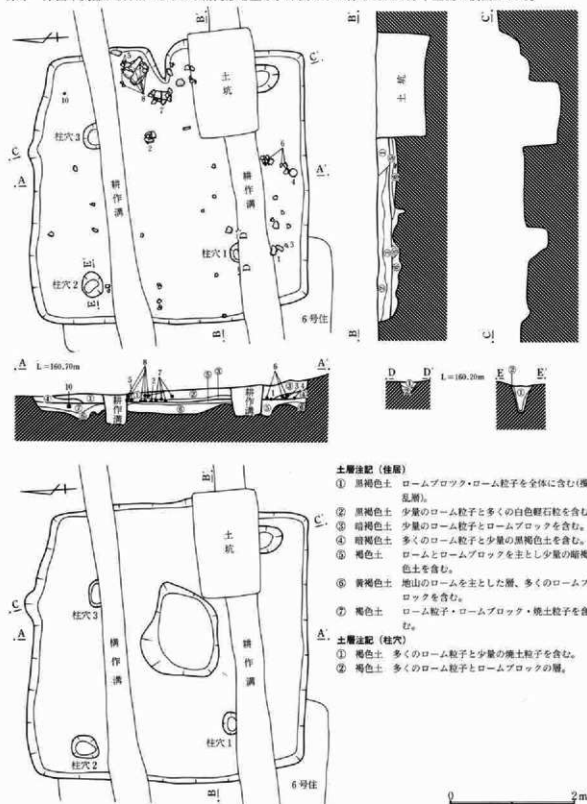
構造 重複していない部分の床面は、ロームブロックを主とし、黒褐色土が混入した土で固めてあった。重複部分の床面は軟質であった。柱穴は3本確認されたが1本は少しずれていた。竈右側に土坑により北半分が削り取られた貯蔵穴が検出された。

規模 東西4.20m、南北4.45mで、南北方向にやや長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良いところで30cmで残りは良好である。貯蔵穴は約半分破壊されているため明確でないが、直径60cm前後のほぼ円形を呈し、深さは床面より約50cmと深い。柱穴1は直径40cm深さ65cm、柱穴2は直径40cm深さ60cm、柱穴

3は直径30cm深さ22cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の坏や甗が多く出土し、その多くを図化できた。

床下 床面中央部に1.0m×1.5mの楕円形を呈し、床面からの深さ18cmの床下土坑が検出された。

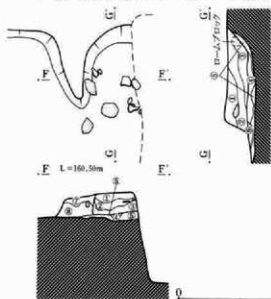


第32図 5号住居跡及び床下実測図

5号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。右側半分は削り取られて残っていない。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られており、竈内より大小の石が5個出土したが用途は不明である。燃焼部床面付近からは、少量の焼土粒子が検出された。



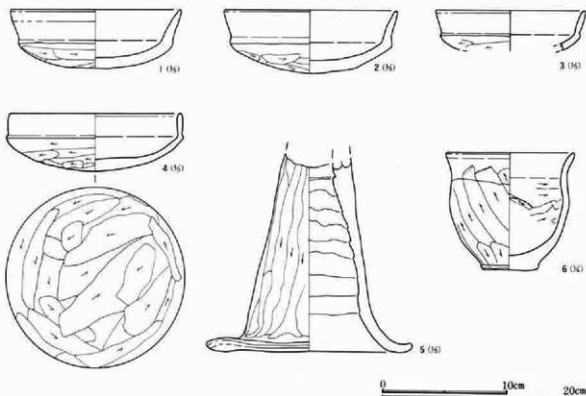
第33図 5号住居跡竈実測図

規模 煙道方向65cm、両袖方向推定55cmである。

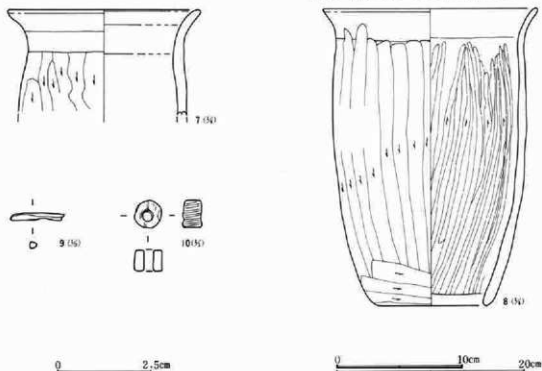
遺物 土師器の環と甕の胴部、須恵器の環の小さな破片が出土している。

土層注記(竈)

- ① 褐色土 少量の軽石粒子・焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の炭化物を含む。
- ③ 暗褐色土 褐色土中に炭・灰・焼土粒子を含む軟質土層。
- ④ 褐色土 焼土粒子を全体に、炭化物を少量含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑥ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし少量の焼土粒子を含む。
- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。
- ⑧ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。



第34図 5号住居跡出土遺物実測図(1)



第35図 5号住居跡出土遺物実測図(2)

5号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第34・35図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
5住-1 85	坏 土師器	4.7 (13.7) - 床面+4	器内の厚い丸底の坏である。縁は明瞭。口縁部は厚くゆるやかに外傾し端部で薄くなる。口縁部横ナダ、外側底部へラ削り、内側底部ナダ、一部に吸成あり。	①褐色②酸化・良好③2/3④赤・砂粒ほとんど含まず。網雲母を含む。
5住-2 85	坏 土師器	5.0 13.9 - 床面+7	器内の厚い丸底の坏であり、縁は明瞭。1の坏に近い。底部が磨耗しへラ削り痕明瞭でない。口縁部横ナダ。	①褐色②酸化・良好③ほぼ完形④赤・網雲母を含む。
5住-3	坏 土師器	- (12.0) - 床面+10	丸底の坏であり、縁は明瞭。底部が浅く口縁部はゆるやかに外傾する。	①ぶい褐色・断面灰褐色②酸化③小破片④赤⑤小破片であり吸成品か？
5住-4 85	坏 土師器	4.1 14.0 - 床面+4	丸底の坏である。めずらしい坏量でなく坏身形態である。受部を鋭角な工具により削り出している。口縁部は内傾している。	①表面褐色・断面明褐色②酸化・硬質③口縁部1/2・他はほぼ完形④密
5住-5 85	高坏 土師器	15.7 (16.4) - 床面+5	丸底の脚部であり坏部はそっくりはずれている。胴部外側は坏部から胴底部に向かう細かなへラナダ、胴内側は輪痕を多く残している。	①褐色②酸化・硬質③脚底部1/2・他の脚部はほぼ残存④1~2mmの砂粒を多く含む。
5住-6 85	小型罐 土師器	12.4 (13.6) 5.8 床面+2	作りが美しい小型の罐である。底部と胴部の境に段を持つ。外側胴部へラ削り、口縁部横ナダ、胴部内側ナダ、胴部外側は削りにより石が動き器面が荒い。	①ぶい褐色②酸化・軟質③1/2④1~2mmの砂粒を多く、3~4mmの砂粒をわずかに含む。
5住-7 86	罐 土師器	- 20.6 - 床面+1	長胴型の胴上半部である。器内が厚く外側胴部はへラ削りにより非常に器面が荒い。口縁部横ナダ、内側胴部ナダ整形。	①褐色②酸化・軟質③胴上部へ口縁部完形④1~2mmの砂粒を多量に、3~4mmの石英粒を少量含む⑤麻⑥吸成炭が2ヶ所で認められる。
5住-8 85	瓶 土師器	30.5 22.8 11.4 床面+6	底面全部がつかない形の瓶である。胴部はやや内湾しつつ外傾し口縁部はゆるやかに外反する。胴部外側へラ削りであるが7の薬ほど荒れてはいない。内面は丸棒状の工具を用いたていねいな磨きにより光沢を持つ。底部は最終段階でへラ削りにより調整。	①褐色②酸化・軟質③ほぼ完形④1~2mmの砂粒を大量に含む、3~4mmの石英粒を少量含む⑤麻⑥吸成炭が2ヶ所で認められる。
5住-9	鉄鉢	長さ4.3 幅0.6 厚さ0.5 重量2.3g	鉄鉢の基部分と思われる。断面正方形で中空となっている。覆土。	
5住-10 86	白玉	幅0.7 厚さ0.6 孔径0.25 重量0.6g	上下面是割った状態で、ていねいな整形はしていない。側面は荒砥削りにより仕上げている。	①緑褐色③完形④滑石片⑤床面-2

6号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版10 遺物写真図版86

位置 I区西北部に位置し、2号住居の西南約4m、4号住居南約1mで西隣の7号住居に近接している。H-11、I-11グリットに属する。

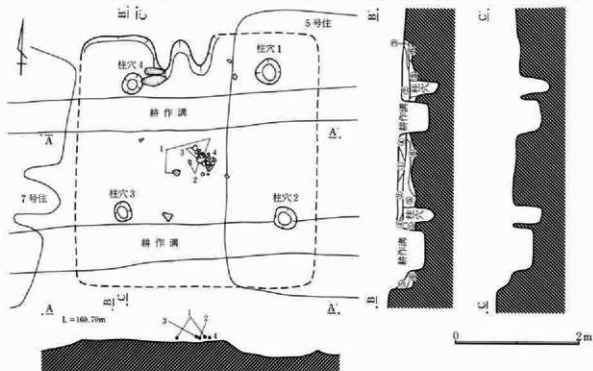
概要 5号住居と重複している。2軒とも古墳時代に属しているが、新旧関係は5号住居が新しい。住居内を東西に走る2本の耕作溝と土坑により部分的に壊されている。

構造 重複していない部分の床面は、ロームブロックを主とし、黒褐色土が混入した土で固めてあった。重複部分の床面は5号住居により削り取られ、柱穴が4本確認された。

規模 東西推定4.0m、南北推定4.1mである。壁高は最も残りの良いところで15cmで、残りは悪い。柱穴1は直径40cm深さ56cm、柱穴2は直径30cm深さ52cm、柱穴3は直径30cm深さ37cm、柱穴4は直径30cm深さ46cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の坏や甕が出土した。

床下 床面中央部に、床下ロームの掘り残しによる1.7m×3.2mで高さ15cmの楕円形の高まりが認められた。



土層法記(住層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子とロームブロックを多く含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子とロームブロックを含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。

- ④ 褐色土 黄褐色土のロームブロックを多く含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 増山のロームを主とした層。

第36図 6号住居跡実測図

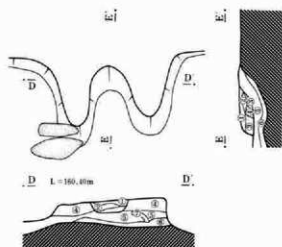
6号住居跡(竈)

位置 住居北壁中央の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が北壁を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られている。覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向55cmである。

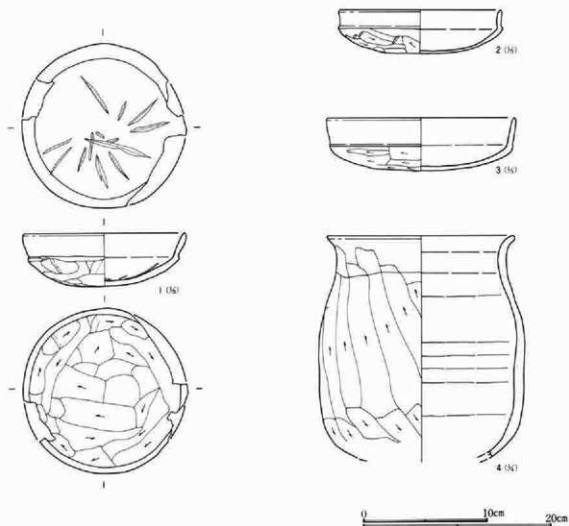
遺物 出土は認められなかった。



土層注記 (層)

- ① 赤色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第37図 6号住居跡断面実測図



第38図 6号住居跡出土遺物実測図

6号住居跡 出土遺物観察表(拝図番号第38図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②成文③残存④胎土⑤備考
6住-1 86	坏 土師器	4.2 (13.0) - 床面+6	丸底の坏であり、底部との境に明瞭な線を有する。口縁部はなだらかに外傾する。底部外側へ削り、内側底部は全面ナゲ整形後へラにより放射状に線刻されている。	①褐色②成文③残存④胎土⑤備考 ①に②の砂粒を少量含む
6住-2 86	坏 土師器	3.5 13.0 - 床面+5	丸底の坏であり、底部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は長く直立気味に立ち上がる。底部外側へ削り、口縁部へ内面底部横ナゲ整形。	①褐色②成文・硬質③1/2④砂粒少量・赤褐色粒を多く含む
6住-3 86	坏 土師器	4.3 (15.0) - 床面+5	丸底の坏であり、底部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は長く直立気味に立ち上がる。底部外側へ削り、口縁部横ナゲ、内面底部ナゲ。	①褐色②成文・硬質③口縁部1/10・他1/2④砂粒を少量含む
6住-4 86	壺 土師器	- 20.0 - 床面+6	浅い壺である。外側胴部はへら削りにより非常に荒く仕上げている。口縁部横ナゲ、胴部内面ナゲ整形。	①に②の褐色③成文・硬質④1/3⑤3~4mmの大きな砂粒を含む

7号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版11 遺物写真図版86・147

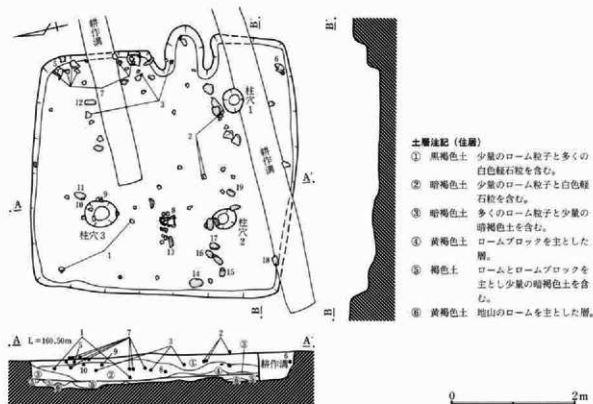
位置 I区西北部に位置し、4号住居の南約1mでH-12、I-12グリットに属する。

概要 6号住居と近接しており使用段階において、おそらく竪は重複していたものと思われる。住居内を東西に走る2本の耕作溝により一部分が壊されている。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主体とし、黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は3本確認され、残りの1本は耕作溝により壊されたものと思われる。貯蔵穴は確認できなかった。

規模 東西4.1m、南北4.2mで、ほぼ正方形に近い。壁高は残りの良いところで30cmである。柱穴1は直径35cm深さ46cm、柱穴2は直径35cm深さ50cm、柱穴3は直径50cm深さ66cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の坏や壺と鉄鏝や10個のこも石が出土した。



第39図 7号住居跡実測図

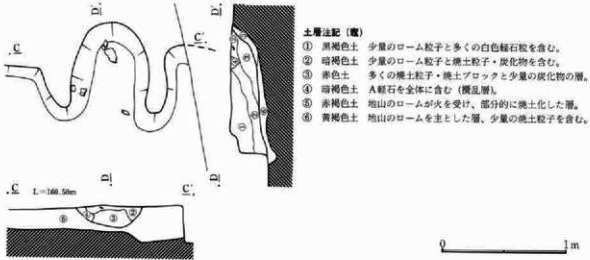
7号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。

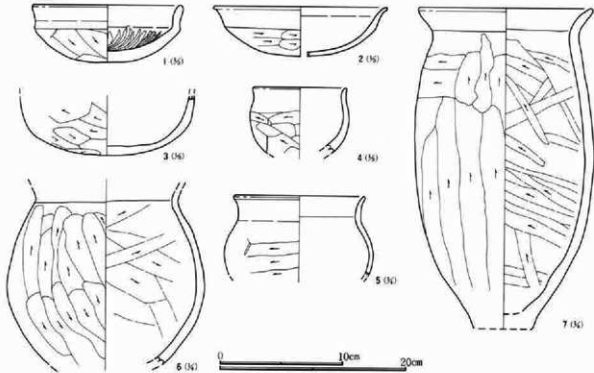
構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られている。燃焼部床面付近から多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向75cm、両袖方向推定62cmである。

遺物 土師器甕の口縁部と胴部の小さな破片が出土している。

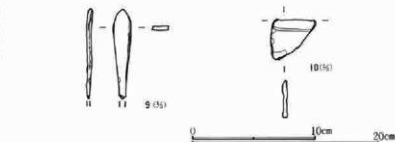
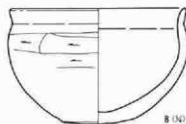


第40図 7号住居跡竈実測図



第41図 7号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第42図 7号住居跡出土遺物実測図(2)

7号住居跡 出土遺物観察表 (採回番号第41・42回)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
7住-1	環 土師器	4.5 (12.0) - 床面+4	器内の厚い丸底の環である。底部と口縁部との境に明瞭な線は認められない。内側底部は全面にわたり細かな放射状隈文が描かれている。	①よい褐色②酸化・軟質③1/4④1~2mmの砂粒を多く含む
7住-2	環 土師器	3.9 (14.0) - 床面+20	器内の薄い丸底の環である。口縁部は大きく外反する。黒煙は全く認められない。	①褐色②酸化・良好③1/4④1~2mmの砂粒を多く含む
7住-3	環? 土師器	- - - 床面+12	丸底の環と思われるが、口縁部が確認されないため明確でない。外面へつ削り、内面ナデ。	①よい褐色②酸化・良好③1/2④1~2mmの砂粒を多く含む
7住-4	小型甕 土師器	- (10.0) - 覆土	丸底と思われる小さな甕である。胴部~底部表面はへら削りにより突い。全体に炭痕している。	①褐色②酸化やや硬質③1/3④1~2mmの砂粒を多く含む
7住-5 86	小型甕 土師器	- (14.0) - 床面+29	丸い胴部から口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。胴部横方向へつ削り、黒煙なし。	①褐色②酸化③胴部~口縁部1/4④砂粒を少量含む。胎土は粒状を呈する
7住-6 86	甕 土師器	- - - 床面+20	丸胴の甕の破片である。胴部外側はへら削りにより突い。5mm以上の石も含む。口縁部横ナデ、胴部内側ナデ整形。胴部表面に多くの黒煙あり。	①よい褐色②酸化・軟質③口縁部小破片・胴部1/3・底部欠損④1~2mmの砂粒多く、3~4mmの砂粒少量含む
7住-7 86	甕 土師器	34.0 18.5 - 床面+16	長胴の甕である。口縁部はくの字状に外反する。胴部外側は底部から口縁部に向かうへつ削り、胴上部は横方向へつ削り、口縁部横ナデ、胴部内側ナデ整形。器表面に砂粒が多くへつ削りて荒れている。	①よい褐色②酸化・軟質③口縁部1/10・胴上部1/3・下部2/3・底部欠損④1~3mmの砂粒を大量に、4~6mmの石英粒を少量含む
7住-8 86	小型甕 土師器	12.2 18.8 - 床面+6	平底を呈する小型の甕である。底部と胴部の境に段を持つ。胴部へつ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ整形。7の壁同様外側胴部表面に砂粒が多く突い。	①褐色②酸化・軟質③④3/4⑤1~3mmの砂粒を大量に、4~6mmの石英粒を少量含む
7住-9 147	鉄	長さ7.0 幅1.4 厚さ0.3 重量5.9g 床面+22	鉄鏝とも思われるが、端部がすべて厚く刃部が見当たらないため用途不明。鏝は柱目状にはつている。	
7住-10	鉄	長さ3.5 幅2.9 厚さ0.4 重量9.1g 床面+25	用途不明。上部が折り返しにより厚くなっている。刃部等の箇所は認められない。	
7住-11 86	石	長辺15.1 短辺8.5 厚さ4.5 763g 床面+4	幅の広い石である。長辺の両側面中央部の表面が一部剥離している。	①淡青色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面+5
7住-12 86	石	長辺16.4 短辺8.2 厚さ3.4 830g 床面+4	均正のとれた石であり、両側面中央がわずかに凹状を呈する。こも石の可能性あり。	①淡緑色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面
7住-13 86	石	長辺16.0 短辺6.1 厚さ4.5 725g 床面+4	中央部が多く磨耗しており、こも石の可能性が大きい。	①淡緑色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面+4
7住-14 86	石	長辺16.1 短辺9.4 厚さ4.3 900g 床面+4	幅が広く、石質も他の石と異なる。長辺の端部に多くの使用痕が認められる。こも石でない可能性大。	①よい褐色③完形④点状網罟母石黒片岩⑤床面+4
7住-15 86	石	長辺15.0 短辺7.8 厚さ3.5 641g 床面+4	一部欠損しているが、こも石の可能性あり。	①淡緑色③一部欠損④網罟母石黒片岩⑤床面
7住-16 86	石	長辺12.3 短辺7.9 厚さ2.0 364g 床面+4	扁平な石であり他の石と異なる。長辺の両側面が多く磨耗している。	①淡緑色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面
7住-17 86	石	長辺16.6 短辺9.1 厚さ3.5 710g 床面+4	幅の広い石であり、一部欠損している。	①淡青色③一部欠損④網罟母石黒片岩⑤床面
7住-18 86	石	長辺17.0 短辺8.0 厚さ3.8 900g 床面+8	全体が磨耗している。重量のある石である。一部分を砥石として使用している。	①淡緑色③完形④緑泥片岩⑤床面+8
7住-19 86	石	長辺14.1 短辺8.8 厚さ3.4 659g 床面+12	幅の広い石である。長辺の端部が一部剥離している。	①淡青色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面+12
7住-20 86	石	長辺13.7 短辺7.7 厚さ4.6 477g 床面+9	他の石と石質が異なり軽い。磨利度は認められない。	①よい褐色③完形④砂粒⑤床面+9

8号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版87・147

位置 I区西側中央部に位置し、5・6号住居の南約2mでI-11、J-11グリッドに属する。

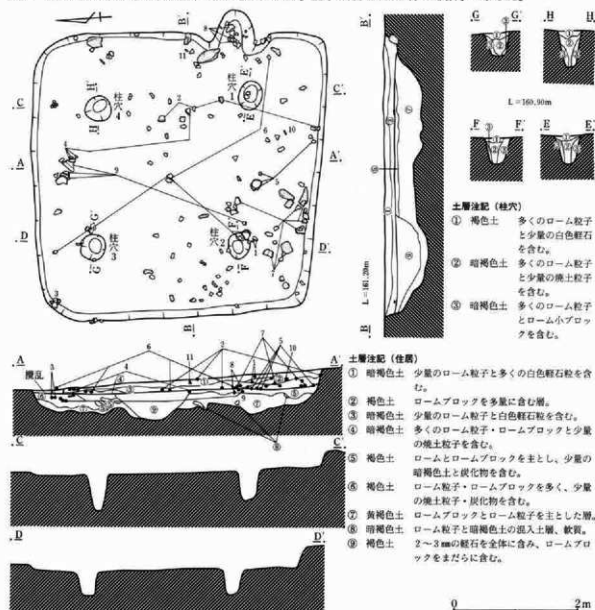
概要 全体に残存状態は悪く、特に住居北側の壁面付近の残存状態が悪かった。

構造 床面は、ロームブロックを主体とし、黒褐色土が混入した土で造られ、堅く踏み固められていた。柱穴は4本検出できた。貯蔵穴は、床下調査でも検出できなかった。

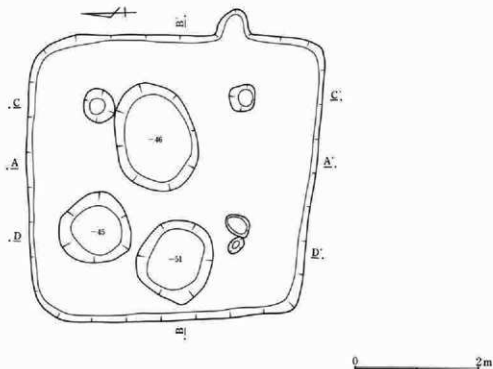
規模 東西4.55m、南北4.70mで、東西方向にやや長い長方形を呈する。壁高は残りの良い南壁で34cmで、残りは良好である。柱穴1は直径45cm深さ54cm、柱穴2は直径40cm深さ54cm、柱穴3は直径40cm深さ57cm、柱穴4は直径40cm深さ73cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の環や甕が出土した。暗文を持つ環・子持勾玉・火打ち金等の出土が目目される。

床下 ほぼ円形を呈する3個の床下土坑が検出された。図中に床面からの深さを数字で示した。



第43図 8号住居跡実測図



第44図 8号住居跡床下実測図

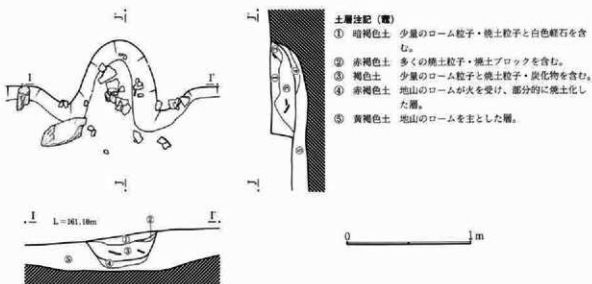
8号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央より少し南寄りの壁面から床面にかけて造られており、焚口部分と燃焼部の約半分が床面上に位置し、燃焼部の一部は壁面を掘り込んでいる。

構造 ロームを主体とした暗褐色土で造られており、左袖部分に大きな石が2個出土した。燃焼部床面付近からは、多くの焼土粒子と焼土ブロックと炭化物が検出された。

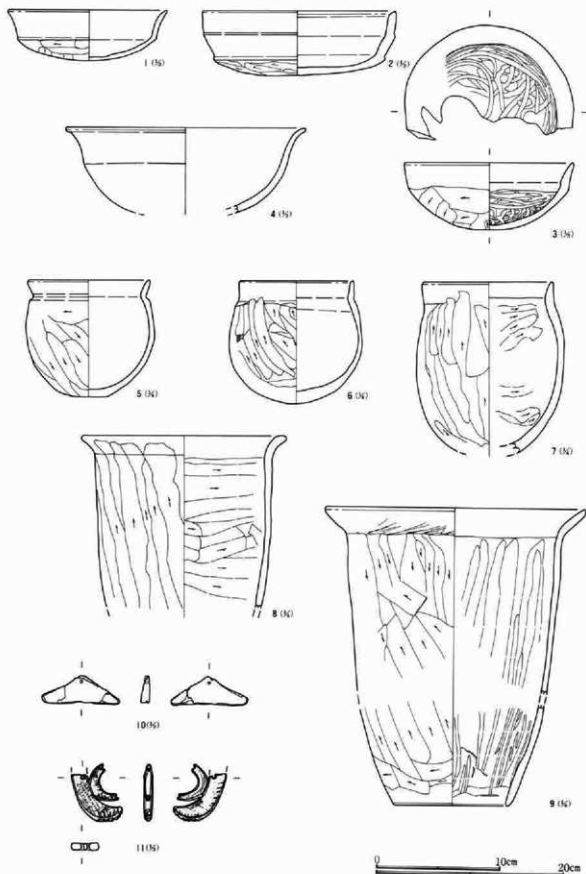
規模 煙道方向75cm、両袖方向55cmである。

遺物 土師器の甕の口縁部と胴部の小破片が多く出土している。



第45図 8号住居跡竈実測図

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第46図 8号住居跡出土遺物実測図

8号住居跡 出土遺物観察表(埴田番第46図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④治土⑤備考
8住-1 87	環 土師器	4.0 12.8 - 床面	丸底の環であり、底部との境に明確な線をもち、壁の内側に弱い化粧が一周する。底部は強く口縁部はなだらかに外反する。底部ヘラ削り。	①褐色②酸化・良好③2/3④1~2mmの砂粒を含む
8住-2 87	環 土師器	5.1 15.5 - 床面+2	丸底の環であり、底部との境に明確な線をもち、この線と同じような線を口縁部外側の中央部に持つ。口縁部内側中央には、外側の線とほぼ同じ位置に一条の凹帯がある。口唇部中央に凹状の掘り込みあり。	①にぶい褐色②酸化・良好③4/5④1~2mmの砂粒を多く含む
8住-3 87	環 土師器	5.3 13.4 - 床面+8	口徑や器高の大きい環である。底部と口縁部との境に線はなく、ヘラ削りと横ナデの違いで区分。口縁部横ナデ、内側底部のほぼ全面に暗文が描かれている。この暗文は、やや螺旋状を呈する。	①黄褐色②酸化・断面にぶい褐色②酸化・良好③2/3④1~3mmの砂粒を多く含む
8住-4 87	環 土師器	- (19.2) - 床面	口徑や器高の大きい環である。底部と口縁部との境の線は明確でない。口縁部~底部内側横ナデ。口縁部は大きく外反する。	①黄褐色②酸化・良好③1/3④1~3mmの砂粒を含む
8住-5 87	小型壺 土師器	12.4 (13.0) 5.0 床面	底部はヘラ削りによりほぼ平を呈する。胴部上平は左上から右下に向けてのヘラ削り。胴部と口縁部との境は明確に区画。口縁部は短く外傾する。	①にぶい褐色②酸化・硬質③2/3④1~3mmの砂粒を多く含む
8住-6 87	小型壺 土師器	13.0 12.2 - 床面	丸底の小型壺である。底部から胴部まで円形を呈し、口縁部がほぼ直立する。胴部と口縁部との境に明確な線をもち、底部~胴部外側は全面ヘラ削り、口唇部~胴底部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化・やや硬質③ほぼ完形④1~3mmの砂粒と赤褐色粒を多く含む
8住-7 87	小型壺 土師器	- 14.0 - 床面+2	やや長胴の小型壺である。底部周辺から口縁部に向かうヘラ削り、口縁横ナデ、胴部と口縁部との境に明確な線は特にはない。	①にぶい褐色②酸化・良好③底部欠、他は4/5④1~5mmの砂粒を多く含む
8住-8 87	壺 土師器	- 23.0 - カマド内床面	長胴の壺である。胴部は底部から口縁部に向かうヘラ削り。口縁はくの字状を呈し外反する。口縁部先端は大部分欠損している。胴部内面横方向刷毛彫形。	①にぶい褐色②酸化・良好③胴~口縁部1/4④1~3mmの砂粒を多く含む
8住-9 87	瓶 土師器	- (28.0) (12.2) 床面	大型の瓶である。胴部外側は底部から口縁部に向かうヘラ削り。ヘラが口縁部に当たり痕跡を残す。口縁部はくの字状に外反する。口唇部中央に凹帯があり、胴部内側はいいいなナデ整形。	①にぶい褐色②酸化・硬質③口縁部1/3・胴~底部4/5④1~3mmの砂粒と赤褐色粒を多く含む
8住-10 147	火打金	長さ6.1 幅2.1 厚さ0.7 重量12.1g 床面+14	三角形を呈する火打金である。頂部付近に穿孔された小穴が認められるが錆化により大部分が埋没している。打撃面である底部が厚く、頂部にゆくにつれて薄くなる。打撃面は、使用のため中央部付近から少し凹状を呈している。錆化は根元部にはつており薄い板状に離反する。	
8住-11 87	子持 勾玉	長辺4.5 短辺2.0 厚さ0.6 重量11g 床面+15	薄い板状を呈するが、子持勾玉と思われる。上部に穿孔された小穴より上部欠損。全体を刀子等の刃物によりいいいめに削り込み、その後磨き上げており光沢を持つ。	①濃青色③一部欠損④礫石片岩

9号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版11 遺物写真図版87

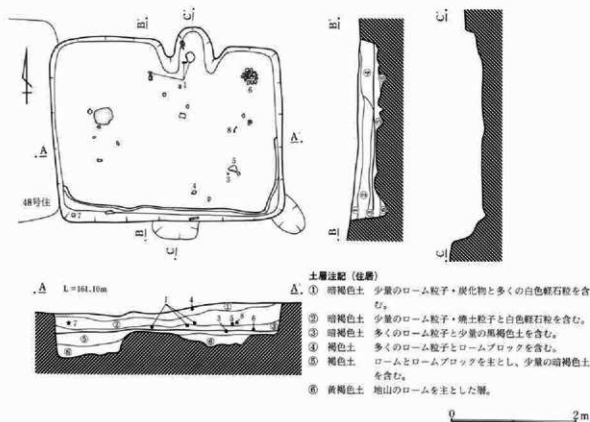
位置 I区中央部西側に位置し、8号住居の西壁に近接している。I-11・12グリットに属する。

概要 古墳時代の48号住居と重複し、48号住居の東壁の一部を掘り込んで造られている。

構造 床面は、ロームブロックを主とし黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴及び貯蔵穴は検出できなかった。

規模 東西3.70m、南北2.95mで、東西方向に長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良いところで43cmで、残りは良好である。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の環・壺・紡錘車が出土し、その多くを図化することができた。とくに螺旋状の暗文を持つ環が注目される。



第47図 9号住居跡実測図

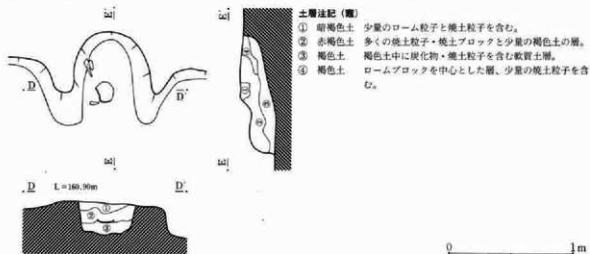
9号住居跡 (竈)

位置 住居北壁中央より少し東寄りの壁面から床面にかけて造られており、焚口部分と燃焼部の約半分が床面上に造られ、燃焼部の一部は壁面を掘り込んでいる。

構造 ロームを主体とした暗褐色土で構築されており、燃焼部床面付近からは、少量の焼土粒子が検出された。

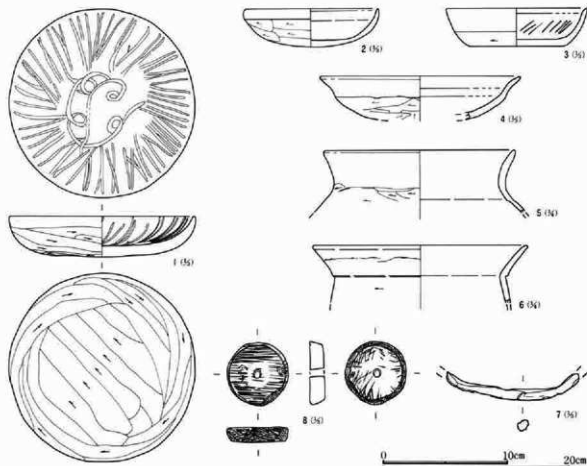
規模 標道方向62cm、両袖方向推定50cmである。

遺物 暗文をもつ完形の土師器環と甕の口縁部や胴部の破片が出土している。



第48図 9号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第49図 9号住居跡出土遺物実測図

9号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第49図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
9住-1 87	環 土師器	3.2 14.8 - 床面	浅く皿状を呈する環である。器内が全体に厚く口縁部は短い。底部から体部手持ヘリ削り、口縁部へ内面底部でいねいな横ナデ、内側底部周辺へ口縁部放射状喰文、底部内側縦線状喰文。縦線状喰文の一部は不明であるが、2重の可能性あり。	①に濃い褐色②焼成③残存④胎土⑤備考 褐色粒を多く含む
9住-2 87	環 土師器	3.0 10.6 - 覆土	丸底の小さな環である。口縁部は短く内傾する。底部へ体部ヘリ削り、口縁部へ内側底部横ナデ、口縁部内側に放射状喰文。口縁部下半へ底部外側ヘリ削り。	①褐色②焼成・良好③残存④1~2mmの砂粒を含む
9住-3	環 土師器	3.0 (11.4) (8.0) 床面	平底の環である。口縁部は少し内彎しながら開き気味に立ち上がる。口唇部は内側が薄くなる。口縁部内側に放射状喰文。口縁部下半へ底部外側ヘリ削り。	①褐色②焼成・良好③小破片(1/6)④1~2mmの砂粒を少量含む
9住-4	皿形環 土師器	- (16.0) - 床面+30	口縁部が大きく外反する皿形環の小破片である。底部へヘリ削り、口縁部へ内側底部横ナデ。	①褐色②焼成・良好③小破片④1~2mmの砂粒を少量含む
9住-5	鏝 土師器	- (20.6) - 床面+10	長胴型の口縁部小破片である。胴部へ頸部までヘリ削り、口縁部横ナデ、内側胴部ナデ整形。	①に濃い赤褐色②焼成・良好③小破片(1/5)④1mm以下の砂粒を含む
9住-6	鏝 土師器	- (23.0) - 床面+2	胴部器内の薄い長胴型の小破片である。胴部ヘリ削り、口縁部横ナデ、口縁部に輪痕が残る。	①に濃い赤褐色②焼成③口縁部のみ1/3・胴部小破片④1~2mmの砂粒を含む
9住-7	鉄	長さ10.5 幅0.8 厚さ0.8 重量14.7g	用途不明。錆が疋目状にはいる。床面+10cmの位置に出土。	
9住-8 87	紡錘車	長さ4.9 幅4.8 厚さ1.1 孔径0.6 重量50g	扁平な紡錘車である。上面の周縁部に円形の沈線が一周している。製作段階における削り込みの目印と思われる。表面はすべて瓦版削りにより調整されており、その後磨かれている。	①緑黑色②完形③蛇紋石④床面+11

10号住居跡（平安時代） 遺構写真図版12 遺物写真図版88・146

位置 I区南西部に位置し、9号住居の南約19mでL-12グリットに属する。

概要 14・59号住居と重複しており、14・59号住居は奈良時代に属し、新旧関係は59→14→10号住居の順である。住居の大部分が前代の2軒の覆土中に造られているため、住居範囲の確認が困難であり、北壁は確認できなかった。

構造 床面は14号住居床面上の覆土中に、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られていたため、軟質であり、東半分の床面の検出が充分でなかった。柱穴及び貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西3.28m、南北2.90mで、東西方向にやや長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良いところで28cmで残りは悪い。

遺物 床面や覆土中より、多くの須恵器の坏や埴・羽釜・土師器の坏及び墨書土器の小破片等が出土した。

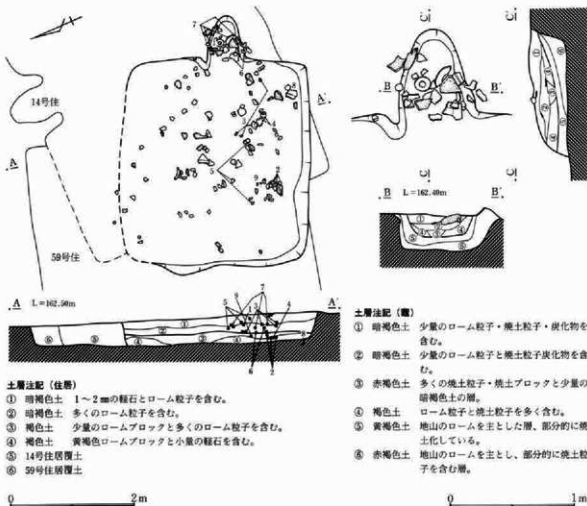
10号住居跡（竈）

位置 住居東壁中央部の壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の大部分は壁面から外側に位置する。

構造 石を多く用いているが、残存状態は悪い。燃焼部床面付近からは多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向85cm、両袖方向60cmである。

遺物 多くの羽釜の破片と須恵器埴の完形品が出土している。



土層注記（住居）

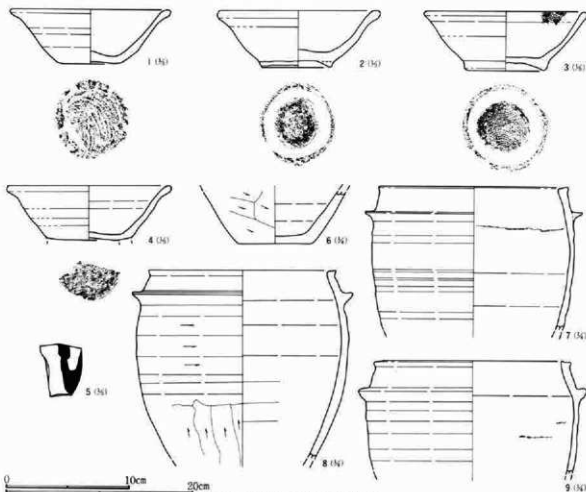
- ① 暗褐色土 1～2mmの軽石とローム粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ③ 褐色土 少量のロームブロックと多くのローム粒子を含む。
- ④ 褐色土 黄褐色ロームブロックと少量の軽石を含む。
- ⑤ 14号住居覆土
- ⑥ 59号住居覆土

土層注記（竈）

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子炭化物を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の暗褐色土の層。
- ④ 褐色土 ローム粒子と焼土粒子を多く含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層、部分的に焼土化している。
- ⑥ 赤褐色土 地山のロームを主とし、部分的に焼土粒子を含む層。

第50図 10号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第51図 10号住居跡出土遺物実測図

10号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第51図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底面整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
10住-1 88	坏 須恵器	4.3 12.8 5.4 床面	内側底部中央が厚く盛り上がっている。体部が直線的に外側に開き、器内の厚い口縁部が外反する。底部周辺に墨状の圧痕あり。ロクロ右。	①灰色②還元③4/5・口縁部一部欠損④赤褐色粒を多く含む⑤裏地にハイ状を呈し、多くの気泡を含む
10住-2 88	埴 須恵器	4.5 13.1 5.85 床面+10	器内の厚い埴である。口縁部が大きく外反する。高台は低く作りが難である。高台部内側に未切痕の痕跡がわずかに残る。ロクロ右。	①灰白色②還元③完形④砂粒を多く含む
10住-3 88	埴 須恵器	4.7 13.2 6.8 床面+2	平な底部から体部が外側に開き、中段で少し内側に立ち上がり口縁部が外反。口縁部内側4ヶ所に油煙が付着。高台に6ヶ所切り込みあり。ロクロ右。	①にぶい褐色②酸化③ほぼ完形④3mm前後の砂粒を含む
10住-4	埴 須恵器	— (13.2) (7.0) 床面-5	高台が全部はずれている。体部内外面に明瞭なロクロ目、底部が薄く外面に右回転未切痕。口縁部は厚く外反している。	①にぶい褐色②酸化③1/3④多くの砂粒を含む
10住-5 146	坏? 須恵器	— — — 床面-3	坏の小破片と思われる。外面に墨痕あり。判読不明。	①にぶい褐色②酸化③小破片④密⑤墨書
10住-6	羽釜	— — 8.0 床面+4	羽釜の底部小破片である。胴部外面左上から右下方へテガ削り。器内が厚い。	①にぶい黄褐色②酸化③小破片④3mm前後の砂粒を多く含む
10住-7 88	羽釜	— (20.0) — 床面	羽釜口縁部である。踵は細く口縁部は厚い。口唇部はやや内傾し、中央部が少し凹状を呈する。	①にぶい黄褐色②酸化③胴へ口縁部1/3④1~3mmの砂粒を多く含む
10住-8 88	羽釜	— (20.0) — カマド+7	丸足の強い胴部で、断面三角形のしっぺりした踵が付く。口縁部は短く内彎する。口唇部は厚くほぼ水平である。胴下半の削りは底部から胴中央部へ。	①にぶい褐色②酸化③胴へ口縁部1/3④1~3mmの砂粒を多く含む
10住-9 88	羽釜	— (21.0) — 床面-17	胴部の器内が薄い。踵は厚くていねいに貼り付けている。口縁部が厚く口唇部中央が凹状を呈する。	①灰白色②還元③胴上部へ口縁部1/4④1~3mmの砂粒を多く含む

11号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版12 遺物写真図版88

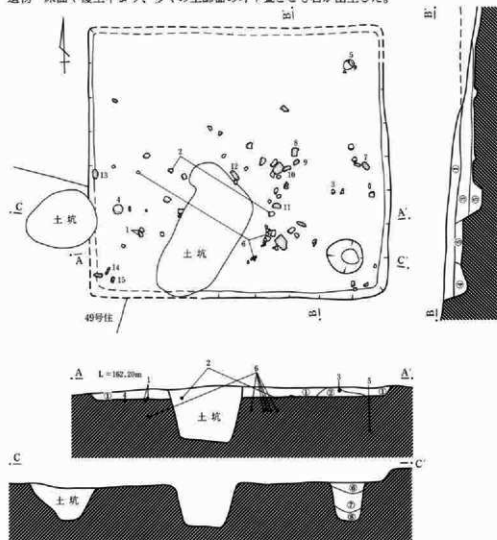
位置 I区南西部に位置し、10号住居の北東約6mでK-10・11グリットに属する。

概要 49号住居と重複しており、同じ古墳時代に属するが新旧関係は11号住居が新しい。住居は後世の擾乱やイモ穴と思われる土坑等により擾乱を受け、住居北側部分の床面と壁は残存していない。竈は北壁にあつたと思われるが検出されなかった。

構造 床面は南東部分で確認されたが、他の部分では一部しか残存していなかった。柱穴や貯蔵穴と特定できる掘り込みも確認できなかった。

規模 東西4.8m、南北推定4.3mである。壁高は最も残りの良いところで18cmで、残りは良好でない。

遺物 床面や覆土中より、多くの土師器の坏や壺とこも石が出土した。



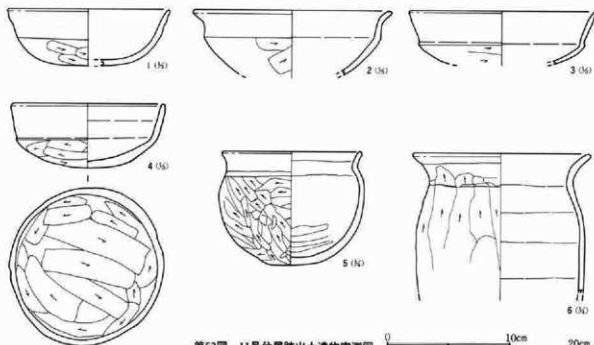
土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 1~2mmの軽石を少量とローム粒子を多く含む。
 ② 褐色土 多くのローム粒子・ロームブロックと炭化物を含む。
 ③ 褐色土 多くのローム粒子・ロームブロックを含む硬く締った層。
 ④ 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む軟質土。
 ⑤ 黄褐色土 ロームを主とした層。
 ⑥ 褐色土 多くのローム粒子と少量の炭化物を含む。
 ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
 ⑧ 黄褐色土 ローム粒子を主とした層。

0 2m

第52図 11号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第53図 11号住居跡出土遺物実測図

11号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第53図)

遺物番号 図版番号	器形及び 類別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③積存④胎土⑤備考
11住-1	坏 土師器 床面	- (13.0) -	底部が丸く縁は明瞭でない。体部～底部へラ削り、口縁部横ナデ、口縁部中央に深い凸帯が一周する。	①黄褐色②酸化③1/4④1～2mmの砂粒を含む
11住-2	坏 土師器 床面	- (16.0) -	底部が丸く、縁は明瞭である。口縁部が大きく外反する。他の坏と胎土や焼成及び器形が異なる。	①明赤褐色②酸化・硬質③1/4④赤⑤胎土 形されている可能性あり
11住-3	坏 土師器 床面+8	- (15.0) -	底部が丸く縁は明瞭で段を持つ。口縁部が長く器内が全体に薄い。	①にぶい褐色②酸化やや軟質③小破片 ④1～2mmの砂粒を含む
11住-4	坏 土師器 床面	5.1 12.3 -	底部が丸く縁は明瞭でない。口縁部は長く内外面に一条の沈線を持つ。口唇部丸く細い。底部はへら削り、深い坏である。	①にぶい褐色②酸化やや軟質③完形④ 1～3mmの砂粒を多く含む
11住-5 88	小笠型 土師器 覆土	11.8 15.0 6.0	全体にゆがみのある小笠型である。底部と胸部との境に明瞭な段を持つ。胸部細かなへら削り、口縁部横ナデ、内面横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③底部と口縁部の 一部欠損④1～4mmの砂粒を多く含む
11住-6	罍 土師器 床面-50	- 19.0 -	長胴型の破片である。胸部は底部方向から口縁部に向かうへら削り、口縁部外側に一条の沈線が一周。	①にぶい赤褐色②酸化・良好③胴～口 縁部1/3④1～5mmの砂粒を多く含む
11住-7	石	長辺13.6 短辺8.4 厚さ4.1 690g	扁平で短い。出土位置が他の石と離れている。	①淡青色③完形④網雲母石墨片岩⑤床 面-3
11住-8 88	石	長辺13.5 短辺9.0 厚さ5.3 720g	こも石の可能性あり。左右対象でないが、中央が凹状を呈するため、紐をたばねることは可能。	①淡青色③完形④網雲母石墨片岩⑤床 面-4
11住-9 88	石	長辺10.9 短辺4.7 厚さ2.7 190g	小さな石であり、こも石としては疑問。	①淡青色③完形④網雲母石墨片岩⑤床 面-4
11住-10 88	石	長辺13.0 短辺25.9 厚さ4.2 535g	均正のとれた石であり、表面全体が磨耗している。こも石としては適している。	①淡緑色③完形④点紋緑泥片岩⑤床 面
11住-11 88	石	長辺17.7 短辺7.0 厚さ3.8 751g	細長い石であるが、こも石の可能性あり。鋭角な側面に打撃による表面割傷が多く認められる。	①淡緑色③完形④緑泥片岩⑤床 面
11住-12 88	石	長辺13.8 短辺7.3 厚さ3.1 552g	幅の広い石であるが、こも石の可能性あり。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④点紋緑泥片岩⑤床 面
11住-13 88	石	長辺13.7 短辺8.5 厚さ3.8 630g	幅の広い石であるが、こも石の可能性あり。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④網雲母石墨片岩⑤床 面-8
11住-14 88	石	長辺11.2 短辺3.5 厚さ2.6 146g	小さな石でありこも石としては疑問である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④点紋緑泥片岩⑤床 面
11住-15 88	石	長辺9.7 短辺25.3 厚さ3.3 267g	小さな石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④網雲母石墨片岩⑤床 面

12号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版12 遺物写真図版88

位置 I区南西部に位置し、11号住居の西約3.5mでK-11・12グリットに属する。

概要 49号住居と重複している。2軒とも古墳時代に属しているが、49号住居の床面を掘り抜いて12号住居が造られている。新旧関係は12号住居が新しい。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とし、黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は4本確認された。貯蔵穴は竈右側に検出された。

規模 東西3.8m、南北推定4.0mである。壁高は最も残りの良い南西壁部分で32cmである。貯蔵穴は直径60cm前後のほぼ円形を呈し、深さは約47cmである。柱穴1は直径30cm深さ77cm、柱穴2は直径45cm深さ66cm、柱穴3は直径35cm深さ80cm、柱穴4は直径35cm深さ69cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の坏や甕が出土した。

床下 床面中央やや西寄りに1.0m×1.2mの楕円形を呈し、床面からの深さ24cmの床下土坑が検出された。

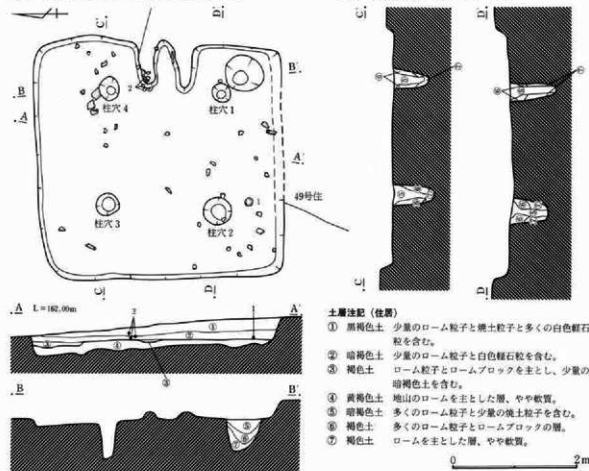
12号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土と灰黄褐色粘質土で造られ、燃焼部東壁両側に石が壁材として立てて使われていた。覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

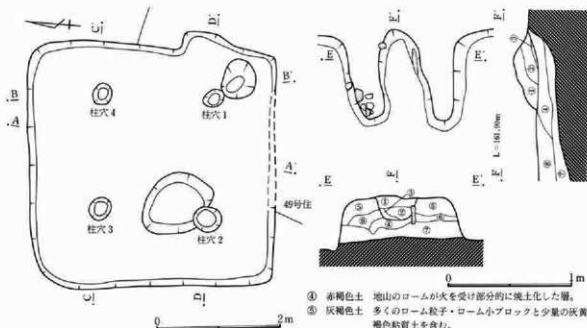
規模 煙道方向82cm、両袖方向48cmである。

遺物 出土は認められなかった。



第54図 12号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

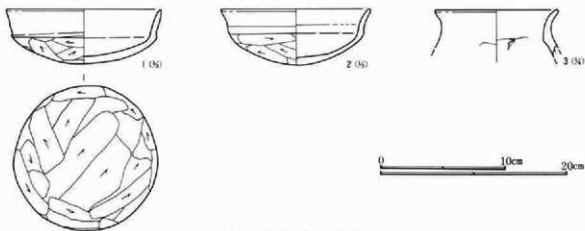


土層法記 (層)

- ① 褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物・焼土粒子を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の黒褐色土の層。

- ④ 赤褐色土 地山のロームが火を受け部分的に焼土化した層。
- ⑤ 灰褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の灰黄褐色粘質土を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑦ 黄褐色土 地山のローム層。
- ⑧ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

第55図 12号住居跡床下及び覆実測図



第56図 12号住居跡出土遺物実測図

12号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第56図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
12住-1 88	環 土師器	4.3 12.4 11.5 床面	丸底の環であり、縁は明瞭である。口縁部は直立後なだらかに外反する。底部外側手持へりナリ、口縁部へ内面横ナデ。	①にふい②酸化・良好③完形④1~2mmの砂粒を含む
12住-2 88	環 土師器	4.5 12.0 - 床面	丸底の環であり、縁は明瞭でない。口縁部は直立後大きく外反する。口縁部へ底部内側横ナデ、底部手持へりナリ。1の環と胎土や器形がやや異なる。	①褐色②酸化・軟質③④①1~2mmの砂粒を含む。やや粉状の胎土
12住-3	小壺壁 土師器	- 13.2 - 覆土	小壺壁の小破片である。口縁部へ側部内面横ナデ、側部外側へりナリ。器内が薄い。	①にふい②褐色②酸化・良好③小破片④1~3mmの砂粒を含む

13号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版12・13 遺物写真図版89・146・147

位置 I区南西部に位置し、12号住居の南東約1mでK-11、L-11グリットに属する。

概要 現在の地表面より下約20cmが遺構確認面であるため、残りが非常に悪い。さらに竈や貯蔵穴を含む住居東側の一部以外は、前代の49号住居の覆土上に造られているため、住居範囲の確認は困難であった。

遺物等の出土状態からも範囲の推定を行ったが、不明確な部分が多い。

構造 竈周辺部分の床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られていたが、他の部分は良好な状態で確認できなかった。竈右側に貯蔵穴が、焚口近くに土坑と思われる掘り込みが検出された。

規模 東西推定4.3m、南北4.2mである。壁高は最も残りの良いところで28cmである。貯蔵穴は80×55cmの楕円形を呈し、深さ18cmであった。土坑は直径70×45cmの楕円形を呈し、深さ16cmであった。

遺物 床面や覆土中および貯蔵穴や土坑より、多くの須恵器の坏や埴と皿また土師器の甕等が出土し、多くを図化することができた。

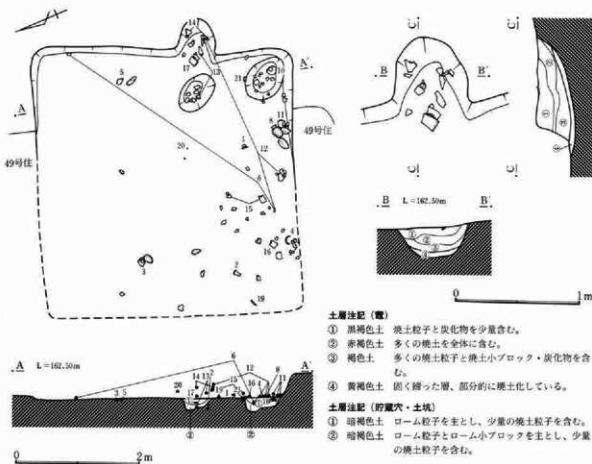
13号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央部の壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の大部分は、壁面部から外側に位置する。

構造 残存状態は悪い。燃焼部床面付近からは、多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。

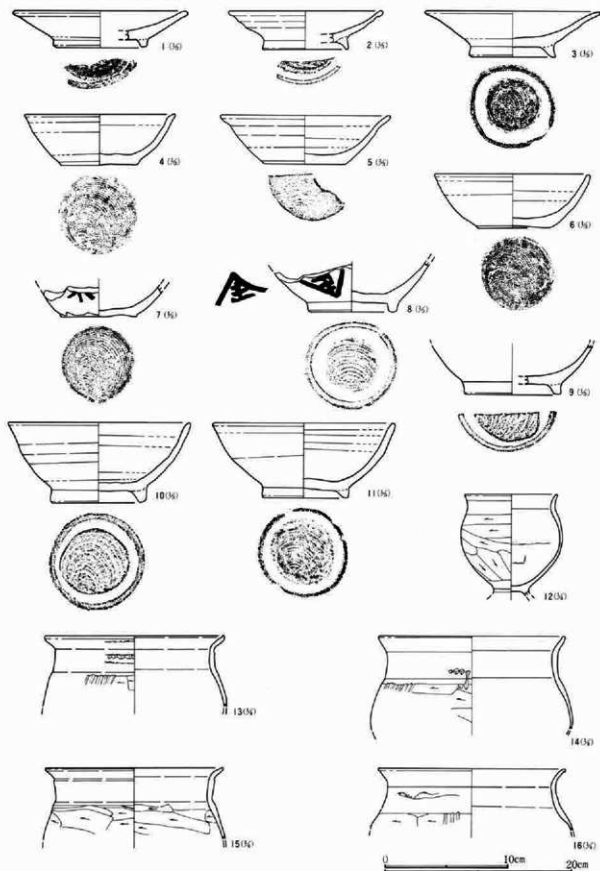
規模 煙道方向65cm、両袖方向60cmである。

遺物 多くの土師器甕の破片と須恵器坏が出土している。

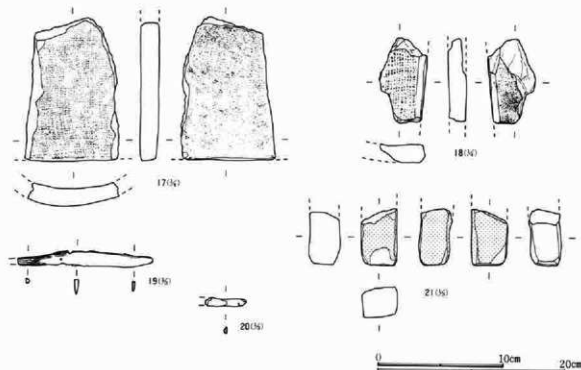


第57図 13号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第58図 13号住居跡出土遺物実測図(1)



第59図 13号住居跡出土遺物実測図(2)

13号住居跡 出土遺物観察表(押図番号第58図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
13住-1	皿 須恵器	3.9 (14.0) (7.6) 床面+2	浅い皿である。底部と体部の器内が厚い。高台は太く貼付後底部をていねいに削り出している。高台内側の糸切痕はていねいに消している。	①浅黄褐色②還元③1/4④1~3mmの砂粒を含む
13住-2	皿 須恵器	3.05 (12.4) (6.7) 床面-15	端正なつくりの皿である。器内が薄く高台は体部下端部に貼り付け整形によりていねいに作り上げている。高台部内側に太い糸による糸切痕が残る。	①浅黄褐色②酸化③1/4④1~2mmの砂粒を多く含む
13住-3 89	皿 須恵器	3.6 (14.2) 6.9 床面	浅い皿である。底部と体部の器内が厚い。高台は太く長い。端部が外側に少し開くつくりのていねいな高台である。高台部内側の糸切痕はていねいに消しているが中央部に太い糸の糸切痕が少し観察できる。	①灰白色②還元③底部完形・胴部へ口縁部1/3④1~3mmの砂粒を含む
13住-4 89	坏 須恵器	4.0 12.2 6.2 床面+2	器面の広い坏である。底部が厚く体部が内彎し、口縁部がわずかに外反する。底部と体部との境に段を持つ。底部に右回転糸切痕が残る。	①灰白色②還元③ほぼ完形④1~2mmの砂粒を多く含む
13住-5 89	坏 須恵器	3.9 (13.4) 6.8 床面	浅い坏である。底部が厚く体部が外側に開き、口縁部が大きく外反する。底部と体部との境に深い段を持つ。底部に右回転糸切痕が残る。	①外側黒色②断面灰色③焼成④ほぼ残存④1~2mmの砂粒を多く含む
13住-6 89	坏 須恵器	4.3 12.5 5.6 床面+1	4の坏に近い器面の広い坏である。体部口縁部とも内彎する。底部と体部との境に深い段を持つ。底部に右回転糸切痕が残る。	①灰白色②還元③ほぼ完形④1~2mmの砂粒を多く含む
13住-7 89	坏 須恵器	- 11.2 - 覆土	4・6の坏に近い器面の広い坏である。底部に右回転糸切痕が残る。体部外側に墨書あり。墨書は一部のみ残存のため判読不明。	①によい貴褐色②酸化③体部へ口縁部ほぼ残存④1~2mmの砂粒を多く含む
13住-8 89	埴 須恵器	- - 7.5 床面+2	深い埴の体部へ底部である。底部内側中央に凸状の突起あり。高台は太く貼り付けは雑であるが、底部はていねいに整形。高台部内側に太い糸の糸切痕あり。体部外側に「金」と思われる墨書あり。	①灰白色②還元③体部へ底部2/3④1~2mmの砂粒を多く含む⑤墨書土器
13住-9	埴 須恵器	- (8.0) - カマド覆土	深い埴の体部へ底部である。高台は太く貼り付けは少し雑であるが、底部はていねいに整形している。高台部内側に太い糸による糸切痕あり。	①外側黒色内側灰白色②還元③体部へ底部1/3④1~2mmの砂粒を含む

13号住居跡 出土遺物観察表 (挿入番号第58・59図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
13住-10 89	黒須恵器	6.4 (14.4) 7.5 床面	深い坑である。底部はやや厚く平である。体部から口縁部にかけて多くのクロク目が残る。口縁部は外反しない。高台は太く整形はしていない。	①浅黄褐色②酸化③4/5④1~3mmの砂粒を含む
13住-11 89	埴須恵器	5.9 14.6 6.9 床面	深い坑である。底部はやや厚く平である。体部外側に1cmの稜線が認められるが他にクロク目なし。内側に多くのクロク目あり。高台は7~10と異なり縦。台の付く小さな壺である。器内は胴部が薄く胴部から口縁部が厚い。肩部横方向、胴中央~下部は右下方へ傾り。器表面の一部が剥落している。	①灰白色②還元③ほぼ完形④1~3mmの砂粒を含む⑤4~10までの製品と粘土質地が異なる
13住-12 89	台付甕土師器	— 10.0 3.7 床面	口の付く小さな壺である。器内は胴部が薄く胴部から口縁部が厚い。肩部横方向、胴中央~下部は右下方へ傾り。器表面の一部が剥落している。	①にぶい赤褐色②酸化③台部以外4/5④密で砂粒はほとんど含まない
13住-13	甕土師器	— 19.2 — カマド内+7 貯蔵穴内	コの字状口縁部の小破片である。胴部は直立し、口縁部は大きく外反する。口唇部内側に折り返しによる突起があると思われる沈線あり。胴部右から左方向へ傾り。	①にぶい褐色②酸化③口縁部~胴部1/6④1mm前後の砂粒を含む
13住-14	甕土師器	— (20.0) — カマド内+15	コの字状口縁部の小破片である。	①にぶい褐色②酸化③口縁部~胴部④密で砂粒はほとんど含まない
13住-15	甕土師器	— (19.0) — 床面+6	コの字状口縁部の小破片である。胴部上下面にヘラ状工具による押圧痕が一周する。	①にぶい褐色②酸化③口縁部~胴部1/4④1mm前後の砂粒を含む
13住-16	甕土師器	— (10.0) — 床面+2	コの字状口縁部の小破片である。口唇部外側に折り返しによる突起あり。13の壺と逆である。	①にぶい赤褐色②酸化③口縁部~胴部1/4④1mm前後の砂粒を含む
13住-17	平瓦	— — — カマド内+4	一枚造りによる平瓦。凹面布目肌。外面ナゲ調整。断面ヘラ傾り。側面もていねいに削っている。	①灰色②還元③小破片④1~6mmの砂粒を多く含む
13住-18	平瓦	— — — 覆土	平瓦の小破片。凹面布目肌。外面ナゲ調整。側断面ヘラ傾り。上下端もていねいにヘラで削り込んでいる。	①灰色②還元③小破片④1~4mmの砂粒を含む。断面に帯状の粘土が多く観察できる
13住-19 147	刀子	全長10.8 幅1.3 棟厚0.3 9.3g 床面+2	基先端部が一部欠損しているがほぼ完形。棟区は木質に被覆されているため不明。茎の多くの部分に木質が残存。	
13住-20	鉄	全長3.2 幅0.5 1.0g 床面+10	用途不明。断面長方形で薄い製品である。錆が多く進行している。	
13住-21 89	礫石	長さ4.4 幅2.8 厚さ2.7 52g 床面	三面が使用されている。他の一側面及び底面は刷毛状の痕跡を持つ。住居内より出土しているが、現在物の混入の可能性もある。石材は流紋岩である。	

14号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版13 遺物写真図版89

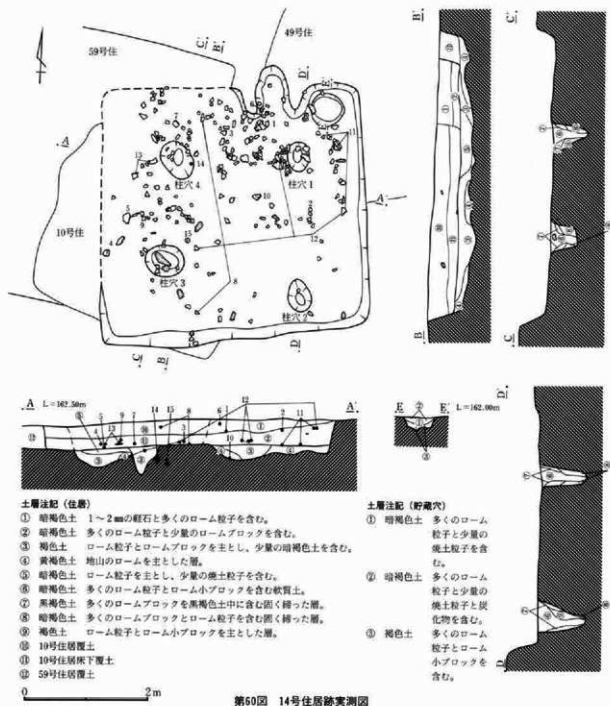
位置 I区南西部に位置し、9号住居の南約17mでK-11・12、L-11・12グリットに属する。

概要 10・49・59号住居の3軒と重複しており、10号住居は平安時代、49号住居は古墳時代、59号住居は奈良時代に属し、新旧関係は49→59→14→10号住居の順である。他の住居と重複している西側部分は、覆土と西壁上面を10号住居に削り取られ、59号住居の西側覆土を削り込んで住居が造られている。また竈周辺や貯蔵穴部分の住居北東部は、49号住居覆土を掘り込んで造られているので重複部分の住居範囲確認が困難であった。特に西壁と北壁の一部は確認できなかった。

構造 他の住居と重複していない南東部分の床面はロームブロックを主とし明瞭であったが、重複している東側部分は、59号住居覆土を掘り込んで造られているため軟質であり、床面の検出が充分できなかった。柱穴は4本、貯蔵穴は竈右側に掘られていた。

規模 東西4.35m、南北3.90mで、壁高は最も残りの良い南壁面で40cmである。貯蔵穴は直径50cmの円形を呈し、深さは21cmである。柱穴1は直径35cm深さ79cm、柱穴2は直径40cm深さ89cm、柱穴3は直径50cm深さ52cm、柱穴4は直径45cm深さ79cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の甕や坏、須恵器の坏等が出土した。



第60図 14号住居跡実測図

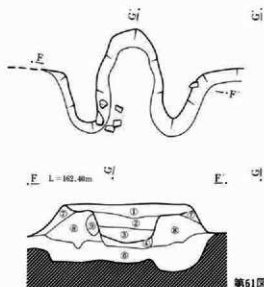
14号住居跡 (竈)

位置 住居北壁中央部やや東寄りの壁面から床面にかけて造られている。燃焼部の多くは床面上に位置するが一部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られており、燃焼部床面付近からは多くの焼土ブロックや少量の焼土粒子と少量の炭化物が検出された。

規模 煙道方向85cm、同袖方向55cmである。

遺物 土師器や須恵器の甕の胴部がわずかに出土した。



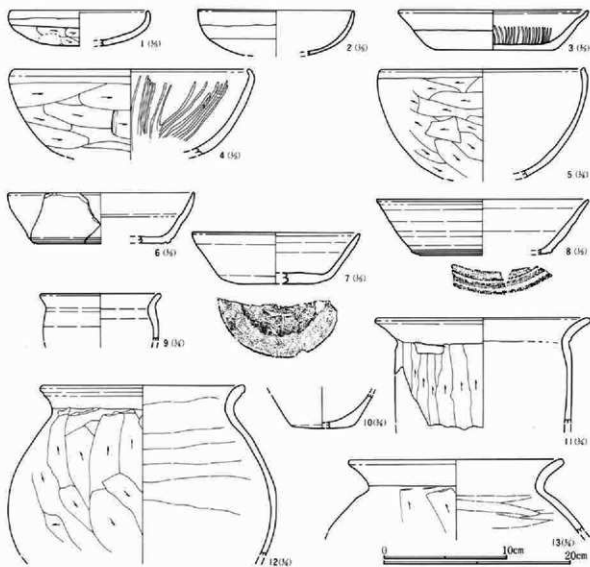
第51図 14号住居跡遺実測図



土層注記 (續)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子・軽石粒子と焼土粒子を全体に含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子・ローム小ブロックと焼土粒子を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の炭化物を含む。
- ④ 褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多く含む粘質土。
- ⑤ 赤褐色土 地山のロームを主とし、部分的に火を受けて焼土化している。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とし、部分的に焼土粒子を含む。
- ⑦ 褐色土 ローム粒子を主とし粘性の強い層、少量の焼土粒子と炭化物を含む。
- ⑧ 褐色土 多くのローム粒子とロームブロックを含む粘性で固く締っている。

0 1m



第52図 14号住居跡遺物実測図(1)



第63図 14号住居跡出土遺物実測図(2)

14号住居跡 出土遺物観察表 (拝図番号第62・63図)

遺物番号 図版番号	器形及び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
14住-1	坏 土器器	— (11.0) — 床面+20	浅い丸底の坏であり、口縁部は短く内彎する。底部外側へう削り、内側横ナデ整形。口縁部下半ナデ整形、上半横ナデ整形。	①にぶい褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
14住-2	坏 土器器	— (12.6) — 床面+20	半円形の坏であり、口縁部は底部からの立上り直線の範囲内にある。底部へう削り。口縁部下半は型作り時の整形か。口縁部上半は横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
14住-3	坏 土器器	3.2 (15.2) (10.2) 床面+4	平底の浅い坏である。底部へう削り、口縁部横ナデ。口縁端部は内側に折り込んでいる。体部へう削り内側に多くの暗文あり。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
14住-4 89	坏 土器器	— (18.8) — 床面+5	深く口径の大きい坏である。口縁部は外側に上端で強く内彎する。口唇部は丸い。内面に多くの暗文あり。	①褐色②酸化③口縁部1/3・底部欠④1mm以下の砂粒と赤褐色粒を多く含む
14住-5	坏 土器器	— (22.0) — 床面+2	深く口径の大きい坏であり、丸底で半円形を呈するものと思われる。口縁部上端横ナデ、内側ナデ整形。ていねいにつくられている。	①にぶい褐色②酸化・硬質③1/4・底部欠④1mm以下の砂粒を多く含む
14住-6	坏 須恵器	4.0 (16.0) 11.2 床面+31	平底の削り出し高台の坏である。器高が低く口径が大きい。底部外側へう削り、体部下端削り出し高台。口縁部回転横ナデ。	①灰白色②還元・硬質③口縁部1/3・底部欠④密
14住-7 89	坏 須恵器	4.1 (13.4) (9.2) 床面+4	平底の坏であり、底部中央にへう切り時の痕跡を残す。底部周辺部へう削り回転横ナデ、口縁部内側回転横ナデ。	①灰白色②還元・硬質③口縁部1/3・底部1/2④密
14住-8	坏 須恵器	(4.4) (17.0) (11.4) 床面	平底の削り出し高台の坏である。器高が低く口径が大きい。体部下端に削り出しによる高台がつく。口縁部回転横ナデ。	①灰白色②還元・硬質③口縁部1/4・底部大部分欠④密
14住-9	小型壺 土器器	— (13.0) — 床面+12	小型壺の小破片である。胴部へう削り横ナデ、へう削り直し。口縁部は大きく外反する。全体に器内の厚い壁である。	①にぶい褐色②酸化・良好③小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
14住-10	壺 土器器	— — (6.8) 床面-18	壺の底部小破片である。底部へう削りで少し丸味を持つ。胴部へう削り。	①にぶい赤褐色②酸化・良好③小破片④1~2mmの砂粒を多く含む粗い胎土
14住-11 89	壺 土器器	— 11.5 — 床面	長胴壺の胴上部へう削り横ナデの小破片である。胴は直立気味に立ちあがり、最大径が肩部にくるものと思われる。胴部は底部から口縁部に向かうへう削り。	①にぶい赤褐色②酸化・良好③口縁部へう削り上半部1/3④1~2mmの砂粒を多く含む
14住-12 89	壺 土器器	— (22.0) — 床面+2 柱穴中	大型の壺の破片である。胴部は円形を呈し、最大径が胴中央部になるとと思われる。胴部へう削り。口縁部は器内が厚く大きく外反し端部で外側に折返し。	①にぶい褐色②酸化・良好③胴中央部へう削り1/4④1~2mmの砂粒を多く含む
14住-13 89	壺 土器器	— (23.0) — 床面+6	12同様な器形の壺である。胎土は砂質でありやや異質。口縁部は大きく外反しさらに器内が厚くなる。胴部内面刷毛目。	①にぶい褐色②酸化・良好③胴上部へう削り1/4④1~2mmの砂粒を大量に含む
14住-14 89	紡錘車	長辺4.3 短辺4.3 厚さ1.0 孔径0.8 重量26g 床面-24	扁平な紡錘車である。上・下面はほとんど自然面に近い。底部縁辺部に円形の刻線あり。側面は灰磁によりていねいに削り込まれている。	①暗緑灰色③完形④滑石片岩
14住-15 89	紡錘車	長辺5.8 短辺6.0 厚さ2.3 重量135g 床面-20	紡錘車の未製品である。上面の多くは自然面。下面は部分的にノミの痕跡が残る。側面はノミにより多くの部分が削られている。灰磁削りは不明。中央部は穿孔されていない。	①暗緑色③完形④滑石片岩

15号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版13 遺物写真図版90

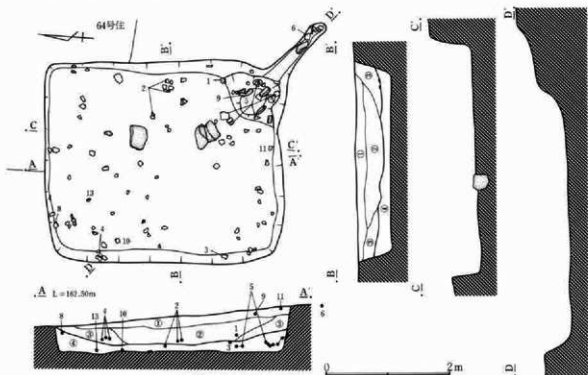
位置 I区南西端部に位置し、10号住居の西約9mでL-13グリットに属する。

概要 奈良時代の64号住居と北東部分で重複している。残存状態の良好な住居であった。床面ほぼ中央部に45×30cm、厚さ24cmで上面が平らな石が床面に16cmほど掘り込んで据え付けられていた。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、軟質である。柱穴及び貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西3.15m、南北3.75mで、南北方向に長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁面で66cmで他の住居と比較すると残りは非常に良好である。

遺物 床面や覆土中より、土師質土器の皿や須恵器の埴や紡錘車等が出土した。



土層表記 (佳順)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。 ② 褐色土 多くのローム粒子とロームブロックと少量の焼土粒子を含む。
 ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。 ③ 褐色土 多くのローム粒子とロームブロックと少量の焼土粒子炭化物を含む。

第64図 15号住居跡実測図

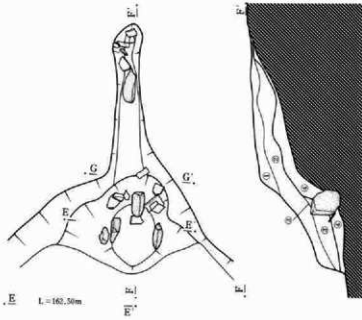
15号住居跡 (竈)

位置 住居南東コーナーの壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の大部分は、壁面部から外側に位置する。煙道が燃焼部から外側にむかい、なだらかに立ち上がりながらロームを掘り抜いて造られていた。

構造 両袖部分に壁材として用いられたと思われる2個の石と燃焼部奥壁寄りに支脚石と思われる石が据えられた状態で出土した。さらに煙道部からも大きな石が出土した。燃焼部床面や奥壁の表面が焼けて焼土化している。燃焼部覆土中に多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

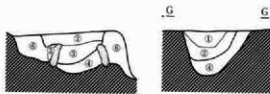
規模 燃焼部で煙道方向70cm、両袖方向40cmで、煙道は幅20cm長さ2.4mである。

遺物 多くの土釜の破片と少量の須恵器甕の破片が出土した。

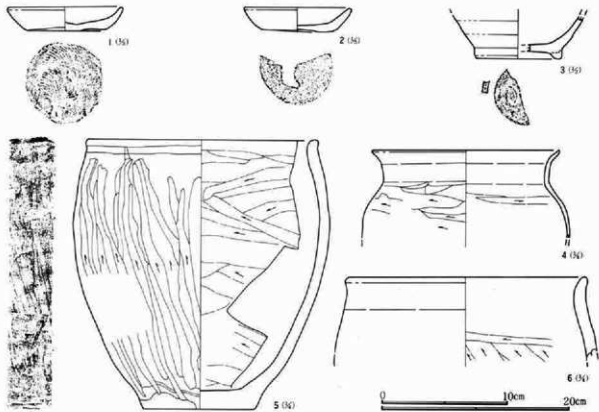


土層注記(繼)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と多量の焼土粒子を含む。
- ③ 黒褐色土 黒褐色土中に炭・灰・焼土粒子を含む軟質土層。
- ④ 赤色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ⑤ 赤褐色土 多くのローム粒子・ロームブロックと焼土粒子の層。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。

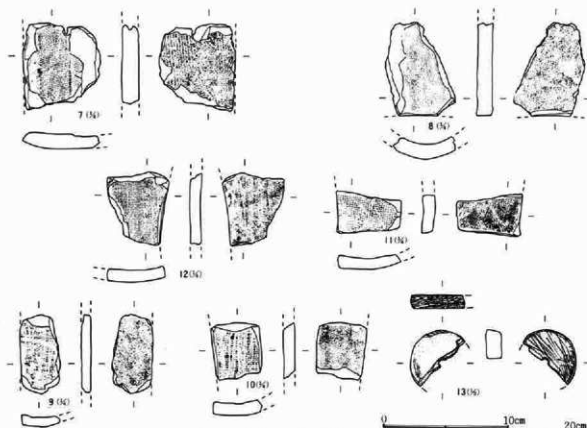


第65図 15号住居跡竪断面図



第66図 15号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第67図 15号住居跡出土遺物実測図(2)

15号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第66・67図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
15住-1 90	土師甕	器 1.9 9.0 6.6 床面+7	底部が大きく、器高の低い皿である。底部右面転削切。口縁部横ナゲ。内面底部手持横ナゲ。	①におい橙色②酸化・良好③ほぼ完形④赤・赤褐色粒を少量含む
15住-2 90	土師甕	皿(可卑) 1.9 8.6 5.8 床面	口縁部に多くの総縁が残るため、灯明皿として使われていた。内面底部手持横ナゲ。	①におい褐色②酸化・軟質③2/3④赤・赤褐色粒を少量含む
15住-3	埴	塊 - (7.0)	高台の多くがはずれている。高台部内側の糸切痕がわずかに残る。外面口クロ横。	①灰白色②還元・軟質③体部下平~底部1/3 ④密
15住-4 90	甕 土師甕	甕 - (20.0) - 床面+5	コの字状口縁の要である。肩部右一左のヘラ削り、頸部に粘土接合痕。口縁部横ナゲ。胴部内面整形。	①におい褐色②酸化・硬質③実部部分1/3④密・砂粒ほとんど含まず
15住-5 90	土釜 土師甕	土釜 28.5 (24.8) (12.0) カマド内床面	大型の土釜である。底部砂底。胴部下端横方向へラ削り。胴部表面短かなヘラ磨き。内面ナゲ整形。口縁部横ナゲ。全体的にいいな作りである。	①赤褐色②酸化・良好③口縁~胴上部1/4・胴下~底部1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
15住-6 90	土釜 土師甕	土釜 - (28.0) - カマド内+7	土釜の小破片であり、全体像は不明である。全体が灰状により黒褐色を呈する。胴部内外面ナゲ整形。	①暗赤褐色②酸化③口縁~胴上部1/8 ④1mm以下の砂粒を多く含む
15住-7	平瓦	覆土	平瓦の小破片である。凹面横骨痕と布目痕。凸面横切痕。側面面取り。横巻作り。	①灰白色②還元③小破片④砂粒ほとんど含まず
15住-8	平瓦	床面+29	平瓦の小破片である。凹面横骨痕と布目痕。凸面ナゲ整形。側面面取り。	①表面灰黒色・断面黒褐色②酸化・硬質③小破片④1~2mmの砂粒を多く含む
15住-9	平瓦	床面+30	平瓦の小破片である。凹面布目痕。凸面ナゲ整形。側面面取り。器内が薄い。	①灰白色②還元・硬質③小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
15住-10	平瓦	床面-6	平瓦の小破片である。凹面横骨痕と布目痕。凸面ナゲ整形。側面面取り。横巻作り。	①灰褐色②還元・硬質③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
15住-11	平瓦	床面+54	平瓦の小破片である。凹面布目痕。凸面ナゲ整形。側面面取り。器内が薄い。	①灰白色②還元・硬質③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
15住-12	平瓦	覆土	平瓦の小破片である。凹面布目痕。凸面ナゲ整形。側面面取り。	①灰褐色②酸化・軟質③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
15住-13 90	紡錘車	長さ4.2 幅4.2 厚さ1.2 重量26g	扁平な紡錘車である。表面ほぼ自然面。底面瓦筋削り、側面下半瓦筋削り、上半分ノミ。	①淡青緑色③1/2④滑石片岩⑤床面-6

16号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版14 遺物写真図版90・146

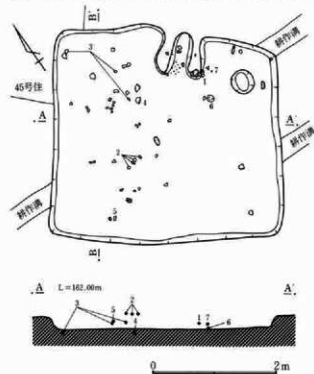
位置 II区東側に位置し、17号住居の北約1mでJ-16、K-16グリットに属する。

概要 時代の確定できない45号住居に北西コーナーの覆土を掘り込まれている。東西に走る2本の耕作溝により一部分が床面近くまで攪乱を受けている。残存状態が悪い住居であった。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ、竈周辺が特に踏み固められてあった。竈焚口右側に貯蔵穴があり、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.7m、南北3.5mである。壁高は最も残りの良い南壁で33cmである。貯蔵穴は直径約35cmのほぼ円形を呈し、深さ12cmであった。

遺物 床面や覆土中より、土師器の甕や坏、須恵器の坏や甕等が出土した。



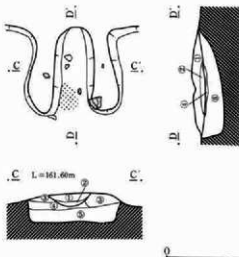
16号住居跡 (竈)

位置 住居北壁中央の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が北壁を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られており、右側袖部に袖の芯材として使用されたとと思われる石が検出された。覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向推定70cm、両袖方向35cmである。

遺物 土師器の坏と甕の破片が出土した。

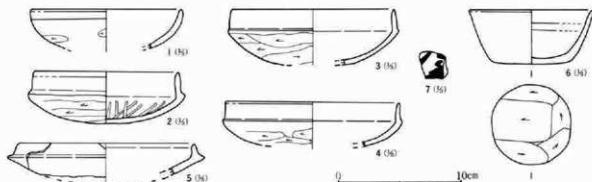


土層表記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第68図 16号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第69図 16号住居跡出土遺物実測図

16号住居跡 出土遺物観察表 (挿入番号第69図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
16住-1	環 土師器	— 12.0 — 床面+8	丸底の環の小破片である。底部へう削り、口縁部横ナシ。	①褐色②酸化・良好③小破片④密
16住-2 90	環 土師器	4.1 11.6 — 床面+29	丸底の環である。底部と口縁部との境は明瞭でV字状の沈線が横直上に一条、内側に一条認められる。底部内面の全体にわたり暗文が認められる。	①にぶい褐色②酸化・良好③1/4④少量の砂粒を含む⑤地産地消か?
16住-3	環 土師器	— (13.0) — 床面+6	明瞭な横を持ち、横直上及び内側にV字状の沈線が認められる。口縁部の作りが2と異なる。	①にぶい褐色②酸化・良好③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
16住-4	環 土師器	— (14.0) — 床面-5	明瞭な横を持ち、横直上及び内側にV字状の沈線が認められる。	①表面黒褐色・断面にぶい褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
16住-5	環 須恵器	(4.0) (16.0) — 床面+9	坏身の小破片である。たちあがり角が短く内傾する。受部は幅広い。	①灰白色②還元焼成③小破片・口縁部1/6④赤⑤天井部隆起による厚い自然釉
16住-6 90	環 須恵器	4.3 10.0 6.4 床面	平底の小さな環である。器高が高く、口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。底面手持へう削り、体部へ口縁部ロクロ目。外側口縁部に輪襷残る。	①表面暗緑灰色・断面灰白色②還元③ほぼ定形④密
16住-7	環 須恵器	— — — 覆土	外側体部に墨書あり、判読不明。混入品と思われる。	①灰白色②還元③わずかな小破片④密⑤墨書土器

17号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版14 遺物写真図版90

位置 II区東部に位置し、16号住居の南約1mでK-16グリットに属する。

概要 平安時代の52号住居により竈東側部分の床面と壁面が削り取られており、その部分は貯蔵穴の下部のみの残存であった。全体に残りの悪い住居であった。

構造 床面は、ロームブロックを主とした土で造られており、軟質である。竈焚口右側に貯蔵穴があり、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西推定3.5m、南北2.8mで、東西方向にやや長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁で29cmであった。貯蔵穴は上面を52号住居により削り取られているが、直径43cmのほぼ円形を呈し、深さは21cmであった。

遺物 床面や覆土中より、土師器の環や壺、須恵器の蓋や壺等が出土した。

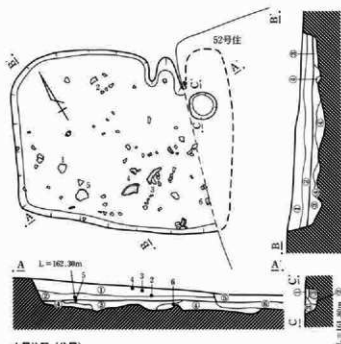
17号住居跡 (竈)

位置 住居北壁中央やや東側の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置する。

構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土と灰黄褐色粘質土で造られている。右袖部分に6×8cmの石が出土した。おそらく袖石として使用されたものと思われる。

規模 煙道方向50cm、両袖方向約40cmである。

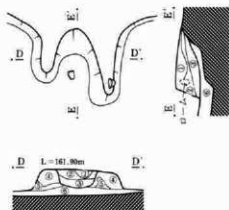
遺物 土師器壺の胴部小破片が出土した。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒と焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くの焼土粒子とロームブロックと少量の黒褐色土を含む。
- ③ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑤ 52号住居覆土
- ⑥ 52号住居床下覆土

0 2m

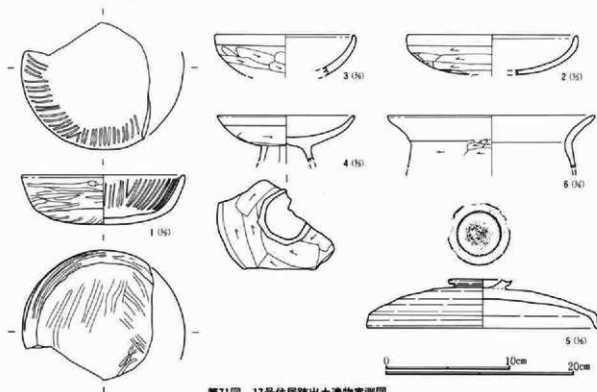


土層注記 (墓)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 少量の焼土粒子・焼土ブロックと多くの黒褐色土の層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の灰黄褐色粘質土を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

0 1m

第70図 17号住居跡及び竈実測図



第71図 17号住居跡出土遺物実測図

17号住居跡 出土遺物観察表(揮図番号第71図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底面整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
17住-1 90	土師器 環	4.0 (13.0) - 床面+2	底部は丸味を持つが平底に近い。口縁部は内彎しつつゆるやかに外傾する。底部へ口縁部外面はほぼ全面にわたってへう磨き。口縁部内側暗文、底部内側ナデ整形。異質な土器である。	①にふい②褐色③酸化④口縁部1/3⑤底部4/5⑥密
17住-2 90	土師器 環	- (13.6) - 床面+8	丸底の環である。口縁部は短く内傾する。底部外側へう磨り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
17住-3 90	土師器 環	- (11.3) - 床面+15	丸底の環である。口縁部は短く内傾する。底部外側へう磨り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③実部部分1/3④1mm以下の砂粒を少量含む
17住-4 90	土師器 高環	- (11.0) - 床面+18	小型の高環である。環は浅い。脚部は外面を縦方向に大きく削り込んで整形しており10面前後の長方形の幅広い削り面を持つものと思われる。	①褐色②酸化③環部1/3・脚部は環側(脚基部)の一部のみ④1mm以下の砂粒を多く含む。
17住-5 90	須恵器 蓋	3.9 18.5 携4.4 床面	環状のつまみを持つ環蓋である。口縁部は長く少し外反している。天井部は右回転へう磨り。つまみは後世の環状つまみと異なり、複雑でつくりがいていである。	①灰白色②還元焼成③口縁部一部欠、他はほぼ完形④1~2mmの石英や長石を主とした砂粒を多く含む
17住-6 90	土師器 甕	- (22.0) - 床面-2	長胴甕の口縁部小破片である。口縁部はくの字状に外反する。胴部へう磨り、口縁部横ナデ。	①明赤褐色②酸化③実部部分1/5④1mm以下の砂粒を多く含む

18号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版14・15 遺物写真図版90・91

位置 II区中央部に位置し、17号住居の南西約7mでL-17グリットに属する。

概要 南壁の上部を東西に走る耕作溝により削り取られ、東側の壁面から床面の一部にかけて地境溝により削り取られている。北壁周辺は残りが悪く、特に東側部分は残存していない。良好に確認できたのは西壁部分のみであった。地境溝により上面の大部分を削り取られた残存状態の悪い竈が東壁南寄りであり、北壁中央部にも多くの焼土が残存しているため旧竈があったものと思われる。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ軟質である。幅10~20cm深さ10cm前後の周溝がほぼ全周していた。東壁焚口右側に貯蔵穴があり、柱穴が4本確認された。

規模 東西4.95m、南北4.30mである。壁高は最も残りの良い西壁南側で43cmである。貯蔵穴は直径約48cmのほぼ円形を呈し、深さ20cmであった。柱穴1は直径50cm深さ57cm、柱穴2は直径50cm深さ62cm、柱穴3は直径50cm深さ58cm、柱穴4は直径45cm深さ63cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の環や甕とこも石及び少量の須恵器の環や磁石等が出土した。

18号住居跡東竈(新)

位置 住居東壁南寄りにあり壁面から床面にかけて造られている。地境溝により上面の大部分を削り取られてはいるが、燃焼部から焚口部分にかけては下部が残存していた。おそらく燃焼部の大部分は住居内に位置していたものと思われる。

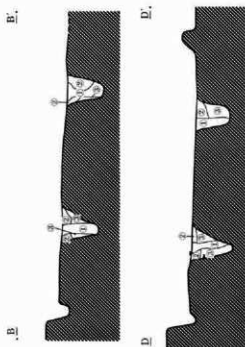
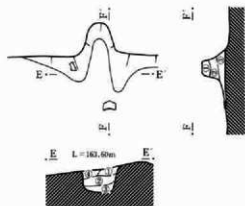
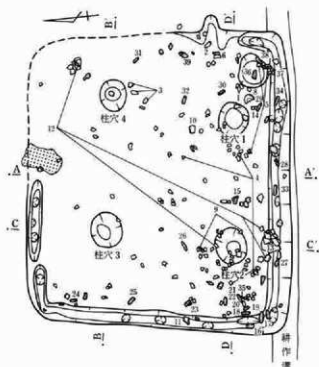
構造 ロームを主体とした暗褐色土で構築されていたものと思われる。覆土中や燃焼部床面付近から焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向推定55cm、両袖方向推定25cmである。

遺物 土師器の環の破片が出土した。

18号住居跡北竈(旧)

位置 住居北壁中央部床面上に竈の痕跡と思われる焼土が認められた。残りが悪く詳しい内容は不明である。



土層注記 (柱穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と暗褐色土を含む軟質な層。
- ② 褐色土 ローム粒子と黒褐色土の混入土層。
- ③ 褐色土 ローム粒子を全体と少量の暗褐色土を含む。

土層注記 (住層)

- ① 灰褐色土 多量の白灰色軽石を含む層。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子とロームブロックを含む。
- ④ 黒褐色土 黒褐色土とロームの混入土 (耕作による攪乱土)。
- ⑤ 黒色土 ローム粒子とロームブロックを多く含む粘質の強い層。
- ⑥ 褐色土 暗褐色土とローム粒子の混入土、粘質で固く締っている。
- ⑦ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑧ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

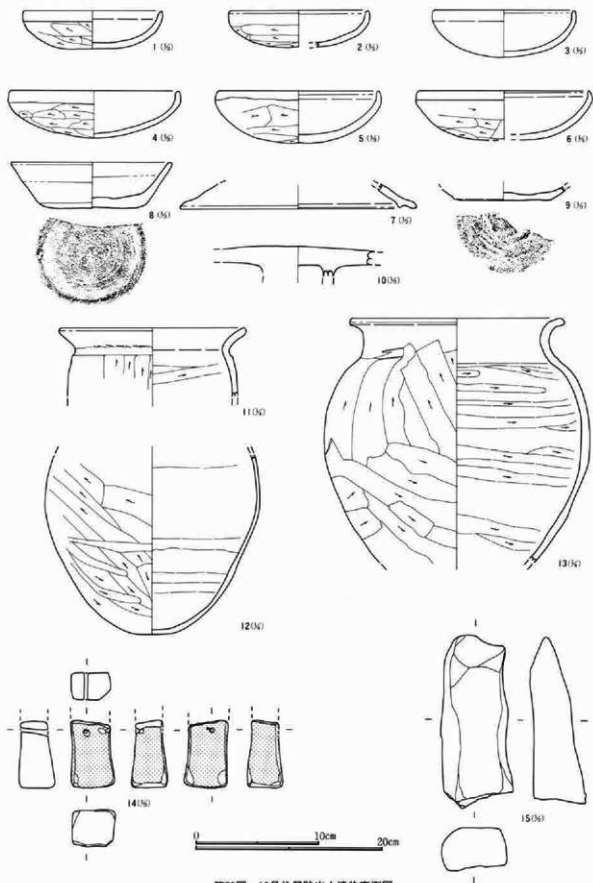
土層注記 (竈)

- ① 暗褐色土 ローム粒子と多くの焼土粒子を含む。
- ② 赤褐色土 多くの焼土粒子と焼土ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 少量の焼土粒子と灰を含む。
- ④ 灰褐色土 多量の白色軽石を含む層 (攪乱層)。



第72図 16号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第73図 18号住居跡出土遺物実測図

18号住居跡 出土遺物観察表(押印番号第73図)

遺物番号 図版番号	器形及び 類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
18住-1	坏 土師器	3.0 11.0 - 床面+15	丸底の坏である。口縁部は短く内彎する。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③口縁部1/4・底部2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
18住-2	土師器	2.9 11.4 - 床面+5	丸底の坏である。口縁部は短く内彎する。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③口縁部1/4・底部1/4・底部中央穴④1mm以下の砂粒を多く含む
18住-3 90	坏 土師器	3.75 5.6 - 床面	丸底の坏である。口縁部は短く内彎する。1・2と比較して深い。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ、内側底部ナデ整形。	①褐色②酸化③底部一部欠、他はほぼ完全④1mm以下の砂粒を多く含む
18住-4 90	坏 土師器	3.7 13.4 - 床面	丸底の坏である。口縁部は短く内彎する。口径に比較して狭い坏である。口縁部横ナデ、底部ヘラ削り、内側底部ナデ整形。	①褐色②酸化③口縁部1/4・底部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
18住-5 90	坏 土師器	4.1 12.9 - 床面	丸底の坏である。口縁部は短く内彎する。口縁部の作りは1~4と異なる。口縁部横ナデ、底部ヘラ削り、底部内側ナデ整形。	①にぶい褐色②酸化③口縁部1/3・底部3/4④1mm以下の砂粒を少量含む
18住-6	坏 土師器	3.9 13.8 - 床面	丸底の坏である。口縁部は特に短く内彎する。口縁部横ナデ、底部ヘラ削り、内側底部ナデ整形。	①にぶい褐色②酸化③1/4・底部の一部欠④1mm以下の砂粒を多く含む
18住-7	蓋 須恵器	- 19.0 - 覆土	カエリを持つ坏蓋の小破片である。口縁部はカエリの部分で一段外側へ開く。カエリは断面三角形を呈し、ていねいに付けられている。	①灰白色②酸化・硬質③わずかな小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
18住-8 90	坏 須恵器	3.7 13.0 7.7 床面	底部の幅広い坏である。口縁部は直線的になだらかに外傾しつつ立ち上がる。ロクロ目は明瞭でない。底部全面回転ヘラ削り、底部一体下部部分もていねいに削っている。	①淡黄褐色②酸化・硬質③3/4④1mm以下の砂粒を大量に含む
18住-9	坏 須恵器	- - (8.0) 床面+9	底径の大きな坏である。底部はヘラ切わずかに再調整しているが、ヘラ調整なし。	①灰白色②還元③底部1/2④1mm以下の長石と石英粒を多く含む
18住-10	高台付 盤? 須恵器	- - - 床面+2	小破片のため類別不明であるが、高台付盤の可能性が考えられる。	①青灰色②還元成焼③小破片④1mm以下の小破片を多く含む⑤焼締により表面の一部が気泡化している
18住-11	薬 土師器	- (20.0) - 床面+20	最大径を肩部に持つ薬の小破片と思われる。胴部は口縁に向かうヘラ削り、口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③小破片(1/6以下)④1mm以下の砂粒を多く含む
18住-12 90	薬 土師器	- - 5.0 床面	最大径を胴中央部に持つ器内の薄い蓋である。輪縁による接合痕を明瞭に残し、その部分で割れている。胴部外側ヘラ削り、内側ナデ整形。	①にぶい褐色②酸化③胴一部ほぼ完全④1mm以下の砂粒を多く含む
18住-13 90	薬 土師器	- (23.0) - 床面	器内の厚い丸胴の薬である。胴部の最大径は中央部にくる。頸部は直立しその後大きく外反する。口唇部は大きく外傾し平で幅広い。胴部ヘラ削り、胴部内側ナデ整形。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ胴上部1/2・胴下部1/3・底部穴④1mm以下の砂粒を多く、2mm以上の砂粒を少量・緑泥片岩を少量含む
18住-14 91	磁石	長さ5.4 幅3.6 厚さ2.9 重量76g 床面+12	西側面は磁石として使用されている。天井部は欠損状態で未加工、上部中央に小穴が穿孔されている。また穿孔は縁辺部にも認められる。穿孔はいずれも両側から削り込まれている。	①明緑灰色②一部欠③流紋岩④割れた磁石を装飾部として再加工したものと考えられる
18住-15	磁石?	長さ13.7 幅5.8 厚さ4.6 重量381g 床面+6	全ての面に磁石として使用した痕跡は認められない。石材は磁石として多く使用されているため、磁石として利用するための仕込みに持ち込まれた可能性大。	①淡黄色②一部欠損③流紋岩
18住-16	石	長さ15.7 短辺24.5 厚さ3.5 重量344g	細長い石であり、側面中央部に凹状の欠損部を持つ。こも石としては最適な形であろう。	①淡緑色②完全③網罟母石墨片岩④床面
18住-17 91	石	長さ15.2 短辺25.9 厚さ3.1 457g	細長い石であり、上下の端部は磨耗しているが、側面は凹状を呈し磨耗していない。	①淡緑色②完全③網罟母石墨片岩④床面
18住-18 91	石	長さ14.6 短辺25.3 厚さ4.9 480g	細長い石である。中央部が凹状を呈し表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完全③点紋網罟母石墨片岩④床面
18住-19 91	石	長さ15.0 短辺26.7 厚さ3.9 460g	不均整な形をしており、こも石としては不適当。	①淡緑色②完全③点紋網罟母石墨片岩④床面
18住-20 91	石	長さ14.7 短辺25.5 厚さ3.0 286g	扁平な石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完全③網罟母石墨片岩④床面
18住-21 91	石	長さ16.6 短辺24.0 厚さ3.6 365g	細長い石である。表面全体が磨耗している。こも石としては最適と思われる。	①淡緑色②完全③緑黄緑泥片岩④床面+3
18住-22 91	石	長さ14.9 短辺24.5 厚さ3.7 322g	細長い石である。表面全体が磨耗している。断面三角形を呈すが、こも石としては適するとと思われる。	①淡緑色②完全③緑黄緑泥片岩④床面+4
18住-23 91	石	長さ11.2 短辺25.9 厚さ2.3 180g	中央部が太くこも石としては不適と思われる。	①淡緑色③約1/2④網罟母石墨片岩④床面+5

第3章 検出された遺構と遺物

18号住居跡 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
18住-24 91	石	長辺12.0 短辺24.3 厚さ1.3 109g	扁平で小さな石である。こも石としては疑問である。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床面
18住-25 91	石	長辺12.3 短辺25.7 厚さ1.5 138g	階梯状に割れている。割れた後の表面も磨耗している。	①淡青色②1/2④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+3
18住-26 91	石	長辺16.0 短辺25.7 厚さ2.6 348g	中央部が幅広い石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+4
18住-27 91	石	長辺13.1 短辺27.2 厚さ3.0 310g	扁平な石で幅広い。表面全体が磨耗している。こも石としては疑問である。	①淡緑色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面
18住-28 91	石	長辺13.2 短辺28.7 厚さ2.9 441g	扁平な石で幅広い。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面
18住-29 91	石	長辺12.6 短辺25.0 厚さ2.6 227g	小さな石であり、不定形である。こも石としては不適と思われる。	①明緑灰色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面+14
18住-30 91	石	長辺13.2 短辺26.7 厚さ3.5 400g	片側が欠けているため全体像不明。欠損部分表面は磨耗していない。	①淡青色③一部欠④網罟母石墨片岩⑤床面
18住-31 91	石	長辺11.6 短辺26.5 厚さ3.7 425g	中央部が幅広い石である。中央部分に凹状の欠損部を持つ。	①淡緑色③完形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面-12
18住-32 91	石	長辺13.5 短辺25.9 厚さ3.4 355g	側面の一部が欠損している。	①淡緑色③側面一部欠損④網罟母石墨片岩⑤床面-4
18住-33 91	石	長辺13.9 短辺25.2 厚さ4.1 321g	細長い石であり、側面中央部に凹状の欠損部を持つ。こも石としては適していると思われる。	①淡緑色③完形④緑縞緑泥片岩⑤床面
18住-34 91	石	長辺12.3 短辺26.1 厚さ3.4 356g	中央部が幅広い石である。側面の一部が欠損している。	①淡青色③側面一部欠損④網罟母石墨片岩⑤床面-6
18住-35 91	石	長辺15.2 短辺44.2 厚さ2.2 169g	細長い石である。長辺方向で半分割れている。	①淡緑色⑤1/2④網罟母石墨片岩⑤床面
18住-36 91	石	長辺14.2 短辺26.0 厚さ2.5 308g	扁平な石である。側面中央部に凹状の欠損部を持つ。こも石としては適していると思われる。	①淡緑色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面-12
18住-37 91	石	長辺11.5 短辺24.1 厚さ2.7 185g	小さな石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面-14
18住-38 91	石	長辺13.0 短辺26.0 厚さ2.6 235g	中央部が幅広い石である。側面が一部欠損している。	①淡青色③側面一部欠損④網罟母石墨片岩⑤床面-10
18住-39 91	石	長辺15.3 短辺26.5 厚さ3.7 555g	中央部が幅広い石である。表面全体が磨耗している。こも石としてはやや疑問である。	①淡緑色③完形④緑縞緑泥片岩⑤床面-14

19号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版15 遺物写真図版91・147

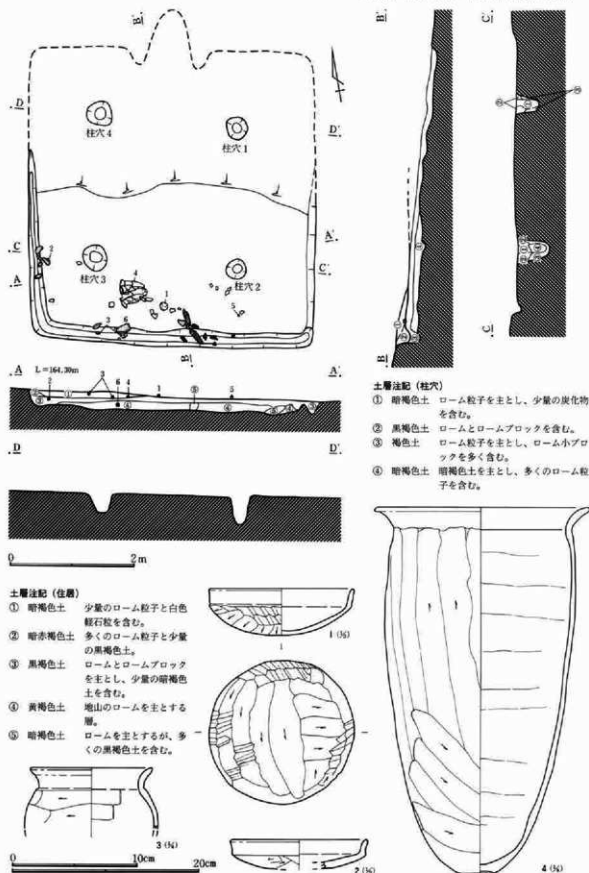
位置 II区中央部に位置し、18号住居の西約5mでK-18、L-18グリットに属する。

概要 残存状態が非常に悪く、南側半分のみが残存で、北側は柱穴と貯蔵穴以外残っていない。甕も全く残存していなかった。焼土と炭が南壁中央部の床面に、焼土が東壁南端に近い床面上において投げ込まれたような状態で床面から5~15cm浮いて出土した。残存している壁面下に周溝が掘られていた。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ軟質である。柱穴は4本確認され、貯蔵穴は北東コーナーに掘られていた。このことより、おそらく北壁中央部に甕があったものと思われる。

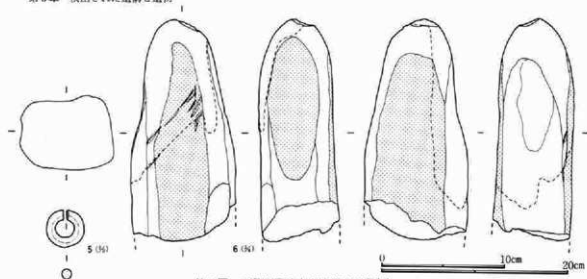
規模 東西4.65m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い南壁で23cmである。柱穴は直径40cm前後で深さは床面より40~50cmであった。貯蔵穴は直径50cm前後の円形を呈し、深さは床面より72cmで深い。周溝は幅約25cm、深さ14~17cmであった。

遺物 南壁中央部に近い床面上に完形の甕が潰れた状態で出土し、他に床面や覆土中より土師器の甕や坏等が出土した。南東部床面上より銅製の耳環が出土し注目される。



第74図 19号住居跡及び出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第75図 19号住居跡出土遺物実測図(2)

19号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第74・75図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底面整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
19住-1 91	坏 土師器	3.7 11.6 - 床面+2	丸底の杯であり小型で口縁部が短い。底部と口縁部との境に明瞭な変が認められる。底部へら削り、口縁部横ナデ。	①に濃い褐色②酸化③充形④密・砂粒ほとんど含まず
19住-2	坏 土師器	(2.4)(11.0) - 床面	丸底の杯であり小型で底部が浅い。口縁部は短くゆるやかに外反する。底部へら削り、口縁部横ナデ。	①に濃い褐色②酸化③小破片(1/8以下)④密・砂粒ほとんど含まず
19住-3	小型環 土師器	- (13.0) - 床面	器表面前に砂粒が突き出ている。非常に荒い表面の壁である。内面彩も整形。	①に濃い赤褐色②酸化③実測部分1/3④2~3mmの砂粒多い
19住-4 91	甕 土師器	38.8 23.0 4.1 床面	胴部に最大径を持つ長胴の甕である。器内も深い。底部はナデにより平底、胴部へら削り、口縁部横ナデ。胴部内面ナデ整形。	①に濃い褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多量に、2~4mmの砂粒を多く含む
19住-5 147	耳環	外径2.9×3.0 内径1.4×1.5 重量19.4g	青銅製耳環である。表面の一部は剥離している。残存している表面に金箔は認められない。	①深青色③表面の一部は剥離・束地部分はほぼ完形④青銅製⑤床面+2
19住-6 91	磁石	長23.5 幅11.1 厚8.7 重量2,516g 床面-2	三側面が磁石として使用されている。三側とも磁き面が異なり、強い凹面・弱い凹面・弱い凸面を呈する。用途の違いを物語るものと思われる。	①赤褐色③磁石としては完形。④砂岩⑤吸炭状況から磁石として使用後の支脚石として転用された可能性が高い。

20号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版15 遺物写真図版91

位置 II区中央部に位置し、18号住居の南約7mでM-17グリットに属する。

概要 住居の掘り込みが浅く残存状態の悪い住居であった。

構造 床面はロームブロックを主とした土で造られ軟質である。竈焚口右側に貯蔵穴があり、柱穴はない。

規模 東西2.95m、南北3.10mである。壁高は最も残りの良い南壁で25cmである。貯蔵穴は48×60cmの楕円形を呈し、深さ18cmであった。

遺物 床面や覆土中より、土師器の甕や坏と少量の須恵器の坏や甕の破片が出土した。南東部分の床面に長さ約1.3mの炭化材が床面から10cm程高い位置で一本出土した。

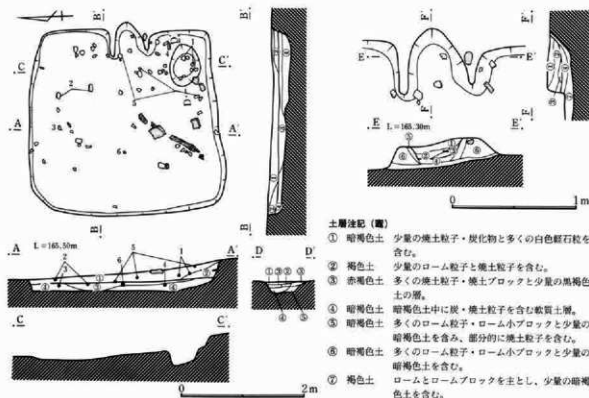
20号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央の壁面を掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の大部分が床面上に位置する。

構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土で造られている。燃焼部床面や奥壁の表面が焼けて焼土化しており、覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向60cm、両袖方向50cmである。

遺物 土師器甕の胴部破片が少量出土した。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子・ロームブロックと炭化物を含む。
- ③ 褐色土 ロームとローム小ブロックを主とし少量の炭と焼土粒子を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

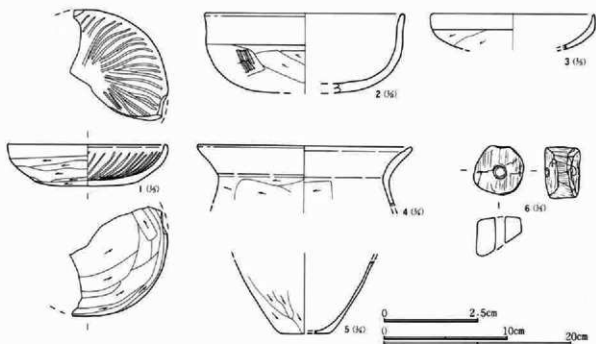
土層注記 (貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 灰黄褐色土 灰黄褐色粘土を主とした層。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ④ 暗褐色土 多くの炭と焼土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 ローム粒子とロームブロックの層。

土層注記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量の焼土粒子・炭化物と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 暗褐色土 暗褐色土中に炭・焼土粒子を含む軟質土層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑦ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

第76図 20号住居跡及び竈実測図



第77図 20号住居跡出土遺物実測図

20号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第77図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部形状等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
20住-1 91	坏 土師器	3.3 12.6 - 床面+5	底部は少し丸味を持つが、ほとんど平底を呈する。体部～口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。底部～体部へ削り・口縁部横ナデ、内側体部～底部に多くの放射状暗文が描かれている。	①褐色②酸化③1/3④密・1mm以下の砂粒をわずかに含む
20住-2	坏 土師器	(6.3) (16.0) - 床面	口径が大きくて器高の低い坏である。底部は丸くなると思われる。底部へ削り・口縁部横ナデ・内面ナデ整形。	①にぶい褐色②酸化③1/4④密・1mm以下の砂粒をわずかに含む
20住-3	坏 土師器	- (13.0) - 床面-2	丸底で小型の坏である。底部へ削り・口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③わずかな小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
20住-4	罎 土師器	- (23.0) - 床面-4	器内の薄い長斜の壁の小破片である。胴部は右-左方向へ削りにより薄く仕上げている。	①にぶい褐色②酸化③わずかな小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
20住-5	罎 土師器	- - 5.6 床面	器内の薄い長斜の壁の胴下部～底部の小破片である。器内の薄い部分は厚さ約1mmである。	①にぶい、赤褐色②酸化③胴下半～底部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
20住-6 91	臼玉	幅1.3 孔径0.25 厚さ1.0 重量3g 床面-3	横断面はほぼ円形を呈し、側面は黄褐色削りにより丸く整形。上下面は、切り離したままの状態で再調整していない。中央部に径3mmの穴が穿孔されている。	①灰白色②完形③磨石片若

21号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版16 遺物写真図版91・92

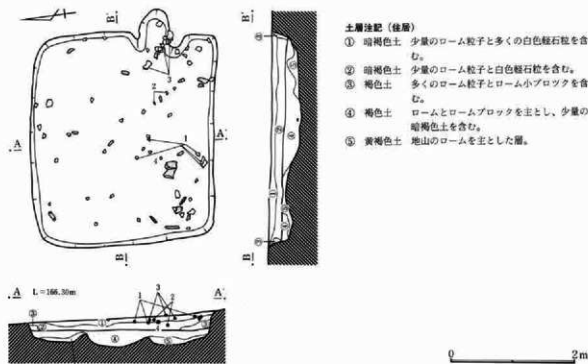
位置 II区中央部に位置し、20号住居の南西約4mでM-18グリットに属する。

概要 住居の掘り込みが浅く残存状態が悪い住居であり、形態も少しゆがんでいる。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土で造られ軟質である。貯蔵穴と柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.4m、南北2.9mで、やや歪んだ東西方向に長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁部分で32cmである。

遺物 床面や覆土中より、多くの土師器の罎や坏の破片と少量の須恵器の坏の破片が出土した。



第78図 21号住居跡実測図

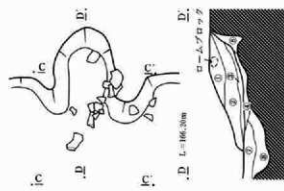
21号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央から少し南寄りの壁面を一部掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土と灰黄褐色粘質土で造られている。燃焼部床面や奥壁の表面が焼けて焼土化しており、覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向65cm、両袖方向50cmである。

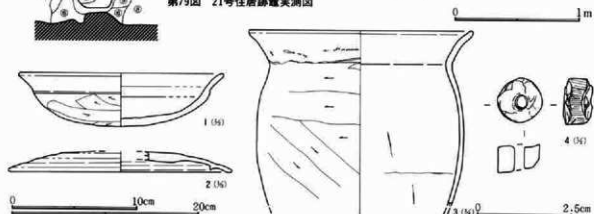
遺物 土師器類の割部破片が18片出土した。



第79図 21号住居跡竈実測図

土層注記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子と灰褐色粘土を多く含む。
- ③ 灰褐色土 ローム粒子・ロームブロックと灰褐色粘土を多く含む。
- ④ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む(灰黄褐色粘土を多く含む)。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑦ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土を含む。
- ⑧ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑨ 赤褐色土 焼土層。



第80図 21号住居跡出土遺物実測図

21号住居跡 出土遺物観察表(拝図番号第80図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②地色③残存④胎土⑤備考
21住-1 92	坏 土師器	4.2 16.4 - 床面+10	口縁部が大きく外反する圓形の坏である。作りがやや雑で口縁部外側に輪痕が残る。底部へら削り、口縁部横ナデ、内側底部手持ナデ整形。	①にぶい橙色②酸化③口縁部一部欠④1mm以下の砂粒を多く含む
21住-2	蓋 須恵器	(1.6)(18.0) - 床面+7	器高の低い坏蓋であり、つまみ部分欠。断面三角形の小さなカエリを持つ。天井部の多くの部分右回転へら削り、口縁部横ナデ。	①灰白色②還元③1/3④1mm以下の石英と黒色粒子を多く含む
21住-3 91	罐 土師器	- (24.0) - カマド内+15	器内の薄い長割の罐である。最大径は胴上部に持つ。胴上部左→右方向へら削り、口縁部横ナデ、口縁部外側に輪痕が残る。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の小さな砂粒を多く含む
21住-4 92	白玉	幅1.2 孔径0.25 厚さ0.7 重量1.7g 床面+12	横断面はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離後一部調整を行っているようである。	①灰白色③完形④滑石片岩

22号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版16 遺物写真図版92

位置 II区中央部南寄りに位置し、20号住居の南約1mでM-17、N-17グリットに属する。

概要 古墳時代43号住居と重複しており、43号住居の西側の一部を床面下まで掘り込んで造られている。住居南側の掘り込みは深いが北側は浅く残りが悪い。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていた。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.45m、南北3.60mである。壁高は最も残りの良い南側で36cmである。貯蔵穴は直径55cmのほぼ円形を呈し、深さ22cmであった。

遺物 床面や覆土中より、多くの土師器の甕や坏、須恵器の坏や甕等の破片が出土した。2重の螺旋状暗文を持つ土師器の坏が出土しており注目される。

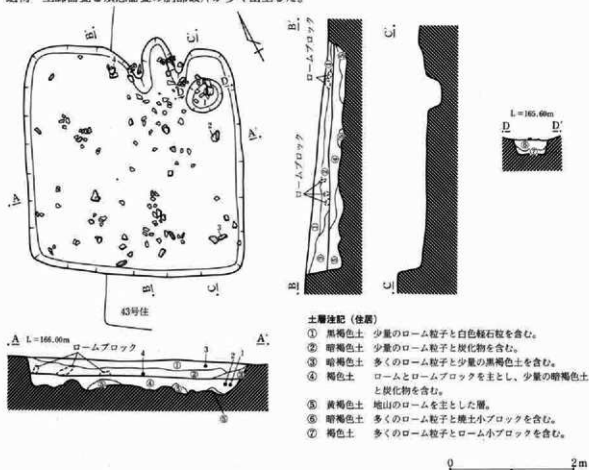
22号住居跡 (竈)

位置 住居北壁中央から少し東側の壁面を一部掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

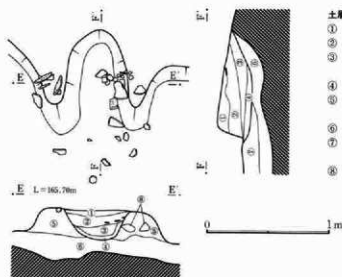
構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土で造られている。燃焼部や奥壁の表面が焼けて焼土化しており、覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向85cm、両袖方向50cmである。

遺物 土師器甕と須恵器甕の胴部破片が多く出土した。



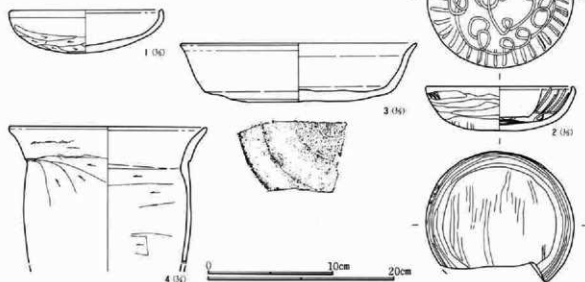
第81図 22号住居跡実測図



第82図 22住居跡踏査実測図

土層注記(覆)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子と炭を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 黒褐色土 黒褐色土中に炭と焼土粒子を含む軟質土層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑧ 黒褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の黒褐色土を含む。



第83図 22住居跡出土遺物実測図

22住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第83図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
22住-1 92	坏 土師器	3.4 12.1 - 床面+1	丸底の坏である。口縁部がなだらかに内彎する。外側口縁部と底部との境に一条の浅い沈線を持つ。底部ヘラ削り、口縁部綱ナデ。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を少量含む
22住-2 92	坏 土師器	3.5 11.6 - 床面+2	平底に近い丸味を持つ坏の完形品である。口縁部へ底部に至る内外全表面にヘラ磨きが行なわれている。口縁部放射状暗文、底部縦旋状暗文、口縁端部は内側に折り込まれている。	①褐色②酸化③口縁部一部欠④1mm以下の砂粒を少量含む
22住-3	坏 須恵器	4.6 (18.0) - 床面+18	口径が大きく浅い坏である。底部周辺部ナデ整形。周辺部以外の中央部右回転ヘラ削り、ていねいなつくりである。	①灰色②還元焼締③口縁部小破片(1/10)・底部1/4④1mm以下の石英粒を多く含む
22住-4 92	甕 土師器	- (19.0) - 床面+2	胴部に最大径を持つ長胴の甕である。胴部の器内がやや厚い。胴部右下→左上方向ヘラ削り。口縁部は厚く中央部に輪横線が残る。	①いよ褐色②酸化③実測部分1/4④1mm以下の砂粒を多く含む

23号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版16 遺物写真図版92

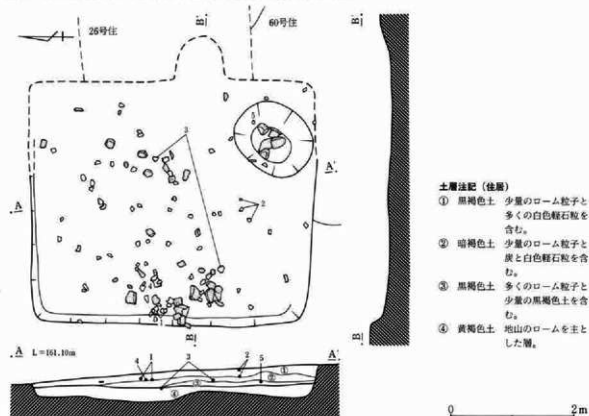
位置 II区東北部に位置し、44号住居の東約3mでI-16、J-15・16グリッドに属する。

概要 同じ平安時代の26・60号住居と東側部分で重複している。いずれも残存状態が悪く検出が困難であったが、新旧関係は23→26→60号住居の順と考えられ、3軒の中で最も古い。竈は検出されなかったが26号住居との重複や貯蔵穴の位置関係から東壁部分に想定される。

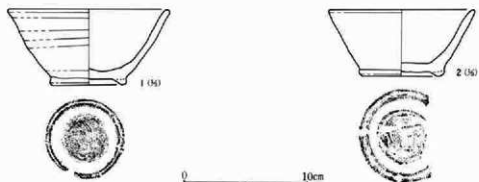
構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていた。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北4.5mである。壁高は最も残りの良い西壁部分で24cmである。貯蔵穴は1.25×1.08mの楕円形を呈し、深さ52cmである。

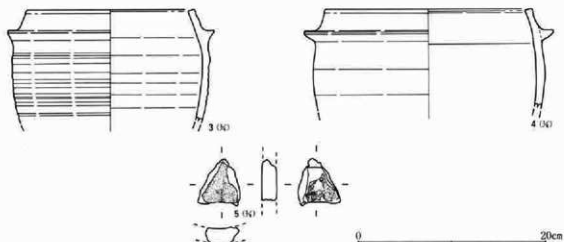
遺物 床面や覆土中より、少量の羽釜や須恵器の埴が出土した。



第84図 23号住居跡実測図



第85図 23号住居跡出土遺物実測図(1)



第86図 23号住居跡出土遺物実測図(2)

23号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第85・86図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・直径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
23住-1 92	埴 須恵器	6.1 13.0 6.0 床面+12	高台の付く埴である。体部は直線的でゆるやかに外傾する。器高が高い。高台はていねいに貼付けている。高台内側の糸切痕はていねいに消してある。	①よい褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く、1~2mm赤色粒を少量含む
23住-2 92	埴 須恵器	5.0 11.8 6.8 床面+13	高台の付く埴である。体部は直線的でゆるやかに外傾する。口縁部は外反しない。高台はていねいに貼付けてある。高台内側に糸切痕が残る。	①灰褐色②酸化③口縁部1/8・体部へ底部2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
23住-3 92	羽釜	— 18.0 — 床面	胴部へ口縁部がゆるやかに内湾する。脚は断面三角形でていねいに貼付けてある。口縁部は短い。口唇部は幅広く内傾し中央部が凹状につくられている。	①よい褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒と石英粒を多く含む
23住-4 92	羽釜	— (22.0) — 床面+11	3の羽釜に形が近い。脚は細長くし上向きにつくられている。口唇部は幅広く内傾し中央部が凹状。	①明灰褐色②酸化③尖削部分1/4④1mm以下の石英粒を多く含む
23住-5	瓦	— — — 床面+2	平瓦の小破片である。凹面布目。凸面ナデ整形。	①灰白色②還元③小破片④1mm以下の砂粒を多く含む

24号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版17 遺物写真図版92・93・147

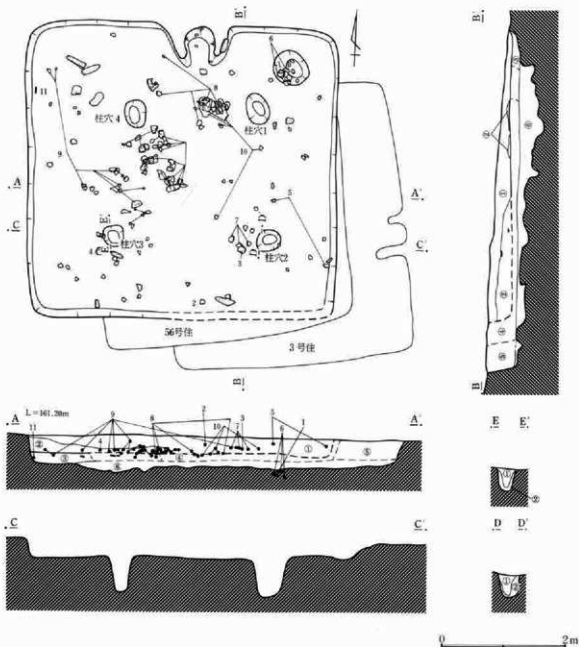
位置 I区西側に位置し、2号住居の南約2mでI-10・11、J-10・11グリットに属する。

概要 3・56号住居と重複しており、3軒とも古墳時代に属する。新旧関係は3→56→24号住居の順である。3軒の中では最も新しいが、調査段階において新旧関係を誤認して3・56号住居を先に掘り進めたため一部に調査の不備が認められた。

構造 床面は、他の2軒と重複していない部分がロームとロームブロックを主とした土で踏み固められていたため、重複している3軒の中で最もしっかりしていた。しかし、重複している部分の床面は明確でなかった。柱穴は床下調査段階において4本確認された。竈右側に円形の貯蔵穴が検出された。

規模 東西4.7m、南北5.0mである。壁高は最も残りの良い西壁面で30cmである。貯蔵穴は直径60cm前後のほぼ円形を呈し、深さは床面より約60cmと深い。柱穴1は直径35cm深さ40cm、柱穴2は直径40cm深さ60cm、柱穴3は直径35cm深さ53cm、柱穴4は直径35cm深さ63cmである。

遺物 覆土中や床面より200片以上の大量の破片とほぼ完形の土師器の坏や甕が出土した。



土層注記 (住居)

- | | |
|-------------------------------------|------------------|
| ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。 | ④ 56号住居覆土 |
| ② 暗褐色土 少量のローム粒子・白色軽石と炭化物を含む。 | ⑤ 3号住居覆土 |
| ③ 褐色土 ローム粒子とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | ⑥ 3・24・56号住居床下覆土 |
| | ⑦ 3号住居床下覆土 |

土層注記 (柱穴)

- | |
|---|
| ① 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とし、1~2mmの白色軽石と暗褐色土を少量含む。 |
| ② 褐色土 黄褐色土のローム粒子・ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 |

第17図 24号住居跡実測図

24号住居跡(竈)

位置 住居北壁やや東寄りの壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。

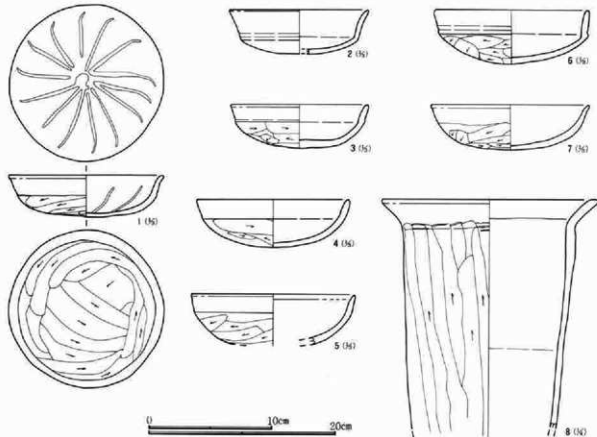
構造 ロームブロックを主体とした暗褐色土で造られており、右袖の芯材として用いられたと思われる1個の石が検出された。燃焼部床面付近からは、多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向50cmである。

遺物 土師器の環の口縁部と甕の胴部1片が出土している。

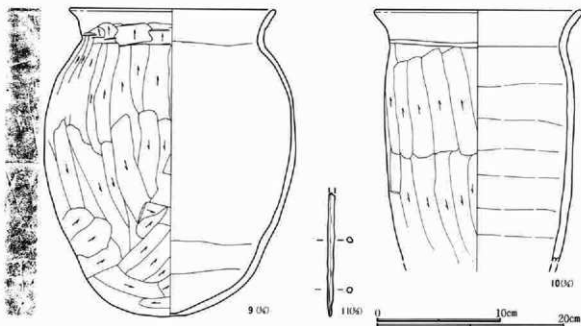


第88図 24号住居跡竈実測図



第89図 24号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第90図 24号住居跡出土遺物実測図(2)

24号住居跡 出土遺物観察表 (採回番号第89・90図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
24住-1 92	坏 土師器	3.3 12.4 - 貯藏穴内+24	丸底の坏であり、底部と口縁部との境にわずかな稜を持つ。口縁部は外脣しつつゆるやかに外傾する。外面の底部へラ削り、口縁部横ナデ、内面全体が吸炭により黒色を呈する。内側底部中心部から口縁部に向かう14本のへラ磨きが行なわれている。	①内面黒褐色・外面に白い橙色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を少量含む
24住-2	坏 土師器	(3.5)(11.2)(9.4) 床面+14	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に稜を持ち、稜直上に2本の沈線が認められる。	①橙色②酸化③1/4・底中央部欠④1mm以下の砂粒を多く含む
24住-3 92	坏 土師器	3.5 11.2 - 床面+5	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に稜を持ち稜直上に1本の区画沈線が認められる。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を少量含む
24住-4 92	坏 土師器	3.8 12.2 - 床面+4	丸底の坏であり、底部と口縁部との境の稜は明瞭でない。口縁部は外反していない。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③完形④1mm以下の少量の砂粒を含む
24住-5	坏 土師器	- 13.2 - 床面+12	丸底の坏であり、底部と口縁部との境の稜は明瞭でない。口縁部は端部においてわずかに外反する。	①に白い橙色②酸化③口縁～胴部1/3・底部欠④1mm以下の砂粒を多く含む
24住-6 92	坏 土師器	4.3 12.4 - 貯藏穴内+23	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に明瞭な稜を持ち、稜直上に2本の沈線が認められる。口縁部はわずかに外傾する。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①に白い橙色②酸化③完形④緑泥片岩の小破片を含む
24住-7 92	坏 土師器	3.6 12.6 - 床面+5	丸底の坏であり、底部と口縁部との境の稜は明瞭でない。口縁部は端部近くでわずかに外反する。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①に白い橙色②酸化③口縁部一部欠・ほぼ完形④1mm以下の砂粒を少量含む
24住-8 92	甕 土師器	- 23.0 - 床面	最大径を口縁部に、胴部最大径を肩部を持つ胴内薄い甕である。胴外側の削りは底部から口縁部に直線的に向かう。内面ナデ整形。	①明赤褐色②酸化③口縁～胴上部完形・胴下部1/3④1～2mmの砂粒・石英粒子を多く、緑泥片岩の破片を少量含む
24住-9 93	甕 土師器	32.5 22 - 床面	丸底で大型の甕である。最大径を胴上部に持つ。胴内が薄く胴部が丸い。口縁部は大きく外反する。胴部のへラ削りは上部が口縁部方向、中央が下方向、底部は右上方。底部と胴部の境に稜合痕有り。	①に白い橙色②酸化③一部を欠くが、ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く、2～3mmの砂粒を少量含む。緑泥片岩の小粒子を含む
24住-10 92	甕 土師器	- 22.2 - 床面	最大径を口縁部に持ち胴部最大径を肩部に持つ。口縁部がなだらかに外反する。胴部上半は口縁部に向かうへラ削り、中部以下は底部に向かうへラ削り。	①に白い橙色②酸化③口縁部1/2・胴部1/3④1mm以下の砂粒を多く、2～4mm砂粒を少量含む。粒子が粗い
24住-11 147	甕?	長9.7 幅0.4 厚0.4 4.1 8	鎌状工具の可能性が高い。断面形が明確でないが円形と思われる。下方に向かい細くなる。網が全面にわたり進行している。床面-8。	

25号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版17 遺物写真図版93

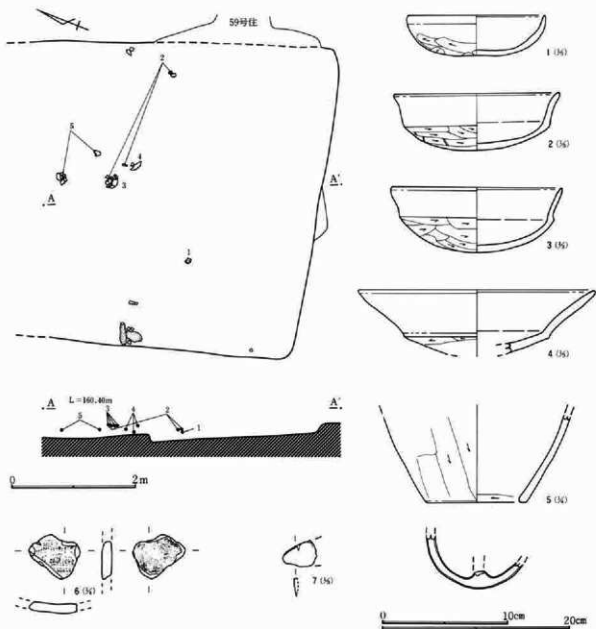
位置 II区東北部に位置し、23号住居の東北約1mでI-15グリットに属する。

概要 平安時代の57号住居と重複し、57号住居に南東部分の壁面と床面の多くの部分を掘り込まれている。2軒とも残存状態が極めて悪く、検出に多くの困難が伴ない良好な状態での調査はできなかった。竈は調査できなかった北側に想定したい。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ、軟質であった。竈・貯蔵穴・柱穴のいずれも検出されなかった。

規模 東西4.8m、南北不明である。壁高は最も残りの良い東壁で6cmである。

遺物 床面や覆土中より、土師器の坏や甕、須恵器の坏や甕等の破片が出土した。



第91図 25号住居跡及び出土遺物実測図

25号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第91図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	高さ・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②構成③残存④胎土⑤備考
25住-1 93	環 土師器	3.3 11.0 - 床面+12	底部の丸い環である。口縁部は短く横ナデにより作り出している。底部へう削り、内側底部ナデ整形。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む。密な胎土である。
25住-2 93	環 土師器	4.5 13.2 - 床面+10	丸底の環であり、底部と口縁部との境に横を持つが全体の磨耗しており明瞭でない。横直上に沈線の痕跡あり。底部へう削り、内側ナデ整形。	①褐色②酸化③3/4④1mm以下の赤色粒を多く、2~3mmの赤色粒を少量含む。
25住-3 93	環 土師器	5.2 13.6 - 床面+15	丸底の環であり、底部と口縁部との境に明瞭な横を持つ。口縁部は直立し、やがて外反しつつゆるやかに立ち上がる。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③4/5④1mm以下の砂粒を少量含む。
25住-4	高環 土師器	- (19.0) - 床面+2	高環の環部破片である。底部は浅く口縁部は長くゆるやかに外反しつつ大きく外側に開く。底部から脚部は欠けている。底部外側へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③環口縁部1/2・底部奥辺1/4・中央部欠④1mm以下の砂粒を少量含む。
25住-5 93	甗 土師器	- - (10.6) 床面+12	甗の胴下部の破片である。底部に一本の「すのこ」受けを持つ。胴部外側縦方向へう削り、下脚部へう削り、内側ナデ整形。	①にぶい褐色②酸化③胴下部1/3④1mm以下の砂粒を多く、3~5mmの石英少量含む。
25住-6	平瓦	覆土	凹面織目の瓦い布目板、凸面ナデ整形。	①灰白色②濃灰③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む。
25住-7	鉄	長(2.7) 幅(1.4) 厚(0.3) 1.6g	鎌の先端部の可能性も考えられるが不明、鎌は全面にわたり進行している。覆土。	

26号住居跡および竈 (平安時代) 遺構写真図版17 遺物写真図版93

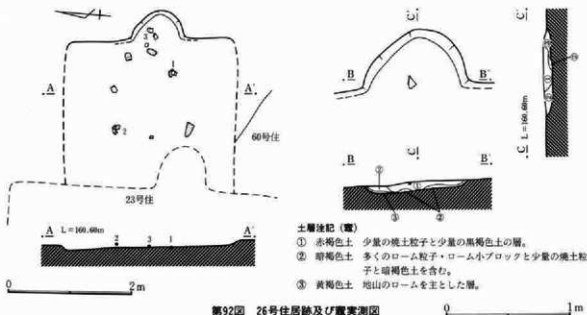
位置 II区東北部に位置し、25号住居の南約2mでJ-15グリットに属する。

概要 わずかに竈周辺のみが残存であり不明な部分が多い。同じ平安時代の26・60号住居と重複しており、いずれも残存状態が悪く検出が困難であったが、新旧関係は23→26→60号住居の順と思われる。3軒の中で、中間段階であると考えられるが、竈も残りが悪く僅かな焼土が残存していたのみであった。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、軟質である。柱穴及び貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北もほとんど残存していないが、推定で2.8mである。

遺物 床面や覆土中より、須恵器の埴と少量の羽釜の破片が出土した。



第92図 26号住居跡及び竈実測図



第93図 26号住居跡出土遺物実測図

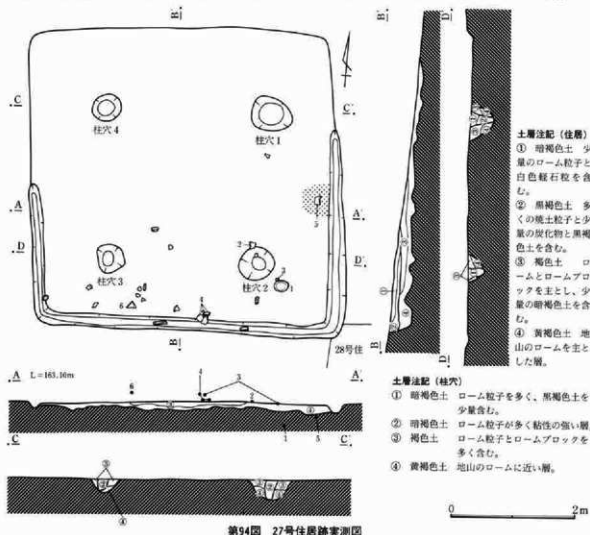
26号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第93図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
26住-1 93	埴 須器	4.8 12.5 6.4 床面	高台の付く埴である。器内が厚く素地に気泡が多い。底部は平で、口縁部は外反する。高台は断面変形である。高台内側に糸切痕は残っていない。	①にぶい褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒と長石粒を多く含む
26住-2	羽釜	- 18.0 10.0 床面+4	踵は細く小さいが、いねいに整形してある。口唇部は幅広く平で中央部が凹状になっている。	①にぶい褐色②酸化③小破片(1/8)以下④1mm以下の砂粒を多く含む
26住-3	羽釜	- - 10.0 床面	羽釜の胴下手〜底部の小破片と思われる。外面へラ削りと思われるが痕跡が明瞭でない。内部ナデ整形。	①浅黄褐色②酸化③小破片(1/10)以下④1mm以下の長石粒を多く含む

27号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版17 遺物写真図版93

位置 II区北西部に位置し、J-20・21、K-20・21グリッドに属する。

概要 奈良時代の28号住居と南東部分でわずかに重複している。住居北側の壁面と床面はほとんど残存して



第94図 27号住居跡実測図

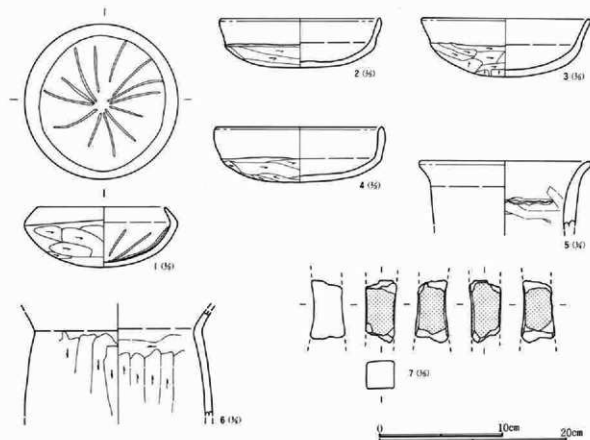
第3章 検出された遺構と遺物

いない。竈も検出されなかったが、東壁中央部床面に焼土が出土しているの、おそらくこの東壁に竈があったものと思われる。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ、中央部が踏み固められてあった。柱穴が4本ほぼ正方形に配されていた。貯蔵穴は掘られていなかった。周溝は壁面にそって掘られていた。

規模 東西5.10m、南北推定4.85mである。壁高は最も残りの良い南壁部分で17cmである。周溝は幅10～15cmで深さは10cm前後である。柱穴1は直径60cm深さ71cm、柱穴2は直径55cm深さ41cm、柱穴3は直径45cm深さ41cm、柱穴4は直径45cm深さ51cmである。

遺物 内面にヘラ磨きを持つ土師器の坏や甕と磁石が出土した。



第95図 27号住居跡出土遺物実測図

27号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号95図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底面整形等の特色	①色調②焼成③残存④粘土⑤備考
27住-1 93	坏 土師器	4.8 12.3 -- 床面-32	丸底の坏である。底面は深く口縁部は大きく内傾する。底面へラ削り、口縁部横ナデ。内側底面中央から口縁部に向かう13本の放射状の増文が描かれている。	①にぶい褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒が多く、2～4mmの長石粒を少量含む
27住-2 93	坏 土師器	3.9 (13.0) -- 床面+2	丸底の坏であり、底面と口縁部との境に明瞭な線を待つ。口縁部は長く底面は浅い。底面へラ削り。口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を少量含む
27住-3 93	坏 土師器	4.6 13.6 -- 床面	丸底の坏であり、底面と口縁部との境に明瞭な線を待つ。口縁部は長くわずかに外彎しつつゆるやかに外傾する。底面へラ削り、口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を少量含む

27号住居跡 出土遺物観察表 (採回番号95図)

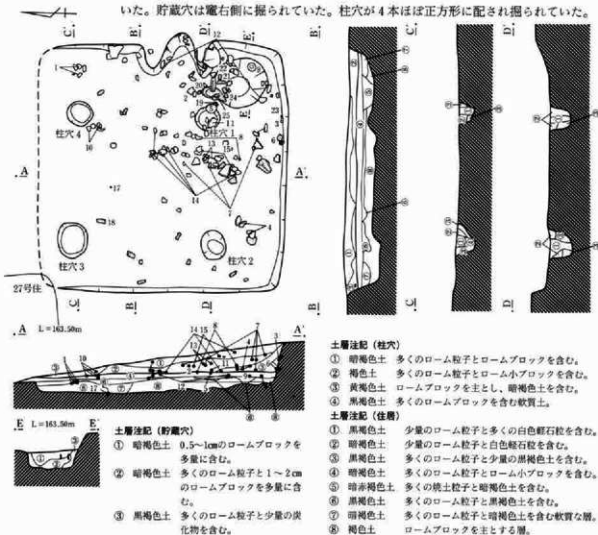
遺物番号 採回番号	器形及 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
27住-4 93	坏 土師器	4.4 13.5 - 床面+3	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に殻を持つが 低く弱い。底部が浅く口縁部は長くゆるやかに内彎 する。底部へた削り。	①にぶい橙色②焼成③2/3④1mm以下の 砂粒を少量含む
27住-5	甕 土師器	- (18.4) - 床面-18	胴部外面に多くの砂粒が突出しているため表面の整 形方法不明。内面はナゲ整形で石の突出は少ない。	①にぶい橙色②焼成③口縁部～胴上部 1/5④1～3mmの砂粒を多く含む粗い
27住-6	甕 土師器	- - - 床面+15	小破片であるため全体像不明。5の甕と異なり砂粒 の突出はない。	①にぶい橙色②焼成③胴部部分小破片 (1/6以下)④1mm以下の砂粒を多く含
27住-7 93	磁石	長さ4.9 幅2.5 厚さ2.6 重量4.2g 覆土	上下両面欠けている。断面ほぼ正方形を呈し、4面 とも磁石として使用されている。	①灰白色②小破片③流紋岩

28号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版17・18 遺物写真図版93・94・147

位置 II区北西部に位置し、K-20グリッドに属する。

概要 古墳時代の27号住居と北西部部分で接し、わずかに重複している。住居南側の掘り込みは深いが、住居北側大部分の壁面と壁面近くの床面は残存していない。

構造 床面は、ルームとルームブロックを主とした土で造られ、離手前と床面中央部は固く踏み固められていた。貯蔵穴は竈右側に掘られていた。柱穴が4本ほぼ正方形に配され掘られていた。



第96図 28号住居跡実測図

規模 東西3.9m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い南側で36cmである。貯蔵穴は直径80cmのほぼ円形を呈し、深さ36cmであった。柱穴1は直径40cm深さ39cm、柱穴2は直径45cm深さ39cm、柱穴3は直径55cm深さ38cm、柱穴4は直径40cm深さ38cmである。

遺物 床面や覆土中より、多くの土師器の環や壺、須恵器の環や蓋とも石が出土した。特に螺旋状暗文を持つ環の出土が注目される。

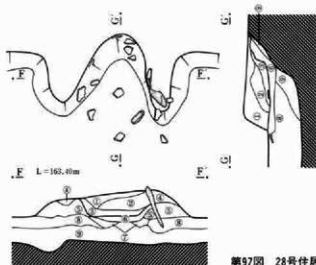
28号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央部の壁面を一部掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土で構築されている。右側の袖部分に2個も石が据えられた状態で出土した。袖の芯材として使用されていたものと思われる。燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向65cmである。

遺物 土師器壺の胴部破片が多く出土した。

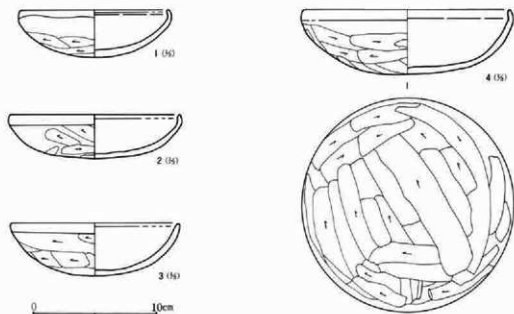


土層注記 (竈)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と焼土ブロック・炭化物を含む。
- ② 赤色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ③ 暗褐色土 黒褐色土中に灰・炭・焼土粒子を含む軟質土層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土と焼土粒子を含む。
- ⑥ 赤褐色土 地山のロームが火を受け部分的に焼土化した層。
- ⑦ 暗褐色土 ローム粒子を主とし、焼土粒子を少量含む。
- ⑧ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑨ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

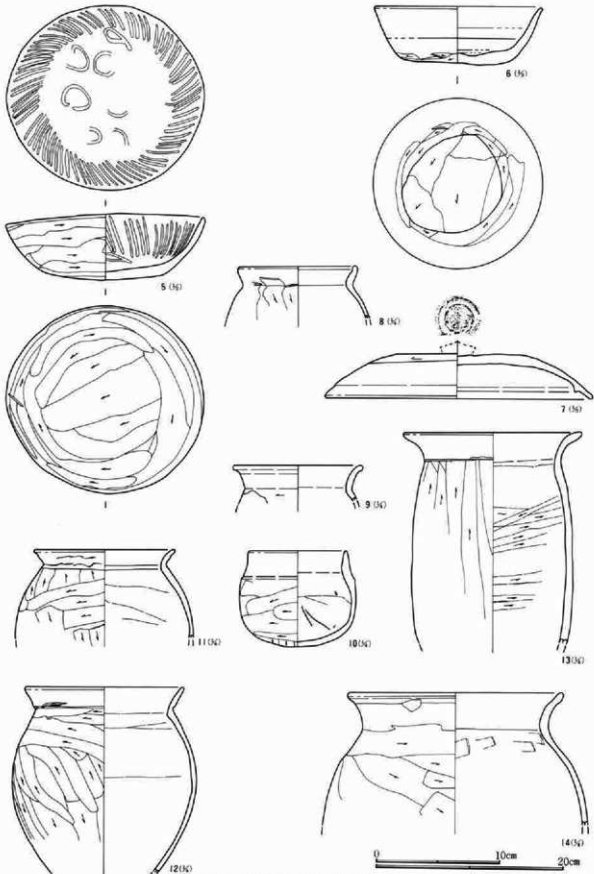
第97図 28号住居跡竈実測図

0 1m



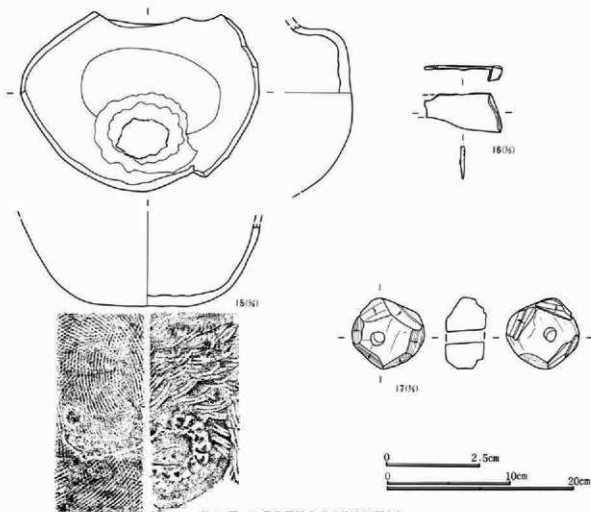
第98図 28号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第99図 28号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第100図 28号住居跡出土遺物実測図(3)

28号住居跡 出土遺物観察 (押図番号第98・99図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底面整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
28住-1 93	坏 土師器	3.8 (11.8) - 床面-3	丸底の坏であり、口縁部は短く大きく内傾する。底部はヘラ削りにより丸く仕上げている。口縁部横ナデ、内面ナデ整形。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
28住-2 93	坏 土師器	3.5 (13.6) - 床面+10	底面の浅い丸底の坏である。口縁部は短く大きく内傾する。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ整形。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
28住-3 93	坏 土師器	4.2 13.6 - 床面+18	丸底の坏である。口縁部は1・2と異なる内傾しないのでゆるやかに外傾する。色調も少し異なる。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①において褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
28住-4 93	坏 土師器	5.1 16.4 - 床面+2	丸底を呈するが底部中央部は平底に近い。底部周辺部は急傾斜で立ち上がり、口縁部が大きく内傾する。底部ヘラ削り、口縁部横ナデでいいねいに仕上げている。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を少量含む
28住-5 93	坏 土師器	5.2 15.9 - 床面	底面は丸味を持つが平底に近い。体部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。口縁部はわずかに内傾する。内側底部に螺旋状暗文が描かれているが、その多くが消えかけている。内側体部の全面にわたり暗文が細かく描かれてる。	①褐色②酸化③完形④漆・粉状を呈し触れると胎土が手に付着する。
28住-6 94	坏 須恵器	4.5 13.4 8.3 床面	平底を呈する坏であり、体部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。口縁部はわずかに外傾する。底部手持ヘラ削り、体部下端も手持ヘラ削り。口縁部右回転。	①底部外面において褐色・他の表面薄灰色②還元③ほぼ完形④1~2mmの長石粒を多く含む

28号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号99・100図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
28住-7 93	甕 須臾器 床面	- 21.2 -	大型の坏重である。つまみは欠損している。内側に断面三角形のカエリを持つ。天井部はクロク左回転によるへら削りで平らに作られている。	①にぶい橙色②酸化③④1~2mmの長石粒を多く含む
28住-8 94	小型甕 土師器 床面	- (13.0) -	丸胴の小型甕の小破片である。胴部へ削り、口縁部横ナデ、器表面は寛く凸凹が目立つ。	①にぶい橙色②酸化③口縁部1/2・胴部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
28住-9 94	小型甕 土師器 床面-8	- 14.0 -	丸胴の小型甕である。胴部の器内は薄く口縁部の器内は厚い。口縁部上端は大きく外反する。	①にぶい橙色②酸化③口縁部→胴部ほぼ完全④1mm以下の砂粒を大量に含む
28住-10 94	小型甕 土師器 床面	10.2 10.6 -	丸底の小型甕である。胴部と口縁部との境に稜を持ち、横線環と技法的に共通する。胴部右→左方向へ削り。内面体→底部ナデ整形でいぬいな作り。	①にぶい橙色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
28住-11 94	甕 土師器 床面	- (15.0) -	胴部の丸い甕であり、器内が薄い。口縁部は「く」の字状に大きく外反する。口縁部外側中央部に輪状痕が残る。胴部上半右→左方向へ削り。	①灰青色②酸化③口縁→胴上部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
28住-12 94	甕 土師器 床面	- (17.0) -	器内の薄い甕である。口縁部は大きく「く」の字状に外反する。胴部右→左方向へ削り、胴中央部右→左方向へ削り、内面ナデ整形。	①にぶい橙色②酸化③1/3・底部欠④1mm以下の砂粒を少量含む
28住-13 94	甕 土師器 床面+10	- (19.0) -	最大径を口縁部に持ち、胴部の最大径が胴部にくる長胴の甕である。胴部外側底→口縁部に向かう縦方向へ削り、内面ナデ整形。	①にぶい赤褐色②酸化③1mm以下の砂粒を多く、3~4mmの砂粒を少量含む
28住-14 94	甕 土師器 床面	- (23.2) -	胴部の丸い甕であり、器内が薄い。口縁部はなだらかに外反し、端部が内厚となる。外側胴上部左→右方向へ削り、口縁部横ナデ。	①にぶい橙色②酸化③2/5④1mm以下の砂粒を多く含む。
28住-15 94	甕 須臾器 床面+7	- - -	甕の胴下半~底部の破片である。内面同心円文、外面平印平行目文。外側底部に輪状の粘土が溶着している。大きな量で焼成中に溶解し、ゆがむ。焼成後胴上半~口縁部を取りのぞき容器として利用したのと思われる。整線な焼物である。	④外面黒色・内面灰色②還元焼締③胴下半~底部完形④1~2mmの長石粒を多く含む
28住-16 147	鎌	長さ5.7 幅3.0 厚さ0.2 14.4g 覆土	鎌の基部の破片である。長期にわたりくり返し器いで使用したため、基部の刃部幅3cmと比較して中央部付近の刃部幅は1.8cmと狭くなっている。調査時において先端部欠損。基部で鈔の装着する部分は鋭角に折り曲げている。	
28住-17 94	白玉	幅1.9 孔径0.35 厚さ1.1 4g 床面-30	他の多くの白玉と異なり、側面に多くのノミの痕跡を残す。荒砥による削り痕は残っていない。中央部に径3mmの穴が穿孔されている。おそらく白玉の未製品と思われる。	①灰白色②完形④滑石片岩
28住-18 94	石	長さ14.0 短辺6.4 厚さ2.1 320g	扁平な石である。側面に1ヶ所凹状の部分がある。	①淡緑色②完形④網罟雲母石墨片岩⑤床面-8
28住-19 94	石	長さ29.9 短辺26.5 厚さ3.0 290g	扁平な石であり、約半分を欠損している。	①淡緑色③約1/2欠損④点紋石墨片岩⑤床面-24
28住-20 94	石	長さ29.1 短辺26.1 厚さ3.6 300g	欠損部以外の表面全体が磨耗している。	①赤灰色③約1/2④紅麻網罟雲母石墨片岩⑤床面-25
28住-21 94	石	長さ13.8 短辺26.4 厚さ2.4 395g	扁平な石である。中央部分がわずかに凹状を呈する。こも石と思われる。	①淡緑色③完形④網罟雲母石墨片岩⑤床面-28
28住-22 94	石	長さ20.2 短辺29.2 厚さ2.0 246g	扁平で方形に近い石である。表面全体が磨耗している。	①淡黄色③完形④砂岩⑤床面-28
28住-23 94	石	長さ14.6 短辺26.5 厚さ3.2 450g	扁平な石である。両側面に1ヶ所凹状の欠損部がある。	①淡褐色③完形④点紋網罟雲母石墨片岩⑤床面-12
28住-24 94	石	長さ16.0 短辺25.8 厚さ5.1 777g	横断面がほぼ方形に近い細長い石である。重量がある。側面中央部に欠損部を持つ。	①淡緑色③完形④紅麻網罟雲母石墨片岩⑤床面-40
28住-25 94	石	長さ12.2 短辺26.8 厚さ3.1 420g	扁平でやや短い石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④網罟雲母石墨片岩⑤床面-28

29号住居跡 (時代不明) 遺構写真図版18

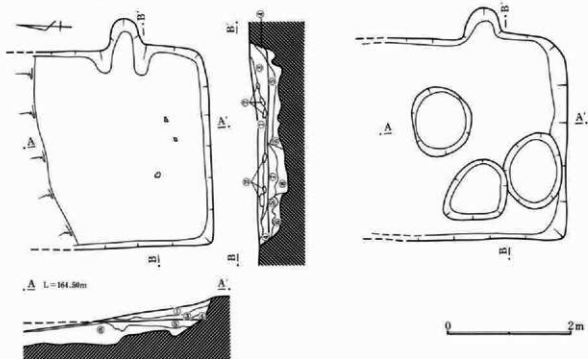
位置 II区西北部に位置し、30号住居の西約6mでK-21グリットに属する。

概要 北側が低い傾斜面に造られた住居であるため南側の残りは良好であるが、北側大部分の壁面と床面は残存していない。出土遺物が少なく時代の確定はできなかった。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ、竈周辺が踏み固められてあった。貯蔵穴と柱穴は掘られていなかった。床面下より土坑が3基検出された。

規模 東西2.6m、南北不明である。壁高は最も残りの良い北壁で36cmである。床下土坑は直径80~90cmのやや歪んだ円形を呈し、深さは床面より35cm前後である。

遺物 床面や覆土中より、古墳時代と奈良時代の少量の土師器の坏と甕の破片が出土した。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子和多くの白色軽石粒を含む。
- ② 黄褐色土 ロームブロック。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子和白色軽石粒を含む。東壁付近には灰色粘土小ブロック少量を含む。
- ④ 褐色土 多くのローム粒子和少量の褐色土を含み、粘性が強い。
- ⑤ 暗褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 黄褐色粘質土 ロームブロックと黒色土のブロックを含む。
- ⑧ 暗褐色土 ローム粒子和ローム小ブロックを多く、黒色土を少量含む。

第101図 29号住居跡及び床下実測図

29号住居跡 (竈)

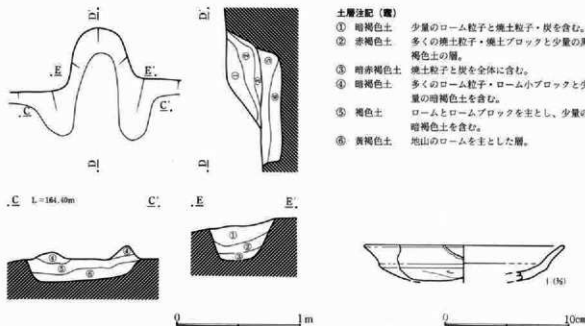
位置 住居東壁の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置する。

構造 ロームを主体とした暗褐色土で造られている。覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向90cm、両袖方向50cmである。

遺物 土師器の甕の破片がわずかに出土した。

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第102図 29号住居跡竈及び出土遺物実測図

29号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第102図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種類	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④断片⑤備考
29住-1	皿形环 土師器	- (16.0) - 覆土	皿形环の小破片である。丸底の底面から口縁部が大きく外反する。底面と口縁部との境に横線がある。	①にぶい色②酸化③小破片 (1/8以下) ④1mm以下の砂粒を少量含む

30号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版18・19 遺物写真図版94・95

位置 II区北東部に位置し、K-20グリットに属する。

概要 北側が低い傾斜面に造られた住居であるため南側の残りは良好であるが、北側の壁面と床面の残りは悪い。北壁周辺の壁面と床面は残存していない。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ、電手前と床面中央部は固く踏み固められていた。貯蔵穴は電右側にあり、柱穴は掘られていなかった。床面下中央部に大きな長方形の床下土坑が掘られていた。

規模 東西2.90m、南北は推定3.05mである。壁高は最も残りの良い南側で37cmである。貯蔵穴は直径50cmのほぼ円形を呈し深さ8cmで浅い。長方形の床下土坑は1.60×1.05mで、深さは45cmであった。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の甕や坏の破片と磁石が、また南東コーナーの床面上に9個のこも石がまとめて出土した。電左側の床面上にほぼ完形の土師器甕が、潰れたような状態で出土した。

30号住居跡 (竈)

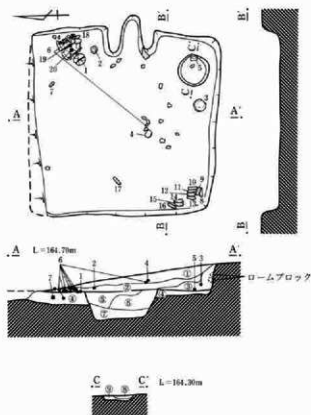
位置 住居東壁中央部の壁面を一部掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土で造られている。右側の袖部分に石が据えられた状態で出土した。袖の芯材として使用されていたものと思われる。燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

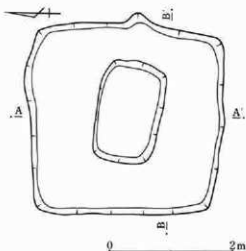
規模 煙道方向60cm、両袖方向38cmである。

遺物 土師器甕の胴部破片が少量出土した。

第3章 検出された遺構と遺物

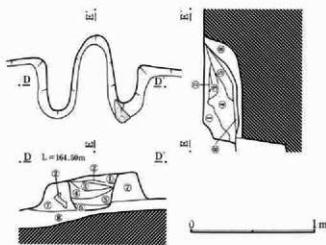


第103図 30号住居跡及び床下実測図



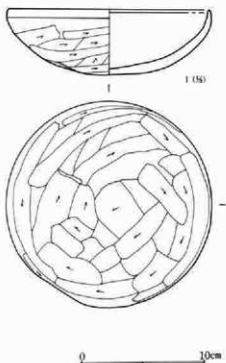
土層注記(住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子と少量の暗褐色土を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ⑥ 黒褐色土 多くのローム粒子と黒色土を含む。
- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子と多くの炭を含む。壁面は焼けている。
- ⑧ 暗褐色土 多くのローム粒子と炭を含む。
- ⑨ 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。

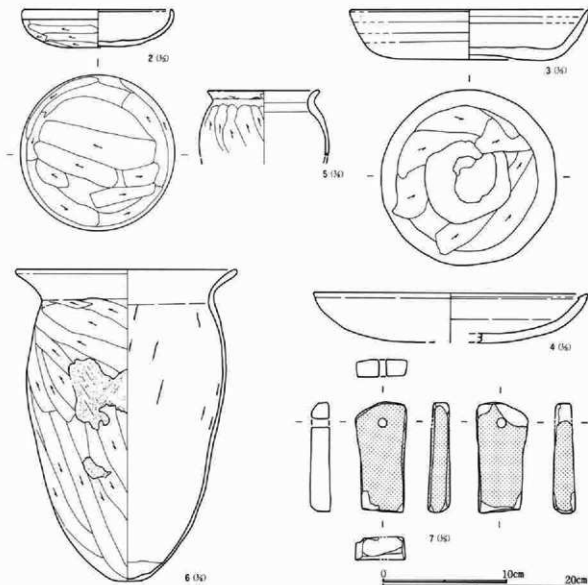


土層注記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
- ② 灰黄褐色粘質土 多くの粘土ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ⑥ 暗褐色土 黒褐色土中に炭・焼土粒子を含む軟質土層。
- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑧ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第104図 30号住居跡竈及び出土遺物実測図(1)



第105図 30号住居跡出土遺物実測図(2)

30号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第104・105図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
30住-1 94	杯 土師器	5.2 16.1 - 床面+6	丸底の杯であり、底部が深い。口縁部は短く内傾する。底部は手持へつ削りにより削り出しており、削りの単位が細かい。内面全面ナズ整形。	①褐色②焼成③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く含む
30住-2 94	杯 土師器	3.0 12.0 - 床面+4	浅い杯であり、底部中央部は平底に近い。口縁部は短くなだらかに内傾する。平底に近い底部のへつ削りによりへつ削り度を消している。口縁部ナズ。	①褐色②焼成③完形④1mm以下の砂粒を少量含む。角閃石を多く含む
30住-3 94	甕 須恵器	4.1 19.2 14.0 床面+8	浅く口径の大きい甕である。底部中央が盛り上がっている。外側底部は、周辺部以外中央部手持へつ削りによりへつ削り度を消している。	①青灰色②還元焼締③口縁部を一部欠損するがほぼ完形④1mm前後の長石粒を多く含む
30住-4 95	甕 須恵器	3.9 (22.0) (17.0) 床面+10	焼締によるためか歪んでいる。口唇部は内傾し内側に縁部を持つ。外側左回転へつ削り。	①灰色②還元焼締③1/5-底部中央部欠損④1~2mmの長石粒を多く含む

30号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第105図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
30住-5 95	小塚壺 土師器	— (12.0) — 床面	胴部の器内が薄く口縁部は厚い。口縁部は短く外反する。外面胴部底部から口縁部に向かうへう張り。	①表面暗赤褐色・断面赤褐色②酸化③1/3④1~2mmの赤色粒子を少量含む
30住-6 95	壺 土師器	33.0 23.7 3.8 床面	器内の薄い灰釉の裏であり、ほぼ完形品である。最大径は口縁部に持ち、胴部の最大径は胴上半部である。外面胴部上半は右下→左上方向、下半部は左上→右下方向のへう張り、内面ナダ整形、口縁部横ナダ。	①内面→口縁部→外側胴部褐色、その他の外面赤褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く含む
30住-7 95	磁石又は脚石	長さ8.7 幅4.1 厚さ1.9 重量50g 床面-8	薄い板状を呈し、天井部近くに径約7mmの穴が穿穴されている。6面すべてが磨かれている。元来は磁石として使用されたものが破損等により脚石として再利用されたものとも考えられる。	①灰白色②磁石としては完形、磁石としては小破片④流紋岩
30住-8 95	石	長辺13.5 短辺24.7 厚さ4.2 415g	中央部がやや幅広い、表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形③緑泥片岩⑤床面+4
30住-9 95	石	長辺11.3 短辺25.2 厚さ4.1 380g	細長い石である。一部欠損している。欠損部以外の表面全体が磨耗している。	①淡緑色②一部欠損④点紋緑泥片岩⑤床面+5
30住-10 95	石	長辺14.4 短辺24.8 厚さ2.7 205g	厚みの薄い石であり軽量である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形③点紋石墨緑泥片岩⑤床面+4
30住-11 95	石	長辺14.1 短辺25.1 厚さ2.5 260g	細長い石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形③網寶母石墨片岩⑤床面+4
30住-12 95	石	長辺14.3 短辺25.2 厚さ3.0 264g	細長い石である。表面全体が磨耗している。欠損している部分も磨耗している。	①淡緑色②側面の一部欠損④網寶母石墨片岩⑤床面+5
30住-13 95	石	長辺13.4 短辺26.0 厚さ2.3 313g	細長く薄い石である。表面全体が磨耗している。	①薄緑色②完形③点紋石墨緑泥片岩⑤床面+6
30住-14 95	石	長辺14.6 短辺25.5 厚さ3.4 350g	細長い石である。表面全体が磨耗している。横面の一部に凹状の削り込みあり。	①淡緑色②完形③網寶母石墨片岩⑤床面+4
30住-15 95	石	長辺14.1 短辺25.5 厚さ4.1 484g	細長い石であるが、やや幅広い。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形③網寶母石墨片岩⑤床面+4
30住-16 95	石	長辺13.9 短辺24.4 厚さ3.0 335g	細長い石でありやや小型である。表面全体が磨耗している。	①薄緑色②完形③石墨緑泥片岩⑤床面+2
30住-17 95	石	長辺14.6 短辺25.9 厚さ4.1 602g	中央部がやや幅広い不定形を呈する。表面全体が磨耗している。	①薄緑色②完形③緑泥片岩⑤床面+3
30住-18 95	石	長辺13.7 短辺26.2 厚さ4.3 396g	中央部がやや幅広い不定形を呈する。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形④点紋網寶母石墨片岩⑤床面
30住-19 95	石	長辺13.3 短辺26.3 厚さ3.3 442g	細長く薄い石である。表面全体が磨耗している。欠損部も磨耗している。	①淡緑色②上下両面欠損④点紋緑泥片岩⑤床面-2
30住-20 95	石	長辺12.2 短辺24.9 厚さ3.5 345g	細長い小型の石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形④点紋緑泥片岩⑤床面-3

31号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版19 遺物写真図版95

位置 II区中央部に位置し、L-20・21グリットに属する。

概要 北側が低い傾斜面に造られた住居のため南側の残りは良好であるが、北側の壁面と床面の残りは悪い。

構造 床面は、ルームとルームブロックを主とした土で造られ、竈手前と床面中央部は固く踏み固められている。貯蔵穴と柱穴は掘られていなかった。

規模 東西2.75m、南北2.50mである。壁高は最も残りの良い南側で23cmである。

遺物 床面や覆土中より、少量の土師器の壺や坏と須恵器の坏の破片が出土した。

床下 床面中央部に直径90cmの円形を呈し、深さ20cmの床下土坑が検出された。

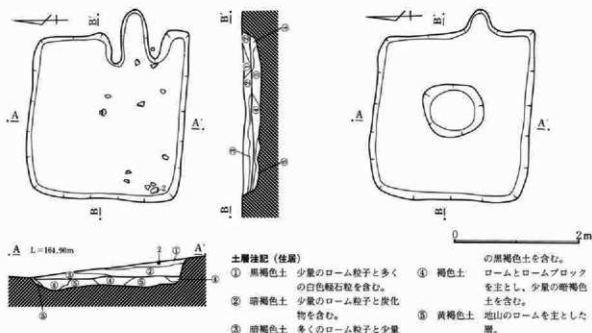
31号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央部やや南寄りの壁面を一部掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

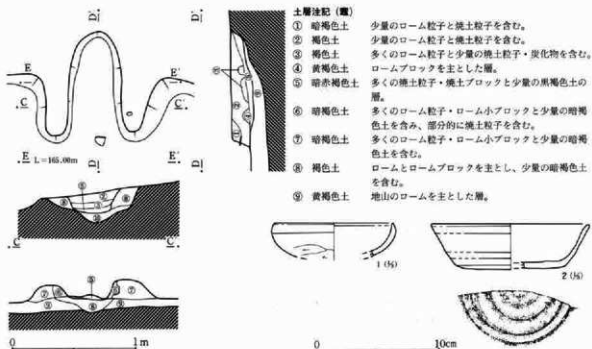
構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土で造られている。燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向80cm、両袖方向40cmである。

遺物 土師器壺の胴部破片が少量出土した。



第106図 31号住居跡及び床下実測図



第107図 31号住居跡及び出土遺物実測図

31号住居跡 出土遺物観察表 (挿入番号第107図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径 (cm)	出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
31住-1	坏	-	(9.6) -	丸底を呈し、底部の浅い小さな坏である。口縁部は短く内彎する。底部へク削り、口縁部横ナゲ。	①明赤褐色②熟化③小破片(1/5以下) ④1mm以下の砂粒を含む
31住-2 95	土師器 環	3.6 (12.6) (7.6)	須原窟 床面+20	平底の坏であり、口縁部はゆるやかに立ち上がる。底部右回転へク削り、口縁部にわずかにクログ痕が残る。作りがよい坏である。	①灰色②還元焼成③1/2④1mm以下の 長石粒を少量含む

32号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版19・20 遺物写真図版95

位置 II区西北部に位置し、31号住居の南約1mでL-20グリットに属する。

概要 北側が低い傾斜面に造られた住居のため南側の残りは良好であるが、北側の壁面と床面の残りは悪く、北側床面と壁面はほとんど残っていない。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、竈周辺から貯蔵穴付近にかけて少し固く踏み固められてあった。貯蔵穴は部分的に南壁を掘り込んで拡張した状態で掘られていた。

規模 東西3.0m、南北は西壁側で2.70m、東壁側で2.95mであり、西側がやや狭い。壁高は最も残りの良い東壁部分で23cmであった。貯蔵穴は60×80cmの楕円形を呈し深さ26cmである。

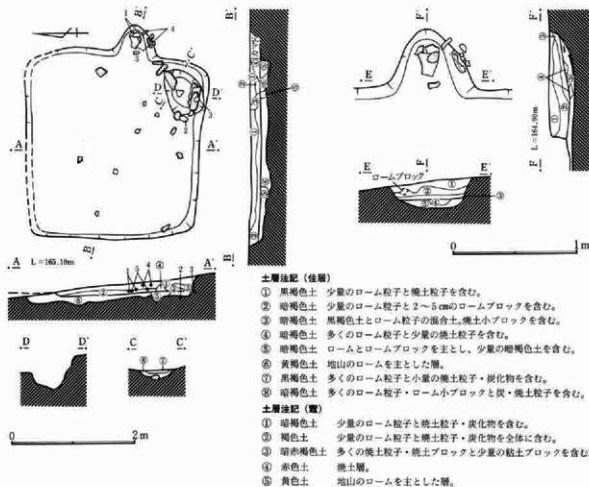
遺物 床面や覆土中より、少量の須恵器の埴や坏、羽釜等が出土した。竈焚口の右側から貯蔵穴にかけて長さ20～25cmの細長い石が6個出土した。貯蔵穴上に位置する3個は重なっていた。

32号住居跡 (竈)

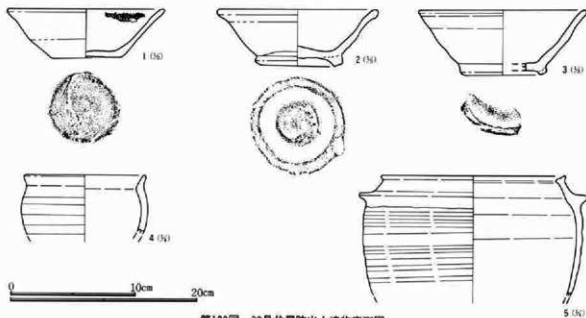
位置 住居東壁やや南寄りの壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の大部分は壁面部から外側に位置する。

構造 竈内より支脚石の可能性のある石が1個出土した。また焚口から貯蔵穴にかけて出土した6個の石は電構梁材の可能性もあるが、ほかに竈内から石が全く出土していないため石組の竈とは決められない。燃焼部覆土中に多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 燃焼部で煙道方向60cm、両袖方向65cmである。 遺物 多くの羽釜と須恵器坏の破片が出土した。



第108図 32号住居跡及び竈実測図



第109図 32号住居跡出土遺物実測図

32号住居跡 出土遺物観察表(押図番号第109図)

遺物番号 図版番号	器形及 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
32住-1 95	浅 須恵器	3.9 12.7 5.5 カマド内直上 床面+5	底部の小さな平であり、口縁部は直線的に立ち上がり、上端で少し外反する。底部右回転糸切痕。口縁部外側に輪襷痕が残る。	①淡褐色②酸化③2/3④1mm以下の長石粒を多く含む
32住-2 95	浅 須恵器	4.5 13.0 6.8 床面+10	器内が厚く、高台の付く埴である。高台は雑な作りで左右が対象でない。口縁部はなだらかに内彎しつつ立ち上がり、上端で大きく外反する。	①淡褐色②酸化③2/3④1mm以下の長石粒を多く含む
32住-3	浅 須恵器	5.2 13.4 7.0 床面	器高が高く、高台の付く埴である。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁上端はほとんど外反しない。高台の貼付は比較的いいわいである。	①淡褐色②酸化③1/5④1mm以下の長石粒を多く、角閃石を少量含む
32住-4	小形壺 須恵器	- 13.0 - 床面+9	仕上げ段階でロクロを使用したと思われる要で、ヘアリ痕は認められない。	①表面黒褐色・断面灰色②酸化③実測部分1/4④1mm以下の砂粒を少量含む
32住-5 95	羽釜	- (19.6) - 床面+2	口縁部が幅広く大きく内傾する羽釜である。口唇部は幅広く平で内傾している。脚はいいわいに整形。	①浅黄褐色②酸化③実測部分1/2④1mm以下の長石粒を多く含む

33号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版20 遺物写真図版95

位置 II区北西側に位置し、31号住居の西約5mでL-21・22グリッドに属する。

概要 北側が低い傾斜面に造られた住居で、残存状態が非常に悪い住居であった。南東部分の貯蔵穴周辺の残りは良好であったが、他は南壁部分と竈周辺部分が残存しているだけで、他の床面と壁面は残存していない。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られていた。竈焚口右側に貯蔵穴があり、柱穴は4本掘られていた。周溝が東壁と南壁に検出された。

規模 東西推定4.6m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い南壁で21cmである。貯蔵穴は55×60cmのやや楕円形を呈し深さ48cmであった。柱穴1は直径35cm深さ43cm、柱穴2は直径35cm深さ45cm、柱穴3は直径40cm深さ78cm、柱穴4は直径35cm深さ63cmである。周溝は幅25cm深さ4cmである。

遺物 床面や覆土より土師器の甕や坏等が出土した。

33号住居跡(竈)

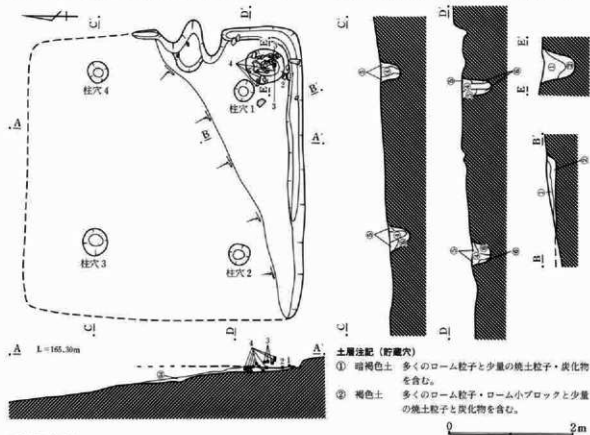
位置 東側の床面に燃焼部と袖部の下部が残っているのみであり、竈の大部分は残存していない。

第3章 検出された遺構と遺物

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で構築されていたものと思われる。燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向推定80cm、両袖方向推定50cmである。

遺物 土師器製の破片がわずかに出土した。



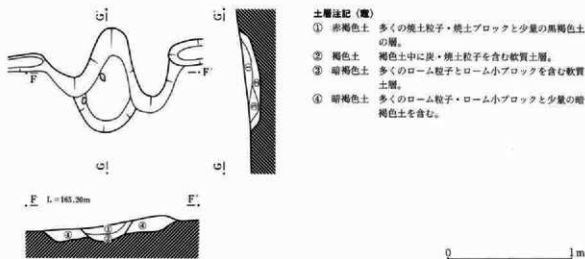
土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む軟質土。
- ③ 黄褐色土 地山のロームに近い層。

土層注記 (貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子と炭化物を含む。

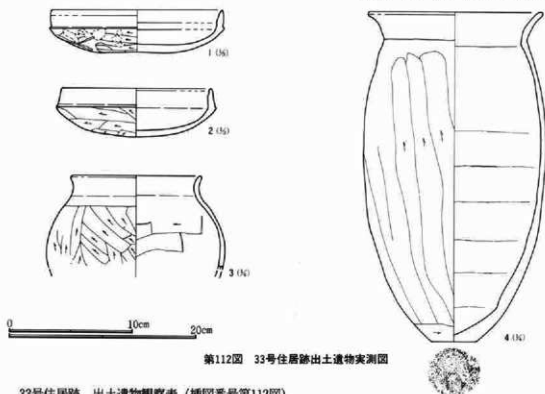
第110図 33号住居跡実測図



土層注記 (竈)

- ① 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ② 褐色土 褐色土中に炭・焼土粒子を含む軟質土層。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む軟質土層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。

第111図 33号住居跡竈実測図



第112図 33号住居跡出土遺物実測図

33号住居跡 出土遺物観察表 (揮図番号第112図)

遺物番号 図版番号	器形及び 類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
33住-1 95	杯 土製器	3.4 (13.8) 3.4 床面	器高が浅く、底部中央付近はほとんど平底を呈する。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は肉厚で直立し上端が断くなる。	①内面黒色・外面黒褐色・断面に薄い褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
33住-2 95	杯 土製器	3.9 (12.0) - 床面	器高が浅く底部の丸い杯である。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は少し内傾気味に立ち上がる。底部へうろり、口縁部横ナダ。	①内面黒色・外面明赤褐色・断面明赤褐色②酸化③1/2④1mm以下の長石粒を多く含む
33住-3 95	壺 土製器	- (14.0) - 床面+5	胴部の丸い壺である。口縁部は外反しつつ直立気味に立ち上がる。胴部内外面単位の細いへら整形。口縁部横ナダ。	①にぶい・褐色②酸化③小破片(口縁部1/10以下、胴上部1/5以下)④1mm以下の砂粒を少量含む
33住-4 95	壺 土製器	35.0 18.5 5.0 床面	長胴の壺であり、最大径を胴中央部に持つ。口縁部はゆるやかに外反する。底部は小さく平で植物の茎状の圧痕あり。胴部外側に多くの長石粒が浮き出ており、器表面が荒い。	①にぶい・褐色②酸化③口縁部1/8・胴上部1/2・胴下部・底部完形④1~3mmの長石粒を多く含む

34号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版20 遺物写真図版96

位置 II区中央部南端に位置し、21号住居の南約8mでN-17、O-17グリットに属する。

概要 残存状態の悪い住居であり、南側半分の壁面と床面は少し残存しているが、北側の壁面と床面の残りは悪くわずかしか残っていない。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

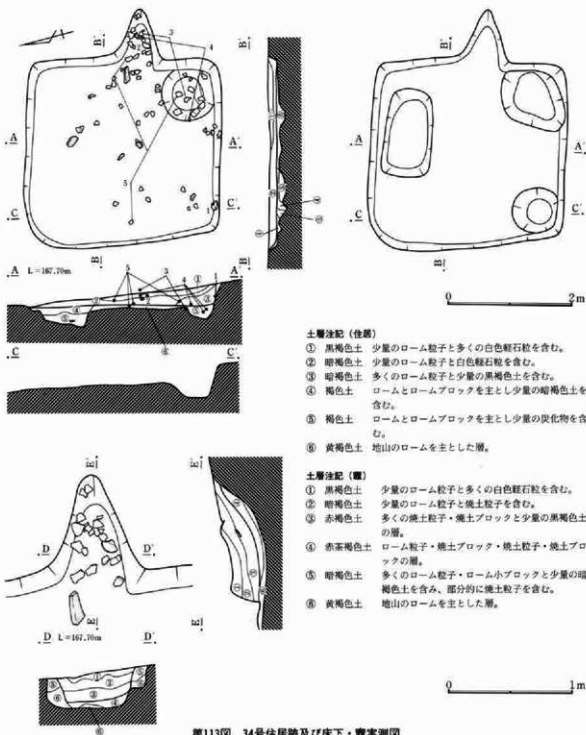
規模 東西3.0m、南北は3.1mで、ほぼ正方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁部分で30cmであった。貯蔵穴は直径約80cmの円形を呈し深さ13cmである。

遺物 床面や覆土中より、須恵器の壺や杯、羽釜等が出土した。

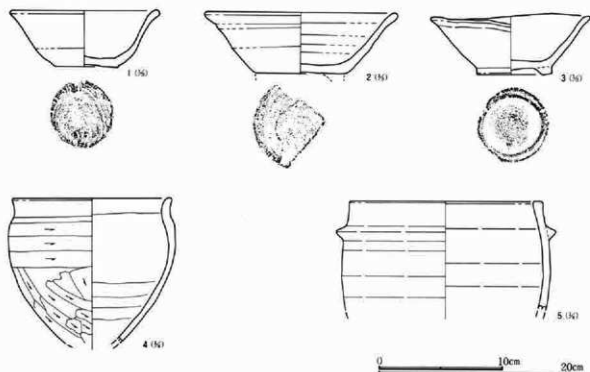
床下 北側に1.40×0.75mの長方形を呈し深さ26cmの床下土坑が、また南西端部に直径70cmの円形を呈し深さ24cmの床下土坑が掘られていた。

34号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央部の壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の大部分は、壁面部から外側に位置する。
構造 残存状態が悪く詳しい内容は不明である。石が竈手前に1個残存していたが、他に出土していないためローム粒子を主体とした暗褐色土で構築されていたものと思われる。燃焼部覆土中に多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。
規模 煙道方向85cm、両袖方向65cmである。 **遺物** 多くの須恵器環・塊・壺と羽釜の破片が出土した。



第113図 34号住居跡及び床下・竈実測図



第114図 34号住居跡出土遺物実測図

34号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第114図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
34住-1 96	環 須恵器	4.5 12.0 5.0 床面+12	底径の小さな環である。口縁部は内彎しつつ立ち上がり、上部部で大きく外反する。底部右回転糸切痕。口縁部がゆがんでいる。	①淡黄褐色②酸化③欠形④1mm以下の長石粒を多く含む
34住-2 96	埴 須恵器	4.8 (15.6) (7.4) カマド内+14	高台を持つ埴であり、高台がそっくりはなされていない。口縁部は直線的に外傾し、口縁上端はわずかに外反する。底部に右回転糸切痕。	①灰白色②還元③1/3④1mm以下の長石粒を多く含む
34住-3 96	埴 須恵器	4.6 12.8 5.8 貯蔵穴内	底径の小さな埴である。高台は細く均一でなく雑な作りである。口縁はわずかに内彎しつつ立ち上がり、上部部でわずかに外反する。	①淡黄褐色②酸化③3/4④1mm以下の長石粒を多く含む
34住-4 96	甕 須恵器	— (17.0) — カマド内+15 貯蔵穴内	胴部に最大径を持つ甕である。口縁部はゆるやかに外反しつつ直立気味に立ち上がる。胴上部横ナデ、胴下部左上→右下へ削り、羽釜に共通する整形。	①にぶい褐色②酸化③口縁部1/6・胴部2/3・底面④1mm以下の長石粒を多く含む
34住-5 96	羽釜 —	— (20.6) — 床面	口縁部は胴部から引き続きゆるやかに内彎する。甕は断面三角形でいねいに貼り付けてある。口唇部は平で幅広い。内傾はしていない。	①にぶい褐色②酸化③実測部分1/4④1mm以下の長石粒を多く含む

35号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版21 遺物写真図版96

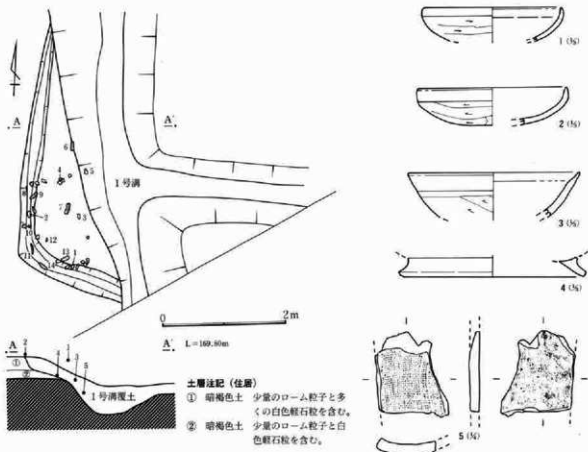
位置 Ⅲ区東端に位置し、P-19グリッドに属する。

概要 1号溝により住居の南西部以外の大部分が削り取られている。そのため竈や柱穴等も確認できなかった。

構造 残されていた床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られていた。

規模 東西南北とも不明。周溝は幅30cm前後で深さは6cm前後である。壁高は45cmである。

遺物 床面や覆土中より少量の土師器の環や瓦とこも石が出土した。



第115図 35号住居跡及び出土遺物実測図



35号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第115図)

遺物番号 図原番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
35住-1	坏 土師器	- (12.0) - 床面+25	丸底の坏であり狭く小型である。口縁部はわずかに内彎しつつ直立気味に立ち上がる。	①褐色②酸化③小破片 (口縁～底部1/5以下) ④角閃石を少量含む
35住-2	坏 土師器	- (12.0) - 床面+30	丸底の坏であり浅い。口縁部はわずかに内彎しつつ直立気味に立ち上がる。	①褐色②酸化③小破片 (口縁～底部1/5以下) ④角閃石を少量含む
35住-3	坏 土師器	- (13.8) - 床面	丸底の坏と思われるが小破片のため不明。口縁部は内側が薄くなり内傾する。	①にょい褐色②酸化③小破片 (口縁～底部1/6以下) ④1mm前後の赤色粒多く含む
35住-4	坏 須恵器	- - - 床面	高台の付く坏の高台部小破片と思われる。この高台は外側に力強く張り出している。	①灰白色②還元③小破片 (高台部のみ1/5以下) ④1mm以下の石英や長石粒含む
35住-5	平凡	- - - 床面-20	平凡の小破片である。凹面織目の広い布目脈。凸面タタラより切り離した弓切の痕跡あり。1枚造り。	①灰白色②還元③小破片④1mm前後の砂粒を多く含む
35住-6	石	長辺14.4 短辺5.6 厚さ2.6 319g	偏平な石である。側面の中央部が欠損している。欠損部以外の表面磨耗している。こも石か。	①淡青色②側面一部欠損③翡翠母石墨片岩④床面-16
35住-7	石	長辺15.5 短辺8.0 厚さ5.0 999g	大きな石であり、横断面形は三角形、こも石としては疑問である。	①淡緑色③一部欠損④緑泥片岩⑤床面
35住-8	石	長辺14.7 短辺7.0 厚さ2.5 375g	偏平な石である。側面の一部が欠損している。こも石か。	①淡緑色③完形④石墨緑泥片岩⑤床面+20
35住-9	石	長辺16.6 短辺6.4 厚さ2.0 371g	偏平な石である。両側面に2～3個所の凹状の欠損部を持つ。こも石のひもを測定するためのものか。	①淡緑色③完形④石墨緑泥片岩⑤床面+5
35住-10	石	長辺29.9 短辺5.1 厚さ2.0 160g	小さな石である。表面全体が磨耗している。こも石としては疑問である。	①淡緑色③完形④点紋網雲母石墨片岩⑤床面
35住-11	石	長辺16.5 短辺7.4 厚さ4.0 659g	大きくて重量のある石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④点紋緑泥片岩⑤床面+16

35号住居跡 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
35住-12 96	石	長辺11.1 短辺5.5 厚さ2.2 175g	側面と上下面の片側が欠損している。欠損部以外の表面全体が磨耗している。	①淡青色②一部欠損③網雲母石晶片岩④床面+24
35住-13 96	石	長辺11.6 短辺6.7 厚さ2.4 200g	側面と上下面の片側が欠損している。欠損部以外の表面全体が磨耗している。	①淡青色②一部欠損③網雲母石晶片岩④床面+30
35住-14 96	石	長辺17.0 短辺4.8 厚さ3.6 281g	縦長い石である。欠損部以外の表面磨耗している。こも石としては長すぎるか。	①淡青色②一部欠損③網雲母石晶片岩④床面+2

36号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版21 遺物写真図版96・97

位置 II区中央部南寄りに位置し、37号住居の北約2mでN-18・19グリットに属する。

概要 緩やかな傾斜面に造られているが、全般に残りが悪く、特に北側の壁面と床面の残存状態が悪い。非常に小型の住居である。

構造 床面は、ルームとルームブロックを主とした土で造られ、竈周辺が特に踏み固められてあった。竈焚口右側に貯蔵穴があり、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西2.45m、南北2.05mである。壁高は最も残りの良い南壁で27cmである。貯蔵穴は直径約45cmのほぼ円形を呈し深さ20cmであった。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の甕や坏が出土し、その多くを図化することができた。特に暗文を持つ坏の多いことと、内外面のほぼ全面にヘラ磨きされている10の小型甕の出土は注目される。

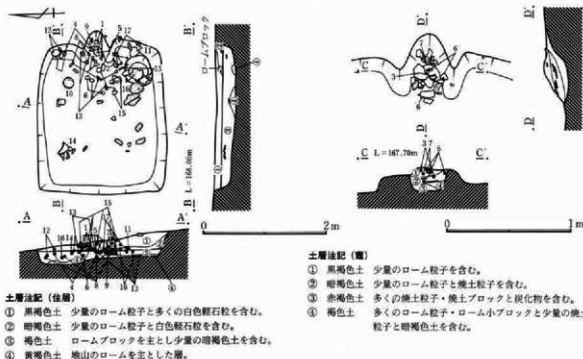
36号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央の壁面から床面にかけて造られ、燃焼部の大部分は壁面から住居内に位置する。

構造 ローム粒子と暗褐色土で造られている。覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

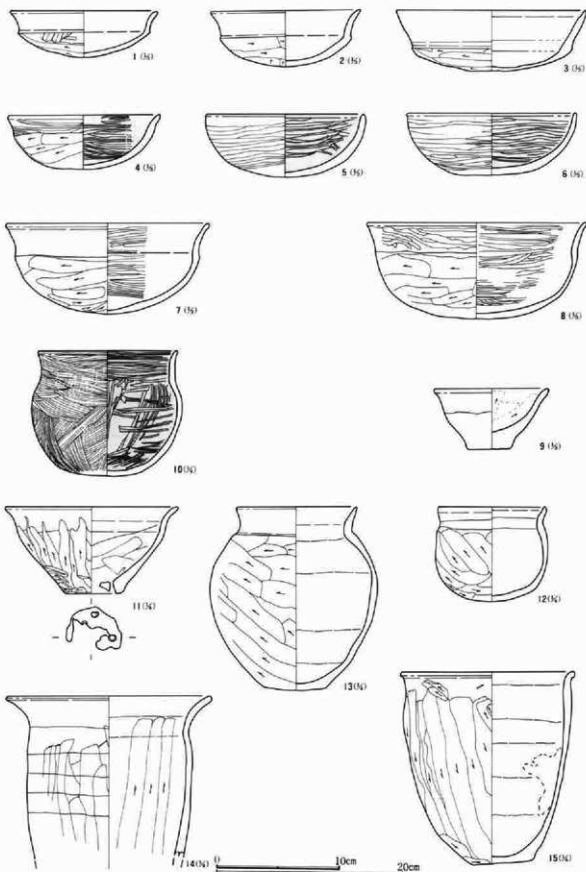
規模 煙道方向50cm、両袖方向40cmである。

遺物 多くの土師器の甕の破片が出土した。

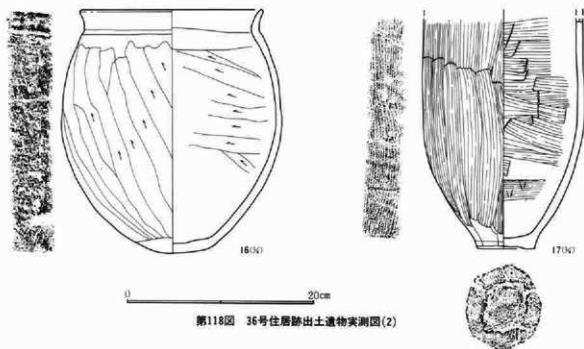


第116図 36号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第117図 36号住居跡出土遺物実測図(1)



第118図 36号住居跡出土遺物実測図(2)

36号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第117図)

遺物番号 図取番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部器形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤磨き
36住-1 96	坏 土師器	3.7 11.6 - カマド内直上	丸底の坏である。底部が狭く口縁部との境に明瞭な 線を持つ。口縁部は大きく外反する。	①褐色②酸化③口縁部一部欠損してい るが他は完形④角閃石を少量含む
36住-2 96	坏 土師器	4.5 (12.0) - 床面-2	丸底の坏である。底部が狭く口縁部との境に明瞭な 線を持つ。口縁部は大きく外反する。	①褐色②酸化③④⑤わずかな角閃石 と少量の1mm以下の砂粒を含む
36住-3 96	坏 土師器	4.8 (15.2) - カマド内+10	丸底の坏である。底部が狭く、口縁部との境に明瞭 な線を持つ。口縁部は長く内側上端近くには線あり。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒 を多く含む
36住-4 96	坏 土師器	- 12.1 - カマド内直上	丸底の坏である。底部が深く口縁部と底部との境に 明瞭な線は認められない。底部ヘラ削り、口縁部横 ナズ。外側口縁部→内面全面にわたりヘラ磨き、ヘ ラ磨き後表面全体に吸炭。	①表面黒色・断面灰褐色②酸化③④⑤ 密
36住-5 96	坏 土師器	5.0 12.6 - 床面	丸底の坏である。底部→口縁部まで内磨きつつな だらかに立ち上がる。底部→口縁部の全面にわたり ヘラ磨きが行なわれている。内面はその後吸炭され黒 光りしている。外面も磨かれ光沢を持つ。	①内面黒色・外面褐色・断面褐色②酸 化③2/3④密
36住-6 96	坏 土師器	4.9 13.6 - カマド内+8	5の坏と比較すると器肉が少し薄い。器形や整形 方法がほとんど共通する。内面底部は平行方向のヘ ラ磨きである。	①内面黒色・外面褐色・断面褐色②酸 化③口縁部1/4欠損・他はほぼ完形④密
36住-7 96	坏 土師器	7.2 (16.2) - カマド内+13	深い丸底を呈し底部と口縁部との境に線を持つ。口 縁部も長く大きく外反する。口縁部を含めた内面全 面に横方向ヘラ磨き。内面に黒色処理はなし。	①浅黄褐色②酸化③1/2④密
36住-8 97	坏 土師器	7.6 19.6 - 床面	7の坏と器形が似ているが少し大型である。7の坏 と異なり、口縁部外側までヘラ磨きが行なわれてい る。内面の黒色処理も行なわれていない。	①浅黄褐色②酸化③1/2④密
36住-9 97	坏 土師器	4.8 9.2 3.5 床面-2	平底を呈する小さな坏である。底部は器肉が厚く体 部は内磨きつつゆるやかに外傾し口縁部が外反する。 口縁部横ナズ。	①浅黄褐色②酸化③完形④密
36住-10 97	小型甕 土師器	13.4 15.0 - 床面+8	丸底の小さな甕である。胴部は丸く肩部に最大径を 持つ。口縁部は直立し上端でなだらかに外反する。 口縁部や底部を含め外側全面にヘラ磨き。内面も基 本的には全面ヘラ磨き。ヘラ磨き後内側全面に吸炭 による黒色処理。	①内面黒色・外側口縁部黒色・外側胴 部において褐色②酸化③完形④1mm以下 の石英を大量に含む⑤さわめて黄色 の甕
36住-11 97	甕 土師器	9.2 (18.4) (6.0) 床面+2	小さな甕である。底部中央部を欠損しているが、現 状で3個の小穴が確認できる。胴部底→口縁部に向 かうヘラ削り、口縁部横ナズ。	①内面黒色・外面の約半分黒色・他に より褐色・断面暗褐色②酸化③3/5④底 部中央穴⑤石英と長石粒を多く含む

36号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第117・118図)

遺物番号 図版番号	器形及び 器種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
36住-12 97	小型甕 土師器	10.0 11.4 - 床面	小さな丸底の甕である。口縁部は直立し上端が内彎しつつ外傾する。外側面表面に大小の砂粒が浮き出しており極めて表面の荒い甕である。内面ナデ整形。	①内外表面黒褐色・断面褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を大量に、3～5mmの砂粒を多く含む
36住-13 97	甕 土師器	19.4 12.9 6.8 床面	丸胴の小さな甕である。底部はヘラ削りにより平に作られている。口縁部は直立し上端部で外傾する。胴部ヘラ削り。器表面の密な甕である。	①明褐色②酸化③ほぼ完形④密⑤4～9の土層に共通する胎土
36住-14	甕 土師器	- (22.0) - 床面	最大径を口縁部を持ち、胴部の最大径を胴部に持つ。口縁部は大きく外反する。胴部外面ヘラ削り。	①明褐色②酸化③口縁部はほぼ完形・胴上部1/2④雲母粒を大量に含む
36住-15 97	甕 土師器	20.4 18.7 6.6 床面	最大径を口縁部を持つ甕である。底部から口縁部にかけて内彎しつつゆるやかに立ち上がり、口縁部で径は狭くならない。外部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①外側胴上部～内側底部まで明褐色・他黒褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を少量含む
36住-16 97	甕 土師器	25.7 (19.6) 6.5 床面+2	丸い胴部を持つ大きな甕である。底部はヘラ削りによりほぼ平。口縁部はゆるやかに外反する。胴外側は大小の砂粒が表面に浮き出しており極めて荒い。	①胴上半部～内面底部明褐色・胴中～下半部黒褐色②酸化③口縁部2/3-胴部3/4-底部完形④2～4mmの大きな砂粒を含む
36住-17 97	甕 土師器	- - 7.0 床面	長胴の甕である。底部は厚く内側が凹状を呈する。胴部内外面の全面にわたり、刷毛により整形されている。この整形方法は他の甕には全く認められない技法であるため注目される。	①胴上半部～内面底部褐色②酸化③胴中央部1/2-胴下半～底部完形④多くの石英粒を含む

37号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版21 遺物写真図版98

位置 II区中央部南寄りに位置し、36号住居の南約2mでO-18グリットに属する。

概要 住居の北西部は5号土坑の覆土を掘り込んで造られている。非常に小さな住居で、残存状態も悪い。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴と柱穴は掘られていなかった。

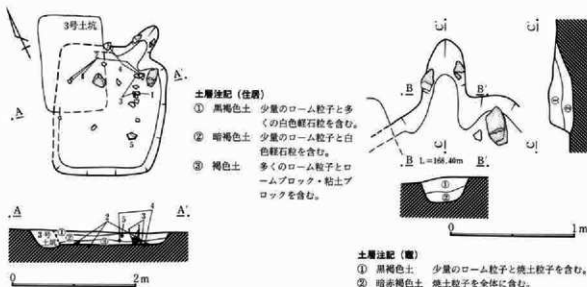
規模 東西推定2.2m、南北2.2mである。壁高は最も残りの良い南側で16cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器甕と少量の土師器の坏が出土した。

37号住居跡 (竈)

位置 住居北壁やや東寄りの壁面を一部掘り込んで造られており、燃焼部の多くは壁面から床面にかけて造られている。

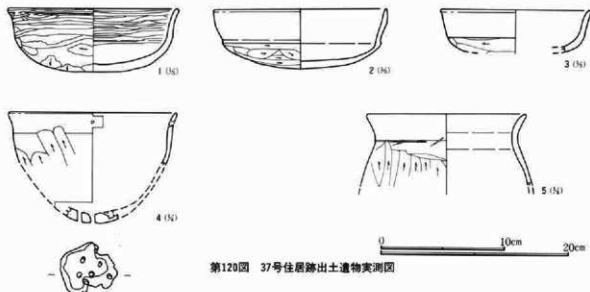
構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土で造られている。燃焼部左右両壁面にそれぞれ1



第119図 37号住居跡及び竈実測図

個の石がほぼ据えられたと思われる状態で出土した。また竈右側の床面上に30×15cmの石が出土しており竈に使われたものと考えられる。焼部から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向35cmである。 遺物 土師器甕の胴部破片が少量出土した。



第120図 37号住居跡出土遺物実測図

37号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第120図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③洗存④胎土⑤備考
37住-1 98	坏 土師器	5.0 13.6 - 床面+2	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に強い稜を持つ。口縁部はわずかに外反しつつ立ち上がる。外側底部はへら削り、口縁部内外面横方向へら磨き、内面底部も明瞭ではないがへら磨きが認められる。	①黄褐色②酸化③4/5④密
37住-2 98	坏 土師器	4.7 14.0 - 床面	平底に近い丸底の坏であり、底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。底部が浅く口縁部は長く中央部が内厚となっている。	①明褐色②酸化③口縁部1/2・底部2/3 ④少量の赤色粒子と多くの器母を含む
37住-3 98	坏 土師器	- 12.0 - 床面	丸底を呈する小さな坏の破片である。底部と口縁部との境の稜は明瞭でない。全体がゆがんでいる。	①明褐色②酸化③口縁部1/2・底部中央 ④1mm以下の砂粒を少量含む
37住-4	甕 土師器	- 18.0 - 床面	小さな甕の小破片である。口縁部中央に焼成後に穿孔された小穴あり。底部に焼成前に穿孔された小穴9個あり、その内1個は底まで貫通していない。外側胴部へら削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③口縁部～胴上半部1/4④ 1～3mmの石英や長石粒を含む
37住-5	甕 土師器	- (17.0) - 床面+4	最大径を胴中央部に持つと思われる甕の小破片である。口縁部は短くゆるやかに外反する。	①内面明褐色・外面黒褐色・断面灰褐色②酸化③口縁部～胴上半部1/4④赤色粒を含む

38号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版21・22 遺物写真図版98

位置 II区南西部に位置し、37号住居の西約9mでO-20グリットに属する。

概要 奈良時代の40号住居と重複しており、40号住居はさらに同じ奈良時代の39号住居と重複している。新旧関係は、40→39→38号住居の順と思われる。残存状態の悪い住居であり、南壁周辺の残りはやや良好であるが、40号住居と重複している北東部分はほとんど残存していない。

構造 床面は、ローンを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

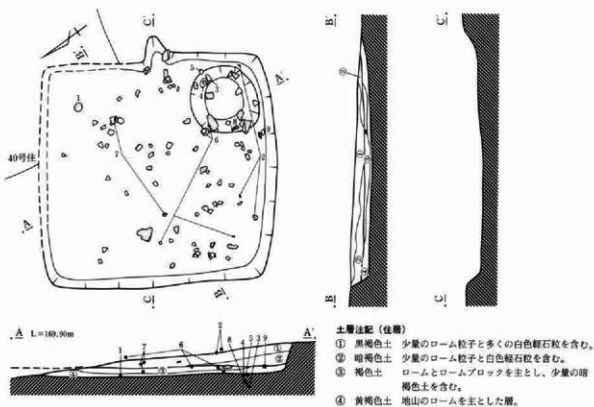
規模 東西3.55m、南北は3.65mで、ほぼ正方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁部分で44cmで貯蔵穴

第3章 検出された遺構と遺物

は、直径約1.1mのほぼ円形を呈し深さ33cmである。

遺物 多くの須恵器の埴や坏と羽釜や砥石等が出土した。

床下 床面中央部に0.8×1.0mの楕円形を呈し深さ28cmの床下土坑と南西端部に直径1.3mの円形を呈し、深さ30cmの床下土坑が検出された。



第121図 38号住居跡及び床下実測図

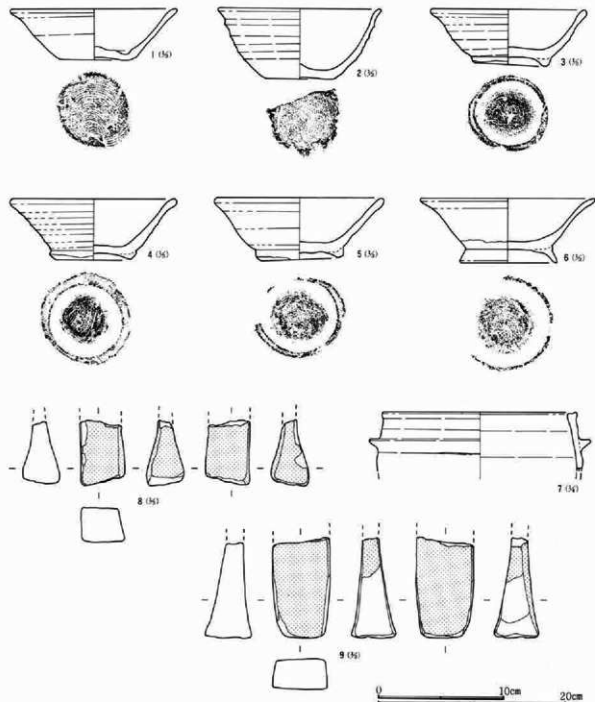
38号住居跡（竈）

位置 住居東壁中央部の壁面を掘り込んで造られており、燃烧部の大部分は、壁面部から外側に位置する。

構造 残存状態が悪く詳しい内容は不明であるが、右側袖石と思われる2石がほぼ据えられた状態で、他に2石が竈内より出土しているため、石を多く用いて造られた竈と思われる。燃烧部覆土中に少量の焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向50cm、両袖方向35cmである。

遺物 須恵器の坏と土師器甕の破片が少量出土した。



第122図 38号住居跡出土遺物実測図

38号住居跡 出土遺物観察表 (採図番号第122図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
38住-1 98	須恵器 床面	3.9 13.4 5.8 10	底部の小さな環である。体部は直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する。底部内側に渦巻状の凸部を持つ。底部右側糸切痕。	①底部内外面黒色・口縁部内外面灰白色②還元③完形④1~2mmの石英や長石粒を少量含む
38住-2	環 須恵器 床面+16	5.6 (13.2) (5.4)	器高の高い環である。体部はわずかに内彎しつつ直線傾きに立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。高台は雑な作りで内側の糸切痕多く残る。	①内面黒色・外面灰白色②還元③口縁部1/6・体部1/3・底部2/3④1mm以下の石英や長石粒を多く含む
38住-3 98	環 須恵器 貯蔵穴内+5	4.5 12.4 6.3	高台を持つ器高の低い環である。体部はわずかに内彎しつつ直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。高台は雑な作りで内側の糸切痕多く残る。	①底部内外面黒色・口縁部内外面灰白色②還元③口縁部一部欠損・他は完形④1mm以下の石英や長石粒を多く含む
38住-4 98	環 須恵器 貯蔵穴内+25	4.8 13.4 6.8	高台を持つ器高の低い環である。体部はわずかに内彎しつつ直線的に立ち上がり口縁部がわずかに外反する。高台は幅広く外側が立ち上がる。	①灰白色②還元③口縁部一部欠損・他は完形④1mm以下の石英や長石粒を大量に含む
38住-5 98	環 須恵器 貯蔵穴内+26	5.0 13.6 7.0	高台を持つ器高の低い環である。体部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。口縁部がわずかに外反する。高台は雑に作られ一部がはずれている。	①灰白色②還元③口縁部2/3・底部完形④1mm以下の石英や長石粒を多く含む
38住-6 98	環 須恵器 床面	5.1 14.0 6.8	3~5までの環と器形や胎土が異なる。高台は長く外側へ大きく張り出す。口縁部は大きく外反する。	①内面・外面の一部黒色・外面灰白色②還元③口縁部1/2・底部完形④大量の角閃石を含む
38住-7 98	羽釜 床面+4	- (20.6) -	蹄は断面三角形を呈していねいに貼付けている。口唇部は肉厚で中央部が凹状を呈しわずかに内傾する。	①外面褐色・内面黒褐色②酸化③口縁部1/3④少量の骨粉を含む
38住-8 98	砥石 長さ5.2 幅3.6 厚3.0 57g		主に上下の2面を使用しているが、他の2側面も砥石として使用している。下部は磨耗していない。	①灰色②小破片④安山岩⑤貯蔵穴内+14
38住-9 98	砥石 長さ7.9 幅4.7 厚3.6 140g		主に上下の2面を使用しているが、他の2側面も磨耗している。下部は磨耗していない。	①灰白色②小破片④流紋岩⑤床面

39号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版22 遺物写真図版98・99・146

位置 II区南西部に位置し、38号住居の北東約2mでO-20グリットに属する。

概要 奈良時代の40号住居北側床面と壁面の多くを掘り抜いて造られている。竈と住居南側部分の残りは比較的良好である。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、小さい。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.45m、南北は3.10mを測り、東西方向にやや長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良い竈南側で38cmである。貯蔵穴は直径約40cmの円形を呈し深さ17cmである。

遺物 床面や覆土中より、多くの土師器の環や甕、須恵器の埴や環等が出土した。また「甘」と墨書された完形の須恵器環が床面上に出土し、環の内側表面に漆液が付着していた。なお漆液に文字は書かれていなかった。

39号住居跡 (竈)

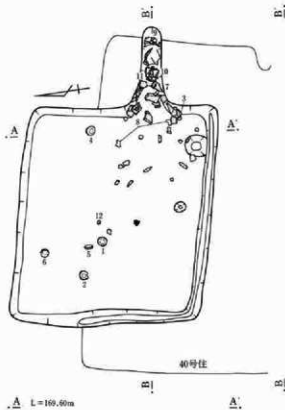
位置 住居東壁やや南寄りの壁面を掘り込んで造られており、燃焼部は床面から壁面にかけて位置する。

構造 床面上に位置する焚口や両袖部さらに燃焼部の一部は残っていないが、壁面から外側にかけて造られている燃焼部と煙道部は残りが良好である。壁面を掘り抜いて造られている燃焼部には7個の石が馬蹄形に配され、煙道部には底部を穿孔した土師器甕が口縁部を下方の燃焼部にむけられ3個連結し煙道として造られていた。燃焼部床面や奥壁の表面が焼けて焼土化しており、覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 燃焼部幅約60cm、煙道部幅約30cm、長さ約90cmである。

遺物 多くの土師器甕の破片や須恵器環・埴・甕の破片が出土した。

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



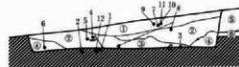
A L=169.00m



0 2m

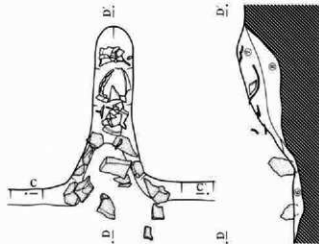
土層注記(住跡)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土・炭化物を含む。
- ④ 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ⑤ 40号住居覆土
- ⑥ 40号住居床下覆土

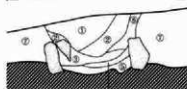


土層注記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 赤色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 黒褐色土 黒褐色土中に炭・灰・焼土粒子を含む軟質土層。
- ⑤ 褐色土 ロームを主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む(灰黄褐色粘質土を多く含む)。
- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む(40号住居覆土)。
- ⑧ 褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。



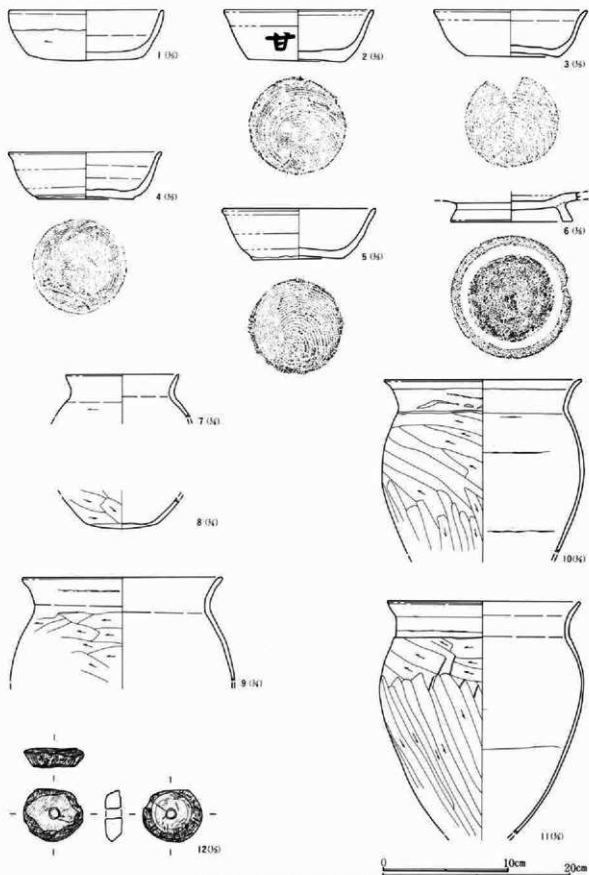
C L=169.00m



0 1m

第123図 39号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第124図 39号住居跡出土遺物実測図

39号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第124図)

遺物番号 図版番号	形状及び 種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③完形④1mm以下の砂粒を少量含む⑤出土例の少ない環である
39住-1 98	環 土師器	4.0 12.4 9.0 床面	平底を呈する環である。体部〜口縁部はわずかに内彎しつつ外傾して立ち上がる。口縁部に外反は認められない。底部ナデ整形。体部1段のヘラ削り。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を少量含む⑤出土例の少ない環である
39住-2 98・146	環 須惠器 墨書	4.1 11.9 7.8 床面	底径が大きく器高の低い環である。体部はほぼ直線的に外傾し口縁部はわずかに外反する。底部中央がわずかに盛り上がる。底面右回転未切取。	①灰白色②還元③口縁部を一部欠くがほぼ完形④1mm以下の石英や長石粒を少量含む⑤内面底部より漆炭出土。漆の記述については別項に詳しい
39住-3 98	環 須惠器	3.8 12.2 7.6 床面+2	底径が大きく器高の低い環である。体部はほぼ直線的に外傾し口縁部はわずかに外反する。底部中央がわずかに盛り上がる。底面右回転未切取。	①灰白色②還元③口縁部〜体部1/2底部完形④1mm以下の大量の石英粒子を含む
39住-4 98	環 須惠器	3.7 12.2 7.6 床面+16	底径が大きく器高の低い環である。体部はほぼ直線的に外傾し口縁部はほとんど外反しない。底部と体部との境に段を持つ。底面右回転未切取。	①内面灰白色・外面灰色②還元③完形④少量の石英や長石粒子を含む
39住-5 98	環 須惠器	4.1 12.3 7.3 床面+12	底径が大きく器高の低い環である。体部はほぼ直線的に外傾し口縁部はほとんど外反しない。底部と体部との境に段を持つ。底面右回転未切取。	①灰白色②還元③完形④石英や長石粒を多く含む
39住-6	甕? 須惠器	- - 8.7 床面+4	底部と高台のみの残存であるため不明な部分が多いが、底部がさらに大きくなるため甕の下部と思われる。高台は太く高くしっかり作られている。	①灰白色②還元③底部と高台のみ残存④多くの石英や長石粒を含む
39住-7	小型壺 土師器	- 12.0 - カマド内+35	小型の壺の口縁部のみ小破片である。胴部は丸く口縁部はゆるやかに外反する。胴部右→左方向削り。	①褐色②酸化③口縁部1/2④少量の内凹石を含む
39住-8 98	壺 土師器	- - 8.0 床面+30	丸い胴部を持つ壺の胴下半〜底部の小破片である。底部ヘラ削り。胴部左上→右方向ヘラ削り。	①褐色②酸化③胴部下半〜底部1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
39住-9 99	壺 土師器	- 21.4 - カマド内+38	最大径を胴上部に持つ器内の薄い壺である。胴部は丸い。胴部は右→左方向ヘラ削り。口縁部ナデナ。	①明褐色②酸化③口縁部〜胴上半部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
39住-10 99	壺 土師器	- (21.0) - カマド内+38	最大径を胴上部に持つ器内の薄い壺である。胴部は丸く口縁部は「コ」の字状を呈する。胴部は右→左方向ヘラ削り。	①明褐色②酸化③口縁部〜胴部3/5・胴下半〜底部欠④1mm以下の砂粒多く含む
39住-11 98	壺 土師器	- 20.5 - カマド内+38	最大径を胴上部に持つ器内の薄い壺である。口縁部は「コ」の字状を呈し上端が大きく外反する。口唇部は折り返され外側に弱い稜線を持つ。	①明褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を多く含む
39住-12 99	紡錘車 土師器	長さ4.0 幅4.6 厚さ1.4 孔径0.9 重量41g 床面	扁平な紡錘車であり一部側面が欠損している。完成品である。側面砥石削り後、工具により放射状に刻みを入れている。表面全体が磨かれている。	①灰色③側面一部欠損④滑石片

40号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版22 遺物写真図版99

位置 II区南西部に位置し、O-20グリットに属する。

概要 平安時代の38・39号住居と重複している。38号住居により住居南西コーナー部分の覆土上面が掘り込まれ、また39号住居により住居北側の多くが床下まで削り取られている。新旧関係は、40→39→38号住居の順と思われる。残存状態は比較的良好であり、特に南壁周辺の残りは良い。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ、電手前と床面中央部は固く踏み固められていた。柱穴は3本確認されたが、39号住居と重複している部分の1本は、床下調査の段階においても確認できなかった。周溝が北壁と竈北側の東壁以外の壁面下で確認された。

規模 東西5.2m、南北6.0mである。壁高は南側で66cmで、柱穴1は直径65cm深さ76cm、柱穴2は直径30cm深さ34cm、柱穴3は直径40cm深さ51cmである。周溝は幅40cm深さ14cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器と須惠器の環や壺の破片が出土し、多くを図化する事ができた。特に須惠器水注の出土が目玉される。

床下 4基の床下土坑が検出され、底部に近い覆土中より多くの粘土が検出された。床面からの深さは図上に数値で示した。

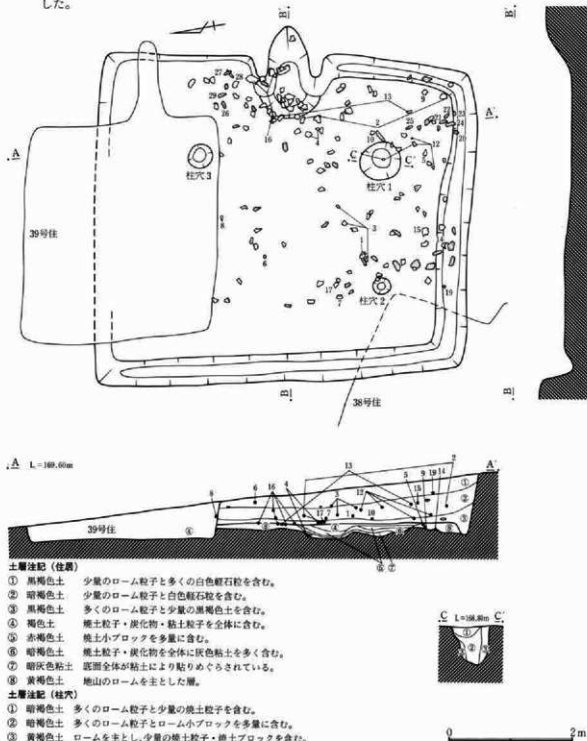
40号住居跡(竪)

位置 住居東壁中央部の壁面を一部掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。

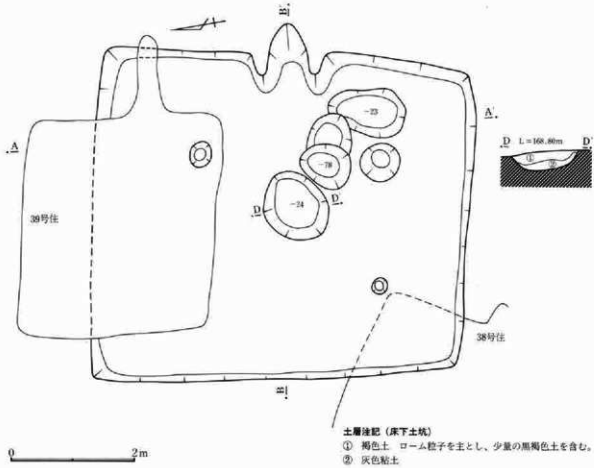
構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土で造られている。焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向110cm、両袖方向70cmである。

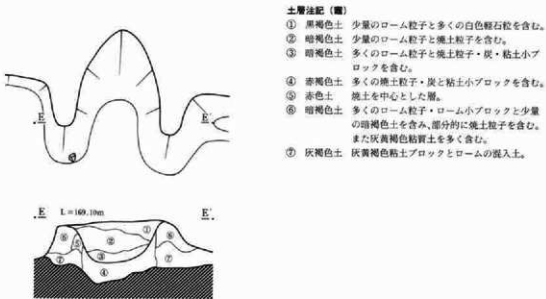
遺物 土師器甕の胴部破片が多く出土した。また南東コーナーと竪左部分の床面上より10個のこも石が出土した。



第125図 40号住居跡実測図

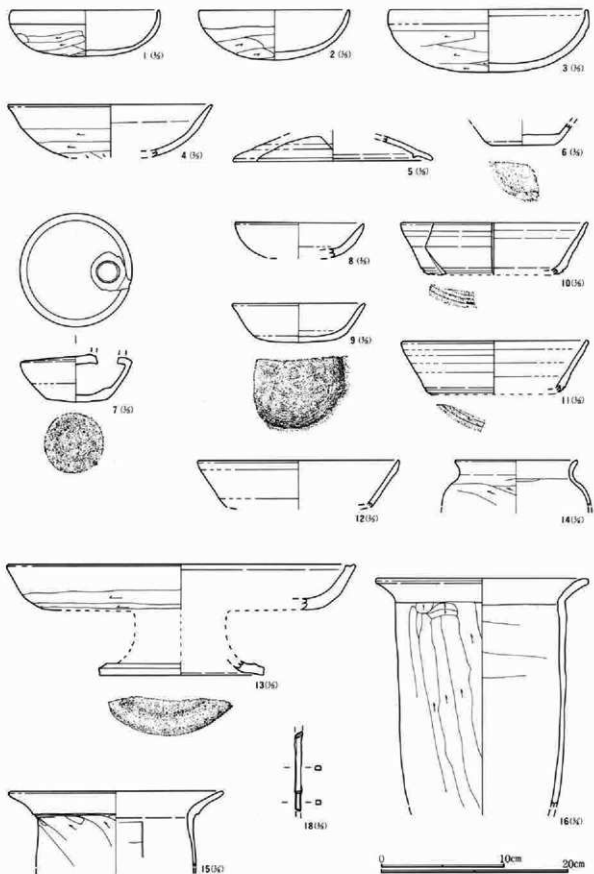


第126図 40号住居跡床下実測図



第127図 40号住居跡電実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第128図 40号住居跡出土遺物実測図(1)



第129図 40号住居跡出土遺物実測図(2)

40号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第128・129図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
40住-1 99	坏 土師器	3.7 (11.8) - 床面+12	平底に近い丸底の坏であり、浅く箱形を呈する。口縁部は短く直立する。底部へう削り、口縁部横ナデ、口縁部と底部との境にへう削りや横ナデなし。	①明褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を少量含む⑤器内が薄い
40住-2 99	坏 土師器	4.0 12.0 - 床面+2	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に横はない。底部のへう削りは回転へう削りに極めて近い。須恵器杯を模倣していると思われる。	①棕色②酸化③口縁部の一部を欠くが他の部分ほぼ定形④密・粉状を呈する
40住-3	坏 土師器	5.0 (16.0) - 床面+14	底部から口縁部までなだらかに内傾しつつ立ち上がる。底部手持へう削り、口縁部横ナデ。2の坏と胎土や制作方法において異なる。	①明褐色②酸化③口縁部1/6・底部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
40住-4	坏 土師器	- (16.5) - 床面+2	皿型の坏の破片と思われるが、小破片であることと少しゆがんでいるため不明。	①明褐色②酸化③口縁-底部1/5④1mm以下の砂粒を多く含む
40住-5 裏 須恵器	- (16.0) - 床面-2	カエリを持つ環蓋の小破片である。カエリは断面三角形を呈していねいに貼付けてある。	①灰白色②還元焼締③小破片(口縁部1/4以下)④密	
40住-6	坏 須恵器	- (5.2) 床面+30	平底の坏の小破片と思われる。底部回転へう削り、体部と底部との境へう削り。異外産か?	①表面灰白色・断面赤灰②還元焼締③底部-体部下平1/3以下④密
40住-7 99	小注 須恵器	3.8 9.0 4.8 床面+8	小さな水注と思われる。底部は右回転へう削り、体部はいいいなナデ。天井部ナデ。水注部の穴は鋭利な刃物により円形に穿孔されている。注口との接合面に粘土の内置あり。	①表面灰色・断面赤灰②還元焼締③水注部穴・他は定形④密
40住-8	坏 須恵器	- (10.6) - 床面+10	平底に近い丸底を呈する坏である。口縁部は直線的に外傾する。体部へ口縁部横ナデ。	①灰白色②還元焼締③1/4・底部欠④密
40住-9 99	坏 須恵器	3.1 (10.6) (4.5) 床面-5	平底に近い丸底を呈する坏である。口縁部は直線的に外傾する。底部はへう削り後右回転へう調整。体部下端まで削り込んでいる。	①表面灰白色・断面灰褐色②酸化③口縁部1/5・体部1/4・底部2/3④1~2mmの長石粒を多く含む
40住-10	坏 須恵器	(4.1) (15.0) - 床面+7	削り出し高台を持つ小さな坏の破片である。削り出した高台は低く小さい。体部から口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。	①灰白色②還元焼締③1/8④密
40住-11	坏 須恵器	(4.3) (15.0) - 覆土	削り出し高台を持つ小さな坏の破片である。高台は10の坏よりさらに削り出しが低い。体部へ口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。	①灰白色②還元焼締③体部へ口縁部1/6④密
40住-12	坏 須恵器	- (16.2) - 床面+4	浅く口径の大きな坏である。器形的には10・11に近いが高台は削り出されていない。器内が薄い。	①灰色②還元焼締③体部へ口縁部1/3④多量の長石を含む
40住-13	盤 須恵器	- (28.0) (23.0) 脚13.2 床面	大きな盤の破片と思われる。脚部は上面や側面に凸凹部を持ち盤の口唇部内側に蓋受の段を持つ。体部下平までいいいなへう削りがなされている。	①灰色②還元焼締③盤体部へ口縁部1/4④1~2mmの長石粒を多く含む⑤いいいな作りである
40住-14	小型裏土師器	- (13.0) - 床面-10	脚部の良い小さな壺である。口縁部は直立気味に立ち上がり大きく外反する。胴部右へ左へ削り。	①外面明褐色・内面果褐色②酸化③口縁部へ胴上部1/3④1mm以下の砂粒を含む
40住-15	壺 土師器	- (23.0) - 床面+28	最大径を口縁部に持つ壺であり、胴部の器内が薄い。胴上部右へ左へ削り、口縁部横ナデ。	①明褐色②酸化③胴上部へ口縁部1/4④角閃石を大量に含む
40住-16 99	瓶 土師器	- (23.0) - カマド内直上	最大径を口縁部に持つ壺である。15と異なる胴部の器内が厚くへう削りも底部から口縁部に向かう縦方向である。	①明褐色②酸化③口縁部定形、胴上部器内が厚くへう削りも底部から口縁部に向かう縦方向である
40住-17	瓦	床面+2	凹面布目肌、凸面ナデ整形。	①灰白色②還元③小破片④1mm以下の砂粒を多く含む

40号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第128・129図)

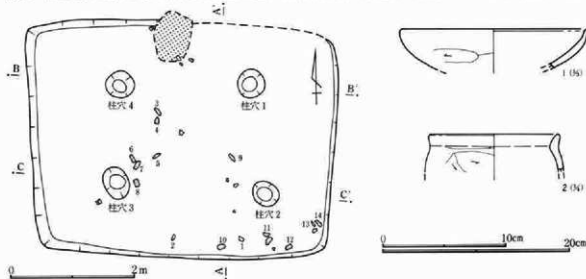
遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
40住-18 147	鉄鏝	長さ6.2 幅60.45 厚さ0.3 重量3g	鏝区を持つ鏝片である。底は断面方形である。裏は太くなる。錆化は少ない。覆土。	
40住-19 99	紡錘車	長さ4.7 幅4.9 厚さ1.4 重量47g 床面+45	紡錘車の未製品である。表面が凹状を呈しており、全面荒砥削り。側面上部ノミ・下部荒砥削り。裏面は剝離された状態で加工痕なし。	①オリブ黒色②完形(未製品) ③硝石片岩
40住-20 99	石	長辺10.1 短辺4.9 厚さ3.0 247g	小さな石である。表面全体の磨耗している。こも石としては疑問である。	①淡緑色②完形③点紋緑泥片岩④床面+18
40住-21 99	石	長辺15.5 短辺6.1 厚さ3.5 410g	細長い中央部が厚くなり、やや不定形を呈する。表面全体の磨耗している。	①淡青色②完形③点紋網雲母石墨片岩④床面+6
40住-22 99	石	長辺14.0 短辺6.0 厚さ2.8 390g	扁平な石であり、側面中央に凹状の欠損部を持つ。こも石の可能性が考えられる。	①淡緑色②完形③網雲母石墨片岩④床面+5
40住-23 99	石	長辺14.8 短辺7.4 厚さ2.3 374g	扁平な石であり、中央部の幅が広くなる。表面全体の磨耗している。こも石としては疑問である。	①淡青色②完形③点紋網雲母石墨片岩④床面+12
40住-24 99	石	長辺18.8 短辺26.5 厚さ4.5 910g	他の石と比べて大きい。片割がけている。こも石としては疑問がある。	①淡青色③一部欠損④石墨泥片岩⑤床面+4
40住-25 99	石	長辺15.7 短辺5.9 厚さ2.7 410g	扁平な石であり、均整がとれている。側面に2箇所凹状の隅り込みあり、こも石と思われる。	①淡青色②完形③点紋網雲母石墨片岩④床面
40住-26 99	石	長辺10.1 短辺4.8 厚さ1.6 123g	小さな扁平な石である。表面全体の磨耗している。両側面中央部に凹状の欠損部を持つ。	①淡青色②完形③点紋網雲母石墨片岩④床面+9
40住-27 99	石	長辺13.7 短辺4.0 厚さ3.2 235g	細長い石である。側面が一部欠損しているが、その面を含む表面全体の磨耗している。	①淡青色③一部欠損④緑泥片岩⑤床面+7
40住-28 99	石	長辺18.2 短辺4.8 厚さ3.9 466g	細長い石である。両側面中央部に凹状の欠損部を持つ。表面全体の磨耗している。	①淡青色②完形③点紋網雲母石墨片岩④床面
40住-29 99	石	長辺12.9 短辺5.1 厚さ2.0 179g	扁平な小さな石である。両側面中央部に凹状の欠損部を持つ。表面全体の磨耗している。	①淡青色②完形③点紋網雲母石墨片岩④床面-4

41号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版22・23 遺物写真図版99

位置 II区中央部に位置し、20号住居東約2mでM-16・17グリットに属する。

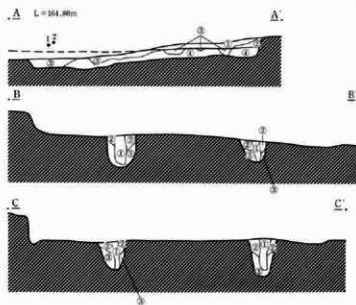
概要 南壁と西側は残存しているが、東北部分の壁面と床面の一部は残存していない。北壁中央部床面に焼土粒子の痕跡があり、竈火床面底部と思われる。

構造 床面全体の残りが悪く、良好な状態で検出できなかった。柱穴は4本掘られていたが、貯蔵穴は掘ら



第130図 41号住居跡実測図(1)及び出土遺物実測図

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第131図 41号住居跡実測図(2)

れていなかった。

規模 東西4.9m、南北3.6mである。壁高は最も残りの良い西壁側で28cmである。柱穴1は直径45cm深さ55cm、柱穴2は直径45cm深さ58cm、柱穴3は直径40cm深さ54cm、柱穴4は直径45cm深さ62cmである。

遺物 残存している床面や覆土中より、わずかな土師器の壺や杯の破片と12個のこも石が出土した。

41号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第130図)

遺物番号 図版番号	形状及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	圆形・成形・調整・底部形状等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
41住-1	環 土師器	- (14.8) - 床面+8	丸底を呈する環の小破片である。口縁部横ナデ、体部へう削り。	①明褐色②強化③体部へ口縁部1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
41住-2	小型壺 土師器	- (14.0) - 床面+14	器内の厚い小さな壺の小破片である。口縁部横ナデ、体部外側へう削り。	①褐色②強化③口縁部へ胴上部1/4④1~2mmの砂粒を多く含む
41住-3 99	石	長辺14.0 短辺6.8 厚さ2.3 317g	扁平な石で中央部の幅が広い。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②一部欠損③点紋網罟母石墨片岩④床面-2
41住-4 99	石	長辺11.8 短辺7.3 厚さ3.3 411g	扁平な石で約半分近く割れている。欠損部分以外の表面が磨耗している。	①淡緑色②一部欠損④点紋網罟母石墨片岩⑤床面
41住-5 99	石	長辺15.1 短辺25.0 厚さ3.4 311g	細長い石である。側面の中央部に凹状の削り込みあり、こも石の可能性大。	①淡緑色③完形④緑葉緑泥片岩⑤床面
41住-6 99	石	長辺13.9 短辺25.2 厚さ2.3 225g	細長い石である。側面の中央部が少し狭くなっている。こも石の可能性大。	①淡緑色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面+2
41住-7 99	石	長辺14.8 短辺25.7 厚さ3.5 397g	細長い石である。表面全体が磨耗している。こも石の可能性あり。	①淡緑色③完形④緑葉緑泥片岩⑤床面+5
41住-8 99	石	長辺12.5 短辺26.8 厚さ3.5 419g	短く幅の広い石である。こも石としては疑問である。	①淡青色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面+6
41住-9 99	石	長辺13.6 短辺25.4 厚さ2.9 284g	横断面が三角形を呈する。側面の一部が凹状を呈するため、こも石の可能性あり。	①淡緑色③完形④緑泥片岩⑤床面+5
41住-10 99	石	長辺10.5 短辺25.3 厚さ1.9 195g	細長い石である。側面中央部に凹状の削り込みがある。こも石と思われる。	①淡緑色③長辺の両端欠④緑葉緑泥片岩⑤床面+4
41住-11 99	石	長辺29.8 短辺26.6 厚さ3.0 267g	扁平な石で約半分近く割れている。欠損部以外の表面が磨耗している。	①淡緑色③一部欠損④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+5
41住-12 99	石	長辺19.6 短辺25.9 厚さ1.6 170g	扁平な石で約半分近く割れている。欠損部以外の表面が磨耗している。	①淡緑色③一部欠損④緑葉緑泥片岩⑤床面+8
41住-13 99	石	長辺11.3 短辺24.0 厚さ2.2 137g	小さな細長い石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面+2
41住-14 99	石	長辺13.7 短辺26.6 厚さ2.7 409g	扁平で中央部が幅広い石であるが、側面中央部が凹状になっているためこも石と思われる。	①淡緑色③完形④網罟母石墨片岩⑤床面+3

42号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版23 遺物写真図版100

位置 Ⅲ区東側に位置し、38号住居の西約28mでO-23・24グリットに属する。

概要 北側部分が生活道下に位置するためその部分の調査はできなかった。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが柱穴は掘られていなかった。

規模 東西2.9m、南北は不明である。壁高は南壁部分で45cmであった。貯蔵穴は直径約50cmの円形を呈し床面からの深さは25cmである。

遺物 床面や覆土中より、須恵器の埴や坏と土師器の甕が出土した。

床下 貯蔵穴西に1.10×0.85mの楕円形を呈し、床面からの深さ24cmの床下土坑が検出された。

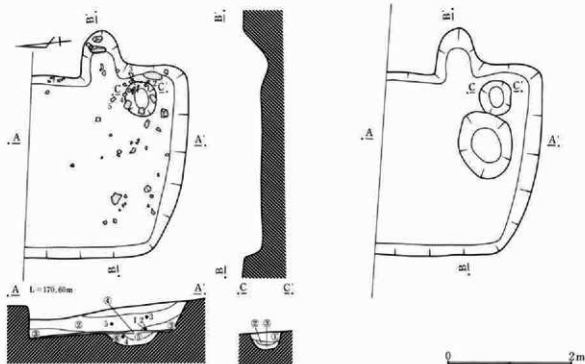
42号住居跡(竈)

位置 住居東壁の壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の大部分は壁面部から外側に位置する。

構造 燃焼部奥壁上面より2個の石が出土したが、他に竈内や竈周辺の住居覆土中からの出土は認められないため、この2石の用途は不明である。燃焼部覆土中に多くの焼土粒子や炭化物が出土した。

規模 煙道方向70cm、両袖方向65cmである。

遺物 少量の土師器甕の破片が出土した。



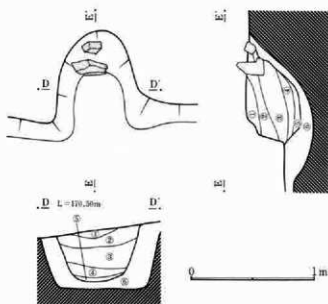
土層注記 (住居)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と炭化物の粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物の粒子を含む。
- ③ 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ④ 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む固い床面。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の炭化物と焼土粒子を含む。
- ⑥ 黄褐色土 ロームを主とし、少量の炭化物を含む。

土層注記 (貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 赤褐色土 焼土粒子を主とした層。
- ③ 黄褐色土 ロームを主とし、少量の焼土粒子を含む。

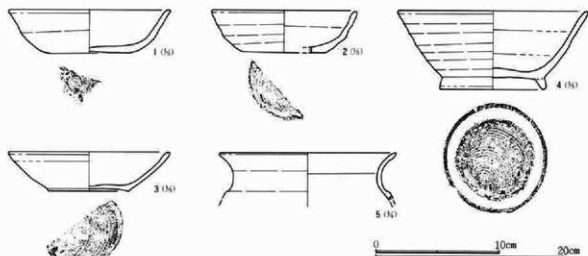
第132図 42号住居跡及び床下実測図



第133図 42号住居跡電気実測図

土層注記(電)

- ① 黄褐色土 大量のローム粒子を含む軟質な層。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ③ 暗赤褐色土 黒褐色土中に多くの焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- ④ 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを主とした層。
- ⑤ 暗赤褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 黄褐色土 ロームを主とした層。
- ⑧ 黒褐色土 ローム粒子と黒褐色土からなる軟質土層。



第134図 42号住居跡出土遺物実測図

42号住居跡 出土遺物観察表(押図番号第134図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
42住-1 100	環 須恵器	3.4 (13.0) (6.6) 床面+2	底径が大きく、器高の低い環である。体部外側中央部に1本のロクロ目。底部外側に右回転糸切痕。底部中央の器内が特に薄い。	①灰白色②還元③1/2④多くの長石粒を含む⑤表面が珪灰により黒色を呈する
42住-2	環 須恵器	3.3 (11.6) (6.6) 床面+2	底径が大きく、器高の低い環である。体部外側に2本のロクロ目。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③1/2④多くの長石粒を含む⑤表面が珪灰により黒色を呈す
42住-3	環 須恵器	3.1 (13.0) (6.4) 床面+20	底径が大きく、器高の低い環である。底部は薄く、中央部が盛り上がる。底部と体部との境に段を持つ。体部へ口縁部内彎しつつ大きく外側に開く。	①灰白色②還元③口縁部1/6・底部1/2④多くの長石粒を含む
42住-4 100	碗 須恵器	6.3 (15.2) 8.2 床面-4	底部は厚く中央部内厚。体部へ口縁部直線的に外傾しつつ立ち上がる。高台は断面長方形を呈し大きい。全体に強い珪である。	①灰白色②還元③口縁部1/2・体部へ底部先形④多くの長石粒を含む
42住-5	壺 土師器	- (19.0) - 床面+14	「コ」の字状を呈する口縁を持つ。口縁部横ナデ、胴部左横方向へク削り、内面横ナデ。	①明褐色②酸化③口縁へ頸部1/5④細かい砂粒を多く含む

43号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版23 遺物写真図版100

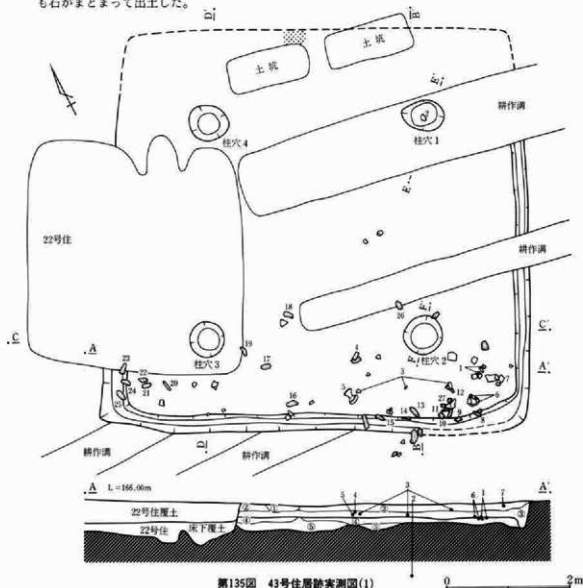
位置 II区中央部南寄りに位置し、41号住居の南約2mでM-16・17、N-16・17グリットに属する。

概要 平安時代22号住居と重複しており、22号住居により西側の一部を床面下まで掘り込まれている。さらに住居内を東西に走る2本の耕作溝と2個のイモ穴により床面まで掘り抜かれていた。また住居南側の掘り込みは深い北側は残りが悪い。竈は北壁中央部に焼土と灰黄褐色粘質土が一部残存していたため、この位置に造られていたものと思われるが、ほとんど残っていない。柱穴はほぼ正方形に4本確認されたが、貯蔵穴は検出できなかった。残存している壁面下に周溝が掘られていた。

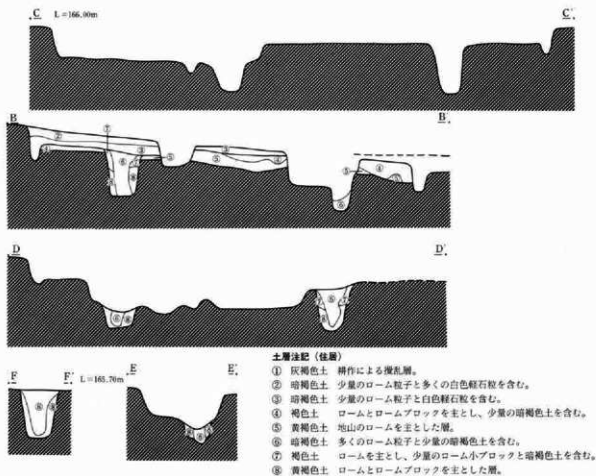
構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ、床面中央部は踏み固められてあった。

規模 東西6.85m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い南壁で44cmである。柱穴1は直径60cm深さ79cm、柱穴2は直径65cm深さ87cm、柱穴3は直径55cm深さ61cm、柱穴4は直径60cm深さ74cmである。周溝は幅25~30cm、深さ15~17cmであった。

遺物 床面や覆土中より、土師器の甕や環・須恵器の環や甕等が出土した。南壁に近い床面上より21個のこも石がまとまって出土した。

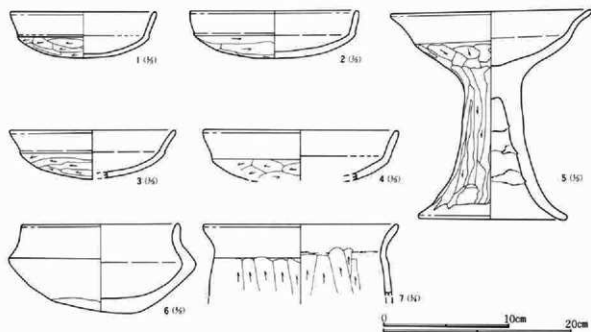


第135図 43号住居跡実測図(1)



第136図 43号住居跡実測図(2)

0 2m



第137図 43号住居跡出土遺物実測図

43号住居跡 出土遺物観察表(挿入番号第137図)

遺物番号 採取番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特徴	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
43住-1 100	坏 土師器	3.7 11.8 - 床面	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部はわずかに外傾しつつ立ち上がる。外側底部へ丸削り。口縁部横ナデ。小型の坏である。	①表面黒色・断面明褐色②酸化③ほぼ 完形④少量の砂粒と赤色粒を含む
43住-2 100	坏 土師器	3.8 13.6 - ピット内+8	丸底の坏であり、口径が大きく底部が浅い。底部と口縁部との境に強い稜を持つ。底部へ丸削り。口縁部横ナデ。	①表面黒色・断面灰褐色②酸化③口縁 部1/3・底部2/3④少量の砂粒を含む ⑤表面黒ウレシカ?
43住-3 100	坏 土師器	3.9 13.3 - 床面+2	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に弱い稜を持つ。底部へ丸削り。口縁部横ナデ。	①明褐色②酸化③1/3④少量の赤色粒 と砂粒を含む
43住-4 100	坏 土師器	- 15.8 - 床面+6	口径が大きく浅い坏である。底部と口縁との境に明瞭な稜はない。	①明褐色②酸化③口縁部1/4④1~2 mmの長石粒を多量に含む
43住-5 100	高坏 土師器	16.7 15.9 11.9 床面+2	底部が浅く口縁部が大きく外反する。底部と口縁部との境に明瞭な稜はもたない。脚部はていどに整形後縦方向全面へ丸削き。脚部内側に多くの輪痕痕が見える。	①明褐色②酸化③環口縁部3/4・他は完 形④器底の細粒を多く含む
43住-6 100	坏 土師器	7.0 12.8 7.0 床面	底部口縁部とも器高の高い坏。底部外側の器表面は寛く、へら削りの単位は不明。底部中央は平底。	①明褐色②酸化③ほぼ完形④少量の砂 粒を含む
43住-7 100	葉 土師器	- (21.0) - 床面+16	長脚葉の小破片である。胴部下→上方向に向かう縦方向へ丸削り。口縁部横ナデ。胴部内側縦方向ナデ。	①明褐色②酸化③口縁部へ胴上部1/5 ④1mm前後の砂粒を多く含む
43住-8 100	石	長辺12.4 短辺4.7 厚さ2.1 195g	扁平な石であり、側面中央付近に凹状の欠損部あり。こも石の可能性大。	①淡青色②完形③石墨緑泥片岩④床 面+18
43住-9 100	石	長辺14.7 短辺3.6 厚さ3.4 444g	扁平な石であるが、端部の一方が欠損している。表面の磨耗は一部である。	①淡緑色②一部欠損③点紋石墨緑泥片 岩④床面
43住-10 100	石	長辺10.9 短辺2.7 厚さ3.7 528g	長さが短く、幅が広い。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床 面+5
43住-11 100	石	長辺14.0 短辺3.3 厚さ3.9 564g	細長い石であり、中央部分が肉厚になっている。やや不定形を呈する。	①淡緑色②一部欠損③緑黄緑泥片岩④ 床面+4
43住-12 100	石	長辺14.1 短辺2.9 厚さ3.5 580g	扁平な石であり、幅がやや広い。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形③緑黄緑泥片岩④床 面+4
43住-13 100	石	長辺15.6 短辺2.9 厚さ4.9 560g	細長い石であるが、中央部の断面が三角形を呈する。側面の片側に凹状の欠損部あり。	①淡緑色②一部欠損③緑黄緑泥片岩④ 床面+4
43住-14 100	石	長辺12.6 短辺2.4 厚さ4.3 506g	断面が正方形を呈する肉厚の石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形③緑黄緑泥片岩④床 面
43住-15 100	石	長辺12.8 短辺2.2 厚さ2.5 310g	扁平な石である。側面中央部に凹状の欠損部あり。こも石の可能性大。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床 面+6
43住-16 100	石	長辺14.4 短辺2.2 厚さ3.0 513g	扁平で幅広い石である。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床 面+20
43住-17 100	石	長辺13.0 短辺2.5 厚さ4.4 553g	断面が三角形の石であり、長さも短い。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床 面+24
43住-18 100	石	長辺11.5 短辺2.1 厚さ4.2 540g	10の石に近い。断面が三角形を呈する。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④ 床面-2
43住-19 100	石	長辺14.2 短辺2.8 厚さ4.5 492g	中央部の幅広い石である。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形④点紋網罟母石墨片岩 ⑤床面-4
43住-20 100	石	長辺15.2 短辺2.8 厚さ3.1 390g	細長い石である。中央部が細くなっており、こも石の可能性大。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④ 床面+6
43住-21 100	石	長辺13.6 短辺2.9 厚さ3.2 440g	中央部の幅広い石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形③緑黄緑泥片岩④床 面-2
43住-22 100	石	長辺13.6 短辺2.1 厚さ3.4 482g	中央部の幅広い石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形④点紋網罟母石墨片 岩⑤床面-4
43住-23 100	石	長辺15.0 短辺2.6 厚さ4.3 686g	やや肉厚の石である。表面全体が磨耗している。	①淡緑色②完形④点紋網罟母石墨片岩 ⑤床面-9
43住-24 100	石	長辺12.5 短辺2.4 厚さ3.7 453g	長さの短い石である。側面中央部が少し細くなっている。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床 面-6
43住-25 100	石	長辺14.5 短辺2.1 厚さ3.5 631g	扁平であるが、中央部の幅広い石である。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形④点紋網罟母石墨片岩 ⑤床面-4
43住-26 100	石	長辺12.7 短辺2.8 厚さ4.0 468g	やや肉厚の石である。不定形を呈し、表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床 面-5
43住-27 100	石	長辺29.6 短辺2.7 厚さ5.2 532g	長さの短い肉厚の石である。特に中央部が肉厚となっている。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③緑黄緑泥片岩④床 面+4

44号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版23 遺物写真図版100・101

位置 II区東側に位置し、23号住居の西約2mでJ-16・17グリッドに属する。

概要 住居西側の多くの部分が、後世の地境溝と攪乱土坑により壊されている。竈も大部分が削平されて多くの部分が残存していない。

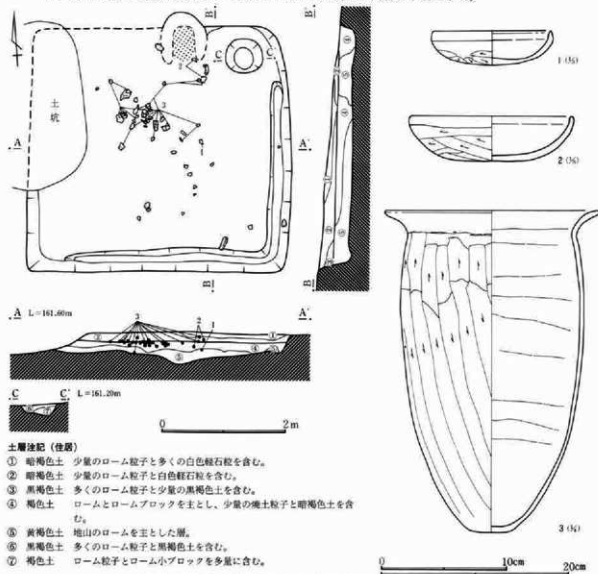
構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ、電手前と床面中央部は固く踏み固められていた。貯蔵穴が電右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。周溝が南壁と東壁に添って掘られていた。

規模 東西4.2m、南北3.9mである。壁高は最も残りの良い南壁で35cmである。周溝は幅35~40cmで深さ11~14cmである。貯蔵穴は直径55cmの円形を呈し、深さ25cmであった。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の壺や少量の須恵器の坏や壺の破片が出土した。

44号住居跡(竈)

概要 住居北壁中央部やや東寄りの床面上に焼土が残存しており、おそらくこの位置に竈が造られていたものと思われる。大部分が削平されて残っていないため詳しい内容は不明である。



第138図 44号住居跡及び出土遺物実測図

44号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第138図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
44住-1	坏 土師器	2.7 9.4 - 床面-10	平底に近い丸底の坏である。口縁部は短く内傾する。浅く小さな坏である。底部へう削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。	①明褐色②酸化③1/4④砂粒を少量含む
44住-2 101	坏 土師器	3.6 13.0 - 床面+2	平底に近い丸底の坏である。口縁部は短く内傾する。底部へ体部へう削り、口縁部横ナデ、内面ていねいな横ナデ。	①明褐色②酸化③1/3④砂粒を少量含む
44住-3 100	甕 土師器	34.0 (23.0) (5.5) 床面	口縁部に最大径を持つ。底部を含め器内全体が薄い。口縁部は器肉が厚く大きく外反する。胴部外側縦方向へう削り。横方向のへう削りは認められない。	①明褐色②酸化③4/5④1~2mmの砂粒を多く含む

45号住居跡 (時代不明) 遺構写真図版24

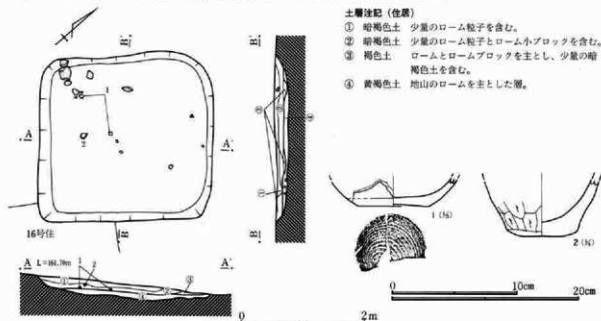
位置 II区東側に位置し、10号住居の南約1mでJ-16グリッドに属する。

概要 古墳時代に属する16号住居の北西部分の床面と壁面の一部を掘り込んで造られている。北西コーナーに焼けた4個の石(牛伏砂岩の角礫)が出土したが焼土は僅かなため竈としては疑問が多く、投げ込まれた可能性が高い。竈が存在しない住居となる。残存状態の非常に悪い住居である。住居の切り合い関係から古墳時代の16号住居より新しいが、出土遺物が少なく時代の決定はできない。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、軟質である。

規模 東西推定2.8m、南北2.7mである。壁高は西壁部分で10cmである。

遺物 床面や覆土中より、古墳時代の土師器の甕と平安時代の坏が出土している。



第139図 45号住居跡及び出土遺物実測図

45号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第139図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
45住-1	坏 須形器	- - 5.6 床面	底径の小さな坏である。底部右側未切取。(平安時代の須形器である。)	①灰色②還元③体部下平1/5・底部2/3④長石粒を多く含む
45住-2	甕 土師器	- - 7.6 床面+5	底部が非常に厚い。胴中央部に最大径を持つ甕の底部破片と思われる。(古墳時代の甕である。)	①明褐色②酸化③胴下半~底部1/2④1~2mmの砂粒を多く含む

46号住居跡（奈良時代） 遺構写真図版24

位置 III区南東部に位置し、42号住居の南東約19mでQ-22グリットに属する。

概要 住居南側は残りが比較的良好であるが、北壁近くの床面と壁面は残存していない。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴と柱穴は掘られていなかった。残存している壁面内側に周溝が検出された。

規模 東西4.55m、南北は推定3.9mである。壁高は南側で45cm。周溝は幅20～25cm、深さ6～8cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器甕と坏の破片が出土した。

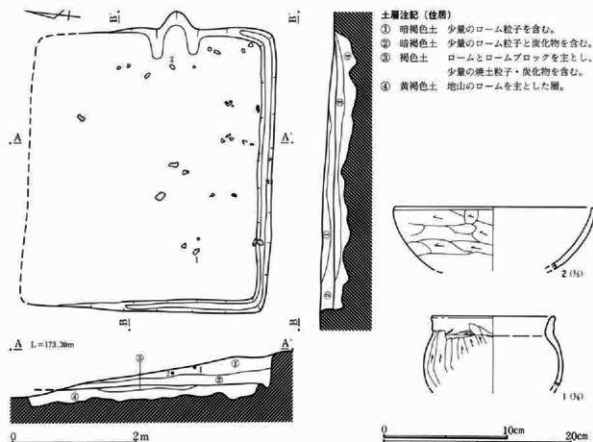
46号住居跡（甕）

位置 住居東壁の壁面を一部掘り込んで造られており、燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 ローム粒子とローム小ブロックを主体とした暗褐色土と灰黄褐色粘質土で構築されている。燃焼部から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向45cmである。

遺物 土師器甕の胴部破片が少量出土した。

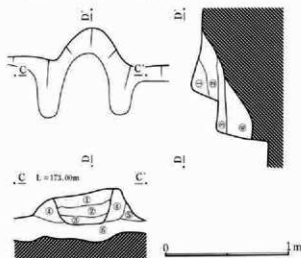


第140図 46号住居跡及び出土遺物実測図

46号住居跡 出土遺物観察表（挿図番号第140図）

遺物番号 図版番号	器形及 種類	器高・口径・径長(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
46住-1	小型栗 土師甕	- (13.0) - 床面+26	丸胴から口縁部が直立矢状に立ち上がる。口縁部の 器内が厚い。胴部へテ削り。	①明褐色②酸化③口縁部～胴中央部 1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
46住-2	甕 土師甕	- (16.0) - 床面+16	丸底の坏であり、口縁部は極めて幅が狭い。底部へ 口縁部手前までへテ削り。	①明褐色②酸化③口縁部～体部1/4④ 砂粒を少量含む

第3章 検出された遺構と遺物



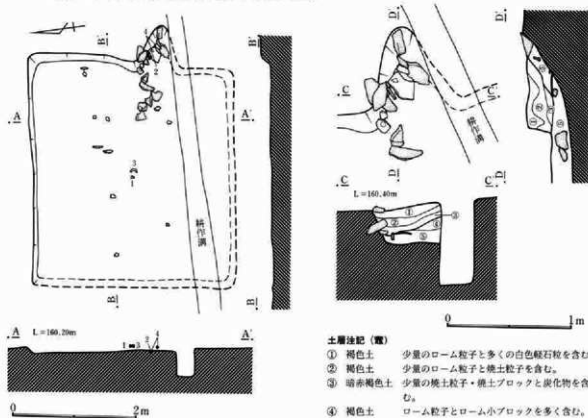
第141図 46号住居跡踏査実測図

47号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版24 遺物写真図版101

位置 I区西北部に位置し、7号住居の西約2mでH-12、I-12グリッドに属する。

概要 非常に残りの悪い住居で、西壁と南壁近くの床面と壁面は残存していなかった。また住居内を東西に走る耕作溝により、竈右袖部分と住居の一部が壊されていた。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主体とし、黒褐色土が混入した土であったが、良好な状態で検出できなかった。柱穴や貯蔵穴は検出できなかった。



土層注記 (鑑)

- ① 暗褐色土 暗褐色土中に多くの灰黄褐色粘土を含む
- ② 赤褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- ③ 赤色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロック・灰黄褐色粘質土を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層、少量の暗褐色土と焼土粒子を含む。

土層注記 (實)

- ① 褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 少量の焼土粒子・焼土ブロックと炭化物を含む。
- ④ 褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを多く含む。
- ⑤ 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック・暗褐色土を主とし、少量の焼土粒子を含む。

第142図 47号住居跡及び遺実測図

規模 東西推定3.7m、南北推定3.3mである。壁高は最も残りの良いところで10cmで、残りは悪い。

遺物 床面や覆土中より須恵器の坏や埴が出土した。

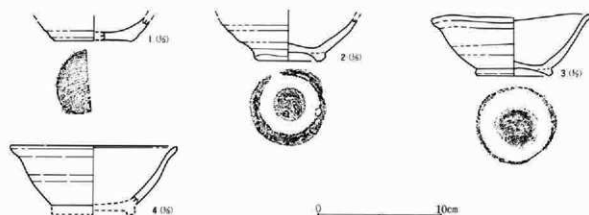
47号住居跡（竈）

位置 住居東壁のやや南寄りには壁面を掘り込んで造られており、右袖の一部は耕作溝により壊されている。

構造 竈内や焚口付近から多くの石が出土しており、主として石を用いて造られた竈である。燃焼部床面付近から、少量の焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向推定60cmである。

遺物 須恵器埴と瓦の破片が出土している。



第143図 47号住居跡出土遺物実測図

47号住居跡 出土遺物観察表（挿図番号第143図）

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①灰色②黄或③残存④胎土⑤雜者
47住-1	坏 須恵器	- - (6.0) 床面+6	底径の小さな坏の小破片である。底部右回転糸切痕。	①灰色②還元③体部下半～底部1/3④長石粒を多く含む
47住-2 101	埴 須恵器	- - (6.0) 床面	内側底部中央凸状を呈する。高台部は太く整形は雑である。高台内側に右回転と思われる糸切痕あり。	①明褐色②酸化③体部4/5・底部完形④1mm以下の砂粒を多く含む
47住-3 101	埴 須恵器	5.0 12.6 6.0 床面+5	内側底部中央凸状を呈する。底径は小さく口縁部が大きく外反する。高台は細く低い。高台部内側に糸切痕。全体にゆがみのばげしい埴である。	①灰色②還元③4/5④1mm以下の砂粒を含む⑤ロクロ右回転
47住-4	埴 須恵器	- 13.4 - 床面	体部下端の痕跡より高台を持つ埴の可能性大。口縁部が大きく外反する。	①表面黒色・断面灰褐色②酸化③口縁～体部1/4④1mm以下の砂粒を多く含む

48号住居跡（古墳時代） 遺構写真図版24・25 遺物写真図版101

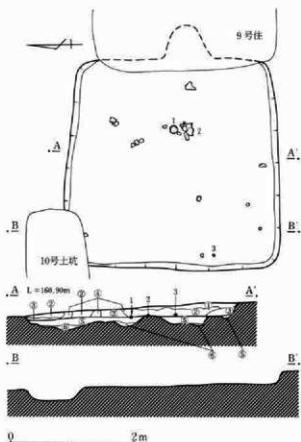
位置 I区中央部西端に位置し、7号住居の南4mで1-12グリットに属する。

概要 奈良時代の9号住居と重複し、9号住居により東壁の大部分と床面の一部が掘られている。残存している床面や壁面には竈が造られていないため、おそらく重複している東壁部分に竈が造られていたものと思われる。

構造 床面は、ロームブロックを主体とし、黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴・貯蔵穴・竈は検出できなかった。

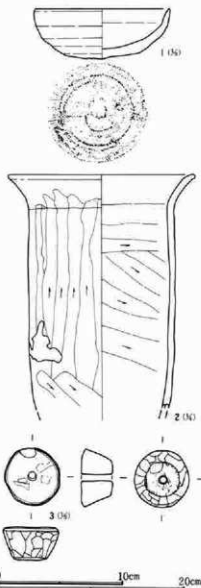
規模 東西3.3m、南北3.4mで、正方形に近い。壁高は最も残りの良い南壁で18cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の坏や甕が出土したが、図化できるものは少なかった。紡錘車が出土している。



土層注記(住居)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 暗褐色土 多くの焼土粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ④ 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む攪乱層。
- ⑤ 褐色土 ローム粒子とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第144図 48号住居跡及び出土遺物実測図

48号住居跡 出土遺物観察表(押図番号第144図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部形状等の特色	①色調②焼成③形状④胎土⑤備考
48住-1 101	環 須恵器	4.0 11.0 - 床面	丸底を呈する環である。底部右回転ヘラ削り、口縁部ロクロ目、器内の厚く、つくりのていねいな杯である。	①灰色②還元焼成③定形④灰石粒を大量に含む
48住-2 101	箸 土製簡	- (20.0) - 床面	口縁部に最大径を持つ長胴型である。口縁部は大きく外反する。胴部外側口縁部に向かう縦方向へ削り。	①明褐色②酸化③口縁部へ胴下半1/3④1~2mmの砂粒を多く含む
48住-3 101	紡錘車	長さ4.4 幅4.4 厚さ2.5 重量45g 孔径0.6 床面	土製紡錘車である。厚さが厚く表面全体にへら磨きが行なわれ光沢を持つ。	①表面黒褐色・断面明褐色②酸化③ほぼ定形④密⑤土製

49号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版25 遺物写真図版101

位置 1区南西部に位置し、K-11・12、L-11・12グリットに属する。

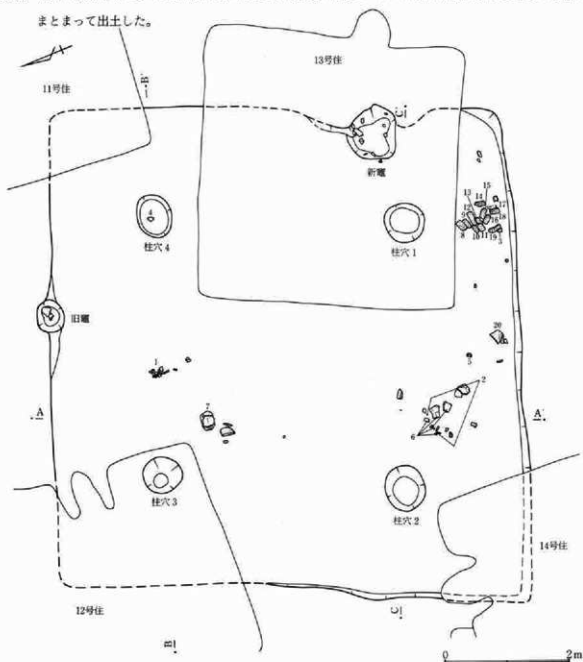
概要 11・12・13・14号住居の4軒と重複している。11・12・49号住居が古墳時代、14号住居が奈良時代、13号住居が平安時代である。新旧関係は49→12→11→14→13号住居の順であり、本住居が最古の段階

にあたる。後世の4軒の住居により床面の半分近くが壊されている。竈は北と東に確認できた。北竈は床面がほぼ残っているにもかかわらず、袖や燃焼部にあたる床面上に焼土がほとんど認められないため、ある段階で東に造り替えられ、床面上の袖や燃焼面の焼土が取り払われたものと思われる。最終段階で使用されたのは、13号住居によって壊された東竈であったものと思われる。

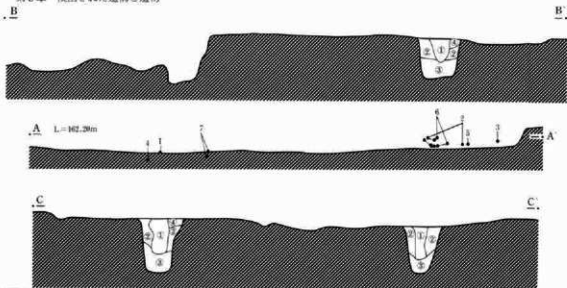
構造 他の住居と重複せずに残っている部分の床面は、ロームとロームブロックを主とし黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は4本確認されたが、貯蔵穴は床下の調査でも確認できなかった。

規模 東西推定7.7m、南北推定7.5mである。壁高は残りの良い南壁で30cmである。柱穴1は直径60cm深さ65cm、柱穴2は直径60cm深さ60cm、柱穴3は直径60cm深さ69cm、柱穴4は直径65cm深さ74cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の坏や甕が出土した。南東コーナーに近い床面上より12個のこも石がまとまって出土した。



第145図 49号住居跡実測図(1)



土層法記 (柱穴)

- ① 褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
 ② 褐色土 多くのローム粒子と少量のロームブロックを含む。
 ③ 褐色土 ロームを主とした層、ロックを含む。
 ④ 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

第146図 49号住居跡実測図(2)

49号住居跡東竪(新竪)

位置 住居東壁南寄りの壁面から床面にかけて造られていたものと思われる。燃焼部から上の大部分は、13号住居により掘り取られていたため残っていない。

構造 東壁ロームを掘り抜いて燃焼部の一部が造られていた。燃焼部下部より少量の焼土粒子が検出された。

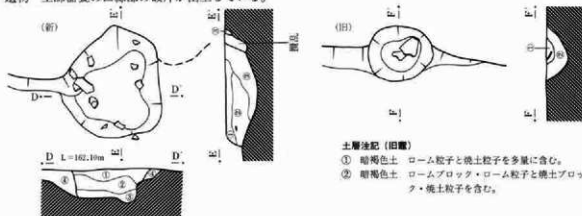
遺物 土師器甕や須恵器甕の破片が出土した。

49号住居跡北竪(旧竪)

位置 住居北壁中央の壁面から床面にかけて造られていたと思われる。床面上に位置する両袖部分と燃焼部分は取り除かれていたため燃焼部の一部分しか残っていなかった。

構造 北壁ロームを掘り抜いて燃焼部の一部が造られていた。

遺物 土師器甕の口縁部の破片が出土している。

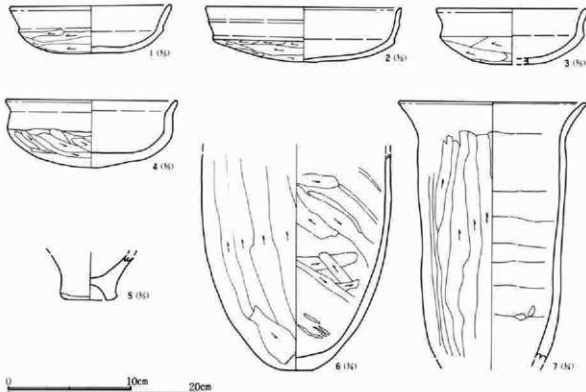


土層法記 (旧竪)

土層法記 (新竪)

- ① 褐色土 少量のローム粒子と多くの焼土粒子を含む。
 ② 暗褐色土 少量の焼土粒子と炭化物を含む。
 ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の暗褐色土を含む。
 ④ 黄褐色土 旭山のロームを主とした層。

第147図 49号住居跡新旧竪実測図



第148図 49号住居跡出土遺物実測図

49号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第148図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径 (cm)	出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
49住-1 101	坏 土師器	3.8 (13.0) -	床面	平底に近い丸底の坏であり、底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は大きく外反する。底部は細くていねいなヘラ削り。口縁部へ内側底部横ナデ。	①明褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を少量含む
49住-2 101	坏 土師器	4.4 15.8 -	床面+5	有段口縁を持つ坏である。口径が大きく口縁部は幅が広く底部が浅い。底部と口縁部との境に明瞭な段を持つ。底部幅広い単位のヘラ削り。	①褐色②酸化③4/5④1mm以下の砂粒を少量含む
49住-3	坏 土師器	- (12.0) -	床面+9	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部中央が凹状を呈する。	①明褐色②酸化③1/4④1~2mmの砂粒を多く含むため1・2・4の杯と異質
49住-4 101	坏 土師器	5.4 (13.0) -	ピット内+50	丸底の坏であり、底部中央が肉厚となっている。底部と口縁部との境に明瞭な稜は認められない。底部ヘラ削り。	①明褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
49住-5	坏? 土師器	- - -	床面+5	小型の杯状を呈す製品と思われるが、一部分のための全体像不明、内外面ナデ整形。	①明褐色②酸化③底部4/5④1mm以下の砂粒を少量含む
49住-6 101	埴 土師器	- - 4.0	床面+4	胴部中央に最大径を持つ埴と思われる。器表面が砂粒により荒れているためヘラ削りの単位が明瞭でない。内面ナデ整形。	①褐色②酸化③胴上平1/3・下半一底部4/5④1~2mmの砂粒を多く3mm前後の砂粒を少量含む⑤器表面が悪い
49住-7 101	埴 土師器	- (20.0) -	床面+2	口縁部に最大径を持つ埴である。6と器形が異なる。器内がやや薄い。底部から口縁部に向かう縦方向ヘラ削り。	①褐色②酸化③口縁へ胴部1/3④1~2mmの砂粒を多く3mm前後の砂粒を少量含む⑤器表面が悪い
49住-8 101	石	長辺15.9 短辺9.9 厚さ5.0 1300g		側面で幅広い長方形を呈する。側面に凹状の欠損部を持つ。重量のある石である。	①淡緑色②完形③点紋石層緑泥片岩④床面+6
49住-9 101	石	長辺15.6 短辺8.0 厚さ4.5 714g		側面で幅広い石である。中央部が幅広くなっている。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石層片岩④床面+8
49住-10 101	石	長辺16.3 短辺9.3 厚さ3.8 900g		側面で幅広い石である。中央部が幅広くなっている。	①淡緑色②完形③点紋緑泥片岩④床面+8
49住-11 101	石	長辺15.1 短辺8.2 厚さ5.6 1000g		横断面長方形を呈する肉厚の石である。側面中央部が凹状を呈している。	①淡青色②完形③網罟母緑泥片岩④床面+8
49住-12	石	長辺17.5 短辺9.5 厚さ3.6 860g		側面で幅広い石である。両側面に凹状の欠損部を持つ。表面全体が磨耗している。	①淡青色③完形④網罟母緑泥片岩⑤床面+9

49号住居跡 出土遺物観察表 (挿入番号第148図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
49住-13 101	石	長辺14.7 短辺7.0 厚さ4.7 566g	横断面ひし形に近い。側面に凹状の欠損部を持つ。表面全体が磨耗している。	①淡青色③完形④網雲母石墨緑泥片岩⑤床面+10
49住-14 101	石	長辺14.0 短辺7.2 厚さ3.3 425g	扁平な石であるが、部分的に欠損しており、小さな石となっている。	①淡青色③一部欠損④点紋網雲母石墨片岩⑤床面+9
49住-15 101	石	長辺16.8 短辺9.8 厚さ3.3 776g	扁平で幅広い石である。両側面に凹状の欠損部を持つ。表面全体が磨耗している。	①淡青色③完形④点紋網雲母石墨片岩⑤床面+10
49住-16 101	石	長辺13.7 短辺6.7 厚さ3.9 634g	内厚の石である。内側面に凹状のへこみを持つ。表面全体が磨耗している。	①淡青色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面+9
49住-17 101	石	長辺17.0 短辺8.3 厚さ4.1 781g	横断面三角形に近い。片側面に凹状を呈する。表面全体が磨耗している。	①淡青色③完形④点紋網雲母石墨片岩⑤床面+9
49住-18 101	石	長辺15.8 短辺8.8 厚さ3.8 791g	扁平で幅広い石である。両側面に凹状の欠損部を持つ。表面全体が磨耗している。	①淡青色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面+8
49住-19 101	石	長辺19.0 短辺9.2 厚さ3.9 1100g	扁平で幅広い石である。一方の側面に凹状の欠損部、他方の側面に凹状のへこみを持つ。	①淡青色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面+9
49住-20 101	石	長辺17.0 短辺7.3 厚さ3.5 725g	細長く扁平な石である。片側の側面が少し凹状を呈する。表面全体が磨耗している。	①淡青色③完形④点紋網雲母泥片岩⑤床面

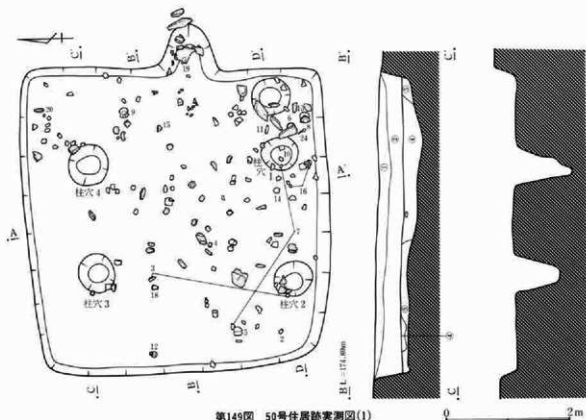
50号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版25・26 遺物写真図版102・147

位置 III区中央部南側に位置し、44号住居の西約14mでR-25・26グリッドに属する。

概要 壁面が4面残存しているため、他の住居と比較するなら残りは良好である。

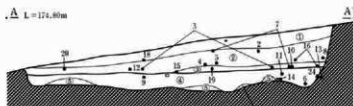
構造 床面は、ルームとルームブロックを主体とし、黒褐色土が混入した土で軟質である。柱穴が4本確認され、竈南側に貯蔵穴が検出された。

規模 東西4.90m、南北4.85mである。壁高は最も残りの良い南壁部分で75cmである。柱穴1は直径60cm深



第149図 50号住居跡実測図(1)

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



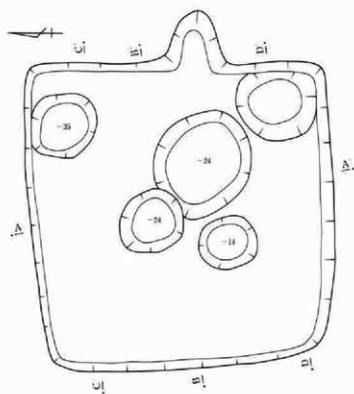
土層注記(住居)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ③ 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の焼土粒子・炭化物・暗褐色土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

き65cm、柱穴2は直径60cm深さ60cm、柱穴3は直径60cm深さ69cm、柱穴4は直径65cm深さ74cmである。床面からの深さは60~70cmである。貯蔵穴は直径60cmのほぼ円形を呈し深さ50cmである。

遺物 床面や覆土中より須恵器の杯・埴・皿・蓋や鉄製の鎌や鋤が出土した。

床下 中央部に3個、北東部に1個、計4個の床下土坑が検出された。床面からの深さは図中に数字で示した。



第150図 50号住居跡実測図(2)及び床下実測図

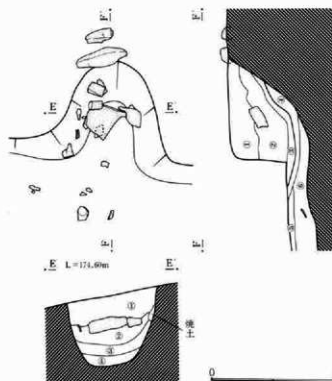
50号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央部に壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の多くは壁面から外側にかけて造られている。煙道は燃焼部から外側にむかい、急に立ち上がりながらロームを掘り抜いて造られていた。

構造 竈内から6個、煙道部から2個の石が出土している。また住居内からも多くの石が出土しているため、石を多く用いて造られた竈と思われる。しかし、竈内に残っている石や煙道部より出土した石は使用時の状態でなく動かされているため詳しい内容は不明である。竈内より多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向90cm、両袖方向推定80cmである。 遺物 多くの土師器製の破片が出土している。

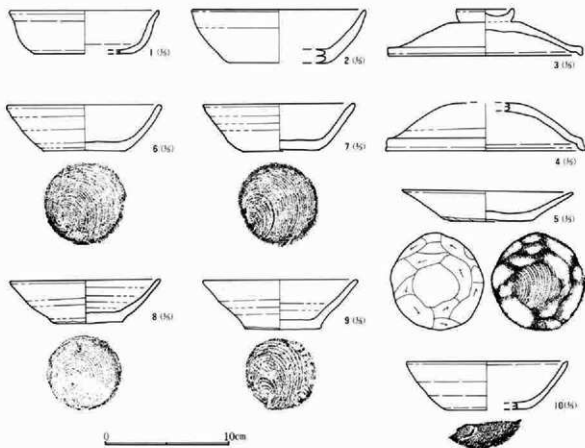
第3章 検出された遺構と遺物



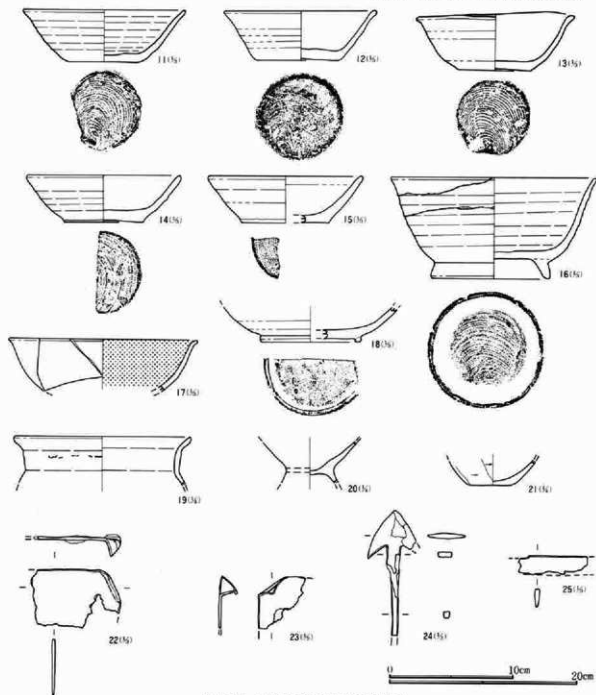
土層注記(概)

- ① 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と多くの焼土粒子と少量の炭化物を含む。
- ③ 淡赤褐色土 多く焼土粒子と少量の黒褐色土の層。
- ④ 黒褐色土 黒褐色土中に炭・灰・焼土粒子を含む軟質土層。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第151図 50号住居跡電実測図



第152図 50号住居跡出土遺物実測図(1)



第153図 50号住居跡出土遺物実測図(2)

50号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第152図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
50住-1	環 土師器	3.4 (12.0) - 覆土	平底を呈する器内の薄い環である。底部～体部ナデ整形。口縁部横ナデ。	①明褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を少量含む
50住-2	環 土師器	4.2 (14.0) (8.2) 床面+28	平底を呈する器内の厚い環である。特に体部下半～底部が厚い。体部～口縁部は直線的に外傾する。	①明褐色②酸化③口縁部1/3・底部小破片④密・ほとんど砂粒含まない
50住-3 102	蓋 須恵器	3.7 15.6 - 床面+2	環状のツマミを持つ蓋である。天井部は平で一部に糸切痕が残る。天井部周辺回転ヘラ削り、口縁部横ナデ。口縁部はでいねいに整形されている。	①灰白色②還元③口縁部1/3・他はほぼ完形④長石粒を多く含む
50住-4	蓋 須恵器	3.8 (16.0) - 床面+10	器高の高い蓋である。天井部周辺子持ヘラ削り。口縁部はでいねいに整形されている。	①灰黑色②還元③1/3④長石粒を多く含む

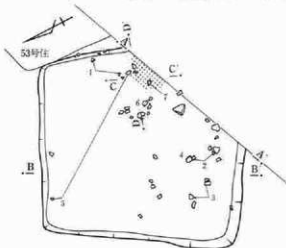
50号住居跡 出土遺物観察表 (採回番号第152・153回)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
50住-5 102	皿 須恵器	2.5 13.8 7.0 床面+14	浅い皿である。底部は糸切後周部手持へり残り。中央部に糸切痕が残る。体部へ口縁部は直線的に外側に大きく開く。口縁部は端部を薄く仕上げている。体部内外面に明確なコクロ目はない。	①灰白色②還元③4/5④砂粒をわずかに含む
50住-6 102	坏 須恵器	3.8 12.4 6.5 床面-25	底部の器内が厚い平底の坏である。底部と体部との境に弱い段を持つ。体部へ口縁部は直線的に外傾し口縁部まで器内の厚さは一定で口縁部の外反はない。	①外面黒色内面と断面灰褐色②酸化③4/5④長石粒を多く含む
50住-7 102	坏 須恵器	4.0 (12.2) 6.2 床面	底部の器内が厚い平底の坏である。底部と体部との境に弱い段を持つ。体部へ口縁部は直線的に外傾し口縁部までの厚さはほぼ一定。口縁部の外反はない。	①外面灰色・内面と断面明褐色②酸化③口縁へ体部2/3④底部定形⑤長石粒を多く含む
50住-8 102	坏 須恵器	3.4 12.1 5.8 床面+12	底部の器内が厚い平底の坏である。底部と体部との境に明確な段を持つ。体部は少し内彎しつつ立ち上がる。口縁部は直線的に外反しない。	①灰色②還元焼締③口縁へ体部3/4④底部定形⑤1~2mmの長石粒を多く、3~4mmの長石粒を少量含む
50住-9 102	坏 須恵器	4.0 12.1 5.6 床面	底部の器内が厚い平底の坏である。底部と体部との境に明確な段を持つ。体部へ口縁部は直線的に外傾し、口縁部までの厚さはほぼ一定。口縁部外反しない。	①灰色②還元③ほぼ定形④長石粒を多く含む
50住-10	坏 須恵器	3.8 (13.0) (7.2) 床面	底部の器内が薄いため6~9の坏と異質。体部へ口縁部はやや内彎しつつ直線的に立ち上がる。底部に糸切痕。	①灰色、部分的に炭灰による黒色②還元③1/3④長石粒を含む⑤右回転糸切痕
50住-11 102	坏 須恵器	4.3 (13.0) 6.2 床面-5	底部の器内が厚い平底の坏である。体部へ口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部はほとんど外反しない。	①灰色②還元③口縁へ体部1/2④底部定形⑤長石粒を多く含む
50住-12 102	坏 須恵器	3.9 12.4 6.7 床面+4	底部の器内が厚い平底の坏である。体部は直線的に立ち上がり口縁部がわずかに外反する。	①明褐色②酸化③ほぼ定形④長石粒を多く含む
50住-13 102	坏 須恵器	4.7 12.6 5.8 床面-16	底部の器内が厚い平底の坏であり、底部と体部との境に弱い段を持つ。体部はわずかに内彎しつつ直線的に立ち上がり口縁部がやや内厚となり外反する。	①明褐色②酸化③ほぼ定形④長石粒を多く含む
50住-14 102	坏 須恵器	4.2 (12.4) (6.4) 床面-15	底部の器内が厚い平底の坏であり、底部と体部との境に段を持つ。体部は直線的に外傾して立ち上がり口縁部に外反はない。	①灰白色②還元③口縁1/3・底部1/2④長石粒を多く含む⑤コクロ右回転
50住-15	坏 須恵器	3.7 (12.4) (7.0) 床面	底部の器内が厚い平底の坏であり、底部と体部との境に段を持つ。口縁部に外反はない。	①灰色②還元③1/3④長石粒を多く含む⑤コクロ右回転
50住-16 102	埴 須恵器	8.0 16.4 9.0 床面	器高が高い大きな埴である。体部はわずかに内彎しつつ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。細長い高台がつく。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁へ体部4/5④底部定形⑤長石粒を多く含む⑥体部外側に輪痕が一部残されている
50住-17	埴 灰輪	- (15.0) - 覆土	灰輪地の小破片と思われる。内側全面に輪痕がされている。	①灰白色②還元③口縁部へ体部1/6④密
50住-18 102	埴 灰輪	- - (8.0) 床面+19	底部の器内が厚い。高台は細く短い。内面全体に炭灰によるとと思われる輪痕があり気泡化している。	①灰白色②還元③底部1/2・体部下1/3④密
50住-19	壺 土師器	- (19.0) - カマド内+5	「コ」の字状口縁を呈する壺の小破片である。頸部に輪痕が残る。	①明褐色②酸化③口縁へ頸部1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
50住-20	台付壺 土師器	- - - 床面+6	台部と壺底部のみ残存。台部をていねいに貼付けてある。	①明褐色②酸化③多く底部へ底面小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
50住-21	壺 土師器	- - - 5.0 覆土	「コ」の字状口縁を呈する壺の底部と思われる。	①明褐色②酸化③底部へ割下4/5④1mm以下の砂粒を多く含む
50住-22 147	鎌	長さ7.2 幅4.4 厚さ0.2 重量21.5g 覆土	幅の広い鎌である。刃部の大半を欠損する。基部は端部の上側1/2を折り曲げている。錆化が著しく、刃切付近が盛り上がっている。	
50住-23	鎌	長さ4.1 幅3.7 厚さ0.2 重量4.9g 覆土	基部の一部のみの残存である。端部斜上方向を直角に折り曲げ、端部はさらに内側に曲げて柄がはずれにくいように加工してある。錆化の進行がはげしい。	
50住-24 147	鉄鎌	長さ9.9 幅3.7 厚さ0.4 重量17.5g 床面-14	腰欠三角形鎌である。逆刺はかなり深く、刃部断面は平造りを呈する。頸部は短かめで、間部ははっきりしない。茎は鎌身部に比べて長く、断面方形を呈する。	
50住-25 147	刀子	全長5.5 幅1.4 棟厚0.3 重量5.5g	茎から棟区と刃身の一部残存。棟は厚く残りは良いが刃部は錆化がひどく残りが悪い。⑤覆土	

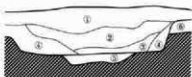
51号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版26 遺物写真図版102

位置 I区南西端部に位置し、10号住居の南約1mでL-12グリットに属する。

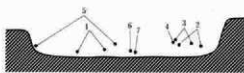
概要 53号住居と東側部分で一部重複している。2軒とも平安時代に属するが53号住居が新しい。東壁中央部分付近の床面に焼土や土器片が多く分布するため、調査範囲外の東壁中央部分に竈があったものと思われる。



A L=161.50m



B



土層注記 (住居)

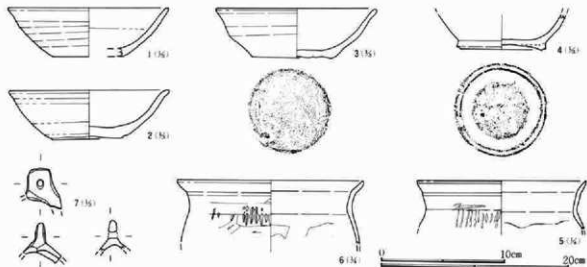
- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子と白色軽石を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ④ 褐色土 暗褐色土中に多くのローム・ロームブロック・焼土粒子を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主体とした層。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒子を主とし、少量の暗褐色土を含む(地山層)。

土層注記 (竈)

- ① 褐色土 ローム粒子を主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ② 黄褐色土 地山のローム層、部分的に焼土粒子を含む。

0 2m

第154図 51号住居跡実測図



第155図 51号住居跡出土遺物実測図

51号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第155図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
51住-1	坏 須恵器	- (13.0) (5.6) 床面+6	体部は少し内彎しつつ外側に大きく広がりがら立ち上がる。ロクロ右回転。体部外面に多くのワロコ痕。	①灰白色②還元③口縁-体部1/3-底部 わずかに④1mm以下の長石粒多く含む
51住-2 102	坏 須恵器	3.9 12.8 5.5 床面+14	底径が小さく器高の低い坏である。底部中央が少し凹状を呈する。体部はわずかに内彎し口縁部が少し外反する。底部と体部との境に段を持つ。	①灰白色②還元③口縁-体部2/3-底部 充分④1mm以下の長石粒を多く含む ⑤底面右回転未切痕
51住-3 102	坏 須恵器	3.9 13.0 6.5 床面+20	底径が小さく器高の低い坏である。体部は内彎しつつ立ち上がり口縁部は少し外反し、特に口縁端部が大きく外反している。一部吸状により黒色を呈する。	①灰白色②還元③口縁-体部2/3-底部 充分④1mm以下の砂粒を多く含む
51住-4 102	埴 須恵器	- - 7.0 床面+6	高台器部が凹状を呈する。高台部内側に右回転切痕が残る。底部は平である。	①灰白色②還元③体部下半4/5-底部- 高台充分④1mm以下の砂粒を多く含む
51住-5	埴 土師器	- (18.0) - 床面+12	「コ」の字状口縁部の小破片である。頸部細は狭い。口縁上端部外側に一条の沈線、肩部左→右へ削り。	①明褐色②酸化③口縁部-胴上部1/4 ④1mm以下の砂粒を多く含む
51住-6	埴 土師器	- (20.0) - 床面+8	「コ」の字状口縁部の小破片である。頸部中央に輪積痕が残る。肩部左→右回転へ削り。	①明褐色②酸化③口縁部-胴上部1/4 ④1mm以下の砂粒を多く含む
51住-7 102	鈴 須恵器	- - - 床面+5 孔径5mm	鈴の紐部-上部の小破片である。表面全体へ削りによりよいねい整形。紐中央に小さな穴を持つ。	①表面灰色・断面灰白色②還元③破片 により④1mm前後の石英と長石粒を多く含む

52号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版26 遺物写真図版102・103・104・105・146・147

位置 II区東部に位置し、16号住居の南約2mでK-15・16、L-15・16グリットに属する。

概要 奈良時代に属する17号住居の竪東側部分の床面と壁面を掘り込んで造られている。残存状態の良好な住居であった。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ軟質である。柱穴は4本確認されほぼ正方形に配置されていた。貯蔵穴は竪右側に掘られている。

規模 東西5.5m、南北5.3mである。壁高は残りの良いところで62cmである。柱穴1は直径50cm深さ40cm、柱穴2は直径45cm深さ60cm、柱穴3は直径50cm深さ45cm、柱穴4は直径55cm深さ53cmである。貯蔵穴は直径約75cmの円形を呈し、深さは33cmである。

遺物 多くの須恵器の坏や埴及び瓦や鉄製品とも石が出土した。瓦の出土の多いことが注目される。

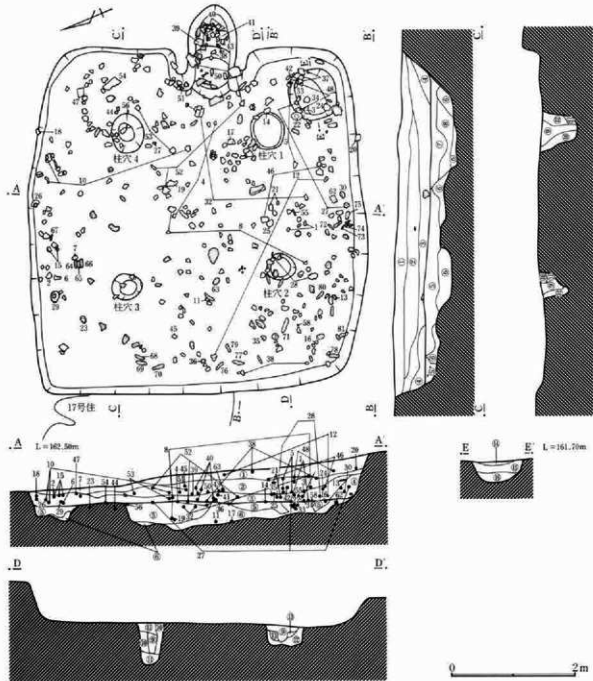
52号住居跡 (竪)

位置 住居東壁や南寄りの壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の多くは壁面から外側にかけて造られている。煙道は燃焼部から外側に向かい、なだらかに立ち上がりながらロームを掘り抜いて造られていた。

構造 ローム粒子と灰黄褐色粘質土を主として造られている。両袖部分に袖の芯材として用いられたと思われる2個の大きな瓦片(整理段階で接合したため同一瓦)、さらに北側の煙道の壁材として使用されたと思われる石が据え付けられた状態で出土した。ほかにも砂岩の破片が数片出土した。燃焼部床面や奥壁の表面が焼けて焼土化している。燃焼部覆土中に多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向150cm、両袖方向72cmである。

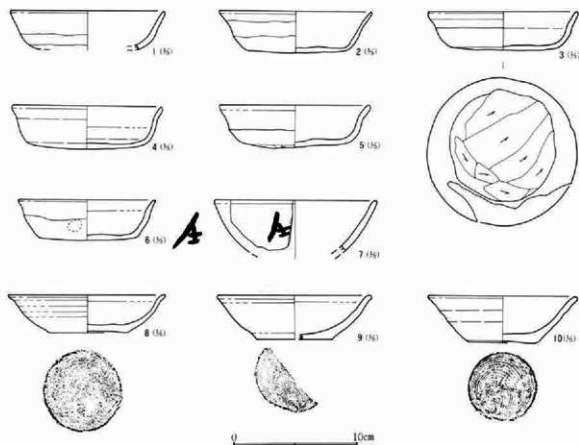
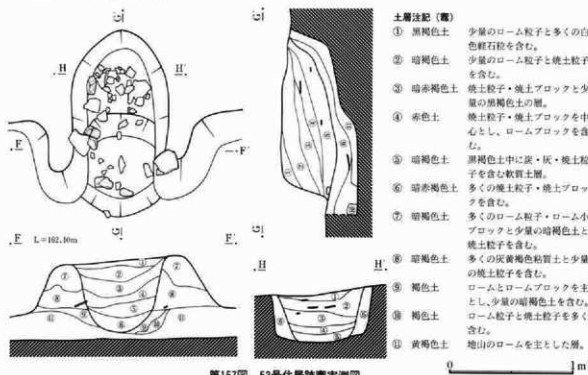
遺物 多くの土師器製の破片と少量の須恵器製の破片が出土した。

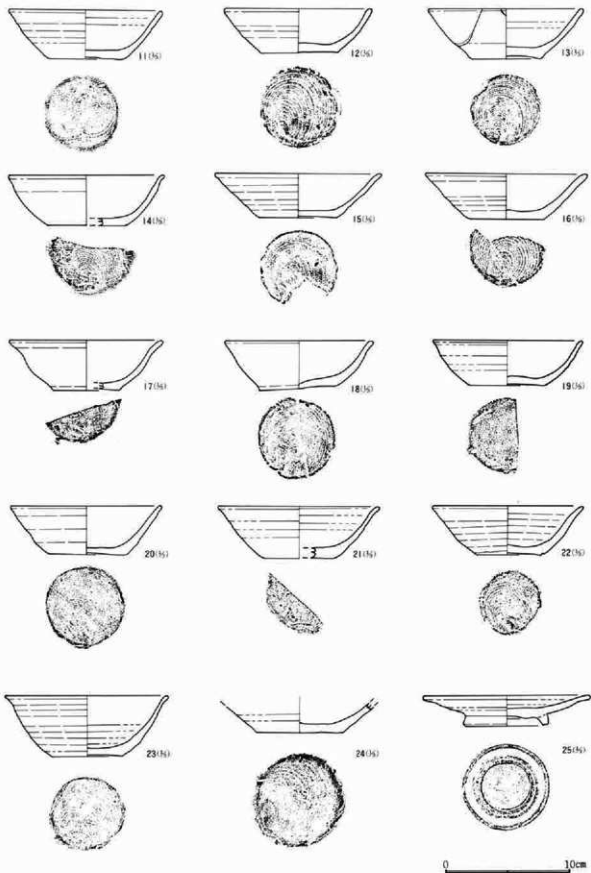


土層注記 (土層)

- | | | | |
|--------|---------------------------------|--------|--|
| ① 黒褐色土 | 少量のローム粒子和多くの白色軽石粒を含む。 | ⑩ 暗褐色土 | 多くのローム粒子を含む。 |
| ② 暗褐色土 | 少量のローム粒子和白色軽石粒を含む。 | ⑪ 褐色土 | 多くのローム粒子和ローム小ブロックを含む。 |
| ③ 黒褐色土 | 多くのローム粒子和少量の黒褐色土を含む。 | ⑫ 黄褐色土 | ロームを主とする。 |
| ④ 黒褐色土 | 多くのローム粒子和ローム小ブロックを含む。 | ⑬ 赤褐色土 | ロームを主とし、多くの焼土粒子を含む。 |
| ⑤ 褐色土 | ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | ⑭ 褐色土 | ロームを主とし、多くの焼土粒子を含む。 |
| ⑥ 黄褐色土 | 地山のロームを主とした層。 | ⑮ 暗褐色土 | 多くのローム粒子和少量の炭化物・焼土粒子を含む。 |
| ⑦ 暗褐色土 | ローム粒子を主とし、全体に焼土粒子和炭化物を混入する。 | ⑯ 暗褐色土 | 多くのローム粒子和少量の炭化物・焼土粒子・焼土ブロックを含む。 |
| ⑧ 暗褐色土 | ローム粒子を主とし、全体に多量の焼土粒子和少量の炭化物を含む。 | ⑰ 褐色土 | 多くのローム粒子和ローム小ブロック・白色粘土ブロック・焼土粒子炭化物を含む。 |

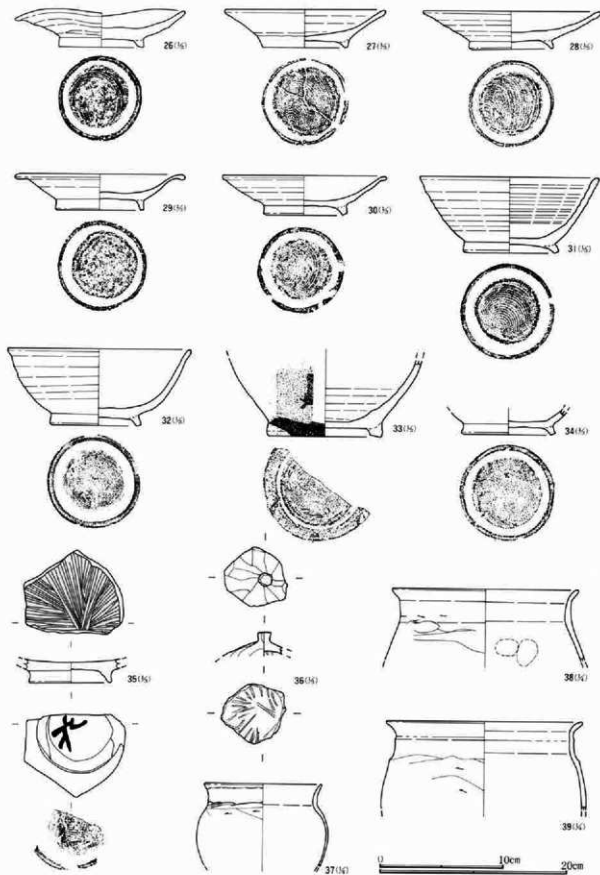
第156図 52号住居跡実測図



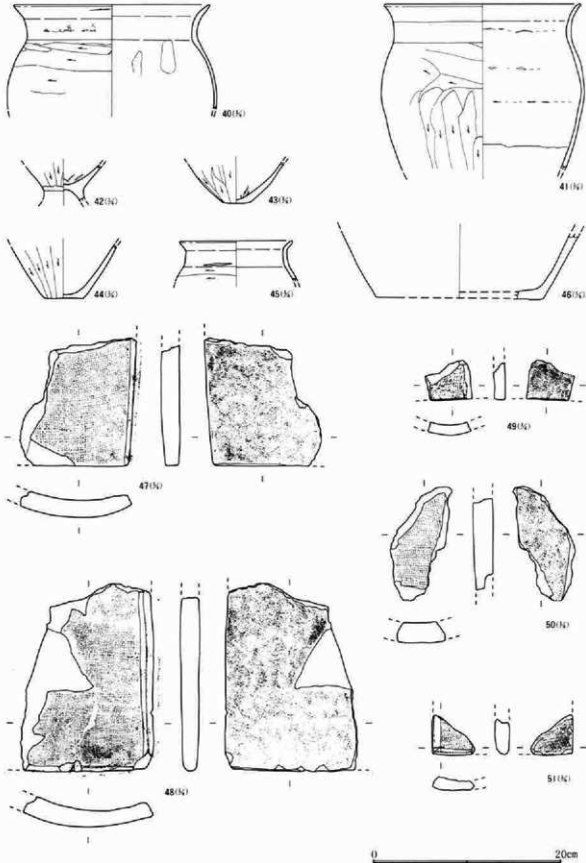


第159図 52号住居跡出土遺物実測図(2)

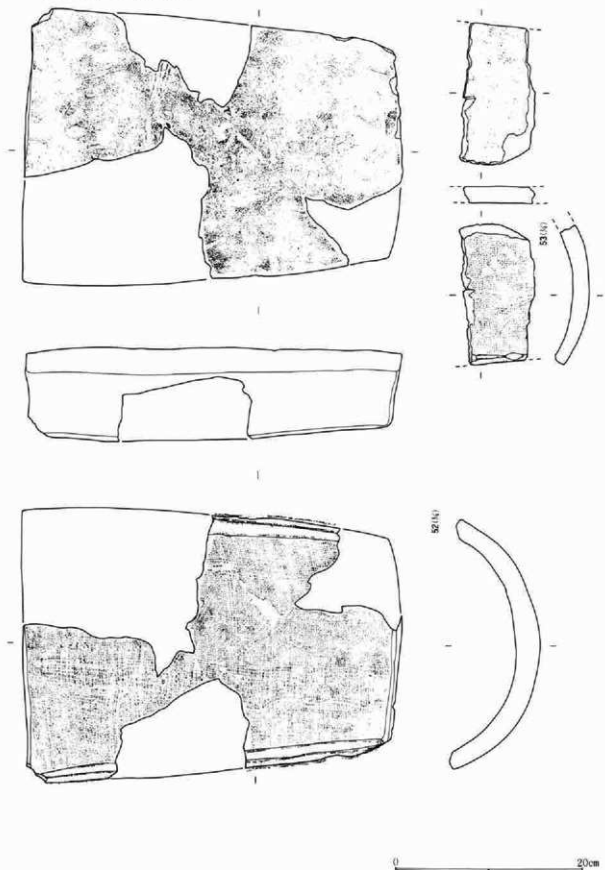
第3章 検出された遺構と遺物



第160図 52号住居跡出土遺物実測図(3)

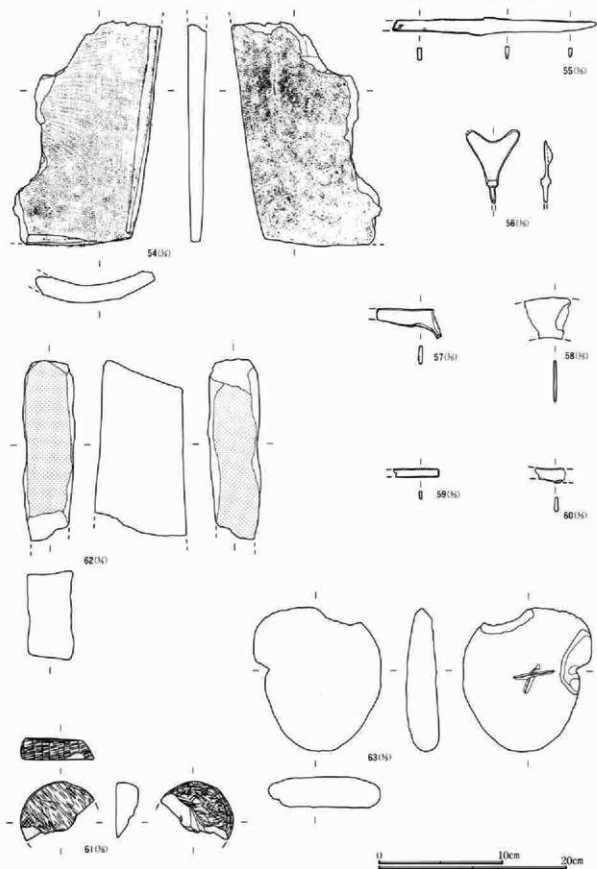


第161図 52号住居跡出土遺物実測図(4)



第162図 52号住居跡出土遺物実測図(5)

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第163図 52号住居跡出土遺物実測図(6)

第3章 検出された遺構と遺物

52号住居跡 出土遺物観察表 (棟図番号第158・159図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
S2住-1	坏 土師器	— (12.2) — 床面	器内の薄い平底の坏である。外側体部弱いナデ、口縁部～内側底部横ナデ。底部ヘラ削り。	①明褐色②酸化③口縁～底部1/3④砂粒を少量含む
S2住-2	坏 土師器	3.3 (12.4) (8.1) 床面+5	器内の薄い平底の坏である。外側体部弱いナデ、口縁部横ナデ。底部ヘラ削り、内側底部中央が少し盛り上がりしている。	①明褐色②酸化③口縁部1/3・底部2/3④砂粒を少量含む
S2住-3	坏 土師器	3.0 12.0 — 床面+16	器内の薄い平底の坏である。外側体部弱いナデ、体部と口縁部との境に外側で凹部、内側で縁線を持つ。口縁部～内側底部横ナデ、外側底部ヘラ削り。	①明褐色②酸化③ほぼ完成④砂粒と黒色粒を多く含む
S2住-4	坏 土師器	3.5 12.0 — 床面	器内の薄い平底の坏である。外側体部弱いナデ、口縁部が大きく外反し、外側に凹部、内側に弱い縁線を持つ。底部ヘラ削り。	①明褐色②酸化③口縁部1/6・底部2/3④砂粒を少量含む
S2住-5	坏 土師器	3.4 12.0 (9.2) 床面+10	器内の薄い平底の坏である。外側体部弱いナデ、口縁部～内側底部横ナデ、口縁部が少し外反する。内側底部中央が少し凸状を呈する。底部ヘラ削り。	①明褐色②酸化③口縁部2/3・底部完成④砂粒を少量含む
S2住-6	坏 土師器	3.2 (11.0) (7.8) 床面+4	器内の薄い平底の坏である。外側体部指押えと弱いナデ、口縁部横ナデ、口縁部が少し外反する。内側底部中央が少し凸状を呈する。底部ヘラ削り。	①明褐色②酸化③口縁部1/4・底部2/3④砂粒を少量含む
S2住-7	坏? 須恵器 須恵器	— (13.0) — 床面+14	わずかに内彎する。体部～口縁部が外傾しつつ立ち上がる。口縁部は外反しない。体部外面に墨書あり。	①灰色②還元③口縁部～体部1/5④多くの長石粒を含む
S2住-8	坏 須恵器	3.0 (12.6) 6.2 床面+5	底径が小さく器高の低い坏である。体部は内彎しつつ大きく立ち上がり、口縁部が大きく外反する。底部に右回転糸切痕。	①灰色②還元③口縁～体部1/3・底部完成④多くの長石粒を含む
S2住-9	坏 須恵器	3.5 (12.4) (6.0) 覆土	底径が小さく器高の低い坏である。体部は内彎しつつ立ち上がり、口縁上部が少し外反する。底部中央が少し薄くなっている。	①灰白色②還元③1/2④多くの長石粒を含む
S2住-10	坏 須恵器	3.8 (12.0) (5.5) 床面+6	底部が小さく器高の低い坏である。体部は少し内彎しつつ立ち上がる。口縁上部が少し外反する。底部右回転糸切痕。	①灰色②還元③口縁部2/3・底部完成④多くの長石粒を含む
S2住-11	坏 須恵器	3.9 (13.0) 5.8 床面-29	底部の器内の厚い坏であり、体部～口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。口縁上部に外反はない。底部右回転糸切痕。	①灰色②還元③口縁～体部1/3・底部完成④1mm以下の長石粒を多く含む
S2住-12	坏 須恵器	3.5 12.0 6.3 床面+6	底部の器内の厚い坏であり、体部～口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。口縁上部に外反はない。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁～体部1/5・底部完成④1mm以下の長石粒を多く含む
S2住-13	坏 須恵器	4.0 (12.4) 5.4 床面+14	底部の器内の厚い坏であり、体部～口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。口縁上部に外反はない。底部右回転糸切痕。	①灰色②還元③口縁1/8・体部下2/3④1mm以下の長石粒を多く含む
S2住-14	坏 須恵器	4.3 (12.6) (6.2) 床面	底部中央の器内が薄い。体部～口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり、口縁上部が外反する。底部右回転糸切痕。	①灰色②還元③口縁1/6・体部1/3・底部2/3④1mm以下の長石粒を多く含む
S2住-15	坏 須恵器	3.5 (13.4) (6.2) 床面+15	底部中央の器内が少し薄い。体部～口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり口縁上部が外反する。底部右回転糸切痕。	①外側黒色・断面灰褐色②還元③口縁部1/5・体部1/4・底部4/9④1mm以下の長石粒を含む
S2住-16	坏 須恵器	3.6 (13.0) (6.0) 床面	底部～口縁部の器内は一定の厚さである。体部～口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がり、口縁上部は外反しない。	①黒色一部灰白色②還元③口縁～体部1/3・底部2/3④1mm以下の長石粒を含む
S2住-17	坏 須恵器	4.0 12.4 5.4 床面-26	底部中央の器内が少し薄い。体部～口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり、口縁上部が大きく外反する。底部に消えかかった糸切痕。ロクロ右回転。	①灰色②還元③口縁～底部1/3④多くの石英と長石粒を含む
S2住-18	坏 須恵器	3.9 12.0 6.2 床面+15	内側底部中央が凹状を呈し器内が薄い。体部～口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり、口縁上部が少し外反する。	①灰色②還元③4/5④石英と長石粒を多く含む
S2住-19	坏 須恵器	4.6 (12.0) (6.0) 床面-26	底部の器内は一定であるが凸状を呈する。体部～口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり、口縁上部が少し外反する。	①灰色②還元③口縁～体部1/3・底部2/3④石英と長石粒を含む
S2住-20	坏 須恵器	3.9 12.2 6.3 床面+45	底部中央の器内が薄い。体部～口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり、口縁上部が少し外反する。底部右回転糸切痕。	①外側灰白色・内面と断面黒色②還元③口縁～体部2/3・底部完成④石英と長石粒を含む

52号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第159・160・161図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm)	出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②構成③残存④胎土⑤備考
52住-21 103	環 須惠器	4.1 (13.0)	(5.8) 床面+6	底部の器内が厚い。体部→口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり、口縁上部が外反する。底部右回転未切痕。	①灰色②還元③1/3④石英と長石粒を多く含む
52住-22 103	環 須惠器	3.9 12.1	5.0 床面-2	底径が小さい。体部→口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり、口縁部がやや大きく外反する。6本のクロロ目が内外面に認められる。	①灰色②還元③完全形④石英と長石粒を多く含む
52住-23 103	環 須惠器	4.8 13.2	5.8 床面-4	底径が小さい。体部→口縁部は少し内彎しつつ立ち上がり、口縁部が大きく外反する。外面に8本のクロロ目が認められる。	①灰色②還元③口縁→体部2/3・底部完形④石英と長石粒を多く含む
52住-24	環 須惠器	-	- 7.0 床面+18	浅い環の体部→底部と思われる。底径が大きく底部の器内も厚い。底部右回転未切痕。内面底部うず巻状を呈する。	①灰褐色②酸化③体部下半→底部完形④石英と長石粒を多く含む
52住-25 103	皿 須惠器	2.4 (13.4)	6.5 床面+10	底部の器内が厚く器高の低い皿である。体部→口縁部が大きく外側に開き、口縁部が少し外反する。高台下端が凹状を呈し、高台内側に右回転未切痕。	①表面黒色・断面と高台内側灰色②還元③口縁部1/6・体部→底部4/5④石英と長石粒を多く含む
52住-26 103	皿 須惠器	- (13.7)	6.6 床面+12	底部の器内が厚く器高の低い皿である。体部→口縁部が大きく外側に開き、口縁部が少し外反する。体部→口縁部が焼きみずみのためか、大きくゆがむ。	①灰色②還元③口縁→体部2/3・底部完形④石英と長石粒を多く含む ⑤内面全体に赤色顔料が付着している
52住-27 103	皿 須惠器	3.0 (13.0)	7.4 床面+2	25・26の皿と異なり、底部中央の器内が薄い。高台も方形ではなく断面三角形に近く全体の作りが雑である。口縁部の外反も認められない。	①灰色②還元③口縁1/8・体部2/3・底部完形④石英と長石粒を多く含む
52住-28 103	皿 須惠器	3.1 14.4	6.5 床面+5	底部の器内が厚く器高の低い皿である。体部→口縁部が大きく外側に開く。高台は細くはずれやすい。高台内側右回転未切痕。	①灰色②還元③口縁→体部2/3・底部完形④赤色粒と長石粒を少量含む
52住-29 103	皿 須惠器	2.8 (13.6)	7.0 床面+5	断面長方形の細長い高台を持つ皿である。口縁部が大きく外反する。高台内側に右回転未切痕。	①灰白色②還元焼締③口縁1/2・体部4/5・底部完形④長石粒を含む
52住-30 103	須惠器	3.1 13.2	6.6 床面+11	高台は太く断面は方形を呈する。口縁部は外反する。内側底部中央がやや凹状を呈する。高台内側に未切痕が残る。	①灰白色②還元③ほぼ完全形④石英と長石粒を多く含む
52住-31 103	埴 須惠土	6.0 14.4	7.2 覆土	深い埴である。体部→口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部に外反は認められない。体部内側に工具状のあて具による7本の沈線が認められる。	①表面黒色・一部灰色②還元③口縁1/4・底部完形④長石粒を含む
52住-32 103	埴 須惠器	6.1 14.7	6.9 床面+40	深い埴である。体部→口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が外反する。体部外側に7本のクロロ目あり。高台はいいいに貼付けてある。	①灰色②還元③ほぼ完全形④多くの石英と長石粒を含む
52住-33 103	瓶 灰釉	-	- (9.1) 床面-6	瓶の底部小破片である。高台は大きく大きい。内面ナメ整形。内側底部中央隆状による自然釉。頸部外面施釉。大部分の釉が酸化している。	①灰白色②還元③胴下→底部1/2④密 ⑤釉色は淡緑色
52住-34	埴 須惠器	-	- 7.1 床面+2	底部の小破片であるが、埴と思われる。高台は断面長方形を呈する。高台内側右回転未切痕。	①灰色②還元③断面→高台部完形④石英と長石粒を含む
52住-35 103	埴 墨書	-	- (6.6) 床面+10	内側底部は磁流的にへう跡きを行ない、その後炭灰により黒色を呈し光沢を持つ。高台の断面は三角形に近い。高台内側に「得刀」と思われる墨書あり。	①濃い褐色・内面黒色②酸化③底部と高台部2/3④赤色粒を少量含む
52住-36 103	蓋? 土師器	2.2	- - 床面+4	小さな破片であり全体像は不明である。一応蓋と考ふ。外側の蓋部→胴部はへう削りによりいいいに作り出されている。	①濃い褐色②酸化③底部と天井部④多くの赤色粒を含む
52住-37	小壺 土師器	- (12.6)	- 床面+8	最大径を肩部に持つ。口縁部横ナメ。肩部右→左横方向へう削り。頸部はへうによる削り痕あり。	①明褐色②酸化③口縁→肩部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
52住-38	壺 カマド内直土	- (20.0)	- 床面+33	「コ」の字状口縁の壺である。肩部右→左横方向へう削り。内側頸部に指圧痕あり。	①明褐色②酸化③口縁→肩部1/3・胴上1/6④1mm以下の砂粒を多く含む
52住-39	壺 土師器	- (21.0)	- カマド内+10	「コ」の字状口縁の壺である。肩部右→左上方へう削り。口縁部と頸部との境に横を持つ。頸部内側に明瞭な「コ」の字の区画あり。	①明褐色②酸化③口縁→胴上1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
52住-40 103	壺 土師器	- (21.0)	- カマド内+2	「コ」の字状口縁の壺である。肩部右→左横方向へう削り。頸部中央に輪痕あり。	①明褐色②酸化③口縁→頸部2/3・胴部1/6④1mm以下の砂粒を多く含む

52号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第161・162・163図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①着色②焼成③残存④胎土⑤備考
52住-41 104	甕 土師器	— 21.0 — カマド内+10	明瞭でないが、「コ」の字状口縁の要と思われる。肩部右下一左上方へ削り、胴部上→下方向へ削り、口縁上端折り返しによる小さな玉縁状を呈する。	①明褐色②焼成③残存④胎土⑤備考 ①黄褐色②酸化③口縁～胴部へ胴上部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
52住-42	台付甕 土師器	— — — 床面+22	台付甕の底部へ台部の小破片である。底部面→下方向へ削り。台はていねいに貼付けている。	①明褐色②酸化③底部部へ台上端1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
52住-43	甕 土師器	— — (3.0) カマド内+18	「コ」の字状口縁の底部と思われる。器内が薄い。胴部上→下方向へ削り。内面直部への痕跡。	①明褐色②酸化③胴下半～底部2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
52住-44	甕 土師器	— — (4.0) 床面-6	「コ」の字状口縁の底部と思われる。器内が薄い。胴部上→下方向へ削り。内面ナデ整形。	①明褐色②酸化③胴下半～底部1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
52住-45 104	小型甕 土師器	— (12.0) — 床面+21	「コ」の字状口縁を持つ小型甕である。肩部右→左横方向へ削り。口縁部は大きく外反する。	①明褐色②酸化③口縁～胴部ほぼ球形・肩部1/6④1mm以下の砂粒を多く含む
52住-46	甕 須恵器	— — (18.0) 床面+20	大きな甕の底部周辺の小破片である。胴部内外面ナデ整形。	①灰色②還元③胴下半～底部小破片④多くの石英と長石粒を含む
52住-47 104	平瓦	— — — 床面+20	平瓦の右下部分の破片である。内面布目外面ナデ。側面と底部へ削り。1枚造り。	①灰色②還元③破片④灰白色粘土を帯状に3～5条繰り込んでいる
52住-48 104	平瓦	— — — 床面+30	平瓦の右下部分の破片である。内面布目外面ナデ。内側の側面面取り。1枚造り。	①灰褐色②酸化③破片④多くの砂粒と灰白色粘土を帯状に含む
52住-49	平瓦	— — — 覆土	平瓦の小破片。内面布目、外面ナデ、底部へ削り。1枚造りか。	①灰色②還元③小破片④多くの砂粒と灰白色粘土を帯状に含む
52住-50	平瓦	— — — 床面+15	平瓦の小破片。内面布目、外面ナデ、1枚造りか。	①灰色②還元③破片④1mm前後の石英と長石粒と灰白色粘土を含む
52住-51	平瓦	— — — 床面+14	平瓦の右又は左コーナーの小破片である。内面布目、内側の側面面取り。	①灰色②還元③破片④1mm以下の石英と長石粒を含む
52住-52 104	平瓦	— — — カマド内 床面	平瓦の大きな破片であり、接合によりほぼ一個に復元できた。内側全面布目、上下左右の側面へ削り後、内側面取り、外面ナデ整形。	①灰色②還元③破片④1～2mmの石英と長石粒を含む
52住-53 104	平瓦	— — — 床面+15	平瓦の破片である。内面布目、外面ナデ、側面へ削り。1枚造り。	①灰色②還元③破片④多くの石英と長石粒を含む
52住-54 104	平瓦	— — — 床面	平瓦の右下部分の破片である。内面布目、外面ナデ、側面と側面へ削り後、内側面取り。	①灰色②還元③破片④多くの石英と長石粒を含む
52住-55 147	刀子	— — — 全長16.2 幅1.1 棟厚0.3 10.9g 床面+10	基の基部が一部欠損しているが、他はほぼ保存している。使い込みにより刃部は薄く短くなっている。棟区が明確に認められる。錆は多く進行している。	
52住-56 147	鎌	— — — 長さ5.8 幅4.2 厚さ0.7 8.7g 床面	雁股鎌である。胴部が非常に厚くなっており、切先部は一部欠失しているが、刃部の残りは良くかなり開いている。基は細く、断面正方形を呈する。鎌身部の残りは良好で、刃部は細くなっている。	
52住-57 147	鉄	— — — 長さ5.2 幅2.3 厚さ0.3 5.3g	名称及び用途不明。錆化が進行している。覆土。	
52住-58	鎌	— — — 長さ3.8 幅3.2 厚さ0.2 6.6g	鎌の小破片である。錆化が進行している。床面。	
52住-59	刀子	— — — 全長3.5 幅0.7 棟厚0.2 1.3g	名称及び用途不明。錆化が進行している。覆土。	
52住-60	刀子	— — — 全長2.4 幅1.1 棟厚0.3 1.4g	小破片であるが、刀子の茎・区・刃身の一部と思われる。錆化が進行している。覆土。	
52住-61 105	紡錘車	— — — 長さ5.7 幅4.5 厚さ1.8 重量34g	石製紡錘車の未製品である。中心部は穿孔されていない。製作段階で割れたものと思われる。表面全体覆土。	①浅黄褐色①/2②流紋岩
52住-62 104	砥石	— — — 長さ14.3 幅4.2 厚さ7.3 重量724g	表面が使用されなくて、両側面が使用されている。仕上げと思われる。	①明黄褐色①一部欠損②流紋岩③床面-2
52住-63 105	石	— — — 長さ11.4 幅10.2 厚さ2.7 327g	中央部に刻目を持つ。	①赤色①一部欠損②砂岩⑤床面
52住-64 105	石	— — — 長さ14.1 幅24.8 厚さ3.3 288g	彎曲した細長い石である。表面全体が磨耗している。	①淡青色①突起④緑泥片岩⑤床面+2
52住-65 105	石	— — — 長さ14.0 幅23.9 厚さ3.1 270g	細長い石である。横断中央部がわずかに細くなっている。表面全体が磨耗している。	①淡青色①突起④緑泥片岩⑤床面+3
52住-66 105	石	— — — 長さ15.2 幅24.6 厚さ2.9 234g	細長い石である。横断面が菱形を呈する。表面全体が磨耗している。	①淡青色①突起④磨面母石曇片岩⑤床面+2
52住-67 105	石	— — — 長さ15.6 幅24.1 厚さ2.7 227g	細長い石である。横断面がやや細くなっている。表面全体が磨耗している。	①黄褐色①突起④点紋絹母石曇片岩⑤床面

52号住居跡 出土遺物観察表

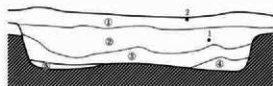
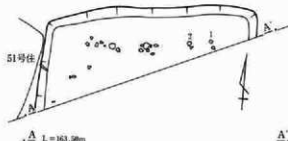
遺物番号 版図番号	器形及び 種類	細高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
52住-68 105	石	長辺15.9 短辺25.5 厚さ2.2 290g	扁平でやや幅広い。側面中央部に凹状の欠損部を持つ。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床面+4
52住-69 105	石	長辺17.5 短辺25.3 厚さ3.5 429g	細長い石である。中央部の断面形はほぼ三角形である。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③石墨緑泥片岩④床面
52住-70 105	石	長辺18.3 短辺25.6 厚さ4.0 700g	細長い石である。中央部の断面形はほぼ正方形を呈する。側面中央部に凹状の欠損部を持つ。	①淡青色②完形③緑凝緑泥片岩④床面
52住-71 105	石	長辺19.1 短辺25.5 厚さ3.2 498g	細長い石である。側面中央部に凹状の欠損部を持つ。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③緑凝緑泥片岩④床面+10
52住-72 105	石	長辺14.4 短辺14.6 厚さ2.6 278g	細長い石である。片側面は彫理にそって割れている。側面中に凹状の欠損部を持つ。	①淡青色③側面一部欠損④網罟母石墨片岩⑤床面-2
52住-73 105	石	長辺14.6 短辺5.1 厚さ3.3 316g	細長い石であり、側面中央部が少し細くなっている。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形④網罟母石墨片岩⑤床面
52住-74 105	石	長辺13.4 短辺25.3 厚さ2.0 155g	扁平で小さな石である。不定形な石であり、他の石類とは異質である。	①淡青色③一部欠損④緑凝緑泥片岩⑤床面
52住-75 105	石	長辺13.9 短辺23.8 厚さ3.1 188g	細長い石である。両端が欠けており、側面の一部も欠けている。	①淡青色③両端及び一部欠損④緑凝緑泥片岩⑤床面
52住-76 105	石	長辺16.7 短辺25.2 厚さ3.6 448g	細長い石である。側面が2ヶ所凹状を呈する。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形④石墨緑泥片岩⑤床面+4
52住-77 105	石	長辺13.4 短辺4.7 厚さ3.0 298g	細長い石である。側面の中央がやや細くなっている。表面全体が磨耗している。	①淡青色③端部一部欠損④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+4
52住-78 105	石	長辺14.2 短辺25.1 厚さ2.7 311g	扁平な石である。一部側面が欠けている。	①淡青色③一部欠損④緑凝緑泥片岩⑤床面+14
52住-79 105	石	長辺12.6 短辺25.1 厚さ2.9 285g	細長い石である。側面中央部がやや細くなっている。	①淡青色③端部欠損④網罟母石墨片岩⑤床面+2
52住-80 105	石	長辺16.6 短辺25.1 厚さ2.3 275g	細長く扁平な石である。側面中央部に凹状の欠損部を持つ。表面全体が磨耗している。	①青色②完形③網罟母石墨片岩④床面-2
52住-81 105	石	長辺14.8 短辺25.8 厚さ3.1 340g	細長い石である。側面の一部が欠損し凹状を呈する。	①淡青色②完形④網罟母石墨片岩⑤床面-16

53号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版27

位置 I区南西端部に位置し、10号住居の南約1mでL-11・12グリットに属する。

概要 51号住居と西側部分で一部重複している。2軒とも平安時代に属するが53号住居が新しい。住居北側の一部分以外は調査範囲以外であるため僅かな部分しか調査できなかった。

構造 床面は、ロームを主体とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、軟質である。



規模 東西推定3.4m、南北は不明である。壁高は北壁部分で38cmである。

遺物 床面や覆土中より、土師器の甕、須恵器の甕や羽釜の破片等が出土している。

土層注記(住居)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 暗褐色土 ローム粒子を多く焼土粒子を少量含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

0 2m

第164図 53号住居跡実測図



第165図 53号住居跡出土遺物実測図

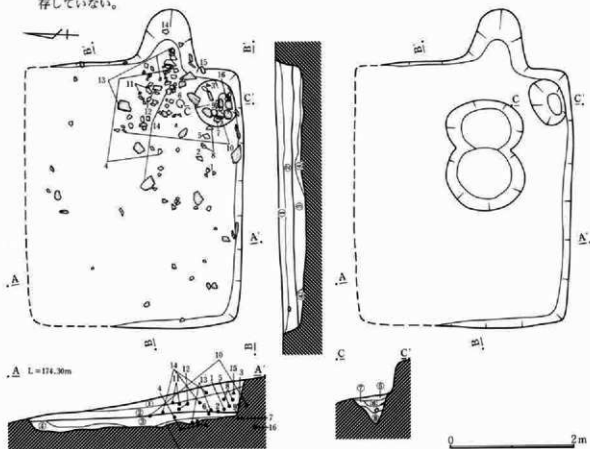
53号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第165図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
53住-1	罍 須恵器	- (14.0) - 床面+40	ロクロを使用した罍の口縁部～肩部の小破片である。 口縁部横ナデ。	①灰白色②還元③小破片④石英と長石粒を含む
53住-2	羽釜	- (21.0) - 床面+68	断面が三角形の罍を持つ羽釜の小破片である。口唇部が平でやや細くなっている。	①灰白色②還元③小破片④石英と長石粒を含む

54号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版27 遺物写真図版105・106・147

位置 Ⅲ区南東部に位置し、50号住居の東約13mでQ-23・24、R-23・24グリットに属する。

概要 住居中央部から南側は比較的残りが良好であるが、北側は残りが悪く特に北西部分の床面と壁面は残存していない。



土層法記 (佳層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
- ③ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の炭化物と暗褐色土を含む。

- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の炭化物を含む。
- ⑥ 黒褐色土 多くのローム粒子と黒褐色土を含む。
- ⑦ 褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子を含む。
- ⑧ 黄褐色土 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。

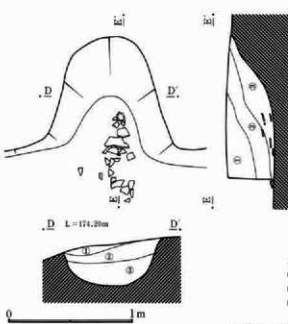
第166図 54号住居跡及び床下実測図

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴は甕南側に掘られていたが柱穴は掘られていなかった。

規模 東西4.2m南北は不明である。壁高は南側で54cmであり、貯蔵穴は直径70cmのほぼ円形を呈し深さ35cmである。

遺物 残存している床面や覆土中や貯蔵穴内より多くの土師器の甕や須恵器の坏等の破片が出土し、多くを図化することができた。

床下 甕手前の床面下に直径1mの円形を呈する土坑が2基一部重複した状態で検出された。深さはいずれも25cmであった。



54号住居跡(竈)

位置 住居東壁の壁面を一部掘り込んで造られており、燃焼部の多くは壁面から床面にかけて造られていたものと思われるが袖部分の残りが悪く不明な点も多い。

構造 ローム粒子とローム小ブロックを主体とした暗褐色土で構築されている。燃焼部から多くの焼土粒子や少量の炭化物が検出された。

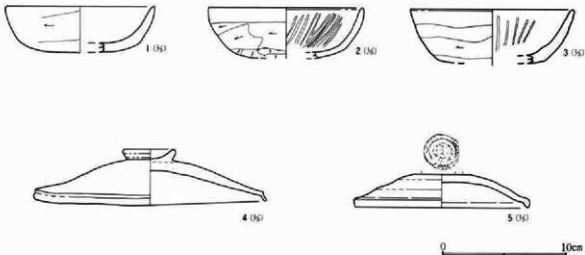
規模 煙道方向95cm、両袖方向90cmである。

遺物 土師器甕の胴部破片が少量出土した。

土層注記(竈)

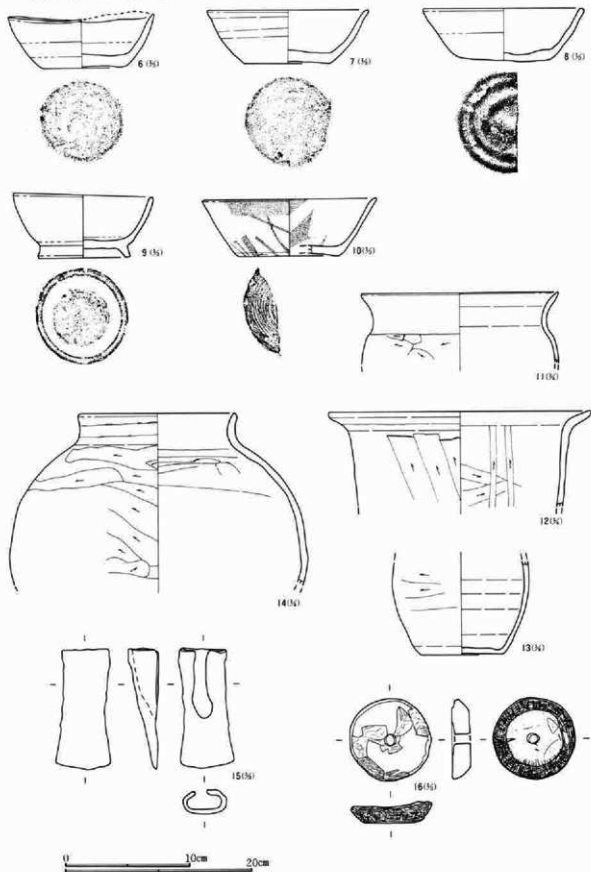
- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の暗褐色土を含む。

第167図 54号住居跡竈実測図



第168図 54号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第169図 54号住居跡出土遺物実測図(2)

54号住居跡 出土遺物観察表(押図番号第168・169図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
54住-1	土胎器	3.6 (12.0) - 床面+4	器内の厚い小さな環である。特に底部と体部との境が厚い。外側体部~底部へう折、贈文確認出来ない。	①明褐色②酸化③口縁~底部周辺1/4 ④1~2mmの砂粒を少量含む
54住-2 105	土胎器	- (12.4) (9.0) 床面	平底の浅い底部を持つ。外側体部~底部へう折、口縁部横ナデ、内側口縁~体部に密に描かれた多数の放射状増文。	①明褐色②酸化③口縁~底部周辺1/3 ④1mm以下の砂粒を少量含む
54住-3	土胎器	4.2 (13.0) - 床面+12	1の環に似ている。外側体部~底部へう折、口縁部横ナデ、内面に放射状増文。	①明褐色②酸化③口縁~底部周辺1/5 ④1~2mmの大きな砂粒を少量含む
54住-4 105	蓋 須臾器	4.4 (18.6) - カマド内直上	環状のつまみを持つ。つまみは小さく端部は丸味を持っている。天井部右回転へう折、口縁部は下方に折り曲げられ、変換点に横を持つ。	①灰白色②還元③つまみ完形・天井~体部4/5・口縁部1/6④1mm前後の石英と長石粒を少量含む
54住-5	蓋 須臾器	2.6 (14.0) - 床面+8	つまみがそっくりはずれている。天井部右回転へう折、口縁部は下方に折り曲げられている。	①灰白色②還元③つまみ欠・天井~体部4/5・口縁部1/6④1mm前後の石英と長石粒を少量含む
54住-6 105	環 須臾器	4.2 11.7 6.4 床面-4	底径が大きく器高の低い環である。体部は外傾しつつ直線的に立ち上がり口縁部に外反はない。全体が傘がんでいる。クロコ目は少ない。クロコ右回転。	①灰白色②還元③完形④1~3mmの長石粒を少量含む
54住-7 105	環 須臾器	4.2 13.0 7.0 貯蔵穴内+29	底部の器内が厚い。体部は外傾しつつ直線的に立ち上がり口縁部がわずかに外反する。体部に輪模様が残る。底部右回転未切刃。	①灰白色②還元③底部完形・口縁~体部1/2④石英と長石粒を含む
54住-8 105	環 須臾器	4.2 13.0 7.8 床面+18	底部へう折、切り履し横ナデにより整形。体部は外傾しつつ直線的に立ち上がる。口縁部に外反なし。	①灰白色②還元③2/3④小さな石英と長石粒を含む
54住-9 105	埴 須臾器	5.2 11.2 7.0 貯蔵穴内+29	浅い環に高台の付く埴である。高台は断面長方形を呈し、端部は鋭角に作られている。体部は外傾しつつ直線的に立ち上がり、口縁部は外反しない。	①灰色②還元焼締③完形④1mm前後の石英粒を多く含む
54住-10	環 須臾器	4.5 (14.0) (8.0) 床面	糸切底で体部下端にへう折。体部~口縁部は外傾しつつ直線的に立ち上がり、口縁部に外反はない。内外面大だすき状の痕あり。	①灰色②還元③口縁~底部周辺1/4④1mm以下の長石粒を多く含む
54住-11	甕 土胎器	- (21.0) - 床面+12	「コ」の字状口縁を呈する甕である。口縁部横ナデ、胴部右~左横方向へう折。	①明褐色②酸化③口縁部1/3・胴部1/4 ④1mm以下の砂粒を多く含む
54住-12	瓶 土胎器	- (28.0) - 床面+4	大きな瓶の小破片である。口縁部は大きく外反し器内面が厚い。外側胴部口縁部に向かう縦方向へう折。	①明褐色②酸化③口縁~胴上部1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
54住-13 105	甕 須臾器	- - (8.8) カマド内直上 床面-15	小さな甕と思われるが、全体像は不明。焼成は軟質である。胴部内外面ナデ彫形。	①明褐色②酸化③胴下部1/4・底部1/2 ④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
54住-14 105	須臾 土胎器	- (17.0) - カマド内+14 床面+2	大きな丸胴の甕である。口縁部は直立気味に立ち上がり、上端で少し外反する。口縁部に輪模様、胴部右~左方向へう折。	①明褐色②酸化③口縁部1/6・胴部1/4・胴上部1/5④1mm以下の砂粒を多く、2~3mmの砂を少量含む
54住-15 147	鉄片	長さ9.4 幅6.4 厚さ0.4 重量125g 床面+30	刃先がやや広くなり、肩はついていない。上部は鉄板を折りまげて袋状にしている。錆化は進んでいるが、残りは良好である。刃部は鋭い。	①暗緑灰色②ほぼ完形③滑石片岩④貯蔵穴+15
54住-16 106	紡錘車	長さ6.4 幅6.4 厚さ1.5 重量94g 孔径0.9	底面が一部割れているが完成品である。薄く口径が大きい。狭面の中心穴の周辺に円形のわずかな凹部が一周。使用による痕跡が、底面が上面か。	①暗緑灰色②ほぼ完形③滑石片岩④貯蔵穴+15

55号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版27 遺物写真図版106

位置 Ⅲ区南東部に位置し、54号住居の東約4mでQ-22・23、R-22・23グリットに属する。

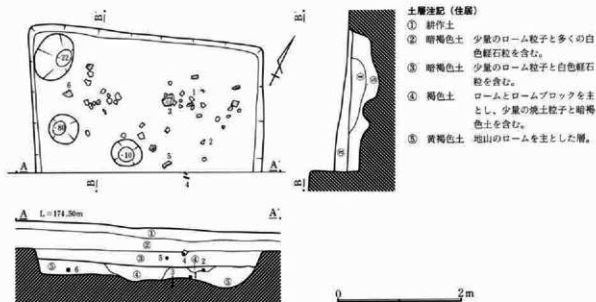
概要 住居南側約半分が調査範囲外のため全体の調査はできなかった。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主体とし、黒褐色土が混入した土であり軟質である。床面下に小穴が3個検出されたが柱穴や貯蔵穴ではない。調査できた床面上から焼土粒子等の検出はできなかった。竈はおそらく東壁に他の平安時代の住居と同様に造られていたものと思われる。

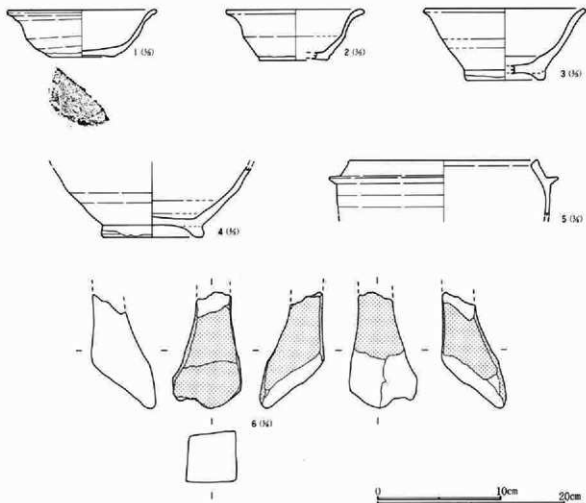
規模 東西3.1m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い東壁部分で22cmである。床面下から検出された小穴の深さは図上に数字で示した。

遺物 床面や覆土中より須臾器の環や埴や羽釜と磁石が出土した。

第3章 検出された遺構と遺物



第170図 55号住居跡実測図



第171図 55号住居跡出土遺物実測図

55号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第171図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
55住-1 106	坏 須恵器	3.7 12.0 5.0 床面-16	底径が小さい。底部中央の器内が薄い。体部は内傾しつつ立ち上がり口縁部は大きく外反する。体部外面に多くのクロコ目。	①灰白色②還元③口縁～体部1/3・底部1/2④1mm以下の長石を多く、2mm前後の長石を少量含む
55住-2	坏 須恵器	4.0 11.6 (6.0) 床面-6	底径が小さい。口縁部の器内は厚く大きく外反する。底部と体部との境に段を持つ。	①灰褐色②酸化③口縁～体部1/4・底部小破片④1mm以下の石英と長石粒を含む
55住-3 106	坏 須恵器	5.2 13.0 6.5 床面-30	器高の高いものである。口縁部は外反する。高台は太く整形は雑である。全体に作りが悪い。	①灰色②還元軟質③口縁～底部2/5 ④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
55住-4	坏 須恵器	- - (8.0) 床面+18	器高の高い大きな壺の破片である。口縁部に近い体部の器内が薄い。高台は太く整形は雑である。	①灰褐色②酸化③体部～底部1/4④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
55住-5	羽釜	- (20.0) - 床面+14	口縁部が短く内傾する。口唇部は平で強く内傾する。脚は細長い。全体的に作りはいいである。	①灰白色②還元③1/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
55住-6 106	磁石	長さ12.2 幅7.4 厚さ6.8 421g 床面-15	5面が磁石として使用されている。元来近い長さがあったものが、使用により中央部が細くなり割れてすてられたものと思われる。	①淡黄色②欠損品③流紋岩

56号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版27

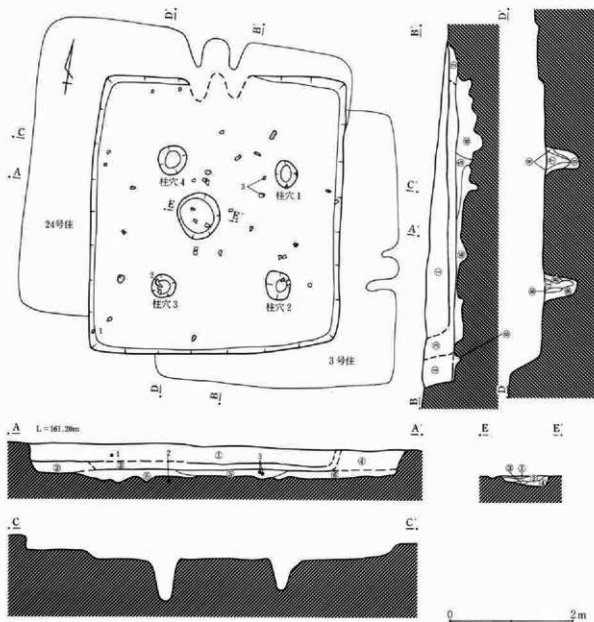
位置 1区西側に位置し、2号住居の南約2mでI-10・11、J-10・11グリットに属する。

概要 3・24号住居と重複しており、3軒とも古墳時代に属し、新旧関係は3→56→24号住居の順である。24号住居によって床面上の覆土の大部分が掘られていることや、南壁と東壁の大部分が3号住居と重なっているため住居プランの確認に困難が伴い、一部新旧逆転して発掘した地点があり充分明らかにできなかった。56号住居と24号住居の竈の位置に関しては最後まで問題が残った。56号住居の竈は北壁または東壁に造られていたと思われるが、東側は後に造られた3号住居により床面近くまで削平されているため存在していたとしても削り取られている。また北壁中央部にあったとするなら同じく後に造られた24号住居に削り取られている。そのため北側に残る竈は明らかに24号住居に属することとなる。それでは56号住居の竈はどこに造られていたのだろうか、そのことは床面に残された焼土粒子の検出が大きな鍵を握るわけである。24号住居の竈の口付近から南側にかけて多くの焼土粒子が検出されているが、この焼土の一部が56号住居の壊された竈の痕跡と考えられる。以上のことから24号住居の竈の口付近に56号住居の竈が想定される。

構造 床面は、ルームとルームブロックを主として造られていたが、踏み固められた床面の検出はできなかった。柱穴は床下調査段階において4本確認された。貯蔵穴と思われる掘り込みの検出はできなかった。規模 東西4.0m、南北4.4mで、南北方向にやや長い長方形を呈する。壁高は他の住居と重複していない南西部において35cmあった。柱穴1は直径35cm深さ40cm、柱穴2は直径40cm深さ39cm、柱穴3は直径35cm深さ42cm、柱穴4は直径55cm深さ53cmである。

遺物 覆土中や床面より土師器の坏や壺の破片が出土した。

第3章 検出された遺構と遺物



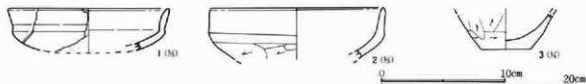
土層注記 (住層)

- ① 24号住居覆土
- ② 24号住居床下覆土
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の炭化物を含む。
- ④ 3号住居覆土
- ⑤ 褐色土 ローム粒子とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ⑧ 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ⑨ 褐色土 ロームを主とした層。

土層注記 (床下土坑)

- ① 暗褐色土 1~2mmの軽石粒を少量含み、やや軟質。
- ② 暗褐色土 暗褐色土・ローム粒子・ロームブロックの混入土層。粘質。
- ③ 褐色土 ロームブロックを中心とした層。
- ④ 黄褐色土 ローム粒子とロームブロックの層。

第172図 56号住居跡実測図



第173図 56号住居跡出土遺物実測図

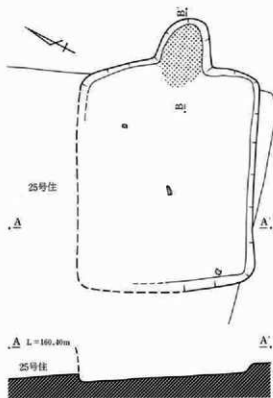
56号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第173図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
56住-1	坏 土師器	- (13.0) - 床面+20	底部の丸い坏である。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁部横ナゲ。底部ヘタ削り。	①褐色②酸化③口縁～底部1/5④1mm以下の砂粒を多く含む
56住-2	坏 土師器	- (15.2) - ピット内+35	底部の丸い坏である。底部と口縁部との境に明瞭な線はない。口縁部横ナゲ。底部ヘタ削り。	①明褐色②酸化③口縁～底部1/3④密
56住-3	壺 土師器	- - 5.2 床面-4	底部の器内は厚いが胴部は薄いものと思われる。表面ヘタ削り、内面ナゲ整形。	①赤褐色②酸化③底部完形・体部下半4/5④1mm前後の砂粒を大量に含む

57号住居跡 (平安時代)

位置 II区東北部に位置し、23号住居の東約2mでI-15グリットに属する。

概要 古墳時代の25号住居と大部分が重複しており、25号住居の床面を掘り抜いて造られている。2軒とも残存状態が極めて悪く検出に多くの困難が伴ない、良好な状態での調査はできなかった。甕も残りが悪く焼土が少量検出されたのみであった。

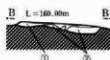


第174図 57号住居跡実測図

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ、軟質である。柱穴及び貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西3.4m、南北2.9mで、東西方向に長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁部分で12cmである。

遺物 残存している床面や覆土中より、少量の須恵陶の瓿や坏等が出土した。



土層注記 (■)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子・炭化物を全体に含む。
② 褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子・炭化物・粘土ブロックを含む。

0 2m

第3章 検出された遺構と遺物



第175図 57号住居跡出土遺物実測図

57号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第175図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
57住-1	坏 土師器	- (14.0) - 覆土	口縁部は器内が厚く大きく外反する。浅い坏又は埴と思われる。ロクロ右回転。	①表面黒褐色・断面褐色②酸化③口縁～体部上端の小破片④多くの赤色粒を含む
57住-2	坏 土師器	- (6.6) - 覆土	坏の体部下半～底部である。体部と底部の境に段を持つ。底部赤切痕、ロクロ右回転。	①明褐色②酸化③体部下半～底部1/3④多くの赤色粒を含む

58号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版27・28 遺物写真図版106

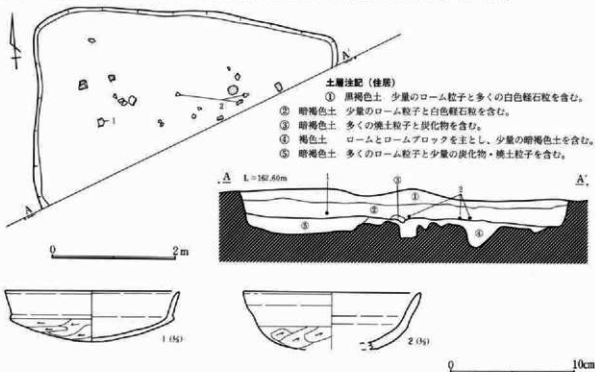
位置 調査区東側のI区南東部に位置し、K-10・11グリットに属する。

概要 住居南側約半分が調査区域外であった。

構造 床面は、ロームブロックを主体とし多くの黒褐色土が混入した土で堅く踏み固められていた。柱穴及び周溝は検出されなかった。

規模 東西約4.85m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い西壁部分で19cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の坏や壺の破片が出土したが、図化できるものは少なかった。



第176図 58号住居跡及び出土遺物実測図

58号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第176図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
58住-1 106	坏 土師器	4.0 (14.0) - 床面+6	底部と口縁部との境に明瞭な段を持つ。口唇部内側に一糸の沈線がある。全体に沈線された作りである。	①赤褐色②酸化③口縁部1/3・底部1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
58住-2 106	坏 土師器	- (14.2) - 床面+1	底部と口縁部との境に弱い段を持つ。1の坏と胎土色調整形と多くの点で異なる。	①明褐色②酸化③口縁～底部1/3④1mm以下の砂粒を多量に含む

59号住居跡 (奈良時代) 遺物写真図版106

位置 I区南西部に位置し、63号住居の南約1.5mでK-12、L-12グリットに属する。

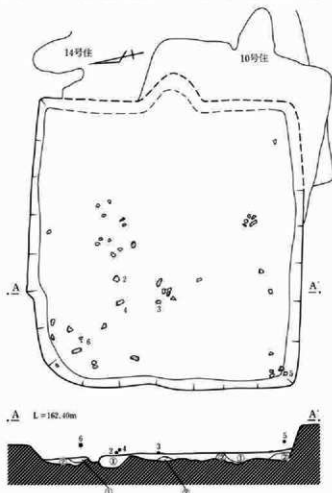
概要 10・14号住居と重複しており、10号住居は平安時代に、14号住居は奈良時代に属する。新旧関係は59→

14→10号住居の順である。住居東側の半分近くが後代の2軒の住居により床面まで削り取られているためその部分の残りが悪い。竈は検出されなかったが、おそらく東竈で10・14号住居により壊されたものと思われる。

構造 重複していない部分の床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られており比較的良好な状態で検出できた。しかし重複している東側部分での検出は充分できなかった。柱穴及び貯蔵穴は掘られていなかった。

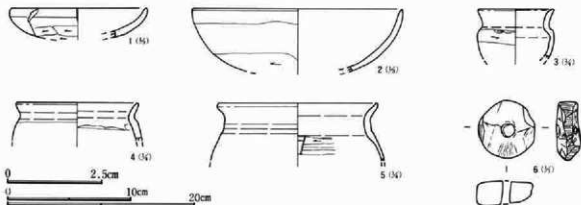
規模 東西推定4.5m、南北4.4mである。壁高は最も残りの良いところで21cmで、重複していない部分の残りは良好である。

遺物 床面や覆土中より、多くの土器の坏や甕と少量の須恵器の坏や甕の破片と紡錘車が出土した。



- 土層注記 (住居)
- ① 褐色土 ローム粒子和ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ② 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第177図 59号住居跡実測図



第178図 59号住居跡出土遺物実測図

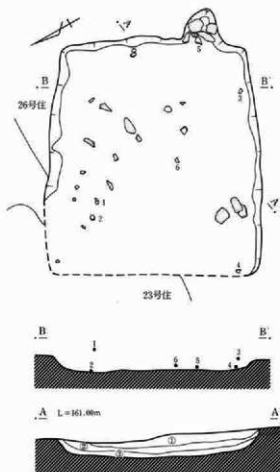
59号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第178図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底 部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
59住-1	環 土師器	— (11.0) — 覆土	丸底の小さな環である。口縁部は短く直立している。底部ヘラ削り。	①にふい褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
59住-2	環 土師器	— (17.0) — 床面+6	丸底の大きな環である。口縁部横ナゲ、底部ヘラ削り。	①明褐色②酸化③口縁へ底部周辺1/5④1mm以下の砂粒を少量含む
59住-3	小型壺 土師器	— (8.0) — 床面+11	小さな丸底の壺である。口縁部横ナゲ、胴部ヘラ削り。	①にふい褐色②酸化③口縁へ胴部上半1/3④1mm以下の砂粒を少量含む
59住-4	小型壺 土師器	— (13.0) — 床面+15	小型で器内の厚い壺である。頸部は外側から強く横ナゲされている。肩部右へ左横方向ヘラ削り。	①外側褐色・内側明褐色②酸化③口縁へ胴上部1/3④1mm以下の砂粒を含む
59住-5	壺 土師器	— (17.2) — 床面+25	器内の厚い「コ」の字状口縁の壺である。口縁端部は鋭利となっている。	①明褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む⑤流入品か
59住-6 106	白玉	幅1.5 孔径0.3 厚さ0.7 重量2.5g	側面は荒砥削り、上下面は切り離した後無調整。	①淡青色②完形③滑石片④砂⑤床面+25

60号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版28 遺物写真図版106

位置 II区東北部に位置し、44号住居の東約5mでJ-15・16グリットに属する。

概要 同じ平安時代の23・26号住居を一部掘り込んで造られている。いずれも残存状態が悪く検出が困難であったが、新旧関係は23→26→60号住居の順と思われ3軒の中で最も新しい。



構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ軟質である。柱穴及び貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西4.4m、南北3.5mを測り、東西方向に長い長方形を呈する。壁高は東壁部分で27cmである。

遺物 床面や覆土中より、少量の土師質土器の皿、須恵器の埴や環と羽釜が出土した。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含み、粘性が強い。

0 2m

第179図 60号住居跡実測図

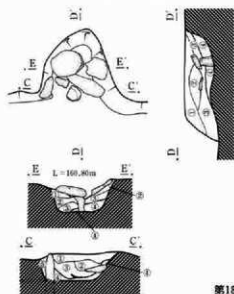
60号住居跡(竈)

位置 住居東壁南端の壁面を掘り込んで造られており、燃焼部の大部分は壁面部から外側に位置する。

構造 竈内より6個の石が出土し、その中の1石は左側の袖部に据え付けられた状態で出土した。他の4石は位置がずれているが竈の壁材として使用されているものと思われる。この4石を除去すると支脚石が据えた状態で出土した。燃焼部覆土中に多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。

規模 燃焼部で煙道方向60cm、両袖方向55cmである。

遺物 多くの土師質土器の坏と埴の破片が出土した。

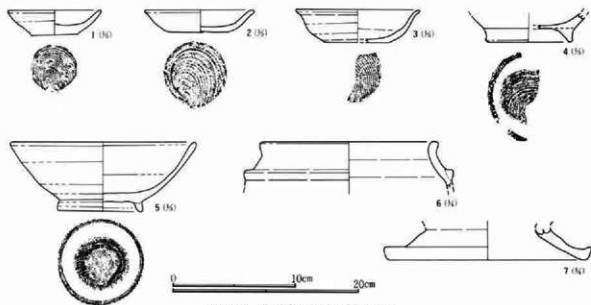


土層産記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子を含み、粘性が強い。
- ② 灰褐色土 少量のローム粒子と多くの灰褐色粘質土を含み、粘性が強い。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックと焼土粒子を含む。
- ④ 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・粘土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。

0 100m

第180図 60号住居跡竈実測図



第181図 60号住居跡出土遺物実測図

60号住居跡 出土遺物観察表(押印番号第181図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
60住-1 106	皿 須恵器	2.0 (7.4) 3.8 床面+24	浅い皿である。底部の器内が厚い。内側中央部が凸状を呈する。体部→口縁部は内彎しつつ立ち上がる。底部右回転糸切痕。	①灰色②還元焼成③口縁部1/4・底部完形④密
60住-2 106	皿 須恵器	1.8 8.8 5.1 床面	浅い皿である。口縁部がわずかに外反する。底部右回転糸切痕。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を多く含む
60住-3	皿 須恵器	(2.6) (10.0) (5.0) 床面+14	浅い皿である。体部→口縁部は内彎しつつ立ち上がり、口縁部が大きく外反する。右回転。	①浅黄褐色②酸化③口縁部1/5・体部1/3・底部1/2④1mm以下の砂粒を多く含む

60号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第181図)

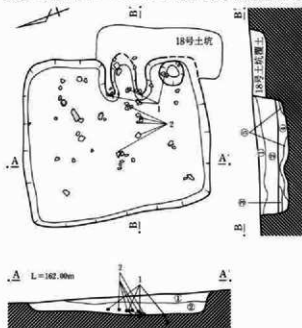
遺物番号 図版番号	器形及 び種別 出土位置	器形・成形・調整・底部形等の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
60住-4	埴 須恵器 床面+2	高台端部はていねいに整形されている。坏底部の器内は薄い。	①灰色②還元③高台と底部1/2④粒子が粗く、多くの石英と長石粒を含む
60住-5 106	埴 須恵器 カマド内+4	底部の器内が少し厚い。体部〜口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部は外反しない。口唇部内側はへら削りにより内傾する。	①外面褐色・内面に白濁色②酸化③口縁〜体部1/3・底部完形④器表面が美しい
60住-6	羽釜 床面+5	口縁部は内彎後大きく直立し少し端部が外反する。口唇部は平だが少し丸味を持つ。脚は太いが短い。	①にぶい褐色②酸化③小破片④1mm前後の石英と長石粒を少量を含む
60住-7	甕 須恵器 覆土	大きな甕の底部である。大きく外側へ開く。端部上端は上方へ盛り上げられている。表面内外開狭ナド。	①表面残黄褐色・断面灰色②酸化③底部1/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む

61号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版28 遺物写真図版106

位置 I区南西部に位置し、59号住居の西約2mでK-12・13グリットに属する。

概要 18号土坑により、竈煙道上面と竈右側の東壁上面が削り取られている。

構造 床面は、ロームブロックを主とし、黒褐色土が混入した土で固めてあった。貯蔵穴が竈右側に検出された。



規模 東西2.65m、南北3.00mで、この時期の住居としては非常に小さい。壁高は最も残りの良い竈左側の東壁部分で29cmである。貯蔵穴はやや歪んではいるが直径38cm前後のほぼ円形を呈し、深さは床面より約20cmである。

遺物 床面や覆土中より土器の坏や甕の破片が多く出土したが、図化できるものは少なかった。

土層注記 (住層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

0 2m

第182図 61号住居跡実測図

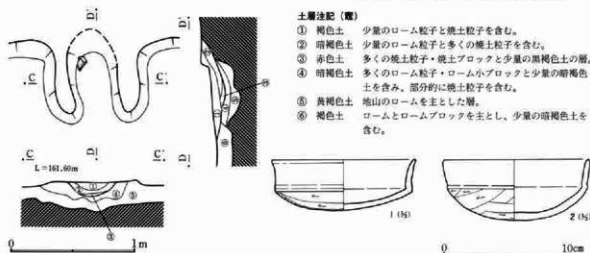
61号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の大部分は住居内に位置し、煙道が東壁を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られており、燃焼部奥壁北側付近に石が据えられた状態で出土した。覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向推定80cm、両袖方向40cmである。

遺物 出土は認められなかった。



第183図 61号住居跡及び出土遺物実測図

61号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第183図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
61住-1 106	坏 土師器 床面	4.0 11.6 -	底部の浅い丸底の坏である。底部と口縁部との境に明瞭な線を有す。底面へう閉り、口縁部横ナズ。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く含む
61住-2 106	坏 土師器 床面	4.8 11.7 -	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に明瞭な線を有す。1の坏と胎土・色調・器形が異なる。	①にぶい褐色②酸化③口縁部4/5④1mm以下の砂粒を少量含む

62号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版28・29 遺物写真図版106・107・147

位置 II区東端中央部に位置し、52号住居の東南約3mでK-15、L-15グリットに属する。

概要 全ての壁面と床面が残存しているので比較的残りの良い住居である。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ軟質である。貯蔵穴は電右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西4.50m、南北3.60mで、東西に長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良い東壁部分で29cmである。貯蔵穴は直径約55cmの円形を呈し、深さ16cmである。

遺物 床面や覆土中より、多くの須恵器の坏や壺と土師器の甕及び瓦や刀子が出土し、多くを図化することができた。

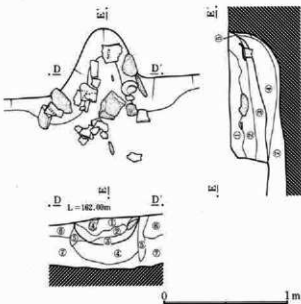
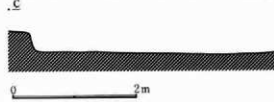
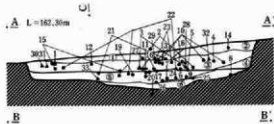
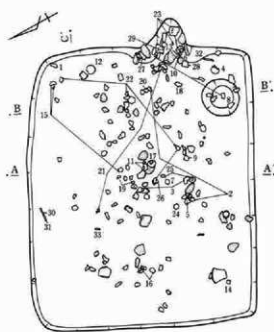
62号住居跡 (竈)

位置 住居東壁やや南寄りの壁面を掘り込んで造られており、燃焼部は床面から壁面部にかけて位置する。

構造 右側と左側の袖にそれぞれ2個の石が芯材として埋め込まれていた。さらに覆土中に2個、住居覆土中に多くの石が出土している。これらのことより多くの石を使用した竈であったと思われる。燃焼部床面付近に多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向75cm、両袖方向65cmである。

遺物 多くの土師器甕や少量の坏と須恵器の坏や壺、瓦の破片等が出土した。



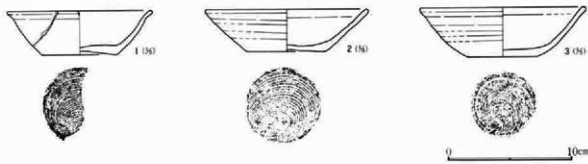
土層法配 (■)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 暗褐色土 暗褐色土中に灰・灰・焼土粒子を含む土層。
- ⑤ 暗赤褐色土 焼土粒子を多く含む。
- ⑥ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

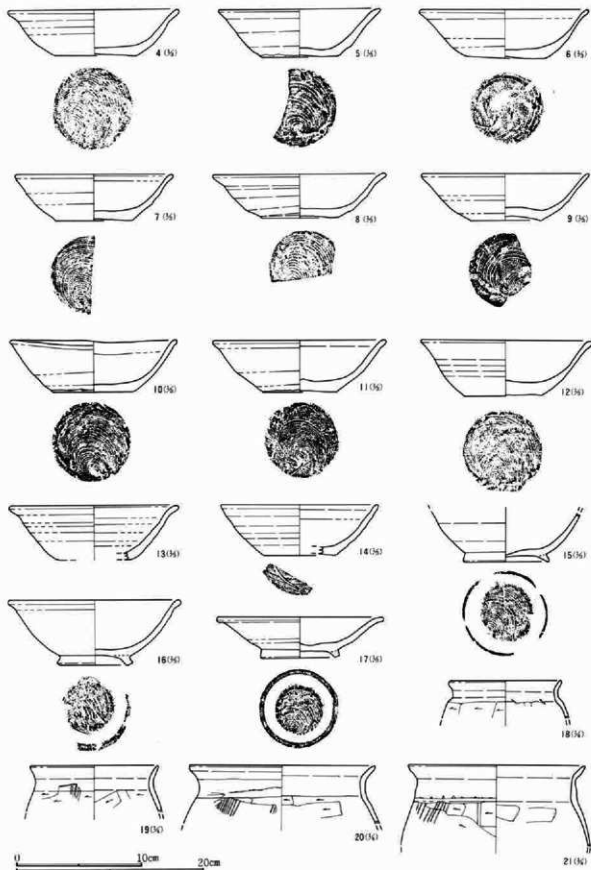
土層法配 (位階)

- ① 褐色土 焼土粒子と炭化物を全体に含む。
- ② 黒褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子・炭化物と多くの白色軽石粒を含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子・炭化物と白色軽石粒を含む。
- ④ 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の焼土粒子・炭化物・暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 褐色土 多くのローム粒子と灰黄褐色粘土を含む。
- ⑧ 黒褐色土 多くのローム粒子と炭化物を含む。
- ⑨ 暗褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子を含む。

第184図 62号住居跡及び竪穴実測図

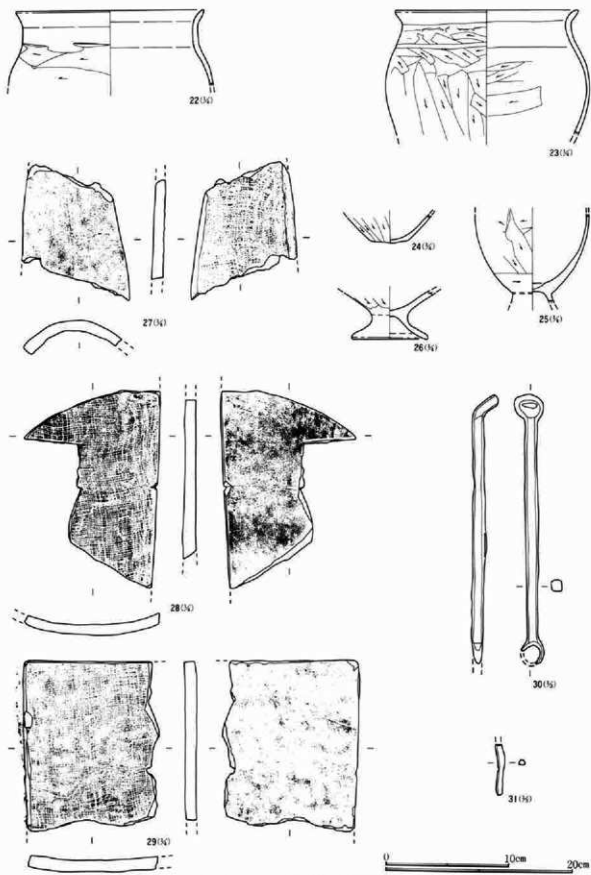


第185図 62号住居跡出土遺物実測図(1)



第186図 62号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第187図 62号住居跡出土遺物実測図(3)



第188図 62号住居跡出土遺物実測図(4)

62号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第185・186図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
62住-1	須恵器 杯	4.5 (11.6) (6.0) 床面+12	底部中央が盛り上がり中央部が薄くなっている。器高が高い。口縁部が大きく外反する。底部右回転糸切痕。	①灰褐色②酸化③口縁部1/10・体部1/6・底部1/2④1mm前後の長石粒を少量含む
62住-2 106	須恵器 杯	4.5 13.2 6.2 床面+2	底部中央が盛り上がる。体部へ口縁部は直線的に立ち上がる。底部右回転糸切痕。	①表面黒色・断面灰色②還元③口縁へ胴部2/3・底部充形④1mm以下の砂粒を多く含む
62住-3 106	須恵器 杯	3.9 (13.4) 5.4 床面+4	底部が小さい。体部へ口縁部ゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が少し厚くなりゆるやかに外反する。底部右回転糸切痕。	①いよ褐色②酸化③口縁部1/8・体部1/3・底部充形④少量の赤色粒を含む
62住-4 106	須恵器 杯	3.6 13.8 6.4 床面+12	底部中央が少し盛り上がる。体部へ口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が大きく外反する。底部右回転糸切痕。	①灰白色、一部炭灰状により黒色②還元③④1～3mmの黒色鉱物粒を少量含む
62住-5 106	須恵器 杯	3.8 (13.0) 6.0 床面	底部中央が少し盛り上がる。体部へ口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③2/3④1mm前後の砂粒を少量含む
62住-6 106	須恵器 杯	3.9 13.6 6.4 カマド内直上	内側底部中央から口縁部までゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が外反する。底部右回転糸切痕。表面が磨耗している。	①いよ褐色②酸化④4/5④1mm前後の砂粒を少量含む
62住-7	須恵器 杯	3.7 (12.6) (6.2) 床面-10	底部の器内が厚く体部との境に段を持つ。体部は内彎しつつ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁部1/4・体部1/3・底部1/2④密
62住-8 106	須恵器 杯	3.5 (14.0) (6.0) 床面-6	底部の器内が厚く体部との境に段を持つ。体部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が大きく外反する。	①洗黄褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を少量含む
62住-9 106	須恵器 杯	3.7 (13.4) (5.6) 床面-10	底部の器内が薄く中央部が盛り上がる。体部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部右回転糸切痕。	①底部黒色・口縁へ体部灰白色②還元③口縁部1/5・底部2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
62住-10 107	須恵器 杯	4.2 13.4 6.4 カマド内+12 床面+9	底部の器内がやや厚い。体部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部はほとんど外反していない。底部右回転糸切痕。	①いよ褐色②酸化③ほぼ充形④多くの赤色粒を含む
62住-11 107	須恵器 杯	4.1 (14.0) 6.0 床面	底部の器内が厚く内側中央部が凸状を呈する。体部へ口縁部ゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。	①灰白色②還元③口縁へ体部2/3・底部充形④1mm以下の石英粒と長石粒を多く含む
62住-12 107	須恵器 杯	4.5 14.0 6.2 床面+13	底部の器内が厚い。体部へ口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が少し外反する。底部右回転糸切痕。	①黒色、一部灰白色②還元③ほぼ充形④赤褐色粒を多く含む
62住-13	須恵器 杯	— 13.6 — カマド内+12	体部へ口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が大きく外反する。	①灰白色②還元③口縁部1/8・体部1/5・底部小破片④1mm以下の石英と長石粒を含む
62住-14	須恵器 杯	4.0 (12.6) (5.8) 床面+30	体部へ口縁部がゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部は外反しない。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/5・底部小破片④1mm以下の石英と長石粒を含む
62住-15 107	須恵器 杯	— — 6.5 床面	底部中央が薄い。体部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。高台の断面は三角形を呈する。	①灰白色②還元③体部1/3・底部充形④1mm以下の長石粒を多く含む
62住-16 107	須恵器 杯	5.2 (13.9) (5.6) 床面+2	体部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が外反する。高台は下端が少し広くなり底部はていどに整形されている。高台内側右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁1/10・体部1/2・底部充形④1mm内外の石英と長石粒を多く含む
62住-17 107	須恵器 皿	3.3 (13.6) 6.1 床面-34	浅い皿である。底部内側中央が凸状を呈する。口縁部が大きく外反する。高台の断面は方形を呈し、ていどに貼付されている。高台内側右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁部1/2・体部2/3・底部充形④1mm以下の石英と長石粒を少量含む
62住-18	小型須 土器	— (12.0) — 床面+8	「コ」の字状口縁を呈する小さな壺である。肩部右へ左横方向へ丸なり、口縁部狭ナデ。	①いよ褐色②酸化③口縁へ胴部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む

62号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第186・187・188図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
62住-19	小形罐 土師器	— (13.6) — 床面-4	「コ」の字状口縁を呈する小さな甕である。肩部右→左横方向へ削り。口縁部横ナデ。	①赤褐色②酸化③口縁→肩部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
62住-20	甕 土師器	— (20.0) — 床面	「コ」の字状口縁の甕である。肩部右→左横方向へ削り。内面刷毛整形。	①褐色②酸化③口縁部→肩部1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
62住-21	甕 土師器	— (18.8) — 床面	「コ」の字状口縁の甕である。頸部に輪模成。肩部右→左横方向へ削り。内面ナデ整形。	①明褐色②酸化③口縁→胴上部1/4・胴上部1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
62住-22	甕 土師器	— (20.0) — 床面	器内の厚い「コ」の字状口縁の甕である。頸部に輪模成あり。肩部右→左横方向へ削り。	①明褐色②酸化③口縁→胴上部1/4④1mm以下の細砂粒を多く含む
62住-23	甕 土師器	— (19.6) — カマド内+12	「コ」の字状口縁の甕である。頸部に輪模成あり。肩部右→左上方向へ削り。胴部上→下方向へ削り。口唇部外側に一条の沈線あり。	①明褐色②酸化③口縁→胴部1/2・胴上部1/4④1mm以下の細砂粒を多く含む
62住-24	甕 土師器	— — 3.8 床面-11	器内の薄い「コ」の字状口縁の甕の胴下端～底部である。底部の器内が極めて薄い。外面へ削り。	①外面明褐色・内面褐色②酸化③胴下端～底部整形④1mm以下の細砂粒を含む
62住-25	台付甕 土師器	— — — 床面-12	小さな台付甕である。胴部上→下方向へ削り。台は白いぬいに貼付している。台内外面ナデ整形。	①内面明褐色・外面に赤褐色②酸化③胴下半→台上部端2/3④細砂粒を含む
62住-26	台付甕 土師器	— — (8.0) 床面-16	胴部が大きく張る台付甕である。台は大きく外側に開く。台部ナデ整形。	①内面黒色・外面褐色②酸化③胴下端→台部1/3④1mm以下の砂粒を含む
62住-27 107	丸瓦 カマド内+11		丸瓦である。外面ナデ整形。内面布目。側面へ削り。1枚造り。	①灰色②還元③破片④砂粒を少量含む
62住-28 107	平瓦 カマド内+10		内面布目。外面ナデ整形。側面へ削り。1枚造り。	①灰白色②還元③破片④白色粘土を帯状に含む
62住-29 107	平瓦 カマド内+17		内面布目。外面ナデ整形。側面へ削り。1枚造り。丸焼けひずみが見られる。	①灰色②還元③破片④1～2mmの砂粒を多く含む
62住-30 147	鉄製曹 長さ21.3 幅0.9 厚さ0.9 70.3g 床面+10		馬具の鉄製曹の一部で引手部分と思われる。引手曹が縦状につくられている。軸の断面は方形を呈する。鏡板と接合される円環部は磨耗により細くなり欠損している。薬内径1.4cm。	
62住-31 147	簾 長さ4.0 幅0.5 厚さ0.4 2.5g		簾の茎部分の小破片と思われる。全体に錆化が進み、一部曲がっている。⑤床面+10	
62住-32 147	刀子 全長21.5 幅1.0 棟厚0.3 17.0g 床面+16		刀子の完形品である。よく使い込んでいるため刃身部分が細くなっている。横区、刃区に近い茎部分に錆化で固定された植物部分が付着している。	
62住-33 147	刀子 全長1 幅1.0 棟厚0.4 10.5g 床面-10		刃身の一部を欠くが、茎はほぼ完形である。横区と刃区は明瞭に確認できない。全体に錆化が進行している。	

63号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版29 遺物写真図版107・108

位置 I区南西部に位置し、12号住居の西約2mでK-12グリッドに属する。

概要 住居の掘り込みが深く残存状態が良好な住居である。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした粘土質の土で堅く踏み固めてあった。電突口右側に貯蔵穴が掘られていた。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西4.60m、南北は4.80mで、ほぼ正方形に近い。壁高は最も残りの良いところで86cmで、他の住居と比較すると残りは大変良好である。貯蔵穴は直径約55×43cmの楕円形を呈し、深さ25cmである。

遺物 床面や覆土中より、土師器の坏や甕、須臾器の坏や蓋や盤、未製品を含む紡錘車等が出土し、多くを図化することができた。

63号住居跡(竈)

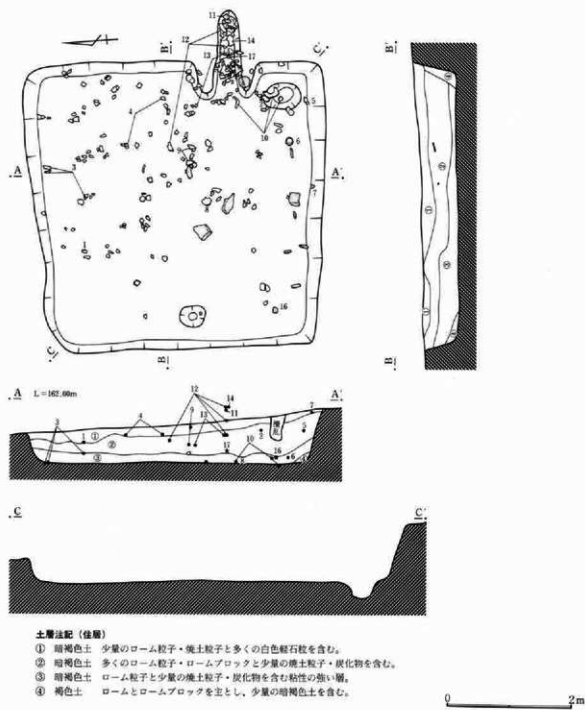
位置 住居東壁中央から南寄りの壁面を掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の一部は床面上に位置し、他の大部分は壁面を掘り込んで造られている。煙道が燃焼部から外側に向かい、強く立ち上がる。

構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土と灰黄褐色粘質土で造られている。右袖部分に18

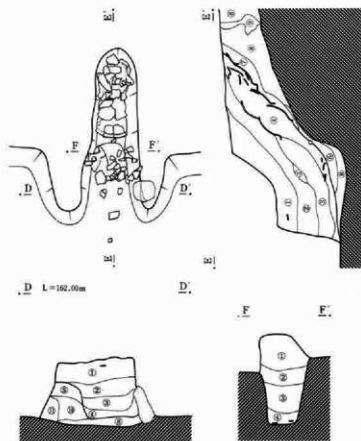
×17cm長さ30cmの石が袖石として据え付けられた状態で出土した。煙道部に底部を穿孔した土師器甕が口縁部を下方の燃焼部に向けられ4個連結し、煙道として使われていた。燃焼部床面や奥壁の表面が焼けて焼土化しており、覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向134cm、両袖方向48cmである。

遺物 煙道として使用された底部穿孔の土師器甕が煙道部より出土した。覆土中より土師器甕の口縁部や胴部の破片が多量に出土し、燃焼部より紡錘車が出土した。



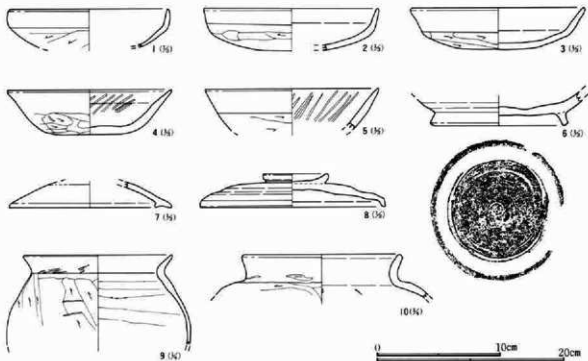
第189図 63号住居跡実測図



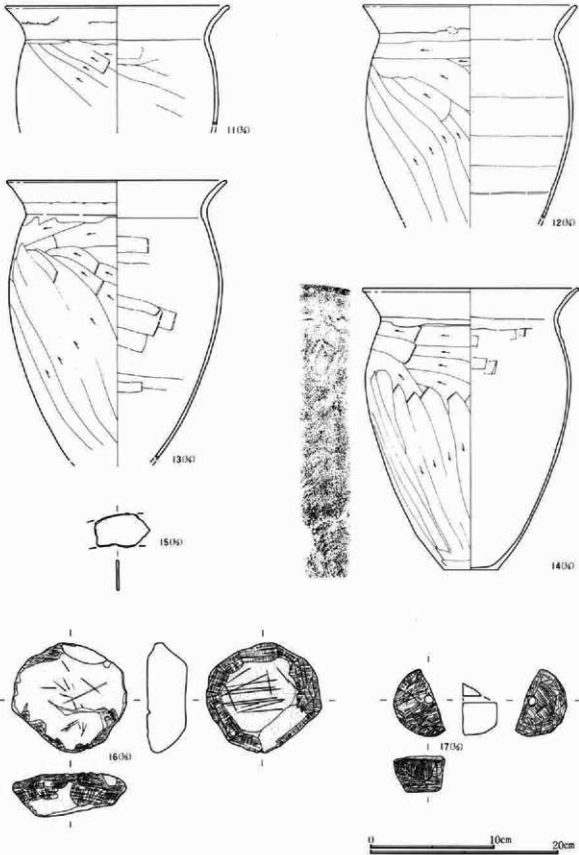
土層注記(層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子・焼土粒子を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の褐色土の層。
- ④ 赤褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 灰褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと灰黄褐色粘質土を多く含む。
- ⑥ 褐色土 ロームを主とし、火を受けて部分的に焼土化した層。
- ⑦ 褐色土 多くのローム粒子と暗褐色の混入土層。
- ⑧ 褐色土 地山のローム層。
- ⑨ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の焼土粒子と灰化物を含む。
- ⑩ 暗褐色土 少量の灰黄褐色粘質土と多くのロームブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑪ 暗褐色土 ローム粒子を主とし、少量の焼土粒子を含む。

第190図 63号住居跡電実測図



第191図 63号住居跡出土遺物実測図(1)



第192図 63号住居跡出土遺物実測図(2)

63号住居跡 出土遺物観察表 (挿入番号第191・192図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・直径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
63住-1	環 土師器	— (13.0) — 床面+34	丸底を呈する環である。口縁部は直立する。口縁部横ナデ、底部ヘラ削り。	①褐色②酸化③口縁→底部1/5④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-2	環 土師器	3.3 (14.0) — 床面+50	丸底を呈する環である。口縁部はほぼ直立する。口縁部横ナデ、底部ヘラ削り。	①にぶい褐色②酸化③口縁→底部1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-3 107	環 土師器	3.4 14.0 — 床面	底部が浅く、丸底を呈する環である。底部と口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は大きく外傾する。口縁部横ナデ、底部ヘラ削り。	①にぶい褐色②酸化③2/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-4	環 土師器	(3.5) (13.2) — 床面+40	ほぼ平底を呈する環である。内側体部へ口縁部に暗文。内側底部に2列の螺旋状暗文の痕跡が残る。体部へ底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③1/3④黒色炭粉粒を少量含む
63住-5	環 土師器	— 14.0 — 床面+48	4に似た環と思われる。体部へ口縁部内側に暗文。外側口縁部横ナデ、体部ヘラ削り。	①にぶい褐色②酸化③口縁→体部1/4④赤色粒を少量含む
63住-6 107	須恵焼 須恵焼	— — 10.4 床面+6	底径が大きく細長い高台の付く器である。体部下半へ削り。高台内側はへら切り後ナデ整形と思われる。高台はいていねいに整形して貼付けてある。	①灰色②還元焼締③体部下半→底部完形④1～2mmの長石粒を多く含む⑤外側全面磨光による自然輪
63住-7	蓋 須恵焼	— (13.0) — 床面+74	口径が小さく器高の高い蓋であり、口縁部内側に明瞭なカエリを持つ。天井部外側へ削り。	①灰色②還元焼締③口縁→天井部1/5④1mm前後の多くの長石粒を含む
63住-8 107	蓋 須恵焼	2.6 14.8 — 床面	器高の低い環である。つまみは環状を呈し低い端部は鋭利でなく丸味を持つ。口縁部はカエリでなく折り。内面は中央部が磨耗しているため転用痕の最大径を脚中央部を持つ蓋である。口縁部の器内が厚く外反する。外側脚部右下→左上方へ削り。	①灰色②還元焼締③口縁部4/5→他は完形④1～2mmの長石粒を多く含む⑤外側全面磨光による自然輪
63住-9	甕 土師器	— (16.0) — 床面+26	最大径を脚中央部を持つ甕である。口縁部の器内が厚く外反する。外側脚部右下→左上方へ削り。	①褐色②酸化③口縁→体部上面1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-10	甕 土師器	— (17.0) — 床面+2	丸形の甕である。口縁部は直立後外傾する。肩部右→左横方向へ削り。硬質である。	①明褐色②酸化③口縁→肩部完形・肩部2/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-11 108	甕 土師器	— (24.0) — カマド内+65	器内の薄い甕である。口縁部は長く大きく外反する。脚上部右下→左上方へ削り。	①赤褐色②酸化③口縁→肩部2/3・脚上部1/6④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-12 108	甕 土師器	— 22.8 — カマド内+42 床面+32	器内の薄い甕である。口縁部は幅広く大きく外反する。口縁部に輪痕痕。肩部に指頭圧痕。肩部右→左横方向・脚部右下→左上方へ削り。内面輪痕痕。	①赤褐色②酸化③口縁→肩部完形・肩部2/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-13 108	甕 土師器	— 23.5 — カマド内+42 床面+26	11の甕に似て最大径を口縁部に持ち、口縁が長く大きく外反する。口縁部に輪痕痕。肩部右→左横方向へ削り。脚部右下→左上方へ削り。	①褐色②酸化③底部以外ほぼ完形④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-14 108	甕 土師器	29.8 23.0 6.0 カマド内+88	11・13の甕に似て最大径を口縁部に持ち、口縁が長く大きく外反する。肩部右→左横方向へ削り。脚部中央→右下方向へ削り。	①褐色②酸化③脚部→底部1/4④他はほぼ完形④1mm以下の細砂粒を多く含む
63住-15	鉄	長さ4.3 幅2.5 厚さ0.2 重量9.2g	名称・用途とも不明。錆化が全体に進行している。覆土中より出土している。	
63住-16 108	紡錘車	長さ8.6 幅9.0 長さ3.3 重量35g 床面+10	紡錘車の未製品である。側面はノミによりほぼ完形りが終了した段階で側面に亀裂が入り、放棄されている。ノミの幅は2.2cmと広い。狭面に格子状の線刻、広面にわずかな加工痕。	①緑灰色②完形④滑石片岩
63住-17 108	紡錘車	長さ5.3 幅3.4 厚さ2.8 孔径0.6 重量73g	中央より割れている。厚い台形を呈する。広狭面両端削り、側面上半右→左横方向ノミ削り、下半半底削り。	①緑灰色②完形④滑石片岩⑤カマド内+19

64号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版29・30 遺物写真図版109・110・148

位置 I区南西端部に位置し、10号住居の西約7mでK-13、L-13グリッドに属する。

概要 平安時代の15号住居に南西部分の壁面と覆土上面が削り取られているが、住居の掘り込みが深いため床面と覆土の一部は残存している。

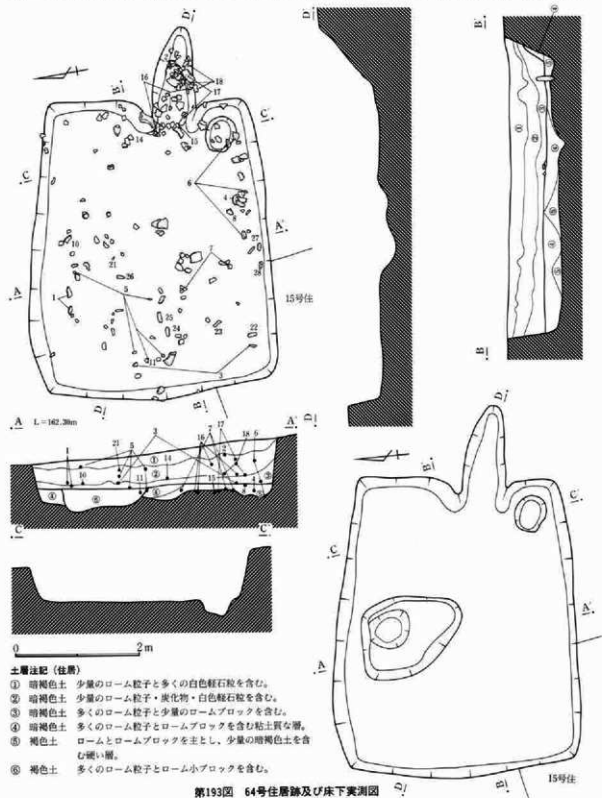
構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした粘土質の土で造られ軟質である。竈突口右側に貯蔵穴が掘られていた。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西4.70m、南北は3.90mで、東西方向に長い長方形を呈する。壁高は最も残りの良いところで84cmで、他の住居と比較すると残りは大変良好である。貯蔵穴は50×58cmの楕円形を呈し、深さは28cmで

ある。

遺物 床面や覆土中より、土師器の坏や甕、須恵器の坏や蓋ととも石が出土し、多くを図化することができ
暗文を持つ土師器の坏が数多く出土しており注目される。

床下 床下中央部分やや北側に160×110cmの楕円形の床下土坑が検出された。



第193図 64号住居跡及び床下実測図

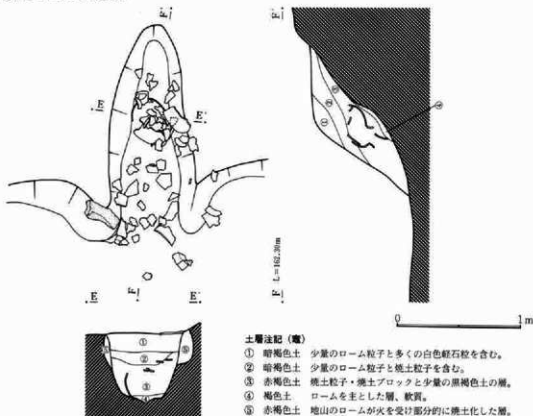
64号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央から南寄りの壁面を掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の一部は床面上に位置するが、他の大部分は壁面を掘り込んで造られている。煙道が燃焼部から外側に向かい、強く立ち上がりながらロームを掘り抜いて造られている。

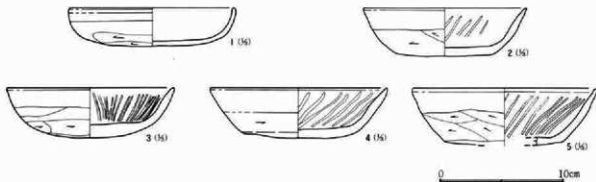
構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土と灰黄褐色粘質土で造られている。左側袖部分に65×25cmの石が出土し、焚口天井石の可能性がある。燃焼部床面や奥壁の表面が焼けて焼土化しており、覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向180cm、両袖方向70cmである。

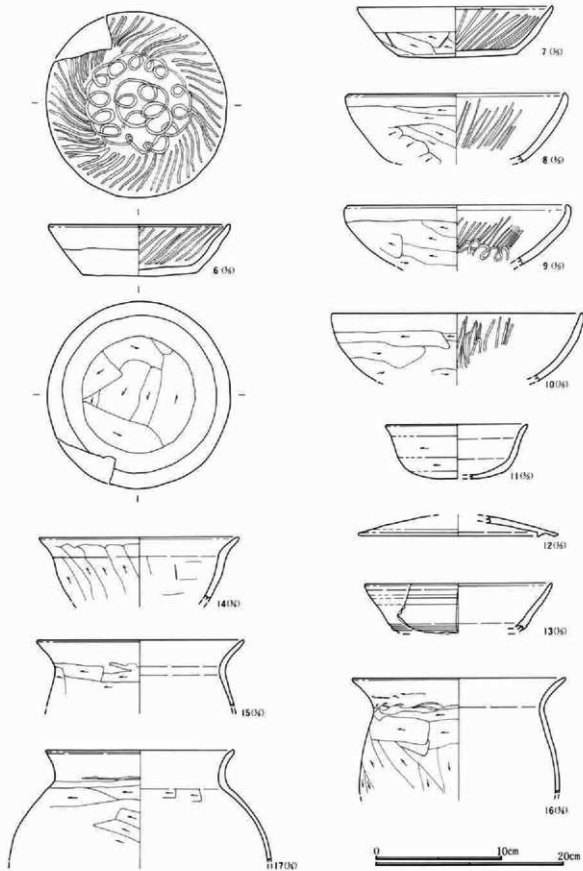
遺物 口縁を燃焼部に向けた底部穿孔の土師器甕が煙道部より出土し、覆土中より土師器甕の口縁部や胴部の破片が多量に出土した。



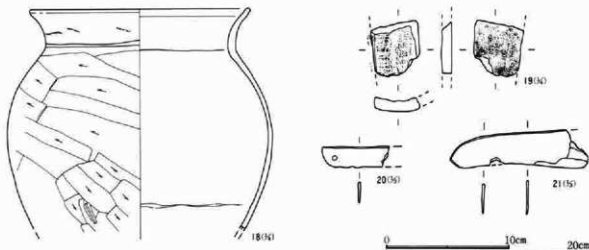
第194図 64号住居跡竈実測図



第195図 64号住居跡出土遺物実測図(1)



第196図 64号住居跡出土遺物実測図(2)



第197図 64号住居跡出土遺物実測図(3)

64号住居跡 出土遺物観察表(押印番号第195・196図)

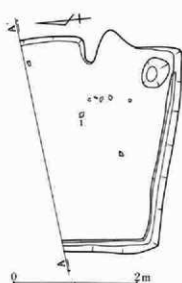
遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
64住-1 109	坏 土師器	3.1 13.4 - 床面+4	平底に近い丸底の坏である。底部は薄く口縁部は直立する。底部へ丸削り、体部ナデ、口縁部磨ナデ。	①褐色②酸化③4/5④1mm以下の細砂粒を多く含む
64住-2 土師器	坏	3.6 (14.0) (8.0) カマド内+32	平底に近い丸底の坏である。底部へ体部へ丸削り、内側体部へ口縁部放射状暗文。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ底部1/8④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-3 109	坏 土師器	3.9 (13.3) - 床面	底部の器内の薄い丸底の坏である。体部へ口縁部が直線的に立ち上がる。底部へ体部へ丸削り、内側体部へ口縁部に放射状暗文。底部に螺旋状暗文の痕跡。	①にぶい赤褐色②酸化③2/3④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-4 109	坏 土師器	4.0 14.2 9.0 床面-7	平底に近い丸底の坏。体部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。底部へ体部へ丸削り。内側底部に螺旋状暗文の痕跡。体部へ口縁部放射状暗文。	①にぶい褐色②酸化③4/5④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-5 109	坏 土師器	(4.5) (17.7) (9.4) 床面+19	平底に近い丸底の坏である。体部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。底部へ体部へ丸削り。内側底部に螺旋状暗文の痕跡。体部へ口縁部に放射状暗文。	①にぶい褐色②酸化③1/3④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-6 109	坏 土師器	4.1 14.5 9.0 床面+4	平底に近い丸底の坏。体部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。底部へ体部へ丸削り。内側底部に2列の螺旋状暗文。体部へ口縁部に放射状暗文。内側口縁部の器肉が薄く、内側口縁部が玉縁状を呈する。	①にぶい褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-7 109	坏 土師器	4.0 15.6 9.4 床面-6	平底に近い丸底の坏である。体部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。底部へ体部へ丸削り。内側体部へ口縁部放射状暗文。	①褐色②酸化③口縁へ体部2/3、他は完形④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-8 土師器	坏	- (17.4) - 床面	平底に近い丸底の坏であり、器高が高い。2~7までの坏と異なり、口縁部が狭く、体部のへ丸削り面が広い。内側体部放射状暗文。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ体部1/5④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-9 土師器	坏	- 18.0 - 覆土	平底に近い丸底の坏であり、器高が高い。口縁部が狭く、体部のへ丸削り面が広い。内側底部螺旋状暗文。内側体部放射状暗文。口縁部が内傾している。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ体部1/4底部小破片④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-10 109	坏 土師器	- 20.0 - 床面+7	8・9の坏に類似している。内側口縁へ体部に放射状暗文あり。この暗文は単線ではなく折り返しのくり返して密に描かれている。外側体部幅広くへ丸削り。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ体部1/3④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-11 109	坏 土師器	- (11.4) - 床面-6	平底に近い丸底の坏である。底部へ体部へ丸削り。口縁部磨ナデ。明確でないが体部へ口縁部に放射状暗文。底部に螺旋状暗文の痕跡あり。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ底部1/3④1mm以下の赤色粒を多く含む
64住-12 須恵器	差	- (16.0) - 覆土	器高の低い差である。カエリの断面は三角形を呈し、端部は鋭利である。	①灰白色②還元焼結③口縁へ天井部1/5④石英と長石粒を多く含む
64住-13 109	埴 須恵器	(4.0) (15.0) (10.8) 覆土	口径が大きく器高の低い坏であり、底部は削りだし高台。	①灰白色②還元焼結③口縁へ底部周辺1/6⑤差

64号住居跡 出土遺物観察表 (拝図番号第196・197図)

遺物番号 図版番号	形状及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②構成③残存④出土⑤備考
64住-14 109	鉢 土師器	— (21.4) — 灰面+10	口径の大きな鉢である。頸部の器内が厚い。口縁部が大きく外反する。外側は口縁下部までヘラ削り。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ体部上半1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
64住-15	甕 土師器	— (22.0) — カマド内-12	器内の薄い甕である。頸部へ胴上部右へ左横方向へヘラ削り。口縁部横ナデ。器内表面が広い。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ胴上部1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
64住-16 109	甕 土師器	— (22.8) — カマド内+15	器内の薄い甕である。最大径を口縁部に持つ。胴上部右へ左横方向へヘラ削り。口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ胴上部3/5④1mm以下の細砂粒を多く含む
64住-17	甕 土師器	— (20.0) — カマド内+40	器内の薄い丸胴の甕と思われる。胴部右へ左方向へヘラ削り。口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③口縁へ胴上部1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
64住-18 109	甕 土師器	— 23.6 — カマド内+14	器内の薄い甕である。口縁部は直立気味に立ち上がり、上端で内彎する。胴上部右へ左方向へヘラ削り。胴下半左へ右方向へヘラ削り。	①褐色②酸化③口縁へ胴部4/5④1mm以下の細砂粒を多く含む
64住-19	平瓦	覆土	平瓦の小破片である。内面布目。外面ナデ。内面に横脊痕と思われる2平面の段差あり。横脊作りか?	①灰色②透光③小破片④少量の石英と長石を含む
64住-20 148	鎌	長さ11.0 幅3.0 厚さ0.2 重量24g 覆土	小さいが鎌と思われる。右下端部は欠けているように観察できないため長さはほぼ定形と思われる。右上端部が折曲げられて柄がつけられていたと思われる。その部分が欠損している。全体に錆化が進行している。	
64住-21 148	鉄	長さ5.2 幅1.6 厚さ0.2 重量4.6g	名称及び用途不明。片側が刃部となっている。端部が穿孔されている。⑤床面+28	
64住-22 110	石	長辺13.9 短辺26.1 厚さ2.3 310g	偏平な石であり、両側面に凹状の欠損部あり。こも石の可能性あり。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床面+10
64住-23 110	石	長辺14.5 短辺25.4 厚さ2.2 215g	偏平な石であり、両側面に凹状の欠損部あり。少し軽量であるが、こも石の可能性あり。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩④床面+5
64住-24 110	石	長辺12.2 短辺25.3 厚さ2.2 197g	偏平な石であり、両側面に凹状の欠損部あり。こも石の可能性あり。	①淡青色③一部欠損④網罟母石墨片岩⑤床面+5
64住-25 110	石	長辺13.0 短辺25.1 厚さ2.6 300g	細長く偏平な石である。両側面に凹状の部分を持つ。こも石の可能性あり。	①淡青色②完形④石墨緑泥片岩⑤床面+8
64住-26 110	石	長辺15.2 短辺25.4 厚さ3.8 555g	断面は台形を呈する。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③凝灰石墨片岩⑤床面-4
64住-27 110	石	長辺11.5 短辺26.0 厚さ2.7 223g	偏平で小さな石である。不定形を呈している。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③凝灰石墨片岩⑤床面-6
64住-28 110	石	長辺13.5 短辺23.7 厚さ2.7 193g	細長い石である。軽く不定形を呈している。表面全体が磨耗している。	①淡青色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面-10

65号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版30

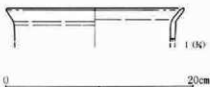
位置 II区中央北側に位置し、44号住居の西約6mでJ-17・18グリットに属する。



概要 北側部分の調査は行われていない。南壁付近の残りは良いが、他の部分の残りは悪い。東壁に竈が検出されたが、少量の焼土層が残存している程度で残りは悪い。

土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と灰色粘土・焼土粒子を含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。



第198図 65号住居跡及び出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られ軟質である。竈焚口右側に貯蔵穴が掘られていた。柱穴は掘られていなかった。南壁と西壁の内側に周溝が検出された。

規模 東西3.3m、南北は不明。壁高は南壁部分で29cm。貯蔵穴は直径約40cmの円形を呈し深さ26cmである。周溝は幅約10cm深さ約5cmであった。

遺物 床面や覆土中より、土師器甕の破片が僅かに出土した。

65号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第198図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
65住-1 土師器	— (19.0) — 床面-7	「コ」の字状口縁の壺の口縁~頸部の小破片と思われ。口縁~頸部横ナデ。	①褐色②焼成③小破片④1mm以下の小砂粒を多く含む

66号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版30 遺物写真図版110

位置 II区中央部北側に位置し、65号住居の西約1mでJ-18グリットに属する。

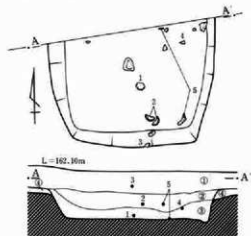
概要 北制部分の調査は行われていない。住居の掘り込みが深く残存状態が良好な住居である。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主体とした土で堅く踏み固められてあった。竈は調査範囲内では

確認できなかったが、おそらく北竈かと思われる。周溝や柱穴は確認できなかった。

規模 東西2.2m、南北は不明。壁高は残りの良い南壁部分で53cmである。

遺物 残存している床面や覆土中より、土師器の坏や壺の破片が出土した。

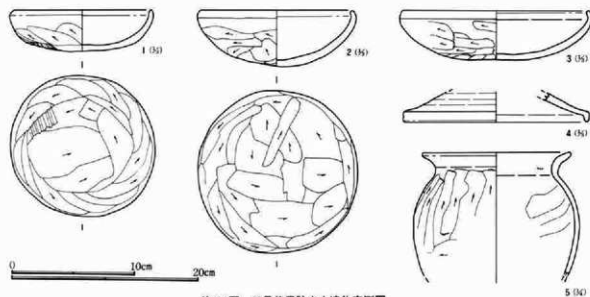


第199図 66号住居跡実測図

土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子和多くの白色礫石粒を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子和灰色粘土・焼土粒を含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子和少量の黒褐色土を含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

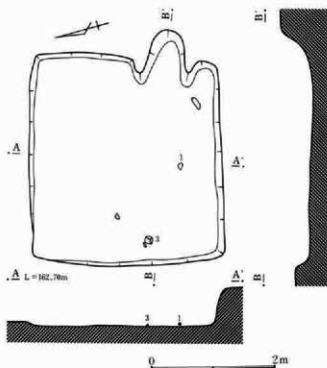
0 2m



第200図 66号住居跡出土遺物実測図

66号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第200図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
66住-1 110	坏 土師器	3.3 (11.0) - 床面+5	底部の丸い環である。口縁部幅は狭く内傾する。底部は平蓋気味を呈し、体部とへり削り方向が異なるため区分が出来る。体部右下→左上方向へ削り。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
66住-2 110	坏 土師器	4.4 12.2 - 床面+20	丸底の環である。底部中央から口縁部まで円形を呈し、体部の区別はつかない。口縁部は狭く内傾する。底部全面へ削り。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
66住-3	坏 土師器	(3.9) (15.0) - 床面+30	丸底を呈する浅い環である。口縁部は狭く内傾する。底部全面へ削り。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
66住-4	蓋 須恵器	- (15.0) - 床面+17	蓋の口縁部の小破片である。端部は下方に折られている。	①灰白色②還元③口径1.5/④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
66住-5 110	変 土師器	- (16.0) - 床面	丸い胴部を持つ環である。最大径は胴部に持つ。胴中央→口縁に向かう削り。口縁横ナデ。	①灰い褐色②酸化③口縁→胴部1/3④1mm前後の赤色鉱物を多く含む



67号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版30

遺物写真図版147

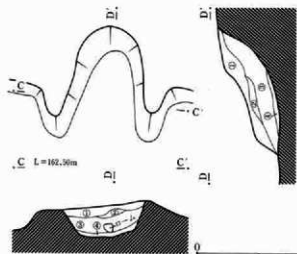
位置 II区中央部北側に位置し、66号住居の南西2mでJ-18・19グリッドに属する。

概要 北壁周辺は残りが悪く、特に北西端部は残存していない。出土遺物も少なく時期の決定が困難であるが、古墳時代の環と瓶の小破片が出土しているので、古墳時代として扱ったが明確でない。

構造 床面は、ロームブロックを主とし黒褐色土色が混入した土で固めてあった。柱穴及び貯蔵穴は確認されなかった。

規模 東西3.4m、南北3.1mである。壁高は最も残りの良い北壁部分で54cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の環や甌や鉄鏝が出土した。



67号住居跡 (甌)

位置 住居東壁南寄りの壁面に造られており、燃焼部の大部分は壁面から床面にかけて位置する。

構造 ローム粒子を主体とした暗褐色土で造られ、覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子と炭化物が検出された。

規模 煙道方向85cm、両袖方向70cmである。

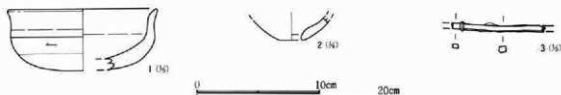
遺物 出土は認められなかった。

土層注記 (甌)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・炭化物を含む。
- ④ 褐色土 地山のロームを主とし、部分的に焼土を含む。

第201図 67号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第202図 67号住居跡出土遺物実測図

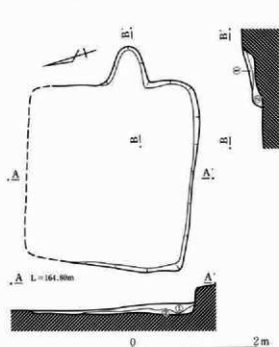
67号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第202図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	高さ・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
67住-1	環 土師器	4.9 (12.0) - 床面+2	丸底の坏であり、底部の器肉がきわめて厚い。底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①褐色酸化③口縁1/8・底部1/4④1mm前後の砂粒を多く含む
67住-2	瓦 土師器	- (2.4) - 埋土	小型の甕の底部小破片である。底部中央に径14mmの小穴が1つ穿けられている。	①に濃い褐色酸化③底部小破片④1mm前後の砂粒を多く含む
67住-3 147	鉢	長さ7.5 幅0.5 厚さ0.5 重量5.9g	鉄線の間部・間部・基部の破片である。断面は正方形を呈する。床面	①に褐色酸化③残存④胎土⑤備考

68号住居跡及び竈 (時代不明) 遺構写真図版31

位置 II区中央部に位置し、19号住居の西南約3mでL-18・19グリットに属する。

概要 住居北側部分がほとんど残存していない。竈が東壁に造られていたが、焼土が少し確認できた程度である。土器等の遺物が全く出土していないため住居の属する時代は不明であるが、竈の造られている位置等から平安時代を想定してみたい。



第203図 68号住居跡実測図

69号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版31 遺物写真図版110・111

位置 調査区西端のIV区に位置し、O-34グリットに属する。

概要 壁面の残りは悪いが4辺の壁面が確認できる。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られ堅く踏み固められてあった。竈は口右側に貯蔵穴があり、柱穴は掘られていなかった。竈と貯蔵穴部分以外の壁面下に周溝が掘られていた。

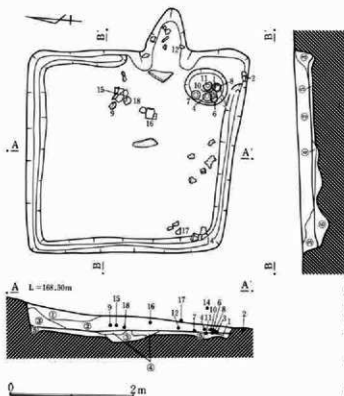
規模 東西3.3m、南北3.5mである。壁高は最も残りの良い南壁面で43cmで、他の住居と比較すると残りは

第3部 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物

良好である。貯蔵穴は65×55cmの楕円形を呈し、深さは35cmである。

遺物 床面や覆土中より、土師器の坏や甕、須恵器の坏等が出土した。住居使用時に埋められていたと思われる貯蔵穴の上に6個体の坏がまわって出土しており注目される。

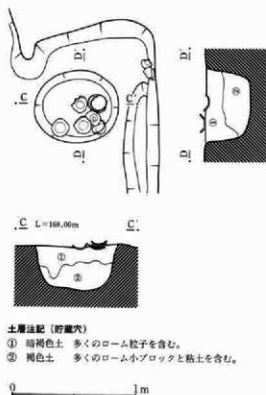
床下 床下中央部分に直径約110cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さ23cmの床下土坑が検出された。



土層注記 (住居)

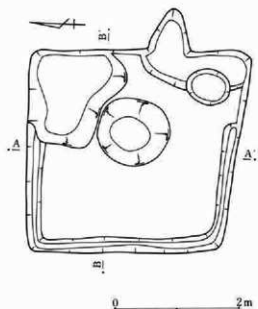
- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 黒褐色土 多くの焼土粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ④ 黄褐色土 ロームブロックを主とした層(粘床となっており硬い)。
- ⑤ 暗褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第204図 69号住居跡実測図



土層注記 (貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ② 褐色土 多くのローム小ブロックと粘土を含む。



第205図 69号住居跡貯蔵穴及び床下実測図

69号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央から少し南寄りの壁面を掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の一部は床面上に位置するが、他の大部分は壁面を掘り込んで造られている。煙道が燃焼部から外側に向かい、強く立ち上がりながらロームを掘り抜いて造られている。

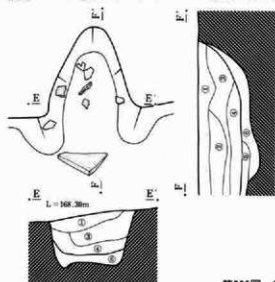
構造 ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土で構築されている。電手前に焚口天井部に使われ
たと思われる大きな石が1個、竈内から3個の小さな石が出土した。燃焼部床面や奥壁の表面が焼けて焼土化しており、覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向90cm、両袖方向66cmである。

遺物 土師器の坏と須恵器の甕の破片が出土した。

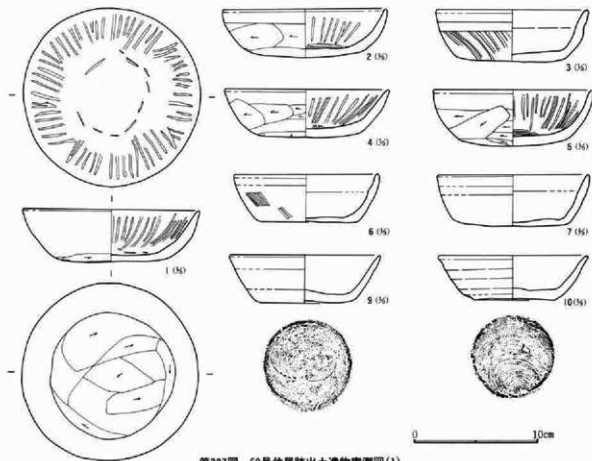
土層注記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 1層よりやや大粒のローム粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ④ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の黒褐色土の層。
- ⑤ 黒褐色土 黒褐色土中に灰・焼土粒子を含む軟質土層。
- ⑥ 暗赤褐色土 ロームと暗褐色土を主とし、部分的に焼土化した焼土粒子を含む層。



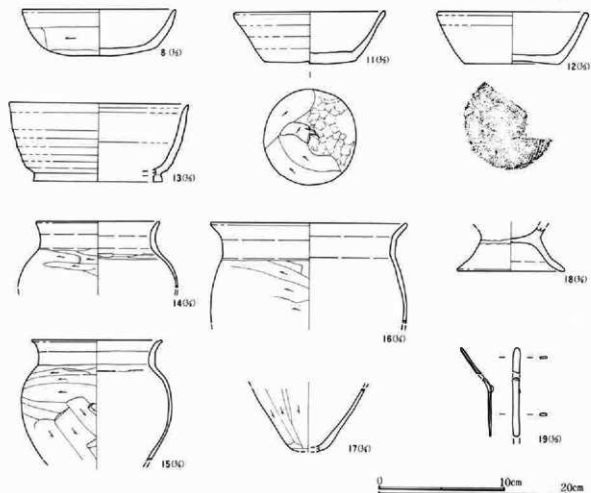
第206図 69号住居跡竈実測図

0 1m



第207図 69号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第208図 69号住居跡出土遺物実測図(2)

69号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第207図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①橙色②酸化③ほぼ完形④少量の赤色 粒と多くの2mm前後の砂粒を含む⑤重 量感がある
69住-1 110	坏 土師器	4.2 14.1 - 床面	平底に近い丸底を呈する。体部へ口縁部は内湾しつ つ立ち上がる。体部の器肉が厚い。底部へラ削り、 体部ナデ、口縁部横ナデ、内面でいねいな横ナデ後 放射状暗文。内側底部周辺に線刻による区画線。	①橙色②酸化③ほぼ完形④少量の赤色 粒と多くの2mm前後の砂粒を含む⑤重 量感がある
69住-2 110	坏 土師器	3.8 13.2 8.9 床面+4	1の坏に近い。底部へ体部の器肉が厚い。やや残い。 底部へラ削りと思われるが明確に残っていない。体 部へラ削り。内側放射状暗文。内側底部平行へラ磨。 り。	①橙色②酸化③ほぼ完形④2mm前後の 砂粒を多く含む
69住-3 110	坏 土師器	4.1 12.2 9.1 床面+2	ほとんど平底を呈している。体部と口縁部との境に 沈線を持ち内面に線刻が出来る。底面は明確でない がへラ切後に回転へラ削りを行なっている可能性有。 り。	①残黄褐色②酸化③完形④少量の赤色 粒を含む。器表面が密で粉状を呈する
69住-4 110	坏 土師器	3.8 13.2 8.3 床面+4	2の坏に近い。底面はていねいなへラ削り。体部外 側へラ削り。口縁部横ナデ後放射状暗文。内側底部 平行で密なへラ磨き。	①橙色②酸化③ほぼ完形④2mm前後の 砂粒を多く含む⑤重量感がある
69住-5 110	坏 土師器	4.4 12.8 8.8 覆土	2の坏に近い。底部横方向へラ削り、体部外側右→ 左横方向へラ削り、口縁部横ナデ、内側体部へ口縁 部放射状暗文。内側底部平行で密なへラ磨き。	①橙色②酸化③口縁へ体部1/3・底部 2/3④2mm前後の砂粒を多く含む
69住-6 110	坏 土師器	3.8 11.5 7.8 床面+4	3の坏に近い。体部に3の坏と同様に右→左横方向 へラ削り。底面は回転へラ削りをていねいに行なっ ている可能性あり。	①残黄褐色②酸化③完形④わずかに赤 色粒を含む。器表面が密で粉状を呈す る

69号住居跡 出土遺物観察表(拝照番号第207・208図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
69住-7 110	坏 土師器 床面	4.1 12.2 9.0	3・6の坏に近い。特に法量とも3の坏に近い。	①淡黄褐色②酸化③完形④少量の赤色粒を含む。表面が密で粒状を呈する
69住-8 110	坏 土師器 床面+2	3.7 12.2 8.5	2・4・5の坏に近いが色調が少し赤味を帯。また端文も認められない。底面はていねいなヘラ削り。体部右→左横方向ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③ほぼ完形④2mm前後の砂粒を多く含む。3～4mmの片岩粒を少量含む
69住-9 110	坏 須恵器 床面+6	3.8 12.0 7.0	底部の器内が厚く内側中央部が凸状を呈する。体部へ口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部の外反はない。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁部4/5・他は完形④1mm以下の長石粒を多く含む
69住-10 110	坏 須恵器 床面+3	3.5 12.0 6.6	底部の器内が厚い。体部はわずかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
69住-11 110	坏 須恵器 床面	3.8 12.2 7.6	底部の器内が厚い。体部はわずかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部は外反しない。底面はヘラ削り後、手持ヘラによりていねいに整形。	①灰白色②還元③口縁2/3・他完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
69住-12 111	坏 須恵器 カマド内+4	4.1 (12.2) (7.5)	底部の器内が薄く中央部が盛り上がっている。口縁部は内彎しつつ立ち上がり、口縁部は外反しない。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/3・底部2/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む。2mm前後の長石粒を少量含む
69住-13 111	埴 須恵器 覆土	6.2 (14.4) (10.4)	底径が大きく、箱形を呈する坏に高台を持つ。高台は底部端から少し内側に付く。高台端部は鋭利。	①灰色②還元③口縁・底部1/3④1mm以下の長石粒を多く含む
69住-14 111	甕 土師器 床面+34	— (13.0) —	「コ」の字状口縁の小壺である。最大径を胴中央部に持つ。胴部右→左横方向ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①明赤褐色②酸化③口縁へ胴上1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
69住-15 111	甕 土師器 床面+6	— 14.0 —	「コ」の字状口縁の小壺である。胴部の器内が厚い。最大径を上部に持つ。胴部右→左横方向ヘラ削り。胴下半は左→右下方ヘラ削り。	①明赤褐色②酸化③口縁へ胴部ほぼ完形・胴上部1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
69住-16 111	甕 土師器 床面+14	— (21.0) —	「コ」の字状口縁の甕である。胴部右→左上方ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①にぶい赤褐色②酸化③口縁部1/4・胴部へ胴上部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
69住-17 111	甕 土師器 床面+16	— — (4.0)	器内の薄い甕の胴下半～底部の小破片である。胴部上→下方ヘラ削り。底面ヘラ削り。	①褐色②酸化③胴部下面～底部1/4④1mm以下の細砂粒を多く含む
69住-18 111	台付甕 土師器 床面+4	— — 11.4	台付甕の台部である。内外面横ナデにより、ていねいに整形している。	①褐色②酸化③台部ほぼ完形④1mm以下の細砂粒を多く含む
69住-19 111	鉄	長さ6.9 幅0.5 厚さ0.2 重量2g	名称及び用途不明。断面の中央空洞。両端部とも刀状に鋭利な面を呈する。	⑤覆土

70号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版32 遺物写真図版111

位置 III区中央部やや北側に位置し、N-27・28グリットに属する。

概要 住居中央から南側にかけて少し残存しているが、北壁周辺の壁面は残存していない。

構造 床面は、ロームとロームブロックと暗褐色土を主とした土で造られ、堅く踏み固められてあった。貯蔵穴や柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.15m、南北2.70mである。壁高は最も残りの良い南壁面で30cmである。

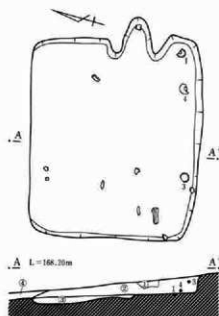
遺物 床面や覆土中より、土師器の坏や甕、須恵器の坏や蓋が出土した。

70号住居跡(竈)

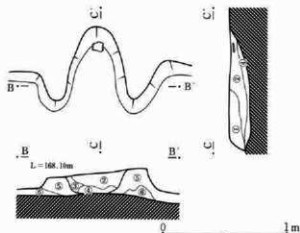
位置 住居東壁中央から少し南寄りの壁面を掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の一部は床面上に位置するが、他の大部分は壁面を掘り込んで造られている。

構造 残存状態が悪いため詳しい内容は不明であるが、ローム粒子とロームブロックを主体とした土で造られていたと思われる。両袖の床下部分から2個の袖石を埋めたと思われる掘り込みが検出された。この袖石の上に天井石が置かれていたものと思われる。覆土中や燃焼部床面付近から多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向48cmである。 遺物 土師器の甕の破片が出土した。



0 2m



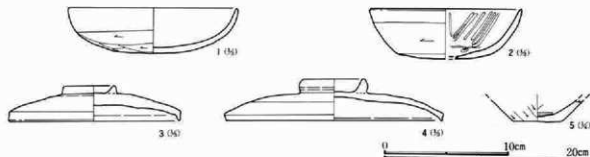
土層注記 (住居)

- ① 黄褐色土 ローム粒子を主とする。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と1cm大のロームブロックを含む。
- ③ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ④ 暗褐色土 少量のローム粒子と多量の白色粒石を含む(耕作溝の覆土)。

土層注記 (甕)

- ① 褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 黒褐色土 黒褐色土中に炭・灰・焼土粒子を含む軟質土層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む、部分的に焼土粒子を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。

第209図 70号住居跡及び竈実測図



第210図 70号住居跡出土遺物実測図

70号住居跡 出土遺物観察表 (拝図番号第210図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・直径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
70住-1 111	坏 土胎器	3.6 13.6 - 床面-2	丸底で底部の浅い坏である。口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。底面へた削り、口縁部横ナデ、内側表面が細かく割製している。	①褐色②酸化③3/4④少量の黄色鉱物を含む
70住-2	坏 土胎器	3.9 (14.0) (7.4) 覆土	平底に近い丸底の坏である。内側体部へ口縁部に放射状彫文。底部に縦線状彫文あり。	①褐色②酸化③口縁へ底部周辺1/4 ④赤色粒を少量含む
70住-3 111	蓋 須臾器	2.8 13.8 - 床面+15	天井部の器内が特に厚く、器高の低い蓋である。つまみは低く側面が直立する。口縁端部は下方に折られている。天井部右回転へた削り。	①灰白色②還元焼成③ほぼ球形④多くの石英と長石粒を含む。黄色鉱物が密着して気泡化している
70住-4 111	蓋 土胎器	3.3 (17.6) - 床面+2	3の蓋と異なり天井部の器内は薄い。つまみは少し高くなり肉厚となる。口縁端部の折りは短い。天井部右回転へた削り。器形は3の蓋に近い。	①灰白色②還元③つまみ成形・他1/2 ④1mm以下前後の石英と長石粒を多く含む
70住-5	蓋 土胎器	- - (5.0) 覆土	器内が薄く口縁部に最大径を持つ蓋の胴下半へ底部の破片である。胴部へた削り、底部へた削り。	①褐色②酸化③胴下半へ底部2/3④1mm以下の細砂粒を多く含む

第3章 検出された遺構と遺物

71号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版32

位置 III区中央部やや北側に位置し、70号住居の北西約2mでM-28、N-28グリッドに属する。

概要 床面のほとんどが残存していないため、床下部分の調査で住居範囲と竈を確認した。

構造 床面は、ロームを主とし多くの黒褐色土が混入した土で造られていたものと思われる。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西2.50m、南北2.80mで、長方形を呈する。貯蔵穴は直径約30cmの円形を呈し深さ45cmである。

遺物 床面や覆土中より、少量の土師器の破片が出土した。

床下 床面中央部に1.2×1.0mの楕円形を呈し、深さ9cmの床下土坑が検出された。

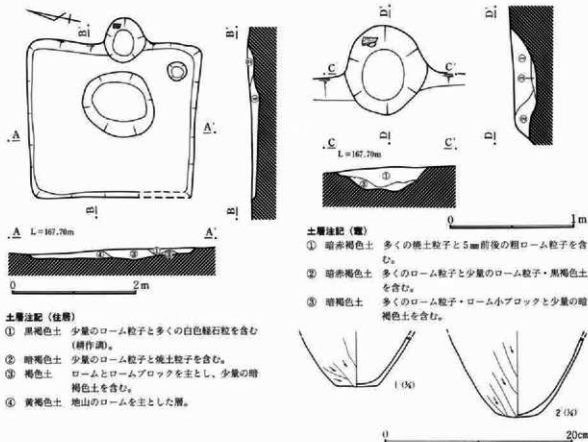
71号住居跡(竈)

位置 住居東壁やや南寄りの壁面を掘り込んで造られており、燃焼部は床面から壁面にかけて位置する。

構造 大部分が壊されていたため、ほとんど不明である。

規模 煙道方向推定70cm、両袖方向推定65cmである。

遺物 1個の小さな石が出土した。



第211図 71号住居跡・竈及び出土遺物実測図

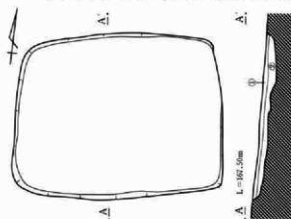
71号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号211図)

遺物番号 図版番号	形状及び 種別	高さ・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
71住-1	壺 土師器	- - 4.4 覆土	胴~底部の破片のため不明な点が多いが「コ」の字状口縁の壁の破片と思われる。胴部へう崩り。	①褐色②酸化③胴下半~底部2/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
71住-2	壺 土師器	- - 4.8 覆土	胴~底部の破片のため不明な点が多いが「コ」の字状口縁の壁の破片と思われる。胴部縦方向へう崩り。	①褐色②酸化③胴下半~底部1/3④1mm以下の細砂粒を多く含む

72号住居跡及び竈 (時代不明) 遺構写真図版32

位置 Ⅲ区中央部北側に位置し、71号住居の北約1mでM-28グリットに属する。

概要 他の竪穴住居と同様に方形の掘り込みが認められた。しかし、竈は痕跡さえも認められず、柱穴や貯蔵穴も掘られていない。遺物も全く出土していない。一応住居として取り扱ったが古墳時代から平安時代に至る他の住居とは性格が異なるものと思われる。床面中央部に小さな掘り込みが認められたがこれは最近の掘り込みでありこの遺構とは無関係である。



第212図 72号住居跡実測図

構造 床面は、ローム面を主とし少量の黒褐色土が混入した土で造られていた。

規模 東西3.35m、南北2.55mである。壁高は最も残りの良い南壁部分で10cmであった。

遺物 全く出土していない。

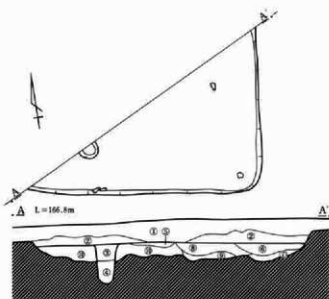
土層注記(住居)

- ① 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
② 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

73号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版32

位置 Ⅲ区中央部北側に位置し、M-29グリットに属する。

概要 住居南東部分のみの調査であり、他の部分は調査区域外である。



構造 床面は、ローム粒子と灰褐色粘質土を主体とした土で造られ、堅く踏み固められてあった。床面中央部に多くの灰褐色粘質土と焼土粒子が認められた。調査範囲の中で貯蔵穴や柱穴は確認されなかった。

規模 東西南北とも不明。壁高は南壁面で18cmである。

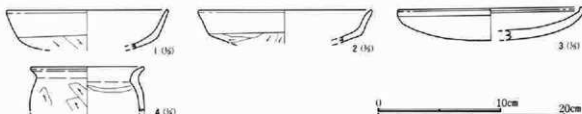
遺物 多くの土師器の甕や坏と少量の須恵器の坏等の破片が出土した。

土層注記(住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
③ 褐色土 5cmのロームブロックを含む。
④ 褐色土 ローム粒子を主とし、少量の暗褐色土を含む。
⑤ 灰褐色土 多くの灰褐色粘土粒子と少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
⑥ 暗黄褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
⑦ 暗黄褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
⑧ 暗褐色土 5mm程度のローム粒子を多く、焼土粒子と粘土を少量含む。
⑨ 暗褐色土 5mm程度のローム粒子と粘土を多く含む。
⑩ 褐色土 地山ロームを主とした層。

第213図 73号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第214図 73号住居跡出土遺物実測図

73号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第214図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm)	出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
73住-1	坏 土師器	-	(13.0) -	丸底の坏である。口縁部はゆるやかに外反する。底部へた削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③口縁～底部周辺1/4④1mm以下の細砂粒を少量含む
73住-2	坏 土師器	-	(14.0) -	1の坏に似る。丸底の坏であり、口縁部はゆるやかに外反する。底部へた削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③口縁～底部周辺1/4④1mm以下の細砂粒を少量含む
73住-3	皿 土師器	(2.5)	(15.0) -	丸底の皿であり、器高が特に低い。口縁部は短く立ち上がる。底部へた削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③口縁～底部1/5④少量の白色粒を含む
73住-4	小型壺 土師器	-	(12.0) -	胴内の厚い小さな壺である。口縁部は大きく外反する。胴部へた削り、口縁部横ナデ。	①暗赤褐色②酸化③口縁～胴上部1/3④少量の赤色粒を含む

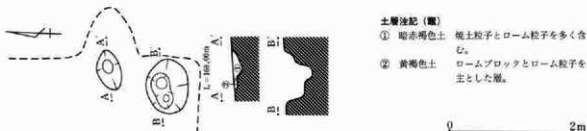
74号住居跡及び竈 (時代不明)

位置 Ⅲ区中央部やや北側に位置し、70号住居の西約1mでN-28グリッドに属する。

概要 竈と思われる掘り込みが検出され、中から少量の焼土粒子が検出された。掘り込み面や周辺の住居の在り方から竈の残骸と思われる、一軒の住居として扱った。

構造及び規模不明

遺物 土師器製の胴部2破片と須恵器蓋の小破片が出土したのみで、住居の属する時代は不明である。



第215図 74号住居跡実測図

75号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版33

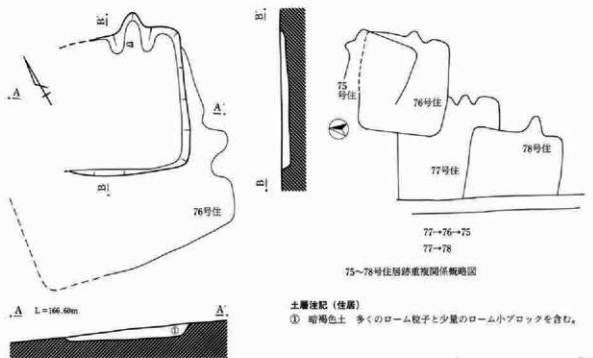
位置 Ⅲ区北側に位置し、73号住居の南約1mでM-29グリッドに属する。

概要 76号住居と重複しており、76号住居は77号住居と重複している。さらに77号住居は78号住居と重複している。いずれも奈良時代に属する住居であり、新旧関係は77→76→75号住居、77→78号住居の順である。76号住居と竈周辺部以外の大部分で重複しており、76号住居の北側約半分の覆土を床面近くまで掘り込んで残されていた。住居西側の床面と壁面は残存していなかった。

構造 ロームとロームブロックで造られ軟質である。

規模 東西不明、南北2.50mで、小さな住居である。壁高は最も残りの良い東壁面で20cmである。

遺物 床面や覆土中より、少量の土師器の壺や坏の破片が出土した。



第216図 75号住居跡実測図

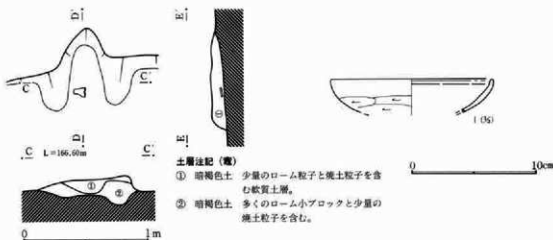
75号住居跡(竈)

位置 住居北壁の壁面を掘り込んで造られており、焚口部分と燃焼部の一部は床面に位置するが、他の大部分は壁面を掘り込んで造られていた。

構造 残存状態が悪いため詳しい内容は不明であるが、ローム粒子とロームブロックを主体とした土で造られていたと思われる。覆土中より少量の焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向40cmである。

遺物 1個の小さな石が出土したのみである。



第217図 75号住居跡竈及び出土遺物実測図

75号住居跡 出土遺物観察表 (採回番号第217図)

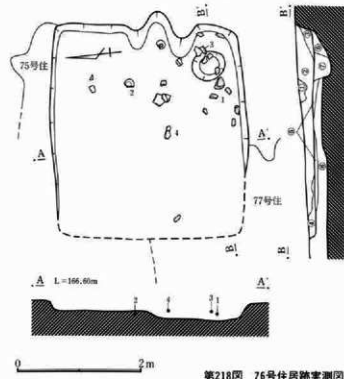
遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
75住-1	環 土師器	- (12.8) - 覆土	丸底の環である。口縁部は短く少し内傾する。底部へく削り、口縁部横ナブ。	①内側橙色・外面黒色②酸化③口縁～底部1/4④少量の黒色鉱物を含む

76号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版33 遺物写真図版111

位置 Ⅲ区北側に位置し、73号住居の南約1mでM-29グリットに属する。

概要 75・77号住居と重複しており、さらに77号住居は78号住居と重複している。いずれも奈良時代に属する住居であり、新旧関係は77→76→75号住居、77→78号住居の順である。75号住居により北側覆土を掘り取られ、77号住居の北東部分の覆土を床面まで掘り込んで住居が造られていた。75号住居と76号住居の床面の高さはほとんど同じであった。住居西端の床面と壁面は残存していなかった。

構造 ロームとロームブロックで造られ軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。



第218図 76号住居跡実測図

規模 東西不明、南北3.20mである。壁高は最も残りの良い南壁面で26cmである。貯蔵穴は直径50cmの円形を呈し、深さ76cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の環や甕と須恵器の環が出土した。

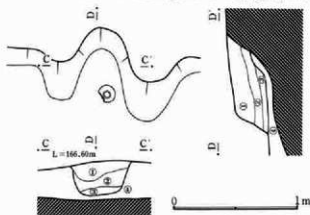
土層注記 (住居)

- ① 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを主とした層。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と1cm程度のロームブロックを含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 暗黄褐色土 ローム粒子を主体とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒子とロームブロックを主とした層。77号住居掘り方土層と重なる。
- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。

76号住居跡 (竈)

位置 住居東壁やや南側に位置し、一部壁面を掘り込んで造られている。燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 袖部の焚口周辺が残っていないため不明の部分が多いが、残された部分はローム粒子とローム小ブロックを主体とした土で造られていた。覆土中より少量の焼土粒子が検出された。



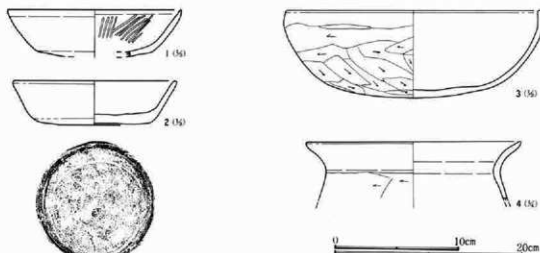
第219図 76号住居跡竈実測図

規模 煙道方向70cm、両袖方向55cmである。

遺物 土師器の台付甕の台部の破片が出土した。

土層注記 (竈)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と3~5mm程度の焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。



第220図 76号住居跡出土遺物実測図

76号住居跡 出土遺物観察表 (排因番号第220図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部態形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
76住-1	環 土師器	(3.7)(14.0)(8.6) 床面-4	平底に近い丸底の環である。内側に放射状文。内側底部に螺旋状文と思われる痕跡。体部へう削り。	①赤い②酸化③口縁~底部周辺1/3④赤色粒を多く含む
76住-2 111	環 須恵器	3.5 (13.2) 8.8 床面-2	口径、底径とも大きく狭い平底の環である。底部の器内は厚く体部~口縁部は直線的に立ち上がる。底部全面回転へう削り。体部下端回転へう削り。	①灰白色②還元③口縁~胴部2/3・底部完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
76住-3 111	環 土師器	6.9 (20.5) - 床面	口径、器高ともきわめて大きい丸底の環である。底部は平底に近い丸底を呈する。底部~体部へう削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③3/5④少量の赤色粒と黒色鉱物粒を含む
76住-4	壺 土師器	- (23.3) - 床面	器内の薄い壁である。肩部右→左横方向へう削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③口縁~胴上部1/9④1mm以下の細砂粒を多く含む

77号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版33・34 遺物写真図版111・148

位置 III区北側に位置し、M-29・30グリットに属する。

概要 76・78号住居と重複しており、さらに76号住居は75号住居と重複している。いずれも奈良時代に属する住居であり、新旧関係は77→76→75号住居、77→78号住居の順である。4軒の中で最も古い段階の住居である。76号住居により北東部分の覆土を床面まで掘り取られ、78号住居により南側の床面を掘り込まれていた。76号住居と77号住居の床面の高さはほとんど同じであり、77号住居と78号住居の床面の高さは78号住居が深い。住居西端の床面と壁面は残存していなかった。

構造 ロームとロームブロックで造られ軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北推定3.60mである。壁高は最も残りの良い東壁面で19cmである。貯蔵穴は直径40cmの円形を呈し、深さ25cmである。

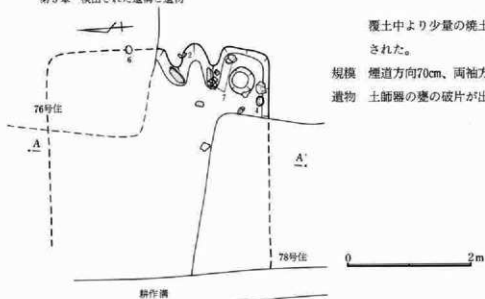
遺物 床面や覆土中より、土師器の環や壺と須恵器の環や鉄鐮が出土した。

77号住居跡(竈)

位置 住居東壁やや南側に位置し、一部壁面を掘り込んで造られている。燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 竈左側焚口部に袖石が据え付けられた状態で出土し、右側の袖部には袖石が少し動いた状態で出土した。天井石は検出されなかった。他に竈手前に1個の石が検出されたが竈内には出土していないため、焚口部分以外は石を用いないでロームとロームブロックを主体として造られていたものと思われる。

第3章 検出された遺構と遺物



覆土中より少量の焼土粒子と炭化物が検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向80cmである。

遺物 土師器の壺の破片が出土した。

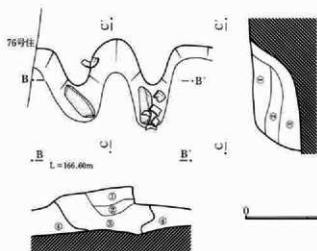
L = 166.00m



土層法記 (住居)

- ① 褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ② 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ③ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ④ 78号住居覆土
- ⑤ 78号住居床下覆土

第221図 77号住居跡実測図



L = 166.00m

土層法記 (竈)

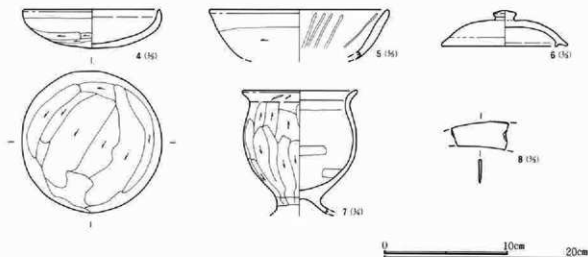
- ① 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 褐色土 少量の焼土粒子・炭化物と多くのローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第222図 77号住居跡電実測図



0 10cm

第223図 77号住居跡出土遺物実測図(1)



第224図 77号住居跡出土遺物実測図(2)

77号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第223・224図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm)	出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
77住-1 111	坏 土師器	3.4 11.6 -	覆土	丸底の坏である。口縁部は短く内傾する。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/2④少量の黒色鉱物粒を含む
77住-2 111	坏 土師器	3.8 12.1 -	床面+20	丸底の坏である。口縁部は短くわずかに内傾する。1の坏と比較すると浅い。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
77住-3	坏 土師器	- (13.0) -	覆土	丸底の坏である。口縁部は短く内傾する。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/3④多くの赤色粒を含む
77住-4 111	坏 土師器	3.1 11.0 -	床面+20	丸底の坏である。口縁部は短く少し内傾する。浅く小さな坏である。底部と体部との境は、へラ削りの違いにより区分できる。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を多く含む
77住-5	坏 土師器	- (14.4) -	覆土	平底に近い丸底の坏と思われる。内側体部へ口縁部に放射状暗文。	①褐色②酸化③口縁部へ体部1/3④少量の赤色粒を含む
77住-6 111	蓋 須恵器	3.8 10.1 -	床面+14	口径の小さな蓋である。扁平な宝珠つまみを持つ。カエリは低く小さく、わずかに口縁部より下方に出る。上面に蹄灰による自然釉が付着。	①灰色②還元焼成③ほぼ完形④多くの石英と長石粒を含む。高温により黒色鉱物が気泡化している
77住-7 111	台付壺 土師器	- (12.2) -	床面+18	最大径を胴中央部に持つ台付壺である。台はていねいに貼付けてへラ削りで整形。口縁部は外反。多く使用されており、重量感のある壁である。	①赤褐色②酸化③台部以外4/5-台部下半④1~2mmの砂粒を大量に含む
77住-8 148	鏝	長さ4.5 幅2.2 厚さ0.2 重量6.8g		鏝の刃の一部である。全体にひどく酸化が進んでいる。⑤覆土	

78号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版34 遺物写真図版111・112

位置 Ⅲ区北側に位置し、M-29・30、N-30グリッドに属する。

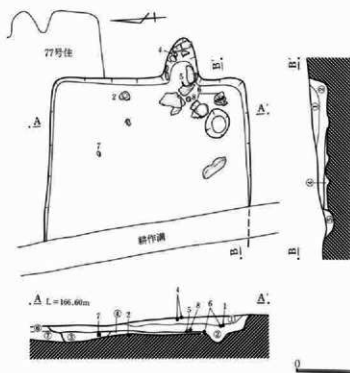
概要 77号住居と重複しており、さらに77号住居は76号住居と76号住居は75号住居と重複している。いずれも奈良時代に属する住居であり、新旧関係は77→76→75号住居、77→78号住居の順である。77号住居の南側部分の床面を少し掘り込んで造られている。住居西端の床面と壁面は残存していなかった。

構造 ロームとロームブロックで造られた軟質である。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北3.2mである。壁高は東壁面で25cmで、貯蔵穴は直径40cmで深さ25cmである。

遺物 竈周辺部分を中心として残存している床面や覆土中より、多くの土師器の甕や坏の破片と少量の須恵

第3章 検出された遺構と遺物



器環の完形品が出土した。滑石製の紡錘車の未製品と装身具と思われる製品の出土は注目されるところである。

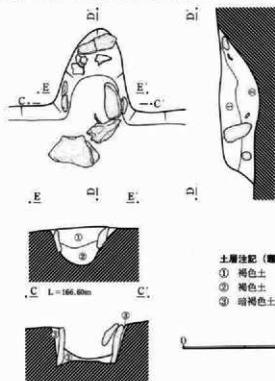
土層法記 (住層)

- ① 褐色土 少量のローム粒子を多く含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と1cm大のロームブロックを多く含む。
- ③ 褐色土 1～3mm程のローム粒子を多く含む。粘床で固くしまる。
- ④ 暗褐色土 5cm程のロームブロックを含み、粘床で固くしまる。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子とA軽石を含む (6号覆層土)。
- ⑥ 77号住居覆土
- ⑦ 77号住居床下覆土

第225図 78号住居跡実測図

78号住居跡 (竈)

位置 住居東壁やや南側に位置し、一部壁面を掘り込んで造られている。燃烧部の多くは床面上に位置する。
構造 両側の焚口部に袖石が据え付けられた状態で出土し、焚口手前の床面に天井石が2つに割れた状態で



出土した。右袖石にはさらに1個の石が添えられていた。燃烧部奥壁やや外側に煙道部天井石が燃烧部に少し落ち込んだ状態で出土した。このような状態からこの竈は焚口部分と煙道部の一部に石を用い、他の部分はロームとロームブロックを用いて造られていたものと思われる。覆土中より少量の焼土ブロックが検出された。

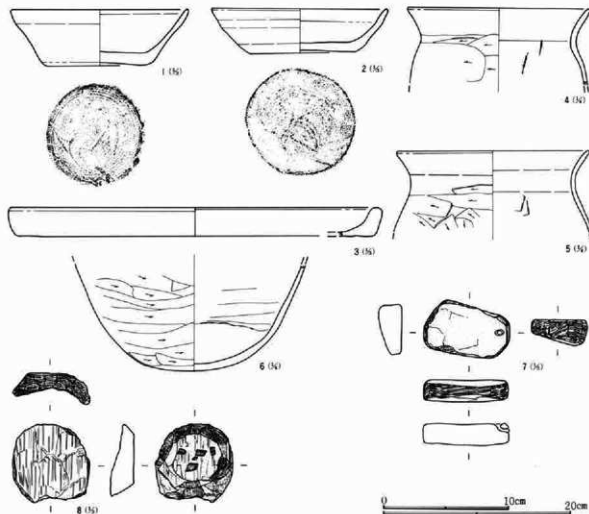
規模 煙道方向70cm、両袖方向60cmである。

遺物 土師器の甕の破片が多く出土した。

土層法記 (竈)

- ① 褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子と0.5～1cm程の焼土ブロック・焼土粒子と炭を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。

第226図 78号住居跡竈実測図



第227図 78号住居跡出土遺物実測図

78号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第227図)

遺物番号 図版番号	器形及 種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特徴	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
78住-1 111	坏 須恵器	4.4 14.2 8.0 床面+8	底部の器内が特に厚い。体部→口縁部は直線的に立ち上がる。底部右回転糸切痕、体部下端回転ヘラ削り。(底部周辺にヘラ削りはなし)。	①灰白色②還元③ほぼ完形④密で多くの1mm以下の細かい長石粒を含む
78住-2 111	坏 須恵器	3.6 14.2 8.4 床面-4	底部が大きい平底の坏である。体部→口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。底部右回転糸切後底部周辺及び体部下端回転ヘラ削り。	①灰白色②還元③完形④密で多くの1mm以下の細かい石と長石粒を含む
78住-3 111	釜 須恵土	(3.3)(30.0)(28.6) 覆土	浅く口径の大きな器であり、用途や名称及び時代不明。一応整として扱った。底面砂底か?	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の細砂粒を多く含む
78住-4 111	甕 土師器	— (19.6) — カマド内+20	器内の薄い甕であり、口縁部が長い。肩部右→左横方向へ削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③口縁部→胴上4/5④1mm以下の細砂粒を多く含む
78住-5 111	甕 土師器	— (22.6) — 床面	器内の薄い甕であり、口縁部が長い。肩部右→左横方向へ削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③口縁→胴上2/3④1mm以下の細砂粒を多く含む
78住-6 112	壺 土師器	— — — 床面	丸胴の壺の下半部である。内面に胴部と底部との接合痕が明瞭に残る。外面横方向へ削り。	①におい褐色②酸化③胴下半4/5④1mm前後の砂粒を多く含む
78住-7 112	装身具 ?	長さ4.5 幅6.8 厚さ1.7 重量90g 床面-2	名称及び用途は不明であるが、装身具の1種と思われる。平な表面は自然面。側面は寛版削り、部分的に彫取り。頂部付近に天井と側面を結ぶ穿孔あり。	①暗緑灰色③完形④滑石片岩
78住-8 112	紡錘車	長さ6.0 幅6.1 厚さ1.9 重量100g 床面+4	紡錘車の未製品である。広面の中央部が凹状を呈し割れている。側面にノミによる加工痕が多数確認できる。天井部に数個のノミによる加工痕。	①緑灰色③完形④滑石片岩⑦と比較すると軟質

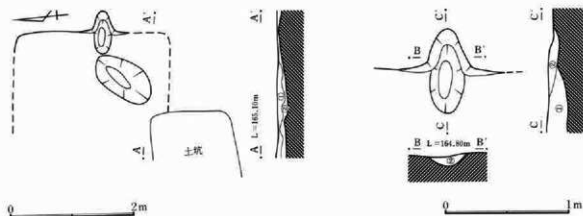
79号住居跡及び竈 (時代不明) 遺構写真図版34

位置 Ⅲ区北側の取り付け道路部に位置し、J-27グリットに属する。

概要 耕作により大部分が攪乱され、床下のみが残存である。さらに西側部分は調査範囲外であり、南東部分は攪乱土坑により壊されていた。竈もわずかに底部が残っていただけで焼土粒子もほとんど検出できなかった。

構造及び規模不明

遺物 全く出土していない。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 1~3mm程度のローム粒子を多く含む。
- ② 黄褐色土 地山のローム層。

土層注記 (竈)

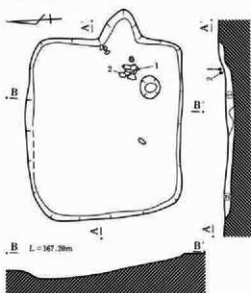
- ① 暗褐色土 1~3mm程度のローム粒子を多く含む、焼土粒子も若干含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。

第228図 79号住居跡及び竈実測図

80号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版35 遺物写真図版112

位置 Ⅲ区中央部やや北側に位置し、72号住居の北東約3mでM-27グリットに属する。

概要 耕作により大部分の床面が削り取られ、床面下だけの調査であった。



構造 床面下はロームが主体であった。竈南西部に小穴が掘られていた。柱穴は掘られていなかった。

規模 確実な規模は不明であるが、現状で東西2.85m、南北2.50mである。

遺物 竈周辺を中心に土師器の壺と須恵器の環と壺の破片が少量出土した。

土層注記 (住居)

- ① 黄褐色土 ローム全体であり、少量の暗褐色土を混入。
- ② 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第229図 80号住居跡実測図

80号住居跡（竪）

位置 住居東壁の壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くが床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。

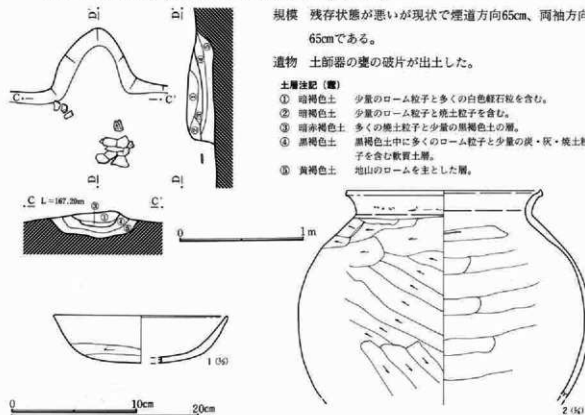
構造 残存状態が悪いので詳しい内容は不明であるが、ローム粒子とロームブロックを主体とした土で造られていたと思われる。覆土中より多くの焼土粒子が検出された。

規模 残存状態が悪いが現状で煙道方向65cm、両袖方向65cmである。

遺物 土師器の甕の破片が出土した。

土層注記（竪）

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の黒褐色土の層。
- ④ 黒褐色土 黒褐色土中に多くのローム粒子と少量の炭・灰・炭土粒子を含む軟質土層。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第230図 80号住居跡竪及び出土遺物実測図

80号住居跡 出土遺物観察表（挿図番号第230図）

遺物番号 図版番号	器形及び 類別	器高・口径・直径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
80住-1	坏 土師器	(3.8)(14.0)(9.2) 床面+14	器形的に暗文を持つ坏に近いが、器表面が広く確認できない。胎土も異質である。	①褐色②酸化③口縁～底部周辺1/3 ④1mm前後の大きな砂粒を多く含む
80住-2 112	甕 土師器	— (21.0) — 床面+14	丸胴の甕である。口縁部は外傾し上端が上方につまり上げられている。胴上部→左方向へ傾り、下部左→右方向へ傾り。	①褐色②酸化③口縁部1/4・胴部1/3④1mm前後の大きな砂粒を多く含む

81号住居跡（古墳時代） 遺構写真図版35 遺物写真図版112・113

位置 Ⅲ区中央部北側に位置し、72号住居の北約4mでL-28グリットに属する。

概要 すべての壁面が残存しているため残りの良い住居の1つである。

構造 床面はロームブロックを主とし黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は2.0×2.5mの長方形に配置され4本確認された。貯蔵穴は掘られていなかった。周溝が北側壁面以外の壁面下で確認された。

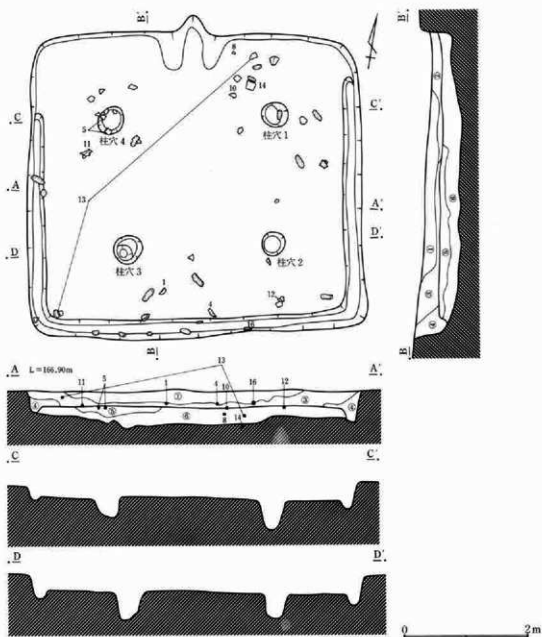
規模 東西5.40m、南北4.90mである。壁高は残りの良い南壁部分で44cmである。周溝は幅30cm前後で深さは床面から12～23cmである。柱穴1は直径40cm深さ57cm、柱穴2は直径35cm深さ44cm、柱穴3は直径

第3章 検出された遺構と遺物

45cm深さ40cm、柱穴4は直径40cm深さ37cmである。

遺物 床面や覆土中より、多くの土師器や坏や甕及び磁石が出土した。

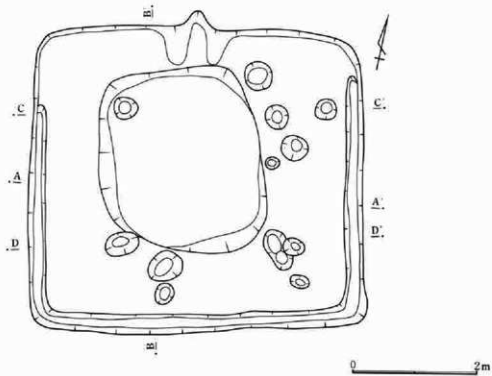
床下 床面中央部に2.6×2.9mの長方形を呈し、床面からの深さ30cm前後の大きな掘り込みが検出された。他に小穴も検出されたが用途は不明である。



土層注記(住層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量の3mm前後のロームブロックと粘土・焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ④ 暗黄褐色土 多くのローム粒子と3cm前後のロームブロックを含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第231図 81号住居跡実測図



第232図 81号住居跡床下実測図

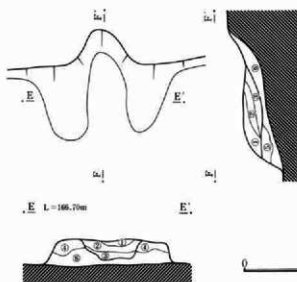
81号住居跡 (竈)

位置 住居北壁中央部に造られている。燃烧部の大部分は床面に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 ロームブロックと灰黄褐色粘質土を主体とした暗褐色土で構築されており、芯材としての石は使用されていなかった。燃烧部床面に多くの焼土粒子が確認され、奥壁部分は焼けて焼土化していた。

規模 煙道方向90cm、両袖方向95cmである。

遺物 出土は認められなかった。

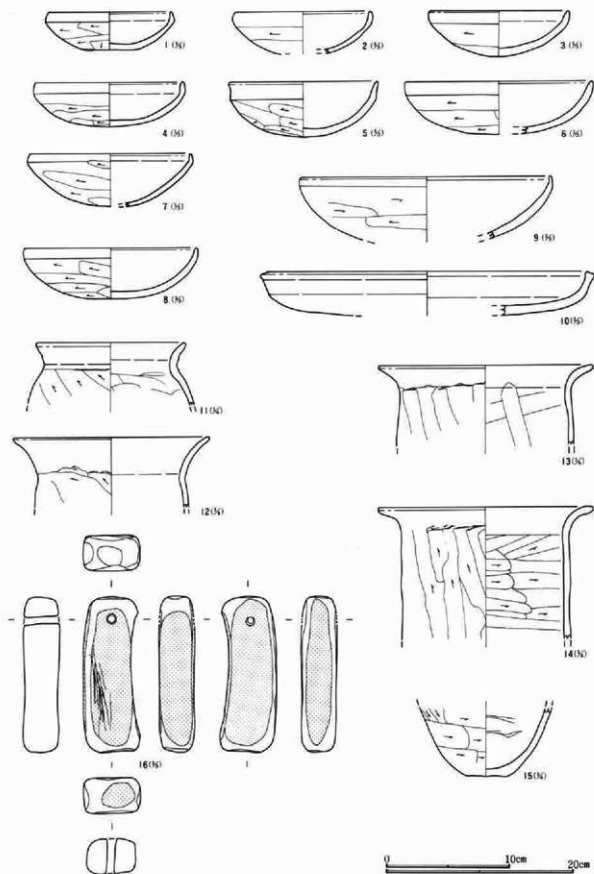


土層注記 (竈)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの灰黄褐色粘土を含む。
- ② 暗褐色土 少量の灰黄褐色粘土と焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと灰黄褐色粘質土を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子と灰黄褐色粘土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第233図 81号住居跡竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第234図 81号住居跡出土遺物実測図

81号住居跡 出土遺物観察表 (拝印番号第234図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
81住-1 112	土師器 坏	3.0 (10.0) - 床面+5	底部が丸く、口縁部は短く強く内傾する。底部へ体部へ傾り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
81住-2 112	土師器 坏	- (11.0) - 覆土	器内の薄い底部の丸い底である。口縁部はわずかに内傾しつつ直立する。底部へ傾り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
81住-3 112	土師器 坏	(3.6) (11.2) - 覆土	器内のやや厚い丸底の坏である。口縁部は短く少し外傾する。底部へ傾り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
81住-4 112	土師器 坏	3.5 11.8 - 床面+5	器内のやや厚い丸底の坏である。口縁部は短くやや内傾する。底部へ傾り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ整形。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
81住-5 112	土師器 坏	4.4 12.0 - 床面	丸底の坏であり、底部と口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部上半が少し外反する。体部へ傾り、口縁部横ナデ、内面ナデ整形。	①ふい褐色②酸化③1/2④1mm前後の砂粒を多く含む
81住-6	土師器 坏	(4.2) (15.0) - 覆土	丸底の坏である。口縁部は短い。底部へ傾り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	①ふい褐色②酸化③1/5④1mm以下の赤色粒を多く含む
81住-7	土師器 坏	(4.2) (13.0) - 覆土	丸底の坏である。口縁部は短く内傾する。底部へ傾り、内面ナデ。ていねいな作りである。	①ふい褐色②酸化③1/4④1mm以下の細粒を少量含む
81住-8	土師器 坏	4.0 (13.8) - 床面-6	丸底の坏である。口縁部は短い。底部へ傾り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の細粒を少量含む
81住-9 112	土師器 坏	- (20.0) - 覆土	口径が大きく、器高の深い坏である。口縁部は短く内傾する。底部へ傾り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の細粒を少量含む
81住-10 112	須恵器 甕	- (27.0) - 床面	高い高台が付くと思われる。口縁部は幅広く中央部が少し凹状を呈する。底部へ傾り、口縁部横ナデ。	①新面青灰色・表面灰色②還元焼成③1/4④多くの長石粒を含む
81住-11 112	土師器 甕	- (16.0) - 床面+2	器内の厚い口径の小さな甕である。頸部に幅広い工具を用いて凹状の沈線を持つ、外面へ傾り。	①ふい赤褐色②酸化③1/3④1mm前後の砂粒を多く含む
81住-12	土師器 甕	- (21.0) - 床面	口縁部が幅広く、なだらかに外反する。胴部はへらにより右一左上に削り落くなっている。	①褐色②酸化③口縁1/3・胴上部1/6④赤色粒を少量含む
81住-13 112	土師器 甕	- (23.0) - 床面+14	口縁部に最大径を持つ。胴部は底部から口縁部に向かう縦方向へ傾り、口縁部横ナデ。	①ふい赤褐色②酸化③2/5④1~2mmの砂粒を多く含む
81住-14	土師器 甕	- (23.0) - 床面-28	口縁部に最大径を持つ長胴の甕である。胴部は底部から口縁部に向かう縦方向へ傾り。	①ふい褐色②酸化③1/4④1~2mmの砂粒を多く含む
81住-15	土師器 甕	- - 4.6 覆土	底部の器内は薄い。外面ていねいなへら削り、内面ナデ整形。	①ふい褐色②酸化③2/3④1~2mmの砂粒を多く含む
81住-16 113	磁石	長さ12.3 幅4.6 厚さ2.9 重量264g	四側面が磁石として使用されている。特に狭い側面が多く使用されている。広い側面に幅1mm以下の稜線を持つ。	①灰白色②亮形③塊状岩④床面+6

82号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版35 遺物写真図版113・148

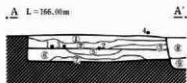
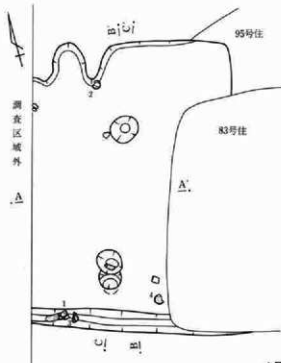
位置 Ⅲ区北側の取り付け道路部に位置し、79号住居の南約6mでK-27グリットに属する。

概要 古墳時代の95号住居と奈良時代の83号住居の2軒と重複している。さらに83・95号住居は他の住居と重なり合っている。82号住居は12軒が関係する住居の密集地帯の中の一軒である。同じ奈良時代に属する83号住居は、82号住居の床面を掘り込んでいるため83号住居の方が新しい。

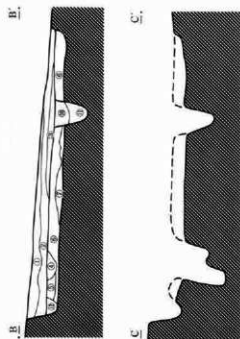
構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。床面に3つの小穴が掘られており、柱穴の可能性もあるが位置的に不自然であるため用途は不明である。貯蔵穴は掘られていなかった。南壁内側に周溝が掘られていた。

規模 東西不明、南北4.65mである。壁高は最も残りの良い南壁で34cmである。周溝は幅10~15cm床面からの深さ14cm前後であった。

遺物 少量の土師器の甕や坏と須恵器の坏や蓋が出土した。特に注目される遺物として紡錘車の未製品及び紡錘車作成段階で出来た17個体の剝片を上げることができる。



第235図 82号住居跡実測図



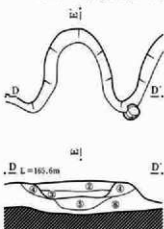
土層法記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗黄褐色土 多くの焼土粒子と少量の粘土と焼土粒子を含む。
- ④ 暗褐色土 ロームブロックを主とした層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子と粘土と少量の焼土粒子を含む。
- ⑥ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑧ 83号住居層土
- ⑨ 83号住居床下覆土
- ⑩ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の暗褐色土を含む。
- ⑪ 暗黄褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを主とした層。
- ⑫ 褐色土 ローム粒子を主とした層。

82号住居跡 (竈)

位置 住居北壁の壁面を掘り込んで造られている。残りの悪い竈であるが、焚口部分と燃焼部の多くが床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 残存状態が悪いので詳しい内容は不明であるが、ローム粒子とロームブロックを主体とした土で造られていた。覆土中より少量の焼土粒子が検出された。



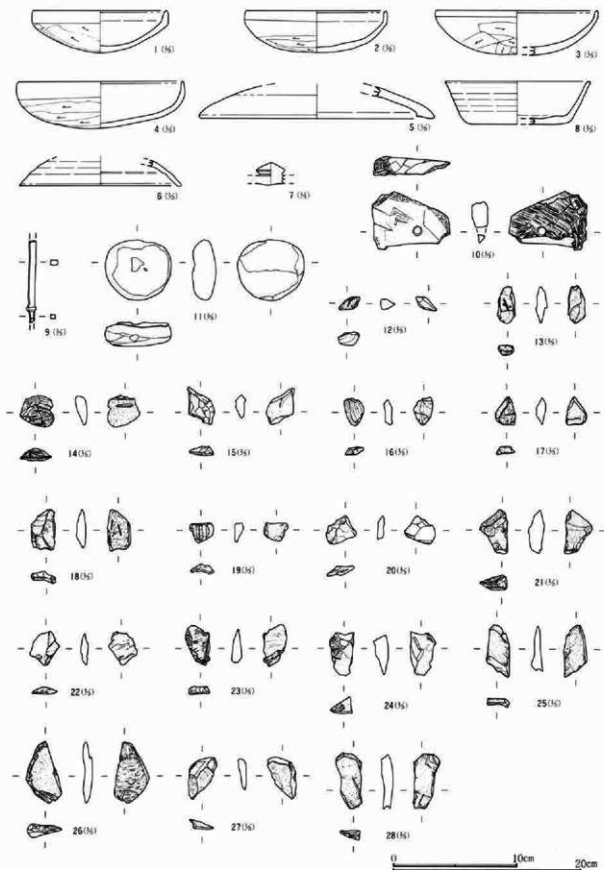
規模 標道方向65cm、両袖方向70cmである。

遺物 出土は認められなかった。

土層法記 (竈)

- ① 暗褐色土 多くの焼土粒子と粘土を含む。
- ② 暗褐色土 少量の焼土粒子と粘土を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのロームと少量の焼土粒子を含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の粘土を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子と炭化物を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第236図 82号住居跡竈実測図



237図 82号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

82号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第237図)

遺物番号 図取番号	器形及び 類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
82住-1 113	坏 土師器	(3.3)(10.8) — 床面+2	底部の丸い小さい坏である。口縁部は短く直立する。底部一定方向へ削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①橙色②酸化③1/2④1mm以下の細粒を少量含む
82住-2 113	坏 土師器	3.3 11.3 — 床面	底部の丸い小さい坏である。口縁部は短く少し内傾する。底部へ削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①橙色②酸化③完形④1mm以下の細粒を少量含む
82住-3	坏 土師器	(3.5)(13.0) — 床面+4	底部の丸い坏である。口縁部は短い。外面単位の細いへら削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①橙色②酸化③1/4④1mm以下の細粒を少量含む
82住-4 113	坏 土師器	3.8 13.4 — 床面+25	器内の薄い坏である。前の3つの坏と異なりやや箱形を呈する。口縁部は幅広く直立する。底部へ削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①橙色②酸化③2/3④1mm以下の細粒を少量含む
82住-5	蓋 須恵器	— (19.0) — 覆土	細く小さなカエリを持つ。天井部右回転へ削り、口縁部横ナデ。	①灰白色②還元③1/6④多くの石英と長石粒を含む
82住-6	蓋 須恵器	— (13.0) — 覆土	受部を持つ形の蓋と思われる。口縁部内外面横ナデ、右回転による整形。	①灰白色②還元③1/4④少量の石英と長石粒を含む
82住-7	蓋 須恵器	— — — 覆土	蓋のつまみ部と天井の一部破片である。ていねいに整形している。	①灰白色②還元③つまみ④少量の石英と長石粒を含む
82住-8	坏 須恵器	3.4 (11.6) (8.0) 覆土	器内が薄い小さな坏である。底部はへら切りと思われ痕跡が残る。	①灰白色②還元③1/5④石英と長石粒の細粒を含む
82住-9 148	鉄	長さ6.5 幅0.5 厚さ0.4 重量4.5g	鉄線の茎・環・頸部の破片である。錆化が少なく残りは良好である。内面が中空を呈している。⑤覆土	
82住-10 113	紡錘車 削片?	長さ4.6 幅6.0 厚さ1.3 重量40g	紡錘車の未製品の破片と思われる。荒削りを少し行なった段階で中心に穿孔し、荒削り再開後破損。	①暗緑灰色②破片③滑石片④覆土 孔径0.7
82住-11 113	紡錘車 ?	長さ1.9 幅5.3 厚さ1.9 重量51.0g	紡錘車に少し似ているが、台形を呈していないことや、中心に穿孔がないこと等より、他の製品か。	①明黄褐色②完形③砂④覆土
82住-12 113	紡錘車 削片?	長さ0.9 幅1.2 厚さ0.9 重量1.6g	小破片であるが、紡錘車製作段階での削片と思われる。ノミの打痕が2箇所認められる。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-13 113	紡錘車 削片?	長さ2.9 幅1.3 厚さ0.8 重量2.0g	打痕が1箇所認められる。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-14 113	紡錘車 削片?	長さ2.5 幅2.4 厚さ0.9 重量5.0g	表面に5箇所、裏面に1箇所のノミの打痕あり。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-15 113	紡錘車 削片?	長さ2.1 幅2.1 厚さ0.8 重量4.0g	表面に2箇所のノミによる削痕あり。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-16 113	紡錘車 削片?	長さ2.2 幅1.4 厚さ0.5 重量0.2g	裏面に打痕や削り痕は認められない。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-17 113	紡錘車 削片?	長さ2.1 幅1.4 厚さ0.6 重量1.0g	側面に2箇所ノミによる打痕あり。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-18 113	紡錘車 削片?	長さ3.3 幅2.0 厚さ0.7 重量5.0g	裏面に2箇所ノミによる打痕あり。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-19 113	紡錘車 削片?	長さ1.6 幅2.1 厚さ0.7 重量1.0g	側面に3箇所ノミによる打痕あり。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-20 113	紡錘車 削片?	長さ1.8 幅2.3 厚さ0.6 重量0.5g	表面に打痕や削り痕は認められない。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-21 113	紡錘車 削片?	長さ3.5 幅2.1 厚さ1.3 重量5.0g	表面に3箇所のノミによる削り痕あり。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-22 113	紡錘車 削片?	長さ2.5 幅2.0 厚さ0.5 重量1.5g	表面に打痕や削り痕は認められない。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-23 113	紡錘車 削片?	長さ2.6 幅1.8 厚さ0.7 重量2.0g	表面に1箇所ノミによる打痕と2箇所削り痕が認められる。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-24 113	紡錘車 削片?	長さ3.2 幅2.0 厚さ1.1 重量5.0g	表面に打痕や削り痕は認められない。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-25 113	紡錘車 削片?	長さ3.6 幅1.8 厚さ0.8 重量4.0g	表面に打痕や削り痕は認められない。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-26 113	紡錘車 削片?	長さ4.8 幅2.5 厚さ1.1 重量10.0g	紡錘車の表面の一部が剥離している。肩部に横方向のノミにより削り痕多くあり。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-27 113	紡錘車 削片?	長さ2.9 幅2.0 厚さ0.7 重量4.5g	表面に打痕や削り痕は認められない。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土
82住-28 113	紡錘車	長さ4.3 幅2.0 厚さ0.9 重量6.0g	上部側面にノミによる削り痕あり。	①暗緑灰色②小破片③滑石片④覆土



82・83・90～99号住居跡重複関係概略図

古墳時代	95・99
奈良時代	82・83・90・93 94・96・97・98
平安時代	91・92
新旧関係	95→90 95→82→94→83→97 99→98→96→97→92 93→92→91

83号住居跡（奈良時代） 遺構写真図版36 遺物写真図版113

位置 Ⅲ区北側の取り付け道路部に位置し、79号住居の南約7mでK-27、L-27グリットに属する。

概要 生活道路の下に位置するため同時に完掘することができなかった。はじめに西側を調査し埋めもどし、道路を調査終了部分に移動し、東側の調査を行った。古墳時代の95号住居及び奈良時代の82・94・97号住居と重複している。12軒が関係する住居の密集地帯の中の1軒であり、83号住居は94号住居の西側床面を掘り込み、97号住居により竈上面を削り取られている。このような関係から同じ奈良時代に属する82・94・97号住居との新旧関係は82→83号住居、94→83→97号住居の順となる。竈周辺の床面上に大量の焼土が散乱していた。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。南壁内側に周溝が掘られていた。

規模 東西3.90m、南北3.90mである。壁高は最も残りの良い南壁で52cmである。周溝は幅30cm床面からの深さ10cm前後であった。

遺物 竈周辺部分を中心として、暗文を持つ土師器の甕や坏と須恵器の坏等が出土した。

床下 竈手前に3個の床下土坑が検出された。規模は南から1.1×1.1m深さ15cm、1.0×1.4m深さ25cm、0.9×0.9m深さ26cmであった。北東床下面より40×70cm高さ6cmの粘土の塊が検出された。

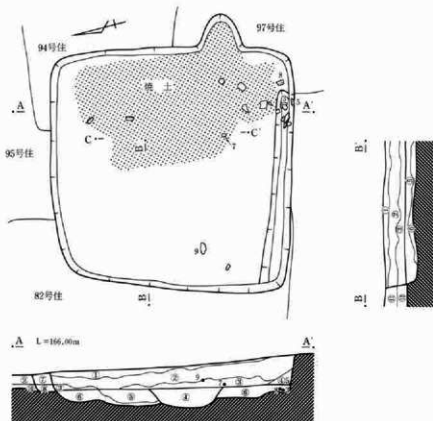
83号住居跡（竈）

位置 住居東壁南寄りの壁面を掘り込んで造られている。竈の大部分が97号住居により削り取られているため多くの部分は不明である。

構造 残存状態が悪いため詳しい内容は不明であるが、ローム粒子とロームブロックを主体とした土で造られていた。覆土中より少量の焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向推定50cm、両袖方向65cmである。

遺物 出土は認められなかった。

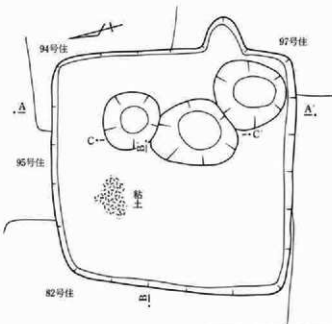


土層注記 (住居)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
- ③ 暗黄褐色土 多くのローム小ブロックと少量の炭化物と焼土粒子を含む。
- ④ 暗黄褐色土 5mm前後の焼土粒子・ローム小ブロック・粘土を多く含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の焼土

粒子を含む。

- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 94号住居覆土
- ⑧ 94号住居床下覆土
- ⑨ 95号住居覆土
- ⑩ 95号住居床下覆土
- ⑪ 82号住居覆土
- ⑫ 82号住居床下覆土

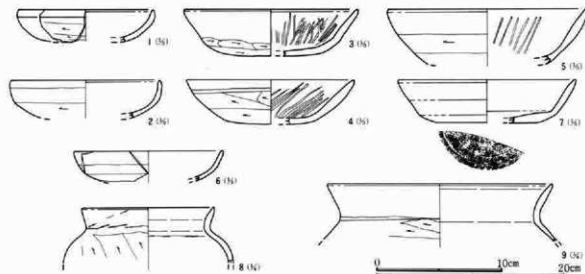


土層注記 (床下土坑)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子と少量の粘土を含む。
- ② 暗黄褐色土 多くのロームブロックと少量の焼土粒子を含む。

第238図 83号住居跡及び床下実測図

0 2m



第239図 83号住居跡出土遺物実測図

83号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第239図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
83住-1	杯 土師器	— (11.0) — 覆土	浅く小さな杯であり丸底を呈する。口縁部は短く内傾する。底部へう削り、口縁部横ナズ。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の細粒を少量含む
83住-2	杯 土師器	— (12.0) — 覆土	底部の丸い杯である。底部へう削り、体部ナズ、口縁部横ナズ、内面がいわいナズ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の細粒を多く含む
83住-3 113	土師器 床面-8	3.7 (14.0) (5.0)	底部はほぼ平である。体部中央が少し内厚となる。底部へう削り、口縁部横ナズ、内面に多くの増文があり一部交差している。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
83住-4	杯 土師器	3.5 (13.4) (6.8) 覆土	底部はほぼ平である。体部中央が少し内厚となっている。底部へう削り、口縁部上方までへう削り、口縁部横ナズ、内面に多くの増文。	①褐色②酸化③小破片④赤色粒を多く含む
83住-5	杯 土師器	— (16.0) — 床面	体部中央が少し内厚になっている。内面に消えかかった増文が認められる。	①褐色②酸化③口縁へ体部1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
83住-6	杯 土師器	— (12.0) — 覆土	2の杯に近い。底部へう削り、体部ナズ、口縁部横ナズ、内面がいわいナズ。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の細粒を多く含む
83住-7 113	杯 須恵器	3.5 (14.4) — 床面+2	底部及び底部周辺右回転へう削りによりいわいに仕上げている。体部へ口縁部右回転によるナズ整形。	①灰白色②還元③2/5④1mm以下の細粒を少量含む
83住-8 113	甕 土師器	— (14.0) — 床面-5	胴部に最大径を持つ甕である。肩部右下→左上方向へう削り、口縁部横ナズ。	①にぶい褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
83住-9	甕 土師器	— (24.0) — 床面+8	胴上部に最大径を持つ甕と思われる。口縁部が幅広い。肩部右→左方向へう削りにより器肉を薄く削る。	①褐色②酸化③口縁部1/4胴部小破片④1mm以下の細粒を多く含む

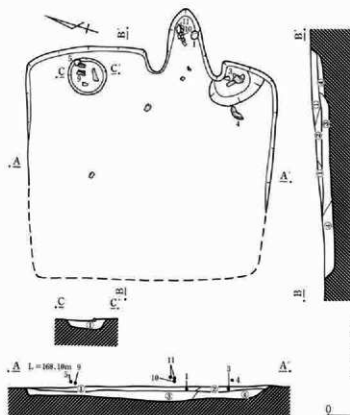
84号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版36 遺物写真図版113

位置 IV区西北部に位置し、69号住居の西約35mでP-38グリットに属する。

概要 84・85号住居の立地する4区北側はロームの堆積が薄く住居の上にはロームを掘り込んでいるが床面付近はロームの下層の灰黄褐色粘質土層を掘り込んで住居が造られている。住居西側は床下だけの残存であった。東側も竈周辺部分の残りは良いが北側はほとんど残っていない。

構造 床面は、ロームを主とし多くの灰黄褐色粘質土が混入した土で造られている。竈の右側に貯蔵穴が、竈左側に貯蔵穴に似た小土坑が検出された。柱穴や明瞭な床下土坑は掘られていなかった。

規模 東西推定3.65m、南北4.05mである。壁高は最も残りの良い東壁竈周辺で12cmである。竈右側の貯蔵



第240図 84号住居跡実測図

穴は径60~70cmのやや楕円形を呈し、深さ16cmであり、竈左側の小土坑は径60cm深さ10cmである。

遺物 床面や覆土中より、土師器の坏や壺と須恵器の坏や蓋等が出土した。竈右側の貯蔵穴から土師器壺口縁部と須恵器壺胴部の小破片が、左側の小土坑から土師器壺の胴部と口縁部の小破片が出土した。

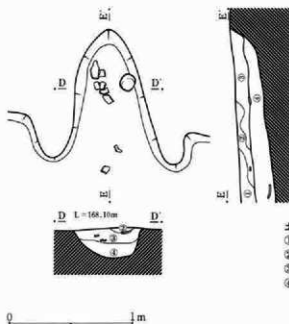
土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子和白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子和少量の粘土を含む。
- ③ 褐色土 ロームブロックと焼土粒子を多く含む。
- ④ 灰褐色土 ロームと灰黄褐色粘質土を多く含む。

84号住居跡 (竈)

位置 住居東壁やや南寄りの壁面を掘り込んで造られており、燃焼部は床面から壁面部にかけて位置する。

竈上面の大部分が残っていないため多くの部分が不明である。



第241図 84号住居跡竈実測図

構造 ロームと灰黄褐色粘質土の混入した土で多くの部分が造られており、石は全く検出されなかった。多くの粘土が竈構築材として用いられているため竈内全体から多くの焼土が検出された。

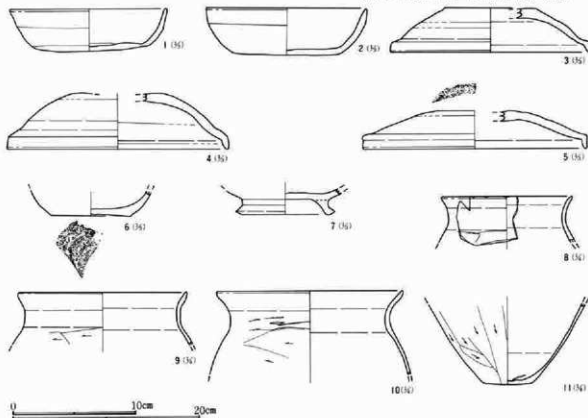
規模 煙道方向110cm、両袖方向65cmである。

遺物 多くの土師器壺の破片が出土した。

土層注記 (竈)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子和多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子和焼土粒を含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子和焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 褐色土 多くのロームと焼土小ブロック・焼土粒子和炭を含む。

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第242図 84号住居跡出土遺物実測図

84号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第242図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
84住-1 113	坏 土師器	3.4 12.7 9.5 カマド内+10	ほぼ平底を呈する坏である。底部外面へう削りの痕跡を残すが明瞭でない。体部ナデ、口縁部横ナデ、内面ナデ、全体にゆがんでいる。	①灰色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の細粒を多く含む
84住-2	坏 土師器	3.7 (13.0) (8.4) 覆土	ほぼ平底を呈する坏である。底部外面へう削りの痕跡をわずかに残す。体部へう削りか?。内面に暗文と思われる痕跡がわずかに残るが明瞭でない。	①黄褐色②酸化③1/5④1mm以下の細粒を多く含む
84住-3	蓋 須恵器	(3.5) (16.0) - 床面+2	器高の高い蓋である。口縁部へう削り、天井部へう削り、天井部の器内が厚い。	①灰色②還元③口縁部1/10、体部へう削り1/3④1mm以下の石英と長石粒多く含む
84住-4 113	蓋 須恵器	- (17.8) - 床面+12	口径が大きく器高も高い蓋である。口縁部へう削り、天井部へう削り。	①灰白色②還元③1/2④1mm以下の石英粒を大量に含む
84住-5	蓋 須恵器	- (17.8) - 床面+10	3の蓋に近いが器高が低い。口縁部へう削り、天井部へう削り、天井中央部に糸切痕が残る。	①灰色②還元③1/5④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
84住-6	坏 須恵器	- - (6.4) カマド覆土	底部に糸切痕が残る。	①灰白色②還元③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
84住-7	坑 須恵器	- - (7.0) 覆土	高台は坑底部周辺より内側に付く。高台は高く一度下方に延びた後に外側に開く、端部のつくりはいいいである。	①灰色②還元③小破片④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
84住-8	壺 土師器	- (14.0) - 覆土	小型の壺の口縁部小破片である。表面の大部分が磨耗している。肩部左へう削り。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の細粒を多く含む
84住-9	壺 土師器	- (18.0) - 床面+8	器内の深い「コ」の字状口縁の壺である。肩部右へう削り、内面ナデ。	①褐色②酸化③口縁へう削り1/4④1mm以下の白色粒を多く含む
84住-10	壺 土師器	- (20.0) - 床面+14	器内の深い「コ」の字状口縁の壺である。肩部右へう削り。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の白色粒を多く含む
84住-11	壺 土師器	- - 5.0 カマド内+5	胴へう削り、底部は小さく器内が薄い。内面はいいいなナデ。	①褐色②酸化③4/5④1mm以下の砂粒を多く含む

85号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版36 遺物写真図版114

位置 IV区北西部に位置し、84号住居の東約6mでP-37グリットに属する。

概要 竈周辺のみの残存である。また北側は竈川用水のため調査できなかった。

構造 床面は、ロームと灰黄褐色粘質土の混入した土で多くの部分が造られていたが残りは悪かった。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西推定2.2m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い南東壁コーナー部分で10cmである。

遺物 土師器の妻や環の破片が少量出土した。

85号住居跡 (竈)

位置 住居東壁に造られている。燃焼部の大部分と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

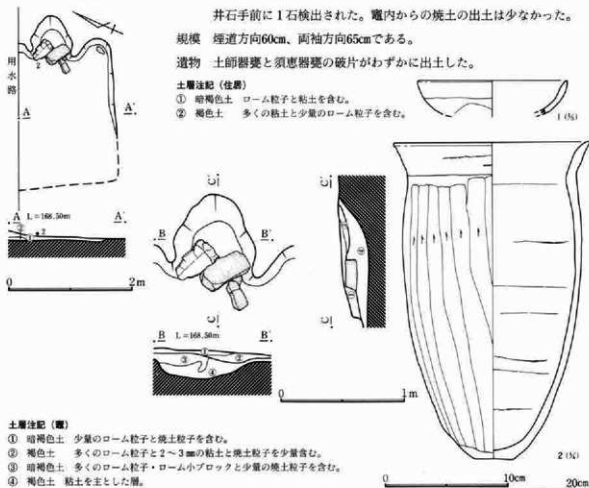
構造 ロームブロックと灰黄褐色粘質土を主体とした褐色土で造られていた。焚口部分に天井石として使われたと思われる大きな石が検出された。また右袖部分の袖石として使われたと思われる細長い石が天井石手前に1石検出された。竈内からの灰土の出土は少なかった。

規模 煙道方向60cm、両袖方向65cmである。

遺物 土師器妻と須恵器甕の破片がわずかに出土した。

土層法記 (住居)

- ① 暗褐色土 ローム粒子と粘土を含む。
- ② 褐色土 多くの粘土と少量のローム粒子を含む。



土層法記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子と2~3mmの粘土と焼土粒子を少量含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ④ 褐色土 粘土を主とした層。

第243図 85号住居跡・竈及び出土遺物実測図

85号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第243図)

遺物番号 図版番号	器形及び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色②焼成③残存④胎土⑤備考
85住-1	環 土師器	- (12.0) - カマド覆土	底部の丸い環である。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
85住-2 114	甕 土師器	33.5 (21.0) (4.0) カマド内+8	口縁部に最大径を持つ長胴の甕である。多くの砂粒を含み器表面が荒れている。底部→口縁部に向かうへう削り、口縁部横ナデ、内面横ナデ。	①明赤褐色土②酸化③2/3④1mm前後の砂粒を多く、1~2mmの長石粒を多く含む

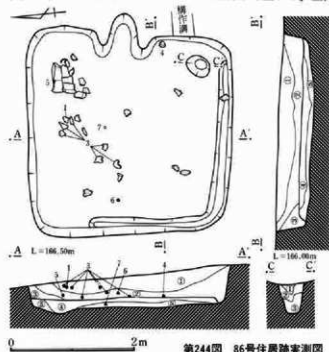
86号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版36・37 遺物写真図版114・148

位置 Ⅲ区北東部に位置し、81号住居の東約21mでL-25グリッドに属する。

概要 すべての壁面が残存している残りの良い住居の1つである。

構造 床面は、ロームブロックを主とし暗褐色土が混入した土で踏み固めてあった。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが柱穴は掘られていなかった。周溝が南側と西側の壁面下で確認された。

規模 東西3.3m、南北3.3mで、ほぼ正方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁部分で49cmである。貯蔵



第244図 86号住居跡実測図

穴は直径35cmの円形を呈し、深さ50cmである。周溝は幅28cm前後で深さは床面から7cm前後である。

遺物 少量の土師器の甕や坏が出土した。特に注目される遺物として、金メッキされた耳環が対をなして2個出土していることがあげられる。

土層注記 (住居)

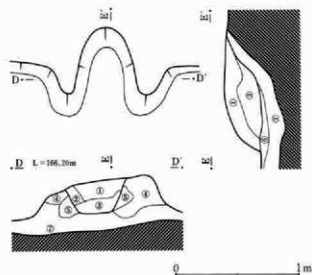
- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子とロームブロックを含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

土層注記 (貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 1cm前後の大きなロームブロックを含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ③ 褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを主とする層。

86号住居跡 (竈)

位置 住居東壁やや北寄りに造られている。焚口部分と燃焼部の大部分は床面に位置し、煙道部が壁面に掘り込んで造られている。



第245図 86号住居跡竈実測図

構造 ロームとロームブロックと少量の暗褐色土で造られており、石は使用されていなかった。燃焼部床面に多くの焼土粒子が確認され、奥壁部分は焼けて焼土化していた。

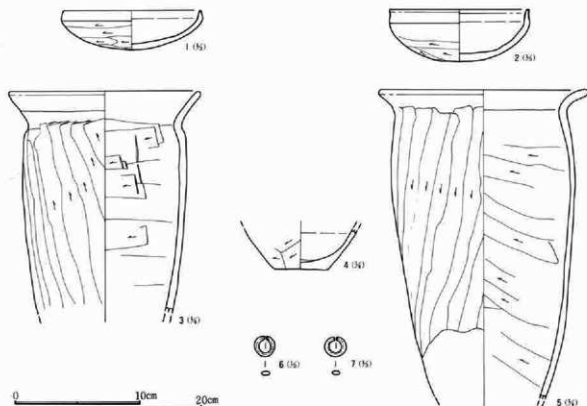
規模 煙道方向70cm、両袖方向50cmである。

遺物 出土は認められなかった。

土層注記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗黄褐色土 ローム粒子を主とした層。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑥ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑦ 黄褐色土 地山ロームを主とした層。

第3章 検出された遺構と遺物



第246図 86号住居跡出土遺物実測図

86号住居跡 出土遺物観察表 (挿印番号第246図)

遺物番号 図版番号	器形及 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
86住-1 114	環 土師器	3.1 11.0 - 床面+20	丸底の環である。口縁部は短く内傾気味に直立する。底部へた削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を少量含む
86住-2 114	環 土師器	4.1 (11.0) - 覆土	丸底の環である。口縁部は短く直立後上端で反りする。底部へた削り、体部わずかなナデ、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
86住-3 114	甕 土師器	- (20.6) - 床面	口縁部に最大径を持つ長胴の甕である。胴部の中では肩部の径が大きい。胴下半部へた削り、内面へた削り、内面へた削りによるナデ。	①褐色②酸化③4/5④1mm前後の砂粒を多く含む
86住-4 114	甕 土師器	- - (5.8) 床面	長胴甕の底部である。外面全面へた削り、底面横方向へた削り、内面ていねいなナデで表面密。	①褐色②酸化③2/3④1mm前後の砂粒を多く、1~2mm砂粒を少量含む
86住-5 114	甕 土師器	- 22.4 - 床面+6	口縁部に最大径を持つ長胴の甕である。口縁部の長さは3の甕より短い。胴部より底部に向かうへた削り、胴中央部にカマド割付時に用いたローム付着。	①褐色②酸化③口縁へた削り下部は成形④1mm前後の砂粒を多く含む
86住-6 148	耳環	外径1.6×1.6 内径1.0×1.0	小さな耳環である。内面に金箔が残るが外面は剥離している。床面+7	①地金オリブ灰色・金箔は金色③完形④断面0.7cm×0.3cm 重量4.1g
86住-7 148	耳環	外径1.5×1.7 内径0.9×1.0 床面-6	小さな耳環である。内面に金箔が残るが外面は剥離している。	①地金オリブ灰色・金箔は金色③完形④断面0.3cm×0.6cm 重量3.8g

87号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版37

位置 III区中央部北側に位置し、83号住居の南西約2mでL-27グリットに属する。

概要 住居の残りが悪く、床面上の覆土の大部分は残っていない。甕もほとんど残っていない。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られていた。甕右側に貯蔵穴らしい掘り込みが認められたが、深さ約10cmと浅いことや床下段階では確認できないため貯蔵穴ではないと思われる。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西2.45m、南北2.65mで非常に小さい。壁高は最も残りの良いところで15cmである。

遺物 少量の土師器甕と須恵器杯と甕の破片が出土した。

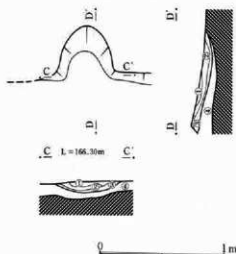
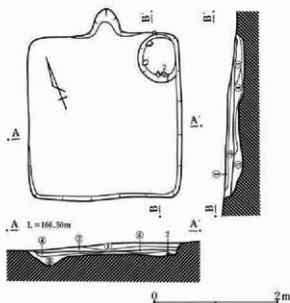
87号住居跡（竈）

位置 住居北壁の床面と一部壁面を掘り込んで造られている。

構造 竈上面の大部分が削り取られているため詳しい内容は不明である。ローム粒子とロームブロックを主体とした暗褐色土と灰黄褐色粘質土で造られている。覆土中や燃焼部床面付近から少量の焼土粒子や焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向45cm、両袖方向42cmである。

遺物 出土は認められなかった。



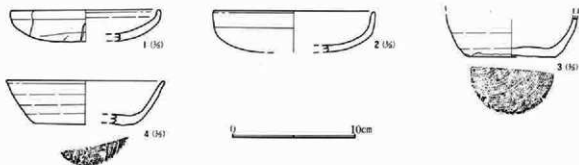
土層注記（住居）

- ① 褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

土層注記（竈）

- ① 褐色土 少量のローム粒子を含む。
- ② 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と3mm前後のローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第247図 87号住居跡及び竈実測図



第248図 87号住居跡出土遺物実測図

87号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第248図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
87住-1	坏 土師器	- (12.0) - 覆土	器内の厚い浅い坏である。口縁部は短く直立する。 底部丸底削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
87住-2	坏 土師器	- (13.0) - 貯蔵穴内+6	浅く丸底の坏である。口縁部は少し良い。底部へう 削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を少量含む
87住-3	坏 須恵器	- - (7.0) 覆土	底径が大きく、糸切痕が残る。底部の器内が厚い。 体部に間隔の広いロクロ目、ロクロ右回転。	①灰白色②還元③底部1/2・体部1/4④密
87住-4	坏 須恵器	3.4 (12.6) (8.0) 覆土	底径が大きく器高が低い。底部の糸切は周辺から少し 内側にはいった所で行なわれている。ロクロ右。	①灰白色②還元③1/4④1mm以下の石英と長石粒を多く含む

88号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版37・38

位置 Ⅲ区北東部に位置し、86号住居の南約8mでM-25グリットに属する。

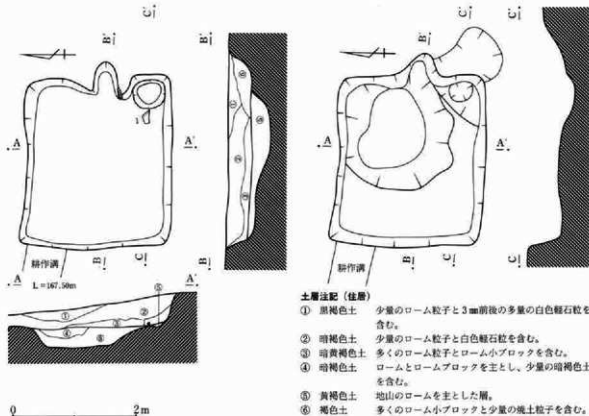
概要 すべての壁面が残存している残りの良い住居の1つである。出土遺物が少なく時代の認定が困難であるが、出土した小破片から古墳時代と考えられる。

構造 床面は、ロームブロックと多くの暗褐色土が混入した土で造られていたが柱穴は掘られていなかった。

規模 東西2.65m、南北2.40mで小さい。貯蔵穴は直径50cmの円形を呈し深さは24cmである。壁高は最も残りの良い南壁部分で47cmである。

遺物 床面や覆土中より、少量の土師器の壺や須恵器坏の破片が出土した。

床下 床面中央部やや北寄りに直径1.8mのほぼ円形を呈し、深さ43cmの床下土坑が検出された。



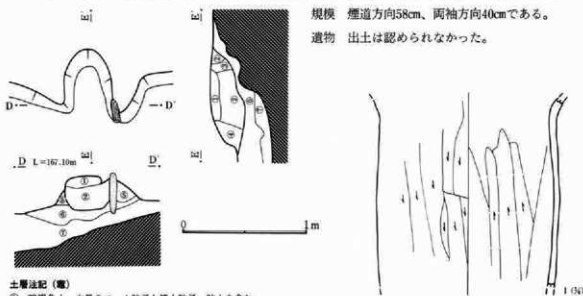
第249図 88号住居跡及び床下実測図

88号住居跡(竈)

位置 住居東壁やや南寄りに造られている。焚口部分と燃焼部の大部分は床面に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 ロームブロックと少量の暗褐色土で造られており、右袖に細長い袖石が据えられた状態で検出された。

ほかに袖石や天井石は検出されなかった。燃焼部床面や煙道部に多くの焼土粒子が確認された。



土層法記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・粘土を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの焼土粒子を含む。
- ③ 黄褐色土 ロームブロックを主とした層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ⑥ 黒褐色土 黒褐色土中にローム粒子と炭・焼土粒子を含む軟弱土層。
- ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第250図 88号住居跡竈及び出土遺物実測図

88号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号250図)

遺物番号 図版番号	形状及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
88住-1	竈? 土師器	- 床面	竈の破片と思われる。口縁部→底部に向かうへつ削り、内面縦方向のナダ。	①褐色②軟化③破片④1m前後の砂粒を多く含む

89号住居跡(平安時代) 遺構写真図版38 遺物写真図版114

位置 III区中央部東端に位置し、88号住居の東約8mでM-24グリットに属する。

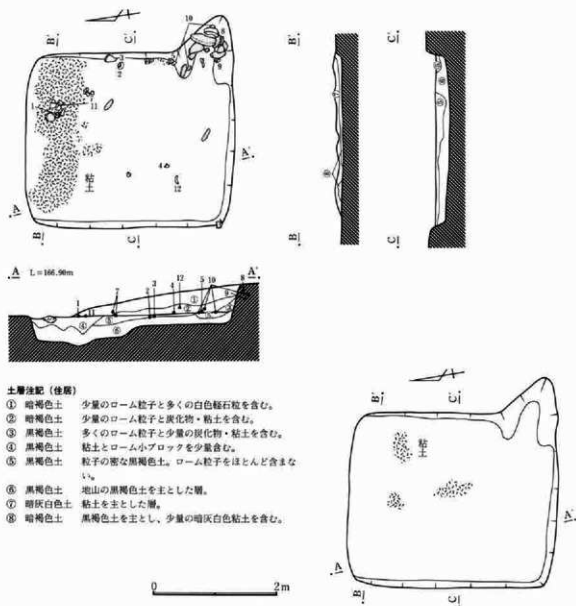
概要 II区とIII区を分ける浅い谷に面している。この谷はロームの上に黒褐色土が厚く堆積しており、この黒褐色土を掘り込んで89号住居は造られている。そのため範囲確認が他のロームを掘り込んでいる住居と異なり少し困難であった。住居北側の壁面に沿った床面上に長さ2.5m幅50~80cm厚さ5~10cmの大量の粘土が持ち込まれていた。このような例は他になく用途について明らかでないが注目される。

構造 床面は、地山の黒褐色土であるが明瞭ではない。貯蔵穴や柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.35m、南北2.75mである。壁高は最も残りの良い南壁で42cmである。

遺物 残存している床面や覆土中より、土師質土器の皿や須恵器の坏と羽釜等が多く出土した。

第3章 検出された遺構と遺物



第251図 89号住居跡実測図

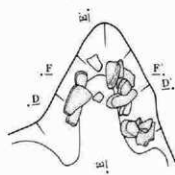
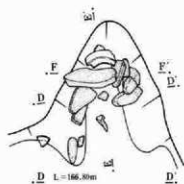
89号住居跡 (竈)

位置 住居東壁南端の壁面を掘り込んで造られており、焚口部と燃焼部の多くが床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。この遺跡において最も残りの良い竈の一つである。

構造 石を多く使用した石組の竈である。焚口部分の袖石と天井石は取りはずされていたが、燃焼部の側壁の多くの部分と煙道部の側石と天井石はほぼ使用時の状態で検出された。支脚石も据え付けられた状態のまま検出された。側壁の石や天井石を多くのロームを主とした暗褐色土が覆っている。

規模 煙道方向110cm、両袖方向55cmである。

遺物 羽蓋の破片が多く出土した。



F E

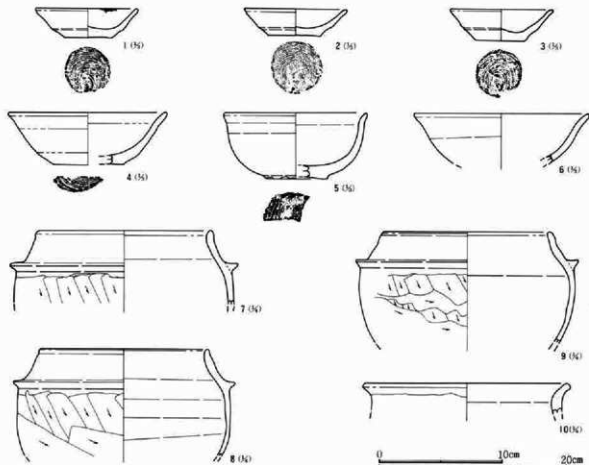


土層法記 (簡)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・粘土を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと部分的に多くの焼土粒子を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第252図 89号住居跡燻実測図

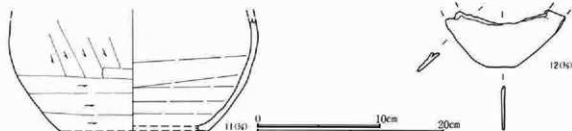
0 1 m



第253図 89号住居跡出土遺物実測図(1)

0 10cm 20cm

第3章 検出された遺構と遺物



第254図 89号住居跡出土遺物実測図(2)

89号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第253・254図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
89住-1 114	皿 土師質	2.3 8.2 3.8 床面	底径が小さく底部の器内が厚い。内面底部中央が凸状を呈する。底部右回転糸切痕。口縁の一部に施釉。	①褐色②酸化③ほぼ完形④密⑤灯明皿として使用している
89住-2 114	皿 土師質	2.1 8.2 4.2 床面-2	底径が小さく底部の器内が厚い。内面底部中央が凸状を呈する。底部右回転糸切痕。	①褐色②酸化③完形④密
89住-3 114	皿 土師質	2.5 8.2 3.9 床面-1	1・2の坏とほぼ同じ。2箇所に鼻痕あり。	①褐色②酸化③完形④密
89住-4 114	坏 土師質	4.2 (12.8) (5.8) 床面	底径が小さく器高の高い坏である。口縁部が外反する。底部に右回転糸切痕。	①褐色②酸化③1/3④密
89住-5 114	碗 土師質	(5.2) (11.6) (5.0) 床面+2	器高の高い碗である。底部と体部との境に段を持つ。口縁部が外反する。底部右回転糸切痕。	①褐色②酸化③1/3④密
89住-6 114	坏 土師質	- 14.0 - カマド履土	口縁部がなだらかに外反する。	①褐色②酸化③1/3④密
89住-7 114	羽釜 土師質	- (19.0) - 床面	器高の低い羽釜である。11のような砂底の底部が付くものと思われる。踵下部へうへり削りで器面が丸い。	①にぶい褐色②酸化③1/6④1mm前後の石英と長石粒を多く含む
89住-8 114	羽釜 土師質	- 18.2 - カマド内+28	7と似た羽釜である。踵下部左上→右下方向へうへり削り。胴中央部で左→右方向へうへり削り。口唇部は丸い。	①にぶい褐色②酸化③1/3④1mm前後の多くの砂粒と1~2mmの石英粒を含む
89住-9 114	羽釜 土師質	- (18.0) - 床面	7・8に似た羽釜である。踵の下は横ナズでなく左→右方向へうへり削り。胴上部より下は左→右方向へうへり削り。口唇部は丸い。	①褐色②酸化③1/4④1mm前後の多くの砂粒と2mm前後の石英と長石粒を含む
89住-10 114	土釜 土師質	- (22.0) - カマド内直上	土釜の口縁部～頸部の破片。口縁部は短く外反するが均一でなく雑である。	①にぶい赤褐色②酸化③口縁～頸部1/3④1mm前後の砂粒を多く含む
89住-11 114	羽釜? 灰面	- (16.0) 灰面	踵の下から底部までの破片である。へう削りの方向は9に同じ。底部が砂底となっている。	①褐色②酸化③胴部1/3・底部小破片④1~2mm砂粒を少量含む
89住-12 114	鉄	長さ9.6 幅3.4 厚さ0.2 重量31.4g	用途及び名称不明。全体に錆化が進んでいる。⑤床面+9	

90号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版39 遺物写真図版114

位置 Ⅲ区北側の取り付け道路部に位置し、82号住居の南約3mでK-26・27グリットに属する。

概要 古墳時代の95号住居の北東コーナーを掘り込んで造られている。12軒が関係する住居密集地帯の中の一軒である。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西2.35m、南北1.15mである。壁高は最も残りの良い竈周辺の東壁で23cmである。

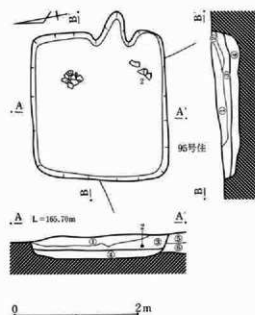
遺物 竈周辺部分を中心として少量の土師器の坏や甕と須恵器の坏等が出土した。

90号住居跡 (竈)

位置 住居東壁や南寄りの壁面を掘り込んで造られている残存状態の比較的良好な竈である。焚口部分と燃焼部の一部が床面上に位置するが、燃焼部の大部分と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 多くのロームと少量の灰褐色粘質土を混入した土で造られており、袖石や天井石等はなく、また火焼面も明確に観察できなかった。2層下面に少量の焼土粒子と炭化物が分布していたことから、この面を火焼面と想定した。

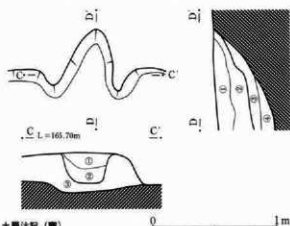
規模 煙道方向55cm、両袖方向45cmである。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と灰褐色粘土を5cm程のブロック状に含む。
- ③ 暗褐色土 多くの焼土粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑤ 95号住居覆土
- ⑥ 95号住居床下覆土

遺物 土師器の甕の破片が出土した。



土層注記 (甕)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子・粘土粒子・焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と炭と焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の粘土を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第255図 90号住居跡・竈及び出土遺物実測図

90号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第255図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm)	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
90住-1	環 須恵器 覆土	— (10.0) —	器高の低い小さな環である。体部右回転。口縁部外側に一条の沈線あり。	①灰色②還元③小破片④1~2mmの石英粒を少量含む
90住-2 114	甕 土師器	— 15.0 — 床面+3	器高の厚い小さな甕である。胴上部は下→上方向へフ削り。胴中央から下部は上→下方向へ削り。	①明赤褐色②還元③口縁~胴上部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む

91号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版39・40 遺物写真図版114・115

位置 Ⅲ区北側の取り付け道路部に位置し、94号住居の東約3mでK-26グリットに属する。

概要 奈良時代の93号住居の東側部分と平安時代の92号住居の北東コーナーを掘り込んでいる。北東コーナーは調査範囲外である。12軒が関係する住居密集地帯の中の一軒である。

構造 床面はローム粒子とローム小ブロックを主とした土で造られ、貯蔵穴と柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.10m、南北2.95mである。壁高は最も残りの良い南壁面で32cmである。

遺物 土師器の環と甕や須恵器の環が出土した。

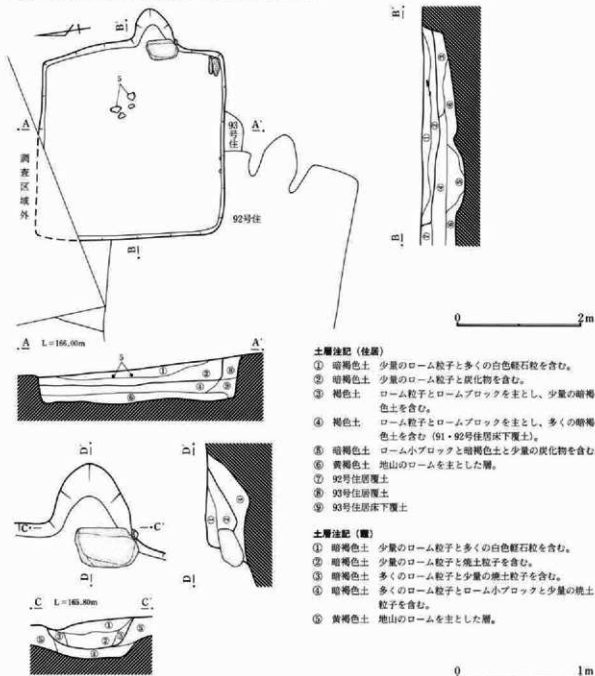
91号住居跡 (竈)

位置 住居東壁やや南寄りの壁面を多く掘り込んで造られている。燃烧部の多くの部分と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 焚口手前の床面上に天井石があり、右袖の中に1個の袖石が直立した状態で検出された。左袖部分の袖石はなく、抜かれたと思われる小穴が検出された。他に竈内より石は検出されなかった。燃烧部から煙道部の床面に多くの焼土が検出された。

規模 煙道方向65cm、両袖方向63cmである。

遺物 燃烧部より少量の土師器甕の胴部破片が出土した。



第256図 91号住居跡及び竈実測図



第257図 91号住居跡出土遺物実測図

91号住居跡 出土遺物観察表 (拝図番号第257図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部器形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
91住-1	蓋 須恵器 覆土	— (16.0) —	器高の高い蓋である。表面横ナデ。ロクロ右回転。	①表面灰色・断面に赤褐色②還元③1/4④1mm以下の砂粒を含む
91住-2	環 須恵器 覆土	3.9 (12.6) —	底径が大きく器高の低い環である。口縁部は外反しない。底部赤切欠、ロクロ右回転。	①灰白色②還元③1/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
91住-3	環 須恵器 カマド覆土	4.0 (12.8) —	底径が大きく器高の低い環である。口縁部は外反しない。底部赤切欠、ロクロ右回転。	①灰白色②還元③口縁～体部1/4・底部小破片④1mm以下の石英と長石粒を含む
91住-4 114	台付器 土師器 カマド覆土	— 12.0 —	割れていて接合しないが、台付蓋と思われる。頸部の器内が厚く、口縁部が外反する。胴部右→左横方向へ削り。台の整形はていねいである。	①に赤褐色②酸化③口縁～頸部ほぼ完形・胴上部1/4④1mm以下の細粒を多く含む
91住-5 115	壺 土師器 床面+14	— (20.0) —	「コ」の字状口縁の壺である。胴部右→左横方向へ削り・胴中央から下は左上→右下縦方向へ削り。口縁部横ナデ。	①口縁部褐色・胴部におよび橙褐色②酸化③口縁～胴部2/3・胴部1/2④1mm以下の砂粒を多く含む

92号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版40 遺物写真図版115・116

位置 Ⅲ区北側の取り付け道路部に位置し、94号住居の東約1mでK-26、L-26グリットに属する。

概要 奈良時代の96号住居の北側部分と奈良時代の97号住居の北東コーナーを更に奈良時代の93号住居の南側部分を掘り込み、平安時代の91号住居に北東部分を床面部分まで掘り込まれている。12軒が関係する住居密集地帯の中の一軒である。

構造 床面はローム粒子とローム小ブロックを主とした土で造られ、貯蔵穴は竈右側に検出できたが柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.80m、南北3.75mである。壁高は最も残りの良い西壁面で32cmである。

遺物 土師器の環と蓋、須恵器の環や壺と蓋が出土し、多くを図化することができた。特に注目される遺物として大量に出土した滑石の破片がある。紡錘車の未製品の破片も同時に出土しているため紡錘車を製作した住居であったと思われる。

92号住居跡 (竈)

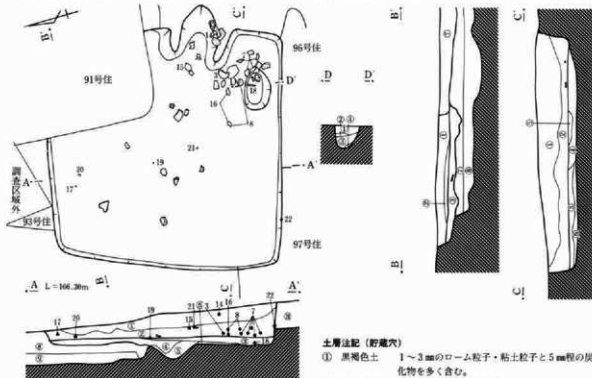
位置 住居東壁やや南寄り壁面を一部掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の大部分が床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

第3章 検出された遺構と遺物

構造 多くのローム粒子と少量の灰褐色粘質土を混入した土で造られていた。右側の袖の中に2個の石が検出されたが袖石や天井石ではなかった。燃焼部から煙道部の床面に多くの焼土が検出された。

規模 煙道方向98cm、両袖方向60cmである。

遺物 燃焼部より土師器製の胴部破片が出土した。



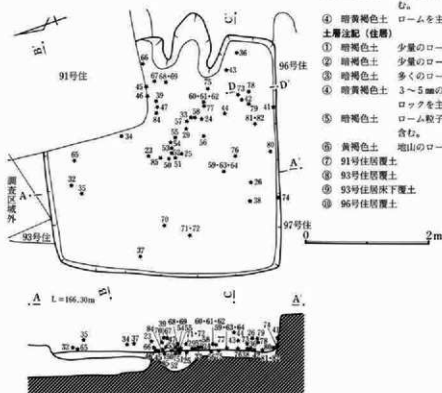
第258図 92号住居跡実測図

土層法記 (貯蔵穴)

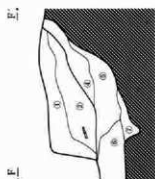
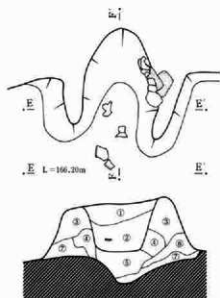
- ① 黒褐色土 1~3mmのローム粒子・粘土粒子と5mm程の炭化物を多く含む。
- ② 黄褐色土 ローム粒子を主とした層。
- ③ 黒褐色土 ①と同様であるが、より多くのローム粒子を含む。
- ④ 暗黄褐色土 ロームを主とした層。

土層法記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ④ 暗黄褐色土 3~5mmのローム粒子と1cm前後のローム小ブロックを主とする層。
- ⑤ 暗褐色土 ローム粒子を主とし、少量の焼土粒子・粘土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 91号住居覆土
- ⑧ 93号住居覆土
- ⑨ 93号住居床下覆土
- ⑩ 96号住居覆土



第259図 92号住居跡滑石出土状況実測図

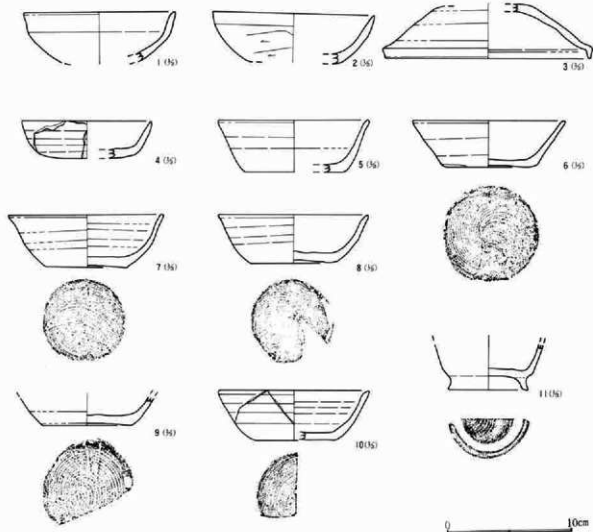


0 1 m

第260図 92号住居跡埋藏実測図

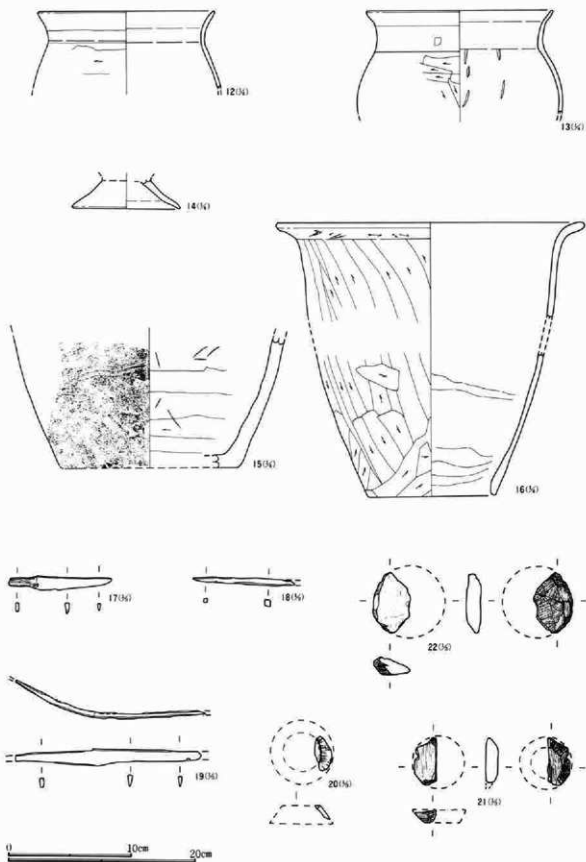
土層注記 (續)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子和焼土粒子を含む。
- ② 暗灰褐色土 多くの粘土とロームを主とし、焼土ブロックを多く含む。
- ③ 暗灰褐色土 多くの粘土ブロック・粘土粒子和ローム粒子を主とした層。
- ④ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子和少量の粘土粒子和ローム粒子を含む。
- ⑤ 暗黄褐色土 ロームブロックを主とした層。
- ⑥ 灰褐色土 粘土を主体とし、少量の焼土粒子を含む。
- ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



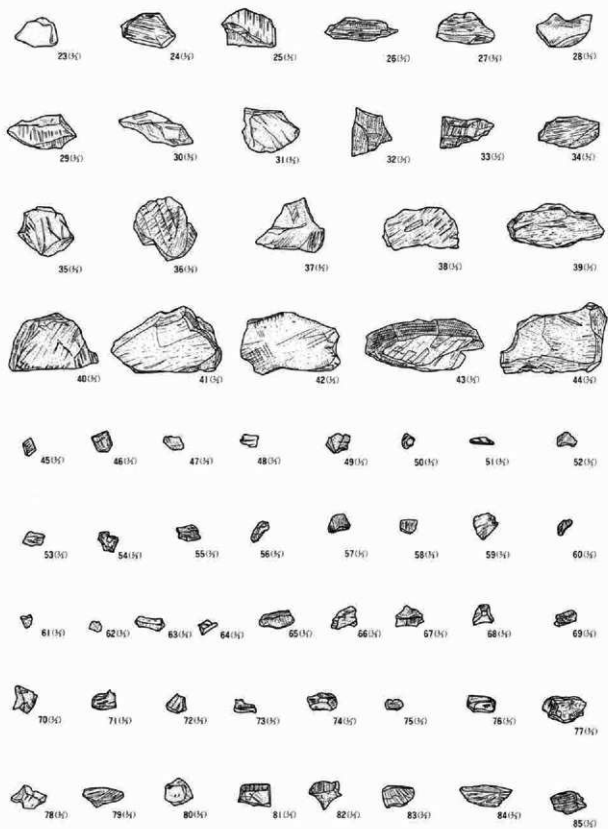
第261図 92号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第262図 92号住居跡出土遺物実測図(2)

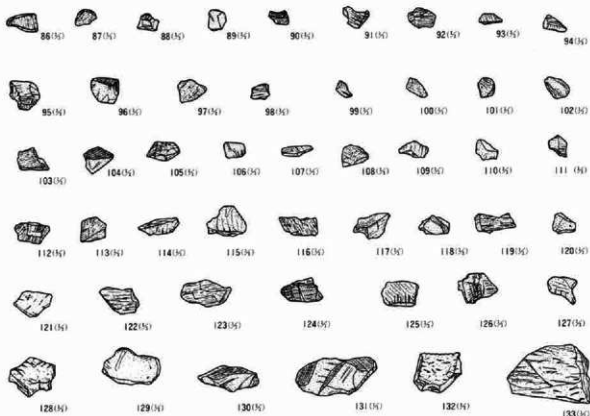
第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



0 2.5cm

第263図 92号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 検出された遺構と遺物



第264図 92号住居跡出土遺物実測図(4)

92号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第261図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
92住-1	坏 土師器	- (12.0) - カマド覆土	丸底の坏である。口縁部がゆるやかに外反する。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
92住-2	坏 土師器	- (13.0) - カマド覆土	器内の厚い坏であり、口唇部で薄くなる。底部へラ削り。内面に暗文は認められない。	①褐色②酸化③口縁部へラ削り④1~2mmの砂粒を少量含む
92住-3 115	蓋 須恵器	- 16.4 - 床面+3	器高の高い蓋である。折りの部分の作りはいいである。口縁部右回転ナデ。天井部回転へラ削り。	①灰色②還元③1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
92住-4	坏 須恵器	3.0 10.4 - 覆土	底部手持へラ削り後ナデ。体部へラ削り外面クロロ目。小さな坏である。	①灰色②還元③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
92住-5	坏 須恵器	4.1 (12.2) (8.0) 覆土	底部の器内が厚く、体部へラ削りつつ立ち上がる。底部回転系切痕、クロロ右回転。	①灰白色②還元③口縁部へラ削り④1/4底部小破片⑤1mm以下の石英と長石粒を含む
92住-6 115	坏 須恵器	3.7 (12.2) 7.7 カマド覆土	底面がほぼ平で器内の厚きが一定している。体部へラ削り口縁部はほぼ直線的に外傾しつつ立ち上がる。体部外面のクロロ目少ない。底部右回転系切痕、無調整。	①灰白色②還元③口縁部1/10・体部1/2・底部完形
92住-7 115	坏 須恵器	4.1 12.4 6.6 床面+2	底面がほぼ平で器内の厚きが一定している。体部は少し内彎しつつ立ち上がる。体部に間隔の狭いクロロ目。底部右回転系切痕、無調整。	①灰色②還元③完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
92住-8 115	坏 須恵器	3.8 12.0 6.8 床面+8	7の坏に近い。体部は少し内彎しつつ立ち上がる。体部に間隔の狭いクロロ目。底部右回転系切痕、その後無調整。	①灰白色②還元③4/5④1mm以下の砂粒を多く含む。1~3mmの石英と長石粒を少量含む
92住-9	坏 須恵器	- - 7.0 カマド覆土	5と6の坏に近い。底面がほぼ平で器内の厚きが一定している。底部右回転系切痕。	①灰白色②還元③体部1/4・底部2/3④完形
92住-10	坏 須恵器	3.9 (12.2) (7.0) 覆土	7と8の坏に近い。底部回転系切痕、クロロ右回転。	①灰色②還元③体部1/6・底部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
92住-11	埴 須恵器	- - 6.0 覆土	底面がほぼ平で器内の厚きがほぼ一定している。高くていいに整形されている高台が付く。	①灰色②還元焼締③体部下半1/10・底部と高台部1/2④完形

92号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第262・263・264図)

遺物番号 区画番号	器形及 び種類	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④陶土⑤備考
92住-12	罌 土師器	— (19.0) — 覆土	器内の薄い壁である。肩部右一左方向へ削り、頸部へ口縁部ナデ、指頭圧痕残る。	①橙色②酸化③1/6④1mm以下の砂粒を多く含む
92住-13	罌 土師器	— (20.0) — 覆土	器内の薄い壁であり、頸部上下部にへう状工具によるナデが頸部と口縁部の境界を意識されている。	①橙色②酸化③1/6④1mm以下の砂粒を多く含む
92住-14	白付罌 土師器	— — 11.6 カマド内+33	台がそっくりはなれている。内外面滑ナデ。	①橙色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
92住-15	罌 須恵器	— — (19.2) 床面+15	大量の体部下半へ底部の小破片である。外面に波状文、内面に輪横線が残る。	①灰白色②還元③小破片④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
92住-16 115	罌 土師器	— 33.0 13.6 床面+2	口縁部は大きく外反し、端部が少し玉状になる。胴下階の内側と底部へ削り、胴上部右下へ左上方、胴下部左上へ右下方へ削り。	①橙色②酸化③口縁へ胴上部1/3・胴下へ底部4/5④1mm前後の砂粒を多く含む
92住-17 148	刀子	全長8.2 幅1.0 棟厚0.3 5.4g	茎の一部欠。茎部分に木質部が残る。錆化が進んでいるが全体の残りは良好。	
92住-18 148	釘	長さ8.2 幅0.5 厚さ0.5 5.2g	釘の下半部と思われる。断面方形を呈する。	
92住-19 148	刀子	全長14.7 幅1.3 厚さ0.3 11.8g 床面	曲がっているが刀子である。17と比較して刃部の幅が広く残りが良い。稜区も明確に識別できる。刃部は断面三角形を呈し両側から鋭く低がれている。茎は断面長方形を呈する。	
92住-20 115	紡錘車 床面+2	重量2.1g	表面がきれいに整形され光沢を持つ。完成品の紡錘車の一部が破損したものである。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-21 115	紡錘車 床面+16	長さ3.7 幅1.7 厚さ0.9 重量3.0	側面荒砥削り、上面斜断面、下面に加工痕ナシ、仕上げに近い段階で破損したものである。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-22 115	紡錘車 床面+20	長さ4.8 幅3.0 厚さ1.2 重量20g	ノミによる削痕が表面に多く残されている。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-23 23-28 115	紡錘車 削片?	23-0.3g 24-0.5g 25-0.4g 26-0.4g 27-0.6g 28-0.2g	紡錘車製作段階で、ノミを用いて荒削りをした段階で出た小破片と思われる。いずれも加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-29 34 115	紡錘車 削片?	29-0.5g 30-1.0g 31-0.7g 32-0.4g 33-0.5g 34-0.3g	30の破片に1箇所ノミと思われる加工打痕あり。他の破片では観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-35 39 115	紡錘車 削片?	35-0.5g 36-1.8g 37-0.6g 38-2.2g 39-1.5g	35の破片に1箇所ノミによると思われる削った加工痕あり。他の破片では観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-40 44 115	紡錘車 削片?	40-2.8g 41-2.0g 42-1.9g 43-2.4g 44-3.9g	40の破片にノミによると思われる打痕が2箇所、43には紡錘車の側面をノミにより横方向に削った加工痕が4箇所認められる。44には同様な加工痕が1箇所認められた。他の破片には認められなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-45-52 116	紡錘車 削片?	8個体総量0.2g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-53-60 116	紡錘車 削片?	8個体総量0.4g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-61-69 116	紡錘車 削片?	9個体総量0.5g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-70-77 116	紡錘車 削片?	8個体総量0.8g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-78-85 116	紡錘車 削片?	8個体総量1.3g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-86-94 116	紡錘車 削片?	9個体総量0.5g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-95-100 116	紡錘車 削片?	8個体総量0.6g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-101-103 116	紡錘車 削片?	9個体総量0.8g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-104-106 116	紡錘車 削片?	9個体総量1.3g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-107-109 116	紡錘車 削片?	7個体総量1.3g	いずれも小破片であり、加工痕は観察できなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩
92住-128-133 116	紡錘車 削片?	I8-0.3g I28-0.2g I38-0.5g I31-1.1g I2-0.4g I2-1.9g	I32にはノミによる削った加工痕が1箇所認められた。他の破片には認められなかった。	①緑灰色③小破片④滑石片岩

93号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版40 遺物写真図版117

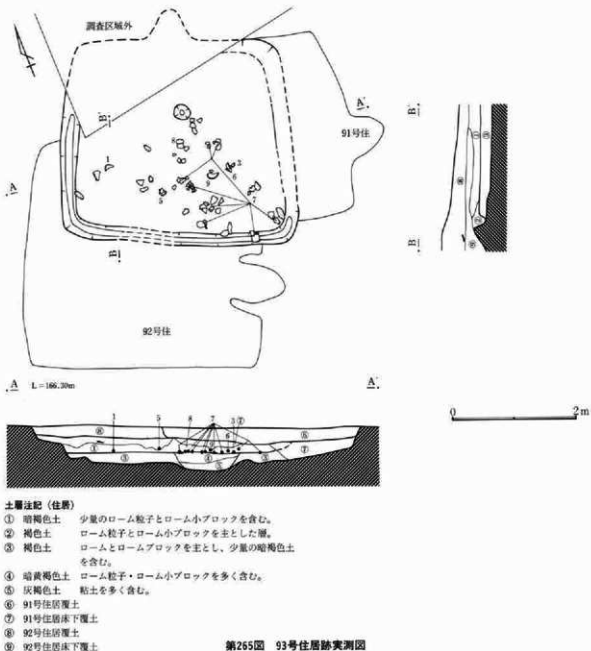
位置 Ⅲ区北側の取り付け道路部に位置し、94号住居の東約2mでK-26グリットに属する。

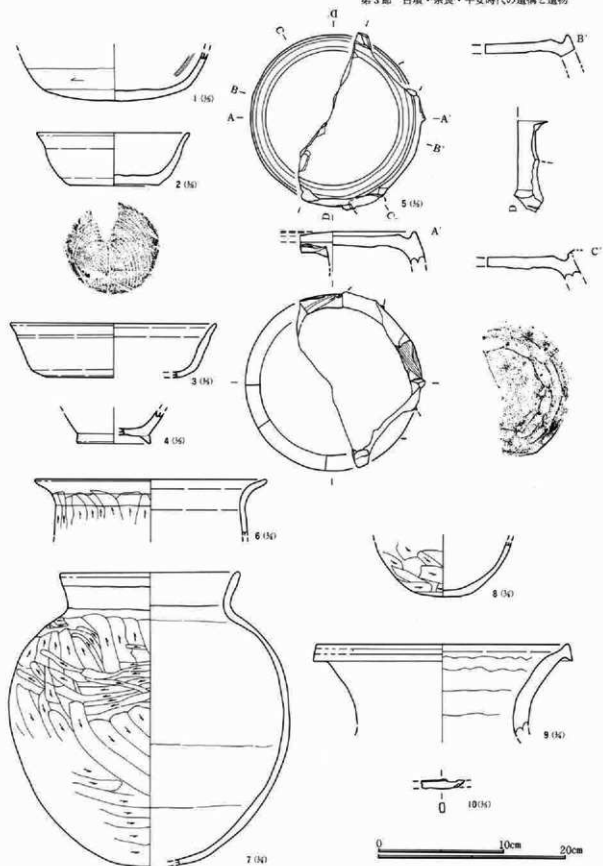
概要 平安時代の91・92号住居に床面上約15cmから上の覆土の多くを削り取られ、北側の一部は調査範囲外であった。調査できた床面や壁面に竈の痕跡は検出されなかったがおそらく調査範囲外の北壁部分に造られていたものと思われる。12軒が関係する住居密集地帯の中の一軒である。

構造 床面はロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られ、柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。壁面下の多くの部分に周溝が検出された。

規模 東西3.8m、南北は不明である。壁高は他の住居と重複していない南東コーナー部分で54cmであった。周溝は幅約20cm深さ8～12cmである。

遺物 土師器の甕や須恵器の坏と甕の破片が出土した。特に円面硯が出土しており注目される。





第266図 93号住居跡出土遺物実測図

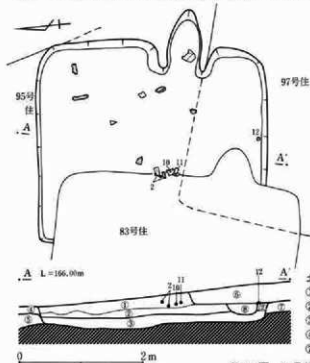
93号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第266図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
93住-1	坏 土師器	- - -	底部の器内が厚く丸味を持つ。体部内側に暗文、内側底部に螺旋状文と思われる痕跡を持つ。	①褐色②酸化③体部下半1/6・底部1/2④密で粉状を呈する
93住-2 117	坏 須恵器	4.2 (12.2) 7.2 床面	底部の器内が厚くほぼ一定している。体部はわずかに内湾しつつ立ち上がり、口縁部がわずかに外反。底部右回転糸切調整。	①灰白色②還元③口縁部小破片・体部1/6・底部はほぼ完全④1mm以下の石英と長石粒を少量含む
93住-3	坏 須恵器	- (16.6) - 床面	底部へ底部周辺右回転へつ雨り。口縁部が外傾する。器高が低く口径・底径の広い坏である。	①灰白色②還元焼成③口縁へ体部1/5・底部小破片④密
93住-4	坏 須恵器	- - (5.8) 覆土	底部の厚さがほぼ一定し平である。高台は高く断面は三角形を呈する。	①灰白色②還元③小破片④密
93住-5 117	甕 須恵器	- (14.0) - 床面+4	脚台部に四つの窓を持つ。池部は明確であるが内境の突起は少ない。磨き面は使用により表面が厚減し、つやを持つ。視面部裏面はナゲ整形。脚台部の1つは、視面部上まで延びているようである。	①灰白色②還元③視面部1/2・脚台部ほとんど穴④1mm内外の長石粒を多く含む
93住-6	甕 土師器	- (25.0) - 床面+1	口縁部に最大径を持つ。口縁部は短く大きく外反する。胴部下へ上方方向へ雨り。	①褐色②酸化③口縁へ胴上1/3④密で1mm以下の細粒を多く含む
93住-7 117	甕 土師器	- 19.4 - 床面	丸底丸胴の甕である。口縁部はゆるやかに外傾する。胴上部右→左斜方向、胴中部左→右下方向、胴下部左→右下へ雨り。	①褐色②酸化③3/4④1~2mmの砂粒を多く、赤色粒を少量含む⑤口縁部外側に一糸の強い凸帯を持つ
93住-8	甕 土師器	- - 6.2 床面	小型の甕の胴部下半へ底部である。底部ナゲ、胴部下半へ雨り、内面ナゲ。	①にぶい赤褐色②酸化③胴下半へ底部4/5④1mm前後の砂粒を多く含む。粗
93住-9	甕 須恵器	- (27.0) - 床面+3	口縁部内外面のほぼ全面に波状文が描かれているが、薄くて図示出来なかった。	①灰色②還元③口縁部1/4④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
93住-10	鉄	長さ3.4 幅0.7 厚さ0.3 重量2.3g	小さな破片であり、不明な部分が多いが、刀子の茎部分の小破片と思われる。⑤覆土	

94号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版40・41 遺物写真図版117

位置 III区北側の取り付け道路部に位置し、82号住居の東約1mでK-26・27、L-26グリットに属する。

概要 古墳時代の95号住居及び奈良時代の83・97号住居と重複している。83号住居により西側の床面が掘り



込まれ、97号住居により南側を床面近くまで覆土が掘り込まれていた。同じ奈良時代に属する83・94・97号住居との新旧関係は82→94→83→97号住居の順となる。

構造 床面はルームとルームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られ、柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西3.1m、南北3.7mである。壁高は最も残りの良い南壁で43cmである。

遺物 電周辺部分を中心に土師器の坏や甕と須恵器の坏や蓋や紡錘車出土した。

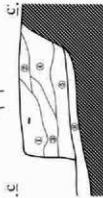
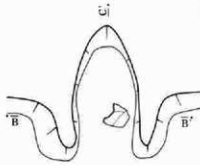
土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のルーム粒と多くの白色軽石を含む。
 ② 暗褐色土 少量のルーム粒と白色軽石を含む。
 ③ 褐色土 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
 ④ 95号住居覆土 ⑤ 95号住居床下覆土 ⑥ 97号住居覆土
 ⑦ 97号住居床下覆土 ⑧ 83号住居覆土

第267図 94号住居跡実測図

94号住居跡(竈)

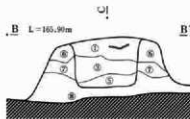
位置 住居東壁南寄りの壁面を掘り込んで造られている残存状態の良い竈である。焚口部分と燃焼部の一部が床面上に位置するが、燃焼部の大部分と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。



構造 ロームと灰褐色粘質土を多く混入した土で造られており、芯材等としての石は使用されていなかった。燃焼部床面付近に多くの焼土粒子が、また焚口周辺に多くの炭や灰が検出された。

規模 煙道方向110cm、両袖方向52cmである。

遺物 土師器の壁の破片が出土した。

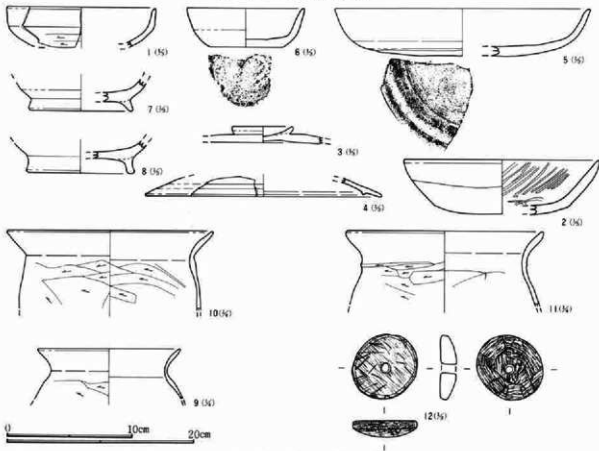


土層法記(竈)

- ① 褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの焼土粒子を含む。
- ③ 灰褐色土 粘土を主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ④ 暗赤褐色土 多くの粘土と焼土粒子を含む。
- ⑤ 黒褐色土 黒褐色土中に炭・灰・焼土粒子を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子と粘土を含む。
- ⑦ 灰褐色土 粘土とロームを主とする層。
- ⑧ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。

0 1 m

第268図 94号住居跡竈実測図



第269図 94号住居跡出土遺物実測図

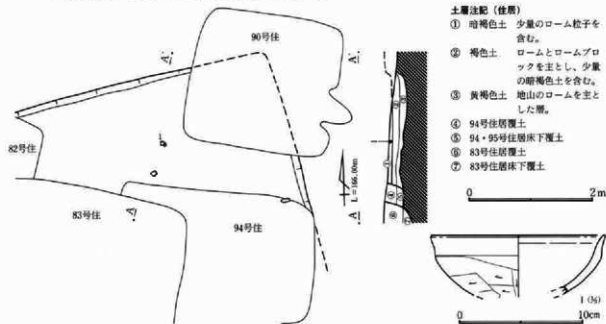
94号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第269図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
94住-1	環 土師器 覆土	— (12.0) —	丸底の環であり、口縁部がわずかに外彎する。底部へう削り。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の細粒を少量含む
94住-2 117	環 土師器 覆土	4.3 (15.6) — 床面+10	器内が全体に厚い。底部は平底に近い丸底。体部へ口縁部直線的に外傾しつつ開く。体部中央の器内が厚い。体部へ底部へう削り。内面体部へ口縁増文。	①褐色②酸化③1/2④赤色粒を少量含む ⑤底部に螺旋状増文
94住-3	蓋 須恵器 覆土	— — —	器高の低い環状のツマミを持つ。天井部右回転へう削り。	①灰白色②還元③天井部とツマミ部は完全形④黒色胎粒を少量含む
94住-4	蓋 須恵器 覆土	— (19.0) —	カエリを持つ器高の低い蓋である。	①灰白色②還元③小破片④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
94住-5	環 須恵器 覆土	3.7 (20.4) (17.6)	底部の器内が厚く、口径の大きな環である。底部右回転へう削り。底部周辺へ口縁部回転ナダ。	①灰白色②還元焼締③1/5④1mm前後の長石粒を多く含む
94住-6	環 須恵器 覆土	— — (6.0)	口径の小さな環である。底部へう削り後中央のみ手持へう削り。他は無調整。体部へ口縁部回転ナダ。	①灰白色②還元焼締③小破片④1mm前後の長石粒を多く含む
94住-7	埴 須恵器 覆土	— — (8.0)	底部の器内が厚く平である。高台の断面は長方形を呈し、端部へう削りによりていねいに整形している。	①灰白色②還元③小破片④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
94住-8	埴 須恵器 覆土	— — (8.5)	底部の器内が厚い。高台内側は磨耗により整形痕不明、高台は高く下端部で厚い。端部へう削り。	①灰白色②還元③高台小破片・底部1/3④滑・少し粉状を呈する・軟質
94住-9	罎 土師器 覆土	— (15.0) —	器内が薄い。特に胴部が口縁部より薄い。肩部右へ左横方向へう削り。口縁部横ナダ。	①赤い褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
94住-10	罎 土師器 床面+22	— (12.0) —	口縁部の器内が厚いが、胴部はへう削りにより薄い。胴部は鋭角に反。胴上部右へ左横方向へう削り。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
94住-11	罎 土師器 床面+15	— (21.0) —	9・10の罎より器内が厚い。胴部へう削りにより、口縁部との境に段を持つ。右へ左横方向へう削り。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
94住-12 117	紡輪車	長さ5.0 幅5.1 厚さ1.3 重量50g	薄く少し楕円形を呈する。中心孔がずれている。裏と側面両面削り。	①暗緑灰色②完全形③滑石片④床面+10 孔径0.8

95号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版41

位置 III区北側の取り付け道路部に位置し、82号住居の東約2mでK-26・27グリッドに属する。

概要 奈良時代の82・83・90・94号住居と重複している。12軒が関係する住居密集地帯の中の一軒である。重複住居の中で最古であり、また最も床面が高いため4軒の住居により大部分が掘り取られており、北東部分の一部の床面と壁面のみが残存していた。



第270図 95号住居跡及び出土遺物実測図

構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていたが、明確な床面の検出はできなかった。柱穴や貯蔵穴は不明。

規模 不明。壁高は最も残りの良い東壁部分で2cmである。

遺物 土師器の甕の破片が少量出土した。

95号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第270図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②構成③残存④胎土⑤備考
95住-1	坏 土師器	- (14.0) - 床面	器高の高い坏である。底部へう削り。口縁部横ナデ。 口縁部が外反している。	①褐色②酸化③1/3④赤色粒を少量含む

96号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版41・42 遺物写真図版117

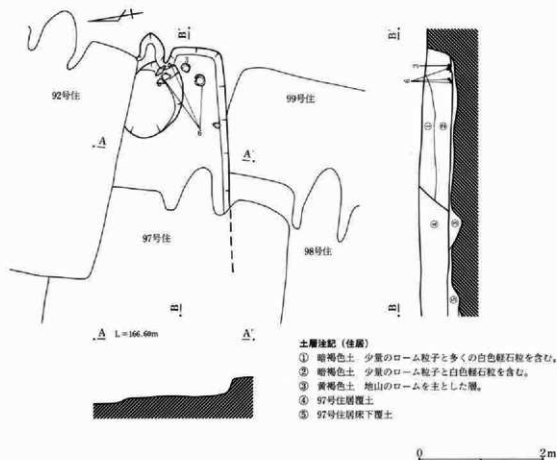
位置 III区北側の取り付け道路部に位置し、94号住居の東約3mでL-26グリットに属する。

概要 平安時代の92号住居に北側部分を、奈良時代後期の97号住居に西側部分を多く掘られ、奈良時代の98号住居と古墳時代の99号住居の北側部分を掘り込んで造られている。12軒か関係する住居密集地帯の中の一軒である。

構造 床面はロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られ、柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。

規模 東西南北とも不明である。壁高は最も残りの良い竈周辺の東壁面で38cmである。

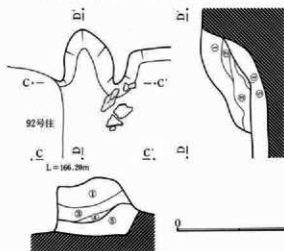
遺物 土師器の甕と甕や須恵器の坏が出土した。



第271図 96号住居跡実測図

96号住居跡(竈)

位置 住居東壁下の床面上から一部壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の大部分が床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。92号住居に左側袖の一部が削り取られている。



構造 多くのロームと少量の灰褐色粘質土を混入した土で造られていた。右側の袖の中に一個の小さな石が検出されたが袖石や天井石ではなかった。燃焼部床面と床面に近い覆土中より多くの焼土が検出された。

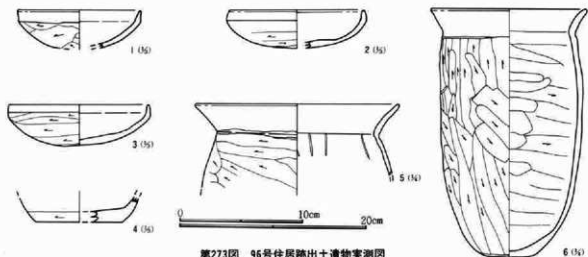
規模 煙道方向50cm、両袖方向40cmである。

遺物 燃焼部より土器器の裏の胴部破片が出土した。

土層法記(竈)

- ① 暗灰褐色土 多くの粘土と少量の焼土粒子を含む。
- ② 暗黄褐色土 ローム粒子を主とする。
- ③ 暗灰褐色土 焼土粒子・粘土粒子を多く含む。
- ④ 赤褐色土 焼土層。
- ⑤ 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子・焼土粒子を多く含む。

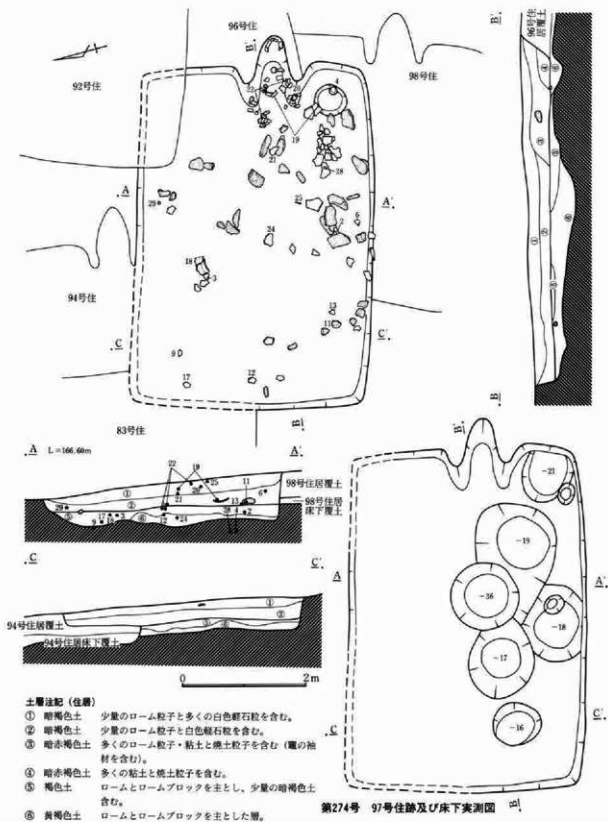
第272図 96号住居跡竈実測図



第273図 96号住居跡出土土器実測図

96号住居跡 出土土器観察表(挿図番号第273図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③灰化④胎土⑤備考
96住-1	環	- (10.0) -	丸底で口径の小さな環である。底部へう削り、口縁部横ナゲ、口縁部が外反する。	①褐色②酸化③①/③④ 1mm以下の砂粒を多く含む
96住-2	環 土師器	3.0 (11.0) -	底部は平底に近い丸底を見る。底部へう削り、口縁部細狭く横ナゲ、口縁部は内傾する。	①褐色②酸化③①/③④ 1mm以下の砂粒を多く含む
96住-3 117	環 土師器	3.3 11.2 -	丸底の小さな環である。口縁部は特に短く内傾する。底部は右回転手へう削り、口縁部中央はナゲ。底部中央の器肉が少し薄い。	①褐色②酸化③④は完形④ 1mm以下の砂粒を多く含む
96住-4	環 須恵器	- - (7.0)	底部の器肉が特に厚い。底部中央に糸切痕の痕跡あり。底部周辺へう削り、口縁部は「く」の字状に外反する。胴上部へう削り、口縁部は「く」の字状に外反する。胴上部へう削り、口縁部は「く」の字状に外反する。	①灰色②還元③小破片④密
96住-5 117	罎 土師器	- 22.0 -	器肉が薄い。口縁部は「く」の字状に外反する。胴上部へう削り、口縁部は「く」の字状に外反する。胴上部へう削り、口縁部は「く」の字状に外反する。	①褐色②酸化③口縁部完形・胴上部2/3④ 1mm以下の砂粒を多く含む
96住-6 117	罎 土師器	26.4 16.6 (5.0)	口径や器高の小さい罎である。最大径を胴中央部に持つ。口縁部は大きく外反しない。胴上部へう削り、口縁部は「く」の字状に外反する。胴上部へう削り、口縁部は「く」の字状に外反する。	①に多い褐色②酸化③④/⑤④ 1~3mmの砂粒を少量含む。粗



97号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版42 遺物写真図版117・118・119・148

位置 Ⅲ区北側の取り付け道跡部に位置し、90号住居の南約3mでL-26・27、K-27グリットに属する。

概要 奈良時代の83・94・96・98号住居及び平安時代の92号住居との6軒が重複している。

94号住居竈右側の床面上覆土・83号住居の竈と住居南東コーナーの床面上の覆土・98号住居の北側の床面下までを深く掘り込んでいる。また、96号住居西南部を掘り込み床面上に竈を造っている。そして、92号住居に北東部分が床面まで掘り込まれていた。このような関係から同じ奈良時代に属する5軒の住居の新旧関係は94→83→97号住居、98→96→97号住居の順となる。

構造 床面はルームとルームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られ明瞭であった。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが柱穴は掘られていなかった。

規模 東西5.5m、南北3.8mである。南壁で40cmである。貯蔵穴は直径50cmの円形を呈し、深さ21cmである。

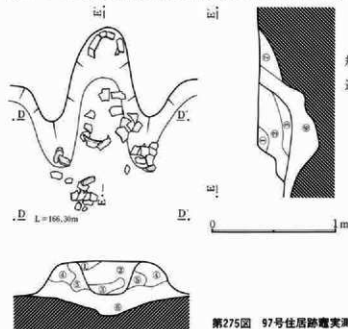
遺物 貯蔵穴周辺から南側の床面にかけて多くの土師器の環や甕と須恵器の環及び紡錘車の製品と剃片等が出土し、多くを図化することができた。また多くの石が投げ込まれたような状態で出土した。

床下 南側の床面下より多くの床下土坑が検出された。床面からの深さは図上に数字で示した。

97号住居跡(竈)

位置 住居東壁南寄りの壁面を掘り込んで造られている残存状態の良い竈である。

構造 ルームと灰褐色粘質土を多く混入した土で造られており、芯材等としての石は使用されていない。竈

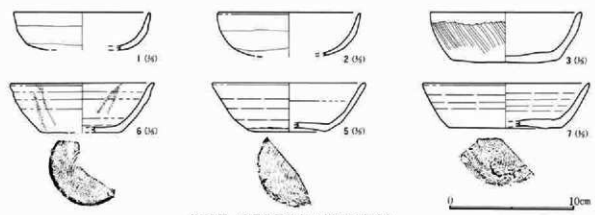


覆土中に多くの焼土粒子と燃焼部床面付近及び壁面が焼けて焼土化していた。
規模 煙道方向110cm、両袖方向60cmである。
遺物 土師器の甕の口縁部と胴部破片が出土。

土層検記(竈)

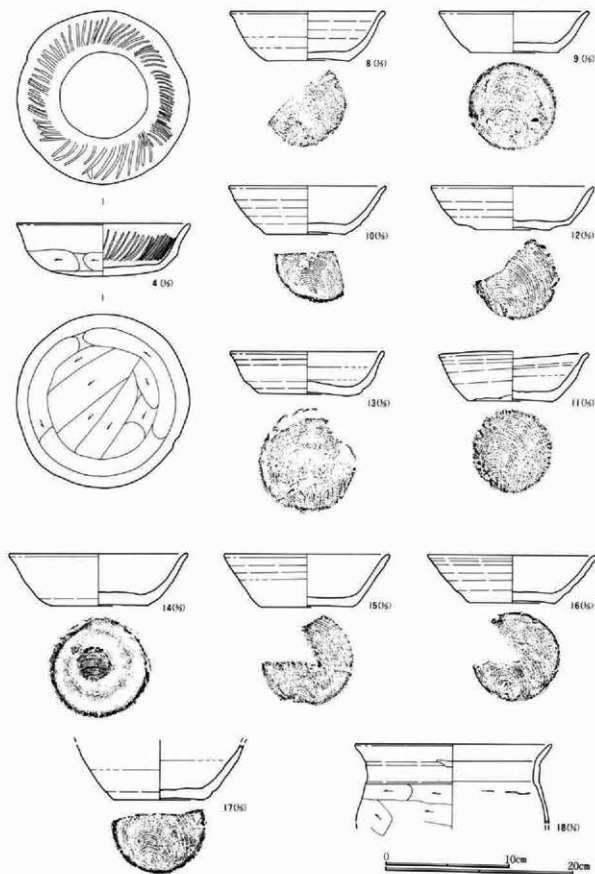
- ① 暗褐色土 ルームブロックを主とし、2~3mmの焼土粒子を多く含む。
- ② 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量のルーム粒子と粘土を含む。
- ③ 暗褐色土 多くの焼土粒子とルーム粒子を含む。
- ④ 灰褐色土 ルームと粘土を主とした層。
- ⑤ 灰褐色土 灰褐色粘質土とルームを主とした層。
- ⑥ 暗褐色土 ルーム粒子・ルーム小ブロックを主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ⑦ 96号住居覆土

第275図 97号住居跡竈実測図



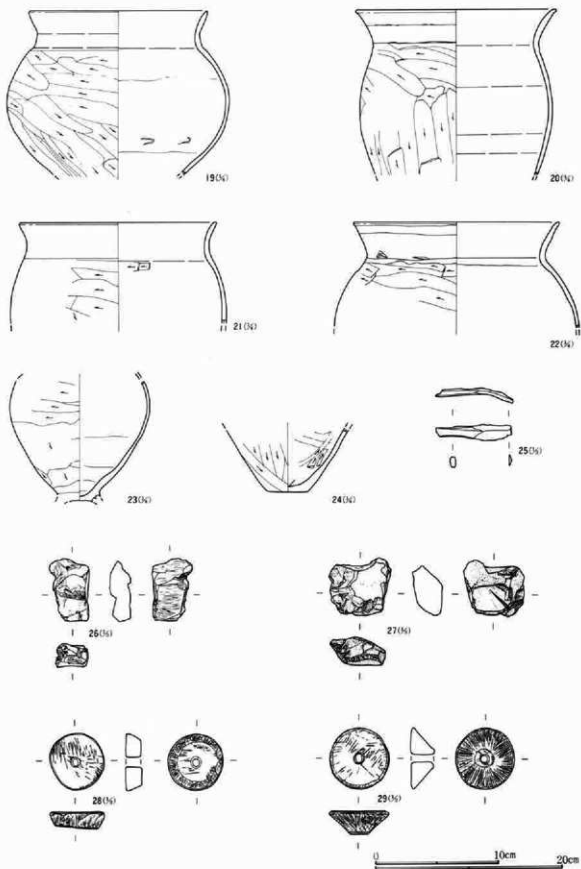
第276図 97号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第277図 97号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第278図 97号住居跡出土遺物実測図(3)

97号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第276・277・278図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②模文③残存④胎土⑤備考
97住-1 117	環 土師器	— (11.0) —	器内の薄い環であり、底部は丸味を持つが平底に近い。底部へう削り、体部ナデ、口縁部磨ナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
97住-2 117	環 土師器	— (11.2) — 床面-9	器内の薄い環であり、底部の器内は特に薄い。底部へう削り、体部ナデ、口縁部磨ナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
97住-3 118	環 土師器	4.0 12.0 8.4 床面-4	平底を呈し、体部から口縁部が直線的に外傾しつつ立ち上がる。体部右→左方向へう削り、底面ナデ、口縁部磨ナデ、内面ナデ、磨文は認められない。	①褐色②酸化③ほぼ球形④⑤⑥の環に似ている
97住-4 118	環 土師器	4.2 13.8 9.0 床面-40	底部の器内が厚くほぼ平底である。体部へ口縁部はほぼ直線的に外傾しつつ立ち上がる。体部中央内厚となる。底部へ体部へう削り、口縁部磨ナデ、体部へ口縁目の細い磨文。	①褐色②酸化③完形④赤色粒を少量含む
97住-5 118	環 須恵器 覆土	3.8 (12.4) (6.0)	底部の器内が少し薄く中央部が盛り上がっている。体部は内彎しつつ立ち上がる。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/4・底部1/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
97住-6 118	環 須恵器 床面+22	3.9 (11.6) (6.0)	底径が小さく底部中央の器内が薄い。体部はほぼ直線的に外傾しつつ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/3・底部1/2④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
97住-7 118	環 須恵器 覆土	3.6 (13.4) 9.0	底部中央の器内が薄い。体部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。底部右回転糸切痕。糸切後無調整。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/10・底部1/3④1mm以下の石英と長石粒を含む
97住-8 118	環 須恵器 覆土	3.9 (12.4) 6.6	底部の器内が6・7の環より厚い。体部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/10・体部1/6・底部2/3④1mm以下の石英と長石粒を含む
97住-9 118	環 須恵器 床面-26	3.3 (12.0) 6.9	底部の器内が薄い。体部へ口縁部は内彎しつつ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③2/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
97住-10 118	環 須恵器 覆土	3.8 (12.8) —	底部の器内が厚い。体部へ口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。口縁部外反なし。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁へ体部2/5・底部2/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
97住-11 118	環 須恵器 床面+2	3.9 11.8 6.4	底部の器内が薄い。体部へ口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。口縁部が外反する。底部右回転糸切痕。口縁部内側に一糸の紋線あり。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/3・底部4/5④片岩粒を含む
97住-12 118	環 須恵器 床面-12	3.5 13.0 6.0	底径が大きく浅い環である。底部周辺はナデ。周辺から1.5cm内側で右回転糸切。体部外面ロタロ目。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/3・底部4/5④片岩粒を含む
97住-13 118	環 須恵器 床面	3.5 (12.3) 8.2	底部の器内が厚く中央部がさらに内厚となる。体部へ口縁部がわずかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部が少し外反する。底部右回転糸切。糸切後無調整。	①灰白色②還元③口縁へ体部2/3・底部ほぼ完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
97住-14 118	環 須恵器 覆土	(14.2) 8.0 4.1	底部の器内が特に厚い。体部へ口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。体部下→底面右回転へう削り。底部中央に糸切痕の痕跡残る。	①灰白色②還元③口縁へ体部2/3・底部完形④⑤。1・2の環と少し異なる
97住-15 118	環 須恵器 覆土	4.2 (13.4) 7.4	底部の器内が厚く平である。体部はほぼ直線的に外傾しつつ立ち上がる。底部右回転糸切痕。無調整。	①灰白色②還元③口縁小破片・底部1/2④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
97住-16 118	環 須恵器 覆土	3.8 (11.6) (7.0)	底部の器内が厚く一定している。体部へ口縁部わずかに内彎しつつ立ち上がる。口縁部は外反していない。底部右回転糸切痕。底部と体部との境に段あり。	①灰白色②還元③口縁部1/4・底部4/5④1mm以下の砂粒を多く含む
97住-17 118	環 須恵器 床面-16	— (7.4)	底部の器内が厚く中央部が少し盛り上がっている。底部右回転糸切痕。底部と体部との境に段あり。	①灰白色②還元③体部1/4・底部2/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
97住-18 118	壺 土師器 床面-5	— 21.0 —	「コ」の字状口縁を呈す。頸部上下面にへう削りによる区画線あり。胴部右→左横方向へう削り。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
97住-19 118	壺 土師器 床面+10	— (19.2) —	丸胴の壺である。頸部は直立し口縁部は外反する。胴上部右→左横方向へう削り、胴下半上→右下方へう削り、内面ナデ。	①褐色②酸化③口縁部1/10・胴部1/3④赤色粒を含む
97住-20 119	壺 土師器 床面+30	— (21.4) —	最大径を口縁部に持つ。口縁は長くゆるやかに外反する。胴部右→左横方向へう削り。口縁部輪襷痕あり。	①褐色②酸化③口縁部へ胴部1/6④1mm以下の砂粒を多く含む
97住-21 118	壺 土師器 床面+30	— (21.0) —	器内が薄い。頸部はほぼ直立し口縁部が外反する。頸部と口縁部との境に輪襷痕あり。胴部右→左横方向へう削り。	①褐色②酸化③口縁部1/5・胴部1/6④1mm以下の砂粒を多く含む
97住-22 118	壺 土師器 カマド内直上	— (22.0) —	丸胴の壺と思われる。胴上部右→左横方向へう削り。口縁部磨ナデ。	①褐色②酸化③口縁部2/3・胴上部1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
97住-23 119	付台 土師器 覆土	— — —	胴上部の肩の張る壺である。胴上部右→左横方向へう削り、胴下部上→下縦方向へう削り。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
97住-24 118	壺 土師器 床面-16	— — 4.5	底部内側に放射状のへう削り、胴部外面上→下縦方向へう削り、底部ナデ。	①褐色②酸化③胴下半1/3・底部完形④1mm以下の砂粒を多く含む

97号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号278図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別 出土位置	器高・口径・底径(cm)	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
97住-25 148	鉄	長さ6.0 幅1.2 厚さ0.4 重量5.4g	鏃である。刃部断面が三角形を呈し、両辺となっている。刃部はなだらかな曲線を描く。	
97住-26	破片	長さ4.9 幅3.2 厚さ1.8 重量40g	滑石片岩の破片である。ノミの打痕が多く認められるため、紡錘車等の製作段階での剥片と思われる。	①暗緑灰色③破片④滑石片岩
97住-27	破片	長さ4.4 幅4.7 厚さ2.2 重量56g	滑石片岩の破片である。ノミの打痕が多く認められるため、紡錘車等の製作段階での剥片と思われる。	①暗緑灰色③破片④滑石片岩
97住-28 119	紡錘車	長さ4.5 幅4.5 厚さ1.4 孔径0.8 重量50g 床面-40	厚さの薄い紡錘車であり、表面荒砥削り。側面縦方向荒砥削り後、面取り状に横方向荒砥削り。底部荒砥削り、加工後表面磨き。ノミ等の加工痕なし。	①暗緑灰色③完形④滑石片岩
97住-29 119	紡錘車	長さ4.8 幅4.7 厚さ1.9 内径0.7 重量42g 床面+5	断面を細く削り込んでおり、側面がわずかに外翹する。表面全体を刀子状の鉄工具にして削って仕上げているようである。出土例が少ない。	①暗緑灰色③完形④滑石片岩⑤端部は面取りされている

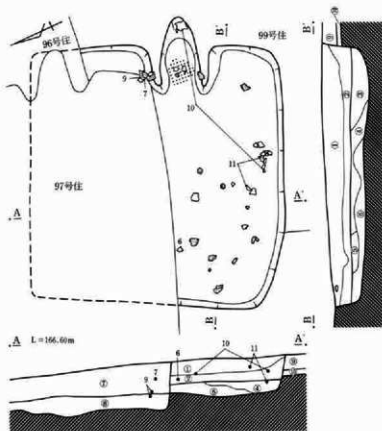
98号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版42・43 遺物写真図版119

位置 Ⅲ区北側の取り付け道路部に位置し、87号住居の東約2mでL-26・27グリットに属する。

概要 奈良時代の96号住居に北東コーナー部分を、97号住居に北側の多くの部分を掘られ、古墳時代の99号住居の西北部分を大きく掘り込んで造られている。重複している3軒の住居の新旧関係は99→98→96→97号住居の順である。12軒が関係する住居密集地帯の中の一軒である。

構造 床面はロームとロームブロックを主とした土で造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西4.15m、南北不明である。壁高は最も残りの良い南西壁面で33cmである。



遺物 多量の土師器の要と坏の破片や少量の須恵器の坏等が出土した。また覆土中より投げ込まれたような状態で多くの石が出土した。

土層表記 (住居)

- ① 暗黄褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 多量のローム粒子と少量の粘土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多量のローム粒子と灰色粘土を含む。
- ④ 暗褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 褐色土 多くのロームブロックと少量の粘土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 97号住居覆土 ⑧ 97号住居床下覆土
- ⑨ 99号住居覆土 ⑩ 99号住居床下覆土

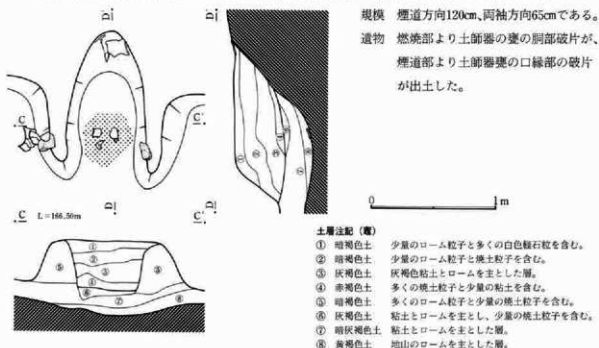
0 2m

図279図 98号住居跡実測図

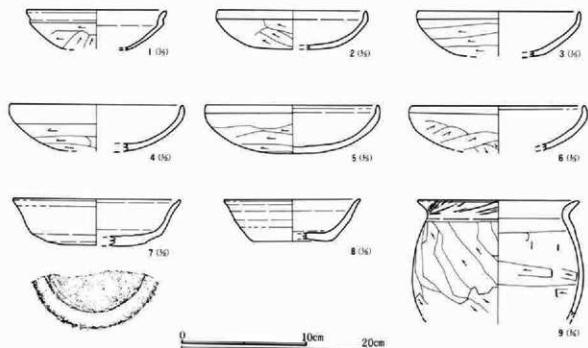
98号住居跡(竈)

位置 住居東壁の壁面を掘り込んで造られている残存状態の比較的良好な竈である。焚口部分と燃烧部の大部分が床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 多くのロームと少量の灰褐色粘質土を混入した土で造られていた。左右の袖の中に一個の小さな石が検出されたが袖石や天井石ではなかった。燃烧部床面と覆土中より多くの焼土が検出された。

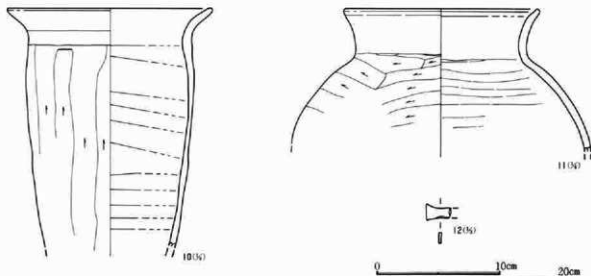


第280図 98号住居跡竈実測図



第281図 98号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第282図 98号住居跡出土遺物実測図(2)

98号住居跡 出土遺物観察表 (採回番号第281・282回)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色②酸化③残存④胎土⑤備考
98住-1	坏 土師器	— (11.2) —	口縁部は短いが大きく外反する。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
98住-2	坏 土師器	(3.1) (12.0) — カマド覆土	1の坏に底部はよく似ているが口縁部が全く異なり内傾する。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
98住-3	坏 土師器	— (13.0) —	口縁部が短く直立する。底部へう削り、口縁部横ナデ、器高が高い。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
98住-4	坏 土師器	— (11.8) — カマド覆土	口縁部は短くわずかに内彎する。底部のへう削りは口縁部手前まで行なわれず、その部分はナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
98住-5	坏 土師器	3.8 13.8 — 覆土	口縁部は短くわずかに内彎する。底部のへう削りは口縁部手前まで行なわれず、その部分はナデ。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
98住-6	坏 土師器	— 14.0 — 床面+4	口縁部は短くわずかに内彎する。底部のへう削りは口縁部手前まで行なわれず、その部分はナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
98住-7	坏 須恵器	(3.7) (13.4) (8.0) カマド内+21	器高が低く底径が大きい。底部は周辺部を除く内側右回転へう削り、周辺回転ナデ、口縁部わずかに外反。口縁部内側に一条の沈線。	①灰白色②還元焼成③1/2④1mm前後の石英と長石粒を多く含む
98住-8	坏 土師器	3.3 (11.0) (6.4) 覆土	底部回転未調整。外側底部に多くのクロロ目残る。口縁部わずかに外反する。	①灰白色②還元③1/6④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
98住-9	壺 土師器	— (17.0) — カマド内+2	最大径を胴中央部に持つ。口縁は短く外反する。胴部右下→左上方向へう削り。口縁部にへうの削痕有。	①明赤褐色②酸化③1/2④片岩の破片と赤色粒を含む
98住-10	壺 土師器	— (22.0) — カマド内+12 床面+15	最大径を口縁部に持ち、胴部の最大径を肩部に持つ。頸部が直立し、口縁部が外傾する。胴部は下→上の直線のへう削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	①褐色②酸化③口縁部1/4・胴上部1/2・胴下半1/4④1mm前後の砂粒を多く含む
98住-11	壺 土師器	— (21.0) — 床面+22	丸胴の壺である。口縁部が長くならかに外反する。胴部右→左横方向へう削り。	①褐色②酸化③口縁部1/4・胴上部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
98住-12	鉄	長さ1.9 幅1.2 厚さ0.2 重量1.4g	小破片のため名称や用途不明であるが、刀子の茎と刀部の境部分の可能性も考えられる。覆土中より出土。	

99号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版43 遺物写真図版119・120

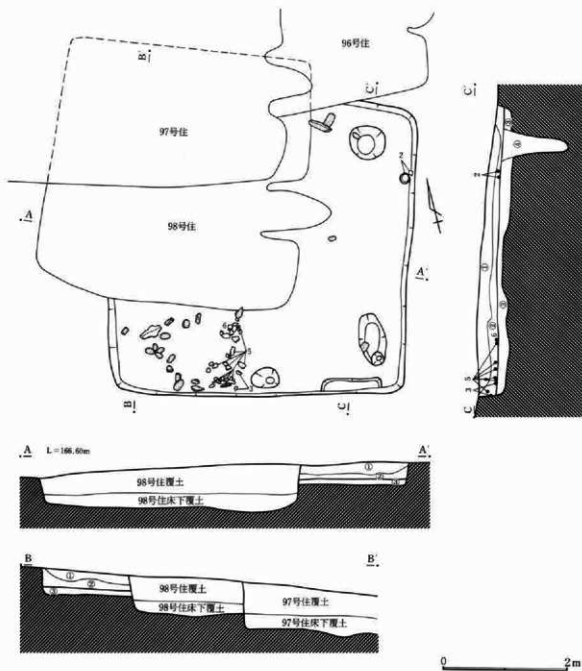
位置 III区北側の取り付け道路部に位置し、87号住居の東約3mでL-26・27グリットに属する。

概要 奈良時代の96号住居に北側の一部を、98号住居に中央から北西の多くの部分を掘り込まれている。このため調査できた部分は約半分である。重複している3軒の新旧関係は99→98→96号住居の順である。竈は恐らく北壁に造られていたものと思われる。12軒が関係する住居密集地帯の中の一軒である。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。小穴が3個
検出されたが柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西4.80m、南北4.65mである。壁高は最も残りの良い南壁面で30cmである。

遺物 土師器の坏と甕が出土した。

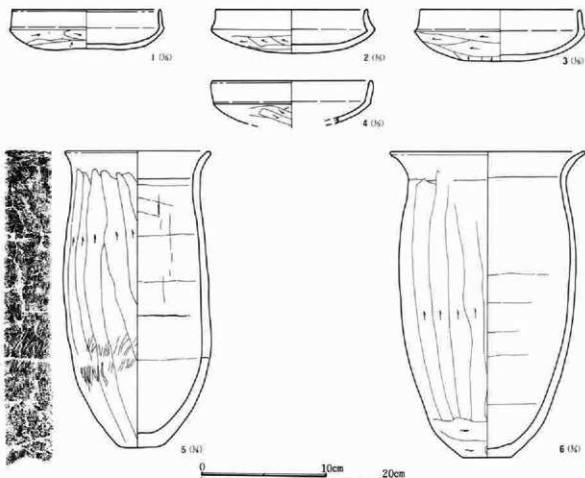


土層注記 (住層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子和多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子和白色軽石粒を含む。
- ③ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

第283図 99号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第284図 99号住居跡出土遺物実測図

99号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第284図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
99住-1 119	坏 土師器	3.2 (12.0) - 覆土	底部中央が平底に近い。底部と口縁部との境に明瞭な横を持つ。口縁部は長く直立する。底部へ丸削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
99住-2 119	坏 土師器	3.5 12.2 - 床面+2	1同様に底部が浅い。底部と口縁部との境に横を持つが、1と異なり鋭角な工具により区画されていない。底部へ丸削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③口縁部4/5-他ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く含む
99住-3 119	坏 土師器	4.1 13.0 - 床面+2	底部の浅い丸底の坏である。底部と口縁部との境に明瞭な横を持つ。口縁部は少し内傾する。底部へ丸削り、口縁部横ナデ。	①表面黒色・断面褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
99住-4 119	坏 土師器	- (13.0) - 覆土	底部の浅い丸底の坏である。底部と口縁部との境に明瞭な横を持つ。口縁部は少し外傾する。底部へ丸削り。	①褐色②酸化③口縁部1/3・底部1/5④1mm以下の砂粒を多く含む
99住-5 119	壺 土師器	31.5 15.6 4.5 床面+2	最大径を胴下半部を持つ容量の小さな壺である。口縁部は短くなだらかに外反する。底部は肉厚で平である。底部→口縁部縦方向へ丸削り、内面ナデ。輪襷の痕跡が残る。	①褐色②酸化③4/5④1~2mmの大きな砂粒を含む。片岩の破片も含む
99住-6 120	壺 土師器	32.4 (21.0) (5.5) 床面+2	最大径を胴中央部を持つ。口縁部は幅広く大きく外反する。胴部下→上腹方向へ丸削り。底部左→右横方向へ丸削り。内面に輪襷の痕跡が残る。	①褐色②酸化③1/2・底部周辺ほぼ完形④2~3mmの砂粒を多く含む器表面が浅い。片岩の破片も含む

100号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版43

位置 III区北側の取り付け道路部に位置し、90号住居の東約2mでK-26グリットに属する。

概要 住居の大部分が調査範囲外にあり、南西コーナーの一部分だけの調査である。出土遺物も極端に少なく時期判定も困難であるが、奈良時代として扱った。

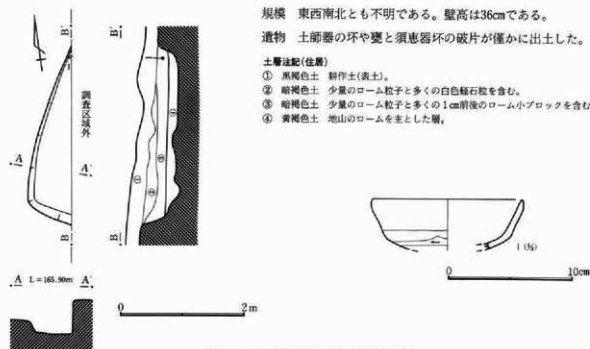
構造 床面はロームとロームブロックを主とした土で造られていた。

規模 東西南北とも不明である。壁高は36cmである。

遺物 土師器の環や甕と須恵器環の破片が僅かに出土した。

土層注記(住居)

- ① 黒褐色土 耕作土(表土)。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの1cm前後のローム小ブロックを含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第285図 100号住居跡及び出土遺物実測図

100号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第285図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部變形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
100住-1	環 土師器	— (12.0) — 床面+6	底部が浅く口縁部の長い環である。底部と口縁部との境に明瞭な線はない。底部へう削り。	①褐色②焼成③口縁部1/3・底部小破片 ④赤色粒を少量含む

101号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版43 遺物写真図版120

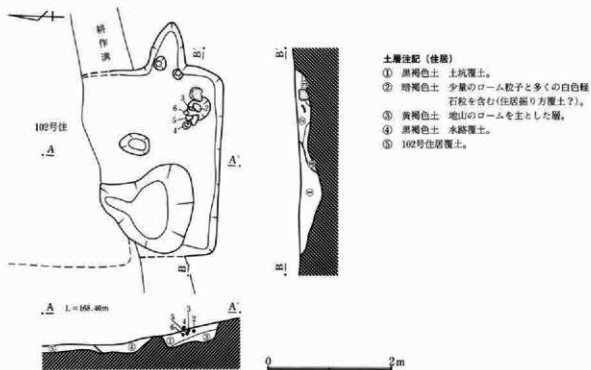
位置 II区南西部に位置し、32号住居の南約22mでN-20グリットに属する。

概要 平安時代の102号住居及び古墳時代の103号住居と重複する。本住居は高い土手の上に位置し、土手の削平とともに多くの部分が削平され、さらに中央部を境界溝と思われる溝により掘り込まれているため南側床下部分のみの調査であった。西側の床面下に黒倒木痕が認められた。竈も痕跡として確認できただけで、焚口付近に袖石を埋めたと思われる小穴が検出された。残存状態が悪いため重複関係は明確でないが102号住居の南側と103号住居の南西端部を掘り込んで造られていたものと思われる。

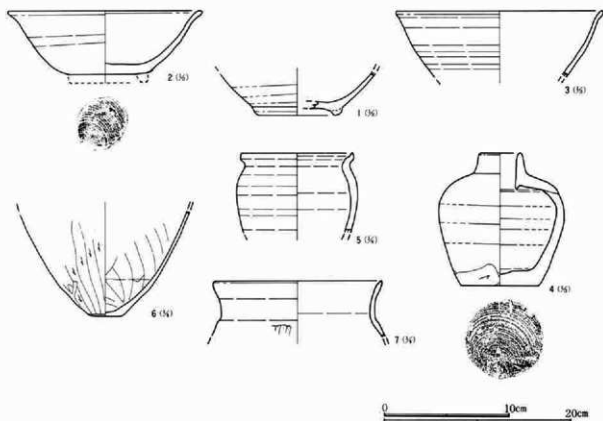
構造 床面は残っていない。貯蔵穴は竈右側に検出できたが柱穴は掘られていなかった。

規模 東西2.95m、南北は不明である。貯蔵穴は直径35cmの円形を呈し、深さ20cmである。

遺物 貯蔵穴内より少量の須恵器の塊が出土した。特に注目される遺物としてほぼ完形的小型短頸壺の出土があげられる。



第286図 101号住居跡実測図



第287図 101号住居跡出土遺物実測図

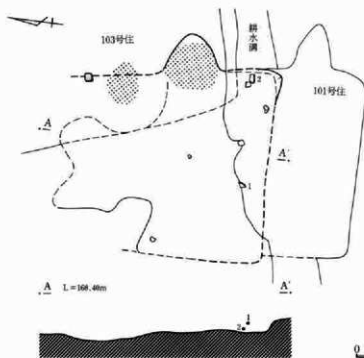
101号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第287図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
101住-1	埴 須恵器	- - (7.2) 覆土	断面方形の高台を持つ。底部の器内が厚い。高台内側に永切痕は確認できない。	①灰白色②還元③小破片④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
101住-2 120	埴 須恵器	- 15.6 6.2 貯蔵穴内+15	底部の器内が厚い。体部〜口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部で内厚となり大きく外反する。高台がはずれている。底部右回転永切痕。	①灰白色②還元③高台欠損・口縁〜体部2/3・底部完形④1mm前後の砂粒を少量含む
101住-3	埴 須恵器	- (16.6) - 貯蔵穴内+18	体部〜口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がり、口縁部で内厚となり外反する。	①灰白色②還元③口縁〜体部1/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
101住-4 120	小型壺 須恵器	10.5 3.5 6.2 貯蔵穴内+26	底部は平底で器内が厚く、右回転永切痕が残る。肩部以下の下全面回転へうり。肩部〜口縁部横ナダ。胴部と肩面上部は別に作り接合している。	①灰白色②還元焼成③胴部を一部欠くが他はほぼ完形④密
101住-5 120	小型壺 須恵器	- (12.0) - 貯蔵穴内+14	胴部は丸く、口縁は外反し端部が幅広くなり上方に立ち上がる。内外面クロロ目。	①灰白色②還元③口縁〜胴上部1/3④1〜2mmの黒色粒を少量含む
101住-6 120	壺 土師器	- - 3.6 貯蔵穴内+15	底部外側はへうりによりほぼ平。内側はナダにより丸底。外裏上→下縦方向へうり。内面ナダ。	①橙色②酸化③胴下2/3・底部完形④赤色粒を少量含む
101住-7	壺 土師器	- (18.0) - 覆土	頸部がほぼ直立し、口縁部が少し外反する。肩部右→左横方向へうり。口縁部に輪轆痕あり。	①橙色②酸化③小破片④赤色粒を少量含む

102号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版43

位置 II区中央部南西寄り位置し、101号住居の北側部分と重複しておりN-20グリッドに属する。

概要 平安時代の101号住居や古墳時代の103号住居と重複する。本住居は竈と思われる部分に焼土層が認められ、また床面の一部が残っていたために住居として扱ったが、他の大部分は不明である。竈北側に少量の焼土が認められるため他にも一軒存在していた可能性もある。竈や床面の一部は103号住居南西部の覆土を掘り込んで造られている。



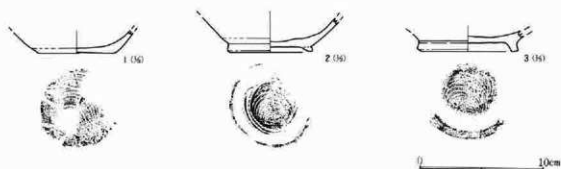
構造 床面はほとんど残っていない。焼土粒子の分布やわずかな色調の違いから床面を想定した。貯蔵穴や柱穴は確認できなかった。

規模 東西推定3.10m、南北不明である。

遺物 少量の土師器製の破片や須恵器の坏や埴が出土した。

第288図 102号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第289図 102号住居跡出土遺物実測図

102号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第289図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
102住-1	坏 須恵器	- - 6.0 床面+14	底部の器内が薄い。特に中央部が薄い。内面に墨の 圓まりが多く付着。底部右回転未切取。	①表面黒色・断面灰色②還元③体部下 半1/3・底部4/5④1mm以下の石英と長 石粒を含む
102住-2	坏 須恵器	- - 6.5 床面+4	端部の細い高台がなく、底部中央の器内が薄い。高 台部内側右回転未切取が残る。	①灰白色②還元③体部下半1/3・底部 4/5④1~2mmの砂粒をわずかに含む
102住-3	坏 須恵器	- - (7.8) 覆土	高台は断面方形を呈し太い。高台内側右回転未切取。	①表面黒色・断面灰白色②還元③底部 完・高台1/3④1~2mmの砂粒と赤色粒 を含む

103号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版44・45 遺物写真図版120・121・122・123

位置 II区中央部西寄りに位置し、39号住居の北約3mでM-20、N-20グリットに属する。

概要 平安時代の101・102号住居と西部分で重複している。この2軒により覆土上面が少し掘り込まれて
いる。南側の残りは良好であるが北側の残りは悪く特に北東部分は道路状遺構により床面まで削り取
られている。竈が2ヵ所検出され東壁から北壁へ造り変えられていた。

構造 床面はロームを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られ良好であった。柱穴は4本確認された。
竈は北壁と東壁の2ヵ所で検出され、竈右側にそれぞれ一個の貯蔵穴が掘られていた。また残りの悪
い北東部分以外の壁面下において周溝が確認された。

規模 東西6.90m、南北6.85mのほぼ正方形を呈する。壁高は残りの良い南壁面で48cmである。柱穴1は直
径55cm深さ96cm、柱穴2は直径55cm深さ96cm、柱穴3は直径60cm深さ71cm、柱穴4は直径65cm深さ92
cmである。周溝は幅30cm深さ11cmである。北竈右側の貯蔵穴は直径50cm深さ100cm、東竈右側の貯蔵穴
は直径60cm深さ95cmである。

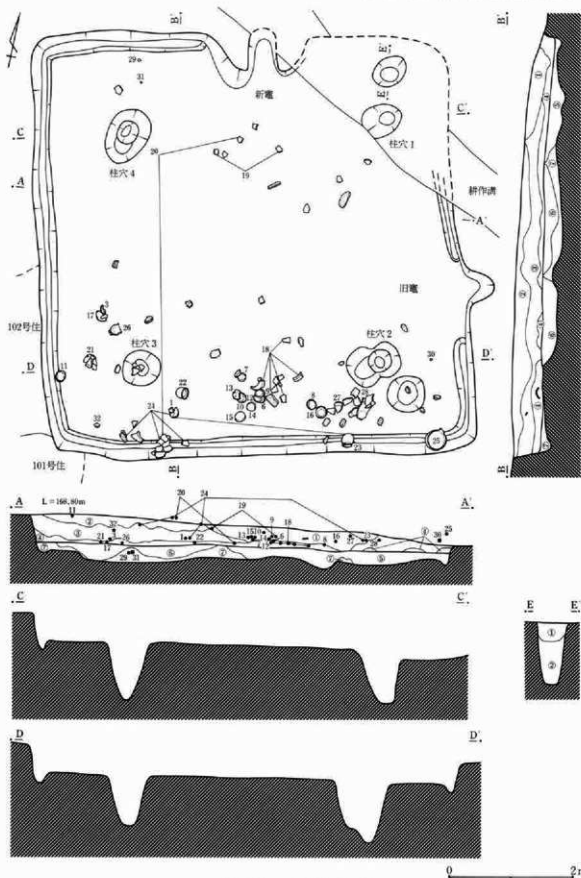
遺物 土師器を中心とした多くの坏や甕が出土した。特に南側中央部床面において坏や甕が密集して出土し、
中には坏が重なり合いながら出土した。紡錘車や鈴の完形品が出土したことが注目される。

103号住居跡北竈(新竈)

位置 住居北壁中央部の壁面から床面にかけて造られており、燃焼部の多くは住居内に位置する。燃焼部の
一部から煙道部分は削り取られて残っていない。

構造 残りが悪く不明な部分が多い。多くのロームと少量の暗褐色土を混入した土で造られており、燃焼部
床面と床面に近い覆土中に多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向推定95cm、両袖方向推定120cmである。 遺物 出土は認められなかった。



第290図 103号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

土層法記(住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒と少量の炭を含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の黒褐色土を含む。
- ⑤ 暗褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 暗褐色土 5層より多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

土層法記(貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 ローム粒子を主とし、ごく少量の焼土粒子を含む。
- ② 黄褐色土 ロームとローム小ブロックを主とする層。

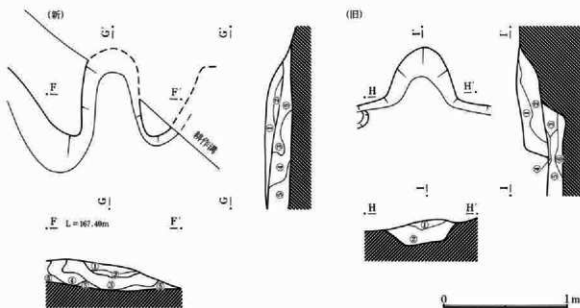
103号住居跡東廬(旧廬)

位置 住居東壁やや雨寄りの壁面から床面にかけて造られ、燃烧部の多くは住居内に位置していたものと思われる。旧廬のため造り替えの段階において床面上に位置する燃烧部や袖部は削り取られており、壁面に燃烧部と煙道部の一部が残っている。

構造 残りが悪く多くの部分が不明である。床下部分に少量の焼土粒子が検出された。また燃烧部の一部と煙道部に多くの焼土粒子が検出された。

規模 不明

遺物 出土は認められなかった。



土層法記(新廬)

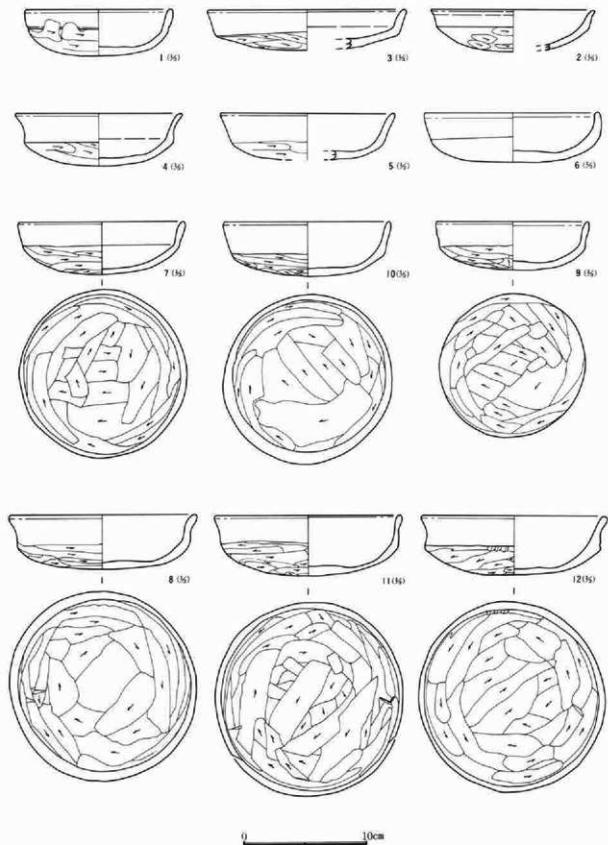
- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ③ 暗褐色土 暗褐色土中に炭・焼土粒子を含む軟質土層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

土層法記(旧廬)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くの焼土粒子とローム粒子・粘土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。
- ④ 赤色土 焼土を主とした層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

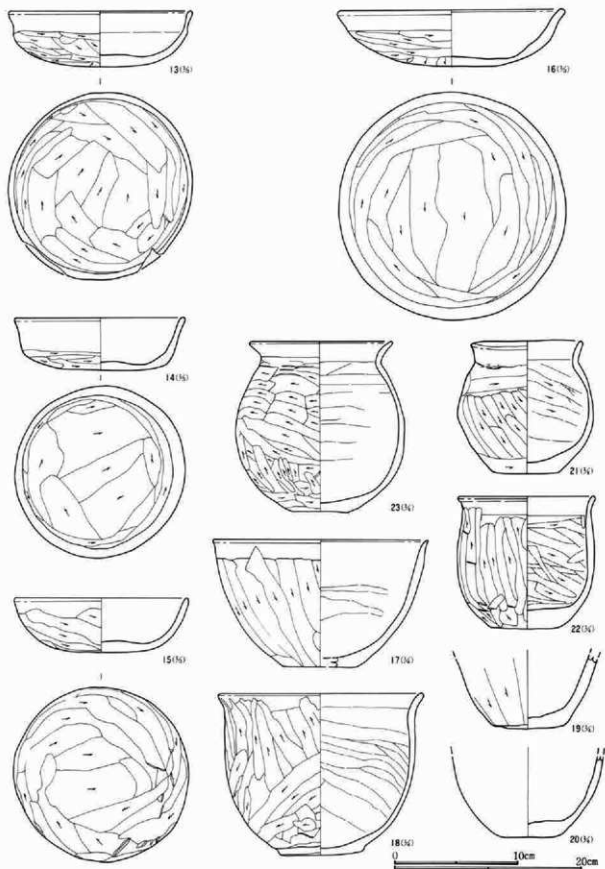
第291図 103号住居跡新旧廬実測図

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物

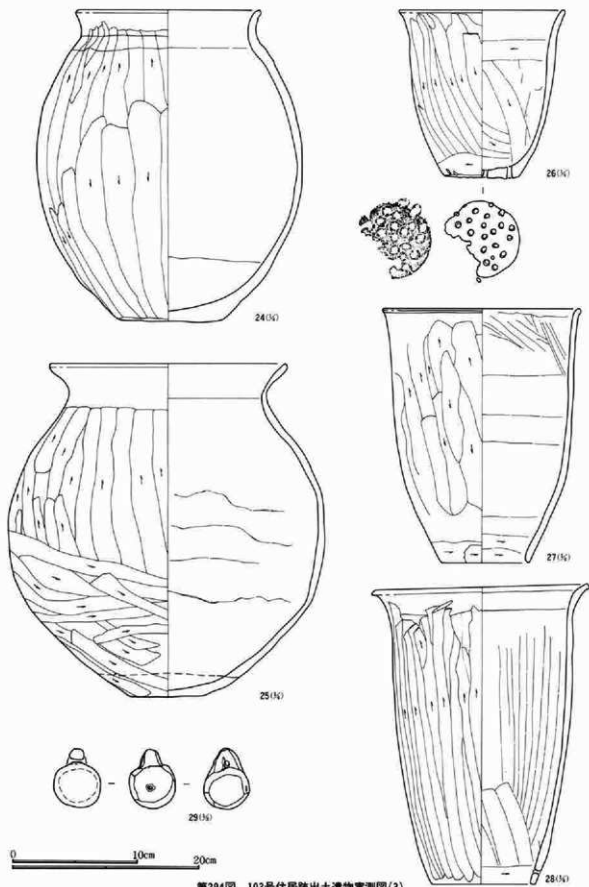


第292図 103号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

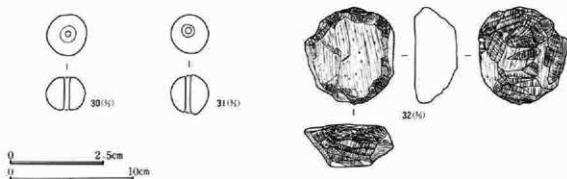


第293図 103号住居跡出土遺物実測図(2)



第294図 103号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 検出された遺構と遺物



第295図 103号住居跡出土遺物実測図(4)

103号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第292・293図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①着色②焼成③残存④胎土⑤備考
103住-1 120	土師器 床面+7	4.7 (12.0) -	底部が残く平底に近い丸底を呈している。底部と口縁部との境を一糸の沈線でご区分。底部へう削り。	①明黄褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
103住-2	土師器 覆土	— (13.0) -	底部が残く丸底を呈する。口縁部は上端が外反する。底部と口縁部との境との線はない。底部へう削り。	①褐色②酸化③1/4④密
103住-3	土師器 床面+7	— (16.0) -	浅い坏であり面に近い。全体に器肉が厚い。口縁部は長くゆるやかに外反する。底部へう削り。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒と片岩を含む
103住-4	土師器 覆土	4.2 (13.4) -	底部が残い。口縁部は長くゆるやかに外反する。底部へう削り、口縁部ナデ、器肉が全体に薄い。	①褐色②酸化③口縁部1/4・底部2/3④赤色粒を含む
103住-5	土師器 覆土	— 14.0 -	底部が残い。口縁部は長くゆるやかに外傾する。口縁部の器肉が厚い。	①褐色②酸化③口縁部1/2・底部小破片④赤色粒を少量含む
103住-6	土師器 床面+7	3.9 14.1 -	全体に器肉が厚くボテツとした感じである。底部と口縁部との境に明瞭な線はない。底部へう削り。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を多く含む
103住-7	土師器 床面+5	4.2 13.4 -	底部が残く丸底を呈している。口縁部は肉厚となりゆるやかに外傾する。底部と口縁部との境にわずかな線を持つ。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①によい褐色②酸化③完形④赤色粒を含む
103住-8	土師器 床面+2	4.3 15.0 -	底部が残く平底に近い丸底を呈している。底部と口縁部との境に明瞭な線はない。口縁部上半が外反する。底部へう削り、口縁部ナデ。	①褐色②酸化③完形④赤色粒を少量含む⑤密な感じの作りである
103住-9	土師器 床面+10	3.8 12.2 -	底部が残く平底に近い丸底を呈している。底部と口縁部との境に線を持つ。口唇部は内傾方向にへう削り、底部へう削り、口縁部横ナデ。	①によい褐色②酸化③完形④赤色粒を含む
103住-10	土師器 床面+8	4.3 13.4 -	底部が残く平底に近い丸底を呈している。底部と口縁部との境にわずかな線を持つ。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①によい褐色②酸化③完形④赤色粒を含む
103住-11	土師器 床面+40	4.8 15.0 -	底部が残く平底に近い丸底を呈している。底部と口縁部との境の線はわずかである。口唇部は丸味を持つ。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①によい褐色②酸化③口縁部一部欠・他は完形④赤色粒を含む
103住-12	土師器 床面+9	4.7 14.8 -	底部が残く平底に近い丸底を呈している。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁中央部が狭くなる。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③完形④赤色粒を含む
103住-13	土師器 床面+9	4.4 14.8 -	底部中央が平底に近い丸底を呈する。底部の器肉が厚い。底部と口縁部との境に割れ線を持つ。口縁部がゆるやかに外反。底部へう削り。	①によい褐色②酸化③ほぼ完形④赤色粒を含む
103住-14	土師器 床面+15	4.2 13.6 -	底部が残く平底に近い丸底を呈する。口縁部は長くゆるやかに外傾する。底部と口縁部との境にわずかな線を持つ。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①によい褐色②酸化③完形④赤色粒を含む
103住-15	土師器 床面+9	4.3 14.0 -	平底に近い丸味を持つ底部である。へう削りを口縁部まで行ない、底部と口縁部との境の線はない。撰製環とは言えない。	①によい褐色②酸化③完形④赤色粒を含む
103住-16	土師器 床面+9	4.5 18.2 -	坏と言うより皿と表現したほうが良い。底部中央はほぼ平であるが、底部周辺から口縁部がゆるやかに外傾。底部と口縁部との境の線はほとんどない。	①褐色②酸化③完形④赤色粒を含む

103号住居跡 出土遺物観察表 (採図番号第293・294・295図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①褐色②酸化③残存④胎土⑤備考
103住-17 121	鉢 土師器	13.5 23.0 (8.0) 床面+1	底部から口縁部まで内湾しつつ開く。口縁部の器内が薄く外反する。左上→右下方向へ傾り。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
103住-18 121	鉢 土師器	17.2 22.0 8.8 床面	底部から口縁部まで内湾しつつ開き、口縁部が外反する。底部と胴部との境に段を持つ。胴部下→上段方向へ傾り、胴中→下部右上→左下斜方向へ傾り。	①にぶい褐色②酸化③ほぼ成形④1mm以下の砂粒を多く含む⑤内面ナデ
103住-19	甕 土師器	— — 7.6 床面+26	器内が厚い。胴部上→下方向へ傾り、内面ナデ、底部ナデ、器表面が広い。	①にぶい褐色②酸化③胴下半→底部ほぼ成形④1~3mmの砂粒と片岩を含む
103住-20 121	甕 土師器	— — 7.0 床面+11	底部の器内が特に厚い。器表面が広いため傾り側の単位確認できない。	①にぶい褐色②酸化③胴下半2/3・底部成形④1~3mmの砂粒と片岩を含む
103住-21 121	小型甕 土師器	14.1 12.0 7.2 床面	胴中央部に最大径を持つ丸胴の小型甕である。底部の器内が厚く、口縁部がならかに外反する。胴部左→右横方向、胴中→下部左上→右下斜方向へ傾り。	①褐色②酸化③ほぼ成形④1mm以下の砂粒を多く含む⑤内面ナデ
103住-22 121	小型甕 土師器	14.0 14.7 7.6 床面	胴中央部に最大径を持つ丸胴の小型甕である。底部の器内が特に厚い。口縁部が短く外反する。胴部上→下方向へ傾り、内面をいれなす。	①褐色②酸化③成形④1mm以下の砂粒を多く含む
103住-23 121	埴 土師器	18.0 15.3 6.0 床面+7	21・22と同様な小型甕であるが、いずれも形や整形方法が異なる。底部の器内が厚いことは共通する。胴部は右→左横方向へ傾り、内面ナデ。	①褐色②酸化③口縁一部を欠けがほぼ成形④多くの赤色粒を含む
103住-24 122	甕 土師器	33.2 19.8 10.8 床面+7	最大径を胴中央部に持つ丸胴の甕である。口縁部は直立後外反する。器表面が非常に広く砂粒が目立つ。	①褐色②酸化③4/5④1~3mmの砂粒を多く、3~4mmの砂粒を少量含む
103住-25 121	甕 土師器	35.3 (25.4) 7.5 床面+21	24同様の丸胴の甕であるが、24ほど表面が広くない。口縁部が大きく外反する。胴上半は下→上段方向へ傾り、胴中→下半は左上→右下方向へ傾り。	①褐色②酸化③口縁部1/3・胴部1/10・胴上部1/2・胴下部→底部成形④1~3mmの砂粒を多く含む、片岩を少量含む
103住-26 122	甕 土師器	17.8 (17.6) (8.0) 床面	底部に多くの穿孔を持つ甕である。穿孔は外側から行なわれている。胴部は左上→右下斜方向へ傾り、胴下部は右→左横方向へ傾り、内面ナデ。	①褐色②酸化③口縁部1/3・胴部1/2・底部4/5④1mm以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む
103住-27 122	甕 土師器	26.9 (21.0) 9.3 床面+16	底部の付かない大きな甕である。胴下部内側横方向へ傾り、胴部縦方向へ傾り、口縁部は短くわずかに外反する。内面ナデ。	①褐色②酸化③2/3④1~3mmの赤色粒を多く含む
103住-28 122	甕 土師器	31.5 23.2 11.0 床面+7	底部の付かない大きな甕である。胴下部内側横方向へ傾り、胴部下→上段方向へ傾り、口縁部はならかに外反、内面縦方向のナデ。	①にぶい褐色②酸化③ほぼ成形④1~3mmの赤色粒を多く含む⑤胴下減少し上部に對をなす2個の穿孔あり
103住-29 123	鉢 土師器	総部長さ1.5 穴の 径0.3 鉢部高さ3.2 横3.5 床面	鉢部を持つ鉢であり、中に小石と思われるものが入って音がする。傾りは一切行なわれていない。全体がゆがんでいる。大きな砂粒が目立つ。	①にぶい黄褐色②酸化③成形④1~3mmの砂粒を含む。粗い胎土
103住-30 123	丸玉	幅1.1 孔径0.14 厚さ0.9 重量1.1g	土製丸玉と思われる。中央に約1mmの貫通した穴がある。完全な球形でなく穴のある箇所が少し平となる。	①黒褐色②酸化③成形④密⑤床面+13
103住-31 123	丸玉	幅1.0 孔径0.15 厚さ1.0 重量1.0g	30の玉とほとんど同様である。貫通した穴の位置が少しずれている。両方とも表面は黒色処理している。	①褐色②酸化③成形④密⑤床面
103住-32 123	紡錘車	長さ7.6 幅7.0 厚さ3.4 重量245g	紡錘車の未製品である。表面をノミを用いて完成りした段階の製品である。加工はすべてノミである。底面は自然面。	①明緑灰色②成形④滑石片着

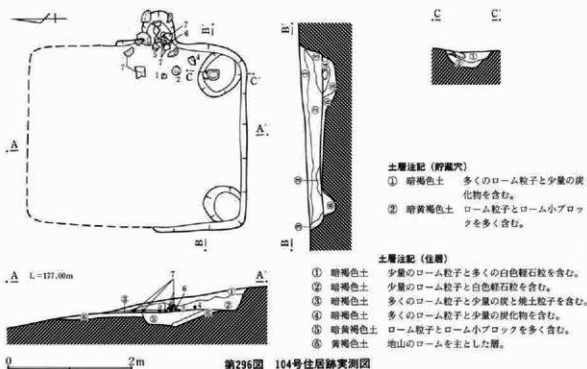
104号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版45 遺物写真図版123・148

位置 III区南西端部に位置し、T-29グリットに属する。

概要 調査区南側に位置し周辺の20m以内には他の住居は検出されなかった。竈を含む南側半分の壁面は残存していたが北側は床面が一部残存していたのみで北端の床面と壁面は残っていない。

構造 床面はローム粒子とロームブロックを主とした土で造られ、貯蔵穴は甕右側に検出できたが柱穴は掘られていなかった。南西コーナー部分に貯蔵穴に似た小穴が検出された。

規模 東西2.95m、南北推定3.50mである。壁高は最も残りの良い南壁面で28cmである。貯蔵穴は少し歪んでいるが直径約60cmで深さが26cmであった。南東コーナーの小穴は直径60cmで深さが28cmであった。



第296図 104号住居跡実測図

遺物 竈周辺を中心として床面や覆土中より須恵器の坏や埴また羽釜や灰釉陶器の壺等が出土した。貯蔵穴内より羽釜の破片が出土した。

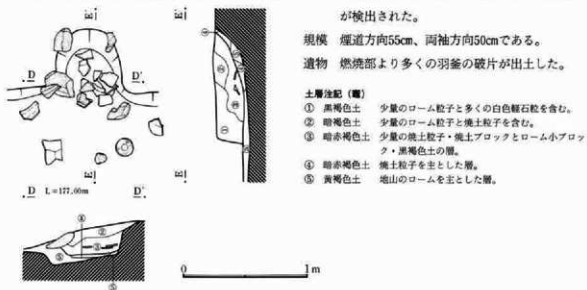
104号住居跡 (竈)

位置 住居東壁を掘り込んで造られている。焚口部分と燃烧部の一部が床面上に位置するが、燃烧部の大部分と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

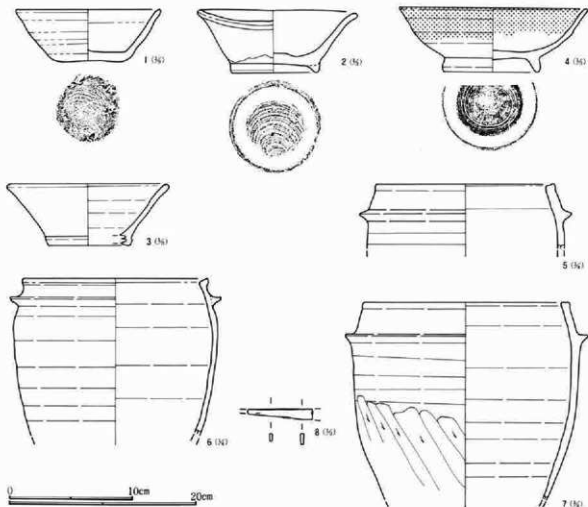
構造 壁面に4個の片岩がほぼ据えられた状態で出土し、竈内より3個に割れた砂岩が出土したことより石を多く使用した竈である。砂岩は天井石の破片と考えられる。燃烧部から煙道部の床面に多くの焼土が検出された。

規模 煙道方向55cm、両袖方向50cmである。

遺物 燃烧部より多くの羽釜の破片が出土した。



第297図 104号住居跡竈実測図



第298図 104号住居跡出土遺物実測図

104号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第298図)

遺物番号 図版番号	形状及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④土⑤備考
104住-1 123	坏 須恵器	4.2 11.6 5.0 床面	体部へ口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。口縁部の外反はほとんどない。底部右回転糸切、糸切後底部周辺ナゲ整形。外面多くのロクロ目。	①灰白色②還元③ほぼ完形④1mm内外の石英と長石粒を多く含む⑤軟質である
104住-2 123	埴 須恵器	12.8 7.1 5.0 床面+3	坏底部に轆に貼り付けた高台を持つ。口縁部は内厚となり外反する。高台下端部はヘラ削り、高台部内側右回転糸切痕。	①明黄褐色②酸化③完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
104住-3	埴 須恵器	4.9 13.0 6.8 覆土	低い高台を持つ。口縁部は内厚となり外反する。内面に右回転ロクロ目。	①灰白色②還元軟質③小破片④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
104住-4 123	埴 灰釉	5.1 (15.0) 7.5 床面+7	高台は太く大きい。下腹を両側から削り込んでいる。体部下半へ削り。口縁部わずかに外反。高台部内側右回転ナゲ整形。	①黄地灰オリーブ色・釉は多くが透明で薄い部分で緑色②還元③④⑤密
104住-5	羽釜	- (18.0) - カマド内+2	蹄の断面は三角形でいねいに貼付けてある。口縁部は内厚となり口唇部は平で中央部が少し凹状。	①よい②褐色③④⑤1mm以下の石英と長石粒を多く含む
104住-6 123	羽釜	- (19.8) - カマド内+3	器内が薄い。蹄は上面が平となる断面三角形。口縁部は厚さは筋にして口唇部を凹状にし内傾させる。	①灰白色②還元③④⑤1mm以下の石英と長石粒を多く含む
104住-7 123	羽釜	- 22.0 - カマド内+2	蹄は上面が平となる断面は三角形。口縁部は内厚となり口唇部が平になる。蹄下側部縦方向ナゲ、中央からは左上→右下方向へ削り、内面ナゲ。	①灰白色②還元③口縁へ側上部はほぼ完形・蹄下半部④⑤1mm以下の石英と長石粒を多く含む
104住-8 148	刀子	全長5.1 幅0.9 線厚0.2 重量2.7g	刀子の茎部分と思われる。断面は長方形を呈する。覆土中より出土。	

105号住居跡及び竈 (古墳時代) 遺構写真図版45 遺物写真図版123

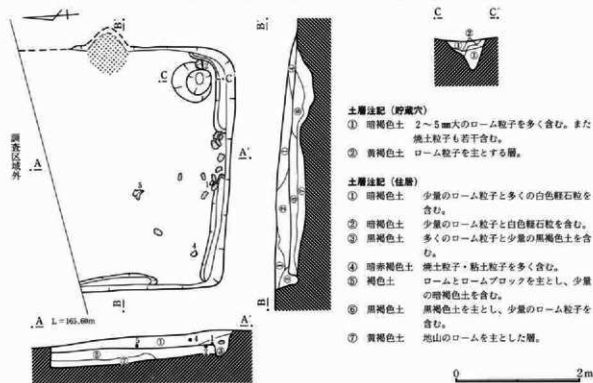
位置 Ⅲ区北東部に位置し、91号住居の東約1mでK-25・26グリットに属する。

概要 住居北側は調査範囲外のため住居全体を調査することはできなかった。南側の残りはやや良好であり遺物等も残っていたが、中央から北側は床面の一部以外ほとんど残っていなかった。東壁の中央付近に焼土粒子や焼土ブロックが検出されたため、この位置に竈が造られていたものと思われる。

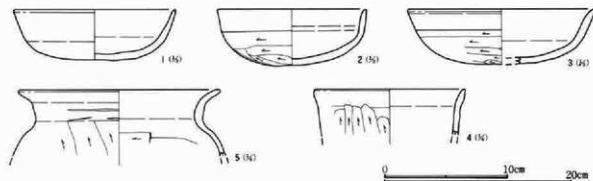
構造 床面はロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られていたが、良好な床面は検出できなかった。貯蔵穴が竈右側に確認されたが、柱穴は掘られていなかった。また残りの良い壁面下において周溝が確認された。

規模 東西3.85m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い南壁面で20cmである。貯蔵穴は直径60cmの円形を呈し深さ50cmであり、周溝は幅30cm深さ10cmである。

遺物 覆土中や床面より少量の土器製の環と甕の破片が、南壁下よりこも石が多く出土した。



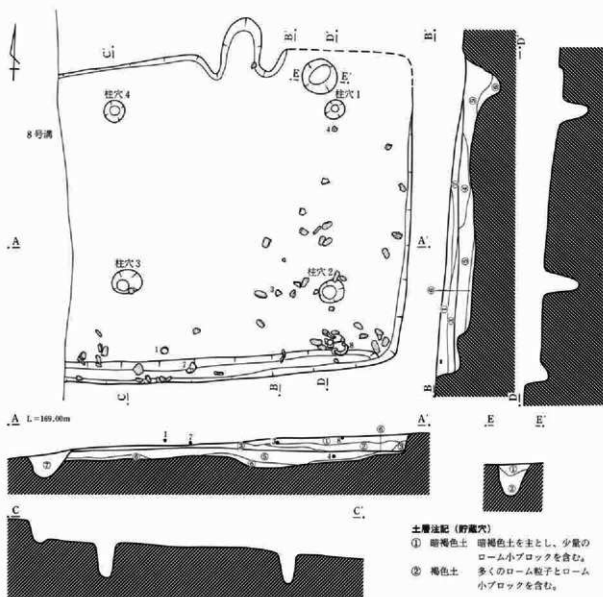
第299図 105号住居跡実測図



第300図 105号住居跡出土遺物実測図

105号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第300図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
105住-1	坏 土師器	- (13.0) - 床面+5	底部の浅い丸底の坏である。底部と口縁部との境に 稜を持つ。表面全体が少しづつ剝離している。	①褐色②酸化③1/5④1mm以下の砂粒 を多く含む
105住-2 123	坏 土師器	4.5 12.0 - 床面+3	丸底の坏であり、底部と口縁部との境にわずかな稜 を持つ。口縁部は端部内側が薄い。底部へう削り、 口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③4/5④1mm以下の砂粒 を多く含む
105住-3	坏 土師器	4.4 (15.0) - 覆土	丸底の坏であり、底部と口縁部との境の稜はへらに より削られて残っていない。	①褐色②酸化③1/5④1mm以下の砂粒 を少量含む
105住-4	鉢 土師器	- (16.0) - 床面+6	小破片であるため全体像が明らかでないが、鉢の口 縁部と思われる。口縁部に輪襷あり。	①褐色②酸化③1/5④1mm以下の砂粒 を少量含む
105住-5	壺 土師器	- (21.6) - 床面+5	胴中央部に最大径を持つ丸胴の壺の破片と思われる。 頸部が直立後口縁部が外反する。外面へう削り。	①において褐色②酸化③小破片④1~3 mmの砂粒を含む。壺い胎土



第301図 106号住居跡実測図

土層注記(位層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と少量の白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。

- ④ 黒褐色土 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑦ 黄褐色土 8号溝覆土。

106号住居跡及び竈 (古墳時代) 遺構写真図版45・46 遺物写真図版123

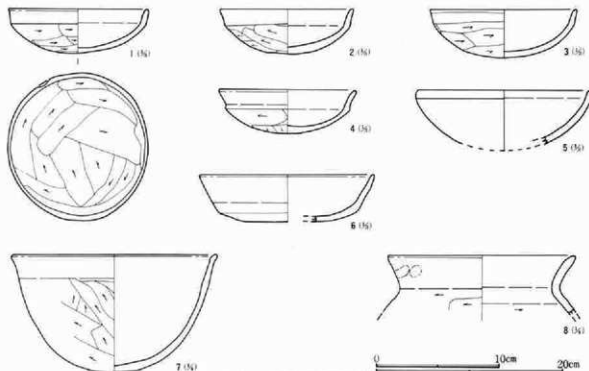
位置 Ⅲ区中央部に位置し、70号住居の南西約3mでN-26・27グリットに属する。

概要 8号溝により住居西側を削り取られている。また竈の位置する北壁周辺は非常に残りが悪く、特に北東部分の床面と壁面は残っていない。南側の床面と壁面の残りは比較的良好であり遺物も南側に多く検出された。北壁中央部付近に位置する竈は燃焼部や袖部の大部分が削り取られており僅かに袖と燃焼部の下部が残存していた。燃焼部下より多くの焼土粒子が検出された。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られ、南側の床面は良好であった。柱穴が4本確認され竈右側に貯蔵穴が掘られていた。また残りの良い南壁面下において周溝が確認された。

規模 東西不明、南北は5.2mである。壁高は最も残りの良い南壁面で23cmで、柱穴は直径35~40cmで深さはいずれも60cmである。周溝は幅35cmで深さ10cmである。貯蔵穴は直径55cmで深さ60cmである。竈は上部の大部分が残っていないが現状で煙道方向100cm、両袖方向80cmであった。

遺物 住居南側の覆土や床面上を中心に土師器の杯と甕の破片やこも石と思われる石が出土した。竈内よりの出土は認められなかった。



第302図 106号住居跡出土遺物実測図

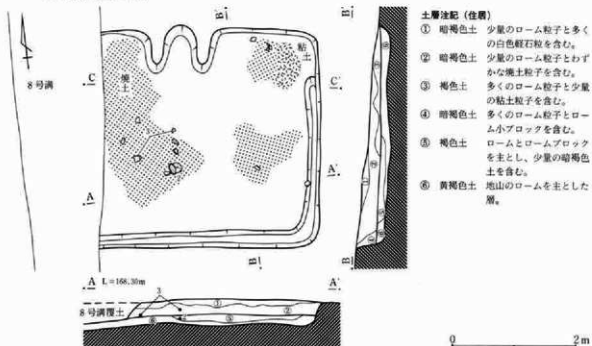
106号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第302図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
106住-1 123	坏 土師器	4.5 11.2 - 床面+7	丸底の小さな坏である。口縁部が短く直立後外反する。底部へら削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①橙色②酸化③完成④1mm以下の砂粒を多く含む
106住-2 123	坏 土師器	3.6 10.8 - 覆土	1同様の丸底の小さな坏である。口縁部はやや長く直立後外反する。底部へら削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①橙色②酸化③3/5④1mm以下の砂粒を多く含む
106住-3 123	坏 土師器	3.8 (11.8) - 床面+6	丸底の小さな坏である。口縁部が短く上端部が外反する。底部へら削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
106住-4 123	坏 土師器	3.5 (11.0) - 床面	底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。底部が丸く口縁部が大きく外反する。底部へら削り。	①橙色②酸化③口縁部1/4・底部2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
106住-5 123	坏 土師器	- (14.0) - 覆土	丸底の底部の深い坏であり、口縁部は短く内傾する。底部へら削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③小破片④1mm前後の砂粒を多く含む
106住-6 123	坏 土師器	3.7 (14.0) (11.0) - 覆土	底部は丸味を持つが平底に近い。口縁部は長く外傾する。裏入品か?	①橙色②酸化③小破片④赤色粒を多く含む
106住-7 123	鉢 土師器	- (21.0) - 床面	底部へ口縁部まで内彎しつつなだらかに立ち上がる。口縁部はほとんど外反しない。胴部右下へ左上方向へら削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	①橙色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
106住-8 123	甕 土師器	- 20.0 - 床面+15	最大径を胴中央部を持つ丸胴の甕の口縁部と思われる。甕表面が荒れている。	①橙色②酸化③口縁へ頸部ほぼ完形④1~3mmの砂粒を含む。粗い胎土

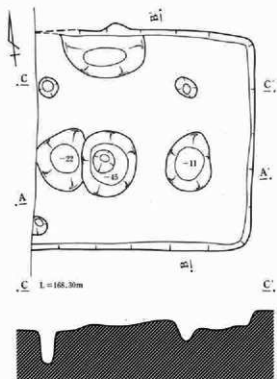
107号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版46 遺物写真図版124

位置 Ⅲ区中央部に位置し、106号住居の北約2mでM-27、N-27グリッドに属する。

概要 106号住居同様に8号溝により住居西側を削り取られている。南側部分の残りは良好であるが甕を含む北側の壁面や床面の残存状態は悪い。床面の多くの部分に焼土粒子が散乱している。また甕右側に粘土の塊が出土した。



第303図 107号住居跡実測図



第304図 107号住居跡床下実測図

構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られていた。床下調査段階において柱穴らしき小穴が3本確認された。貯蔵穴は確認できなかった。南と東壁の内側に周溝が掘られていた。

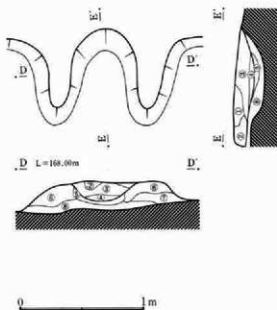
規模 東西不明、南北3.50mである。壁高は最も残りの良い南壁面で36cmである。柱穴はいずれも直径30cmであるが、深さは柱穴1が30cm、柱穴2・3は60cmである。周溝は幅20~30cmで深さは3~5cmである。

遺物 覆土中や床面より多量の土師器の破と多くの坏の破片等が出土した。

床下 床面中央部南側に3個の床下土坑が検出された。床面からの深さは数値で図上に示した。

107号住居跡(竈)

位置 住居北壁の床面上から一部壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の大部分が床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。



構造 多くのローム粒子とローム小ブロックと少量の暗褐色土の混入した土で造られていた。燃焼部床面と壁面及び奥壁や覆土中より多くの焼土が検出された。

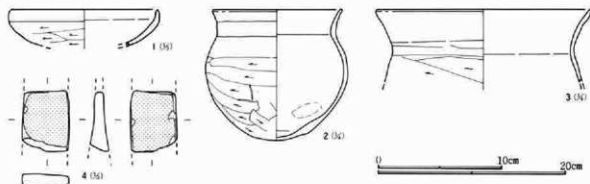
規模 煙道方向80cm、両袖方向80cmである。

遺物 出土は認められなかった。

土層注記(竈)

- ① 暗灰白色土 灰白色粘土を多く含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と粘土を含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ④ 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ⑤ 赤褐色土 黒褐色の層中に多くの焼土粒子を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土の混入土層。
- ⑧ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第305図 107号住居跡竈実測図



第306図 107号住居跡出土遺物実測図

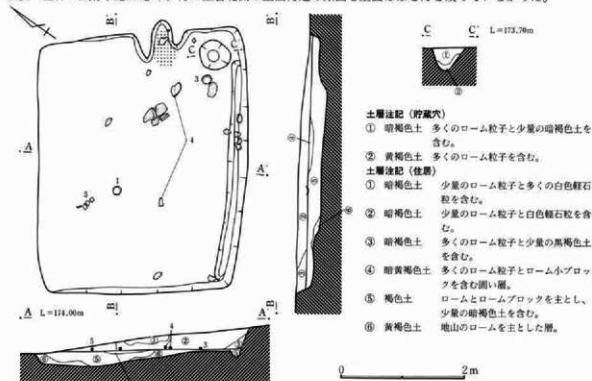
107号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第306図)

遺物番号 図版番号	器形及び 類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
107住-1	坏 土師器	- (12.0) - 覆土	丸底の小さな坏である。短い口縁部が内傾する。底部右側へ傾り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
107住-2 124	甕 土師器	13.8 (14.0) 5.0 床面-4	器内の薄い「コ」の字状口縁を呈する小型甕である。最大径を胴肩部に持つ。胴部右→左横方向→へ傾り、口縁部横ナデ。内側底部は丸い。	①にぶい褐色②酸化③口縁部2/3・胴部4/5④1mm以下の砂粒を多く含む
107住-3 124	甕 土師器	- (24.0) - 床面+2	器内が深い甕である。胴部右→左横方向へ傾り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
107住-4 124	砥石	長さ4.8 幅3.7 厚さ1.4 重量24g	上下面とも使われ磨耗している。軟らかい砥石である。	①白色②破片③珪藻土④覆土

108号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版46・47 遺物写真図版124

位置 III区中央部南西側に位置し、50号住居の西約17mでQ-27・28、R-27・28グリッドに属する。

概要 全体に残存状態は悪く、特に住居北側の壁面付近の床面と壁面はほとんど残っていないかった。



第307図 108号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

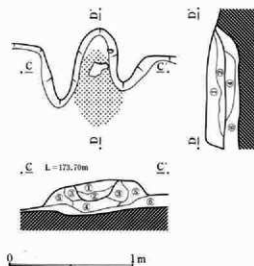
構造 床面は、ローム粒子とローム小ブロックを主とし、堅く踏み固められていた。貯蔵穴は電右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。南壁内側に周溝が掘られていた。

規模 東西4.15m、南北3.15mで、壁高は最も残りの良い南壁で25cmである。貯蔵穴は直径45cmの円形を呈し深さ37cm、周溝は幅30cm深さ11cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の完形の环や甕の破片が出土した。

108号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央より少し南寄りの壁面から床面にかけて造られており、焚口部分と燃焼部の多くが床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。



構造 ローム粒子とロームブロックを主とし少量の暗褐色土で造られている。燃焼部床面付近から多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。

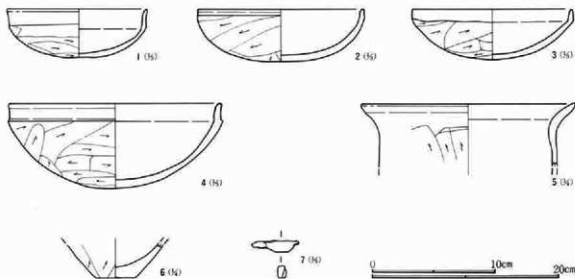
規模 煙道方向60cm、両袖方向50cmである。

遺物 土師器の甕の口縁部と胴部の小破片が多く出土している。

土層注記 (層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックとローム粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第308図 108号住居跡竈実測図



第309図 108号住居跡出土遺物実測図

108号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第309図)

遺物番号 図版番号	器形及 種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
108住-1 124	坏 土師器	3.8 11.3 - 床面+12	底部の丸い小さな坏である。底部と口縁部との境に明瞭な線を有す。口縁部が外反する。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③ほぼ完成形④1mm以下の砂粒を少量含む
108住-2 124	坏 土師器	4.2 (13.4) - 覆土	口縁部が非常に短い丸底の坏である。底部と口縁部との境に多くの横線状に見られるような一糸の沈線が認められる。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③2/3④密
108住-3 124	坏 土師器	4.0 12.8 - 床面	口縁部が短い丸底の坏である。2の坏の口縁部を外反しないで直立した状態の口縁部である。底部へう削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③ほぼ完成形④1mm以下の砂粒を多く含む
108住-4 124	坏 土師器	6.7 (17.2) - 床面+9	口径・器高とも大きな坏である。底部と口縁部との境に明瞭な線を有す。口縁部は短く直立しほとんど外反しない。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
108住-5	壺 土師器	- (23.0) - 床面+4	壺の小さな破片のため全体像は不明。器表面の粗い壺である。	①におい褐色②酸化③小破片1~3mmの砂粒を含む。粗い胎土
108住-6	壺 土師器	- - 4.0 覆土	5の壺と共通した胎土を持つ壺の底部である。	①におい褐色②酸化③割部下端1/3・底部完成形④1~3mmの砂粒を含む
108住-7	鉄	長さ3.8 幅0.9 厚さ0.7 重量4.4g	用途及び名称不明。	

109号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版47 遺物写真図版148

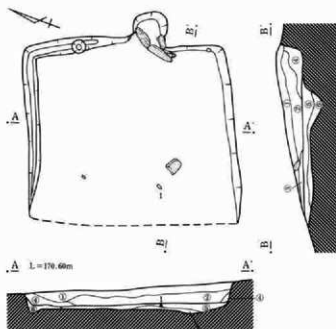
位置 IV区中央部に位置し、69号住居の南約25mでR-34・35グリットに属する。

概要 西側の低い急斜面に位置し、竈の造られている東壁は残りが良いが西端の壁面と床面は削り取られて残っていない。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を混入した土で造られていた。柱穴及び貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北3.45mで、壁高は最も残りの良い東側壁面で48cmである。

遺物 残存している床面や覆土中より、少量の土師器の壺と坏の破片等が出土した。



土層注記 (後編)

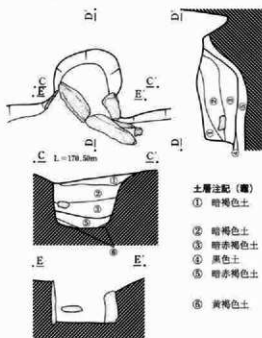
- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 暗黄褐色土 多量のローム粒子と灰がまだらに混入した層。
- ④ 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土を含む。部分的に焼土粒子を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第310図 109号住居跡実測図

109号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央部やや南側の壁面を掘り込んで造られており、燃焼部と煙道部は壁を掘り込んで造られている。

構造 左右に袖石が据えられており、左袖石の奥の側壁と思われる石が燃焼部床面に倒れ込んでいる。右袖



手前の床面に天井石と思われる砂岩が落ちてい
る。他に側壁や奥壁に石は使われていない。この
ように石を多く用いた竈である。燃焼部床面付近
からは多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向55cm、両袖方向65cmである。

遺物 平安時代と思われる土器器の甕と坏の破片が少量
出土した。小破片であるため図化していない。

土層注記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石
粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の灰を含む。
- ④ 黒色土 灰を主とした層。
- ⑤ 暗赤褐色土 ローム粒子を主とし、灰と焼土粒子
を多く含む。
- ⑥ 黄褐色土 堆山のロームを主とした層。



第311図 109号住居跡竈及び出土遺物実測図

109号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第311図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・直径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
109住-1 148	甕	長さ8.8 幅3.2 厚さ0.2 重量27g	甕の基部〜肩部の破片である。基部は端部全体を折り曲げており、柄と直角に近い角度で使用している。肩部は使用により刃幅が狭くなっている。⑥床面	

110号住居跡(奈良時代) 遺構写真図版47・48 遺物写真図版124

位置 N区中央部に位置し、109号住居の西北約5mでQ-35グリットに属する。

概要 西側の低い斜面に位置し、竈の造られている東壁は残りが良いが西端の壁面と床面はわずかしか残っていない。北壁の中央部から床面にかけて多くの焼土粒子が出土した。

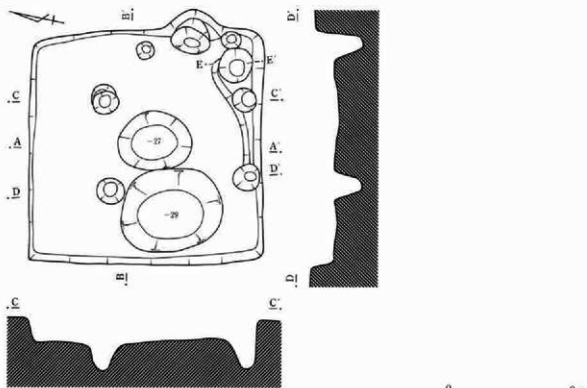
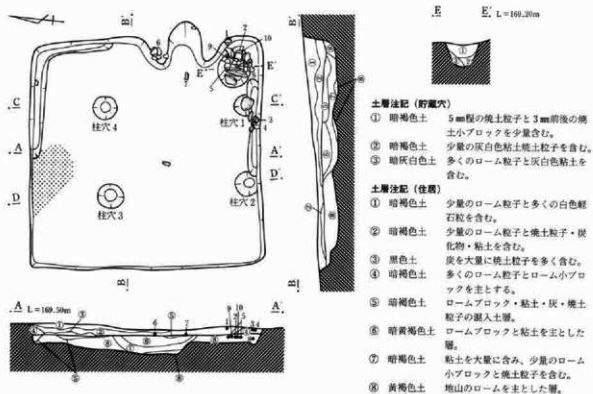
構造 床面はロームブロックと黄褐色土の粘土を主とし、一部に灰と焼土が混入する土で造られ、床面中央部は堅く踏み固められてあった。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが貯蔵穴上の土器と石の出土状況から見て、住居最終段階においては埋められていた可能性が高い。残りの悪い西壁部分以外の壁面下に周溝が掘られていた。柱穴は4本掘られ深さもほぼ一定していたが、南側の2本は周溝と重なるほど壁面側に片寄っていた。また東西間の間隔が狭く不自然な点も多い。

規模 東西3.60m、南北3.70mである。壁高は最も残りの良い東壁面で31cmである。貯蔵穴は直径50cmで深さ44cm、周溝は幅23cm深さ10cmである。柱穴は直径40cmで深さは65cm前後である。

遺物 床面や覆土中より多くの土器器の坏や甕が出土した。埋まった貯蔵穴上に甕と坏のほぼ完形品がまと

まって出土している。

床下 床面中央部及び中央部南側に2つの床下土坑が検出された。床面からの深さは図上に数値で示した。



第312図 110号住居跡及び床下実測図

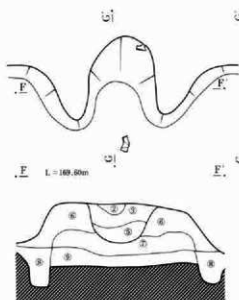
110号住居跡（竈）

位置 住居東壁中央部やや南寄りの壁面を掘り込んで造られており、燃焼部と煙道部は壁を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子と黄褐色の粘土を主として用いている。特に右袖に多くの粘土が用いられていた。電内より甍材としての石の出土はなかった。燃焼部床面付近から壁面にかけて多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向75cm、両袖方向推定70cmである。

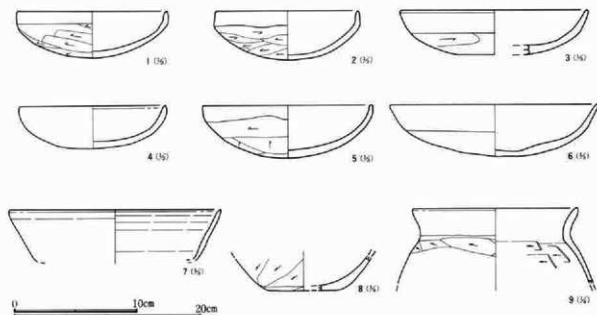
遺物 少量の土師器甕と須恵器杯の破片が出土した。



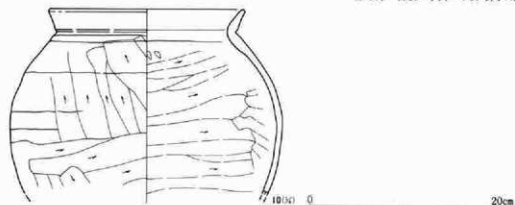
土層注記（竈）

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 焼土粒子と粘土を少量含む。
- ④ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックを主とした層。
- ⑤ 暗褐色土 暗褐色土中に灰・焼土粒子・粘土を含む軟質土層。
- ⑥ 暗褐色土 多くの粘土とローム粒子・ローム小ブロックを含む。部分的に焼土粒子を含む。
- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子と粘土・焼土粒子を含む。
- ⑧ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑨ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第313図 110号住居跡竈実測図



第314図 110号住居跡出土遺物実測図(1)



第315図 110号住居跡出土遺物実測図(2)

110号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第314図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種類	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
110住-1 124	坏 土師器	3.7 12.0 - 床面+8	丸底を呈する小さな坏である。口縁部は短く直立し上端で細くなるが内傾も外反もしない。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③完形④2mm以下の赤色粒を少量含む
110住-2 124	坏 土師器	3.9 11.6 - 貯蔵穴内+35	丸底を呈する小さな坏である。口縁部は短くわずかに内傾し上端が少し外反する。底部へう削り、口縁部横ナデ、内面でいびきなナデ。	①褐色②酸化③完形④1mm以下の砂粒を多く含む
110住-3	皿形坏 土師器	3.5 (15.0) - 床面+4	口径が大きく器高の低い皿状を呈する坏である。口縁部が幅広く外傾する。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む⑤皿型坏の初現か?
110住-4 124	坏 土師器	3.4 11.8 - 床面+4	丸底を呈する小さな坏である。口縁部が短く直立する。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く含む
110住-5 124	坏 土師器	4.2 (13.6) - 貯蔵穴内+35	丸底を呈する坏であり、口縁部が短く直立する。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
110住-6 124	皿形坏 土師器	4.1 16.8 - 床面	口径が大きく器高の低い皿状を呈する坏である。口縁部が幅広く大きく外傾する。底部へう削り。	①褐色②酸化③口縁部一部欠・他はほぼ完形④肉厚粒を多く含む⑤皿形坏初現?
110住-7 124	坏 須恵系 床面	- (17.0) - 床面	口径が大きく器高の低い坏である。器内が薄い。内外面右回転ナデ。	①灰色②還元焼成③1/3④1mm前後の石英と長石粒を多く含む
110住-8	甕 土師器	- - (8.0) 貯蔵穴内+31	底部の器内の薄い甕である。外面右上→左下方向へう削り、胴部下端横方向へう削り、底部へう削り。	①濃い褐色②酸化③胴部下→底部1/2④1mm内外の砂粒を多く含む
110住-9	甕 土師器	- (17.6) - 貯蔵穴内+35	胴中央部に最大径を持つ丸胴の甕である。胴部の器内は薄い。口縁部は厚い。胴部右→左横方向へう削り。	①褐色②酸化③口縁1/3・胴上部1/4④1~2mmの赤色粒を多く含む
110住-10 124	甕 土師器	- (21.0) - 貯蔵穴内+35	胴中央部に最大径を持つ丸胴の甕である。胴部と口縁部の器内が厚い。口縁は短く「く」の字状に外反。胴部右→左上縦方向、胴下部左→右横方向へう削り。	①濃い褐色②酸化③口縁1/4・胴部1/3④1~2mmの砂粒を多く含む

111号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版48

位置 IV区中央部に位置し、110号住居の南約4mでR-35・36グリッドに属する。

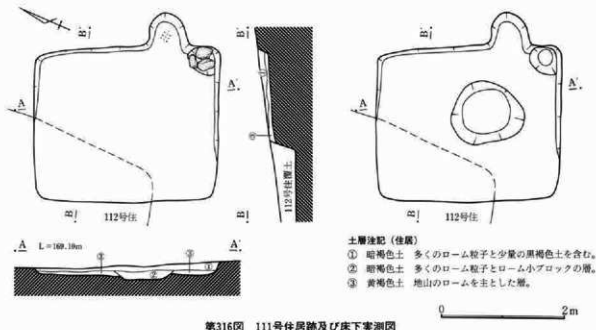
概要 奈良時代の112号住居と重複しており、112号住居の南西部分の覆土上面を掘り込んで造られている。西側が低い斜面に位置し、甕の造られている東壁の残りは良いが西側の壁面と床面の多くは削り取られて残りが悪い。貯蔵穴覆土上に貯蔵穴の蓋をするような状態で3個の石が出土した。

構造 床面は、ローム粒子とローム小ブロックを主とした土で造られていた。貯蔵穴が甕右側に掘られており柱穴は掘られていなかった。

規模 東西2.45m、南北2.95mである。壁高は最も残りの良い東側壁面で14cmであり残りが悪い。貯蔵穴は直径40cm深さ11cmである。

遺物 床面や覆土中からの出土はなく、甕内から僅かに出土している。

床下 床面中央部に0.95×1.1mの楕円形を呈し、床面からの深さ11cmの床下土が検出された。

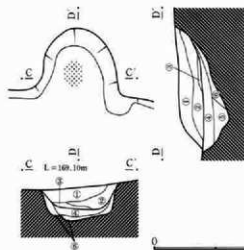


第316図 111号住居跡及び床下実測図

111号住居跡（竈）

位置 住居東壁中央部やや南寄りの壁面を掘り込んで造られている。

構造 袖石や天井部の石もなく、袖部もほとんど残っていないため多くの部分が不明である。燃焼部床面付近からは多くの焼土粒子と炭が検出された。

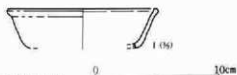


規模 煙道方向65cm、両袖方向60cmである。

遺物 竈内から僅かな土師器の壺と環の破片が出土した。いずれも小破片であり図化できたのは環の小破片1個であった。他の環や壺の小破片も平安時代のものが多い。

土層注記（竈）

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と灰・焼土粒子を含む。
- ③ 赤褐色土 焼土粒子を主とした層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第317図 111号住居跡竈及び出土遺物実測図

111号住居跡 出土遺物観察表（挿図番号第317図）

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	高さ・口径・ 底径(cm)	出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
111住-1	環 土師器	-	(12.0)	器内が薄くほぼ平底を呈する。口縁部は直線的に外傾し、口唇部が丸味を持つ。	①褐色②酸化③小破片④角肉土を少量含む

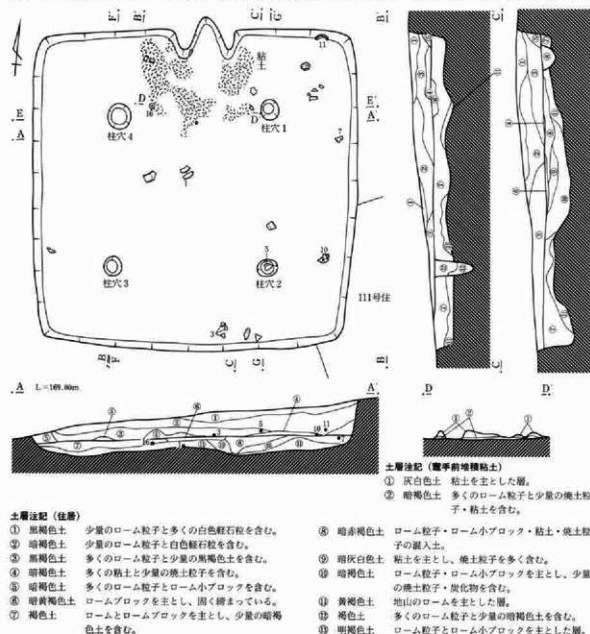
112号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版48・49 遺物写真図版124・125

位置 IV区中央部に位置し、110号住居の南西約2mでR-36グリットに属する。

概要 平安時代の111号住居と重複しており、住居の南西部分の覆土上面を111号住居により削り取られている。西側の低い比較的緩やかな斜面に位置し、東側約半分の残りは良いが西側の残りは良くない。竈の焚口周辺部を中心として多くの粘土の塊が床面上に散乱していた。さらに竈周辺や南側の床面を中心として少量の粘土と焼土が分布していた。これらの状況から粘土を多く用いた両袖や天井部を、焚口周辺に崩し落とし、散乱させたものと思われる。

構造 床面はロームブロックを主体とし、床面中央部は堅く踏み固められてあった。柱穴は4本確認されたが貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西5.2m、南北5.1mである。壁高は最も残りの良い東壁面で60cmである。柱穴1は直径30cm深さ59cm、



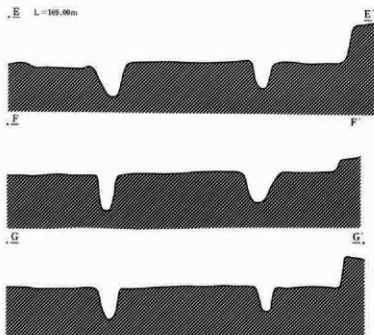
第318図 112号住居跡実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

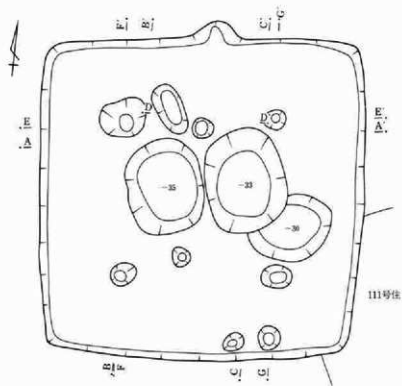
柱穴2は直径30cm深さ50cm、柱穴3は直径40cm深さ40cm、柱穴4は直径40cm深さ40cmである。

遺物 床面や覆土中より多くの土師器の坏や甕、また須恵器の坏や坏蓋の破片が出土し、多くを図化することが出来た。

床下 床面中央部に3つの床下土坑が検出された。床面からの深さは図上に数値で示した。



第319図 112号住居跡実測図(2)



第320図 112号住居跡床下実測図

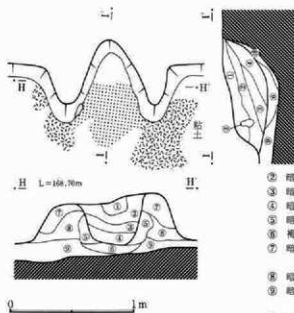
112号住居跡(竈)

位置 住居北壁中央部の壁面を掘り込んで造られており、燃烧部の多くが床面上に造られ、燃烧部奥壁部分と煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 ローム粒子と灰白色粘土を主として造られている。竈内より竈材としての石の出土はなかった。粘土を多く使用しているため、竈内の多くの部分が焼土化しており、特に燃烧部床面付近から壁面にかけて多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向65cm、両袖方向70cmである。

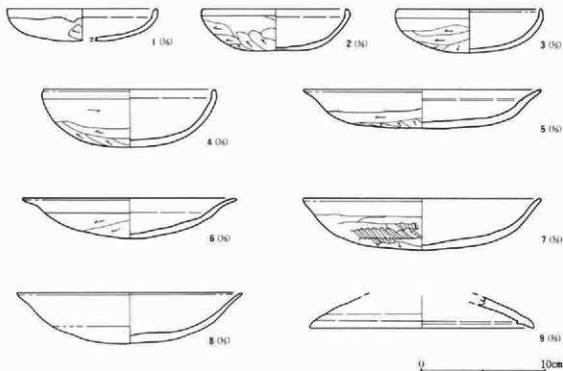
遺物 少量の土師器製の破片が出土した。



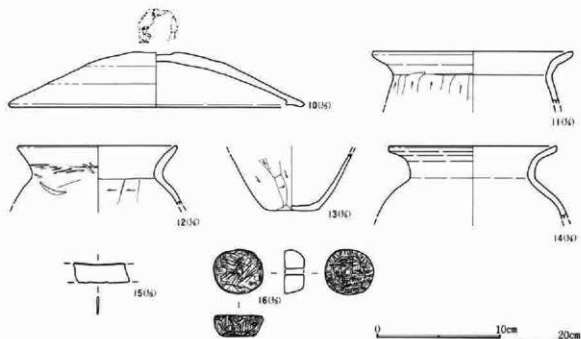
土層注記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
 ② 暗灰白色土 灰白色粘土とロームが混在した層。焼土粒子も少量含む。
 ③ 暗赤褐色土 焼土粒子を主とした層。
 ④ 暗褐色土 灰白色粘土・炭化物・焼土粒子を少量含む軟質土層。
 ⑤ 暗赤褐色土 ロームと粘土を主とし、少量の焼土粒子を含む。
 ⑥ 褐色土 粘土を主とし、少量の焼土粒子を含む。
 ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
 ⑧ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと粘土を含む。
 ⑨ 暗褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の灰・焼土粒子を含む。
 ⑩ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第321図 112号住居跡竈実測図



第322図 112号住居跡出土遺物実測図(1)



第323図 112号住居跡出土遺物実測図(2)

112号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第322・323図)

遺物番号 図数番号	器形及び 種類	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底面整形等の特色	①色調②酸化③残存④胎土⑤備考
112住-1	坏 土師器	- (11.9) - 灰面-3	器高が浅く口縁部が短い丸底の坏である。口縁部が短く直立する。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を少量含む
112住-2	坏 土師器	3.3 (11.6) - 覆土	器高が浅く底部中央が平底に近い。口縁部が短く直立する。外側口縁端部が内側に向かい薄くなるため内傾を思わせる。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を少量含む
112住-3 124	坏 土師器	3.4 11.4 - 灰面	丸底の坏であり、口縁部が短い。口縁部は直立し端部が細くなる。口縁部と底部との間にへう削りのない部分がある。その部分ナデ、底部へう削り。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
112住-4 124	坏 土師器	4.6 (13.8) - 覆土	底部中央が平底に近い。口縁部が短く直立し端部が細くなる。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/3④赤色粒を少量含む
112住-5 124	皿形坏 土師器	3.1 (19.0) - 灰面+11	口径が大きく浅い皿形の坏である。口縁部が大きく外反しつづつ外側に開く。底部へう削り、口縁部横ナデ、内面と底部と口縁との境に一枚の紋あり。	①明黄褐色②酸化③口縁1/3・底部1/2④赤色粒を多く含む
112住-6	皿形坏 土師器	- (17.0) - 覆土	口径が大きく浅い皿形の坏である。口縁部が大きく外反しつづつ外側に開く。口縁部に輪轆痕あり。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
112住-7 124	皿形坏 土師器	4.1 (19.0) - 灰面	口径が大きく浅い皿形の坏である。口縁部が大きくわずかに外反しつづつ外側に開く。底部へう削り、口縁部横ナデ、内面でいねいなナデ。	①明黄褐色②酸化③1/4④赤色粒を多く含む
112住-8	皿形坏 土師器	4.0 (18.0) - 覆土	口径が大きく浅い皿形の坏である。底部と口縁部との境が明瞭でない。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
112住-9	甕 須恵器	- (18.0) - 覆土	口径の大きな坏壺である。低く細いカエリを持つ。底部まで内腐である。上面に落灰による軸あり。	①灰色②還元焼締③小破片④1mm以下の石灰と長石粒を多く含む
112住-10 124	甕 須恵器	4.4 (23.6) - 灰面	口径が非常に大きな坏壺である。カエリを持つ。カエリは口縁部の粘土を折り返して造り出しているように観察出来る。天井部右回転未切刃。	①黄褐色②酸化③2/3④1mm以下の石英と長石粒を多く、赤色粒を少量含む
112住-11	甕 土師器	- (21.4) - 灰面+15	口縁部に最大径を持ち肩部の張る壺と思われる。下一頸部縦方向へう削り。	①により褐色②酸化③口縁へ上頸2/3④1mm以下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む
112住-12	甕 土師器	- (17.0) - 覆土	丸形の甕の小破片と思われる。頸部～口縁部の器内が厚く口縁部は外反する。頸部にへうの打痕あり。	①外面により褐色・内面褐色②酸化③1/5④赤色粒を含む
112住-13	甕 土師器	- - (5.6) 覆土	器内の薄い裏の底部である。底部内外面とも平である。裏外面へう削り、内面ナデ。	①外面黒褐色・内面残黄褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む

112号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第323図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
112住-14 124	須恵器	— (18.0) — 覆土	胴部が丸く頸部が幅広い。口縁部が大きく外反する。 胴部平行印き、内面青海波文。	①灰色②還元焼成③口縁部1/10・胴部 〜胴上部1/5④1mm以下の石英と長石 粒を含む
112住-15	鉄	長さ4.5 幅1.5 厚さ0.1 重量2.4g	刃物と思われるが用途及び名称不明。薄い製品である。覆土中出土。	
112住-16 125	紡錘車	長さ3.4 幅3.8 厚さ1.6 孔径0.6 床面-5	幅の狭い小さな紡錘車である。表面全体黒砥削り、 端部面取り状に黒砥削り。	①暗褐色②③④滑石片岩

113号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版49 遺物写真図版125

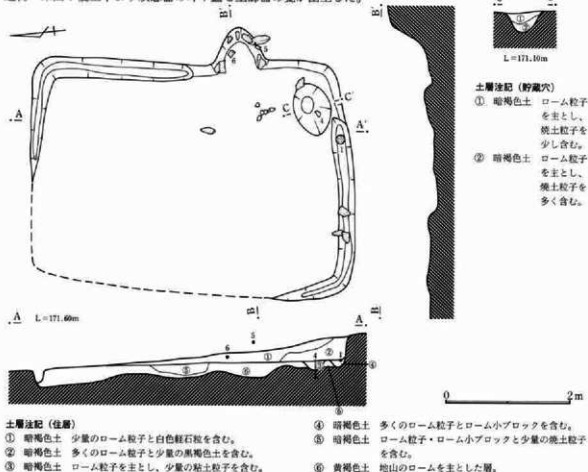
位置 III区中央部西端に位置し、108号住居の北東約14mでQ-29グリットに属する。

概要 北西側の低くなる比較的緩やかな斜面に位置する。東側約半分の残りは良いが西側の壁面や床面の多くは残っていないかった。

構造 床面は、ロームブロックを主体とし、床面中央の一部は堅く踏み固められてあった。貯蔵穴は竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。残りの良い壁の内側に周溝が確認された。

規模 東西3.8m、南北5.2mであり、壁高は最も残りの良い東壁面で57cmである。貯蔵穴は60×85cmの楕円形を呈し深さは33cmである。周溝は幅18cm深さ14cmである。

遺物 床面や覆土中より須恵器の坏や蓋と土師器の甕が出土した。



第324図 113号住居跡実測図

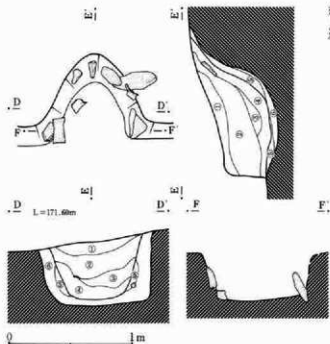
113号住居跡(竈)

位置 住居東壁南寄りの壁面を掘り込んで造られており、袖の部分が床面上に位置し燃焼部の多くと煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 両袖部分より3個、側壁や奥壁から4個の石が出土し、それらの多くはほぼ据えられた状態で出土した。このような状況からこの竈は壁面を掘り、石を壁材として利用し、ロームを多く用いて造られたものと思われる。燃焼部床面付近から壁面にかけて多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向80cmである。

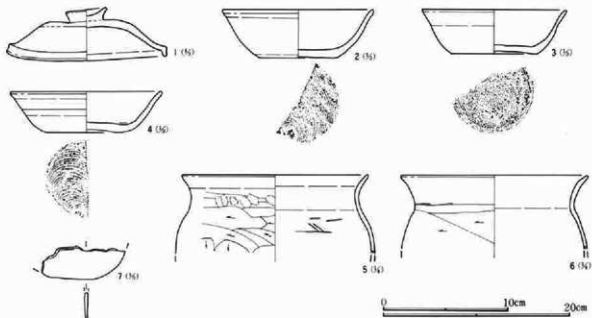
遺物 少量の土師器甕の破片が出土した。



土層法記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子・ローム小ブロックと焼土粒子を含む。
- ④ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の粘土と炭化物を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第325図 113号住居跡竈実測図



第326図 113号住居跡出土遺物実測図

113号住居跡 出土遺物観察表 (揮図番号第326図)

遺物番号 図版番号	器形及び 類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
113住-1 125	蓋 須恵器	4.2 (12.8) - 床面	器高の高い蓋である。周辺部が高くなる環状のツマミが付く。口縁部が内側に折られている。天井部へ丸削り。	①灰白色②還元③完形④1m以下の石英と長石粒を多く含む
113住-2 125	坏 須恵器	3.8 12.2 6.2 覆土	底部の器内が厚い。口縁部は外反しないが少し外側が内厚となる。底部右回転未切痕、口縁部磨ナデ。	①灰色②還元③2/3④1m前後の多くの石英と長石粒を含む
113住-3 125	坏 須恵器	3.5 11.6 7.0 覆土	底部の器内が少し薄く、中央が盛り上がる。底部右回転未切痕、口縁部がわずかに外反する。	①灰白色②還元③口縁部1/5・体部～底部2/3④1m前後の石英と長石粒多く含む
113住-4 125	坏 須恵器	3.2 12.2 6.2 貯蔵穴内+9	底部中央が少し盛り上がる。体部は直線的に立ち上がる。底部右回転未切痕、口縁部右回転ロクロ目。	①灰色②還元焼締③1/2④1～3mmの長石粒を少量含む
113住-5 125	壺 土師器	- (20.0) - カマド内+30	器内の薄い蓋であり、頸部が外反しつつ立ち上がり口縁部が外反する。頸部に指頭圧痕、肩部右→左横方向へ丸削り。	①褐色②酸化③1/4④角閃石を少量含む
113住-6	壺 土師器	- (20.0) - カマド内+11	器内の薄い蓋であり、口縁部は「く」の字状に外反する。肩部右→左横方向へ丸削り。	①褐色②酸化③1/4④赤色粒を含む
113住-7	鉄	長さ6.6 幅2.2 厚さ0.3 重量10.2g	用途及び名称不明。下部が刃部と思われる。覆土より出土。	

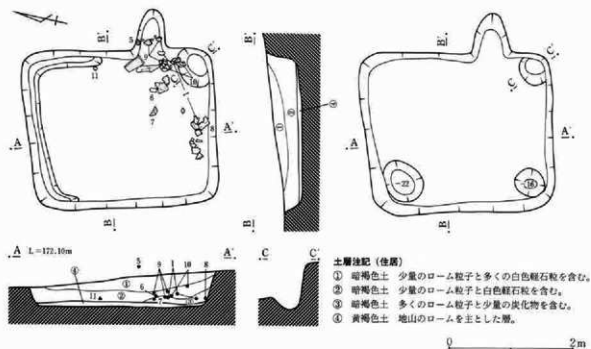
114号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版49・50 遺物写真図版125・126・148

位置 N区中央部に位置し、109号住居の南東約10mでS-33・34グリットに属する。

概要 北西側の低くなる斜面に位置する。4面の壁面全てが25cm以上残っている。

構造 床面は地山のロームをほとんどそのまま利用している。貯蔵穴が東右側に掘られており柱穴は掘られていなかった。北壁および東西壁の一部に周溝が掘られていた。

規模 東西2.5m、南北3.1mである。壁高は最も残りの良い東側壁面で45cmであり残りが良い。貯蔵穴は55×65cmの楕円形を呈し深さは20cmである。周溝は幅25cm深さ10cmである。



第327図 114号住居跡及び床下実測図

第3章 検出された遺構と遺物

遺物 竈や南壁付近に出土した。住居の残存状態が極めて良好にもかかわらず固化できる良好な出土遺物は少なかった。

床下 南西コーナーに直径40cm深さ16cm、北西コーナーに60×70cm深さ22cmの小穴が検出された。

114号住居跡（竈）

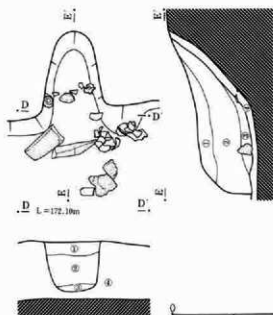
位置 住居東壁中央部やや南側の壁面を掘り込んで造られており、燃焼部と煙道部は壁を掘り込んで造られている。

構造 焚口の手前に1石、焚口の床面上に2つに割れた天井石が落ちていた。他に石は出土していない。こ

のような状況から、この竈は壁面を掘り込み燃焼部や煙道を造り袖石を使わないで天井石を据えたものと思われる。燃焼部床面付近から少量の焼土粒子と炭が検出された。

規模 煙道方向85cm、両袖方向50cmである。

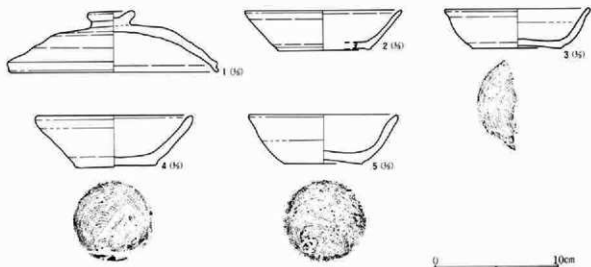
遺物 竈内から土師器の甕の破片が出土した。



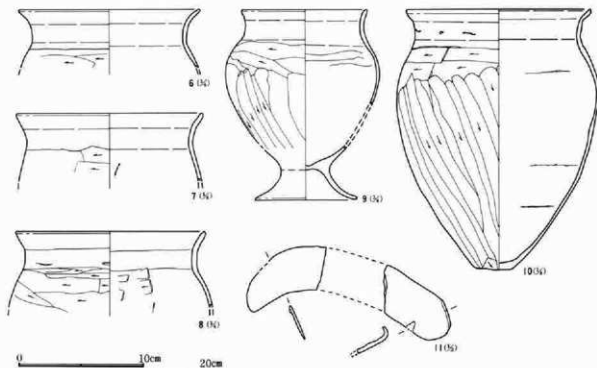
土層注記（竈）

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのロームと少量の炭・灰・焼土粒子を含む軟質土層。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第328図 114号住居跡竈実測図



第329図 114号住居跡出土遺物実測図(1)



第330図 114号住居跡出土遺物実測図(2)

114号住居跡 出土遺物観察表(揮画番号第329・330図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
114住-1 125	蓋 須恵器	4.8 16.8 - 床面+5	肉厚な楕円状のツマミをもつ器高の高い蓋である。口縁部は折りまげられ、外側は外反する。天井部へタテ削り。	①灰白色②還元③ほぼ完成④赤
114住-2	坏 須恵器	3.2 (12.6) 7.6 覆土	口径が大きく器高が低い。底部と体部との境に段を持つ。体部へ口縁部は直線的に外傾する。	①灰色②還元焼成③1/3④赤
114住-3 125	坏 須恵器	3.1 (11.6) 7.2 覆土	口径が大きく器高が低い。底部と体部との境に段を持つ。体部へ口縁部は内傾しつつ立ち上がる。	①灰色②還元焼成③2/3④赤⑤底部未切痕
114住-4 125	坏 須恵器	4.1 12.6 6.4 覆土	器内が全体に厚く2・3・5の坏と異質である。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部との境に段を持つ。底部回転未切痕。	①褐色②酸化③ほぼ完成④赤
114住-5 125	坏 須恵器	3.9 (12.0) 6.4 カマド内+45	底部へ口縁部の器内が厚い。底部中央部が盛り上がる。底部右回転未切痕、体部に明確なロクロ痕認められず。	①灰白色②還元③体部へ口縁部4/5・底部完成④赤
114住-6 125	甕 土師器	- (19.4) - 床面+8	器内が薄い。頸部は直立するが曲線を帯びている。口縁部が外反する。肩部右へ左横方向へタテ削り。	①にぶい褐色②酸化③口縁部へ頸部4/5④1mm以下の砂粒を含む
114住-7	甕 土師器	- (20.0) - 床面+7	器内が薄い。頸部は「く」の字状を呈する。肩部右へ左横方向へタテ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/3④赤色粒を含む
114住-8 125	甕 土師器	- (20.4) - 床面+7	「コ」の字状口縁を呈する甕である。頸部は直立し器内が少し厚い。口縁部が外反する。肩部右へ左横方向へタテ削り、内面ナデ、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③口縁部へ胴上4/5④1mm以下の砂粒を多く含む
114住-9 126	台付甕 土師器	- (13.4)(11.0) カマド内+7	台部と胴下半の接合面はないが、胎土や色調からみて同一個体と思われる。頸部は少し内傾しつつ立ち上がり口縁部が外反する。肩部右へ左横方向へタテ削り。	①にぶい褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
114住-10 125	甕 土師器	27.6 19.5 4.0 床面+8	「コ」の字状口縁の甕である。頸部は直立し口縁部が外反する。口唇部が立ち上がる。肩部右へ左横方向へタテ削り、胴部左上へ右下方へタテ削り、底部平。	①褐色②明赤褐色③4/5④1mm以下の砂粒を多く含む
114住-11 148	鉢	長さ16.5 幅3.4 厚さ0.2 重量29.5g 床面+2	鉄製の鏝である。基部上半の端が直角に折られており、柄に広い角度で着く鏝である。先端部近くで下方に曲線を持って曲がる。襷部を含めて器内が薄い。中央部分に欠いている。	

115号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版50 遺物写真図版126

位置 Ⅲ区中央部西側に位置し、113号住居の東約10mでQ-28グリットに属する。

概要 竈北側の大部分はほとんど削平されて残っていない。西側は平安時代の116号住居により深く削り取られている。そのため竈を含む南東部が僅かに残っているだけの住居である。116号住居はさらに奈良時代の117号住居の北側を掘り込んでいる。新旧関係は117→115→116号住居の順である。

構造 床面はほとんど残っていないため、良好な状態で検出できなかった。貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西南北とも不明。壁高は最も残りの良い南東コーナーで10cmである。

遺物 床面より土師器の完形の坏や甕の破片が出土した。

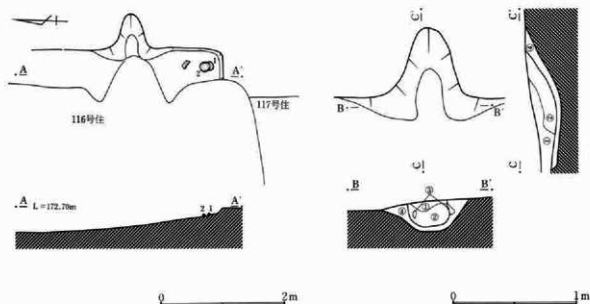
115号住居跡 (竈)

位置 住居東壁の壁面を掘り込んで造られており、焚口部分が床面上に位置するが、燃焼部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていたものと思われる。

構造 残りが悪く不明な部分が多いが、石の出土は認められない。そのため多くの部分がローム粒子を主として造られていたものと思われる。燃焼部床面付近や壁面が焼けて焼土化していた。また燃焼部覆土から多くの焼土粒子が出土した。

規模 煙道方向70cm、両袖方向60cmである。

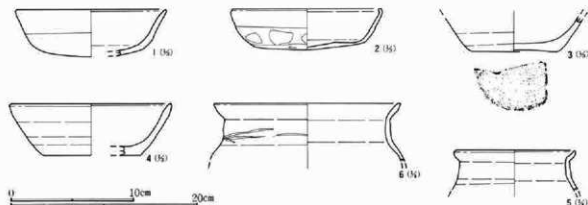
遺物 土師器の坏や甕の破片と須恵器の坏の破片が少量出土している。



土層塗り記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの黒褐色土を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を多く含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子の層。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第331図 115号住居跡及び竈実測図



第332図 115号住居跡出土遺物実測図

115号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第332図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
115住-1 126	坏 土師器	3.8 12.0 - 床面	底部は平底に近いが丸味を持つ。口縁部がわずかに外傾する。底部へ丸削り、体部わずかなナダ。	①褐色②酸化③2/3④密
115住-2 126	坏 土師器	3.2 12.2 - 床面	底部は平底に近いがわずかに丸味を持つ。口縁部は内傾する。底部へ丸削り。体部に指圧痕、口縁部横ナダ、内面ナダ。	①褐色②酸化③完形④密
115住-3	坏 須恵器	- - (7.0) 覆土	底部の器内が厚い。体部は底部から直線的に立ち上がる。底部回転糸切。	①灰白色②還元③1/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
115住-4	坏 須恵器	4.1 (13.0) (7.8) 覆土	口径・器径とも大きく、器高の低い坏である。底部回転糸切痕、体部右回転クロコ目。	①灰色②還元③小破片④密
115住-5	小型 土師器	- (13.0) - 覆土	頸部が直立し、口縁部が大きく外反する。「コ」の字状口縁を呈する。肩部横方向へ丸削り。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
115住-6	壺 土師器	- (20.0) - 覆土	頸部が直立し、口縁部が大きく外反する。頸部中央への丸削り痕あり。肩部横方向へ丸削り。	①褐色②酸化③1/6④1mm以下の砂粒を多く含む

116号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版50・51 遺物写真図版126・149

位置 Ⅲ区中央部西側に位置し、113号住居の東約6mでQ-28・29グリットに属する。

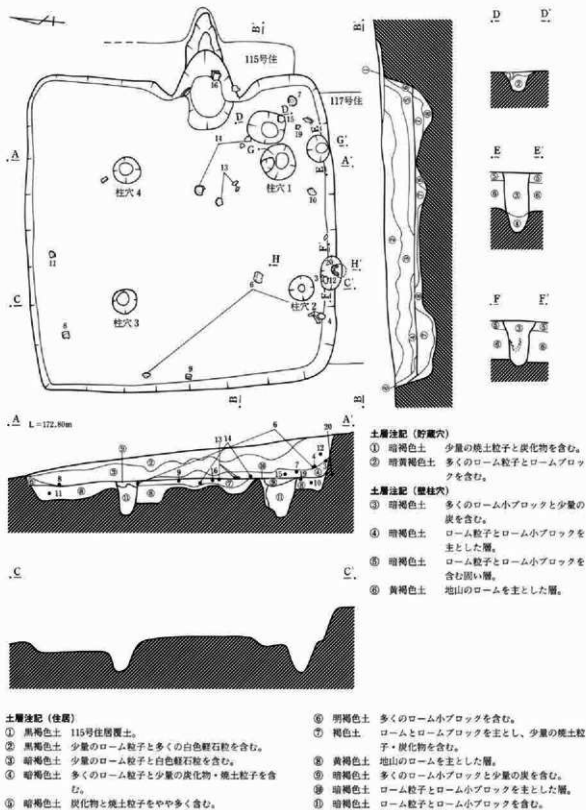
概要 4面の壁面が確認される残りの良好な住居の1つである。特に南壁と竈の造られている東壁の残りが良い。3軒重複の住居であり平安時代の115号住居の東側の大部分と奈良時代の117号住居の北側を掘り込んでおり3軒の中では最も新しい。

構造 床面は、ロームとロームブロックを主とした土で造られていた。柱穴は4本南側に偏った配置で掘られていた。特異な例として南壁を一部掘り込んだ2つの壁柱穴が確認され、西側の壁柱穴は住居内に傾く状態で掘られていた。この壁柱穴は重複している117号住居の柱穴とも考えられるが、117号住居に柱穴はなく、さらに117号住居の床面から掘り込まれたと仮定して壁柱穴の深さを比較すると90cm以上あるため、117号住居の柱穴と見るのには無理がある。貯蔵穴は竈右側に掘られていた。

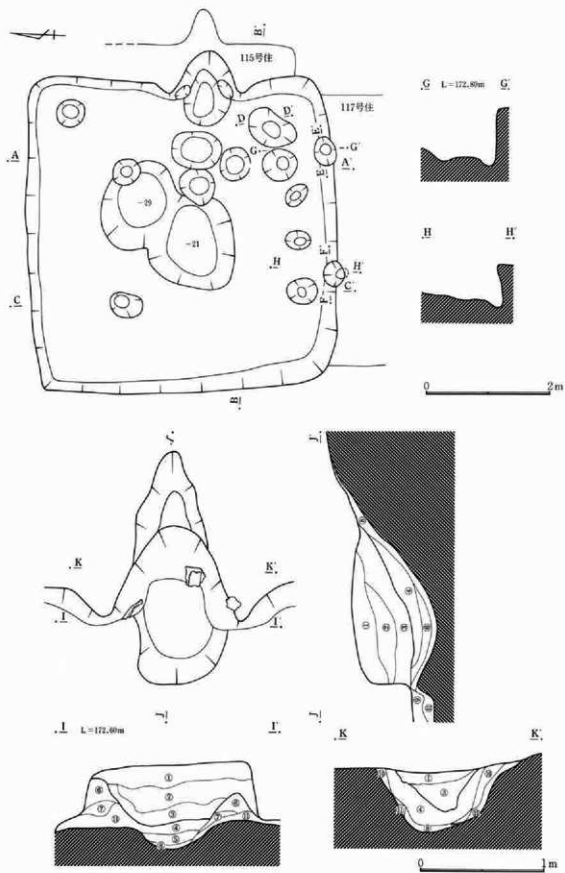
規模 東西5.0m、南北4.9mでほぼ正方形を呈し、壁高は最も残りの良い南側壁面で69cmで残りは良好である。柱穴は直径45～55cmで、深さは北西の柱穴が44cm、他の3柱穴が50cmであった。壁柱穴は直径50cmで東側の深さは25cm、西側は16cmである。貯蔵穴は直径50cmで深さ39cmであった。

遺物 残存している床面や覆土中より、土師器の坏や壺と須恵器の坏や壺が出土し、多くを図化することができた。特に西側の壁柱穴の中から完形の鉄製鋤が出土しており注目される。

床下 床面中央部に2つの床下土坑が検出された。床面からの深さは図上に数値で示した。



附333図 116号住居跡実測図



第334図 116号住居跡床下及び電実測図

第3章 検出された遺構と遺物

土層注記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
 ② 暗褐色土 少量のローム粒子と粘土を含む。
 ③ 暗褐色土 少量のローム粒子・灰・焼土粒子を含む。
 ④ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の灰を含む。
 ⑤ 褐色土 褐色土中に灰・灰・焼土粒子を含む。
 ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含み、部分的に焼土粒子を含む。

- ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
 ⑧ 褐色土 地山のロームを主とし、部分的に熱を受けて焼土化している。
 ⑨ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の黒褐色土・焼土粒子を含む。(住居掘り方)
 ⑩ 赤褐色土 地山のロームが部分的に焼土化した層。
 ⑪ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

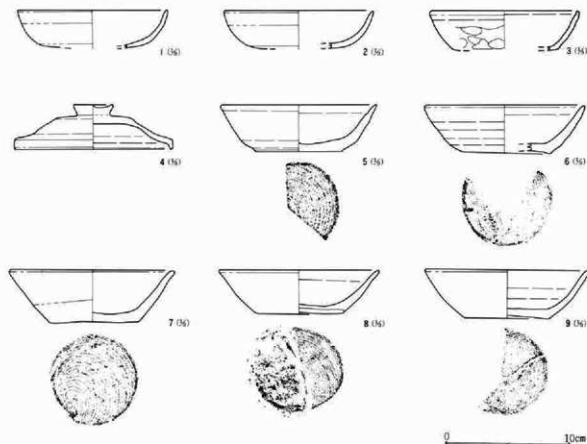
116号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央部やや南寄りの壁面と、115号住居の竈を掘り込んで造られている。焼焼部は床面から壁面にかけて造られて、煙道部は壁を掘り込んで造られている。

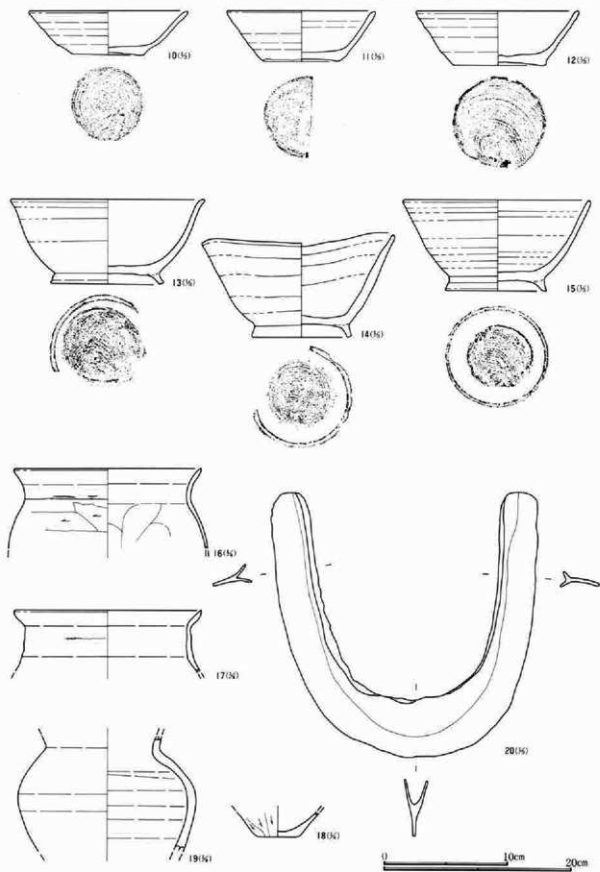
構造 竈の位置する壁面は残りが良好であり、壁面に掘り込まれた部分の竈の残存も良好であった。しかし床面上に位置する焼焼部や袖部の大部分は取り除かれたために残存していなかった。残存している竈内や床面上より袖石や天井石等の出土はない。焼焼部床面や壁面が焼けて焼土化しており覆土中からも多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向推定105cm、両袖方向80cmである。

遺物 土師器の甕の破片が少量出土した。



第335図 116号住居跡出土遺物実測図(1)



第336図 116号住居跡出土遺物実測図(2)

116号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号335・336図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
116住-1	環 土師器 覆土	— (12.0) —	器内が薄く平底に近い底部である。底部へう割り、 体部わずかなナデ、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/3④密
116住-2	環 土師器 覆土	— (12.0) —	1にはほぼ同じ。体部はへう割りも横ナデも行なわれて いない。	①褐色②酸化③小破片④角四石を含む
116住-3	環 土師器 床面+22	3.1 (12.0) —	底部へう割り。体部に多くの指環圧痕。口縁部横ナ デ。全体に歪みがはげしい。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒 ⑤1mm以下の石英と長石粒を多く含む
116住-4 126	蓋 須恵器 床面+28	3.5 (12.8) —	環状のツマミを持つ。器高が高く底部は下方に折ら れている。天井部の器内が厚く右回転へう割り、ツ マミは中央部が凸状を呈する。	①灰色②還元焼締③2/3・ツマミ底部形 ④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
116住-5 126	環 須恵器 覆土	3.9 (12.6) (7.0)	底部へう割りの器内が厚く、口縁部の器内が薄い。底 部回転糸切。体部に右回転クロコ目。器内の薄い口 縁部がわずかに外反する。	①灰白色②還元③1/3④1mm以下の石 英と長石粒を多く含む
116住-6 126	環 須恵器 床面+7	3.9 12.8 7.0	全体に器内が厚い。底部中央が盛り上がる。底部右 回転糸切痕。体部クロコ目。	①灰白色②還元③4/5④1mm以下の石 英と長石粒を多く含む
116住-7 126	環 須恵器 床面+16	4.2 13.2 7.2	全体に器内が厚い。体部へ口縁部は底部から直線的 に外傾しつつ立ち上がる。底部右回転糸切痕。	①灰白色②還元③ほぼ完形④片岩を含 む
116住-8 126	環 須恵器 床面+12	— (12.8) —	底部の半分が上下面と分離している。底部が2枚の 粘土から出来ている可能性を示す。	①灰白色②還元③口縁部1/2・底部1/2 ④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
116住-9 126	環 須恵器 床面	3.9 13.0 6.8	底部中央の器内が少し薄い。体部へ口縁部は直線的 に立ち上がり、口縁部は外反しない。底部右回転糸 切痕。体部右回転クロコ目。	①灰白色②還元③2/3④1mm以下の石 英と長石粒を多く含む
116住-10 126	環 須恵器 床面	3.5 12.6 5.8	底径が小さく、器高の低い環である。体部へ口縁部 が大きく外側に開く。口縁部はほとんど外反しない。 底部右回転糸切痕。体部右回転クロコ目。	①灰白色②還元③ほぼ完形④1mm前後 の石英と長石粒を多く含む
116住-11 126	環 須恵器 床面-2	4.0 12.0 5.8	底部の器内が厚く体部へ口縁部の器内が薄い。体部 へ口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部は全く外反 しない。底部右回転糸切痕。	①灰オリーブ色②還元③3/5④1mm前 後の石英と長石粒を多く含む
116住-12 126	環 須恵器 床面+48	4.3 13.0 7.4	底部の器内が厚く体部へ口縁部の器内が薄い。体部 へ口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部は全く外反 しない。底部回転糸切痕。	①灰色②還元③口縁部2/3・底部完形④ 1mm前後の石英と長石粒を多く含む
116住-13 126	埴 須恵器 床面+5	6.7 15.6 8.3	高台を持つ深い埴である。高台は端部が外側へ張り 出し底面が平となり、端部が鋭利に削り出されている。 口縁部が少し外反する。高台内側右回転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁部へ体部2/3・底部 完形④1mm前後の砂粒を多く片岩を少 量含む
116住-14 126	埴 須恵器 床面+4	8.2 15.5 7.5	13と同様な高台を持つ深い埴である。体部へ口縁部 は直線的に立ち上がり口縁部は外反しない。高台内 側右回転糸切痕。焼き歪みを起こしている。	①灰白色②還元焼締③ほぼ完形④2〜 3mmの大きな砂粒を少量含む⑤重量感 あり
116住-15 126	埴 須恵器 床面+10	7.2 15.0 7.6	13と同様な高台を持つ深い埴である。高台内側右回 転糸切痕。	①灰白色②還元③口縁部へ体部2/3・底部 完形④1mm前後の石英と長石粒を含む
116住-16	壺 土師器 カマド内-21	— (20.0) —	頸部は外側に内側へ曲線を描きつつ直立し、口縁部 が外反する。胴部右へ左横方向へう割り。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒 を多く含む
116住-17	壺 土師器 覆土	— (20.0) —	頸部は内側に内側へ曲線を描きつつ直立し、口縁部 が外反する。胴部右へ左横方向へう割り。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒 を多く含む
116住-18	壺 土師器 覆土	— — (4.6)	器内の薄い壺の底部小破片と思われる。外側底部は 平であるが、内面は球形を呈する。胴部へう割り。	①におい褐色②酸化③1/2④1mm以下 の砂粒を多く含む
116住-19	壺 須恵器 床面+16	— — —	壺の小破片である。胴部内外面横ナデ。	①灰色②還元焼締③小破片④1mm前後 の石英と長石粒を多く含む
116住-20 149	鉄鏝	長さ21.2 幅21.3 厚さ0.2 重量261g 床面+2	大形の鏝である。刃部幅4.5cm、両端部幅3cm、厚さ2mm前後でU字形を呈する。内側を板状 工具により鋭状に張り込んでおり、深さは刃部で2cm、両端部で0.8〜1cmであり、広げられ た尖状の幅は0.8〜1cmである。刃部先端は鋭利でなく丸味を持つ。	

117号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版51 遺物写真図版126・127

位置 Ⅲ区中央部西側に位置し、113号住居の東約6mでQ-28、R-28グリットに属する。

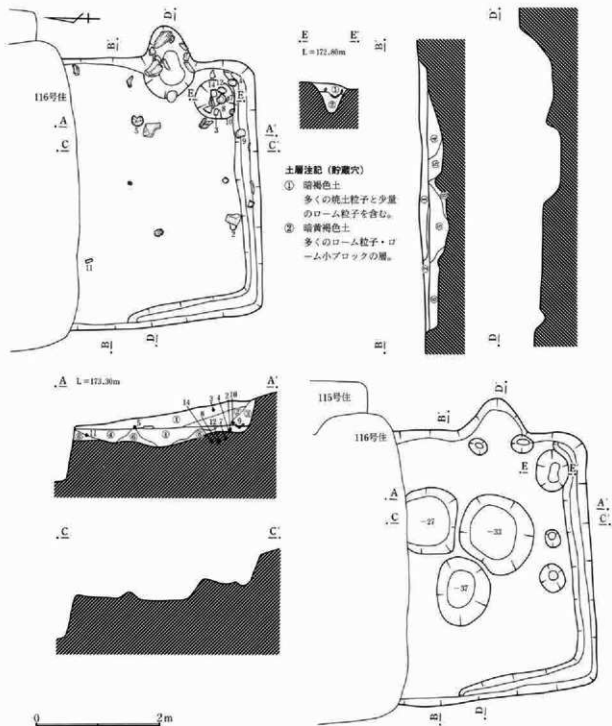
概要 平安時代の116号住居と重複しており、116号住居に北側の壁面と床面を深く掘り取られていた。

構造 床面は多くのローム粒子とロームブロックを主とした土で造られ、床面中央部は堅く踏み固められて
あった。貯蔵穴が電右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。南と西側の壁面の下に周溝
が掘られていた。

規模 東西4.3m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い南壁面で45cmである。貯蔵穴は直径65cmで深さ50cm、周溝は幅35cm深さ10cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の坏や甕と須恵器の坏の破片が出土し、多くを図化することができた。

床下 床面中央部に3つの床下土坑が検出された。床面からの深さは図上に数値で示した。



第337図 117号住居跡及び床下実測図

第3章 検出された遺構と遺物

土層注記 (住居)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量のローム小ブロックを含む。

- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の焼土粒子と炭化物を含む。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、わずかに焼土粒子と炭化物を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

117号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央部やや南寄りの壁面を掘り込んで造られており、116号住居同様に燃焼部は床面から壁面にかけて造られており、煙道部は壁を掘り込んで造られている。

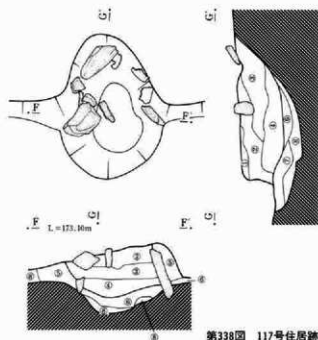
構造 焚口部と燃焼部の多くは床面上につくられていた。検出された竈内の両側に側石が2個、竈内より5個の石が出土した。天井石は残っていなかった。このような状況から石を多く使用した竈と思われる。燃焼部床面付近から壁面にかけて多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向95cm、両袖方向80cmである。

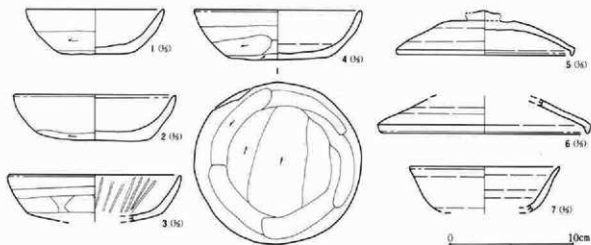
遺物 少量の土師器製の破片が出土した。

土層注記 (竈)

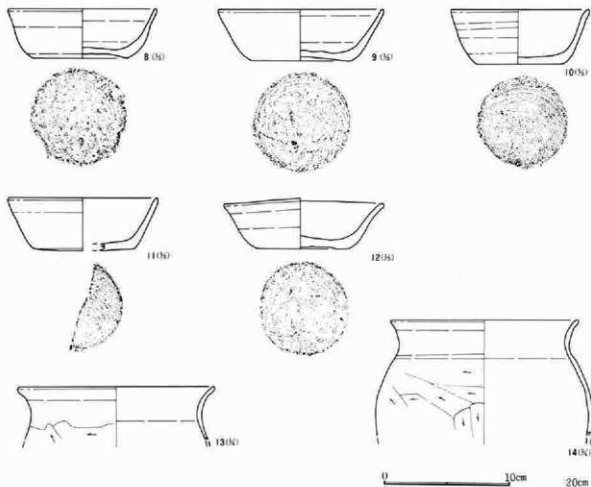
- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と少量の白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子を含む。
- ④ 黒褐色土 黒褐色土中に炭・灰・焼土粒子を含む軟質土層。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 暗赤褐色土 地山のロームが火を受け、部分的に焼土化した層。
- ⑦ 暗黒褐色土 多くの炭と少量の焼土粒子を含む。
- ⑧ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第338図 117号住居跡竈実測図



第339図 117号住居跡出土遺物実測図(1)



第340図 117号住居跡出土遺物実測図(2)

117号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第339・340図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
117住-1	坏 土師器	3.6 (11.0) (6.4) 覆土	器内が厚く口縁部で薄くなる。体部幅の広いヘラ削り、口縁部横ナデ、底部ヘラ削り、暗文ナシ。	①黄褐色②酸化③1/6④赤色粒を含む
117住-2 126	坏 土師器	3.7 (13.0) - 床面-7	1の坏に形は似ているが、胎土と色調が異なる。片岩を含むことにより在地産か、暗文ナシ。	①明褐色②酸化③2/3④片岩粒を含む
117住-3	坏 土師器	- (14.0) 11.0 床面+26	1と2に似るが器内が薄く、内側の高部と体部との境が明瞭である。体部へ口縁部内側放射状暗文、外面体部へ底部ヘラ削り。	①明褐色②酸化③1/3④赤色粒と片岩粒を含む
117住-4 126	坏 土師器	4.0 (13.2) 8.0 床面-4	1と2の坏より器内が薄い。体部中央部の器内が厚くなる。内側高部と体部との境は明瞭でない。体部幅広のヘラ削り、底部幅広の横方向ヘラ削り。	①明褐色②酸化③ほぼ完形④赤色粒と3mm内外の大粒の片岩粒を含む
117住-5 126	蓋	3.5 14.3 - 床面+5	擬宝珠状のツマミを持つ。口縁部は下方に折られている。天井部右回転ヘラ削り。	①灰白色②還元③ほぼ完形④1mm前後の石英と長石粒を多く含む
117住-6	蓋 須恵器	- (17.0) - 覆土	口縁部が下方に折られている蓋の小破片である。	①表面灰色・断面暗赤褐色②還元焼成③小破片④割
117住-7 127	坏 須恵器	3.7 (12.0) - 貯蔵穴内+30	体部は直線的に外補する。口縁部はほとんど外反しない。体部右回転クロコ目。	①灰白色②還元③体部へ口縁部1/3・底部ほとんど欠④1mm以下の石英と長石粒を含む
117住-8 127	坏 須恵器	3.9 12.0 7.6 貯蔵穴内+22	底部の器内が薄く中央部が盛り上がる。口縁部の器内が薄くなりわずかに外補する。底部右回転未切砥、挽き越して重量感はあるが、胎土が粗い。	①灰色②還元焼成③口縁部の一部を欠くがほぼ完形④1~3mmの石英と長石粒及び少量の片岩粒を含む
117住-9 127	坏 須恵器	4.1 13.4 8.6 床面	8の坏と形や胎土が共通するが、焼成がない。体部右回転クロコ目。底部の未切は、片側の糸を最終段階まで離さないで、最後に離して巻き込んでいる。	①灰白色②還元③口縁部の一部を欠くがほぼ完形④1mm内外の石英と長石粒を含む

117号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第340図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
117住-10 127	環 須恵器	4.3 11.1 7.0 床面+8	底部が大きく口径の小さな環である。底部内面に渦巻状のロクロ目、体部右回転ロクロ目、底部右回転糸切痕。	①灰色②還元焼成③ほぼ完成④密
117住-11	環 須恵器	4.2 (12.0) (8.0) 床面	口縁部がわずかに外傾する。底部回転糸切痕。	①灰白色②還元③1/2④密
117住-12 127	環 須恵器	3.9 12.8 7.2 貯蔵穴内+26	器高が低く底径が大きい。口縁部がわずかに外反する。底部の糸切は、再底部を切った後に片側の糸を離して行なっている。	①灰色②還元焼成③定形④1cm前後の石英と長石粒を多く、2~3mmの長石粒を少量含む
117住-13	甕 土師器	- (21.0) - 覆土	頸部は少し丸味を持ちつつ直立する。口縁部が外反。胴上部は右・左横方向へ削り。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を多く含む
117住-14 127	甕 土師器	- (20.0) - 貯蔵穴内+22	頸部は少し丸味を持ちつつ直立する。口縁部が外反。胴上部は右・左横方向へ削り。	①褐色②酸化③口縁部1/6・胴部1/4④1mm以下の砂粒を多く含む

118号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版52 遺物写真図版127

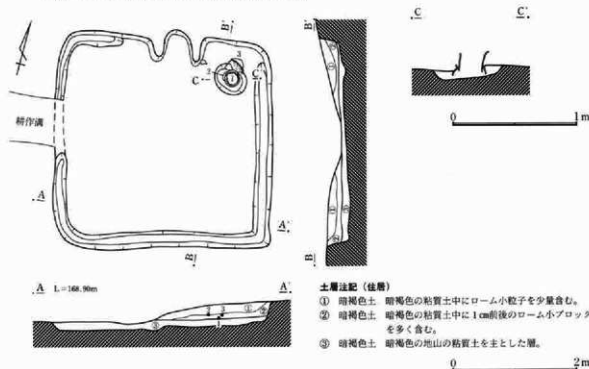
位置 IV区中央部に位置し、112号住居の北約2mでQ-36、R-36グリットに属する。

概要 壁面の残りは良くない。西壁中央部を3号溝により削り取られている。

構造 床面は多くのローム粒子とロームブロックを主とした土で造られ、床面中央部は堅く踏み固められてあった。貯蔵穴や柱穴は掘られていなかった。壁面の内側に周溝が掘られていた。

規模 東西3.50m、南北3.45mでほぼ正方形である。壁高は最も残りの良い東壁面で30cmである。周溝は幅25cm深さ11cmである。

遺物 床面や覆土中より土師器の甕や環の破片等が出土した。一般に多くの住居で貯蔵穴の掘られる甕右側部分に、貯蔵穴はなく、割れた甕の口縁部が埋め込まれ、その上に底部の欠けている甕が乗せられていた。またその北側に甕の底部が置かれていた。



第341図 118号住居跡実測図

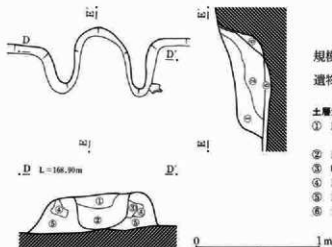
118号住居跡(竈)

位置 住居北壁中央部の壁面から床面にかけて造られている。燃焼部の大部分は床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 ロームと灰褐色粘質土を多く使い竈が造られていた。石は全く出土していない。燃焼部床面や奥壁部分が焼けて焼土化しており、覆土中より多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向55cm、両袖方向65cmである。

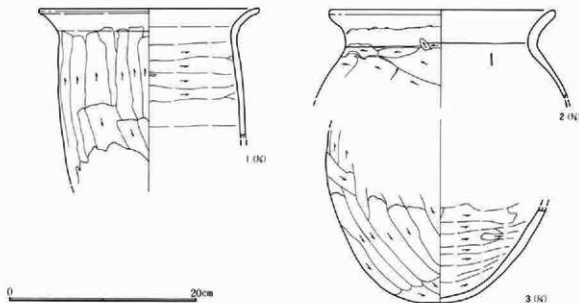
遺物 少量の土師器製の破片が出土した。



土層注記(竈)

- ① 灰褐色土 灰褐色粘質土を中心とし、少量のローム粒子を含む。
 ② 灰褐色土 灰褐色粘質土中に多くの焼土粒子を含む。
 ③ 暗赤褐色土 灰褐色粘質土中に多量の焼土粒子を含む。
 ④ 灰色土 灰色粘土の層。
 ⑤ 灰褐色土 灰褐色粘土ブロックを多く含む。
 ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第342図 118号住居跡竈実測図



第343図 118号住居跡出土遺物実測図

118号住居跡 出土遺物観察表(標図番号第343図)

遺物番号 図版番号	形状及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②構成③残存④胎土⑤備考
118住-1 127	甕 土師器	- 23.6 - 貯蔵穴内+4	口縁部に最大径を持つ。器内は全体的に薄い。胴上部は下→上縦方向へ丸み、胴中央部にカマド設置時に付いた粘土付着。口縁部が大きく外反する。	①褐色②酸化③実測部ほぼ完形④多くの赤色粒を含む
118住-2 127	甕 土師器	- 24.2 - 貯蔵穴内+10	胴中央部に最大径を持つ丸胴の甕である。胴部→口縁部の器内が厚い。胴上部右→左上横方向へ丸み。	①褐色②酸化③口縁→胴部ほぼ完形④密・1mm以下の砂粒を多く含む
118住-3 127	甕 土師器	- - - 貯蔵穴内+9	丸底丸胴の甕の底部である。外面左→右下斜方向へ丸み、内面ナデ。	①褐色②酸化③胴下半2/5・底部完形④密・1mm以下の砂粒を多く含む

119号住居跡及び竈 (奈良時代) 遺構写真図版52 遺物写真図版127

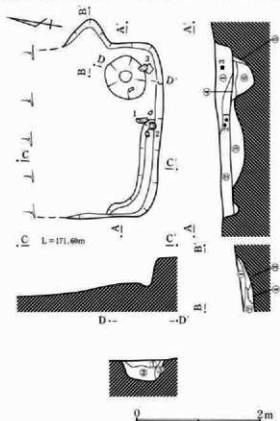
位置 III区中央部西側に位置し、116号住居の北約2mでR-28・29、Q-28・29グリットに属する。

概要 北側に向かって低くなる急斜面に位置するため、南側約半分は残っているが北側は残っていない。残っている南側も壁面周辺は良好であるが竈周辺は僅かに残っているのみである。竈は燃焼部の下部が僅かに残っており、多くの焼土粒子と少量の炭化物が検出された。

構造 床面は多くのローム粒子とロームブロックを主とした土で造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。南壁下の一部下に周溝が掘られていた。

規模 東西2.8m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い南壁面で40cmである。貯蔵穴は直径65cmで深さ35cm、周溝は幅30cm深さ7cmである。

遺物 床面や覆土中より少量の土師器の甕の破片と南壁周辺に須恵器の坏や蓋が出土した。



土層注記 (住居)

- ① 灰褐色土 少量のローム粒子と多くの灰褐色粘質土を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子と灰褐色粘質土を含む。
- ③ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ④ 暗褐色土 少量のローム小ブロックと多くの灰褐色粘質土を含む。
- ⑤ 灰褐色土 灰褐色粘質土を主とした層。
- ⑥ 暗褐色土 灰褐色粘質土を主とし、黒褐色土を多く混入する。

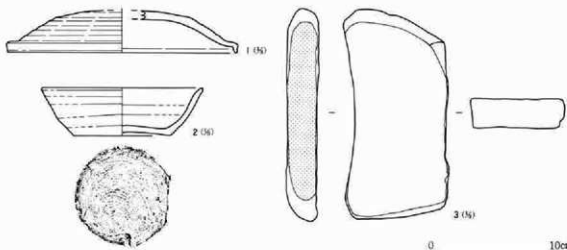
土層注記 (竈)

- ① 暗赤褐色土 少量のローム粒子と炭化物と多くの焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くの焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 焼土粒子を多量に含む。
- ④ 暗黄褐色土 地山のロームを主とした層。

土層注記 (貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の炭化物を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子と炭化物と粘土を少量含む。
- ③ 灰褐色土 灰褐色粘土を主とした層。

第344図 119号住居跡実測図



第345図 119号住居跡出土遺物実測図

119号住居跡 出土遺物観察表 (拝図番号第345図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
119住-1 127	蓋 須恵器	3.3 18.4 - 床面+4	口縁部が下方に折り曲げられる蓋である。天井部右 回転未切取。体部に多くのロクロ目。	①灰色②還元③1/3④1mm前後の石英 と長石粒を多く、片岩を少量含む
119住-2 127	坏 須恵器	3.8 13.0 7.8 床面+7	底部の胎肉が薄く中央部が盛り上がる。口縁部は外 反しない。体部に右回転クロ目、底部右回転未切 取、未切取調整。	①褐色②酸化③4/5④1mm前後の石英 と長石粒と赤色粒を多く含む
119住-3 127	磁石	長さ16.9 幅2.7 厚さ8.4 重量527g	4側面がわずかに磨耗しているが、1側面を基本的 に磁石として使用している。その面の中央部が使用 により凹状を呈している。	①淡黄褐色③完形④砂岩

120号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版52 遺物写真図版128

位置 IV区中央部西端に位置し、118号住居の西約3mでQ-36、R-36グリットに属する。

概要 竈周辺部以外はほとんど残っていない。住居範囲は床下面の調査より確認した部分が多いため、不自然な点が多い。

構造 良好な状態の床面は検出できなかった。竈左側に貯蔵穴に似た小穴が検出されたが、他にあまり例がなくまた浅いため貯蔵穴としては扱わなかった。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.1m、南北2.9mである。壁高は竈周辺部で5cmであった。

遺物 残存している床面や覆土中より僅かな土師器の坏や甕また須恵器の坏の破片が出土している。

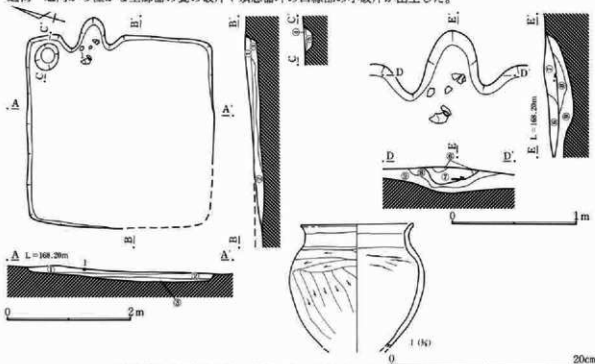
120号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央部やや北寄りに位置し、燃焼部と煙道部は壁を掘り込んで造られていたようである。

構造 残りが悪いためほとんど不明だが、ロームと粘土を主にして造られたものと思われる。竈内より多くの焼土粒子と少量の炭化物が検出された。

規模 煙道方向55cm、両袖方向60cmである。

遺物 竈内から僅かな土師器の甕の破片や須恵器環の口縁部の小破片が出土した。



第346図 120号住居跡・竈及び出土遺物実測図

土層注記(住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くの粘土と少量の焼土粒子を含む。
- ③ 黄褐色土 地山の粘土を主とした層。

土層注記(貯蔵穴)

- ④ 暗褐色土 多くの焼土粒子と粘土を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くの焼土粒子と少量のローム小ブロックを含む。

土層注記(墓)

- ⑥ 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ⑦ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の炭化物を含む。
- ⑧ 暗褐色土 多くの粘土と少量の焼土粒子を含む。
- ⑨ 暗灰白色土 地山の粘土を主とした層。

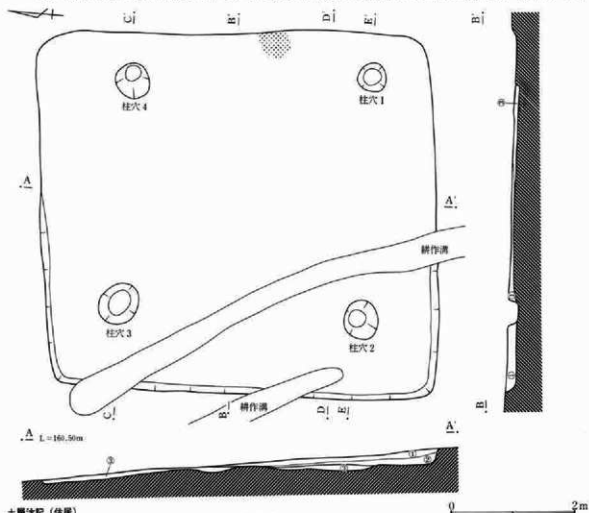
120号住居跡 出土遺物観察表(押印番号第346図)

遺物番号 図版番号	形状及 び種類	露高・口径・底径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
120住-1 128	壺 土師器	- 12.0 - 床面+5	頸部は直線で少し内傾する。口径部は外反する。胴部右→左横方向へ削り、胴部左上→右下縦へ削り。	①明褐色②酸化③口径部2/3・胴部1/3④1mm以下の砂粒を含む

121号住居跡 (時代不明) 遺構写真図版53

位置 I区中央部に位置し、2号住居の東約7mでI-9グリッドに属する。

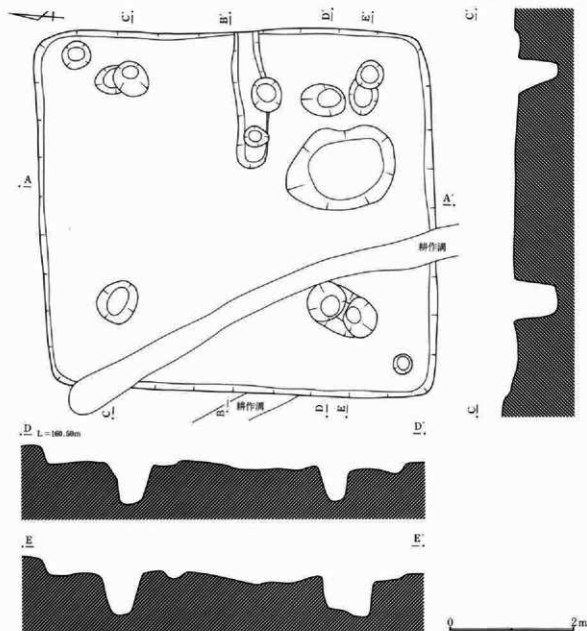
概要 北東部の低くなるなどらかな斜面に位置し、覆土西側は今日の道路の下に位置し、道路両側の2本の側溝により床面下まで掘り抜かれている。極めて残りの悪い住居であり、西側に僅かに壁面が残るが、床面や壁面の多くは残っていない。東壁中央部少し南寄りの床面上に焼土粒子や焼土ブロッ



土層注記(住居)

- ① 暗褐色土 多くのローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ② 暗黄褐色土 ローム粒子を主とした層。
- ③ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第347図 121号住居跡実測図



第348図 121号住居跡床下実測図

クが検出されたため、この位置に竈が造られていた可能性が高い。

構造 床面はほとんど残っていないかった。柱穴は4本掘られていたが貯蔵穴は掘られていなかった。床下調査の段階で、北西部に位置する柱穴以外は隣に接して他の柱穴が確認されたため、柱の建て直しがあつたものと思われる。

規模 東西5.7m、南北6.3mである。壁高はほとんど残ってなく、西壁面で5cmである。柱穴は直径50cmで深さはいずれも80cm前後と深い。柱穴1は直径45cm深さ84cm、柱穴2は直径55cm深さ83cm、柱穴3は直径65cm深さ83cm、柱穴4は直径55cm深さ104cmであった。

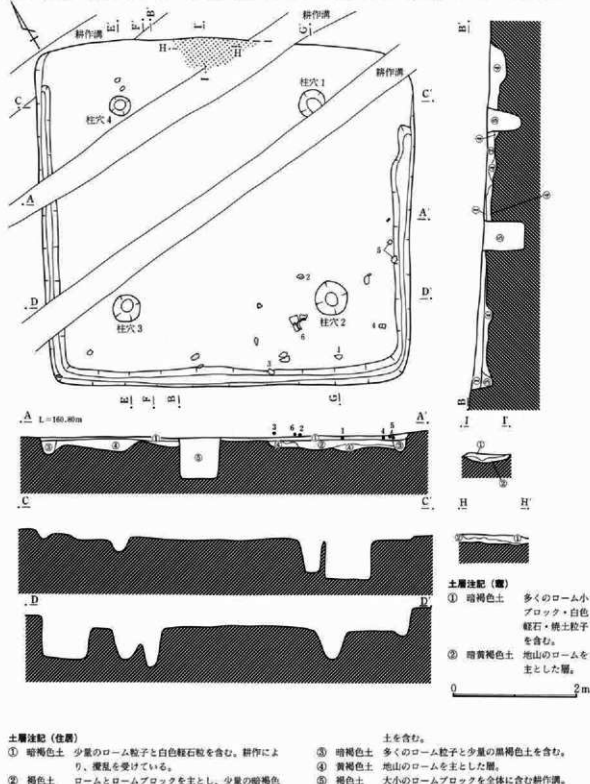
遺物 全く出土していない。そのためどの時代に属するのか不明である。

床下 床面中央部南側に床下土坑が検出された。推定される床面からの深さは32cmであった。外にも多くの小穴が検出された。

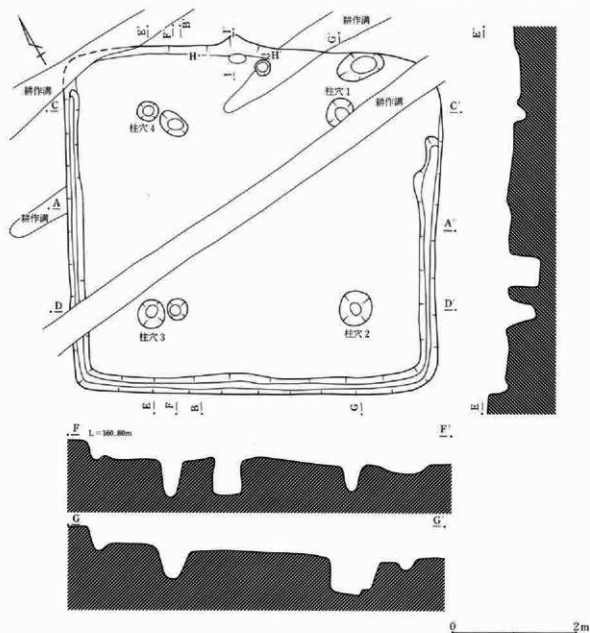
122号住居跡及び竈 (古墳時代) 遺構写真図版53 遺物写真図版128

位置 I区中央部南端に位置し、121号住居の南東約5mでJ-8・9、K-8・9グリットに属する。

概要 北東部の低くなるなどらかな斜面に位置し、中央から北側を3本の耕作溝により斜めに掘り込まれて



第349図 122号住居跡実測図



いる。北壁中央部の床面上にほとんど削り取られて残っていない竈が検出された。竈内から少量の焼土粒子が検出された。

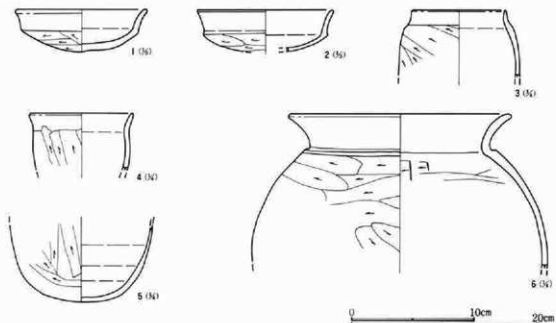
構造 床面は多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む土でできていたが、良好な状態で検出はできなかった。柱穴は4本掘られていたが貯蔵穴は掘られていなかった。床下調査の段階で西側の2本の柱穴の内側に柱穴が確認されたため、柱の建て直しがあったものと思われる。周溝が北壁以外の壁面下で検出された。

規模 東西5.9m、南北5.5mである。壁高は残りの良い南壁面で20cmであった。柱穴1は直径40cm深さ76cm、柱穴2は直径50cm深さ59cm、柱穴3は直径40cm深さ60cm、柱穴4は直径35cm深さ46cmである。周溝は幅25cm深さ8cmである。

遺物 残存状態の良い南側の床面上や覆土中から、少量の土師器の坏や壺が出土した。

第350図 122号住居跡床下実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第351図 122号住居跡出土遺物実測図

122号住居跡 出土遺物観察表 (挿入番号第351図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
122住-1 128	坏 土師器	3.4 10.6 - 床面+4	口径・器高とも小さな坏である。底部と口縁部との境に稜を持つ。口縁部が外反する。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③4/5④密
122住-2 128	坏 土師器	- 11.0 - 床面+6	口径・器高とも小さな坏である。底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③1/3④密・赤色粒を少量含む
122住-3	小型甕 土師器	-(10.0) - 床面+9	口縁部は坏に似た作りである。胴部右下→左上斜方向へう削り、内面ナデ。	①橙色②酸化③1/3④黒色粒を含む
122住-4	小型甕 土師器	-(11.0) - 床面+7	器表面の広い小型甕である。胴部下→上縦方向へう削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③1/3④1~3mmの石英と長石粒を多く含む粗い胎土
122住-5 128	甕 土師器	- - - 床面+6	丸底を呈する甕であり、内外面とも器表面を磨密に仕上げている。	①橙色②酸化③胴部下→底部4/5④内外とも器表面密で光沢を持つ
122住-6 128	甕 土師器	-(24.0) - 床面+8	丸胴の大きな甕である。肩部～口縁部の器肉が厚い。口縁は大きく外反する。肩部右→左横方向へう削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③口縁→胴上半部1/2・胴中央部1/8④密で粉状を呈する

123号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版53 遺物写真図版128・148

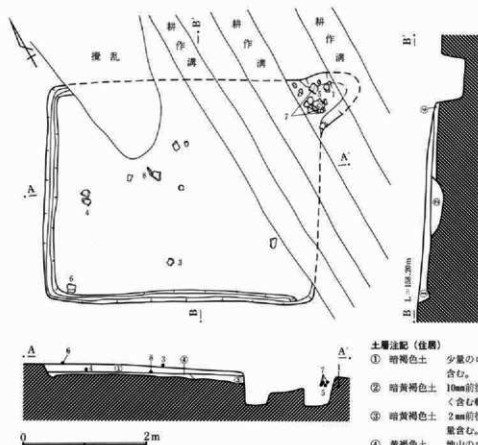
位置 I区南東端部に位置し、122号住居の東約29mでJ-5グリットに属する。

概要 北東部の低くなるなどらかな斜面に位置し、北東部分を3本の耕作溝により掘り込まれており、さらに住居北東部を大きな攪乱土坑により掘り取られている。このように残りの悪い住居であり、南西側の約半分の壁面と床面が検出されたが、竈を含む北東部の壁面や床面はほとんど残っていない。

構造 床面はローム小ブロックを多く含む土により造られていたが、軟質であり良好な状態の床面の検出はできなかった。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。西壁と北壁の内側に周溝が掘られていた。

規模 東西4.40m、南北3.45mである。壁高は最も残りの良い南西壁面で14cmで残りが悪い。周溝は幅20cm深さ6cmである。

遺物 残存している床面や覆土中より、土師器の坏や甕の破片及び羽釜の破片等が出土した。



第352図 123号住居跡実測図

123号住居跡 (竈)

位置 住居東南コーナーに位置し、焚口部と煙道部を耕作溝により掘り取られ、燃焼部の下部が残っていた。

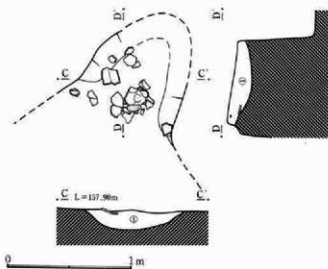
構造 袖石や天井部の石の残存もなく、袖部もほとんど残っていないため多くの部分が不明である。竈内から石の出土も少なかった。

規模 煙道方向推定90cm、両袖方向推定80cmである。

土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 暗黄褐色土 10cm前後のローム小ブロックを多く含む軟質な層。
- ③ 暗黄褐色土 2cm前後のローム小ブロックを少量含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

遺物 竈内から羽釜を中心とした遺物が多く出土した。

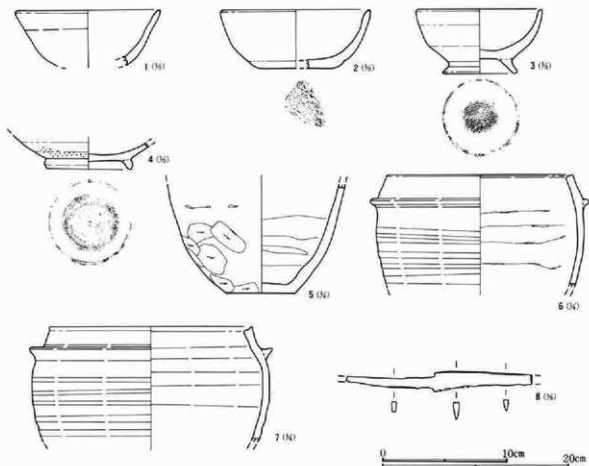


第353図 123号住居跡竈実測図

土層注記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量の焼土粒子と多くのローム粒子を含む。

第3章 検出された遺構と遺物



第354図 123号住居跡出土遺物実測図

123号住居跡 出土遺物観察表 (神図番号第354図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④土質⑤備考
123住-1	坏 土師質	- (11.6) - カマド内+21	高台の付く残の可能あり、体部右回転ナデ。	①褐色②酸化③体部へ口縁部1/5④赤色粒を含む
123住-2	坏 土師質	4.6 (12.0) (7.0)	坏の小破片である。底部に糸切痕が残る。	①褐色②酸化③底部へ体部の小破片④1mm内外の石英と長石粒と赤色粒を含む
123住-3 128	碗 土師質	5.1 (10.2) 5.3 床面+12	高い高台を持ち、坏部は球形を呈する。口唇部は丸く仕上げている。高台は外側へ大きく張り出し、高台部内側の坏底部に右回転糸切痕。	①褐色②酸化③口縁へ体部2/3・底部完形④内凹石と赤色粒を含む
123住-4 128	碗 灰釉	- - 6.8 床面+7	坏底部は皿状に平である。高台は太く輪部はヘラ削りを行っているが鋭利でない。高台内側回転ナデ。	①灰白色②還元③底部のみ完形④密⑤体部下半ヘラ削り
123住-5 128	土師器	- - 7.2 カマド内+21	胴部外面は磨面で、ヘラ削りによる砂粒の浮き出しはほとんどない。内面に輪痕が残る。	①内外面黒褐色・断面赤褐色②酸化③胴下半へ底部4/5④砂粒を含む
123住-6 128	羽釜	- (20.0) - 床面+10	胴は断面三角形で短い。口縁部は内傾し口唇部は平で中央部が凹状を呈する。胴上部は幅5mmの工具で回転ナデ、内面ナデで2cm前後幅の輪痕がある。	①褐色②酸化③1/5④密
123住-7 128	羽釜	- (21.8) - カマド内+22	胴は断面三角形で端部が上方へ持ち上がる。口縁部は内傾し、口唇部は平で中央部が凹状を呈する。胴上部は幅7mmの工具で回転ナデ、内面ナデ。	①によい褐色②酸化③1/4④密・赤色粒を含む
123住-8 148	刀子	全長14.8 幅1.4 棟厚0.5 重量10.9g	長い茎の刀子であり、刃部は先端を欠いているが、残存部も長い大きな刀子と思われる。棟区もしっかり残っている。使用により刃部が研ぎ減り細くなっている。床面上10cm出土。	

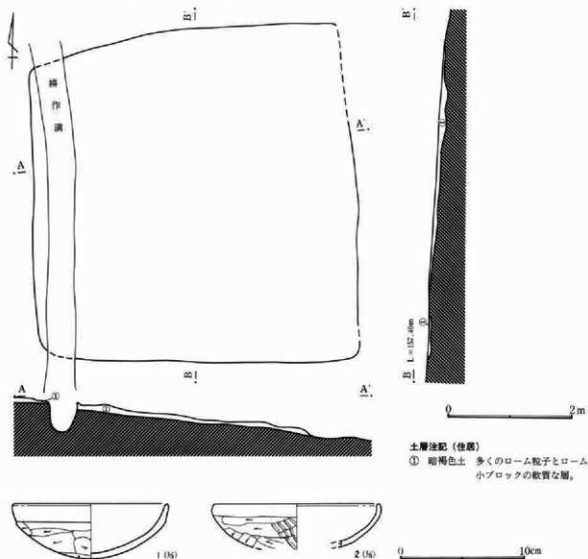
124号住居跡 (古墳時代) 遺物写真図版128

位置 I区南東端部に位置し、123号住居の北東約5mでI-4・5グリッドに属する。

概要 住居状に方形を呈し、覆土中より古墳時代を中心とする遺物が出土することより、大部分が壊されていたが古墳時代の住居跡として取り扱った。覆土中より焼土の検出もなく、竈の造られていた位置も不明である。また柱穴や貯蔵穴も確認できなかった。4号掘立柱建物跡と重複している。

規模 東西推定5.2m、南北推定5.3mである。

遺物 覆土中から少量の土師器の壺や杯の破片が出土した。



第355図 124号住居及び出土遺物実測図

124号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第355図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
124住-1 128	杯 土師器	4.4 (12.6) - 覆土	底部が深く丸い杯である。底部と口縁部との境にわずかな稜を持つ。口縁部は底部からの曲線で立ち上がる。底部へタ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	①褐色②酸化③1/4④1mm前後の砂粒をわずかに含む
124住-2	杯 土師器	- (13.2) - 覆土	底部は丸底を呈するが平底に近くなる。口縁部は短く内彎気味に直立する。底部へタ削り。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/4④密

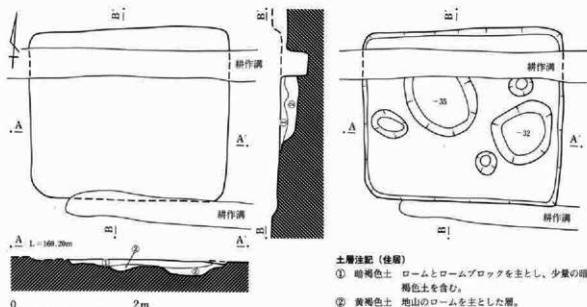
125号住居跡（時代不明） 遺構写真図版54

位置 I区中央部に位置し、121号住居の東約1mでI-8・9グリッドに属する。

概要 124号住居同様に壁面や床面の残りが非常に悪い。また住居北側と南壁部分の2カ所が耕作溝により掘られている。覆土中から土師器の環や壺また羽釜の破片が出土しているが、出土状態や遺物が小さな破片であることより時代を特定できない。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西3.2m、南北2.8mである。

床下 床面中央部及び東側に床下土坑が検出された。推定される床面からの深さは図上に数字で示した。



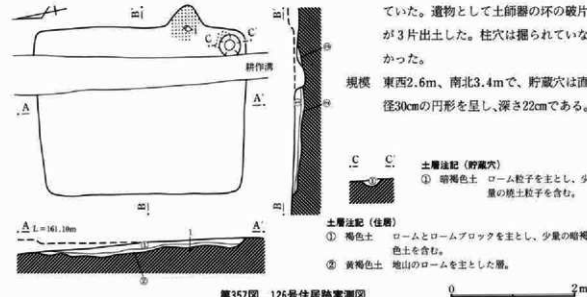
第356図 125号住居跡及び床下実測図

126号住居跡（古墳時代） 遺構写真図版54 遺物写真図版128

位置 I区中央部南寄りに位置し、122号住居の西約5mでJ-9・10グリッドに属する。

概要 壁面や床面の残りが悪い。竈手前を耕作溝により南北方向に掘られている。竈右側に貯蔵穴が掘られていた。遺物として土師器の環の破片が3片出土した。柱穴は掘られていなかった。

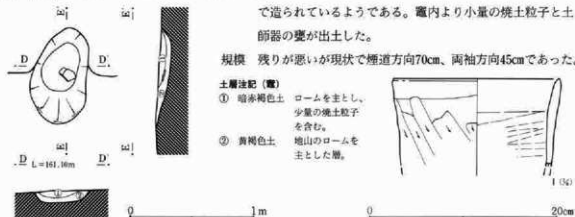
規模 東西2.6m、南北3.4mで、貯蔵穴は直径30cmの円形を呈し、深さ22cmである。



第357図 126号住居跡実測図

126号住居跡(竈)

概要 住居東壁南寄りに竈が確認された。残りが悪いため不明の部分が多いが、燃焼部は一部壁面を掘り込んで造られているようである。竈内より少量の焼土粒子と土師器の甕が出土した。



土層注記(竈)

- ① 暗赤褐色土 ロームを主とし、少量の焼土粒子を含む。
② 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第358図 126号住居跡竈及び出土遺物実測図

126号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第358図)

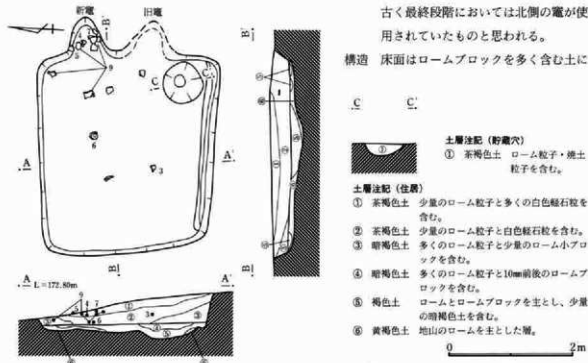
遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
126住-1 128	甕 土師器	(18.0) カマド内+3	胴部〜口縁部が直線的に外傾しつつ立ち上がる。胴部左上→右下方へ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	①に赤褐色変色化②1/3③1mm前後の砂粒を多く含む

127号住居跡(平安時代) 遺構写真図版54・55 遺物写真図版128・129

位置 Ⅲ区中央部西側に位置し、116号住居の東約3mでQ-27・28グリットに属する。

概要 北側の低くなる傾斜面に位置し、4面すべての壁面がほぼ良好に残存している。特に南側の壁面の残りは良好であった。平安時代の住居としてはめずらしく竈が造り替えられている。2つの竈とも焚口部や袖は残っていないが、北側の竈内から焚口部にかけて多くの甕が出土しているため、南側の竈が古く最終段階においては北側の竈が使用されていたものと思われる。

構造 床面はロームブロックを多く含む土に



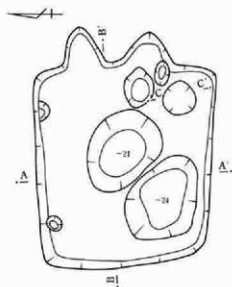
土層注記(貯蔵穴)

- ① 茶褐色土 ローム粒子・焼土粒子を含む。

土層注記(住居)

- ① 茶褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
② 茶褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量のローム小ブロックを含む。
④ 暗褐色土 多くのローム粒子と10mm前後のロームブロックを含む。
⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第359図 127号住居跡実測図



第360図 127号住居跡床下実測図

より造られていた。貯蔵穴は電右側に掘られていたが柱穴は掘られていなかった。南壁の内側に周溝が掘られていた。

規模 東西3.2m、南北2.9mである。壁高は最も残りの良い南壁面で52cmで残りが良い。貯蔵穴は直径65cmの円形を呈し、深さ21cmで、周溝は幅25cm深さ5cmである。

遺物 床面や覆土中より須臾器の坏や壺の破片や土師器の甕や甑が出土した。

床下 床面中央部に2つの床下土坑が検出された。床面からの深さは図上に数字で示した。

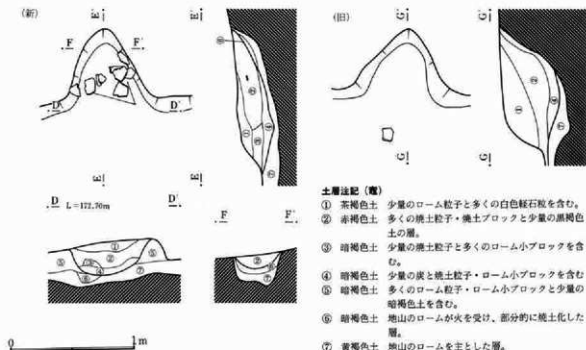
127号住居跡（新竈）

位置 住居東壁北寄りに位置し、燃焼部の多くと煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 袖石や天井石の残存はなく、袖部もほとんど残っていない。竈内の燃焼部床面付近に多くの焼土が出土した。ロームを主体として造られたものと思われる。

規模 煙道方向60cm、両袖方向60cmである。

遺物 竈内から土師器の甕の破片が多く出土した。



土層注記（竈）

- ① 茶褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ③ 暗褐色土 少量の焼土粒子と多くのローム小ブロックを含む。
- ④ 暗褐色土 少量の炭と焼土粒子・ローム小ブロックを含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 暗褐色土 地山のロームが火を受け、部分的に焼土化した層。
- ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第361図 127号住居跡新竈実測図

127号住居跡(旧竈)

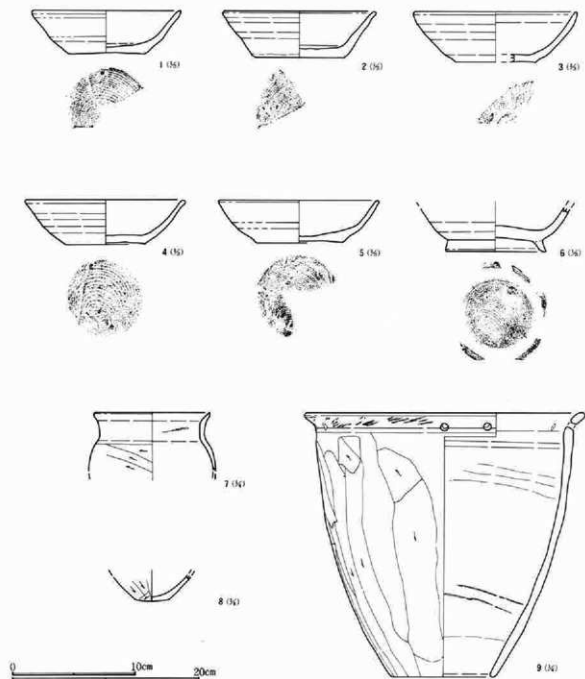
位置 住居東壁南寄りに位置し、燃烧部の多くと煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造 竈内より石の出土はなく、袖部もほとんど残っていない。竈廃棄後意識的に埋め戻した痕跡はない。

竈内の燃烧部床面付近に多くの焼土が出土した。

規模 煙道方向60cm、両袖方向70cmである。

遺物 遺物の出土は認められなかった。



第362図 127号住居跡出土遺物実測図

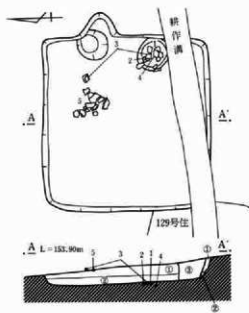
127号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第362図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②構成③残存④胎土⑤備考
127住-1	坏 須恵器	3.4 (12.0) (6.2) 覆土	器高が低い。体部へ口縁部が大きく外側に開く、口縁部外反しない。底部右回転糸切痕調整。	①灰色②還元③口縁へ体部小破片・底部2/3④1mm以下の石英と長石粒含む
127住-2	坏 須恵器	3.7 (12.4) (7.2) 覆土	底径が大きく器高が低い。口縁部がわずかに外反する。底部回転糸切痕。体部右回転クロロ目。	①灰色②還元焼締③1/4④1mm以下の石英と長石粒を含む
127住-3	坏 須恵器	4.0 (13.0) (6.4) 床面+12	器高が低い坏であり、体部へ口縁部が内彎しつつ上上がり、口縁部がさらに内彎する。底部右回転糸切痕。体部右回転クロロ目。	①に多い褐色②酸化③1/4④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
127住-4	坏 須恵器	4.1 (13.0) 6.3 カマド内+16	器高が低い坏であり、体部へ口縁部が内彎しつつ外側に大きく開く。底径は小さい。底部右回転糸切痕。体部右回転クロロ目。口縁は外反しない。	①に多い褐色②酸化③口縁部1/4・体部1/3・底部完形④1~2mmの石英と長石粒を多く含む
127住-5	坏 須恵器	3.4 (13.0) (7.4) カマド内+18	器高が低い坏であり、体部へ口縁部が内彎しつつ外側に大きく開く。底部と体部との境に切線な段を持つ。高台を持つ厚の底部と思われるが明確でない。底部の器内が特厚。高台は外側に張り出し端部を鋭利に削り出している。高台部内側右回転糸切痕。	①表面黒褐色・断面に多い褐色②酸化③口縁部1/4・体部④口縁部1/4・体部へ口縁部2/3⑤密
127住-6	陶 須恵器	- - 7.6 床面+4	器高が直立し、口縁部が外反する。肩部右へ左前方へ傾り。内面ナズ。	①赤褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を含む
127住-7	小型 土師器	- (12.4) - カマド内+20	底径の非常に小さな甕である。体部へ底部へ削り。外面底部は平に近いが内面底部は球形で平面なし。	①に多い褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を含む
127住-8	甕 土師器	- - 3.8 覆土	口径・器高とも大きく、底部の付かない甕である。口縁部は短く強く外反する。残存は1/2であるが、頸部に4cmと5cmの間隔で2個の穿孔されている。穴頸部に穿孔の可能性有。胴部上へ上縁方向へ傾り。	①褐色②酸化③1/2④1mm前後の砂粒を少量、1mm以下の砂粒を大量に含む⑤口縁部下にへらの打痕あり
127住-9	甕 土師器	28.0 (30.0) (11.0) 孔径0.7 カマド内		

128号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版55 遺物写真図版129

位置 I区北東端部に位置し、C-5・6、D-5・6グリットに属する。

概要 東側の低くなるなどらかな斜面に位置し、竈を含む東側部分の残りが悪い。南側の側壁近くを牛舎の尿尿排水溝により掘り込まれている。この地区は耕作による攪乱や尿尿の浸透による土の変色等により遺構確認に多くの困難が伴った。この住居もそのような状況での検出であるため、不確定な部分が多く、竈や貯蔵穴の位置が不自然であり、部分的に検出違いの所もあると思われる。古墳時代の129号住居と重複し、129号住居の北西端部を掘り込んでいる。



第363図 128号住居跡実測図

構造 確実な床面は検出できなかった。おそらくロームを主とした土で造られたものと思われる。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが柱穴は掘られていなかった。竈手前の小穴は攪乱坑である。

規模 東西2.80m、南北2.65mである。壁高は最も残りの

土層注記 (住居)

- ① 暗青褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。(牛舎から流出した尿尿で変色している)
- ② 茶褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。(牛舎から流出した尿尿で変色している)
- ③ 耕作溝による攪乱層

良い南壁面で23cmであった。貯蔵穴は直径50cmの円形を呈し、深さ31cmであった。

遺物 床面中央部と貯蔵穴内より須恵器の埴や羽釜を中心として多く出土した。

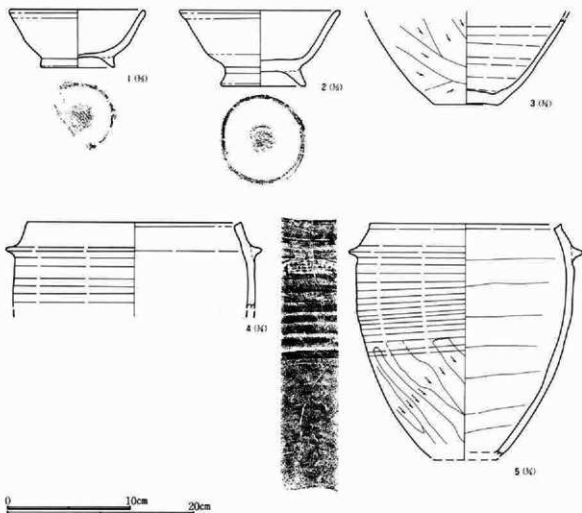
128号住居跡（竈）

位置 住居東壁の北側に、竈上面の大部分が削り取られた状態で検出された。燃焼部の大部分と煙道部は壁面を掘り抜いて造られていたものと思われる。

構造 袖石や天井部の石もなく、袖部もほとんど残っていないため多くの部分が不明である。竈内の焼土の出土も少なかった。

規模 煙道方向推定50cm、両袖方向推定60cmである。

遺物 遺物の出土は認められなかった。



第364図 128号住居跡出土遺物実測図

128号住居跡 出土遺物観察表(挿入番号第364図)

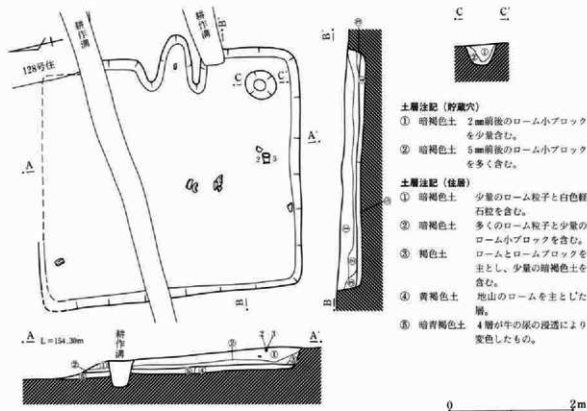
遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
128住-1 129	埴土師質	4.6 (11.0) 5.8 貯蔵穴内+14	断面三角形の高い高台を持つ。埴部は深く内湾しつつ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。体部にクロ目なし。口唇部は丸い。	①灰白色②還元③口縁へ体部1/2・底部4/5④1mm以下の石英と長石粒を多く含む⑤須恵器に似た胎土
128住-2 129	埴土師質	6.0 13.0 6.0 貯蔵穴内+15	太く高く外側に大きく張り出す高台を持つ。埴部は深く、底部と体部との境は明確である。口縁部は外傾し口縁部がわずかに外反。高台部内湾ナデ。	①黒色②還元③口縁へ体部4/5・底部成形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む⑤体部にクロ目なし
128住-3 129	羽釜	- - 7.0 床面+13	羽釜の胴下半へ底部の破片と思われる。胴部左上へ右下斜方向へ削り。胴下半へ削り。底部ナデ。内面割部横ナデ。内面底部ナデ。	①にぶい褐色②酸化③胴部1/4・底部ほぼ完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
128住-4 129	羽釜	- (23.0) - 貯蔵穴内+12	胴は断面三角形を呈し、口縁部は内傾する。口唇部は平で中央が凹状を呈す。胴部幅6mmの工具横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③1/4④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
128住-5 129	羽釜	- (22.4) - 床面+12	底部へ口縁部が内湾しつつ立ち上がる。胴は断面三角形、口唇部は平で強く内傾し、中央部が凹状を呈す。胴上部幅6mmの工具で横ナデ。胴下半へ削り。	①灰色②還元③2/3④1mm以下の石英と長石粒を多く含む

129号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版55・56 遺物写真図版129

位置 I区北東端部に位置し、D-6グリットに属する。

概要 東側の低くなるなどらかな斜面に位置する。耕作により北壁と北壁近くの床面部分が残っていないかった。電右側の壁面の一部は耕作溝により掘られていた。また北側の床面を牛舎の尿排水溝により東西方向に掘り込まれていた。尿尿の浸透により土の変色が多く認められた。平安時代の128号住居と重複しており128号住居により北東端部が掘り込まれている。

構造 尿尿の浸透により土の変色が多く認められ良好な床面は検出できなかった。おそらくロームを主とし



第365図 129号住居跡実測図

た土で造られたものと思われる。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが、柱穴は検出できなかった。

規模 東西3.8m、南北4.2mである。壁高は最も残りの良い南壁面で31cmであった。貯蔵穴は直径50cmの直径を呈し、深さ38cmであった。

遺物 多くの土師器の環や高環が出土した。また円盤状の石製品や穿孔された石製品が出土した。

129号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央の壁面に位置し、燃焼部は壁面から床面にかけて造られている。

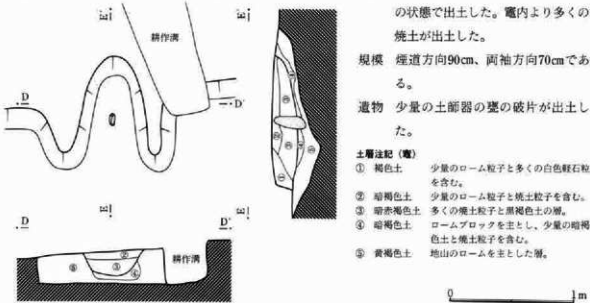
構造 ロームブロックを主とし少量の暗褐色土で造られていた。燃焼部中央奥壁寄りに支脚石が据えたままの状態出土した。竈内より多くの焼土が出土した。

規模 煙道方向90cm、両袖方向70cmである。

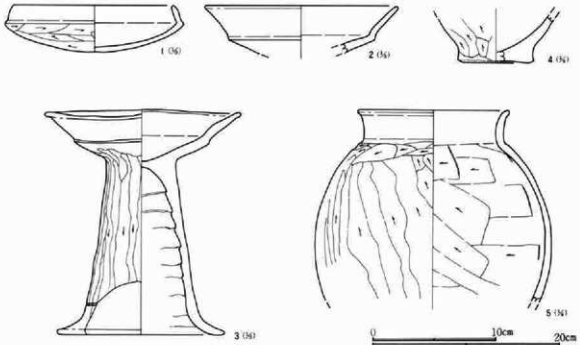
遺物 少量の土師器の壺の破片が出土した。

土層注記(竈)

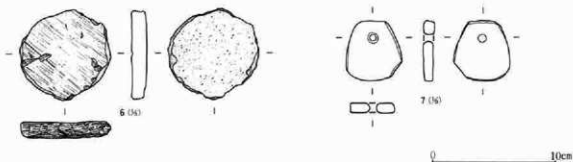
- ① 褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と黒褐色土の層。
- ④ 暗褐色土 ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土と焼土粒子を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第366図 129号住居跡竈実測図



第367図 129号住居跡出土遺物実測図(1)



第368図 129号住居跡出土遺物実測図(2)

129号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第367・368図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	頸高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②胎色③残存④胎土⑤備考
129住-1 129	環 土師器	3.7 (13.0) -	坯身の横微環である。口縁部が強く内傾し、底部との境に明瞭な受部を持つ。底部へう削り。口縁ナデ。	①明赤褐色②胎色③2/5④1mm以下の小さな砂粒を含む
129住-2	高環 土師器	- 15.5 -	高環の坏部である。底部が浅く口縁部が長く大きく開く。口縁部横ナデ、底部へう削り、内面ナデ。	①にぶい黄灰色②胎色③坏部1/3④密
129住-3 129	高環 土師器	17.8 15.5 (13.4) 床面+25	胴部が非常に太い高環である。坏部の底部と口縁部との境に明瞭な境を持つ。胴部内側に輪襷痕が残る。胴部外側へう削り、脚端部横ナデ。	①にぶい黄灰色②胎色③坏と脚部ほぼ完形・脚端部1/8④密・黒色粒を多く含む
129住-4	壺 土師器	- - (8.0)	長胴壺の胴下半～底部の破片と思われる。胴部へう削り、底部ナデ。	①褐色②胎色③胴下半1/6・底部1/2④1～3mmの石粒を多く、片岩を少量含む
129住-5 129	壺 土師器	- (16.2) -	丸胴の壺である。頸部は直立し口縁部がわずかに外反する。肩部右→左横方向へう削り、胴部右下→左上方向へう削り、内面3.5幅の工具による横ナデ。	①褐色②胎色③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
129住-6 129	石	径7.1 厚き1.2 重量70g	円形で扁平な製品である。端部を欠いて円形としている。	①褐色③完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
129住-7 129	石	長4.7 幅4.5 厚さ0.9 重量22g	薄く扁平である。上部中央に穿孔あり。表面を砥ぎ減らし形を作っている。端部が鋭角となる。	①にぶい褐色③完形④砂岩

130号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版56 遺物写真図版129

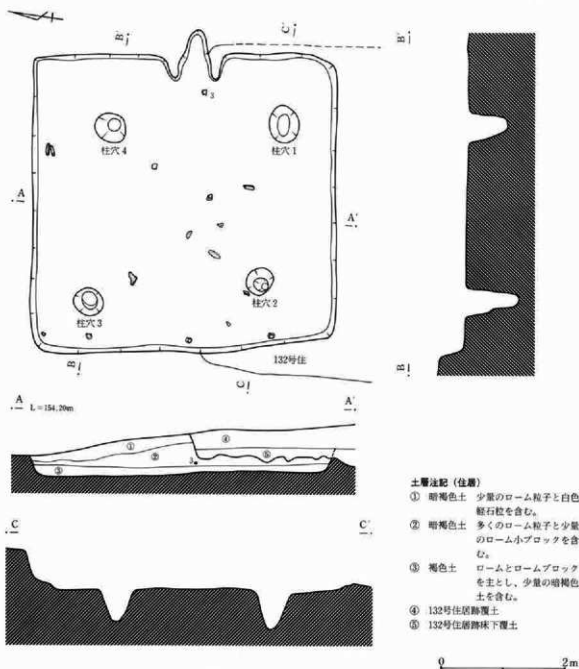
位置 I区北東部に位置し、128号住居南約3mでD-5グリットに属する。

概要 東側の低くなる斜面に位置するため、甕を含む住居東側の残りは良好でない。同じ古墳時代の132号住居と重複しており、132号住居により甕右袖を含む住居南側約半分の覆土を、床面近くまで削り取られているため132号住居より古い。南東部の壁面と床面は風倒木跡を削り込んで造られている。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土で固められ床面中央部は踏み固められてあった。柱穴は4本確認されているが方形でなく少し菱形を呈する。甕右側に掘られている小穴は132号住居の貯蔵穴の下部である。

規模 東西4.75m、南北4.85mである。壁高は最も残りの良い西壁面で47cmであった。

遺物 床面や覆土中より土師器の坏や壺と円盤状の石製品が出土した。



第369図 130号住居跡実測図

130号住居跡(竈)

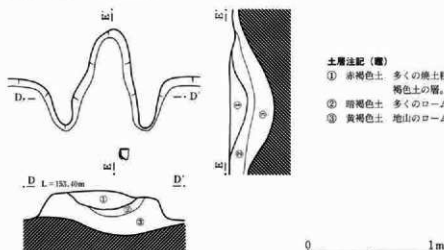
位置 住居東壁中央に位置し、燃焼部は壁面から床面にかけて造られている。

構造 上部の多くは残っていないが、袖は多くのローム粒子を主とした土で造られていた。竈内より多くの焼土粒子が出土した。

規模 煙道方向75cm、両袖方向65cmである。

遺物 少量の土師器の坏と甕の破片が出土した。

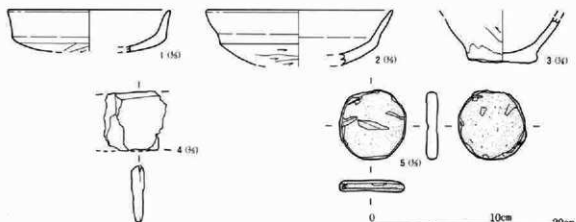
第3章 検出された遺構と遺物



土層注記 (欄)

- ① 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
 ② 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
 ③ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第370図 130号住居跡遺実測図



第371図 130号住居跡出土遺物実測図

130号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第371図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
130住-1	坏 土師器	3.3 (13.0) - 覆土	浅く扁平な坏であり、特に底部が浅い。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①にぶい橙色②酸化③1/4④赤色粒を含む
130住-2	坏 土師器	- (15.0) - 覆土	小破片であり、多くが推定復元。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③小破片④赤色粒を多く、1~3mmの砂粒多く含む粗い胎土
130住-3	土師器	- - 7.4 床面+2	長脚型と思われる。底部の器内が厚く胴下端との境に段を持つ。胴部へラ削り、底面ナデ。	①にぶい橙色②酸化③胴下端1/5・底部完形④1~3mmの砂粒を含む粗い胎土
130住-4	鉄	長さ5.0 幅4.6 厚さ0.8 重量29.7g	肉厚の鉄片である。用途及び名称不明。断面に数回折り返して鍛えた層が観察できる。左右が割れて欠損している。⑤覆土	
130住-5 129	石	径5.3 厚さ0.8 重量30g	石製の円盤状の製品である。表面は一部破れている。側面は7個所直線的にねぎ、面を作っている。	①黄褐色③完形④砂岩

131号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版56・57

位置 I区北東部に位置し、132号住居南約1mでE-5グリットに属する。

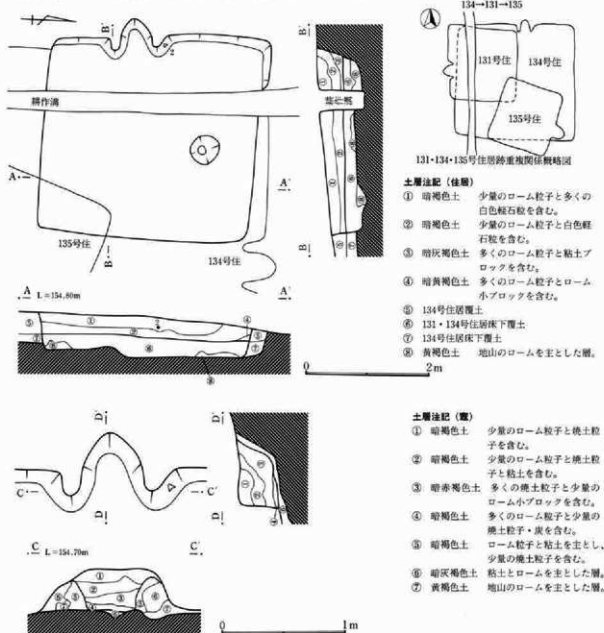
概要 古墳時代の134号住居及び平安時代の135号住居と重複する。134号住居が最も大きく古い段階の住居である。床面の高さは131・134号住居はほぼ同じで135号住居が高い。131号住居は134号住居の北西

部の床面と覆土及び東壁を一部掘り込んで住居が造られている。また135号住居は134号住居の南側の覆土上面及び南壁を一部掘り込んで造られていた。新旧関係は134→131→135号住居の順である。134号住居を掘り込んで造られていた131号住居の壁面は識別できなかった。南北に走る耕作溝により住居西側を床面下まで掘り込まれている。

構造 床面は134号住居の床面を掘り込んだ後に埋められて造られ、結果的に134号住居とほぼ同じ高さに造られた。131号住居の床面は134号住居床面と異なり床面は踏み固められていなかった。また多くの黒褐色土を含んでいたために区別は可能であった。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西3.30m、南北3.65mである。壁高は最も残りの良い西壁面で40cmであった。

遺物 覆土中より土師器の甕や少量の坏の破片が出土している。



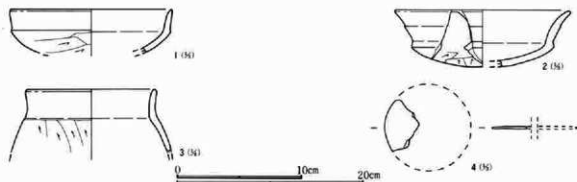
第372図 131号住居跡及び重複測定

131号住居跡(竈)

位置 住居西壁中央部少し南寄りに位置し、燃焼部は一部壁面を掘り込むが、多くの部分は床面上に造られている。床面上の袖の手前部分は残っていないかった。

構造 ローム粒子と暗灰褐色の粘土を主体として造られている。電内より多くの焼土粒子が出土した。

規模 煙道方向63cm、両袖方向55cmである。 遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。



第373図 131号住居跡出土遺物実測図

131号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第373図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
131住-1	環 土師器	- (13.0) - 覆土	底部の浅い環であり、口縁部が外反する。底部へ丸み。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③小破片④赤色粒を少量含む
131住-2	環 土師器	4.5 (14.0) - 床面+15	底部の浅い環である。口縁部が長く底部との境及び口縁部中央の2箇所に横を持つ。口縁上半が大きく外反する。底部へ丸み。口縁部横ナデ。	①外面褐色・内面黒色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を少量含む
131住-3	甕 土師器	- (14.0) - 覆土	小型の甕である。口縁部は直立し上部でわずかに外傾する。胴部右下→左上縦方向へ丸み。	①浅黄褐色②酸化③小破片④赤色粒を少量含む。粉状を呈する
131住-4	紡錘車 鉄	直径(6.8) 厚さ0.2 重量3.2g 覆土	浅い円盤の小破片である。鉄製紡錘車の紡輪部分と思われる。断面で2枚の鉄板の合せが観察できる。外周は低いて周形となし端部が鋭利である。	

132号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版57 遺物写真図版129・130

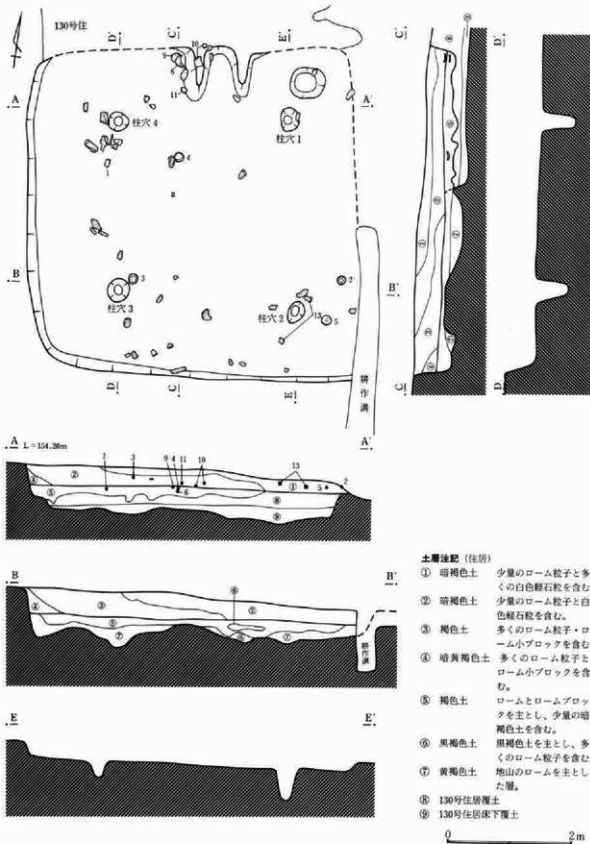
位置 I区北東部に位置し、132号住居北約1mでD-5、E-5グリットに属する。

概要 東側の低くなる斜面に位置するため、東側の壁面と一部の床面は残っていないかった。さらに東壁の南半分は耕作溝により掘り取られ、同じ古墳時代の130号住居と重複している。130号住居の南側約半分を床面近くまで掘り込んで造られているため130号住居より新しい。新旧関係が確認できなかった調査初期段階において2軒の覆土を同時に掘り下げたため、北側の壁面と竈の上面は一部掘り過ぎた。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土で固められ床面中央部は踏み固められてあった。柱穴は4本確認されているが方形でなく南東部の柱穴が少し南側にずれている。また北側の2本は130号住居の柱穴とほぼ同じ位置である。貯蔵穴が竈右側に掘られている。

規模 東西5.1m、南北5.3mである。壁高は最も残りの良い西壁面で40cmであった。貯蔵穴は直径50cm深さ46cmであった。柱穴1は直径30cm深さ48cm、柱穴2は直径25cm深さ35cm、柱穴3は直径35cm深さ39cm、柱穴4は直径30cm深さ60cmである。

遺物 覆土中より土師器の甕や少量の環の破片、また壁面に近い床面より多くの土師器の環が出土している。また電左袖部分に完形の土師器の環と小型甕の完形品が重なって出土した。

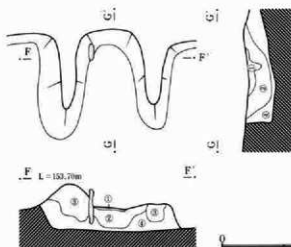


第374図 132号住居跡実測図

132号住居跡(竈)

位置 住居北壁中央に位置し、燃焼部の多くは床面上に造られている。

構造 上部の多くは残っていないが覆土中より暗灰褐色土の粘土やローム粒子が多く検出されたため、130号住居覆土を掘り込み、多くの粘土の混入した土を用いて竈が造られたものと思われる。竈内より細長い石が一個出土した。位置が少し不自然であるが支脚石の可能性が高い。竈内より多くの焼土粒子が出土した。



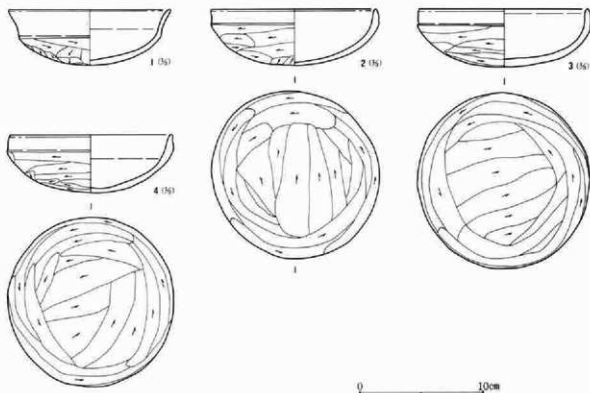
規模 煙道方向85cm、両袖方向80cmである。

遺物 少量の土師器の坏と甕及び須恵器の坏の破片が出土した。

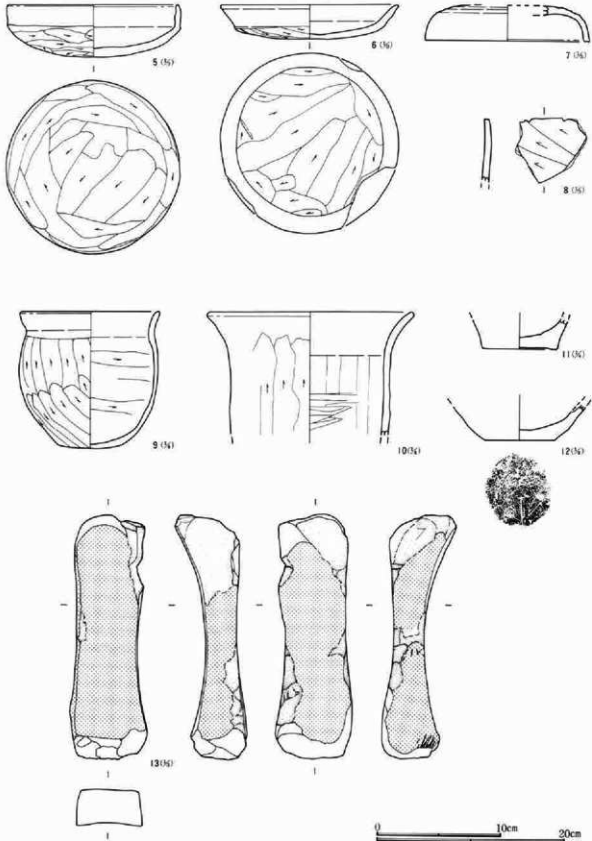
土層注記(竈)

- ① 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックを含む層。
- ② 暗灰褐色土 粘土を主とし、少量の焼土粒子とローム粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の粘土を含む。
- ④ 130号住居覆土

第375図 132号住居跡竈実測図



第376図 132号住居跡出土遺物実測図(1)



第377図 132号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物

132号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第376・377図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底面整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
132住-1 129	環 土師器	4.4 (13.0) - 床面+3	丸底の環であり、底部と口縁部との境に明確な線を 持つ。底部へう削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	①明赤褐色②酸化③口縁部一部欠・他 ほぼ完形④1mm以下の砂粒少量含む
132住-2 129	環 土師器	4.5 13.4 - 床面+12	丸底の環であり、口縁部は底部から内彎しつつ立ち 上がる。曲線が外反しない。底部と口縁部との境に 線を持つ。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①浅黄褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以 下の砂粒を多く含む
132住-3 129	環 土師器	4.6 11.8 - 床面+5	2に近い形を呈する。底部と口縁部との境に線を持つ。 底部のへう削りは幅広く削りの長さも長い。口 縁部の長さが短い。	①浅黄褐色②酸化③完形④1mm以下の 砂粒を多く含む
132住-4 129	環 土師器	4.6 13.0 - 床面	2と3の環と形やへう削りの方法が似ている。同じ ように口縁部内側に底部と口縁部を分ける区画線は 認められない。	①浅黄褐色②酸化③完形④1mm以下の 砂粒を多く含む
132住-5 130	環 土師器	4.1 13.8 - 床面+5	1の環に近いが、底部中央が平底気味になる。2〜 4の環と異なり、口縁部は直立し、内面に境の区画 線があり、口縁部は内傾する。	①明赤褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以 下の砂粒を多く、赤色粒を少量含む
132住-6 130	環 土師器	2.7 14.3 - カマド内+8	平底に近い丸底の浅い環である。口縁部が長く大き く外側へ開く。底部と口縁部との境に線をを持つ。底 部へう削り。口縁部横ナデ。	①明褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以 下の砂粒を少量含む
132住-7	蓋 須恵器	- 13.2 - 覆土	口縁部が内傾し中央部が凹状を呈する。縁は認めら れない。	①表面オリブ黒・断面により赤褐色 ②還元焼成③小破片④密
132住-8	壺? 土師器	- - - 覆土	器形名及び用途不明。口唇部に3箇所凹状に刻られ た所あり。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂 粒を少量含む
132住-9 130	小型壺 土師器	14.5 15.0 7.0 カマド内+10	底部平底、口縁部がゆるやかに外反、胴上部下→上 縦下部左上→右下斜方向へう削り、口縁部横ナデ、 器表面が広い。内面ナデ。	①褐色②酸化③ほぼ完形④3〜4mmと 大きな砂粒と片岩粒を含む粗胎土
132住-10 130	壺 土師器	- (22.0) - カマド内直上	口縁部が長くゆるやかに外反する。口唇部は平であ る。胴部下→上縦方向へう削り。	①褐色②酸化③口縁部1/3・胴部1/5④ 1〜2mmの砂粒を多く含む
132住-11	壺 土師器	- - (8.0) 床面+10	長胴型の底部と思われる。底部中央が凹状を呈する。 胴部へう削り。	①褐色②酸化③底部1/2④1mm以下の 石英と長石粒を多く含む
132住-12	壺 土師器	- - 7.4 覆土	器内の深い丸底の壺である。底部は平底。胴部は器 表面が荒れていて、へう削りの単位識別できない。	①褐色②酸化③胴部下2/3・底部完形④ 1〜3mmの大きな砂粒を含む
132住-13 130	磁石	長さ19.2 幅5.9 厚さ5.1 重量655g	4断面をすべて磁石として使用している。上下端部 は削り加工している。広い横面を多く使用し、中央 部が凹状を呈する。	①灰白色②完形③流紋岩④床面+3

133号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版57・58 遺物写真図版130

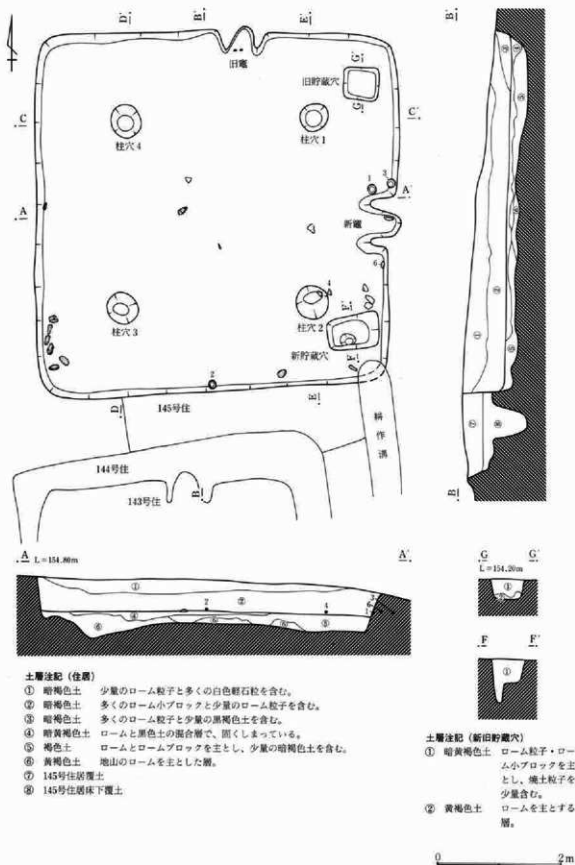
位置 I区北東部に位置し、132号住居西約1mでD-6、E-6グリットに属する。

概要 東側の低くなる斜面に位置する古墳時代の住居であり、古墳時代の145号住居の北側大部分を大きく掘り込んで住居が造られている。145号住居は144号住居に、144号住居は143号住居により掘り込まれている。新旧関係は145→133、145→144→143号住居の順である。また住居南東部のコーナーを耕作溝により少し掘り込まれている。竈が2基検出され北竈から東竈へ走り替えられていた。

構造 床面はロームと黒色土の混合土で造られ、堅く踏み固められてあった。柱穴は5m間隔の正方形で4本配置され掘られていた。方形を呈する貯蔵穴が新旧両竈の右側に掘られていた。

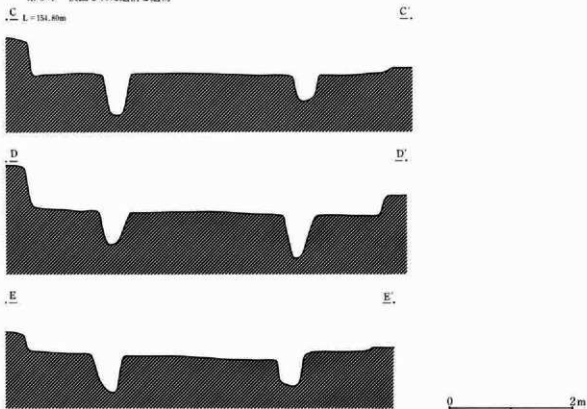
規模 東西5.8m、南北3.8mで正方形を呈する。壁高は最も残りの良い南西コーナーの壁面で35cmであった。柱穴は直径平均50cm、深さは柱穴1〜4の順で50・60・53・73cmである。旧貯蔵穴は55×50cmの長方形を呈し、深さは40cmであり、新貯蔵穴は70×50cmの長方形を呈し、深さ30cmであった。

遺物 覆土中より1000片を超える土師器の壺や200片以上の環の破片と少量の須恵器の環や壺の破片が出土したが、図示できた遺物は少なかった。また東竈左袖部外側に完形の土師器の環が2個、右袖外側に完形の土師器の環が1個出土した。



第378図 133号住居跡実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

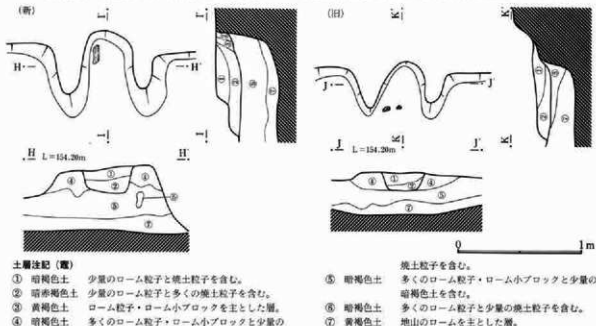


第379図 133号住居跡新築(東室)

133号住居跡新築(東室)

位置 住居東壁中央に位置し、燃焼部の多くは床面上に造られている。

構造 袖部はローム粒子やロームブロックを主として造られていた。燃焼部左奥付近に細長い石が奥壁寄りに倒れかけた状態で一石出土した。支脚石の可能性が高い。室内より多くの焼土粒子が出土した。



土層注記(層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗赤褐色土 少量のローム粒子と多くの焼土粒子を含む。
- ③ 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とした層。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の

焼土粒子を含む。

- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第380図 133号住居跡新旧築実測図

規模 煙道方向70cm、両袖方向60cmである。

遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。

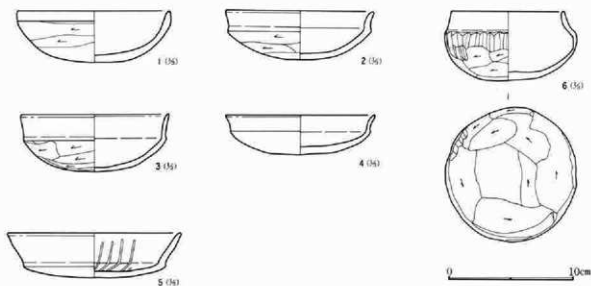
133号住居跡旧竈(北竈)

位置 住居北壁中央に位置し、燃焼部の多くは床面上に造られている。

構造 東壁に新しい竈を造った段階で袖部は一部を残しほとんど取り除かれている。壁面に掘り込まれた燃焼部の一部や煙道部が崩れて床面上に散乱していた。それらの竈材は、ローム粒子とローム小ブロックを主としており、残っている竈内の燃焼部分より焼土粒子の量は多く含まれていた。

規模 煙道方向は一部しか残っていないが40cm、両袖方向50cmである。

遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。



第381図 133号住居跡出土遺物実測図

133号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第381図)

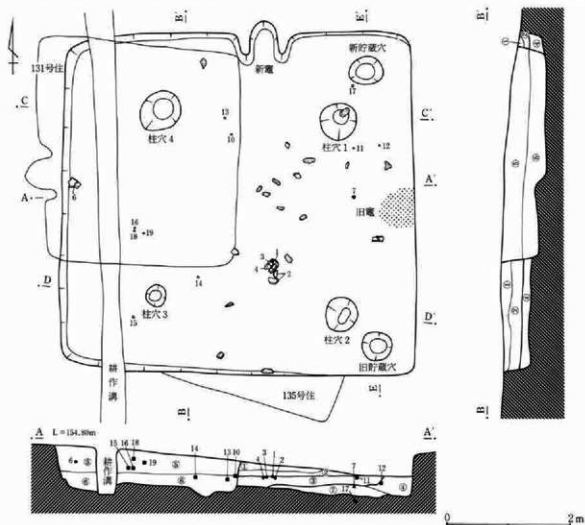
遺物番号 図版番号	形状及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色②酸化③残存④胎土⑤備考
133住-1 130	坏 土師器	4.1 12.3 - 床面+5	口縁部が短く直立する。口縁上端が細くなる。底部と口縁部との境にわずかな稜を持つ。	①褐色②酸化③光沢④密
133住-2 130	坏 土師器	3.9 12.0 - 床面	口径が小さい。口縁部は外反し、底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③光沢④密
133住-3 130	坏 土師器	4.6 11.9 - 床面+10	口縁部が長く直立気味に立ち上がる。底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。底部ヘラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③口縁部一部欠・他ほぼ完形④密
133住-4 130	坏 土師器	3.1 (12.0) - 床面	底部が浅く器高が低い。口縁部は外反する。底部と口縁部との境に稜を持つ。底部ヘラ削り。	①褐色②酸化③口縁部1/4・底部2/3④密
133住-5 130	坏 土師器	3.5 (13.8) (11.4) 覆土	底部が非常に浅く口縁部が長い。口縁部が外傾する。内面中央部より口縁部まで放射状に暗文の文様あり。表面の一部に黒線状の黒色部分あり。	①褐色②酸化③口縁部1/4・底部1/3④密
133住-6 130	塊 土師器	5.5 9.0 - 床面+10	体部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。体部上平右→左横方向ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ていびいなナデ。	①褐色②酸化③光沢④密

134号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版130・131・148

位置 I区北東部に位置し、132号住居南1mでE-5グリットに属する。

概要 古墳時代の131号住居及び平安時代の135号住居と重複する。131号住居は134号住居の北西部の床面と覆土及び東壁を一部掘り込んで住居が造られ、また135号住居は134号住居の南側の覆土上面及び南壁を一部掘り込んで造られていた。新旧関係は134→131→135号住居の順である。住居東壁部分の床面と壁面は耕作により削られてほとんど残っていないかった。また住居西側の1部は南北に走る耕作溝により床面下まで掘り込まれている。

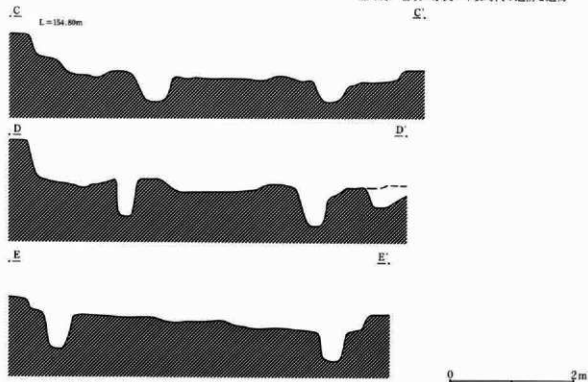
構造 床面は多くのロームブロックと少量の暗褐色土で造られ、131号住居により削られていない部分は堅く踏み固められていた。柱穴が4本ほぼ正方形に配置され掘られ、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。竈は北壁中央部で検出されているが、外にも東壁中央部で大部分が耕作により残っていないか竈の痕跡が確認された。東竈が最初に造られ、やがて北竈に造り替えられていたものと思われる。また貯蔵



土層表記 (住居)

- | | | | |
|---------|-----------------------------|------------------|-----------------------|
| ① 暗褐色土 | 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。 | ④ 暗褐色土 | 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。 |
| ② 暗褐色土 | 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。 | ⑤ 131号住居覆土 | |
| ③ 暗黄褐色土 | ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | ⑥ 131・134号住居床下覆土 | |
| | | ⑦ 黄褐色土 | 地山のロームを主とした層。 |

第382図 134号住居跡実測図(1)

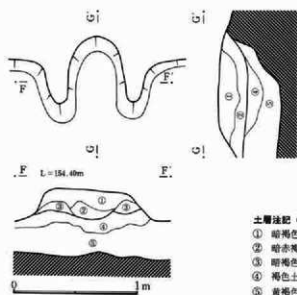


第383図 134号住居跡実測図(2)

穴も旧竈の右側の住居南東コーナーに検出された。この貯蔵穴は埋められた後上面に粘土を貼り床面として使われていた。

規模 東西5.7m、南北5.3mである。壁高は最も残りの良い西壁面で47cmであった。柱穴は南西部の柱穴3以外の3穴は直径50~60cm深さ76cmで、柱穴3は直径30cm深さ68cmでありいずれも深い。北竈に伴う新貯蔵穴は直径50cm深さ90cm、東竈に伴う旧貯蔵穴は直径50cm深さ80cmであった。

遺物 白玉の製品や未製品が多く出土した。また耳環も出土し注目される。床面中央部には3枚の坏が重なって出土した。



134号住居跡(竈)

位置 住居北壁中央部少し東寄りに位置し、燃焼部は一部壁面を掘り込むが、多くの部分は床面上に造られている。

構造 ローム粒子と暗灰褐色の粘土を主として造られている。竈内より多くの焼土粒子が出土した。

規模 煙道方向58cm、両袖方向50cmである。

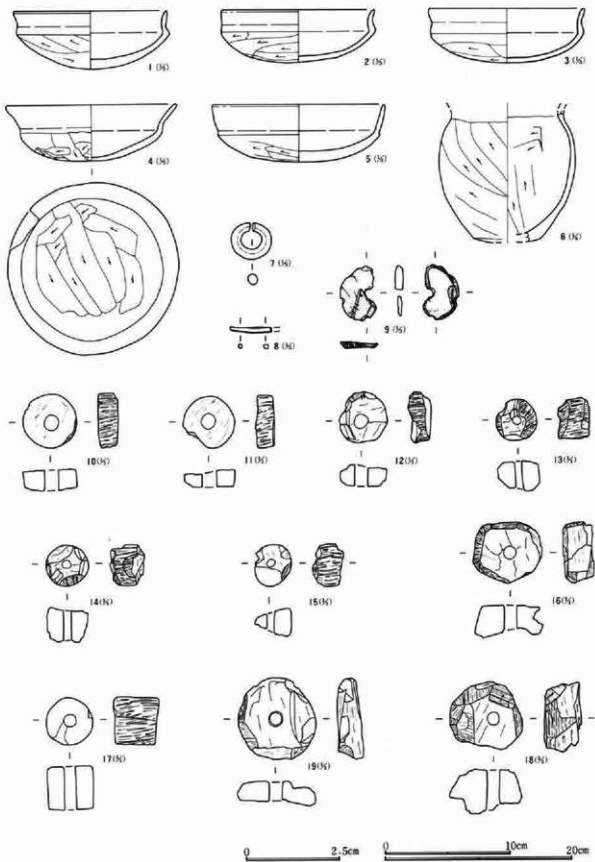
遺物 少量の土師器の薬の破片が出土した。

土層注記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗赤褐色土 多くの焼土粒子とローム粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と暗灰褐色の粘土を含む。
- ④ 褐色土 ローム粒子とロームブロックを主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第384図 134号住居跡竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第385図 134号住居跡出土遺物実測図

134号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第385図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種別	器高・口径・径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①褐色②酸化③ほぼ完形④胎土⑤備考
134住-1 130	坏 土師器 床面	4.6 12.4 -	底部が深く口縁部がわずかに外張する。底部へう削り、口縁部横ナダ、内面黒塗か?	①褐色②酸化③ほぼ完形④胎土
134住-2 130	坏 土師器 床面	4.2 12.4 -	底部が深く口縁部が中央から上で外反する。底部と口縁部との境は明確である。底部へう削り。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を少量含む
134住-3 130	坏 土師器 床面	4.3 12.6 -	底部が深く口縁部が中央から上で外反する。底部と口縁部との境は明確であるが鋭利でない。	①褐色②酸化③口縁部一部欠・色はほぼ完形④赤色粒を含む
134住-4 130	坏 土師器 床面	4.4 13.6 -	底部が深く口縁部が大きく外反する。底部と口縁部との境に明確な横を持つ。底部へう削り、口縁部横ナダ、皿のように浅い。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を少量含む
134住-5 130	坏 土師器 覆土	4.5 (14.0) -	底部が深く口縁部が長い。底部へう削り、口縁部横ナダ、内面ナダ。	①浅黄褐色②酸化③口縁部小破片・底部1/3④密
134住-6 130	甕 土師器 床面+20	- - (7.0)	胎土中に多くの砂粒を含むため、へう削りにより器表面が荒い。胴部右↓左上斜方向へう削り。	①おおい褐色②酸化③1/3④1~3mmの砂粒を含む粗い胎土
134住-7 148	耳環	外径2.9×3.1 内径1.4×1.6	青銅製の耳環である。表面全体に光沢を持つが金箔は認められない。表面に緑青が出て深い緑色を呈する。断面0.8×0.8 重量25.6g 床面-2	
134住-8 130	鉄鏝	長さ3.3 幅0.4 厚さ0.3 重量1.0g	小破片であるが、鉄鏝の茎部の先端部分と思われる。断面がほぼ正方形を呈する。覆土	
134住-9 130	紡錘車	長さ4.4 幅2.8 厚さ0.7 重量9g	紡錘車の狭面表面の半截の破片である。表面は磨かれている。	①暗緑灰色②完形③磨石片岩④覆土
134住-10 131	白玉	幅1.4 孔径0.35 厚さ0.5 重量1.7g	側面荒砥削りではほぼ円形に仕上げている。中央に穿孔。上下面未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面+3
134住-11 131	白玉	幅1.4 孔径0.4 厚さ0.4 重量1.3g	側面荒砥削りではほぼ円形に仕上げている。中央に穿孔。上下面未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面+7
134住-12 131	白玉	幅1.3 孔径0.35 厚さ0.5 重量1.3g	側面荒砥削りのみが円形となる。中央に穿孔。上下面未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面
134住-13 131	白玉	幅1.1 孔径0.2 厚さ0.8 重量1.6g	側面はいいねいに磨かれている。中央の穿孔は孔径が小さく他と異なる。上下面は未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面
134住-14 131	白玉	幅1.1 孔径0.2 厚さ0.8 重量1.7g	側面はいいねいに磨かれている。中央の穿孔は孔径が小さい。上下面は未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面
134住-15 131	白玉	幅1.1 孔径0.2 厚さ0.7 重量1.0g	側面は荒砥削りではほぼ円形に仕上げている。中央の穿孔は孔径が小さい。上下面は未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面+4
134住-16 131	白玉	幅1.8 孔径0.35 厚さ0.8 重量3.6g	側面にノミによる加工痕が多く残る。荒砥削りなし。中央の穿孔の孔径は大きい。上下面は未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面+5
134住-17 131	白玉	幅1.2 孔径0.3 厚さ1.1 重量3.2g	側面は荒砥削りではほぼ円形に仕上げている。中央に穿孔されている。上下面は未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面-20
134住-18 131	白玉	幅1.9 孔径0.35 厚さ1.2 重量4.7g	側面にノミによる加工痕が多く残る。穿孔部は中心からずれている。孔径は大きい。上下面は未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面+24
134住-19 131	白玉	幅2.1 孔径0.4 厚さ0.5 重量3.7g	側面にノミによる加工痕が多く残る。中央部に穿孔されている。上下面は未整形。	①明緑灰色②完形③磨石片岩④床面+17

135号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版58・59 遺物写真図版131

位置 I区北東部に位置し、E-5グリットに属する。

概要 古墳時代の134号住居の調査を進める中で、覆土上から甕が検出されたことより、住居の存在が確認された。そのため一部掘り間違えた部分がある。調査の結果甕周辺部以外ほとんど残っていないかった。そのため甕周辺部分と平安時代の遺物の散布状態より住居の範囲を推定し調査を進めた。調査の結果古墳時代の131・134号住居を一部掘り込んで住居が造られていたものと思われる。新旧関係は134→131→135号住居の順である。

構造 床面は着手前で推定されたが、明確には検出できなかった。柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。

規模 東西推定2.9m、南北推定3.1mである。

遺物 覆土中や床面より少量の土師器の甕や坏、須恵器の坏や甕の破片が出土している。

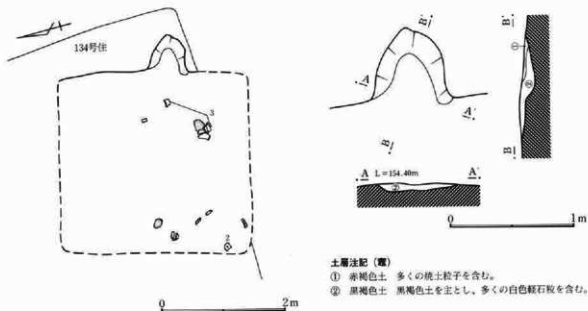
135号住居跡（竈）

位置 住居東壁中央部に位置し、燃焼部の多くは壁面を掘り込んでいる。

構造 上部のほとんどが残っていない。燃焼部より多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向60cm、両袖方向60cmである。

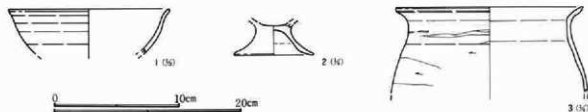
遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。



土層注記（竈）

- ① 赤褐色土 多くの焼土粒子を含む。
- ② 黒褐色土 黒褐色土を主とし、多くの白色軽石粒を含む。

第386図 135号住居跡及び竈実測図



第387図 135号住居跡出土遺物実測図

135号住居跡 出土遺物観察表（挿図番号第387図）

遺物番号 図版番号	器形及び種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
135住-1	坏 須恵器 覆土	— (13.0) —	器内が薄く口縁部が大きく外反、体部右回転クログ目。	①灰白色②還元③1/3④1mm以下の石英と長石粒を含む
135住-2	台付甕 土師器 覆土	— — (8.6)	外側に大きく開く台部を持つ。壁底部は平でなく丸い。	①褐色②酸化③台部③/4④密
135住-3 131	甕 土師器 覆土	— (20.0) —	頸部が直立し、口縁部が大きく外反する。口縁部上縁の外側に一糸の比線が一周している。胴部へう形。	①褐色②酸化③2/3④密

136号住居跡及び竈 (奈良時代) 遺構写真図版59

位置 I区東側中央部に位置し、134号住居南9mでF-5グリットに属する。

概要 古墳時代の137・138号住居と重複し、137号住居の南西部分の覆土と138号住居の南東部分の床面を掘り抜いて住居が造られていた。残りの悪い住居であり特に北東部分の床面と壁面は残っていないが、竈周辺から北側床面にかけて多くの焼土粒子が分布しているため住居範囲の確認は可能であった。東壁中央部に竈の痕跡が検出され、少量の焼土粒子が出土した。

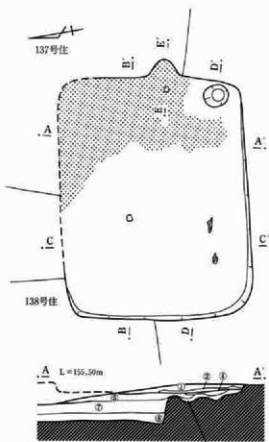
構造 137号住居覆土上の床面はロームブロックと少量の暗褐色土で造られ、それ以外の床面はロームを主とした土で造られていた。しかしいずれも明瞭な床面の検出はできなかった。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.8m、南北3.0mである。壁高は最も残りの良い西壁面で20cmであった。貯蔵穴は直径35cm深さ77cmであった。

遺物 覆土中より少量の土師器の甕や杯の破片が出土している。古墳時代の甕と奈良時代の杯や甕の小さな破片であった。そのためこの住居がどの時代に属するのか明確でないが、重複している住居が全て古墳時代であり、奈良時代の遺物が多く出土したことと住居の切り合い関係から奈良時代の住居として取り扱った。竈内からも土師器の甕の破片が出土した。



136~140号住居跡重複関係概略図



土層注記 (竈)

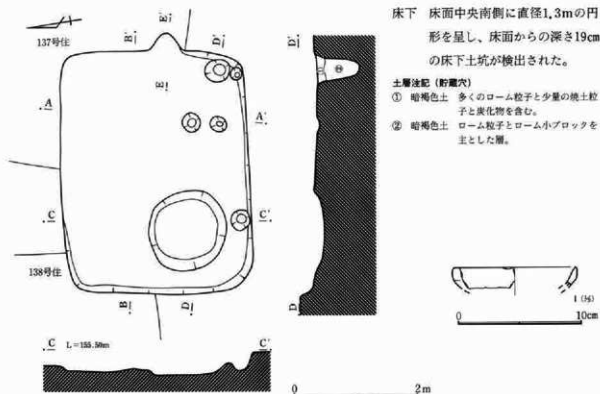
- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。

土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
 ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
 ③ 暗黄褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
 ④ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量のローム小ブロックを含む非常に固い層。
 ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
 ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
 ⑦ 137号住居覆土
 ⑧ 137号住居床下覆土

0 2m

第388図 136号住居跡実測図



床下 床面中央南側に直径1.3mの円形を呈し、床面からの深さ19cmの床下土坑が検出された。

土層注記 (貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子と炭化物を含む。
- ② 暗褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを主とした層。

第389図 136号住居跡床下及び出土遺物実測図

136号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第389図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
136住-1	土師器 土師器	— (10.0) —	浅い環の口縁部小破片である。口唇部が短く横ナダ。	①褐色②酸化③小破片④密

137号住居跡及び竈 (古墳時代) 遺構写真図版59 遺物写真図版131

位置 I区東側中央部に位置し、134号住居南7mでF-5グリットに属する。

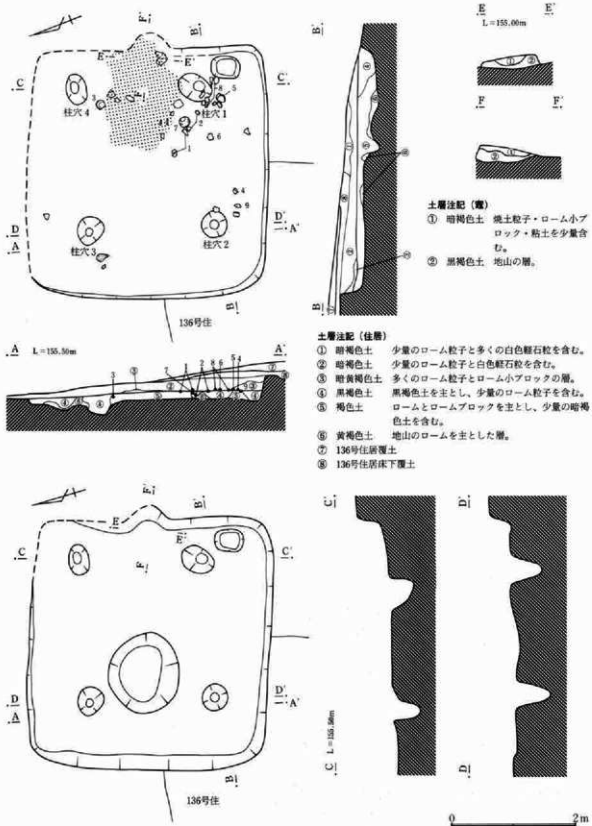
概要 奈良時代の136号住居と重複し、住居南西部分の壁面と覆土上面を削り取られている。住居南側の壁面と床面は残っているが、北壁周辺の壁面と床面は残っていなかった。また竈の位置する東壁の中央から北側は地形が落ち込むため、壁面や床面さらに竈の上面が削り取られていた。竈手前の床面上に多くの焼土粒子と少量の粘土の塊が散在していた。竈は東壁中央部を少し掘り込み造られ、燃焼部の多くが床面上に位置していたと思われるが、ほとんど残っていない。残された竈内より少量の焼土粒子が検出された。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土で造られていた。しかし堅く踏み固められた床面は検出できなかった。柱穴が4本ほぼ正方形に配置され、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西4.0m、南北推定3.8mである。壁高は最も残りの良い南壁面で16cmであった。柱穴は直径約40cmで床面からの深さは柱穴1と2が60cm、柱穴3と4が70cmであった。貯蔵穴は45×35cmの長方形を呈し深さ50cmであった。

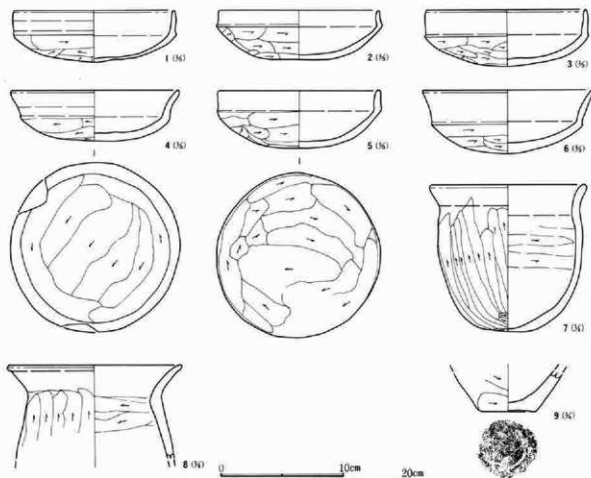
遺物 覆土中より土師器の坏や甕が出土している。竈右側の床面上に完形に近い土師器の坏や小型甕がまとまって出土し、左側からも完形の坏が出土した。

床下 床面中央部に1.1×1.3mの楕円形を呈し、床面からの深さ19cmの床下土坑が検出された。



第390図 137号住居跡及び床下実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第391図 137号住居跡出土遺物実測図

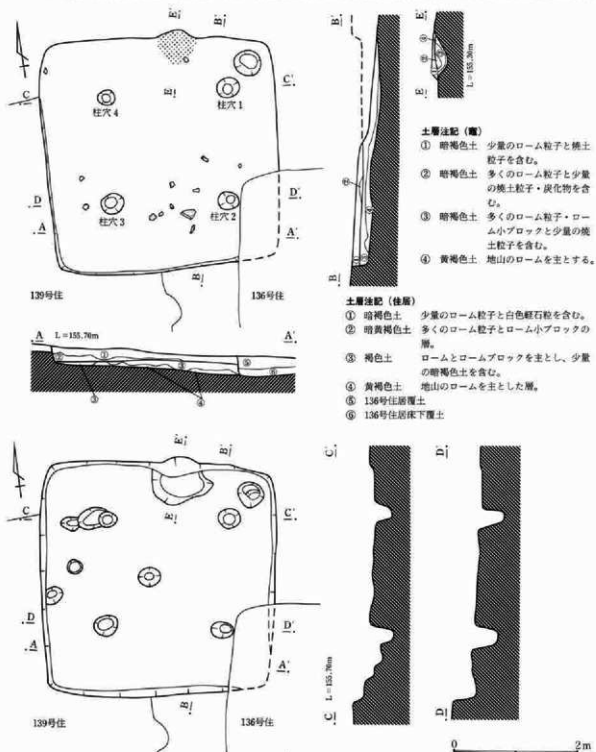
137号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第391図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④粘土⑤備考
137住-1 131	坏 土師器	4.1 13.0 - 床面	口縁部が長く直立し、底部との境に稜を持つ。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/2④密
137住-2 131	坏 土師器	3.9 (13.0) - 床面	口縁部が短く内傾し、底部との境に稜を持つ。底部は深く丸底を呈する。底部へラ削り、口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
137住-3 131	坏 土師器	4.5 13.0 - 床面	1に似て浅く口縁部が直立し、底部との境に稜を持つ。口唇部は丸い。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①表面暗褐色土・断面淡黄褐色②酸化③4/5④密
137住-4 131	坏 土師器	4.0 13.5 - 床面	底部が浅く底部中央が平に近い丸底。口縁部は長く外傾し、口縁中央部でさらに大きく外傾する。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③ほぼ完形④密
137住-5 131	坏 土師器	4.5 13.0 - 床面+6	底部は深く底部中央部が平に近い丸底、口縁部は少し短く、外彎しつつ直立する。口縁部の器内が薄い。底部へラ削り、口縁部横ナデ。	①表面暗褐色土・断面淡黄褐色②酸化③ほぼ完形④密
137住-6 131	坏 土師器	5.0 13.8 - 床面+4	4の坏に近く底部が浅い。口縁部は長く外傾し、口縁中央部でさらに大きく外傾する。底部へラ削り。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を少量含む
137住-7 131	小型変 土師器	15.5 16.8 - 床面	底部はほぼ平で器内が非常に薄い。口縁部の器内は厚くゆるやかに外反する。胴部→上縦方向へラ削り、底部ナデ、口縁部横ナデ。口唇部は丸く内湾。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く、1~2mmの砂粒を少量含む
137住-8 131	変 土師器	- (18.6) - 床面	長胴の細長い甕である。口縁部は長く大きく外反する。胴表面は砂粒が多く表面に出て荒い。	①にぶい黄褐色②酸化③口縁部1/6・胴上部1/2
137住-9 131	甕 土師器	- - 6.3 床面	器内が厚い甕であり、底部に木葉痕が残る。胴下半横方向へラ削り。	①褐色②酸化③胴下2/3・底部完形④1~3mmの砂粒を多く片断を少量含む

138号住居跡及び竈 (古墳時代) 遺構写真図版59・60

位置 I区東側中央部に位置し、134号住居南7mでF-5・6グリットに属する。

概要 奈良時代の136号住居と古墳時代の139号住居と重複し、139号住居の北東部を床面下まで掘り込み136号住居により南東部分を床下まで掘り取られていた。新旧関係は139→138→136号住居である。残りの悪い住居であり、竈の造られている北壁部分と136号住居と重複している東壁部分の壁面と床面



第392図 138号住居跡及び床下実測図

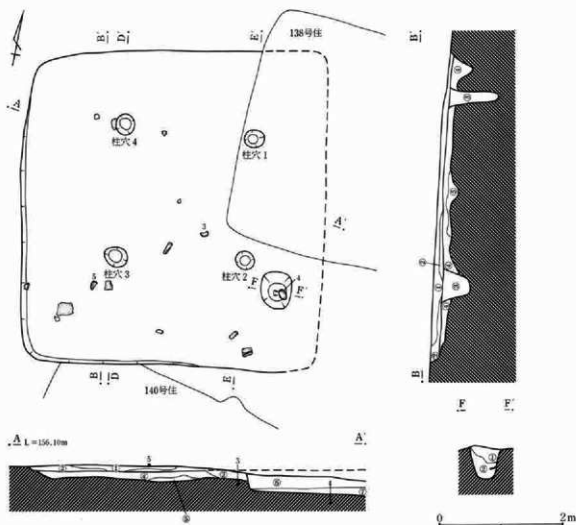
第3章 検出された遺構と遺物

はほとんど残っていないかった。北壁中央部に壊れてほとんど残っていない竈の痕跡が検出され、竈内から少量の焼土粒子が出土した。時代を示す良好な出土遺物はなかったが、他の住居との切り合い関係から古墳時代として扱った。

構造 南側の床面は、ロームブロックと少量の暗褐色土で造られ良好な状態で検出された。それ以外の床面もロームを主とした土で造られていたが、残りが悪く良好な床面は検出はできなかった。柱穴が4本東西方向に長い間隔に配置され、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西3.8m、南北3.7mである。壁高は残りの良い西壁面で20cmである。柱穴1～3の直径は40cmで柱穴4は25cm、深さは柱穴1・2・4が60cmで柱穴3が50cmあった。貯蔵穴は直径40cm深き65cmであった。

遺物 覆土中や床面より土師器の坏や甕が出土している。胴部破片が多く図化できなかったが大部分が古墳時代に属する。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の黒褐色土を含む。
- ④ 褐色土 ローム小ブロックとローム粒子を主とした層。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑥ 138号住居覆土
- ⑦ 138号住居床下覆土

土層注記 (貯蔵穴)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ② 暗褐色土 30m前後のローム小ブロックを少量含む。

第393図 139号住居跡実測図

139号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版60 遺物写真図版131

位置 I区東側中央部に位置し、136号住居の西1mでF-6グリットに属する。

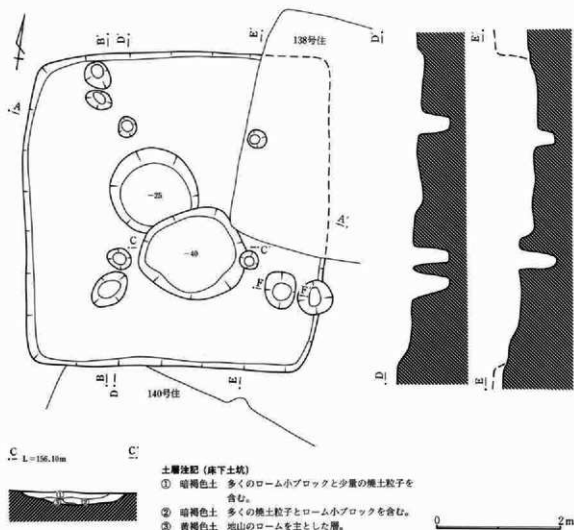
概要 古墳時代の138・140号住居と重複し、138号住居により北東部分を大きく床下まで掘り取られ、140号住居により南壁の西寄りの部分を少し削り取られている。新旧関係は139→138、139→140号住居の順である。残りの悪い住居であり、特に138号住居と重複している東壁部分の壁面と床面はほとんど残っていない。北壁中央部周辺に竈の痕跡がないことや貯蔵穴と思われる掘り込みが東壁に近い南東部の床面上に造られていたため、竈はおそらく138号住居により削り取られた東壁中央部分の壁面から床面にかけて造られていたものと思われる。

構造 床面は、ロームブロックと少量の暗褐色土で造られ良好な状態で検出された。柱穴が4本ほぼ正方形に配置され掘られ、貯蔵穴と考えられる土坑が東壁に近い住居南東部の床面上に掘られていた。

規模 東西推定4.8m、南北5.0mである。壁高は最も残りの良い西壁面で27cmであった。柱穴はいずれも直径30cm深さは75cmと深い。貯蔵穴は少し歪んでいるが、直径50cm深さ95cmで特に深い。

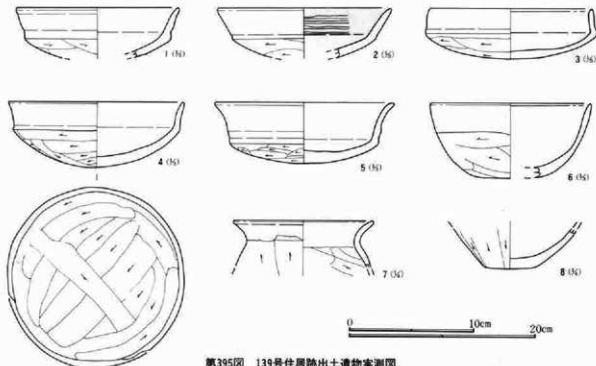
遺物 覆土中より多くの土師器の甕や環の破片が出土し、多くを図化することができた。

床下 床面中央部に2基の床下土坑が検出された。床面からの深さは図上に記した。



第394図 139号住居跡床下実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第395図 139号住居跡出土遺物実測図

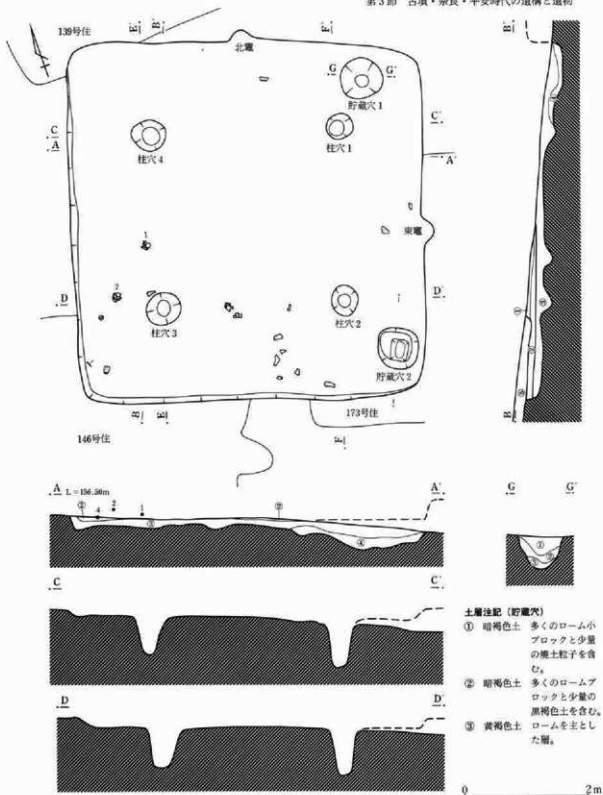
139号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第395図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
139住-1 131	土師器 甕	- 13.2 -	底部が浅く丸底を呈する。口縁部は長く大きく外反する。底部へ丸削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
139住-2	土師器 甕	- (14.0) -	底部が浅く丸底を呈する。口縁部は長く大きく外反する。内側口縁部横方向へ丸削き、内側底部へ丸削き、内側全面黒色処理。一部口縁外側も黒色を呈す。	①内面黒色・断面へ外部淡褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
139住-3 131	土師器 床面	4.0 13.0 -	底部の浅く底部中央は平底気味である。口縁部は長くわずかに内傾する。底部へ丸削り、口縁部横ナデ。	①内面褐色②酸化③2/3④赤・赤色粒を含む⑤内面黒色部か?
139住-4 131	土師器 床面	5.2 14.1 -	底部が深く丸底を呈する。口縁部は長くわずかに外反する。底部と口縁部との境に明顯な稜を持つ。底部へ丸削り、口縁部横ナデ。	①淡黄褐色②酸化③口縁部一部欠・他ほぼ完形④1mm以下の赤色粒を多く含む
139住-5 131	土師器 床面	4.8 (14.4) -	底部の非常に浅く器内が厚い。口縁部は長く大きく外反する。口縁下半に強い稜線を持つ。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
139住-6	土師器 甕	5.9 (13.0) -	深い筒と思われ。体部へ丸削り、口縁部横ナデ、内面がよいなナデ。	①淡黄褐色②酸化③1/4④少量の赤色粒を含む
139住-7 8	土師器 甕	- (15.0) -	小型の甕と思われる。口縁部は大きく外反する。胴部表面はへ丸削りて丸れている。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を多く、1~3mmの砂粒を少量含む
139住-8	土師器 甕	- (5.5)	丸胴の甕底部と思われる。底部ナデ、胴下半上→下縁方向へ丸削り、内側がよいなナデ	①褐色②酸化③胴下半→底部ほぼ完形④1~3mmの赤色粒を多く含む

140号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版60 遺物写真図版132

位置 I区東側中央部に位置し、138号住居の南3mでG-5・6グリットに属する。

概要 奈良時代の146号住居と古墳時代の139号住居及び時代は明らかでないが、140号住居より古い段階の173号住居と重複している。140号住居は146号住居により南西部分の床面に近い覆土上面を掘り取られ、139号住居の南壁西側の壁面と覆土の一部を掘り込んでいる。さらに173号住居の西側の約半分を床下まで掘り込んで床面と竈を造っている。新旧関係は139→140→146号住居、173→140号住居の順



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
 ② 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の炭化物を含む。
 ③ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色

土を含む。

- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
 ⑤ 146号住居覆土

土層注記 (貯蔵穴)

- ① 暗褐色土 多くのローム小ブロックと少量の黄土粒子を含む。
 ② 暗褐色土 多くのロームブロックと少量の黒褐色土を含む。
 ③ 黄褐色土 ロームを主とした層。

第396図 140号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

である。住居の平面形は全て確認できるが、床面上の覆土は少ししか残っていなかった。竈が北壁中央部と東壁中央部に確認されたが、いずれの竈とも残りが悪くどちらの竈が最終段階まで使われていたのか確認できなかった。

構造 床面はロームブロックと少量の暗褐色土で造られ、床面中央部は堅く踏み固められてあった。柱穴が4本東西方向が少し長い長方形に配置され掘られ、貯蔵穴が北東コーナーと南東コーナーの床面上に掘られていた。

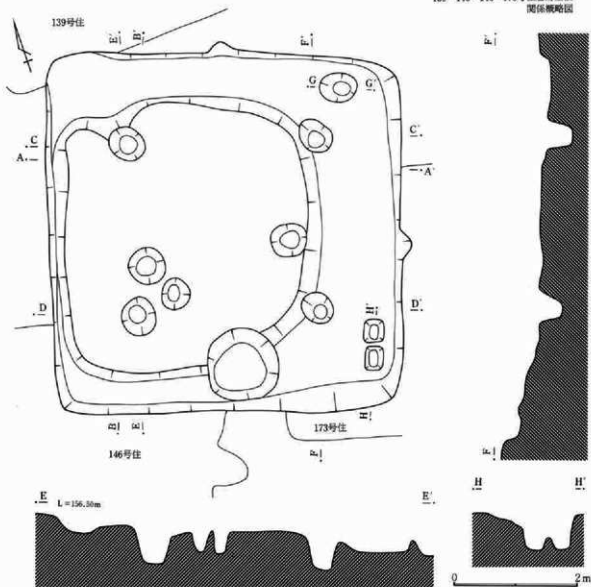
規模 東西5.6m、南北5.7mである。壁高は最も残りの良い西壁面で15cmであった。柱穴1は直径45cm深さ87cm、柱穴2は直径45cm深さ71cm、柱穴3は直径55cm深さ57cm、柱穴4は直径55cm深さ66cmであった。貯蔵穴1は直径70cm深さ81cm、貯蔵穴2は直径60cm深さ57cmであった。



139-140-146

173-140

139・140・146・173号住居跡重複
関係概略図



第397図 140号住居跡床下実測図

遺物 土師器の坏や紡錘車の末製品が出土した。

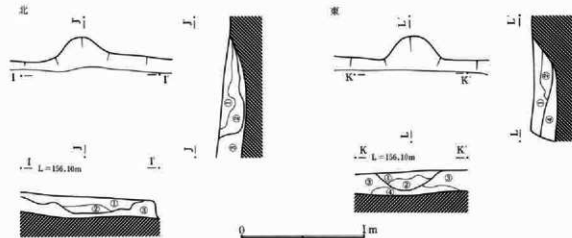
床下 床下調査の結果、住居の中央部分を掘り残して壁面に近い周辺部分が深く掘り込まれていた。他の住居に多く認められたような円形を呈する床下土坑は掘られていなかった。

140号住居跡（北竈及び東竈）

位置 住居北壁と東壁中央部に位置する。両袖部をはじめとして多くの部分が残っていないが残された部分から燃焼部は壁面を一部掘り込み、多くが床面上に位置して造られていたと思われる。

構造 ロームを主体として造られていたと思われる。燃焼下部より少量の焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向、両袖方向とも不明である。 遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。



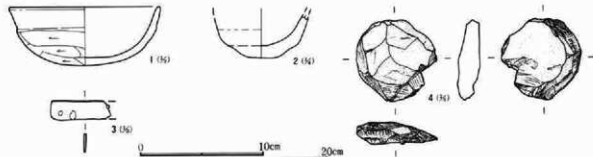
土層法記（北竈）

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ② 暗赤褐色土 多くの焼土粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム小ブロックと暗褐色土を含む。

土層法記（東竈）

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ② 暗赤褐色土 多くの焼土粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム小ブロックと暗褐色土を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とする層。

第398図 140号住居跡北・東竈実測図



第399図 140号住居跡出土遺物実測図

140号住居跡 出土遺物観察表（挿図番号第399図）

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
140住-1 132	坏 土師器	4.6 12.2 - 床面+5	底部が球形を呈し、口縁部がゆるやかに外傾する。 底部へラ削り、口縁部横ナズ。	①橙色②酸化③1/2④密
140住-2	甕 土師器	床面+11	器内が厚く、細長い甕と思われる。砂粒を多く含む ため器表面が広い。	①に濃い褐色②酸化③側下半～底部1/2④1～2mmの砂粒を多く色粒少量含む

140号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第399図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部整形等の特色	①色調②地成③残存④胎土⑤備考
140住-3	鉄	長さ4.8 幅1.5 厚さ0.2 重量3g	下部に方部があるため、 刃物と思われる。破損して おり片側のみ残存、端部に 丸い穴が穿けられている。 孔径0.35cm、覆土中より 出土。	
140住-4 132	紡錘車	長さ6.2 幅6.4 厚さ1.8 重量85g 床面	紡錘車の材料として採取 したものと思われる。一部 割られた所があるが、加工 痕なし。	①暗緑灰色③破片④礫石片岩

141号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版60・61 遺物写真図版132・148

位置 I区東側中央部北側に位置し、139号住居北1mでF-6グリットに属する。

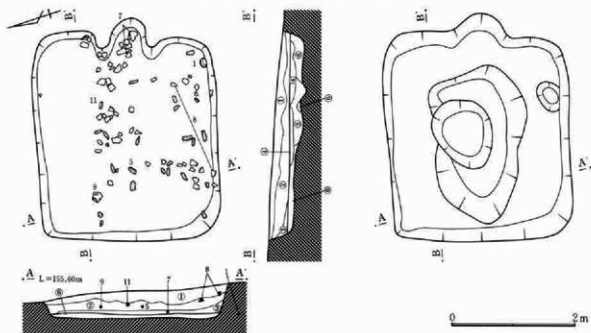
概要 重複住居でない比較的残りの良い小さな住居である。住居北側は風倒木跡の上に造られている。

構造 床面は多くのロームブロックと少量の暗褐色土で造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西3.2m、南北2.9mである。壁高は最も残りの良い南壁面で47cmであった。

遺物 土師器の暗文を持つ环や壺と瓦、砥石・鉄鎌が出土した。床面上からの出土は少なく多くが覆土中からの出土である。

床下 床面中央部に0.95×1.2mの楕円形を呈し、床面からの深さ33cmの床下土坑が検出された。



土層注記 (住居)

- | | | | |
|---------|-----------------------|--------|--|
| ① 暗褐色土 | 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。 | ⑤ 褐色土 | の黒褐色土を含む。
ローム粒子とロームブロックを主とし、少量の焼土粒子を含む。 |
| ② 暗褐色土 | 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。 | ⑥ 黄褐色土 | 地山のロームを主とした層。 |
| ③ 暗黄褐色土 | 多くのローム粒子とローム小ブロックの層。 | | |
| ④ 暗褐色土 | ローム粒子とローム小ブロックを主とし、少量 | | |

第400図 141号住居跡及び床下実測図

141号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央部に位置し、燃焼部は壁面から床面にかけて造られている。

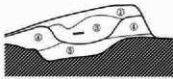
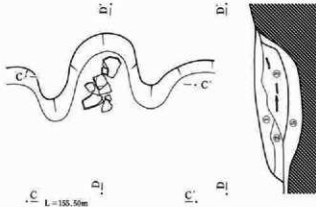
構造 袖部は暗黄褐色土の粘土と多くのローム粒子を用いて造られている。竈内より多くの焼土粒子と少量の炭化物が出土した。奥壁に近い壁面が焼土化していた。

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物

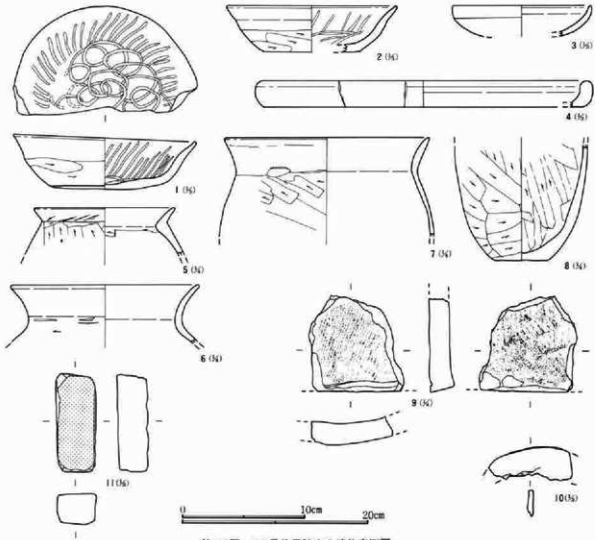
規模 煙道方向70cm、両袖方向70cmである。
 遺物 多くの土師器壁の口縁部や胴部の破片が出土した。

土層法記 (覆)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ③ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量のローム小ブロックを含む。
- ④ 暗黄褐色土 ローム粒子と粘土を主とした層。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第401図 141号住居跡燧突測図



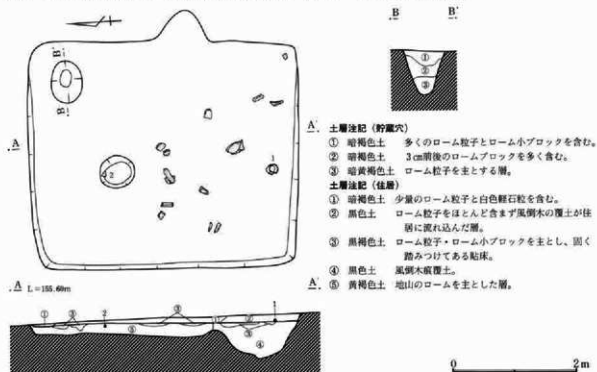
第402図 141号住居跡出土遺物実測図

141号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第402図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
141住-1 132	坏 土師器	- 14.6 4.3 床面	底部はヘラ削りによりほぼ平、体部はわずかに内彎し、口縁部がわずかに外反する。体部ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面体部へ口縁部に放射状暗文、内面底部縦線状暗文。	①褐色②酸化③1/2④多くの赤色粒と少量の片岩粒を含む
141住-2	坏 土師器	(3.6)(13.8)(7.8) 覆土	小破片であり、全体像は不明である。底部へラ削り、体部外側へラ削り、口縁部横ナデ、内面体へ口縁部暗文、内側器部凹弧状の暗文。縦線になるかは不明。	①褐色②酸化③1/4④多くの赤色粒を含む
141住-3	坏 土師器	- (11.0) -	浅く小さな坏である。口縁部が短く直立気味に立ち上がる。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③小破片④密
141住-4	盤 土師器	2.1 (27.0)(25.6) 覆土	非常に浅い器であり、一応盤として扱った。底部の器内は薄く平底を呈する。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の石英と長石粒を少量含む
141住-5	甕 土師器	- (14.0) - 床面+10	頸部の器内が厚く口縁部は短く強く外反する。胴部右下へ左上斜方向へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を少量含む。密である
141住-6	甕 土師器	- (20.2) - 覆土	器内が薄く口縁部は大きく「く」の字状に外傾する。肩部は右へ左斜方向へラ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/4④密
141住-7 132	甕 土師器	- (22.0) - カマド内蓋上	胴部の器内が薄く口縁部はやや厚い。口縁部はゆるやかに外傾する。胴上部右下へ左上方向へラ削り。	①褐色②酸化③口縁部1/2・胴部1/6④密
141住-8 132	土師器	- 5.4 床面+24	細長い胴部の甕である。底部は外側に木炭灰、内側はナデ、胴部外側へラ削りで器表面が光い。	①黄褐色②酸化③胴下平へ底部1/2④1~3mmの砂粒を少量含む粗い胎土
141住-9	平瓦	- 床面+10	1枚造りの瓦である。凹面布目、凸面平行印目、側面へラ削り。	①灰色②還元③小破片④1mm前後の石英と長石粒を多く含む
141住-10 146	鏝	長さ6.6 幅2.6 厚さ0.3 重量13.2g	小さな鏝と思われる。基部に折り曲げられた痕跡はない。錆化がはげしく層状に剝離する。流入品か? 覆土中より出土。	
141住-11 132	礎石	長さ7.8 幅3.2 厚さ2.5 重量115g	断面が方形を呈し、整えられた礎石である。幅広の側面が底面として使用されている。	①浅黄褐色③完形④流紋岩⑤床面+18

142号住居跡及び竈 (古墳時代) 遺構写真図版61 遺物写真図版132

位置 I区北東部に位置し、140号住居北に近接しE-6、F-6グリットに属する。



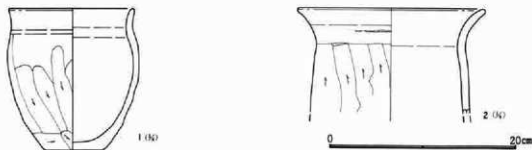
第403図 142号住居跡実測図

概要 残存状態が悪い住居で、竈の位置する東壁周辺の壁面と床面の多くは残っていないかった。住居南東部分は風倒木跡の上に造られている。この位置は竈右側にあたり貯蔵穴が多く造られる位置であるが、貯蔵穴の確認はできなかった。東壁中央部少し南寄りに多くの焼土が検出され、竈が造られていたことが確認された。しかし僅かな痕跡が確認されたのみであった。

構造 床面は地山のロームを多く使用して造られている。貯蔵穴が竈左側の床面上に掘られていた。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.60m、南北4.25mである。壁高は最も残りの良い西壁面で20cmであり、貯蔵穴は65×50cmの楕円形を呈し、深さ70cmであった。

遺物 覆土中より多くの土師器の甕や少量の環の破片及び細長い石が出土している。



第404図 142号住居跡出土遺物実測図

142号住居跡 出土遺物観察表 (拝番号第404図)

遺物番号 図版番号	壺形及び 種類	壺高・口径・底径(cm) 出土位置	壺形・成形・調整・底部壺形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
142住-1 132	小型壺 土師器	15.0 13.4 6.3 床面	底部は平、胴表面はヘラ削りにより器表面全体が広い。口縁部横ナゲ、内側胴表面ナゲ、口縁部はゆるやかに外反する。	①におい黄褐色②酸化③3~5mmの大きな長石粒や片岩を少量、1mm前後の砂粒を多く含む粗い胎土
142住-2	壺 土師器	— (20.0) — ピット内+5	長胴の甕の小破片と思われる。口縁部は長くゆるやかに外反する。胴部下→上腹方向へ削り。	①浅黄褐色②酸化③小破片④1mm前後の砂粒を多く片岩粒を少量含む

143号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版61・62 遺物写真図版132

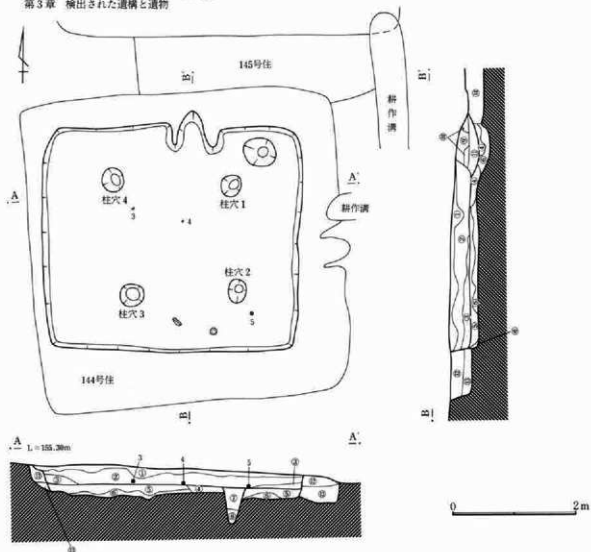
位置 I区北東部に位置し、142号住居北約1mでE-6グリットに属する。

概要 古墳時代の144号住居内に位置し、覆土と床面を掘り放いて住居が造られている。さらに144号住居は古墳時代の145号住居の南東端部を掘り込んでいる。145号住居は古墳時代の133号住居により南側一部分以外の大部分を掘り込まれている。新旧関係は145→133、145→144→143の順である。

構造 床面はロームとロームブロックを主とし少量の暗褐色土で造られていたが、堅く踏み固められてはなかった。床面調査段階では明らかにできなかったが、床下調査において本住居に伴うであろう柱穴が4本、さらに竈右側に貯蔵穴が検出された。

規模 東西4.10m、南北3.55mで、壁高は最も残りの良い南壁面で10cmであった。貯蔵穴は直径50cm深さ84cmで、柱穴1は直径30cm深さ62cm、柱穴2は直径30cm深さ50cm、柱穴3は直径40cm深さ40cm、柱穴4は直径40cm深さ61cmであった。

遺物 土師器の甕や環と白玉・丸玉が出土した。出土量は全体的に少なかった。



土層注記 (住居)

- | | | | |
|---------|-----------------------------|--------------|-----------------------------|
| ① 暗褐色土 | 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。 | ⑧ 暗黄褐色土 | ロームを主とした層。 |
| ② 暗褐色土 | 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。 | ⑨ 暗灰色土 | ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 |
| ③ 暗黄褐色土 | 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。 | ⑩ 赤褐色土 | 多くの焼土粒子と少量の粘土ブロックを含む。 |
| ④ 暗黄褐色土 | ローム粒子とローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。 | ⑪ 144号住居覆土 | |
| ⑤ 褐色土 | ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | ⑫ 144号住居床下覆土 | |
| ⑥ 黄褐色土 | 地山のロームを主とした層。 | ⑬ 145号住居覆土 | |
| ⑦ 暗褐色土 | ローム粒子とローム小ブロックと暗褐色土を含む。 | | |

第405図 143号住居跡実測図

143号住居跡(竈)

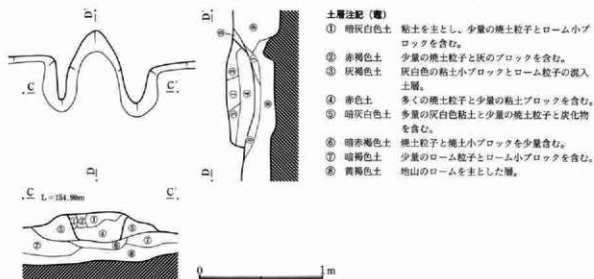
位置 住居北壁中央に位置し、燃焼部は一部の壁面から床面上にかけて造られ、多くの部分は床面上に位置する。

構造 地山のロームと異なり軟質で粘性に欠ける144号住居覆土を掘り込んで竈を造るために、多くのロームと灰白色粘土を持ち込んで竈が造られていた。壁面が一部焼土化し、竈内より多くの焼土粒子が出土した。

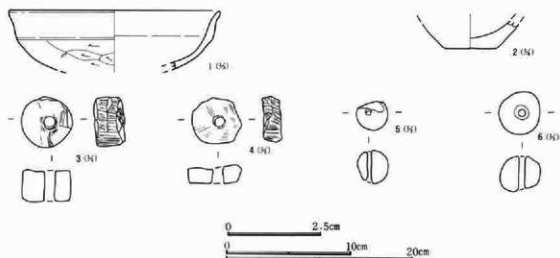
規模 煙道方向68cm、両袖方向60cmである。

遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物



第406図 143号住居跡電測実測図



第407図 143号住居跡出土遺物実測図

143号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第407図)

遺物番号 図版番号	形状及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
143住-1	坏 土師器	— (17.0) — 覆土	浅く口縁部が大きく外反する。底部と口縁部の境は明瞭である。底部へ丸削り、口縁部横ナゲ。	①褐色②焼成③1/4④密で粉状を呈する
143住-2	罐 土師器	— — 5.8 覆土	器内の厚い丸胴の薬の破片と思われる。器表は荒れており整形力不明、内面はナゲで器面密。	①外面に赤褐色・断面～内面明黄褐色②焼成③1/2④1～3mmの砂粒を含む
143住-3 132	白玉	幅1.3 孔径0.3 厚さ0.8 重量2.6g	側面は寛砥削りにより円形に仕上げている。上下面もほぼ平である。中央に穿孔あり。	①明緑灰色②完形③磨石片岩 ④床面+10
143住-4 132	白玉	幅1.4 孔径0.3 厚さ0.5 重量1.6g	側面は寛砥削りにより円形に仕上げている。上下面未調整。中央に穿孔あり。	①明緑灰色②完形③磨石片岩 ④床面+4
143住-5 132	丸瓦	幅0.8 孔径0.1 厚さ0.8 重量0.5g	円形を呈し、中央部が細く穿孔されている。	①に黄褐色②焼成③ほぼ完形④密 ⑤床面
143住-6 132	丸瓦	幅1.1 孔径0.16 厚さ0.9 重量1.2g	楕円形を呈し、上下面が少し偏平である。上下方向中央部に穿孔されている。	①に黄褐色②焼成③完形④密 ⑤覆土

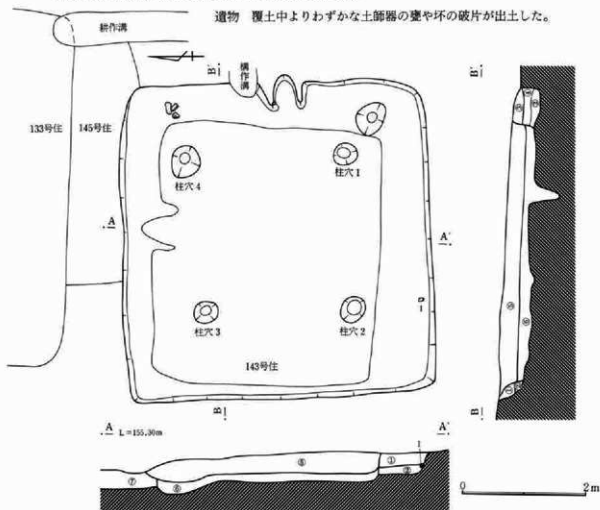
144号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版62

位置 I区北東部に位置し、142号住居北に近接しE-6グリットに属する。

概要 古墳時代の145号住居の南東端部を掘り込み、古墳時代の143号住居により、住居内中央部の覆土と床面を掘り抜かれている。また145号住居は古墳時代の133号住居により南側一部分以外の大部分を掘り込まれている。新旧関係は145→133、145→144→143号住居の順である。

構造 床面は壁面に近い一部しか残っていないが、地山のロームとロームブロックを主とした土で造られ、堅く踏み固められてはいなかった。竈右側に貯蔵穴が掘られていた。143号住居と重複している床下の調査を行うことにより、本住居に伴う4本の柱穴が確認されたが、柱穴4は143号住居の貯蔵穴と同じであり、柱穴3は143号住居の柱穴4と同じである。

規模 東西5m、南北5mでほぼ正方形を呈している。壁高は最も残りの良い西壁面で35cmであった。貯蔵穴は直径50cm深さ80cmであった。柱穴1は直径35cm深さ77cm、柱穴2は直径35cm深さ42cm、柱穴3は直径35cm深さ79cm、柱穴4は直径50cm深さ112cmであった。



土層法記 (住居)

- | | | | |
|---------|----------------------------|--------------|-------------------|
| ① 暗黄褐色土 | ローム粒子とローム小ブロックを含む。 | ④ 暗赤褐色土 | 多くのローム粒子と焼土粒子を含む。 |
| ② 黄褐色土 | 地山のロームを主とした層。 | ⑤ 143号住居覆土 | |
| ③ 暗黄褐色土 | ローム粒子とローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。 | ⑥ 143号住居床下覆土 | |

第408図 144号住居跡実測図

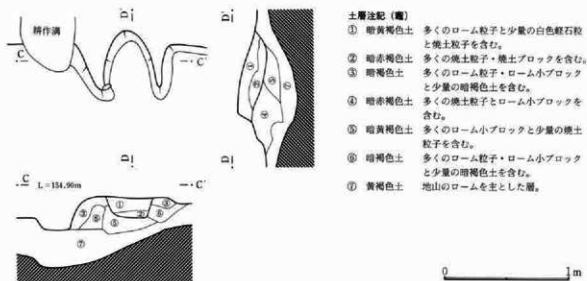
144号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央に位置し、燃焼部は一部の壁面から床面上にかけて造られ、多くの部分は床面上に位置する。

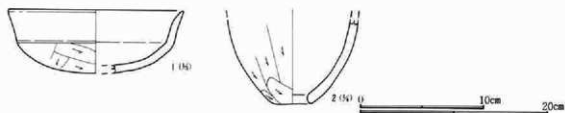
構造 残存状態は良好でなかった。多くのローム粒子とローム小ブロックと少量の暗褐色土を主として造られていた。壁面が一部焼土化し、竈内より多くの焼土粒子が出土した。

規模 煙道方向60cm、両袖方向50cmである。

遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。



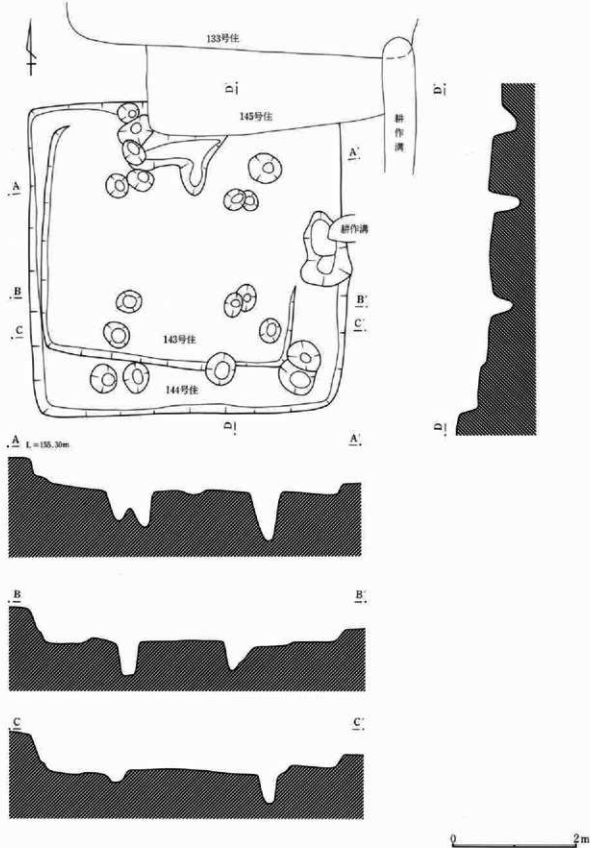
第409図 144号住居跡竈実測図



第410図 144号住居跡出土遺物実測図

144号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第410図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
144住-1	坏 土師器	- (14.0) - 床面	底部が強く口縁部が長く大きく外傾する。底部へう 削り、口縁部横ナデ。	①にぶい黄褐色②焼化③小破片④1m 以下の砂粒を多く含む
144住-2	甕 土師器	- (4.0) 覆土	小さな甕の割下半部と思われる。底部分に小さな穴 が円形状に穿けられている。	①にぶい赤褐色②焼化③1/3④1~2 mmの砂粒を多く含む



第411図 143・144号住居跡床下実測図

145号住居跡（古墳時代） 遺構写真図版62 遺物写真図版132

位置 I区北東部に位置し、E-6グリットに属する。

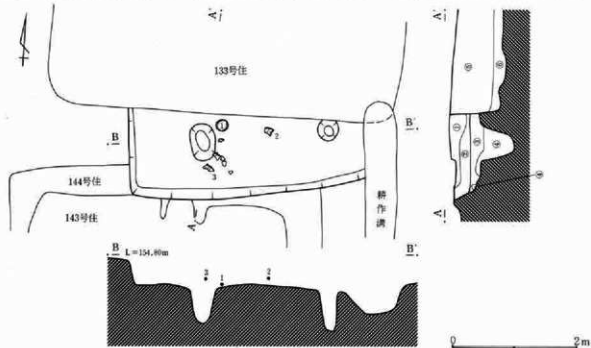
概要 南側を144号住居に、北側を133号住居により削り取られて、住居の南側の一部のみの調査であった。

構造 床面は、地山のロームとロームブロックを主とした土で造られ、堅く踏み固められてはいなかった。

調査できた範囲では柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。

規模 東西南北とも不明。壁高は最も残りの良い西壁面で32cmであった。

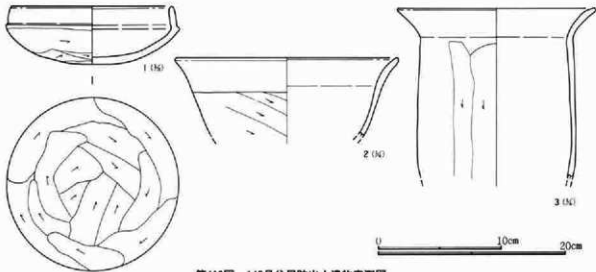
遺物 床面より完形の土師器の坏と甕の破片がまた覆土中よりわずかな土師器の甕や坏の破片が出土した。



土層法記（住居）

- | | |
|-----------------------------------|----------------------------|
| ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。 | ④ 黄褐色土 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。 |
| ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。 | ⑤ 133号住居覆土 |
| ③ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | ⑥ 133号住居床下覆土 |

第412図 145号住居跡実測図



第413図 145号住居跡出土遺物実測図

145号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第413図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②構成③残存④胎土⑤備考
145住-1 132	環 土師器	4.7 13.0 - 床面	底部が深く、口縁部が内傾する。底部と口縁部との境の線は高く明瞭である。底部へ方削り、口縁部横ナデ。	①にぶい黄色②酸化③ほぼ完形④密
145住-2	鉢 土師器	- (24.0) - 床面+2	器高と口径の大きな鉢の破片と思われる。口縁部が大きく外反する。胴部左上→右下斜方向へ方削り。	①黄褐色②酸化③1/4④密で粉状を呈する
145住-3	壺 土師器	- (21.0) - 床面	器内の薄い良駒の壺である。口縁部が大きく外傾する。外側器表面はへ方削りで非常に荒い。	①にぶい黄色②酸化③小破片④1～2mmの砂粒を多く含む

146号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版62・63 遺物写真図版132・133

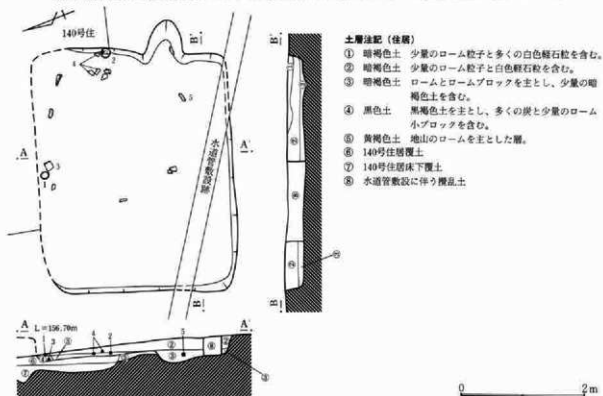
位置 I区東側中央部に位置し、139号住居の南4mでG-6グリットに属する。

概要 古墳時代の140号住居と重複している。本住居は140号住居の南西部の床面に近い覆土を掘り込んで住居が造られている。全体に残りが悪く特に140号住居と重複している北側部分の壁面と床面は残っていないかった。そのため住居北側の範囲の確定はできなかった。住居南側を水道工事溝により斜めに掘り込まれていた。

構造 床面はロームブロックと少量の暗褐色土で造られていたが堅く踏み固められていなかった。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西3.90m、南北推定3.15mである。壁高は最も残りの良い南壁面で23cmであった。

遺物 覆土中より土師器の環や壺と須恵器の環が出土した。竈左側に完形の須恵器の環と肩部に横方向の削りをもつ奈良時代の土師器の壺の破片が出土した。また北壁中央部床面に高台付の環の底部と古墳時代の土師器の環と壺が出土しており140号住居との重複部分において遺物の混入が認められる。



第414図 146号住居跡実測図

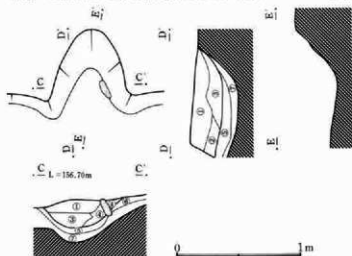
146号住居跡 (竈)

位置 住居東壁南寄りに位置し、袖部は床面上に位置するが燃焼部は壁面を多く掘り込んで造られている。
右壁部分に細長い石が出土した。使われていた位置から動いているため用途については明らかでないが右袖の石の可能性を考えたい。

構造 ロームを主体として焚口部分に石を使用して造られたものと思われる。燃焼下部より多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向65cmであった。

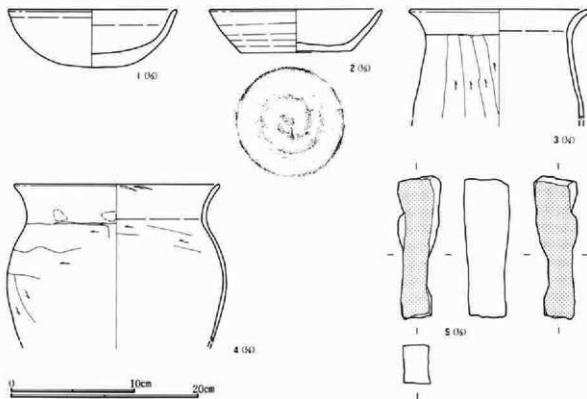
遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。



土層注記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子と焼土ブロックと少量の黒褐色土の層。
- ④ 黒褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックとわずかな焼土粒子を含む。
- ⑤ 暗褐色土 少量のローム粒子と少量の焼土粒子と炭化物を含む。
- ⑥ 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第415図 146号住居跡電実測図



第416図 146号住居跡出土遺物実測図

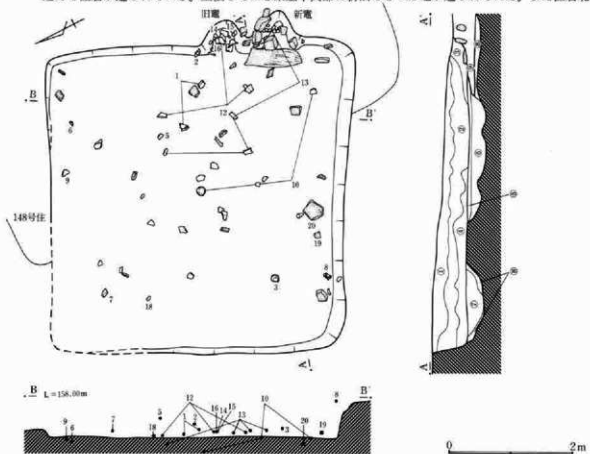
146号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第416図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
146住-1 132	環 土師器	- (13.6) - 床面	底部が丸く器内が厚い。体部と口縁部との境の器内がわずかに厚くなる。内面に暗文なし。	①褐色②酸化③口縁部1/3・体部2/3・底部完形④1mm以下の砂粒を少量含む
146住-2 132	環 須恵器	3.4 13.8 8.9 床面+5	口径と底径が大きく器高が低い。口縁部は直線的に外傾しつつ上らがる。底部右回転へ切り無調整。体部外側右回転クロコ目、内面ていねいな横ナデ。	①灰白色②還元焼成③完形④密
146住-3 133	甕 土師器	- (19.0) - 床面-4	胴中央部に最大径を持つ甕と思われる。口縁部は短く外反する。器表面に大きな砂粒が目立ち多い。	①にぶい褐色②酸化③1/4④1~3mmの砂粒を含む粗い胎土
146住-4 133	甕 土師器	- (22.0) - 床面+3	器内の薄い甕であり、口縁部が大きくなだらかに外反する。肩部右→左横方向へ傾り、内面ナデ。	①褐色②酸化③口縁部1/4・胴部1/6④密
146住-5 133	磁石	長さ11.4 幅3.4 厚さ3.7 重量163g	狭長側面を砥石として使用している。他の面は割れた状態で未加工。	①にぶい赤褐色②完形③砂岩

147号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版63・64 遺物写真図版133・134

位置 I区南東部に位置し、124号住居の西7mでH-5・6、I-5・6グリッドに属する。

概要 奈良時代の148号住居と重複している。本住居は148号住居の西側の床面上約15cmから上の覆土を掘り込んで住居が造られている。重複している東壁中央部に新旧の2つの竈が造られていた。また住居北



土層注記 (住跡)

- ① 暗褐色土 少量の焼土粒子・炭とローム粒子・白色軽石粒を含む。
 ② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
 ③ 暗褐色土 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
 ④ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
 ⑤ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の炭化物と粘土を含む。
 ⑥ 暗褐色土 ロームブロックと焼土粒子・粘土・炭化物を含む。
 ⑦ 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
 ⑧ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
 ⑨ 148号住居覆土

第417図 147号住居跡実測図

西部の壁面と床面の一部は削り取られて残っていなかった。

構造 148号住居と重複している部分の床面は、多くのローム粒子と少量の暗褐色土で造られていたが堅く踏み固められていなかった。148号住居と重複していない部分の床面は、多くのローム粒子と地山のロームを床面としていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西4.90m、南北4.95mでほぼ正方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁面で54cmであった。

遺物 覆土中より須恵器の坏や埴と土師器の甕や砥石・紡錘車が出土した。

147号住居跡竈(新)

位置 住居東壁南寄りに位置し、袖部は床面上に位置するが燃焼部は壁面を掘り込んで造られている。旧竈の南側に接しており、旧竈の右袖石の裏側を一部掘り込んで造られている。

構造 左袖部分から側面にかけて3個の石が、右袖部分に1石がほぼ据えられた状態で検出された。焚口床面上に95×27cm厚さ3cmの天井石が落ちた状態で出土し、他に竈内や周辺から4個の石が出土しているため、石を多く用いて造られた竈である。燃焼下部より多くの焼土粒子と少量の炭化物が検出された。

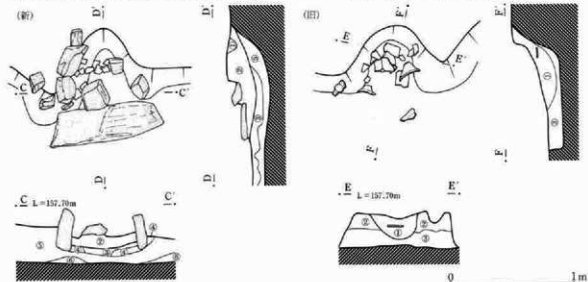
規模 煙道方向80cm、両袖方向90cmであった。 **遺物** 少量の土師器の甕の破片が出土した。

147号住居跡竈(旧)

位置 住居東壁南寄りに位置し、袖部は床面上に位置するが燃焼部は壁面を掘り込んで造られている。新竈の北側に接している。

構造 旧竈から新竈に造り直す段階において旧竈の右袖部分が掘り入りこまれている。新竈同様に石を多く用いて造られたものとおもわれ、右袖部に2個の石が据えられた状態で検出された。しかし左袖部分の石や天井石は検出されなかった。竈内より多くの焼土粒子と少量の粘土が出土した。

規模 煙道方向70cm、両袖方向90cmであった。 **遺物** 土師器の甕の破片が多く出土した。



土層法記(新竈)

- ① 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- ② 暗赤褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと焼土粒子・炭化物を含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子と炭化物を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む(148号住居覆土)。

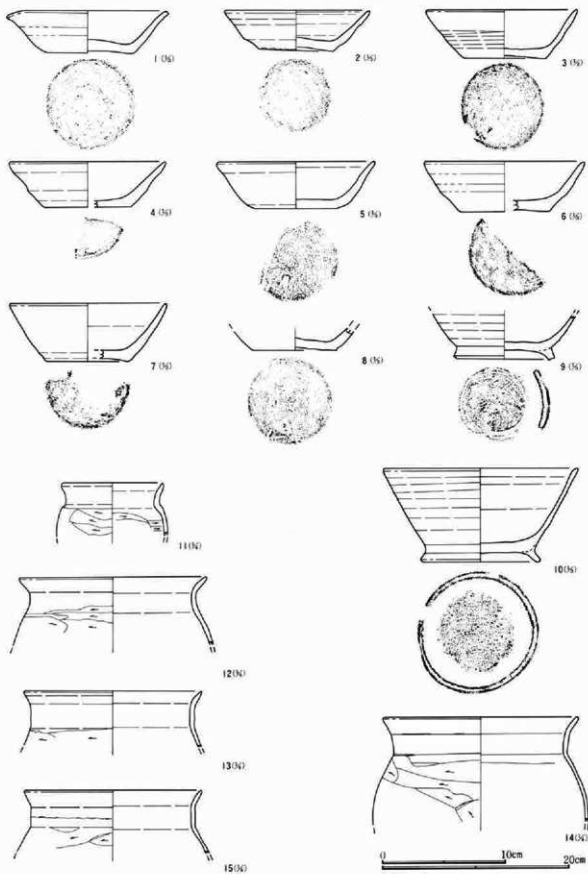
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

土層法記(旧竈)

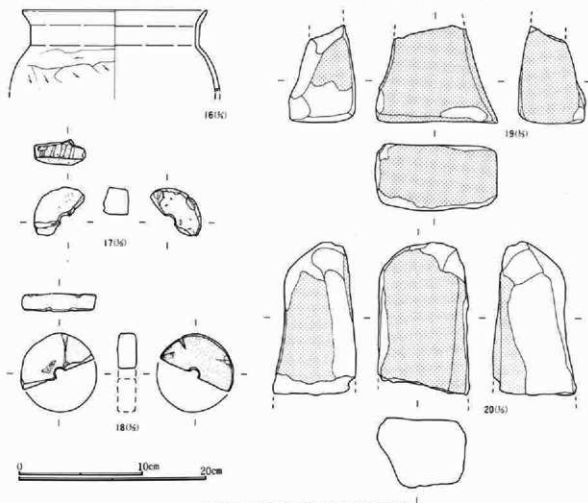
- ① 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の粘土を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の粘土と焼土粒子を含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む(148号住居覆土)。

第418図 147号住居跡新旧竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第419図 147号住居跡出土遺物実測図(1)



第420図 147号住居跡出土遺物実測図(2)

147号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第419図)

遺物番号 図版番号	器形及 種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
147住-1 133	坏 須惠器 床面+6	3.3 (13.0) (7.0)	底部の器肉が厚く中央部がわずかに凸状となる。底部右回転糸切無調整。焼きひずみがある。	①灰色②還元焼締③口径部4/5・底部完形④1mm以下の石英と長石粒少量含む
147住-2 133	坏 須惠器 カマド内+3	3.2 (11.6) 6.0	底部の器肉が厚く中央部がわずかに凸状となる。底部右回転糸切無調整。底径が小さく、体部～口径部が大きく外傾する。口径部の外反ほとんどなし。	①灰色②還元焼締③口径部～体部1/2・底部完形④1mm以下の石英と長石粒を少量含む
147住-3 133	坏 須惠器 床面+8	3.9 12.2 6.4	1と2の坏と比較して口径・底径・器高とも大きい。底部・体部・口径部ともすべて直線的である。底部右回転糸切無調整。体部0.5mm幅工具による回転痕。	①灰白色②還元③ほぼ完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
147住-4	坏 須惠器 覆土	(3.6) (12.6) 7.0	体部の器肉が厚く、口径部が大きく直線的に外傾する。底部右回転糸切痕。体部右回転クロコ目。	①灰色②還元焼締③1/4④密
147住-5 133	坏 須惠器 床面+29	3.7 (12.6) 6.6	体部が直線的に外傾。口径部がわずかに外傾。底部右回転糸切無調整。意識的に赤色を強調した坏か?	①赤色②酸化③口径1/5・底部4/5④12×6mmの小石を1個含む
147住-6	坏 須惠器 床面-6	4.0 (13.0) (7.0)	底部の器肉が厚く体部～口径部がわずかに内傾する。口径部は外反しない。底部右回転糸切痕。	①灰色②還元③口径部1/6・体部1/4・底部1/2④1mm以下の石英と長石粒を少量含む
147住-7 133	坏 須惠器 床面+11	4.6 (12.6) 6.4	器高が高い。底部周辺に胎土が付着し、その下部の糸切痕が明瞭なため高台がはずれた可能性あり。	①灰色②還元③①/2④1mm以下の石英と長石粒を少量含む
147住-8	坏 須惠器 床面+53	- - 6.8	5の坏と色調がほぼ同一であり、赤色を強調している。底部右回転糸切無調整。	①赤色②酸化③体部大半4/5・底部完形④1～2mmの砂粒を少量含む
147住-9	埴 須惠器 床面	- - 7.6	薄い埴に高台が付く。高台は外側に開き端部がへら削りにより鋭利に削られており、高台底部中央が凹状を呈する。	①灰色②還元焼締③高台1/6・底部完形・体部下半1/3④1～3mmの長石粒を少量含む

147号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第419・420図)

遺物番号 図版番号	図形及 び種別	縦高・口径・底径(cm) 出土位置	図形・成形・調整・蓋部整形等の特色	①色調整焼成④残存⑤胎土⑥備考
147住-10 133	埴 埴	7.4 (15.6) 8.6	底部の器内が厚く平である。体部へ口縁部は直線的に外傾しつつ立ち上がる。高台は9と異なり端部や底面が丸い。高台部内側右回転糸切痕。	①灰色②還元③口縁へ体部1/2・底部へ高台部完形④1～2mmの長石粒を少量含む
147住-11 133	小型埴 土師器 覆土	— (10.8) —	頸部と口縁部の器内が厚い。口縁部は強く外反しない。肩部右へ左横方向へ傾り。	①褐色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を多く含む
147住-12 133	埴 土師器 床面-8	— (20.0) —	頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部が大きく外反する。肩部右へ左横方向へ傾り。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
147住-13 133	埴 土師器 カマド内+11	— (19.0) —	頸部が直立し、口縁部が大きく外反する。頸部中央に輪痕が残る。肩部右へ左横方向へ傾り。	①褐色②酸化③口縁へ頸部4/5・胴部1/3④角閃石を少量含む
147住-14 133	埴 土師器 カマド内+4	— (21.0) —	頸部がやや外傾しつつ直立気味に立ち上がる。口縁部が大きく外反する。肩部右へ左横方向へ傾り。	①褐色②酸化③口縁へ胴部2/3・胴上部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
147住-15 133	埴 土師器 カマド内+4	— (19.0) —	頸部が直立し、口縁部が大きく外反する。肩部右へ左横方向へ傾り。肩部に輪痕残。	①赤褐色②酸化③口縁へ胴部2/3・胴上部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
147住-16 133	埴 土師器 カマド内+4	— (19.6) —	頸部がやや外傾しつつ直立気味に立ち上がる。口縁部が大きく外反する。肩部右へ左横方向へ傾り。	①褐色②酸化③口縁へ頸部4/5・胴部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
147住-17 134	紡錘車	長さ3.5 幅3.5 厚さ2.0 重量20g	土製紡錘車の破片である。側面が薄くなり中央部の厚い特色を持つ。側面と表面へ傾り。	①洗黄褐色②酸化③2/5④1～2mmの砂粒を少量含む⑤覆土
147住-18 134	紡錘車	幅4.0 孔径6.9 厚さ1.6 重量20g	中央部分が周辺部より少し厚いが、ほぼ厚さの一定した石製紡錘車の破片である。	①よい黄褐色③1/2④砂岩⑤床面出土
147住-19 134	砥石	長さ7.7 幅9.7 厚さ5.4 重量445g	3側面と下端面の計4面が砥石として使用されている。使用により磨くなった中央部が破損。	①灰白色③破片④液状岩⑤床面+9
147住-20 134	砥石	長さ12.1 幅7.4 厚さ6.6 重量645g	3側面を砥石として使用している。自然石をそのまま砥石として使用している。	①洗黄褐色③破片④砂岩⑤床面-8

148号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版64 遺物写真図版134

位置 I区南東部に位置し、124号住居の西2mでH-5・6、I-5・6グリットに属する。

概要 平安時代の147号住居及び時代の特定できない149号住居と重複している。147号住居により西側の床面上約15cmから上の覆土が掘り込まれている。149号住居との新旧関係は149号住居が148号住居の覆土の残されていない床下部分で重複していることや149号住居に出土遺物が認められないことにより149号住居が古い可能性が高いが、明らかにできなかった。竈右側で149号住居と重複している部分を含む東北部分の壁面と床面は耕作により削られて残っていない。東壁中央部南寄りの床面に多くの焼土と炭が確認され、竈の痕跡の可能性はあるが、残りが悪く明らかにできなかった。

構造 床面は、多くのローム粒子と地山のロームを用いて造られていた。柱穴が4本ほぼ正方形に配置され掘られていた。また貯蔵穴が竈右側の壁面に近い床面ではなく右袖に近接して掘られていた。

規模 東西7.3m、南北7.1mでありほぼ正方形を呈する。壁高は最も残りの良い南壁面で60cmであった。柱穴1は直径55cm深さ105cm、柱穴2は直径50cm深さ75cm、柱穴3は直径50cm深さ65cm、柱穴4は直径55cm深さ95cmでいずれも深い。貯蔵穴はやや楕円形を呈するが直径100cm深さ33cmであった。

遺物 覆土中より4000片以上の土師器の甕や杯の破片や100片以上の須恵器の杯や蓋の破片が出土した。

床下 床下を調査した結果、他の住居のような土坑は検出されず壁面の内側に多数の小穴が確認された。このような例は当遺跡では初めてのことである。壁の崩落を防ぐために壁面の内側に打ち込まれた杭等の痕跡と考えたい。小穴の大きさは直径30～40cmが多く床面からの深さは40～60cmとほぼ一定している。

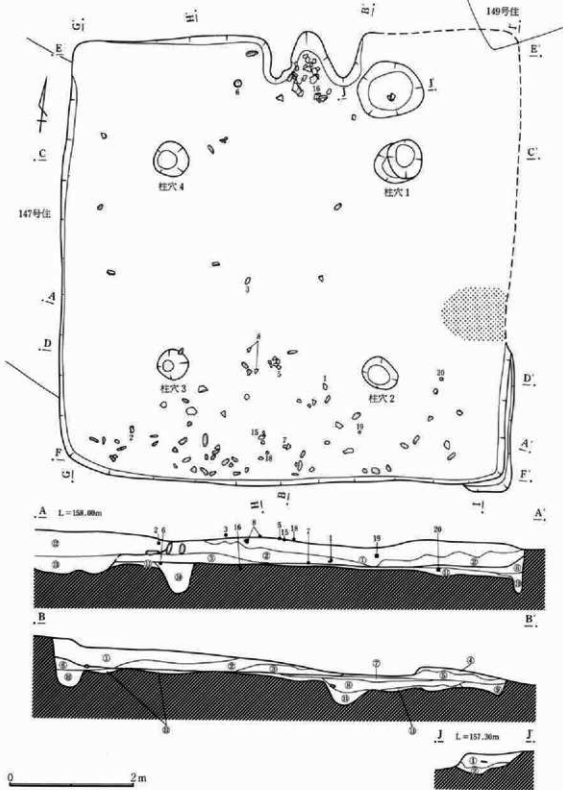
148号住居跡(竈)

位置 住居北壁中央部に位置し、袖部と燃焼部の多くは床面上に位置する。

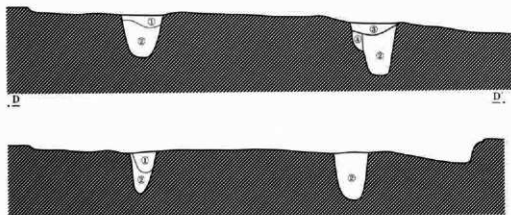
構造 多くのルームと灰褐色粘土を用いて造られている。袖石は出土していない。燃焼部や壁面から多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向80cm、両袖方向95cmであった。

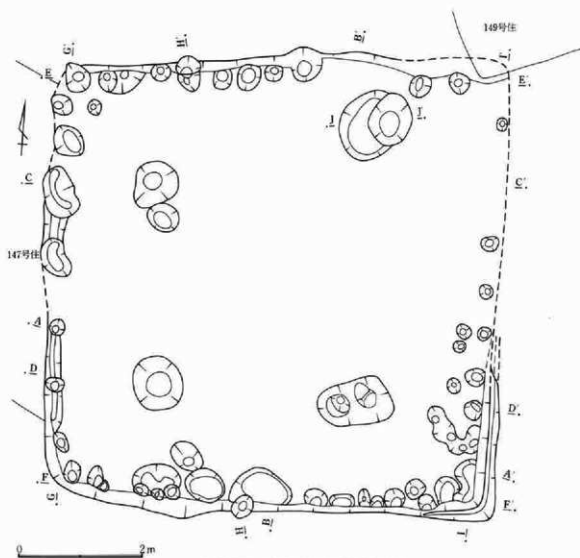
遺物 多くの土師器の甕の破片が出土した。



第421図 148号住居跡実測図(1)



第422図 148号住居跡実測図(2)



第423図 148号住居跡床下実測図(1)

E L=136.00m

E'



0 2m

土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と炭と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 黄褐色土 1cm前後のローム小ブロックを多く含む(147号住居を開る時埋めた土?)。
- ③ 暗褐色土 3cm前後のロームブロックを少量含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の粘土と焼土粒子を含む。
- ⑤ 暗赤褐色土 多くの焼土粒子と粘土を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ⑦ 暗赤褐色土 焼土粒子・炭化物を多く含む。
- ⑧ 暗赤褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子と粘土を含む。
- ⑨ 暗赤褐色土 粘土まじりのロームを主とする固い土層。

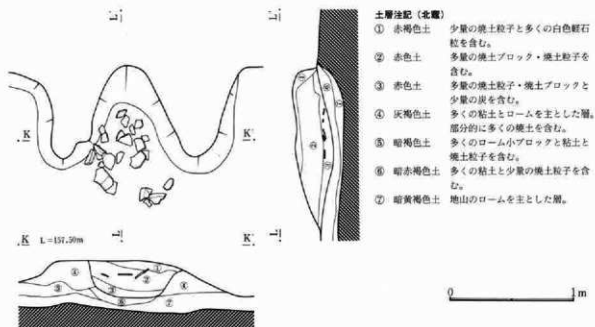
- ⑩ 暗赤褐色土 多くのローム粒子とロームブロックの層。
- ⑪ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑫ 147号住居覆土
- ⑬ 147号住居床下覆土

土層注記 (貯蔵穴)

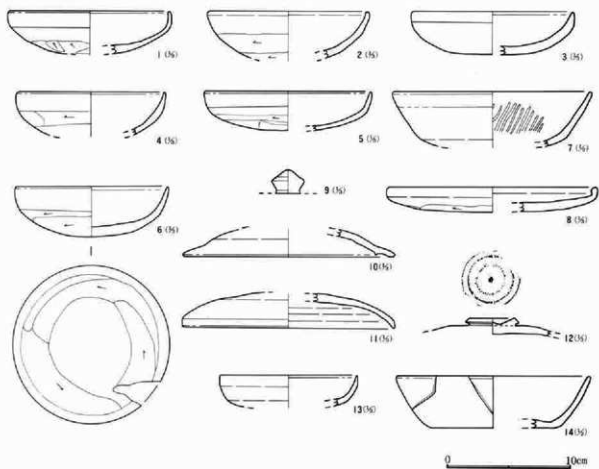
- ① 暗赤褐色土 多くの焼土粒子・炭化物と粘土を含む。
 - ② 暗黄褐色土 ロームを主とした層。
- 土層注記 (柱穴)
- ① 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
 - ② 暗黄褐色土 1cm前後のロームブロックを多量に含む。
 - ③ 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子・粘土を少量含む。
 - ④ 暗褐色土 1cm前後のロームブロックを少量含む。

第424図 148号住居跡床下実測図(2)

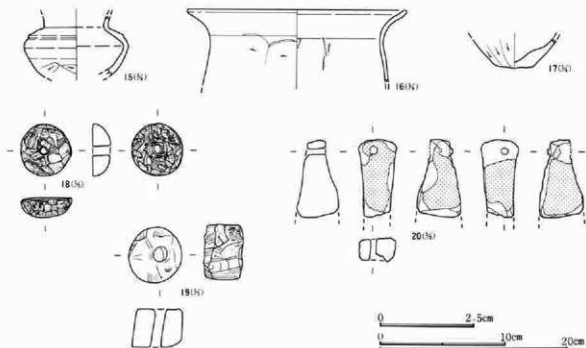
第3章 検出された遺構と遺物



第425図 148号住居跡遺実測図



第426図 148号住居跡出土遺物実測図(1)



第427図 148号住居跡出土遺物実測図(2)

148号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第426図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①灰色②酸化③残存④胎土⑤備考
148住-1 134	土師器 土師器	— (13.0) — 床面+9	口径の大きな丸底の環である。口縁部は長く直立する。底部へら削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を少量含む
148住-2 134	土師器 土師器	— (13.0) — 床面+22	深い丸底を呈し、口縁部は非常に短く直立する。底部へら削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
148住-3	土師器	3.4 (13.0) — 床面+42	口径の大きな丸底の環である。口縁部は短く直立する。底部へら削り、口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③口縁部1/8・底部1/4④赤色粒を含む
148住-4	土師器 土師器	— (12.0) — 覆土	底部の器内が薄い。口縁部はやや幅広く底部からの同一曲線で立ち上がる。底部へら削り。	①橙色②酸化③1/4④多くの赤色粒を含む
148住-5	土師器	2.1 (13.4) — 床面+38	口径の大きな浅い環である。口縁部は幅広くわずかに外傾しつつ立ち上がる。底部へら削り。	①橙色②酸化③1/4④器口唇部が2箇所折られて片が付着、灯明皿の可能性大
148住-6 134	土師器 土師器	4.0 12.4 — 床面+4	1~5の環と胎土と色調が少し異なる。底部の器内が厚く、口縁部が長い。底部へら削り、口縁部横ナデ、内外面とも増文及び磨きは認められない。	①橙色②酸化③ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く含む
148住-7	土師器	— (16.0) — 床面	体部へ口縁部が長く境部分の器内が厚い。口縁部が直立する。底部と体部へら削り、口縁部横ナデ、内部に放射状増文。	①橙色②酸化③体部へ口縁部1/3・底部小破片④1~2mmの砂粒を少量含む
148住-8 134	土師器 土師器	2.0 (17.0) — 床面+34	浅い皿である。口縁部は短く全体が丸く作られている。底部へら削りで丸味を持つ。	①橙色②酸化③1/2④1mm以下の砂粒を少量含む
148住-9	須恵器 須恵器	— — — 覆土	器高の高い宝珠つまみである。	①灰色②還元焼締③つまみ部のみほぼ完形④1mm以下の石英と長石粒を含む
148住-10	須恵器 須恵器	— (17.0) — 覆土	器高の低い蓋である。カエリの断面は三角形で小さい。上面全面に陶沢による自然釉。	①灰色②還元焼締③破片④密
148住-11	須恵器 須恵器	— (17.0) — 覆土	口縁部が下方に折られている。天井部は広い範囲にわたり右回転へら削り。	①灰色②還元焼締③口縁部1/10・体部へ天井部1/4④1mm前後の石英と長石粒を含む
148住-12	須恵器 須恵器	— — — 覆土	低い壺状のつまみを持つ蓋である。端部は鋭利に仕上げられている。	①灰色②還元焼締③つまみ部ほぼ完形・天井部小破片
148住-13	土師器	— (11.0) — 覆土	器高と口径の小さな小環である。底部は小破片であるがへら削り、口縁部横ナデ。	①灰色②還元焼締③小破片④密

148号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号426・427図)

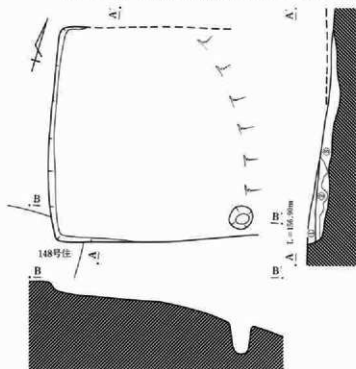
遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
148住-14	環 須恵器	4.1 (15.5) (10.5) 覆土	口径と底径の大きな環の小破片である。底部回転ヘラ削り、体部へ口縁部右回転ナゲ。	①灰白色②還元③1/6④1mm以下の石英と長石を多く含む
148住-15	短期煮 須恵器	- - - 床面+32	肩が強く張り、その部分に一条の沈線がある。口頸基部が広い。底部ヘラ削り。	①灰白色②還元焼成③胴部1/2・口縁と胴部1/5④産
148住-16 134	鉢 土師器	- 23.6 - 床面-2	最大径を口縁部に持つ器内の薄い底である。口縁部が大きく外反する。胴部右へ左横方向ヘラ削り。	①褐色②酸化③口縁部4/5・胴部一側上部1/5④1mm以下の密な砂粒を多く含む
148住-17	甕 土師器	- - - 3.8 覆土	器内のやや厚い壁の底部である。外側底部は平であるが内側は平でない。胴部外側ヘラ削り。	①褐色②酸化③胴下半4/5・底部完形④1mm以下の砂粒を多く、赤色粒少量含む
148住-18 134	紡錘車	長さ4.1 幅4.0 厚さ1.6 重量43g 孔径0.7 床面+34	表面をほとんど削っているため、台形でなく半球形を呈する。表面はすべて刃物により鋭い削り削っている。広面は平でなく少し丸味を持つ。	①暗緑灰色②完形③磨石片岩
148住-19 134	白玉	幅1.4 孔径0.35 厚さ1.0 重量4.2g	厚さが厚く、上下面がほぼ平となっている。側面は寛楕円形によりほぼ円形を呈する。中心部に穿孔。	①灰白色③完形④磨石片岩⑤床面+16
148住-20 134	砥石	長さ6.1 幅3.0 厚さ3.5 重量63g 床面	片側に穿孔されており、稜石の破片と思われる。4側面が砥石として使用されている。破損後の使用のためか、穿孔部分も砥石として使用され薄くなる。	①灰白色③破損品④縦紋岩

149号住居跡 (時代不明) 遺構写真図版64

位置 I区東側中央部に位置し、147号住居の東北4mでH-5グリットに属する。

概要 住居に近い北東部分が現在の道路として使用されていたため、北東部分の壁面と床面が削り取られ、南西側半分近くの床面と南西コーナーの壁面が残っているのみである。また奈良時代の148号住居と南西コーナー部分で重複している。

構造 床面は一部しか残っていないかった。ルームブロックと少量の暗褐色土で造られていたが堅く踏み固められていなかった。柱穴は検出されなかったが床下調査において南東コーナーに貯蔵穴の可能性を持つ



小穴が検出された。この小穴が貯蔵穴なら竈も東壁面に造られていた事が考えられる。しかしその面に焼土粒子等は検出されなかった。

規模 東西不明、南北推定3.4mである。壁高は最も残りの良い南西コーナーの壁面で40cmであった。貯蔵穴と思われる小穴は直径40cm床面からの深さ60cmであった。

遺物 全く出土していない。

土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
- ② 暗褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを多く含む。
- ③ 暗黄褐色土 地山のロームを主とする層。

0 2m

第428図 149号住居跡実測図

150号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版64 遺物写真図版135・148

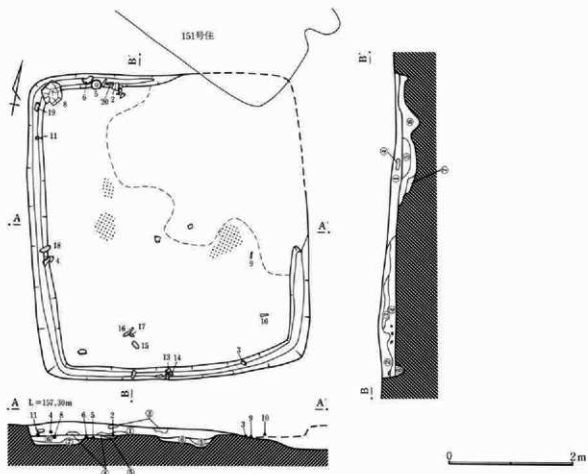
位置 I区東側中央部に位置し、149号住居の西4mでH-5・6グリットに属する。

概要 住居の残りが悪く北東部分の床面と壁面及び竈は残っていなかった。北東部分の壁面と床面の一部が同じ奈良時代の151号住居により掘り込まれていた。新旧関係は150→151号住居の順である。床面は図上で示した点線部分の南西部で残っていたが北東部分の床面は残っていなかった。床面中央部の3カ所から焼土粒子がまとまって出土した。

構造 床面はロームブロックと少量の暗褐色土で造られており、床面の中央部は堅く踏み固められていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。壁面の内側に周溝が検出された。

規模 東西4.40m、南北4.85mである。壁高は最も残りの良い南壁面で23cmであった。周溝は幅20cm深さ15cmであった。

遺物 土師師の坏や壺と須恵器の坏また鉄鏝等が出土し、多くを図化することができた。

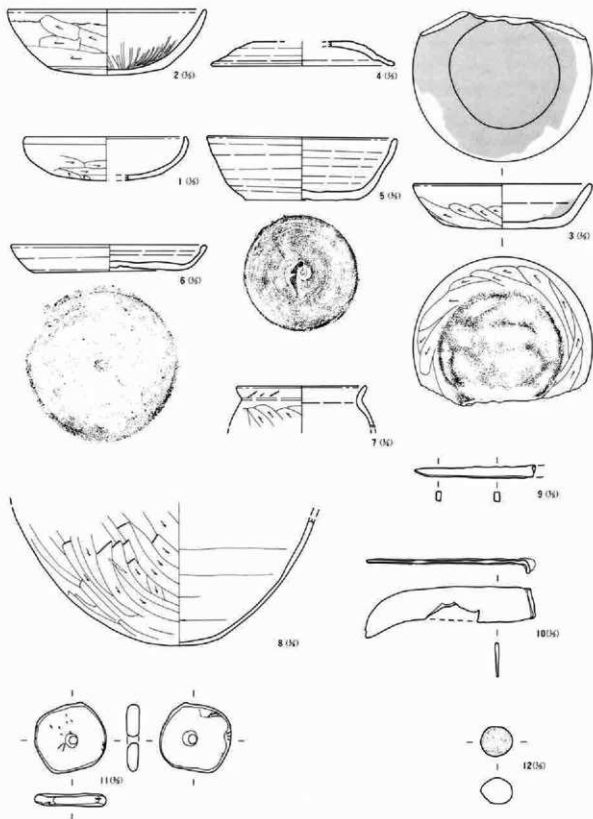


土層注記 (住居)

- ① 褐色土 少量のローム粒子と炭化物と白色軽石粒を含む。
 ② 茶褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
 ③ 黄褐色土 ローム粒子とロームブロックを主とした層。
 ④ 黒褐色土 多量の炭化物と少量の焼土粒子を含む。
 ⑤ 暗褐色土 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒子・炭化物を含む。
 ⑥ 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
 ⑦ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第429図 150号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



0 10cm 20cm

第430図 150号住居跡出土遺物実測図

150号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第430図)

遺物番号 図版番号	器形及び 材質	器高・口径・底径(cm) 出 土 位 置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④出土⑤備考
150住-1 135	坏 土師器	— (13.0) — 覆土	浅く口径の大きな坏である。口縁部が短く直立する。底部へつ削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を少量含む
150住-2 135	坏 土師器	5.7 (16.0) (9.0) 床面+4	器高が高く口径の大きな坏である。内側の底部と体部との境はなく曲線の上に立ち上がる。底部と体部へつ削り、内側底部周辺へ体部に放射状増文。	①褐色②酸化③1/3④赤色粒を少量含む
150住-3 135	坏 土師器	3.6 14.3 9.9 床面	全体に器内が厚い。特に体部へつ削りの器内が厚く、口縁上端まで厚い。外側の体部と底部へつ削り、底部は平底に近い。口縁部横ナデ、内面底部は磨耗している。内面に多くの灰が付着。視としての使用か。	①灰青色②酸化③口縁へつ削り2/3・底部はほぼ完形④1mm以下の砂粒を少量含む⑤増文は全て認められない
150住-4 135	蓋 須恵器	— 14.6 — 床面+5	口縁部から内側に15mmほどはいた所に低いカエリを持つ。天井部右回転へつ削り。	①灰白色②還元③1/2④磨
150住-5 135	坏 須恵器	5.0 15.2 9.2 床面	底部はへつ削後右回転へつ削り調整により、ていねいに仕上げている。体部へつ削りはわずかに内彎しつち立ち上がる。口縁上端まで器内が厚い。	①灰白色②還元③口縁部を一部欠くがほぼ完形④磨
150住-6 135	須 恵器	2.2 14.6 11.8 床面	底部はへつ削後右回転へつ削り調整により、ていねいに仕上げているがへつ削の痕跡が残る。体部へつ削りは短く内彎しつち立ち上がる。口縁上端が丸く内厚。	①灰白色②還元③口縁部を一部欠くが完全に近い
150住-7 135	甕 土師器	— (14.0) — 覆土	胴部と口縁部の器内が厚い。口縁部は短く外反する。胴上縁は右下→左上斜方向へつ削り、口縁部横ナデ。	①明赤褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
150住-8 135	甕 土師器	— — — 床面	器内の薄い大きな甕である。胴部外縁左上→右下斜方向へつ削り、内面ナデ、輪襷が確認できる。	①褐色②酸化③胴下半→底部ほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く含む
150住-9 148	釘	全長9.1 幅0.9 厚さ0.4 重量14.0g	釘の下半部と思われる。断面は長方形を呈し内厚である。床面+2cmより出土。	
150住-10 148	鉢	長さ13.5 幅2.8 厚さ0.3 重量34.0g	基部が上半分だけでなく基部全体が胴部に対しほぼ直角に折り曲げられている。柄に対しほぼ直角に付く縁である。短く小さな鉢である。磨耗が進行している。⑤床面	
150住-11 135	石製品	長さ5.1 幅5.6 厚さ1.0 重量35g	隅丸方形を呈し、中心部が斜方向に穿孔されている。紡錘車とは異なる製品と思われる。	①灰黄色②完形③砂岩④内径0.7
150住-12 135	丸玉	長さ2.3 幅2.5 厚さ2.0 重量14.3g	少しゆがんだ丸玉である。表面全体が磨耗している。	①オリーブ黒色②一部欠③砂岩
150住-13 135	石	長辺14.2 短辺5.4 厚さ2.7 24g	横断面は三角形を呈する細長い石である。表面全体が磨耗している。	①緑灰色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面+4
150住-14 135	石	長辺11.2 短辺6.0 厚さ2.6 22g	長さが短く偏平な石である。細い方の側面にわずかに凹状を呈する欠損部あり。	①青灰色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面+3
150住-15 135	石	長辺12.8 短辺6.1 厚さ4.3 35g	割れているが、大きくて細長い石と思われる。	①青灰色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面+3
150住-16 135	石	長辺20.4 短辺5.9 厚さ2.8 41g	細くて長い石であり、両側面に3~4個所小さな凹状の欠損部あり、こも石の可能性あり。	①青灰色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面+5
150住-17 135	石	長辺11.4 短辺4.7 厚さ2.1 17g	細長く偏平な小さな石である。表面全体が磨耗している。	①明オリーブ灰色③完形④点紋網罟母石黒片岩⑤床面+4
150住-18 135	石	長辺14.7 短辺6.3 厚さ2.9 39g	幅広の偏平な石である。側面中央の幅が狭くなっている。	①緑灰色③側面の一部欠損④石炭網罟母石⑤床面+3
150住-19 135	石	長辺12.7 短辺2.6 厚さ3.6 49g	長さが短い。横断面は平行四辺形に近い。側面中央の幅が狭くなっている。	①青灰色③完形④網罟母石黒片岩⑤床面+3
150住-20 135	石	長辺13.0 短辺2.3 厚さ2.8 32g	偏平な石である。両側面に3~4個所の小さな凹状の欠損部あり。	①明赤灰色③完形④点紋網罟母石黒片岩⑤床面
150住-21 135	石	長辺13.7 短辺7.3 厚さ2.2 39g	幅が広く偏平な石である。細い一方の側面幅が狭くなっている。	①青灰色③完形④緑片岩⑤覆土

151号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版65 遺物写真図版135・136・148

位置 I区北東側中央部に位置し、146号住居南東2mでH-5・6グリットに属する。

概要 住居北側の壁面に近い部分を東西に横切る耕作溝により掘り込まれている。耕作溝北側の床面と壁面は残っていなかった。南東部分で同じ奈良時代の150号住居と重複し、150号住居の北東部分の壁面と床面の一部を掘り込んでいる。新旧関係は150→151号住居の順である。

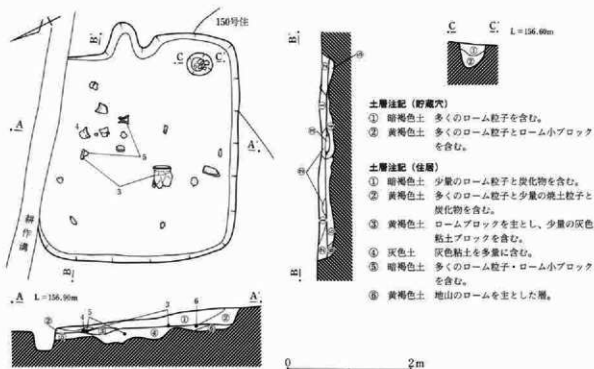
構造 床面は多くのローム粒子とローム小ブロックと少量の暗褐色土で造られていたが堅く踏み固められて

第3章 検出された遺構と遺物

はいなかった。竈右側に貯蔵穴が掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.60m、南北3.15mである。壁高は最も残りの良い南壁面で33cmであった。貯蔵穴は直径40cmの円形を呈し深さ45cmであった。

遺物 床面中央部南側よりほぼ完形の土師器甕と、貯蔵穴上より土師器甕の胴部下半が出土した。また覆土中より400片以上の土師器の甕や少量の坏の破片が出土した。

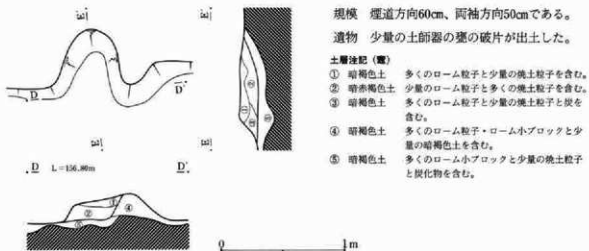


第431図 151号住居跡実測図

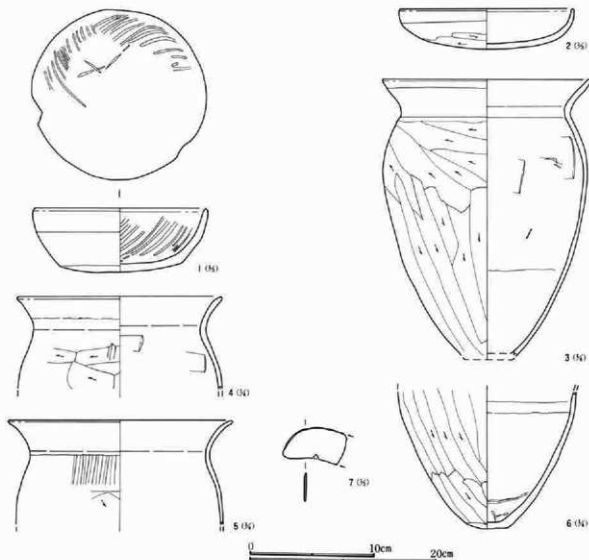
151号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央に位置し、燃焼部は壁面から床面上にかけて造られ、多くの部分は床面上に位置する。

構造 残存状態は悪く特に左袖部分の残りは悪い。多くのローム粒子とローム小ブロックと少量の暗褐色土を主として造られていた。壁面が一部焼土化し、竈内より多くの焼土粒子が出土した。



第432図 151号住居跡竈実測図



第433図 151号住居跡出土遺物実測図

151号住居跡 出土遺物観察表 (押印番号第433図)

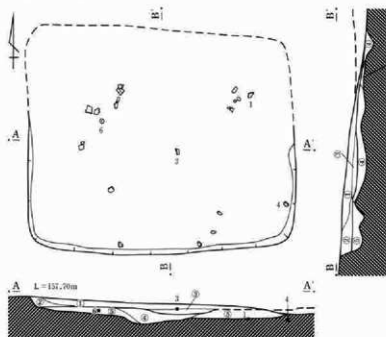
遺物番号 図版番号	器形及び 分類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
151住-1 135	坏 土師器 覆土	5.1 14.0 9.5	器高の高い坏である。底部はヘラ削りにより平底に近い。体部は直線的に外傾し、外面ヘラ削り。口縁部は上端まで器内が薄くならない。内面体部へ口縁部放射状磨文。	①黄褐色②酸化③ほぼ完形④1~2mmの赤色粒と砂粒を少量含む。粉状を呈する
151住-2 135	坏 土師器 覆土	3.3 (14.0) -	浅い坏であり面に近い。高さが左右で異なりゆがんでいる。底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①明赤褐色②酸化③3/4④1mm以下の砂粒を少量含む
151住-3 136	甕 土師器 床面	- (22.2) -	器内の薄い甕であるが、頸部と口縁部の器内がわずかに厚い。肩部が強く張らずに胴上部の幅が大きい。胴上部右→左上斜方向ヘラ削り。口縁部横ナデ。	①明赤褐色②酸化③底部以外はほぼ完形④1mm以下の砂粒を多く含む
151住-4 135	甕 土師器 床面	- (22.0) -	器内の薄い甕であり、口縁部が長く大きく外反する。外側口縁部に輪痕あり。胴上部右→左横ヘラ削り。	①褐色②酸化③1/5④1mm以下の砂粒を多く、角閃石をわずかに含む
151住-5 135	甕 土師器 床面	- (24.0) -	器内の薄い甕であり、口縁部が長く大きく外反する。胴上部右→左横方向ヘラ削り。	①褐色②酸化③口縁部2/3・胴上部1/3④1mm以下の砂粒を多く含む
151住-6 136	甕 土師器 床面+13	- - 4.7	底部は内外面とも丸味を持つがほぼ平。胴部左上→右下斜方向ヘラ削り。	①明赤褐色②酸化③胴下半2/3・底部完形④1mm以下の砂粒を多く含む
151住-7 148	鉢	長さ4.5 幅2.5 厚さ0.1 重量4.5g	鉢先端部の破片である。胴部の器内が薄い。全体に錆化が進行しもろくなっている。	⑤覆土

152号住居跡 (奈良時代) 遺構写真図版65 遺物写真図版136

位置 I区中央部東側に位置し、150号住居の西2mでH-6・7グリットに属する。

概要 住居の残りが悪く北側約半分の床面と壁面及び竈は残っていないかった。

構造 床面は地山のロームを主とし部分的にロームブロックで固く踏み固められてあった。柱穴や貯蔵穴は



掘られていなかった。

規模 東西4.3m、南北推定で3.55mである。壁高は南壁面で11cmである。

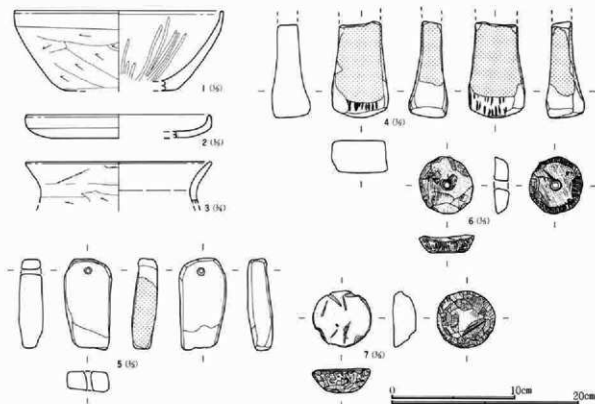
遺物 土師製の坏や甕と砥石・紡錘車等が出土した。

土層注記(住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の炭化物を含む。
- ③ 黄褐色土 ロームを主とする固い層(粘床)。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の粘土を含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第434図 152号住居跡実測図

0 2m



第435図 152号住居跡出土遺物実測図

152号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第435図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
152住-1	坏 土師器	6.3 (16.8) (9.2) 床面	器高が高く平底を呈する坏である。体部へ口縁部はわずかに内彎しつつ立ち上がる。口縁上端の器内が薄い。体部へ底部へ削り、内面に放射状喰文。	①に濃い褐色②酸化③口縁へ体部1/5底部小破片④1mm前後の砂粒と赤色粒を少量含む
152住-2	皿 土師器	1.8 (15.0) - 覆土	浅い皿であり、口縁部が短くほぼ直立する。底部へ削り、口縁部横ナズ。	①に濃い褐色②酸化③小破片④1mm以下の多くの赤色粒を含む
152住-3	埴 土師器	- (20.0) - 床面+3	器内の薄い埴である。口縁部は短く外反する。胴上部右へ左横方向へ削り、口縁部横ナズ。	①褐色②酸化③小破片④1mm以下の砂粒を多く、角閃石を少量含む
152住-4	砥石	長さ7.6 幅4.5 厚さ3.1 重量116g	4側面を砥石として使用しており、細くなった中央部から割れている。広面端部にV字状の多くの溝有。	①灰白色②破片③流紋岩④覆土
152住-5	砥石	長さ7.2 幅3.7 厚さ2.0 重量72g	薄い長方形を呈し、上端部に孔径5mmの穿孔がある。全面はすべて磨耗している。狭一側面は砥石で使用。	①灰白色②成形③流紋岩④覆土 砥石破壊後に転用?
152住-6	紡錘車	長さ4.4 幅4.2 厚さ1.3 重量40g	低い台形を呈する。側面全面寛底削り、狭面は自然面。広面は表面が割離し凸凹を呈する。	①緑灰色②一部欠損しているがほぼ完形③薄片砂④孔径0.8 床面
152住-7	紡錘車	長さ4.4 幅4.6 厚さ1.9 重量56g	台形を呈する紡錘車の未製品である。側面へ狭面ノミによる細かい削り→側面寛底削り、広面はほとんど自然面、中央部に穿孔すればほぼ完成品。	①緑灰色②成形③薄片砂

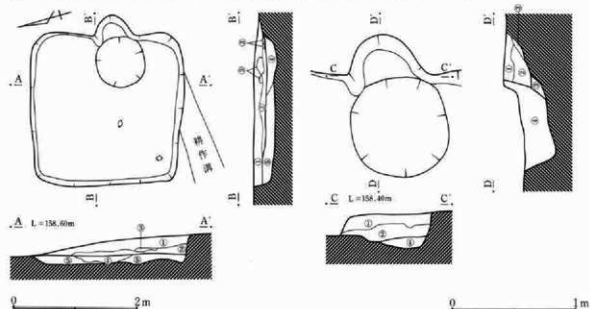
153号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版65

位置 I区東側中央部南側に位置し、150号住居の西2mでH-6・7グリットに属する。

概要 住居が小さく残りが悪い。床面中央部南寄りに6号掘立柱建物跡の柱穴が1本掘り込まれている。

構造 床面は地山のロームを主とし、部分的に多くのロームブロックにより造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。竈口部に擾乱土坑が掘られていた。

規模 東西2.40m、南北2.45mである。壁高は最も残りの良い南壁面で31cmであった。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
 ② 褐色土 多くのローム粒子と少量のローム小ブロックを含む。
 ③ 灰白色土 灰白色粘質土を主とした層。
 ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

土層注記 (竈)

- ① 褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子・軽石を含む。
 ② 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックと炭を含む。
 ③ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
 ④ 黒褐色土 土坑覆土。

第436図 153号住居跡及び竈実測図

遺物 少量の土師器の坏と甕の破片が出土した。

153号住居跡（竈）

位置 住居東壁中央に位置し燃焼部は壁面から床面上にかけて造られ、多くの部分は床面上に位置する。

構造 左袖部分に灰白色粘土が残るため、粘土とロームブロックを用いて作られていたものと思われる。焚口部に大きな攪乱土坑が掘られ、燃焼部や焚口部分及び右袖部分を掘り取られている。竈内より焼土も出土しているが少量である。

規模 煙道方向50cm、両袖方向推定60cmである。 遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。



第437図 153号住居跡出土遺物実測図

153号住居跡 出土遺物観察表（押図番号第437図）

遺物番号 図版番号	形状及び 種別	縦高・口径・底径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①白色②焼成③残存④胎土⑤備考
153住-1	坏 土師器	— (13.2) — 覆土	器内の薄い丸底の坏である。口縁部は外傾し底部との境に明確な稜を持つ。底部へう削り、口縁部ナデ。	①にぶい②白色③酸化④小破片⑤1mm以下の砂粒を少量含む
153住-2	坏 土師器	— (12.0) — 覆土	底部の器内の厚い坏の小破片である。口縁部は短くなだらかに外反する。底部へう削り、口縁部ナデ。	①にぶい②白色③酸化④小破片⑤赤色粒を多く含む

154号住居跡（古墳時代） 遺構写真図版65・66 遺物写真図版136・137

位置 I区中央部南側に位置し、153号住居西4mでH-7、I-7グリットに属する。

概要 住居中央部の覆土から床面下までを古墳時代の170号住居により掘り込まれている。また古墳時代の156号住居により南西部分の覆土が削り込まれ覆土中に竈が造られていた。このように3軒が重なり合う住居であり新旧関係は154→156→170号住居の順である。本住居の北側は東西に走る耕作溝により多くの部分が削り取られ、北側の壁面と床面の多くは耕作により削り取られている。

構造 床面は多くのロームブロックと少量の暗褐色土で造られていた。床面中央部に少量の粘土が混入していた。竈右側に方形を呈する貯蔵穴が掘られ、床面上に柱穴が4本正方形に掘られていた。壁面の内側に周溝が掘られていた。

規模 東西4.90m、南北4.95mである。壁高は最も残りの良い南壁面で42cmであった。貯蔵穴は上面が一辺50cmのほぼ正方形を呈し底面は直径30cmの円形を呈し深さ80cmである。周溝は幅20cm深さ10cmであった。柱穴1は直径35cm深さ81cm、柱穴2は直径30cm深さ62cm、柱穴3は直径30cm深さ65cm、柱穴4は直径35cm深さ89cmであった。

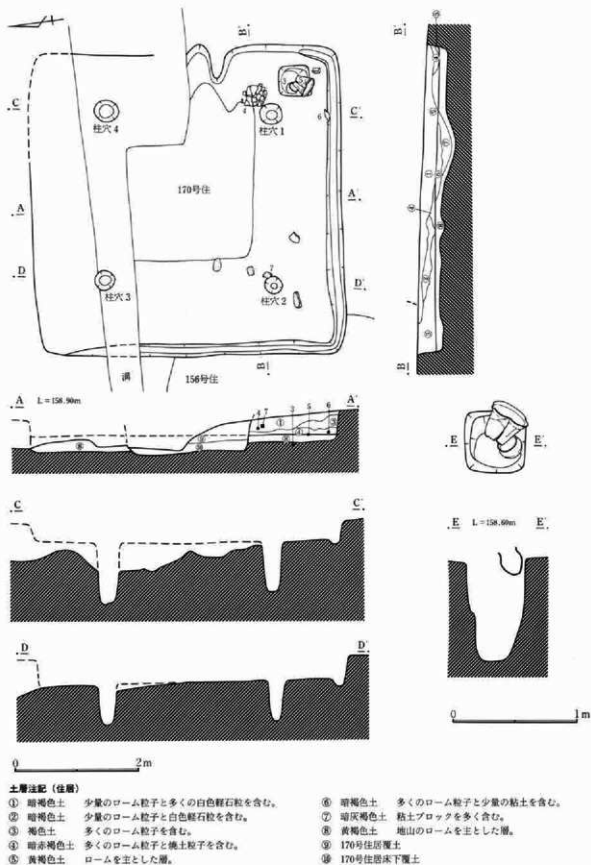
遺物 貯蔵穴に落ち込むように、完形の甕と小型甕が重なり合って出土した。このことは貯蔵穴がほとんど埋まっている状態でこの甕と甕が置かれた事を意味し、他にも類例があるため貯蔵穴の使用方法について考えさせられる。貯蔵穴と竈右袖の間に底部を欠いた甕が出土した。また柱穴2に接して菱形を呈し頂部に穿孔をもつ滑石製の石製品が出土している。

154号住居跡（竈）

位置 住居東壁中央に位置し、燃焼部は壁面から床面上にかけて造られ、多くの部分は床面上に位置する。

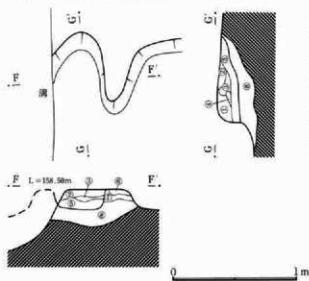
構造 残存状態は悪く特に左袖部分の残りは悪かった。多くのローム粒子とローム小ブロックと少量の暗褐色土を主として造られていた。壁面が一部焼土化し竈内より多くの焼土粒子が出土した。

規模 煙道方向65cm、両袖方向推定60cmである。 遺物 遺物の出土は認められなかった。



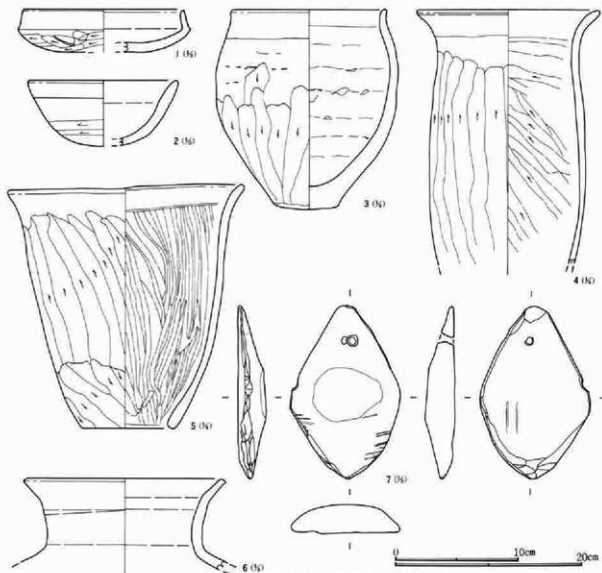
第438図 154号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



土層注記(層)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 暗赤褐色土 多くのローム粒子と焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の白色軽石粒を含む。
- ④ 赤褐色土 焼土粒子を主とした層。
- ⑤ 暗黄褐色土 ローム小ブロックを主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ⑥ 褐色土 多くのロームブロックを含む。
- ⑦ 暗褐色土 多くのロームブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑧ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第439図 154号住居跡竈及び出土遺物実測図

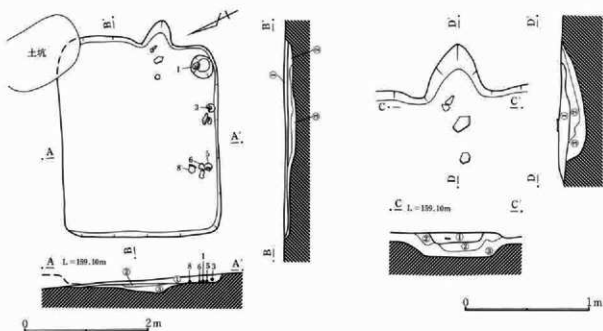
154号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第439図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
154住-1	坏 土師器	- (13.0) - 覆土	残く丸底の坏である。底部と口縁部との境に明瞭な線をもち口縁部が内傾する。底部へう削り。	①表面黒褐色・断面残黄褐色②酸化③1/4④1mm以下の砂粒を多く含む
154住-2	埴 土師器	5.2 (12.0) - 覆土	口径が小さく深い埴である。底部へ口縁部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③1/4④密・粉状を呈する
154住-3 136	甕 土師器	21.2 16.7 7.2 貯蔵穴内+70	器内の厚い小さな甕であり、特に底部の器内が厚い。口縁部が短く直立する。胴内外面に多くの輪襷模が残る。胴部上へ下縦方向へう削り。	①におい褐色②酸化③完形④1~3mmの大きな砂粒を多く含む粗い胎土
154住-4 136	甕 土師器	- (19.6) - 床面+8	胴中央部に最大径を持つ長胴の甕である。口縁部は短くならかに外反する。全体的に器内が厚い。下へ上縦方向へう削り、内面ナデ。	①におい褐色②酸化③口縁へ胴上部4/5・胴中へ下半部1/2④1~3mmの大きな砂粒を多く含む粗い胎土
154住-5 137	瓶 土師器	25.8 25.3 9.8 床面	底径や口径の大きな底部の付かない瓶である。胴下端部の内側へう削り、下端部ナデ、胴下半上へ右へ下斜方向へう削り、内面はていねいなナデにより器面を密にしている。口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③ほぼ完形④1~3mmの大きな砂粒を多く含む粗い胎土。3~4mmの大きな片岩や長石粒もわずかに含む⑤器表面はひどい荒れ面ではない
154住-6 137	甕 土師器	- (21.6) - 床面+5	丸胴の大きな甕の口縁部と思われる。頸部が直立し口縁部が外反する。口唇部が平で外傾する。	①褐色②酸化③1/4④1~2mmの砂粒を多く含む
154住-7 137	石製品	長さ13.6 幅9.6 厚さ2.3 重量300g 床面+12	用途及び名称は不明であるが、装飾品の一種と考えている。上面中央部を残し周辺を削り込んでいる。下面は平で自然面である。端部はすべて面取りしている。上端部に上方から穿孔されている。	①青灰色②一部わずかに欠損しているがほとんど完形③磨石片岩④穿孔は2回以上試み一度は途中でやめている

155号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版66 遺物写真図版137

位置 I区中央部南側に位置し、154号住居の南0.5mでI-7グリットに属する。

概要 南側約半分の床面と壁面は僅かに残っているが、北側の壁面と床面の上面は削り取られて残っていない



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子和白色軽石粒を含む。
 ② 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
 ③ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

土層注記 (竈)

- ① 暗赤褐色土 多くの塊土粒子和ローム小ブロックを含む。
 ② 暗褐色土 多くのローム粒子和少量の塊土粒子和を含む。
 ③ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第440図 155号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物

い。北東コーナーを土坑により掘り込まれている。

構造 床面は地山のロームを主とし、部分的に多くのロームブロックにより造られていた。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西3.2m、南北2.5mである。壁高は最も残りの良い南壁面で8cmであった。貯蔵穴は直径35cmで深さ41cmであった。

遺物 貯蔵穴内より須恵器の坏、南壁内側より多くの須恵器の坏や甕が出土した。また覆土中より多くの土師器の甕や須恵器の坏の破片が出土した。

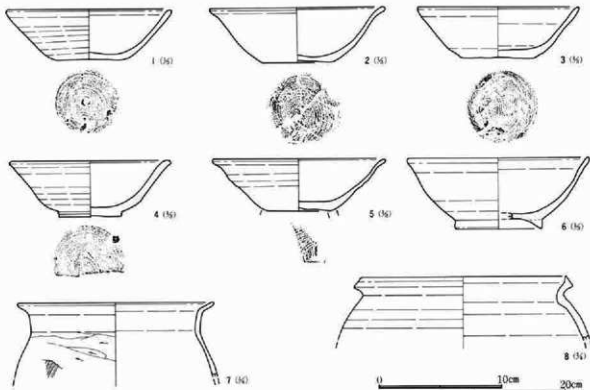
155号住居跡(竈)

位置 住居東壁南寄りに位置し、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。

構造 残りが悪く多くの部分が不明である。石の出土は確認できなかった。多くのロームブロックを用いていた。竈内より多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向50cm、両袖方向50cmである。

遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。



第441図 155号住居跡出土遺物実測図

155号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第441図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色②焼成③残存④胎土⑤備考
155住-1 137	坏 須恵器	4.0 (13.2) 5.4 床面	底径が小さく、器高と口径の大きな坏である。口縁部上端の器内が厚く丸味を帯びる。底部右回転糸状。体部に右回転の多くのロクロ目。	①にふい 褐色②焼成③口縁へ体部1/2・底部完形④1～3mmの砂粒をわずかに含む
155住-2 137	坏 須恵器	4.3 (14.0) 5.8 覆土	底径が小さい。口縁部が大きく外反し、上端が内厚となり丸味を帯びる。	①表面黒色・断面残黄褐色②いよし③体部へ口縁部3/4・底部完形

155号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第441図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
155住-3 137	坏 須恵器 床面	4.1 13.0 5.9	底径が小さい。体部→口縁部が直線的に外傾し、口縁部は外反しない。	①灰白色②還元③ほぼ完形④3mm前後の大きな砂粒をわずかに含む
155住-4 137	坏 須恵器 覆土	4.5 (13.0) (5.0)	底径が小さく、体部→口縁部の器内が厚い。口縁部がわずかに外反する。底部右回転糸切痕、体部に右回転小口目。	①灰黄色②酸化③体部→口縁部1/3・底部2/3④1mm以下の砂粒を少量含む
155住-5 137	埴 須恵器 床面	4.1 (14.0) (6.0)	底部の高台が大部分欠け落ちておりわずかな痕跡を留める。底面の平分の表面が剥離している。	①灰白色②還元③1/2④1mm以下の石英と長石粒を含む⑤底部右回転糸切痕
155住-6 137	埴 須恵器 床面	- (14.6) (6.9)	断面三角形の高台が付く。体部→口縁部が内彎しつつ立ち上がり、口縁上端が肉厚となり丸味を持つ。高台部内側に糸切痕。	①灰色②還元③口縁部1/6・体部1/3・底部1/3④1mm前後の石英と長石粒を多く含む
155住-7 137	甕 土師器 覆土	- (21.0) -	頸部はほぼ直立し、口縁部が大きく外傾する。胴上部右→左横方向へ傾り。	①にいい色②酸化③1/3④1mm以下の小さな砂粒を多く含む
155住-8 137	甕 土師器 床面	- (22.0) -	口縁部が大きく外傾する。口縁部は平で中央部が凹状を呈する。	①外面にいい黄褐色・内面灰白色②酸化③1/4④1mm前後の石英と長石粒を少量含む

156号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版67 遺物写真図版137・138

位置 I区中央部に位置し、155号住居西北1mでH-7・8、I-7・8グリットに属する。

概要 古墳時代の154号住居と北東部分で一部重複している。154号住居の覆土を一部掘り込み竈や住居北東部分の床面や壁面が造られていた。また154号住居は古墳時代の170号住居と重複している。3軒の重なり合う住居であり床面の高さは156号住居が最も高い。新旧関係は154→156→170号住居の順である。残りが悪く北東部分の壁面と床面はほとんど残っていない。北側に2本耕作溝が掘られており南側の一本は床面と壁面を掘り込んでいる。北壁中央部に近い床面上に焼土がまとまって確認された。

構造 床面は多くのルームブロックと少量の暗褐色土で造られていた。竈右側に上面は方形を呈し底部中央部で円形を呈する貯蔵穴が検出された。貯蔵穴の西と北側に直線的にルームを盛り上げた低い周堤帯が造られていた。床面上に柱穴が4本、壁面の内側に周溝が掘られていた。

規模 東西4.5m、南北4.2mである。壁高は最も残りの良い南壁面で15cmである。貯蔵穴は上面が110×80cmの長方形を呈し、底部中央部は直径40cm深さ85cmであった。周溝は幅23cm深さ12cmであった。柱穴1は直径30cm深さ71cm、柱穴2は直径30cm深さ72cm、柱穴3は直径35cm深さ85cm、柱穴4は直径35cm深さ94cmであった。

遺物 住居の残りが悪いので床面からの遺物の出土は少なかった。竈右側手前に平らな石が7個まとまって出土した。また覆土中より少量の土師器の甕や坏が出土した。

床下 床面中央部に1.9×1.1mの楕円形を呈し、床面からの深さ34cmの床下土坑が検出された。

156号住居跡 (竈)

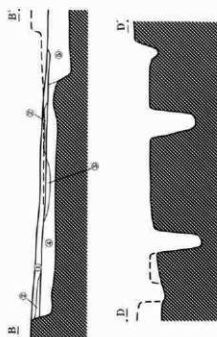
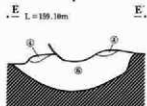
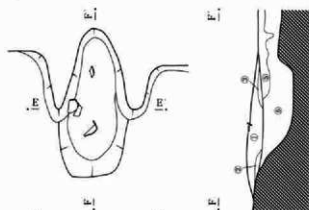
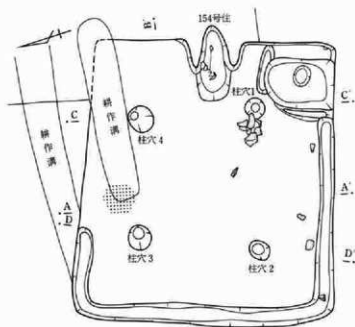
位置 住居東壁中央に位置し、燃焼部は壁面から床面上にかけて造られ、多くの部分は床面上に位置する。

構造 154号住居覆土中に造られていたため、多くの灰褐色粘土とルームブロックを持ち込み造られていた。特に両袖部分から多くの粘土が検出された。竈内より多くの焼土粒子と焼土ブロックが検出された。

規模 煙道方向75cm、両袖方向70cmである。

遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。

第3章 検出された遺構と遺物



土層法記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の炭化物を含む。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑤ 褐色土 多くのローム粒子を含む(154号住居覆土)。

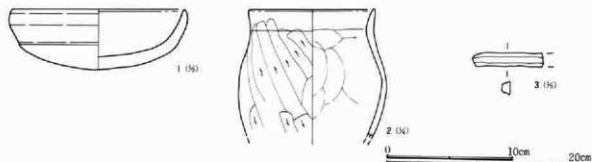
0 2 m

土層法記 (竈)

- ① 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 黄褐色土 多量のローム粒子を含む。
- ③ 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックの層。
- ④ 灰褐色土 多くの灰褐色粘土とローム粒子を含む。
- ⑤ 暗褐色土 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む(154号住居覆土)。

0 1 m

第442図 156号住居跡及び竈実測図



第443図 156号住居跡出土遺物実測図

156号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第443図)

遺物番号 図版番号	形状及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
156住-1 137	坏 土師器	4.8 (14.0) - 覆土	器内が厚く底部中央が平底に近い丸底の坏である。底部と口縁部との境に明瞭な段を、口縁部外側中央部におわずかな段を持つ。底部へた削り、口縁ナズ。	①褐色②酸化③2/3④1mm以下の砂粒を少量含む
156住-2 138	甕 土師器	- (13.5) - カマド内+1	口縁部が短くわずかに外傾する。胴部右下→左上斜方向へた削り。器表面が荒い。	①ふい褐色②酸化③1/3④1~3mmの大きな砂粒を少量含む
156住-3	鉄	長さ5.6 幅1.0 厚さ0.6 重量11.1g	用途及び名称不明。横断面形状が台形を呈する。錆化が進行し、表面が薄く剥離する。覆土中より出土。	

157号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版67・68

遺物写真図版138・139

位置 I区中央部に位置し、156号住居の西北1mでH-8、I-8グリットに属する。

概要 5軒が重複する住居群の中の一軒であり、165号住居が平安時代であり、本住居を含む他の住居は古墳時代である。158号住居により本住居の北側一部分の覆土から床

面にかけて深く掘り込まれている。158号住居は166・167号住居の西側の大部分を床面下まで掘り込んでおり、166号住居は167号住居の南側の覆土を掘り込んで住居が造られている。新旧関係は167→166→157→158→165号住居の順である。

構造 床面はロームを主とした土で造られ、床面中央部が堅く踏み固められていた。貯蔵穴が竈右側に、柱穴がほぼ正方形に配置され4本掘られていた。

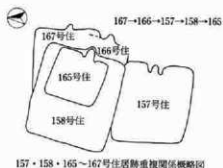
規模 東西5.1m、南北4.2mである。壁高は最も残りの良い南壁面で32cmで、貯蔵穴は直径60cm深さ65cmである。柱穴1は直径40cm深さ74cm、柱穴2は直径40cm深さ71cm、柱穴3は直径45cm深さ71cm、柱穴4は直径45cm深さ69cmであった。

遺物 床面中央部から土師器の甕のほぼ完形品が出土した。また南西部分から多くのこも石が出土し、貯蔵穴穴底部より口縁部を下にした完形の小型甕が出土した。

157号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央部に位置し、燃焼部は壁面から床面上にかけて造られ多くの部分は床面上に位置する。

構造 左右の袖石が埋め込まれた状態で出土し、天井石が焚口手前の床面上に落ちていた。ほかに竈内より細長いこも石状の石が2石出土したが、側壁に石は使われていなかったようである。両袖部分は多くの



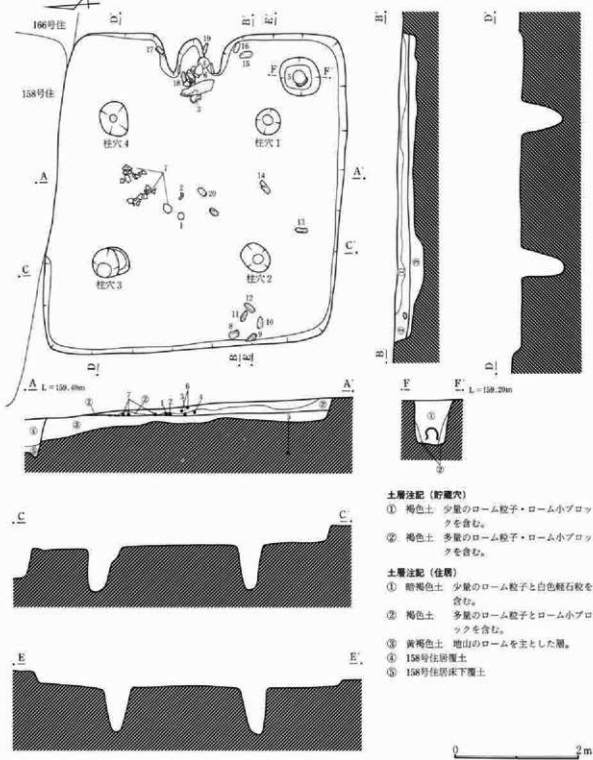
157・158・165～167号住居跡重複関係概略図

第3章 検出された遺構と遺物

ローム粒子とローム小ブロックを用いて造られていた。燃焼部より多くの焼土粒子が出土した。

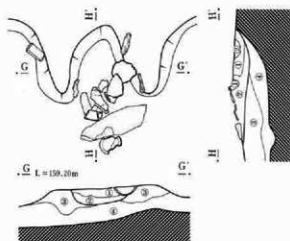
規模 経道方向70cm、両袖方向70cmである。

遺物 燃焼部上面より胴下半の一部を欠くが、ほぼ完形の土師器の壺と胴下半から底部の甕が出土した。また落下した天井石に接してほぼ完形の環が出土した。



第444図 157号住居跡実測図

第3節 古墳・奈良・平安時代の遺構と遺物

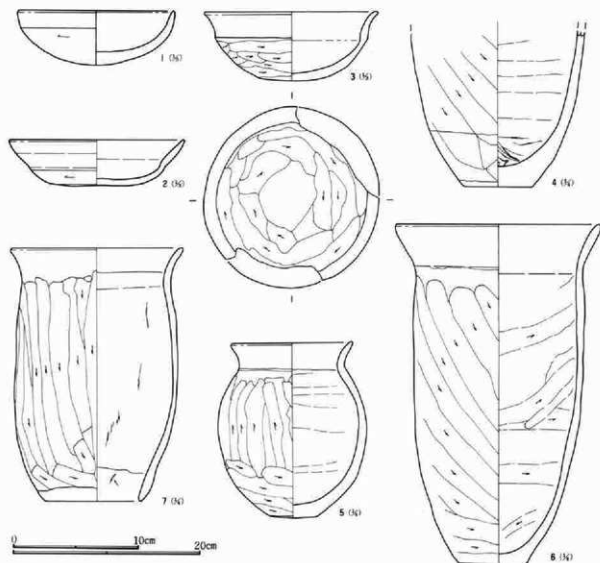


土層注記(層)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くの焼土粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ④ 黄褐色土 ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。



第445図 157号住居跡竪実測図



第446図 157号住居跡出土遺物実測図

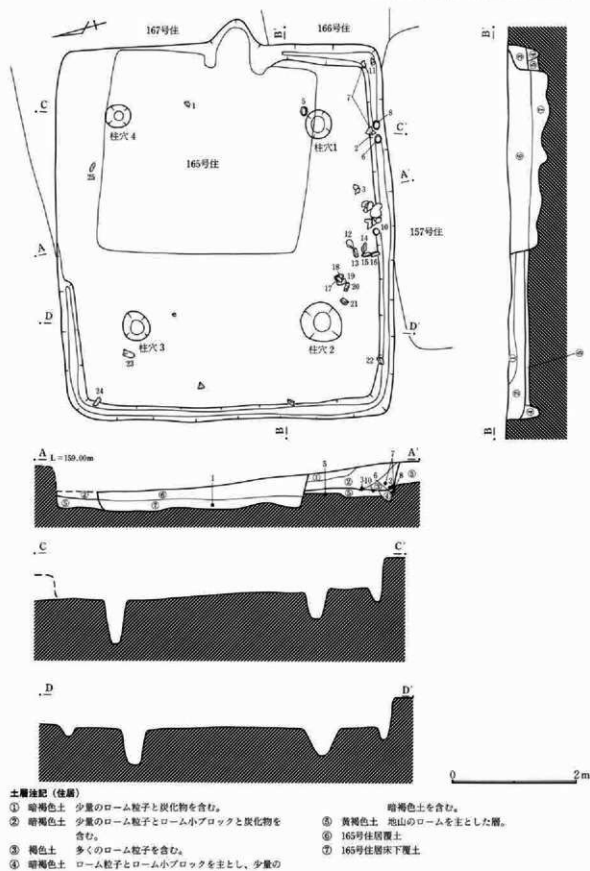
157号住居跡 出土遺物観察表(採回番号第446図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
157住-1 138	坏 土師器	4.3 12.6 - 床面	丸底を呈し底部と口縁部で立ち上りの曲線に変化がない。外面のへう削りと横ナデで2者区別できる。	①褐色②酸化③ほぼ完成④1mm以下の砂粒を多く含む
157住-2	坏 土師器	- (14.0) -	浅い坏であり底部中央が平高に近い。明瞭な線を持つ。口縁部中央外側部分にわずかな線を持つ。	①褐色②酸化③口縁部1/10・底部2/3④1mm以下の砂粒を少量含む
157住-3 138	坏 土師器	5.5 14.0 - 床面	底部が特に深く、口縁部が大きく外反する。底部と口縁部との境の線は明瞭である。底部へう削り、口縁部横ナデ。	①褐色②酸化③口縁部2/3・底部4/5④1mm以下の砂粒を少量含む
157住-4 138	甕 土師器	- - 7.4 カマド内+8	長胴の甕であり、底部の器内が特に厚い。胴部下端横方向へう削り。器表面が荒れている。	①褐色②酸化③胴下半2/3・底部完成④4~6mmの大きな石をわずかに含む
157住-5 138	甕 土師器	18.6 13.0 5.0 貯蔵穴内+10	丸胴の小さな甕であり、底部の器内が厚い。口縁部は外反する。胴部右下→左上縦方向へう削り、口縁部横ナデ、内面ナデ、ていねいなつくりの甕である。	①褐色②酸化③完成④1mm前後の砂粒を多く2~3mmの石英・長石と片岩粒を少量含む
157住-6 138	甕 土師器	36.0 22.0 (7.0) カマド内+13	長胴の甕である。口縁部は長く底部からのなだらかな曲線で立ち上がり器内が厚く外反する。胎土中に砂粒が多くへう削りするため荒れている。	①褐色②酸化③2/3④1~2mmの砂粒を多く、2~3mmの砂粒を少量含む
157住-7 138	甕 土師器	27.9 18.4 10.0 床面	底面の付かない甕であり、甕状を呈する。口縁部はゆるやかに外反しつつ立ち上がる。上→下縦方向へう削り、胴下端内外面横へう削り。	①褐色②酸化③口縁部2/3・胴部4/5④1mm内外の砂粒を多く、2~3mmの砂粒を少量含む
157住-8 139	石	長辺16.8 短辺7.3 厚さ4.5 重量816g	細長く断面菱形を呈する石である。両側面に2~3箇所小さな凹状の欠損部を持つ。	①明緑灰色③完成④網雲母石墨片岩⑤床面
157住-9 139	石	長辺17.6 短辺7.3 厚さ5.2 重量950g	横断面平行四辺形に近い細長い石である。両側面に明瞭な凹状の欠損部は認められない。	①灰黄色③完成④網雲母石墨片岩⑤床面
157住-10 139	石	長辺17.6 短辺7.2 厚さ5.2 重量960g	細長い石であり中央部が肉厚となる。両側面に明瞭な凹状の欠損部は認められない。	①オリーブ灰色③完成④点紋石墨片岩⑤床面
157住-11 139	石	長辺18.0 短辺7.9 厚さ5.6 重量1,090g	細長い石であり中央部が肉厚となる。両側面に明瞭な凹状の欠損部は認められない。	①オリーブ灰色③完成④緑泥片岩⑤床面
157住-12 139	石	長辺14.3 短辺7.3 厚さ5.0 重量1,000g	幅広く少し短い石であり中央部が肉厚となる。両側面にわずかな凹状の欠損部あり。	①明緑灰色③完成④点紋網雲母石墨片岩⑤床面
157住-13 139	石	長辺18.5 短辺7.2 厚さ3.9 重量673g	細長い石であり、側面に中央部が凹状を呈する。	①明緑灰色③完成④網雲母石墨片岩⑤床面
157住-14 139	石	長辺219.5 短辺77.0 厚さ5.3 重量850g	細長い石であり、側面に明瞭な凹状の欠損部は認められない。	①オリーブ灰色③一部欠損④網雲母石墨片岩⑤床面
157住-15 139	石	長辺18.9 短辺8.6 厚さ4.0 重量950g	幅広く扁平な石である。片側の側面に小さな凹状の欠損部あり。他の側面には認められない。	①暗灰黄色③完成④網雲母石墨片岩⑤床面+9
157住-16 139	石	長辺16.4 短辺7.2 厚さ5.9 重量950g	細長く横断面が楕円形を呈する。側面に明瞭な凹状の欠損部は認められない。	①明緑灰色③完成④網雲母石墨片岩⑤床面+7
157住-17 139	石	長辺17.9 短辺7.0 厚さ4.7 重量824g	細長く中央部が肉厚となる。両側面に3~4箇所の凹状の欠損部を持つ。	①オリーブ灰色③完成④網雲母石墨片岩⑤床面+6
157住-18 139	石	長辺19.4 短辺6.6 厚さ5.0 重量1,200g	細長い石であり、両側面とも中央部がわずかに凹状を呈する。	①灰オリーブ色③完成④緑泥片岩⑤カマド内+8
157住-19 139	石	長辺16.7 短辺3.7 厚さ2.6 重量235g	特に細い石である。両側面に2~3箇所小さな凹状の欠損部あり。	①にぶい褐色③完成④網雲母石墨片岩⑤カマド内+14
157住-20 139	石	長辺15.9 短辺7.9 厚さ3.8 重量898g	幅広く扁平な石である。両側面とも凹状の部分は認められない。	①オリーブ灰色③完成④点紋緑泥片岩⑤床面

158号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版68 遺物写真図版139

位置 I区中央部に位置し、156号住居の西北2mでH-8グリットに属する。

概要 5軒が重複する住居群の中の一軒であり、165号住居が平安時代で、本住居を含む他の住居は古墳時代に属する。165号住居により158号住居の東側部分の覆土と一部床面及び竈が掘り抜かれていた。本住居は166・167号住居の西側の大部分を床面下まで掘り込んでおり、166号住居は167号住居の南側の覆土を掘り込んで住居が造られている。また158号住居は157号住居の北側壁面と覆土の一部を掘り込んでいる。新旧関係は167→166→157→158→165号住居の順である。165号住居の竈は158号住居の竈



第447図 158号住居跡実測図

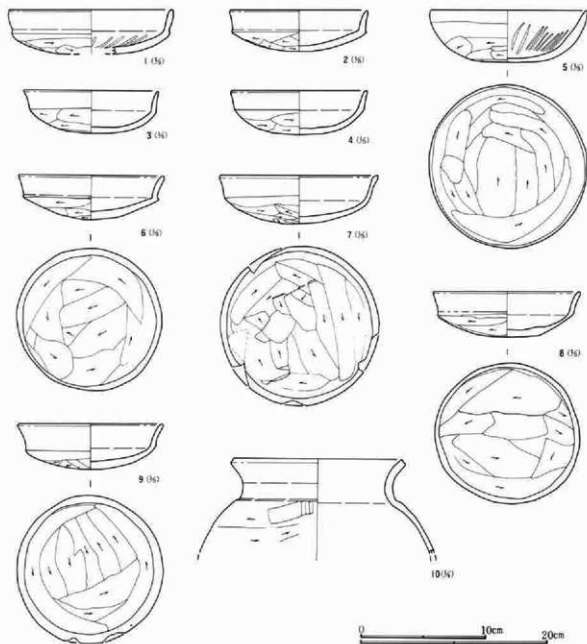
第3章 検出された遺構と遺物

の内側を掘り込んで造られている。そのため158号住居の竈は外側で一部残っているが内側の大部分が削り取られている。

構造 床面はロームを主とした土で造られ、床面中央部が堅く踏み固められていた。柱穴が4本掘られていたが貯蔵穴は掘られていなかった。壁面の内側に周溝が掘られていた。

規模 東西5.90m、南北5.35mである。壁高は最も残りの良い南壁面で48cmであり、周溝は幅20cm深さ18cmであった。柱穴1は直径40cm深さ51cm、柱穴2は直径60cm深さ50cm、柱穴3は直径40cm深さ56cm、柱穴4は直径30cm深さ107cmであった。

遺物 南壁面に近い床面上に完形の土師器の坏や多くのこも石が出土し、覆土中より400片以上の土師器の甕や坏の破片が出土した。



第448図 158号住居跡出土遺物実測図

158号住居跡 出土遺物観察表 (挿入番号第448図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
158住-1 139	坏 土師器	— (13.2) — 床面-8	底部は浅く平底に近い丸底である。底部と口縁部との境に明瞭な線をもち、口縁部は長く中央部の器内が厚い。内面に放射状の彫文。底部ヘラ削り。	①に濃い赤褐色②酸化③1/3④1〜2mmの赤色粒を含む
158住-2 139	坏 土師器	3.3 (11.0) — 床面+9	口径器高とも小さい。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は外反する。底部ヘラ削り。	①に濃い赤褐色②酸化③口縁部1/3・底部2/3④1mm以下の砂粒を多く含む
158住-3 139	坏 土師器	3.4 (10.8) — 床面+3	口径器高とも小さい。口縁部は外反し口唇部の器内が特に薄くなっている。器表面が磨耗している。	①褐色②酸化③口縁部2/3・底部はほぼ完形④密で表面が粉状を呈する
158住-4 139	坏 土師器	2.5 (11.0) — 覆土	口径器高とも小さい。口縁部の横ナデは確である。底部ヘラ削り、内面にていねいなナデ。	①褐色②酸化③2/3④密
158住-5 139	坏 土師器	4.1 12.6 — 床面+15	底部中央は平底を呈し器内が薄い。体部は器内が厚い。口縁部は全く外反しない。内面底部と体部との境に区画線。体部に放射状彫文。体部外面ヘラ削り。	①に濃い褐色②酸化③完形④1mm前後の砂粒を少量含む⑤他の坏とは全く異なる特異な坏である
158住-6 139	坏 土師器	3.5 11.6 — 床面	口径器高とも小さい。特に底部が浅い。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は外反する。底部ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面にていねいなナデ。	①褐色②酸化③完形④密
158住-7 139	坏 土師器	3.8 12.6 — 床面+9	1・2・3・6・8・9の坏と異なり、底部と口縁部との境に明瞭な線は持たない。口縁部は一部外反するが全体にダレた感じを持つ。底部はていねいなヘラ削り。	①浅黄褐色②酸化③ほぼ完形④密
158住-8 139	坏 土師器	3.5 11.7 — 床面+7	口径器高とも小さい。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は外反する。底部ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面にていねいなナデ。	①褐色②酸化③完形④密
158住-9 139	坏 土師器	3.7 11.8 — 覆土	口径器高とも小さい。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。口縁部は大きく外反する。底部ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面にていねいなナデ。	①褐色②酸化③完形④密
158住-10 139	甕 土師器	— (18.0) — 床面	丸胴の甕と思われる。口縁部は大きく外反し口唇部は平で外傾する。胴上部縦方向ヘラ削り。	①に濃い褐色②酸化③小破片④1〜2mmの砂粒を大量に含む粗い胎土
158住-11 139	石	長辺11.9 短辺6.8 厚さ3.8 重量545g	長さが短く中央部が肉厚となる。片側の側面4箇所におよぶ凹状の欠損部あり。	①オリーブ灰色②完形③網罟母石黒片岩④床面+2
158住-12 139	石	長辺13.6 短辺8.2 厚さ3.7 重量692g	幅が広く偏平な石である。側面に2〜3箇所の凹状の欠損部あり。	①オリーブ灰色②完形③点紋網罟母石黒片岩④床面+2
158住-13 139	石	長辺16.4 短辺7.2 厚さ4.0 重量678g	横断面が三角形を呈する。両側面に1〜2箇所の凹状の欠損部あり。	①オリーブ灰色②完形③点紋網罟母石黒片岩④床面+2
158住-14 139	石	長辺14.5 短辺6.6 厚さ4.2 重量521g	横断面が菱形を呈する。1側面に1箇所凹部を持つが、他側面には認められない。	①褐色②完形③網罟母石黒片岩④床面
158住-15 139	石	長辺14.3 短辺7.6 厚さ4.5 重量723g	横断面が菱形に近い。両側面に2〜3箇所凹状の小さな欠損部あり。	①明緑灰色②完形③点紋網罟母石黒片岩④床面
158住-16 139	石	長辺13.4 短辺7.4 厚さ4.3 重量636g	幅が広く、中央部が少し肉厚になる。1側面が凹状を呈し、他の側面に3箇所凹状の小さな欠損部あり。	①緑灰色②完形③点紋網罟母石黒片岩④床面+5
158住-17 139	石	長辺11.7 短辺6.4 厚さ3.8 重量509g	幅が広く、中央部が少し肉厚になる。側面中央部の幅がわずかに狭くなる。	①オリーブ灰色②完形③石黒緑泥片岩④床面+5
158住-18 139	石	長辺14.2 短辺8.3 厚さ3.8 重量814g	横断面はほぼ長方形を呈する。両側面とも中央部が狭くなる。	①オリーブ灰色②完形③石黒緑泥片岩④床面+3
158住-19 139	石	長辺15.2 短辺7.8 厚さ3.7 重量724g	幅広く偏平な石である。両側面とも中央部付近は凹状を呈していない。	①オリーブ灰色②完形③点紋網罟母石黒片岩④床面+6
158住-20 139	石	長辺12.9 短辺5.7 厚さ5.1 重量542g	横断面がほぼ正方形を呈する。こも石としては疑問である。	①オリーブ灰色②完形③網罟母石黒片岩④床面+2
158住-21 139	石	長辺12.5 短辺6.9 厚さ2.8 重量354g	横断面が長方形を呈する。側面に2〜3箇所凹状の小さな欠損部を持つ。	①青灰色③一部欠損④網罟母石黒片岩④床面+6
158住-22 139	石	長辺15.0 短辺8.6 厚さ2.8 重量622g	幅広く偏平な石である。両側面に2〜3箇所凹状の小さな欠損部を持つ。	①明緑灰色②完形③網罟母石黒片岩④床面
158住-23 139	石	長辺16.1 短辺6.4 厚さ4.8 重量819g	縦長く横断面で角の丸い三角形を呈する。片側面が凹状を呈し、他側面に2箇所凹状の小さな欠損部あり。	①オリーブ灰色②完形③緑黒泥片岩④床面
158住-24 139	石	長辺13.9 短辺6.0 厚さ3.9 重量475g	縦長い石である。側面に明瞭な凹部は認められない。	①明緑灰色②完形③点紋網罟母石黒片岩④床面
158住-25 139	石	長辺13.3 短辺7.7 厚さ3.5 重量484g	幅広く偏平な石である。片側面に大きく凹状に欠けた面あり。他側面に明瞭な欠損部なし。	①緑灰色③一部欠損④点紋緑泥片岩④床面-18

159号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版68 遺物写真図版140

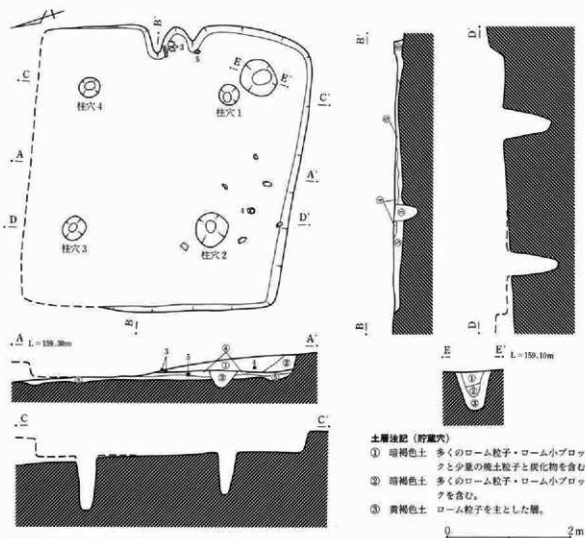
位置 I区中央部に位置し、158号住居の西に接しH-8・9グリットに属する。

概要 耕作により覆土の多くが削り取られており、北側の壁面と床面の一部は残っていないかった。

構造 床面はロームを主とした土で造られ、床面中央部が堅く踏み固められていた。貯蔵穴が竈右側に、柱穴がほぼ正方形に配置され4本掘られていた。

規模 東西4.5m、南北は推定4.4mである。壁高は最も残りの良い南壁面で26cmであり、貯蔵穴は直径55cm深さ65cmである。柱穴1は直径30cm深さ65cm、柱穴2は直径50cm深さ74cm、柱穴3は直径35cm深さ84cm、柱穴4は直径35cm深さ89cmであった。

遺物 壁面と床面の残っている南側から土師器の坏や壺と小さな石が出土し、覆土中から紡錘車の未製品と思われる石片や多くの土師器の壺や坏の破片が出土した。



土層法記 (住居)

- ① 暗褐色土 多量のローム粒子と少量の炭化物を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子を主とした層。
- ③ 暗褐色土 多くのローム小ブロックとローム粒子を含む(床下ビット覆土)。
- ④ 褐色土 ロームとロームブロックを主とし、少量の焼土粒子と炭化物を含む。

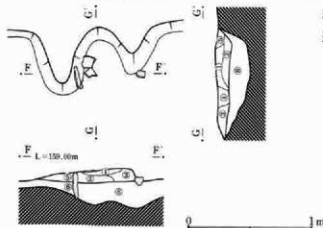
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑥ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む(竈右側の一部)。

第449図 159号住居跡実測図

159号住居跡 (竈)

位置 住居東壁中央部に位置し、燃焼部は壁面から床面上にかけて造られ多くの部分は床面上に位置する。

構造 左袖の袖石が埋め込まれた状態で出土しているため、右袖石や天井石は残っていないが両袖石と天井石を用いて竈が造られたものと思われる。右側袖部分に小さな石が出土しているがこも石状の片岩系の石であり袖石の一部とは思われない。袖部分は多くのローム粒子と灰色粘土を用いて造られていた。燃焼部より多くの焼土粒子と少量の炭化物が出土した。



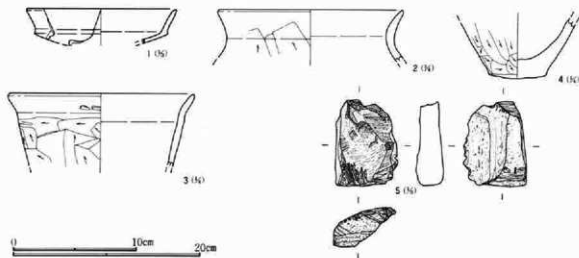
第450図 159号住居跡竈実測図

規模 煙道方向60cm、両袖方向70cmである。

遺物 土師器の甕の破片が少量出土した。

土層注記 (竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 赤褐色土 多くの焼土粒子と少量の炭化物を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ④ 黄褐色土 ロームを主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 灰褐色土 多くのローム粒子と灰色粘土を含む。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第451図 159号住居跡出土遺物実測図

159号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第451図)

遺物番号 図版番号	器形及 び類別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
159住-1	坏 土師器	- (12.0) - 覆土	口径高さとも小さい。底部と口縁部との境に明瞭な線を待つ。口縁部は長くゆるやかに外反する。	①褐色②酸化③小破片④密
159住-2	甕 土師器	- (20.0) - 覆土	器内の厚い丸胴の壁の小破片である。胴~頸部右下→左上方向へ傾り、口縁部傾ナダ。	①褐色②酸化③小破片④1~2mmの砂粒を少量含む
159住-3	甕 土師器	- (21.0) - カマド内+11	小さな破片であるが、甕の口縁部の破片と思われる。胴部右下→左上を主とした傾り。	①褐色②酸化③1/5④1mm前後の砂粒を少量含む
159住-4	甕 土師器	- (6.0) 床面+4	底部の器内が特に厚い。胴部左上→右下方へ傾り、底部傾ナダ。	①にぶい黄褐色②酸化③胴下半1/3・底部はほぼ完形④1~2mmの砂粒を多く含む
159住-5 140	石	長さ6.8 幅5.4 厚さ2.4 重量125g	ノミを用いて上下面の一部を加工しているが、大部分は自然の転石そのままである。紡錘車の未製品か?	①暗緑灰色③完形④磨石片岩⑤深面

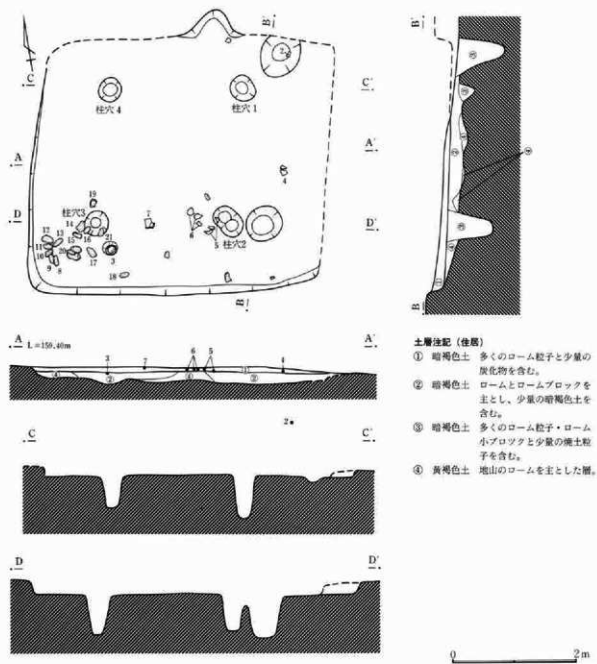
160号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版68・69 遺物写真図版140

位置 I区中央部に位置し、159号住居の西1mでH-9グリットに属する。

概要 耕作により覆土の多くが削り取られており、北側約半分の壁面と床面は残っていないかった。また確認された東側の壁面や床面も明確でなく、住居範囲の確定は明確にできなかった。

構造 床面はロームを主とした土で造られていたが、良好な床面は確認できなかった。貯蔵穴が電右側に掘られ、柱穴がほぼ正方形に配置され4本掘られていた。柱穴2の東側に小穴が検出された。

規模 東西推定4.7m、南北4.1m。壁高は最も残りの良い南壁面で15cmであり、貯蔵穴は直径60cm深さ89cmである。柱穴1は直径40cm深さ89cm、柱穴2は直径40cm深さ68cm、柱穴3は直径40cm深さ74cm、柱穴



第452図 160号住居跡実測図

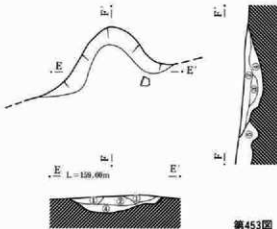
4は直径35cm深さ74cmであった。

遺物 南東部分の床面から多くのこも石が出土し、南側床面上より土師器の小型甕の完形品や甕の破片が出土した。また覆土中より多くの土師器の坏や甕の破片が出土した。

160号住居跡(竈)

位置 住居北壁中央部に位置し、燃焼部は壁面から床面上にかけて造られている。

構造 大部分が削り取られて残っていない。多くのローム粒子やローム小ブロックを用いて造られたものと思われる。燃焼部より少量の焼土粒子と炭化物が出土した。



規模 煙道方向50cm、両袖方向60cmである。

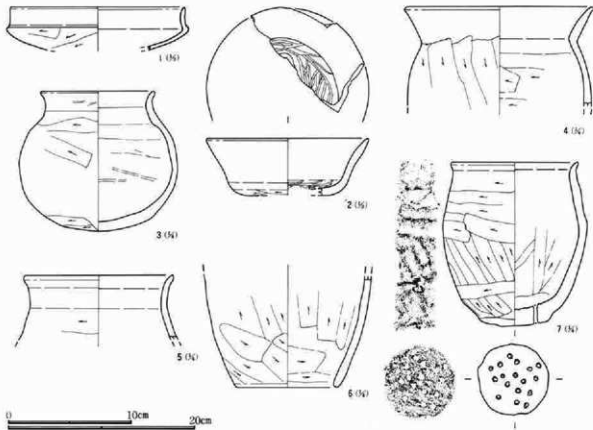
遺物 土師器甕の破片が少量出土した。

土層注記(圖)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ② 黄褐色土 多量のローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子と炭化物を含む。
- ④ 赤褐色土 多くの焼土粒子・焼土ブロックを含む。
- ⑤ 暗褐色土 ローム粒子とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

第453図 160号住居跡遺実測図

0 1 m



第454図 160号住居跡出土遺物実測図

160号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第454図)

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
160住-1 140	坏 土師器	- (14.0) -	底部が浅く口縁部が長い。底部と口縁部との境に明瞭な線を付す。底部へう削り。	①灰赤褐色②酸化③口縁部1/5・底部1/8④床
160住-2	坏 土師器	- (13.0) - 貯蔵穴内+3	底部が浅くほぼ平底に近い。口縁部は特に長くゆるやかに外反する。内面底部に多くの増文。底部外側へう削り。口縁部横ナデ。	①にぶい褐色②酸化③1/5④少量の赤色粒を含む
160住-3 140	小型壺 土師器	14.8 (12.3) -	胴-底部にかけて球形を呈し、口縁部がなだらかに外反する。胴部へう削り。口縁部横ナデ。	①淡黄褐色②酸化③4/5④1~3mmの砂粒を少量含む
160住-4	壺 土師器	- (20.0) -	長胴の壺の破片と思われる。長い口縁部は器内が厚い。胴部上一下段方向へう削り。	①灰褐色②酸化③1/6④1~3mmの砂粒と赤色粒を含む
160住-5 140	壺 土師器	- (16.0) -	口径の小さな壺である。頸部は直立し口縁部が外反する。口縁部まで器内は厚い。	①にぶい黄褐色②酸化③口縁-頸部1/2・胴上部小破片④2~4mmの砂粒を含む
160住-6 140	瓶 土師器	- - (11.0)	大きな瓶の胴下半部である。外面へう削りにより器内が荒い。内面はナデ。	①褐色②酸化③1/2④3~4mmの大きな砂粒を多く含む
160住-7 140	瓶 土師器	17.4 (13.6) 7.4 床面+5	底部を持つ小さな瓶である。底部は器内が厚く18個の小さな穴が外側から穿けられている。口縁部は短くわずかに外反する。胴部へう削り。口縁部横ナデ。内面にていねいなナデ。	①褐色②酸化③口縁1/10・胴部1/2・底部完形④2~4mmの砂粒を少量含む
160住-8 140	石	長辺14.3 短辺9.0 厚さ3.4 重量693g	幅が広く扁平な石である。両側面中央部に3~4個の凹状の欠損部あり。	①灰色③完形④点紋網雲母石墨片岩⑤床面
160住-9 140	石	長辺13.7 短辺7.8 厚さ4.7 重量746g	幅が広く扁平な石である。両側面中央部に3~4個の凹状の欠損部あり。	①緑灰色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面
160住-10	石	長辺13.1 短辺7.0 厚さ3.6 重量581g	幅が広く扁平な石である。両側面中央部に3~4個の凹状の欠損部あり。	①明褐色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面
160住-11 140	石	長辺14.2 短辺7.2 厚さ4.5 重量716g	横断面細長い三角形を呈する。厚い側面の1個所が凹状を呈する。細い側面に凹状の欠損部あり。	①暗緑灰色③完形④緑泥片岩⑤床面
160住-12 140	石	長辺14.5 短辺8.3 厚さ3.5 重量585g	幅が広く扁平な石である。片側の側面が凹状を呈し他の側面中央部付近に凹状の欠損部あり。	①灰オリーブ色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面
160住-13	石	長辺15.8 短辺5.9 厚さ4.6 重量575g	細長い石であり、片側の側面中央部が狭くなる。	①オリーブ灰色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面
160住-14 140	石	長辺14.7 短辺6.7 厚さ3.1 重量451g	扁平な石であり、両側面の中央部にわずかな凹状の欠損部あり。	①黄灰色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面
160住-15 140	石	長辺15.0 短辺8.2 厚さ3.3 重量581g	幅が広く扁平な石である。両側面に凹状の部分あり。	①明褐色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面+5
160住-16 140	石	長辺14.0 短辺8.5 厚さ4.1 重量700g	幅が広く扁平な石である。両側面に2~3個所の凹状の欠損部あり。	①緑灰色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面
160住-17 140	石	長辺17.6 短辺8.5 厚さ4.8 重量1,000g	幅広く長い石である。両側面に明瞭な凹部は認められない。	①オリーブ灰色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面+12
160住-18 140	石	長辺15.8 短辺7.8 厚さ3.7 重量591g	幅が広く扁平な石である。両側面に2~3個所の凹状の欠損部あり。	①緑灰色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面
160住-19 140	石	長辺14.8 短辺7.7 厚さ4.1 重量728g	横断面平行四辺形を呈する。両側面に2~3個所の凹状の欠損部あり。	①明褐色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面+8
160住-20 140	石	長辺14.7 短辺8.0 厚さ3.4 重量596g	幅広く扁平な石である。両側面に2~3個所の凹状の欠損部あり。	①明褐色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面
160住-21 140	石	長辺13.9 短辺6.4 厚さ4.5 重量669g	横断面半球形を呈する。両側面中央部に凹状を呈する。	①オリーブ灰色③完形④網雲母石墨片岩⑤床面

161号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版69 遺物写真図版141

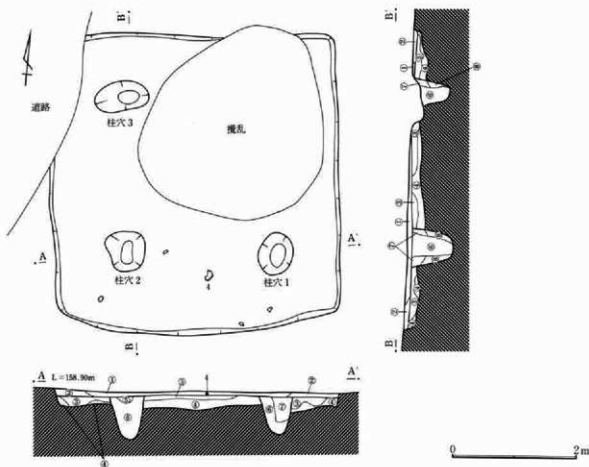
位置 I区中央部北側に位置し、160号住居の北に接しG-9、H-9グリットに属する。

概要 耕作により覆土の多くが削り取られ、北東部分の床面は擾乱土坑により大きく掘り込まれている。竈は造られていたものと思われるが、いずれの壁面にも確認することが出来なかった。

構造 床面はロームを主とした土で造られていたが、良好な床面は確認できなかった。柱穴が擾乱土坑部分以外で3本掘られていた。

規模 東西4.6m、南北4.7m。壁高は最も残りの良い南壁面で14cmである。柱穴1は直径55cm深さ67cm、柱穴2は直径55cm深さ64cm、柱穴3は直径45cm深さ65cmであった。

遺物 南側の床面から少量の土師器の坏や甕の破片が出土した。

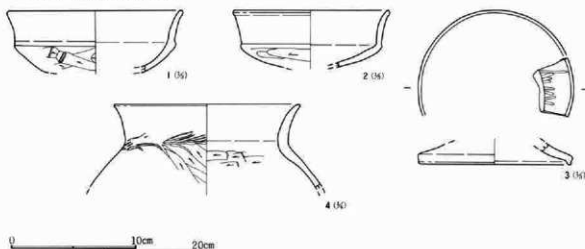


土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子・炭化物・焼土粒子を含む。
 ② 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
 ③ 暗褐色土 多くのローム粒子とロームブロックと少量の炭化物を含む。
 ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
 ⑤ 黒褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
 ⑥ 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とし、少量の焼土粒子を含む。
 ⑦ 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
 ⑧ 黄褐色土 ローム粒子を主とした層。

第455図 161号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第456図 161号住居跡出土遺物実測図

161号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第456図)

遺物番号 図版番号	器形及び 類別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
161住-1	坏 土師器	- (14.0) - 覆土	丸底の底部を持ち、口縁部との境に明瞭な線を持つ。器高が高い。底部へラ削り。口縁部横ナデ。	①橙色②酸化③1/4④密
161住-2	坏 土師器	- (13.0) - 覆土	底部が浅く口縁部は長くなだらかに外反する。底部と口縁部との境に明瞭な線を持つ。底部へラ削り。	①橙色②酸化③1/5④密
161住-3	蓋 土師器	- (12.2) - 覆土	端部に折りのある蓋である。須恵期の蓋と異なり端部の器内が厚い。上面に多くの増文が認められる。	①橙色②酸化③小破片④密
161住-4 141	床 土師器	- (20.0) - 床面	大きな丸形の蓋である。口縁部は器内が厚くなだらかに外反する。肩部右下へ左上方へラ削り。	①に濃い褐色②酸化③口縁部1/3割上部小破片④少量の赤色粒を含む

162号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版69 遺物写真図版141

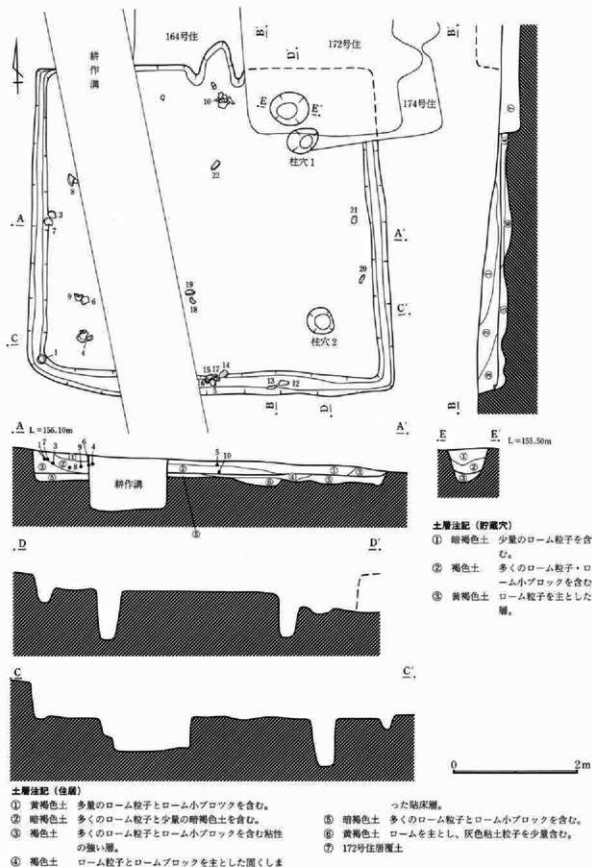
位置 I区東北部に位置し、142号住居の西3mでE-6・7グリットに属する。

概要 4軒重複の住居群の中の1軒である。平安時代の172号住居は同じ時代の174号住居の大部分を床下まで掘り込み、174号住居は古墳時代の162号住居の北東部分を掘り込み、当住居の162号住居は同じ時代の164号住居の南側覆土を掘り込み住居の一部と竈を造っている。新旧関係は164→162→174→172号住居の順である。先行する172・174号住居に削られている北東部分の壁面と床面は残っていなかった。また東と北側の壁面は残りが悪く南と西側の壁面と床面の残りは良好であった。西側を南北に走る耕作溝により大きく掘り込まれていた。

構造 床面はローム粒子とロームブロックと少量の暗褐色土で造られていた。柱穴は耕作溝により削り取られた西側部分では検出されなかったが東側で2本検出され、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。壁面の内側に周溝が掘られていた。

規模 東西5.7m、南北5.2mである。壁高は残りの良い西壁面で54cmで、周溝は幅25cm深さ15cmであった。柱穴1は直径45cm深さ70cm、柱穴2は直径45cm深さ75cmであった。貯蔵穴は直径60cmの円形を呈し、深さ60cmであった。

遺物 西側の壁面に近い床面から完形に近い土師器の坏が多く出土し、南側の周溝上よりこも石が6個出土している。また電手前から土師器嬰が出土した。覆土中より紡錘車が出土した。

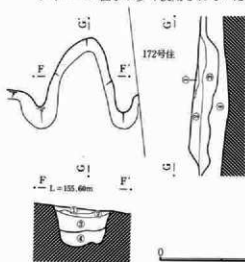


第457図 162号住居跡実測図

162号住居跡（竈）

位置 住居北壁中央部に位置し、燃焼部は壁面から床面にかけて造られていた。

構造 耕作により上部の多くが削り取られており、竈が164号住居覆土中に造られているため良好な状態で検出できなかった。164号住居覆土中に造られているが粘土は持ち込まれていない。ローム小ブロックやローム粒子が多く使用されていた。竈内より多くの焼土粒子が検出された。



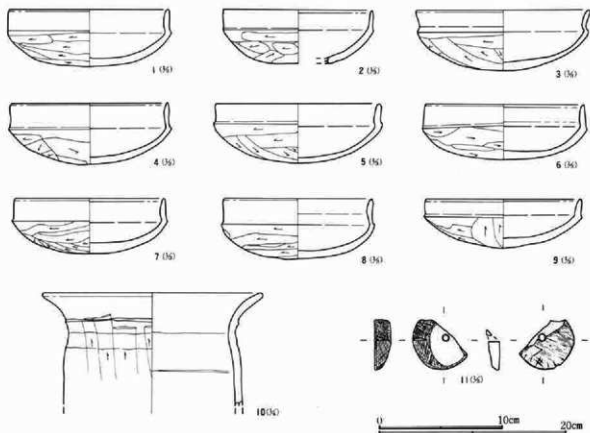
規模 煙道方向71cm、両袖方向75cmである。

遺物 少量の土師器の破片が出土した。

土層法記（竈）

- ① 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 赤褐色土 多量の焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多量のローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ④ 164号住居覆土

第458図 162号住居跡竈実測図



第459図 162号住居跡出土遺物実測図

162号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第459図)

遺物番号 図版番号	形状及び 分類	高さ・口径・直径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部形状等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
162住-1 141	環 土師器	4.5 12.8 - 床面+20	底部中央が平底に近い。底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部はほぼ直立する。	①にぶい赤褐色②酸化③定形④密
162住-2 141	土師器 覆土	4.2 13.0 -	底部中央が平底に近い。底部が深く口縁部は短い。底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。	①表面黒褐色・断面灰白色②還元③1/4④密
162住-3 141	環 土師器	4.8 (14.0) - 床面+18	丸底の底部中央の縁内が厚い。口縁部は一度内側にせり出した後になだらかに外反する。	①にぶい橙色②酸化③口縁部1/3・底部4/5④密
162住-4 141	環 土師器	4.8 (12.6) - 床面+14	底部は丸底を呈し口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾し中央部の縁内が厚い。	①表面黒褐色・断面にぶい赤褐色②酸化③口縁部1/2・底部4/5④密
162住-5 141	環 土師器	4.7 (13.3) - 床面+9	底部と口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は器内が厚く短く直立する。底部へ削り。	①にぶい橙色②酸化③3/4④1~2mmの砂粒を少量含む
162住-6 141	環 土師器	4.4 (12.8) - 床面+12	底部中央が平底に近い。底部と口縁部との境の稜は低い。口縁部は内傾する。底部へ削り。	①橙色②酸化③1/2④密
162住-7 141	環 土師器	4.4 12.0 - 床面+20	丸底の底部中央の縁内が厚い。底部と口縁部との境は明瞭である。口縁部は内傾する。底部へ削り。	①にぶい橙色②酸化③1/2④密
162住-8 141	環 土師器	4.8 (12.0) - 床面+10	丸底の底部を持ち口縁部との境の稜は明瞭である。底部へ削り。口縁部横ナガ。	①褐色②酸化③1/3④密
162住-9 141	環 土師器	3.9 (12.4) - 床面+10	丸底の底部を持ち口縁部との境の稜は明瞭である。口縁部は短くわずかに外傾する。	①褐色②酸化③3/4⑤密
162住-10 141	壺 土師器	- (23.6) - 床面+3	口縁部に最大径を持つ長胴の壺である。口縁部は長くゆるやかに外反する。器表面はへ削りて高い。	①にぶい橙色②酸化③1/2④1~3mmの砂粒を含む粗い胎土
162住-11 141	紡錘車	長さ3.9 幅3.4 厚さ1.4 重量210g	側面に丸味を持つ。中央の孔径は小さい。表面は鉄製の工具によりいねいに削られている。	①緑灰色②定形③破片④滑石片⑤孔径0.5 覆土
162住-12 141	石	長辺14.5 短辺6.3 厚さ3.0 重量420g	細長い石である。両側面の中央部がわずかに凹状を呈する。表面全体が磨耗している。	①緑灰色③定形④網罟母石墨片岩⑤床面
162住-13 141	石	長辺12.4 短辺24.2 厚さ3.9 重量270g	細長い石で横断面が円形に近い。破断面も磨耗しているため、この状態での使用も考えられる。	①緑灰色③砂片④網罟母石墨片岩⑤床面+4
162住-14 141	石	長辺14.7 短辺26.2 厚さ3.7 重量699g	幅広い扁平な石である。両側面中央部に幅3cm・深さ0.5cmの打ち欠かれた面あり。	①暗緑灰色③一部欠損④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+2
162住-15 141	石	長辺14.2 短辺25.9 厚さ3.3 重量378g	細長い石であり、横断面が台形を呈する。両側面がわずかに凸凹状を呈する。	①明褐色③定形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面
162住-16 141	石	長辺14.8 短辺26.6 厚さ2.5 重量419g	扁平な石である。片側の側面に3個所小さな凹部を持つ。表面全体が磨耗している。	①緑灰色③定形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+2
162住-17 141	石	長辺13.1 短辺26.8 厚さ3.4 重量435g	扁平な石である。片側の側面中央部に幅1cm深さ0.3cmのV字状に打ち欠かれた面あり。	①明褐色③定形④砂岩⑤床面+2
162住-18 141	石	長辺12.7 短辺25.7 厚さ3.1 重量306g	細く長さの短い石である。片側の側面中央部に幅4cm・深さ0.1cmの凹状の欠損部あり。	①緑灰色③定形④網罟母石墨片岩⑤床面
162住-19 141	石	長辺14.2 短辺27.6 厚さ3.3 重量461g	幅広く扁平な石である。両側面に2~3個所凹状にわずかに打ち欠かれた部分あり。	①緑灰色③一部欠損④点紋網罟母石墨片岩⑤床面
162住-20 141	石	長辺13.5 短辺26.2 厚さ2.6 重量301g	扁平な石である。片側側面が凹状を呈し、他の凸凹の側面中央部に2個所小さな凹状の欠損部あり。	①緑灰色③定形④網罟母石墨片岩⑤床面
162住-21 141	石	長辺12.2 短辺25.8 厚さ2.6 重量320g	長方形を呈し横断面が台形の扁平な石である。両側面中央部がわずかに凹状を呈する。	①明褐色③定形④網罟母石墨片岩⑤床面
162住-22 141	石	長辺13.7 短辺26.2 厚さ2.9 重量464g	長方形を呈する扁平な石である。両側面中央部に2~3個所の凹状のわずかな欠損部あり。	①オリーブ灰色③定形④緑片岩⑤床面

163号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版69・70 遺物写真図版141・142

位置 I区東北部に位置し、162号住居の西に接してE-7グリットに属する。

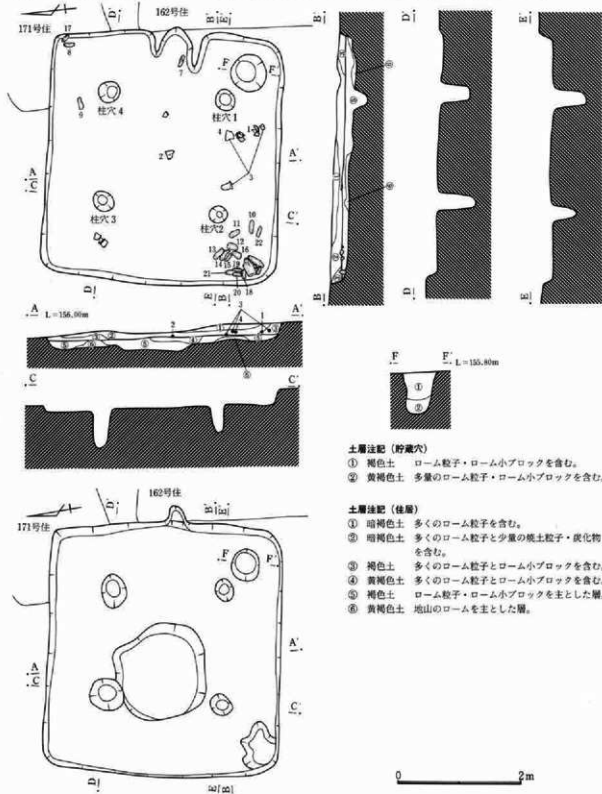
概要 時代の明らかでない171号住居と北東部分で重複している。

構造 床面はローム粒とロームブロックと少量の暗褐色土で造られていた。柱穴は4本正方形に配置され掘られていた。貯蔵穴は竜右側に掘られていた。

規模 東西4.00m、南北3.70mである。壁高は最も残りの良い西壁面で20cmであった。柱穴1は直径35cm深さ40cm、柱穴2は直径30cm深さ40cm、柱穴3は直径30cm深さ67cm、柱穴4は直径35cm深さ58cmである。貯蔵穴は直径55cmの円形を呈し、深さ70cmである。

遺物 南西コーナーの床面上から14個のこも石と少し大きな石が2個まで出土した。また南の壁面に近い床面から土師器の坏や壺が出土した。

床下 床面中央部に直径1.4mのほぼ円形を呈し、床面からの深さ27cmの床下土坑が掘られていた。



土層注記 (貯蔵穴)

- ① 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- ② 黄褐色土 多量のローム粒子・ローム小ブロックを含む。

土層注記 (柱層)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子と少量の炭土粒子・炭化物を含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ④ 黄褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ⑤ 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とした層。
- ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。

第460図 163号住居跡実測図及び床下実測図

163号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央部に位置し、両袖部と燃焼部の多くの部分は床面上に造られていた。

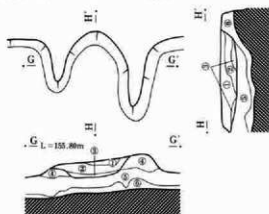
構造 残りは良好でないが袖部はローム小ブロックやローム粒子を多く使用し造られていた。竈内より多くの焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向65cm、両袖方向72cmである。

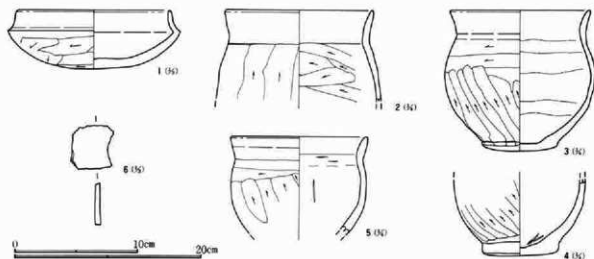
遺物 出土は認められなかった。

土層法記(竈)

- ① 焼凡層
 ② 褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子・炭化物を含む。
 ③ 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
 ④ 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とした層。
 ⑤ 黄褐色土 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒子・炭化物を含む。
 ⑥ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。



第461図 163号住居跡竈実測図



第462図 163号住居跡出土遺物実測図

163号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第462図)

遺物番号 図版番号	器形及び 類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①赤褐色②酸化③2/3④赤⑤非常に くろりがいていねである
163住-1 141	坏 土師器	4.7 12.6 - 床面+3	底部中央が平遠に近い丸底の坏である。底部と口縁部との境は明確である。口縁部は内傾している。底部は幅が狭く短いヘラ削りが数多く認められる。	①赤褐色②酸化③2/3④赤⑤非常にくろりがいていねである
163住-2 141	小型壺 土師器	- (14.5) - 床面	小さな壺であり、口縁部は短くわずかに外傾する。胴部右下→左上斜方向へ削り。口縁部横ナゲ。	①にぶい褐色②酸化③口縁部2/3・胴上部1/5④1~3mmの砂粒を多く含む
163住-3 142	小型壺 土師器	14.9 15.0 8.0 床面+3	小さな壺であり、口縁部は短くわずかに外傾する。胴部右下→左上斜方向へ削り、口縁部横ナゲ、底部と胴下端との境に段を持つ、底部へ削り。	①にぶい褐色②酸化③2/3④1~3mmの砂粒を含む粗い胎土
163住-4 142	壺 土師器	- - 8.1 床面+4	底部の胎内が厚く、胴下端との境に段を持つ。内面底部は平でなくU字状を呈する。外面へ削り。	①にぶい褐色②酸化③胴下半2/3・底部底形④1~3mmの砂粒を含む粗い胎土
163住-5 142	壺 土師器	- (16.0) - 覆土	胴中央部に最大径を持つ長胴壺と思われる。胴部下→上腹方向へ削り、口縁部横ナゲ。	①にぶい褐色②酸化③1/6④1~3mmの砂粒を含む粗い胎土
163住-6	鉄	長さ3.3 幅3.3 厚さ0.4 重量16.6g	小さな鉄の破片であり、名称及び用途不明。	

163号住居跡 出土遺物観察表 (採回番号第462図)

遺物番号 図版番号	図形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部形状等の特色	①色調②地色③残存④胎土⑤備考
163住-7 142	石	長辺18.9 短辺25.9 厚さ2.5 重量407g	偏平で細長い石である。両側面に2〜3個所の小さな凹状の欠損部を持つ。	①緑灰色②完形③残存④緑黒緑片岩⑤カマド内+4
163住-8 142	石	長辺16.8 短辺27.2 厚さ3.3 重量630g	幅と長さとも重量の大きな偏平な石である。片側の側面に凹状を呈し、他の凸状の側面に小さな凹部あり。	①明緑灰色②完形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面-1
163住-9 142	石	長辺15.8 短辺26.1 厚さ3.7 重量532g	細長い石である。両側面に2〜3個所のわずかな凹状の欠損部を持つ。	①緑灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面
163住-10 142	石	長辺17.6 短辺26.6 厚さ5.0 重量950g	厚さと長さとも重量の大きな石である。両側面の中央部が全体的にわずかに凹状を呈する。	①緑灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面
163住-11 142	石	長辺17.7 短辺26.8 厚さ3.5 重量586g	細長く偏平な石である。両側面中央部に2〜3個所の凹状の小さな欠損部を持つ。	①明緑灰色②完形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+2
163住-12 142	石	長辺19.0 短辺29.0 厚さ3.5 重量920g	幅と長さとも重量の大きな偏平な石である。加工痕はないが両側面中央部に小さな凹状の部分あり。	①明緑灰色②完形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+3
163住-13 142	石	長辺18.3 短辺27.2 厚さ4.3 重量910g	幅と長さとも重量の大きな石である。加工痕はないが両側面中央部に小さな凹状の部分多くあり。	①明緑灰色②完形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+1
163住-14 142	石	長辺18.7 短辺27.4 厚さ4.2 重量784g	幅と長さとも重量の大きな偏平な石である。加工痕は認められないが、両側面中央部に小さな凹状部あり。	①明緑灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面+3
163住-15 142	石	長辺16.5 短辺24.7 厚さ3.3 重量399g	細長い石である。片側の側面中央部に幅3.2cm・深さ0.15cmの欠損部あり。	①明緑灰色②一部欠損③網罟母石墨片岩⑤床面+4
163住-16 142	石	長辺15.8 短辺28.1 厚さ3.4 重量850g	幅と長さとも重量の大きな石である。片側の側面に凹状を呈し、凸状の側面に2個所の欠損部を持つ。	①青灰色②完形④点紋網罟母石墨片岩⑤床面+2
163住-17 142	石	長辺14.8 短辺26.5 厚さ5.9 重量900g	厚く横断面が台形を呈する重い石である。側面中央部に2〜3個所の小さな凹状部を持つ。	①明緑灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面-2
163住-18 142	石	長辺15.5 短辺24.7 厚さ3.9 重量463g	細長く横断面が楕円形を呈する。側面中央部に2〜3個所の小さな凹状部を持つ。	①明緑灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面+3
163住-19 142	石	長辺16.6 短辺26.0 厚さ3.4 重量485g	細長い石であり、側面中央部に2〜3個所の小さな凹状部を持つ。	①青灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面+3
163住-20 142	石	長辺15.8 短辺28.6 厚さ3.2 重量713g	幅広く偏平な石である。側面中央部に2〜3個所の小さな凹状部を持つ。	①青灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面+4
163住-21 142	石	長辺16.4 短辺26.9 厚さ3.3 重量541g	横断面が楕円形を呈する。両側面中央部に2〜3個所の小さな凹状部を持つ。	①青灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面+3
163住-22 142	石	長辺22.1 短辺26.2 厚さ3.1 重量632g	細長く偏平な石である。両側面中央部に2〜3個所の小さな凹状部を持つ。	①明緑灰色②完形③網罟母石墨片岩⑤床面+6

164号住居跡 (新段階) (古墳時代) 遺構写真図版70 遺物写真図版142

位置 I区北東部に位置し、144号住居の西1mでE-6・7グリットに属する。

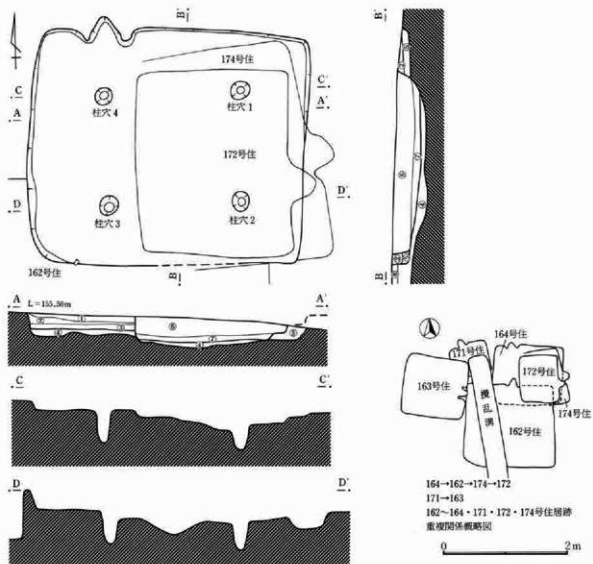
概要 4軒重複の住居群の中の一軒であり、最も古い時期に属する。平安時代の172号住居は同じ時代の174号住居の大部分を床下まで掘り込み、174号住居は古墳時代の162号住居の北東部分を掘り込み、162号住居は同じ時代の164号住居の南側覆土を掘り込み住居の一部と竈が造られている。新旧関係は164→162→174→172号住居の順である。このような重複により当住居の多くの部分が削り取られ、残された部分も耕作により削られており残りの悪い住居であった。本住居は北壁の一部と竈が造り替えられている。

構造 床面はロームとロームブロックと少量の暗褐色土で造られていた。柱穴が4本旧段階と位置を変えて掘られていた。しかし貯蔵穴を別な場所に掘り直すことは行われていない。

規模 東西4.45m、南北3.75mである。壁高は最も残りの良い西壁面で23cmであった。柱穴1は直径30cm深さ68cm、柱穴2は直径31cm深さ62cm、柱穴3は直径30cm深さ32cm、柱穴4は直径28cm深さ54cmである。

遺物 床面や覆土中より少量の土師器の坏や甕の破片が出土した。

床下 床下調査の結果、北側の壁面と竈及び柱が造り替えられていたことがあきらかになった。そのため古い段階の住居を旧段階として別に図面を提示し説明を行う。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 褐色土 ロームとロームブロックを含む(164号住居床下覆土)。
- ④ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑤ 褐色土 ロームとロームブロックを含む(164号・174号住居床下覆土)。
- ⑥ 172号住居覆土
- ⑦ 172号住居床下覆土
- ⑧ 162号住居床下覆土

第463図 164号住居跡実測図(1)

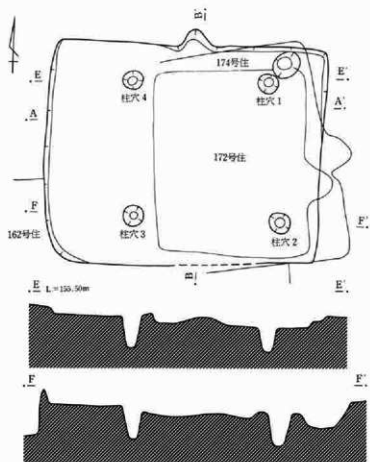
164号住居跡及び竈 (旧段階) (古墳時代) 遺構写真図版70 遺物写真図版142

概要 新段階の北壁約30cm内側の位置に壁面が造られ、竈が北壁中央部に造られていた。竈は掘り方部分が残っていたのみであり、僅かな焼土粒子が検出された。

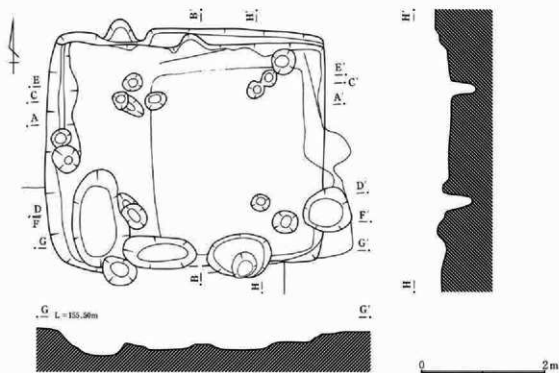
構造 柱穴が4本掘られ、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。この貯蔵穴は新段階の住居においても使われた可能性が考えられる。

規模 東西4.45m、南北3.45mである。壁高は最も残りの良い西壁面で23cmであり、貯蔵穴は直径40cm深さ80cm、柱穴1は直径33cm深さ61cm、柱穴2は直径34cm深さ65cm、柱穴3は直径33cm深さ51cm、柱穴4は直径31cm深さ56cmであった。

遺物 覆土中より少量の土師器の壺が出土した。



第464図 164号住居跡実測図(2)

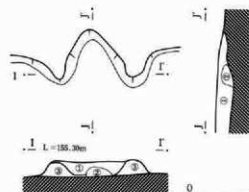


第465図 164号住居跡床下実測図

164号住居跡(竈)

位置 住居北壁西側に位置し、燃焼部は壁面から床面にかけて造られていた。

構造 多くの部分が削り取られて残っていない。ローム小ブロックやローム粒子が多く使用されていた。竈



第466図 164号住居跡竈実測図

内より少量の焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向45cm、両袖方向55cmである。

遺物 少量の土師器の甕の破片が出土した。

土層法相(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
 ② 褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
 ③ 黄褐色土 ロームを主とし、少量の焼土粒子を含む。



第467図 164号住居跡出土遺物実測図

164号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第467図)

遺物番号 図版番号	形状及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④断土⑤備考
164住-1 142	甕 土師器	— (16.0)	胴中央部に最大径を持つ長胴の甕と思われる。外面 胴部は下→上腹方向へ削り、内面無。口縁横溝。	①褐色②酸化③1/6④1~2mmの砂粒 を多く含む⑤胴部の器表面が広い

165号住居跡 (平安時代) 遺構写真図版70・71 遺物写真図版142

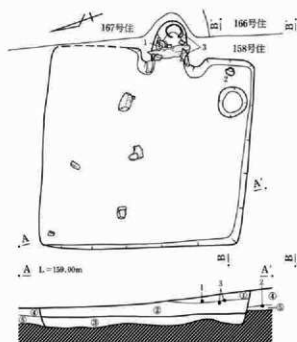
位置 I区中央部に位置し、156号住居の西北2mでH-8グリットに属する。

概要 5軒が重複する住居群の中の一軒であり、他の住居は古墳時代に属し本住居は平安時代に属する。小さな本住居は大きな158号住居の東側部分の覆土と一部床面及び竈を掘り込んで造られている。158号住居は166・167号住居の西側の大部分を床面下まで掘り込んでおり、166号住居は167号住居の南側の覆土を掘り込んで住居が造られている。また158号住居は157号住居の北側壁面と覆土の一部を掘り込んでいる。新旧関係は167→166→157→158→165号住居の順である。

構造 床面は多くのローム粒子とロームブロックにより造られていたが軟質であった。小穴が竈右側に掘られていたが、壁面コーナーでないことや深さが16cmと浅いため貯蔵穴としては疑問である。柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.0m、南北3.3mである。壁高は最も残りの良い南壁面で20cmであった。

遺物 竈右側の壁面寄りに口縁部を少し欠いた須恵器の埴が出土している。また覆土中から土師器の甕と埴の破片が多く出土している。



土層注記 (住居)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子と炭化物を含む。
- ③ 褐色土 ローム粒子・ロームブロックを主とした層。
- ④ 158号住居覆土
- ⑤ 158号住居所下覆土

0 2m

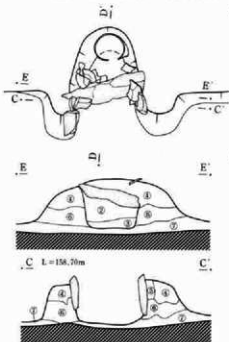
第468図 165号住居跡実測図

165号住居跡 (竈)

位置 住居東壁南寄りに位置し、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。

構造 残りの良好な竈であり構造について多くの事を教えてくれた。竈内より5個の石が出土した。その石は両袖石と焚口部床面ではなく燃焼部に落ち込んでいる天井石および左袖石の上と手前に崩れ落ちたような状態で出土した2個の石である。竈内には多くの黒褐色土やロームと灰黄褐色粘土が用いられている。さらに煙道部に底部を欠き口縁を下にした土師器壺が伏せられたような状態で出土した。この

ような状態から次のような竈造りの手順が考えられる。①158号住居の竈を壊す。②ロームと黒褐色土と灰黄褐色粘土の混入した土を用いて竈の原型を造る。③両



土層注記 (竈)

- ① 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 灰褐色土 多くの粘土粒子・ローム粒子・焼土粒子を含む。
- ③ 灰褐色土 多くの粘土粒子・ローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ④ 灰黄褐色土 多くの灰黄褐色粘土とローム粒子を含む。
- ⑤ 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
- ⑥ 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とし、少量の焼土粒子を含む。
- ⑦ 黄褐色土 畑山のロームを主とした層。

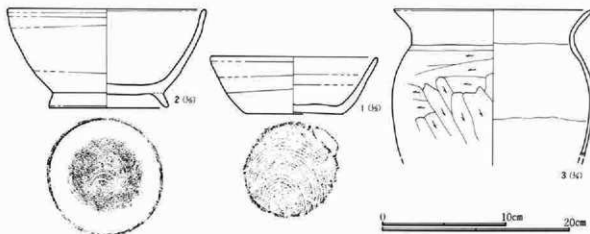
0 1m

第469図 165号住居跡竈実測図

袖石を埋め込み天井石を載せる。④煙道部に、口縁部を下にし底部を穿孔した土師器の甕を複数連結し煙道を作る。⑤焚口や燃焼部等の仕上げを行う。

規模 煙道方向80cm、両袖方向70cmである。

遺物 煙道部に前述の土師器甕が出土し、土師器の環や甕の破片及び須恵器の環のほぼ完形品が出土した。



第470図 165号住居跡出土遺物実測図

165号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第470図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
165住-1 142	環 須恵器	4.5 13.6 7.6 カマド内+32	底部は平。体部へ口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反しない。体部内外面にロクロ痕が見える。器高の比較的高い環である。底部右側糸切痕。	①灰白色②還元③口縁部4/5・底部ほぼ完形④1mm以下の小さな石英と長石粒を多く含む
165住-2 142	埴 須恵器	7.8 16.0 8.8 床面+20	高台は細長く外側に大きく開く。埴部は底部の器内が厚く直線的に外傾する。口縁部は器内が一度薄くなった後に厚くなり丸味を持つ。体部下端へラ削り。	①灰色②還元③ほぼ完形④密⑤高台部内側回転ナデによりいいいに整形
165住-3 142	甕 土師器	- (23.0) - カマド内+32	器内の薄い甕であり、口縁部が長く大きく外反する。肩部右へ左横方向へラ削り、胴部左上へ右下斜へラ。	①褐色②酸化③①/2④密

166号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版71 遺物写真図版142

位置 I区中央部に位置し、156号住居の西北0.5mでH-8グリットに属する。

概要 覆土の大部分が耕作により削られ、また先行する住居により西側の多くの部分が削り取られている極めて残りの悪い住居である。5軒が重複する住居群の中の一軒であり、165号住居が平安時代であり本住居を含む他の住居は古墳時代に属する。本住居は157・158号住居により住居の西側の多くを削り取られ、167号住居南側の覆土を掘り込んで住居が造られている。また158号住居は157号住居の北側壁面と覆土の一部を掘り込んでいる。新旧関係は167→166→157→158→165号住居の順である。

構造 床面はロームブロックを主とした土で造られ、柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西南北とも不明である。壁面はほとんど残っていないが僅かに検出できた南壁面で8cmであった。

遺物 南壁面に近い床面上に土師器の環が出土し、覆土中より少量の土師器の甕や環の破片が出土した。

166号住居跡 (竈)

位置 住居東壁に位置し、燃焼部は壁面から床面上にかけて造られていた。

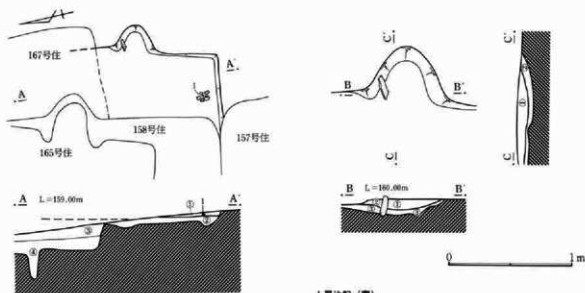
構造 ほとんど壊されて残っていないため、詳しい内容は不明である。左袖部分に袖石とも思われる石が出

第3章 検出された遺構と遺物

土したが、他に石の出土もなく袖石としては疑問が残る。多くのローム小ブロックと燃焼部より少量の焼土粒子が出土した。

規模 多くが壊されているため明らかでないが、現状で煙道方向45cm、両袖方向60cmである。

遺物 出土は認められなかった。



土層注記(層)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- ③ 黄褐色土 ロームを主とした層。

土層注記(住居)

- ① 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 黄褐色土 ロームブロックを主とした層。
- ③ 167号住居覆土
- ④ 167号住居床下覆土

第471図 166号住居跡及び覆土実測図



第472図 166号住居跡出土遺物実測図

166号住居跡 出土遺物観察表(挿図番号第472図)

遺物番号 図表番号	器形及び 種類別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底形等の特徴	①色調②焼化③残存④胎土⑤備考
166住-1 142	坏 土師器	5.2 (13.8) - 床面	底部中央の器内が厚く外側は丸いが内側底部中央は平、底部と口縁部との境の線は鋭角状でない。口縁上部が大きく外反する。	①褐色②焼化③2/3④密
166住-2	坏 土師器	- (14.0) - 覆土	底部が深く丸い。底部と口縁部との境の線は明確で鋭角状を呈する。口縁部は内傾、底部へた削り。	①にふい黄褐色②焼化③1/4④密
166住-3 142	土師 土師器	長さ2.2 径1.4 重量2.5g 覆土	中央部に径1.2mmの穴が穿孔されている。作りはいいいでなく全体がゆがんでいる。	①褐色②焼化③完形④密

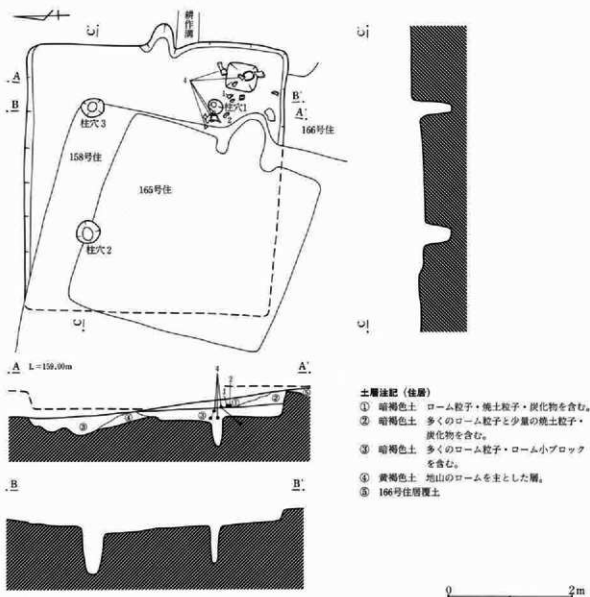
167号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版71 遺物写真図版143

位置 I区中央部に位置し、154号住居の西4mでH-8グリットに属する。

概要 覆土の多くが耕作により削られ、また先行する住居により西側の多くの部分が床下まで削り取られていた残りの悪い住居である。5軒が重複する住居群の中の一軒であり、165号住居が平安時代で本住居を含む他の住居は古墳時代に属する。本住居は158号住居により住居の西側の多くを削り取られ166号住居により南側の覆土を掘り込まれている。また158号住居は157号住居の北側壁面と覆土の一部を掘り込んでいる。新旧関係は167→166→157→158→165号住居の順である。

構造 床面は多くのロームブロックで造られ、柱穴は158・165号住居により床面下を深く掘り込まれた部分以外の3本が検出され、方形を呈する貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西は推定で4.2m、南北は4.2mである。壁面はいずれも残りが悪いが最も残りの良い南壁面で18cm



第473図 167号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

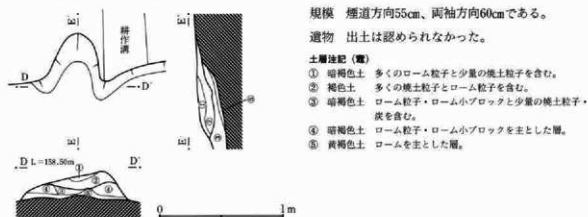
であった。貯蔵穴は床面で40×50cmの方形を呈し底部で15cmの円形となり、深さは74cmである。柱穴1は直径25cm深さ63cm、柱穴2は直径35cm深さ77cm、柱穴3は直径35cm深さ80cmであった。

遺物 貯蔵穴周辺に土師器の環や壺が出土し、覆土中より少量の土師器の壺や環の破片が出土した。

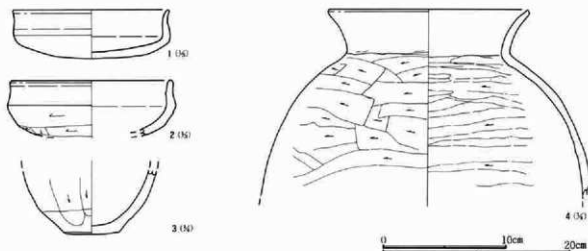
167号住居跡(竈)

位置 住居東壁中央部に位置し、燃焼部は壁面から床面上にかけて造られていた。

構造 残りが悪いので詳しい内容は不明である。両袖部分は多くのローム粒子とローム小ブロックを用いて造られていた。燃焼部より多くの焼土粒子が出土した。



第474図 167号住居跡竈実測図



第475図 167号住居跡出土遺物実測図

167号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第475図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②酸化③残存④粘土⑤備考
167住-1 143	環 土師器	3.9 12.6 - 床面+2	底部が浅く、平底に近い丸底を呈する。底部と口縁との境の線は鋭角でない。底部へラ削り。	①に濃い褐色②酸化③4/5④密
167住-2	環 土師器	4.5 (13.0) - 床面+4	底部は深く、中央部が平底に近い。底部と口縁部との境の線は鋭角でない。底部へラ削り。	①に濃い褐色②酸化③1/4④密
167住-3 143	壺 土師器	- - 6.0	胴中央部に最大径を持つ長胴壺の胴下半〜底部と思われる。器表面全体が荒れている。内面ナデ。	①暗赤褐色②酸化③胴下半2/3・底部完形④1〜5mmの砂粒を含む粗い粘土
167住-4 143	壺 土師器	- (21.6) - 床面	大きな丸胴の壺である。口縁部は長く大きく外反する。口唇部は平である。胴外面へラ削り、内面にていねいなナデ整形。	①褐色②酸化③口縁1/2・胴面1/3④1〜3mmの砂粒を少量含む⑤胴表面は密である

168号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版71

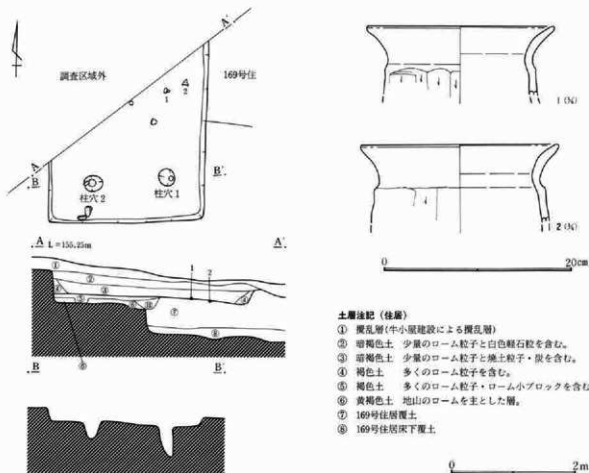
位置 I区東北部に位置し、133号住居の西2.5mでD-6・7グリットに属する。

概要 北側は調査範囲外になるため全体の調査はできなかった。本住居は同じ古墳時代の169号住居と重複し、169号住居西側の覆土上面を掘り込んでいる。

構造 床面は多くのローム粒子とロームブロックで造られ、柱穴は南側で2本検出されたが、他の柱穴や貯蔵穴は調査範囲外に位置するため検出できなかった。

規模 東西2.5m、南北は不明である。壁面は最も残りの良い西壁面で28cmであった。柱穴1は直径25cm深さ57cm、柱穴2は直径25cm深さ29cmであった。

遺物 床面より土師器の坏や壺の破片が少量出土した。覆土中からの出土も少なかった。



第476図 168号住居跡及び出土遺物実測図

168号住居跡 出土遺物観察表 (棒図番号第476図)

遺物番号 図版番号	形状及び 種別	高さ・口径・直径(cm) 出土位置	形状・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④治土⑤備考
168住-1	壺	(20.0)	口縁部に最大径を持つ長胴壺と思われる。口縁部は大きく外反、胴上部→下部方向へ傾り。	①褐色②酸化③L/G④1~3mmの砂粒と片岩を含む粗い胎土
168住-2	土師器	(21.0)	1と同様な壺。胴部の凹部は2の壺が深い。口縁部横ナデ、内面にてぬいナデ。	①褐色②酸化③L/G④1~3mmの砂粒と片岩を含む粗い胎土
	土師器	床面+42		

169号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版71・72 遺物写真図版143

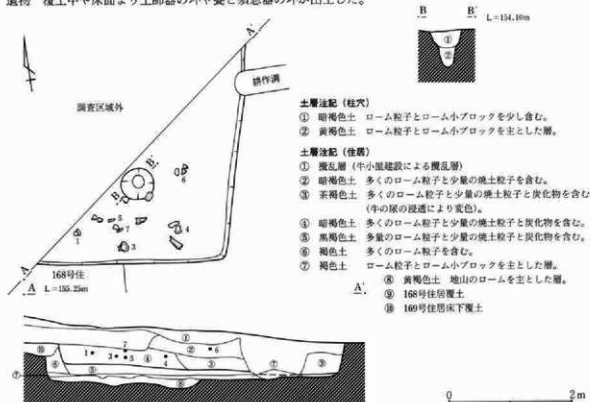
位置 I区東北部に位置し、133号住居の西北1.5mでD-6グリッドに属する。

概要 住居の南東部分以外は調査範囲外になるため、一部分の調査しかできなかった。本住居は同じ古墳時代の168号住居と重複し、168号住居により西側の覆土上面を掘り込まれている。

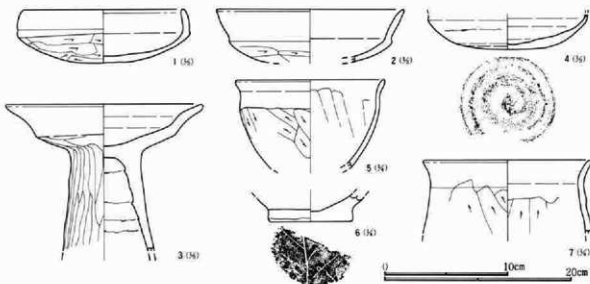
構造 床面は多くのローム粒子とロームブロックで造られ、柱穴と思われる小穴が一つ検出された。

規模 東西南北とも不明である。壁面は残りの良い南壁面で46cmで、柱穴は直径55cm深さ66cmであった。

遺物 覆土中や床面より土師器の坏や甕と須恵器の坏が出土した。



第477図 169号住居跡実測図



第478図 169号住居跡出土遺物実測図

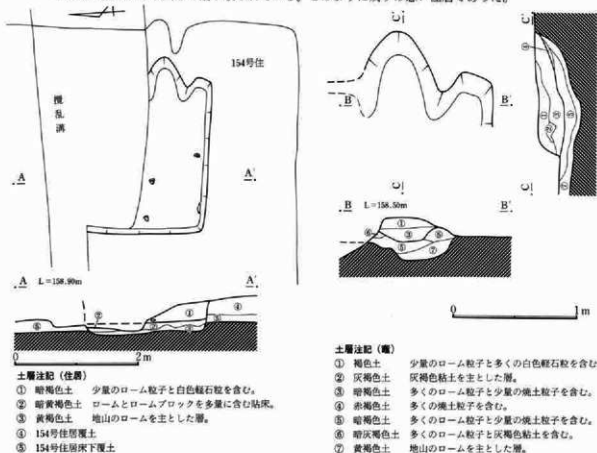
169号住居跡 出土遺物観察表 (挿図番号第478図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
169住-1 143	坏 土師器	4.2 (13.0) - 床面+33	底部が浅く丸い。底部と口縁部との境の壁は明確であるが低い。口縁部内傾。口縁端部まで器内が厚い。底部へラ削り。口縁部横ナゲ、内面ていねいなナゲ。	①におい橙色②酸化③口縁部1/3・底部2/3④赤・雪母を含む
169住-2	坏 土師器	- (15.0) - 覆土	底部が浅く丸い。口縁部は長く大きく外反する。底部へラ削り。口縁部横ナゲ。	①におい橙色②酸化③1/4④赤・雪母を含む
169住-3 143	高坏 土師器	- (15.8) - 床面+30	脚部は太い。坏部は底部が浅く。口縁部が外傾し中央部分からさらに大きく外反する。口縁横ナゲ底部へラ削り。胴部へラナゲ。胴内部に多くの輪痕。	①浅黄褐色②酸化③顯示部分ほぼ球形④密
169住-4	坏 須恵器	- - - 床面+32	丸底を呈し、底部中央右回転へラ削り。口縁部はわずかに残っている大部分欠。内面クロロ灰。底部中央の器内が薄い。	①灰色②還元③3/4④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
169住-5	小型甕 土師器	- (16.0) - 床面+29	小さな甕の小破片である。口縁部は短く外反する。胴部左上→右下斜方向へラ削り。内面ナゲ。器表面が荒れている。	①浅黄褐色②酸化③1/4④1~2mmの砂粒を多く含む
169住-6	甕 土師器	- - - 8.4 床面+39	底部と胴部の器内が厚い。底部に木炭痕。	①浅黄褐色②酸化③1/2④1~2mmの砂粒を多く含む
169住-7	甕 土師器	- (18.0) - 床面+38	口縁部は短く外反する。器内の薄い。小さな甕と思われる。胴部右下→左上斜方向へラ削り。	①浅黄褐色②酸化③口縁部1/4・胴部小破片④1~3mmの砂粒を含む

170号住居跡 (古墳時代) 遺構写真図版72

位置 I区中央部南側に位置し、153号住居の西5mでH-7、I-7グリットに属する。

概要 大きな154号住居の中央部の覆土から床面下までを掘り込んで、小さな170号住居が造られている。北側半分は攪乱溝により大きく削り取られている。このように残りの悪い住居であった。



第479図 170号住居跡及び竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物

構造 床面は地山のロームを主とし、部分的に多くのロームブロックにより造られていた。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西2.45m、南北不明である。壁高は最も残りの良い南壁面で14cmであった。

遺物 床面より磨製石斧が出土し注目される。覆土中から僅かな土師器の坏と甕の破片が出土したのみであり、図化できる遺物はほとんど出土しなかった。

170号住居跡（竈）

位置 住居東壁に位置し、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。

構造 左袖部分は攪乱溝により削り取られている。154号住居覆土中に竈が造られたため、多くの灰褐色粘土とロームブロックを用いて造られていた。粘土を用いた竈のため竈内より多くの焼土が検出された。

規模 煙道方向70cm、両袖方向推定60cmである。 **遺物** 少量の土師器の坏と甕の破片が出土した。



第480図 170号住居跡出土遺物実測図

170号住居跡 出土遺物観察表（押図番号第480図）

遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・ 底部器形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
170住-1	坏 土師器	- (13.0) - 覆土	丸底を呈する坏であり、 口縁部はわずかに外傾する。 明瞭な稜はない。底部へ 削り。口縁部横ナデ。	①にふいば色②酸化③小破片④密

171号住居跡（時代不明） 遺構写真図版72

位置 I区東北部に位置し、164号住居の西に接してE-7グリットに属する。

概要 古墳時代の土師器の坏と甕の小さな破片が4片出土しただけであり、同じ古墳時代の住居と重複しているため遺物の混入も考えられ、時代の確定は出来なかった。覆土の切り合い関係から古墳時代の163号住居により本住居の南西部分を床面まで掘り込まれていると判断して、本住居が古いと判断したが疑問も残る。住居南東部は大きな耕作溝により大きく掘り込まれていた。



構造 床面はローム粒子とロームブロックと少量の暗褐色土で造られていた。柱穴は掘られていなかった。貯蔵穴は確認出来なかった。

規模 東西2.4m、南北は不明である。壁高は最も残りの良い北西壁面で16cmであった。

遺物 土師器の坏と甕の小さな破片4片が出土した。



第481図 171号住居跡実測図

171号住居跡(竈)

位置 住居北壁少し西寄りに位置し、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。

構造 両袖部に細長い石を立てて袖石としていた。また煙道部の覆土中に石が一個出土したが天井石は残っていない。両袖と天井部に石を使いローム小ブロックやローム粒子を多く用いて竈が造られていた

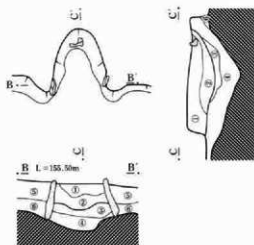
ものと思われる。竈内より少量の焼土粒子が検出された。

規模 煙道方向58cm、両袖方向60cmである。

遺物 全く出土していない。

土層注記(竈)

- ① 暗褐色土 少量のローム小ブロックと焼土粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム小ブロックと多くの焼土粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ④ 暗褐色土 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- ⑥ 黄褐色土 ロームを主とした層。



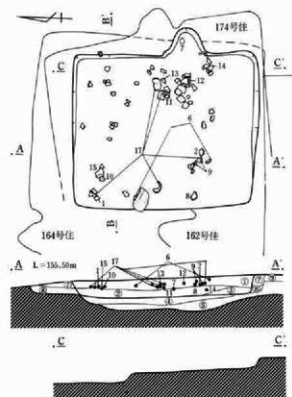
0 1m

第482図 171号住居跡竈実測図

172号住居跡(平安時代) 遺構写真図版72 遺物写真図版143

位置 I区東北部に位置し、144号住居の西1.5mでE-6・7グリットに属する。

概要 4軒重複の住居群の中の一軒である。本住居は同じ時代の174号住居の大部分を床下まで掘り込んで住居が造られている。174号住居は古墳時代の162号住居の北東部分を掘り込み、162号住居は同じ時



土層注記(住居)

- ① 褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子・炭化物を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と多くの焼土粒子を含む。
- ③ 褐色土 多量のローム粒子を含む。
- ④ 黄褐色土 多量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ⑤ 黄褐色土 地山のロームを主とした層。
- ⑥ 164号住居床下覆土
- ⑦ 164号住居床下覆土
- ⑧ 164号・174号住居床下覆土
- ⑨ 162号住居床下覆土

0 2m

第483図 172号住居跡実測図

代の164号住居の南側覆土を掘り込んで住居が造られている。新旧関係は164→162→174→172号住居の順である。先行する3軒の覆土を掘り込んで床面が造られており、壁面や床面の検出は困難であった。

構造 良好な床面の検出は出来なかった。柱穴や貯蔵穴は掘られていなかった。

規模 東西2.45m、南北3.00mである。壁高は最も残りの良い東壁面で11cmであった。

遺物 床面や覆土中より多くの須恵器の坏や埴また土師器の甕や甔等が出土した。

172号住居跡（竈）

位置 住居東壁に位置し、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。

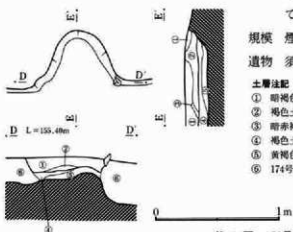
構造 右袖部分に袖石と思われる細長い石が倒れかかった状態で出土した。174号住居覆土中に竈が造られているためローム粒子やロームブロックは多く使用されていたが、粘土を用いた痕跡はなかった。

規模 煙道方向52cm、両袖方向70cmである。

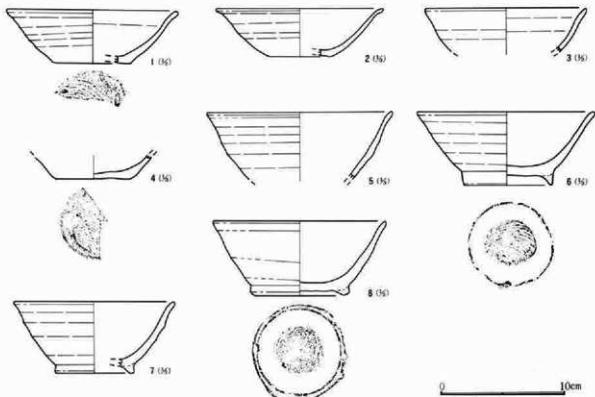
遺物 須恵器の坏の破片が少量出土した。

土層注記（竈）

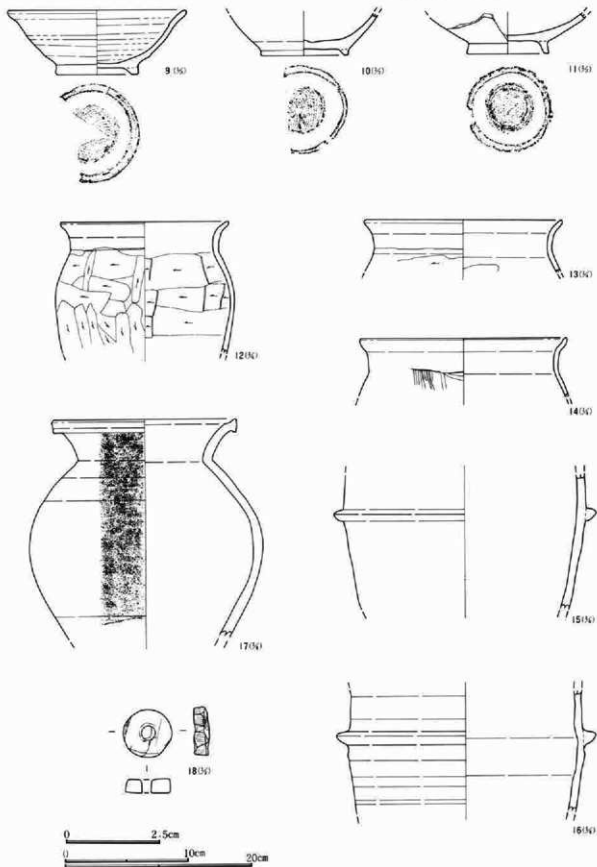
- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- ③ 暗赤褐色土 多量の焼土粒子を含む。
- ④ 褐色土 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒子を含む。
- ⑤ 黄褐色土 ロームを主とした層。
- ⑥ 174号住居覆土



第484図 172号住居跡竈実測図



第485図 172号住居跡出土遺物実測図(1)



第486図 172号住居跡出土遺物実測図(2)

172号住居跡 出土遺物観察表 (押図番号第485・486図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④断面⑤備考
172住-1 143	坏 須恵器	4.2 (13.8) (6.0) 床面+17	底径が小さく口径が大きい。口縁部は上端の器内が厚くなり大きく外反する。底部未切刃。	①灰白色②還元③1/3④3mm内外の片岩を少量含む⑤体部右回転クロコ目
172住-2 143	坏 須恵器	3.8 (13.4) (5.0) 床面+24	底径が小さく口径が大きい。口縁部は上端の器内が厚くなり大きく外反する。底部未切刃。	①灰白色②還元③1/3④1~2mmの砂粒を多く含む⑤内外の片岩を少量含む
172住-3	坏 須恵器	— (13.0) —	口縁部がなだらかに外反する。体部へ口縁部内外面右回転クロコ目。	①灰白色②還元③1/4④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
172住-4	坏 須恵器	— — (6.0)	底径が小さい。底部右回転未切刃。	①灰白色②還元③体部下半1/4・底部1/2④1mm以下の石英と長石粒を含む
172住-5	埴 須恵器	— (15.0) — 覆土	器高が高く埴と思われる。口縁部上端がわずかに外反する。体部へ口縁部右回転クロコ目。	①灰白色②還元③小破片④1~2mmの黒色鉱物を含む
172住-6 143	埴 須恵器	5.8 (14.4) 7.4 床面+26	断面三角形の高台が付く。底部の器内が厚い。体部へ口縁部は直線的に立ち上がり口縁上端がわずかに外反する。高台内側右回転未切刃。	①灰白色②還元③口縁部1/2・底部成形④1~3mmの黒色鉱物を含む⑤全体的にゆがんでいる
172住-7	埴 須恵器	5.7 (13.0) (6.4) カマド内+6	短い高台が付く。埴は深く器高が高い。口縁部はわずかに外反する。体部に右回転クロコ目。	①灰白色②還元③小破片④1mm以下の石英と長石粒を含む
172住-8 143	埴 須恵器	5.9 (14.0) 7.8 床面+24	短い高台が付く。埴は深く器高が高い。口縁部は上端がわずかに外反。高台部内側右回転未切刃。	①表面黒色・断面灰色②還元③口縁部1/4・底部へ高台部成形④黒色鉱物含む
172住-9 143	埴 須恵器	5.1 (14.4) (6.6) 床面+27	太く短い高台が付く。体部へ口縁部は大きく外傾し口縁部が外反する。内側底部に重焼跡あり。高台部内側右回転未切刃。体部内外面右回転クロコ目。	①灰白色②還元③体部下半1/3・底部2/3④1mm以下の石英と長石粒を含む
172住-10	埴 須恵器	— — 7.1 床面+13	高台は雑な作りで貼り付けている。体部は大きく外傾する。高台部内側に右回転未切刃。	①灰白色②還元③体部下半1/3・底部2/3④1~2mmの黒色鉱物を含む
172住-11	埴 須恵器	— — 6.3 床面+25	高台は細長く端部までいねいに整形。体部は大きく外傾する。高台部内側に右回転未切刃。	①にぶい褐色②酸化③体部下半1/5・底部へ高台部成形④黒色鉱物を含む
172住-12 143	埴 土師器	— (18.0) — 床面+12	「コ」の字状口縁の壺である。頸部の上下にヘラによる区画線を持つ。肩部右へ左横方向へ削り。	①にぶい褐色②酸化③1/3④1mm以下の小さな砂粒を多く含む⑤内面硝目目
172住-13	埴 土師器	— (21.0) — 床面+25	「コ」の字状口縁の壺である。肩部右へ左横方向へ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	①にぶい褐色②酸化③小破片④1mm以下の小さな砂粒を多く含む
172住-14	埴 土師器	— (22.0) — 床面+4	「コ」の字状口縁の壺である。頸部上下面に区画線あり。肩部右へ左横方向へ削り。	①褐色②酸化③小破片④密
172住-15 143	瓶 須恵器	— — — 床面+14	大きな瓶の頸部の破片である。罎は断面形が三角で太い。内外面はいねいな横ナデ。	①表面灰色・断面褐色②還元③小破片④1mm前後の石英と長石粒を多く含む
172住-16 143	瓶 須恵器	— — — 覆土	15と同様に罎の頸部の小さな破片である。上端は口唇部に近い。内外面横ナデ。	①表面灰色・断面褐色②還元③小破片④1mm前後の石英と長石粒を多く含む
172住-17 143	埴 須恵器	— 19.8 — 床面+17	口縁部が大きく外反し。口縁部は幅広く上下端部が鋭角である。内外面はいねいなナデ。	①灰白色②還元③口縁部1/4・体部1/3④1mm内外の石英と長石粒を多く含む
172住-18 143	白玉	幅1.3 孔径0.35 厚さ0.4 重量1.1g	扁平である。側面は瓦紙削りにより円形に仕上げている。上下面は磨った状態が再加工なし。	①灰白色②完全③磨石④磨石⑤備考

173号住居跡 (時代不明) 遺構写真図版72

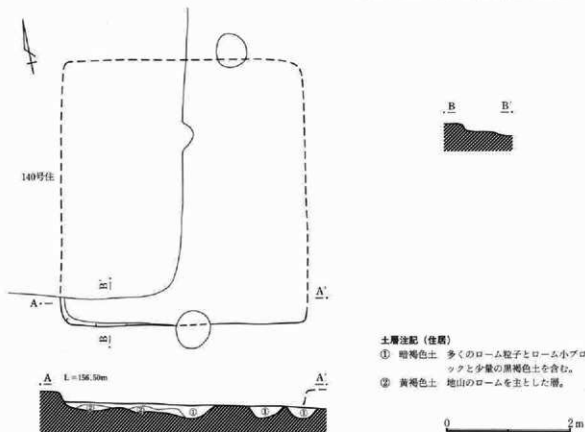
位置 I区東側中央部に位置し、146号住居の東1mでG-5・6グリッドに属する。

概要 古墳時代の140号住居と重複しており、140号住居により西側の多くの部分を床面まで掘り込まれ、住居の一部と竈が造られたものと思われるが、本住居跡は南西コーナーの一部以外の壁面と床面は残っていないため詳しい内容は不明である。竈は確認できなかった。

構造 床面はローム粒子やロームブロックと少量の黒褐色土を用いて造られたが、良好な状態で検出できなかった。柱穴や貯蔵穴は検出できなかった。

規模 東西3.95m、南北は不明である。僅かに確認された南西コーナーで壁高は16cmであった。

遺物 土師器製の口縁部の小破片が2片出土した。



第487図 173号住居跡実測図

174号住居跡 (平安時代)

位置 I区東北部に位置し、144号住居の西1mでE-6・7グリットに属する。

概要 4軒重複の住居群の中の一軒である。平安時代の172号住居は本住居の大部分を床下まで掘り込んで住居が造られている。また本住居は古墳時代の162号住居の北東部分を掘り込み、162号住居は同じ時代の164号住居の南側覆土を掘り込み住居が造られている。新旧関係は164→162→174→172号住居の順である。覆土から床面の多くは172号住居により削り取られ、竈右側部分の壁面と床面はほとんど残っていなかった。さらに検出された北東部分の壁面や床面は164号住居の覆土を掘り込んで造られているため検出は困難であった。

構造 良好な床面の検出はできなかった。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが柱穴は掘られていなかった。

規模 東西不明、南北3.5mである。壁高は最も残りの良い東壁面で12cmであった。貯蔵穴は60×70cmの方形を呈し深さ35cmであった。

遺物 床面や覆土中より土師器の甕と須恵器の環や埴及び鉄鎌が出土した。

174号住居跡(竈)

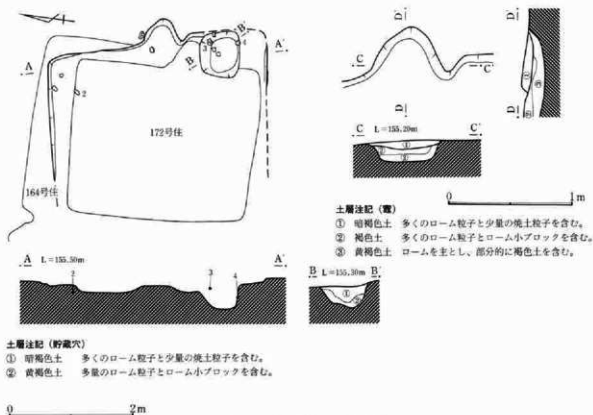
位置 住居東壁に位置し、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。

構造 多くの部分が削り取られて残っていないため多くが不明である。竈内よりロームブロックやローム小粒子と少量の焼土粒子が検出された。

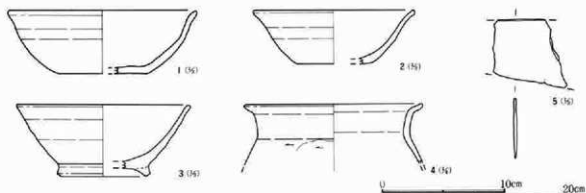
規模 煙道方向45cm、両袖方向65cmである。

遺物 少量の土師器甕の破片が出土した。

第3章 検出された遺構と遺物



第488図 174号住居跡及び竈実測図



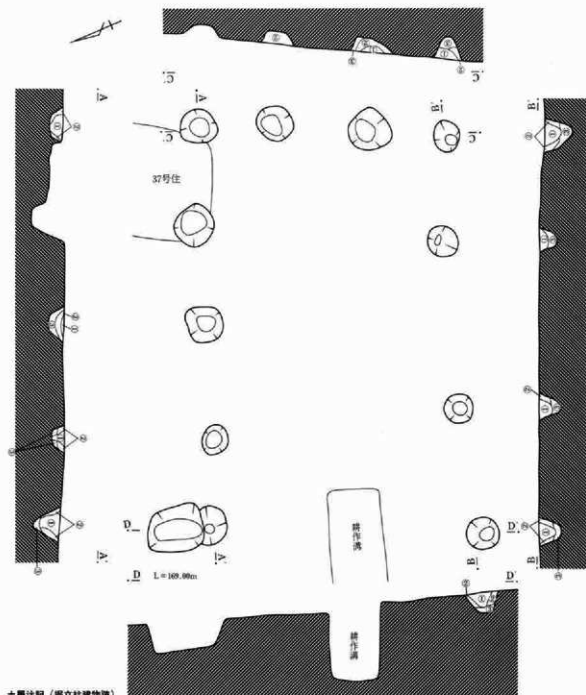
第489図 174号住居跡出土遺物実測図

174号住居跡 出土遺物観察表 (挿入番号第489図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
174住-1	坏 須恵器	5.0 (15.0) (7.0) 覆土	底部の器表面が荒れているため、高台が付いていたか確認できない。糸切痕の有無も不明。	①に多い褐色②酸化③1/5④1mm以下の石英と長石粒を含む
174住-2	坏 須恵器	4.2 (13.0) (6.0) 床面-4	口縁部の器内が少し厚くなり外反する。底部糸切痕。体部外側右辺縁はクロロ目。	①灰白色②還元③口縁部1/3・底部小破片④多くの褐色粒を含む
174住-3	埴 須恵器	5.7 (14.0) (7.4) 床面	深い埴であり、太い高台がなく。高台はていねいに貼付けてある。口縁部はほとんど外反しない。	①灰白色②還元③口縁部1/5・底部1/4④1mm以下の石英と長石粒を含む
174住-4	罌 土師器	- (19.0) - 貯蔵穴内+12	「フ」の字口縁の罌である。口縁部は強く外反する。胴部右→左横方向へテリ有り。	①に多い赤褐色②酸化③小破片④密
174住-5	鉢	長さ5.8 幅5.0 厚さ0.2 重量16.6g	小さな破片であるため、名称や用途は明らかでないが、鉢の中央部の小破片とも考えられる。下部が薄くなっている。覆土中より出土。	

第4節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は検出数が少なく規模も小さい。分布には一定のまとまりがありⅠ区から4棟Ⅱ区から3棟の計7棟が検出された。5棟が古墳時代の竪穴住居跡と重複しており、いずれも掘立柱建物跡が新しいと思われるが時代の確定はできなかった。



土層注記（掘立柱建物跡）

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを主とする。

第490図 1号掘立柱建物跡実測図

1号掘立柱建物跡 遺構写真図版73

位置 II区南端中央部に位置し、37号住居や12号土坑の南に接してN-18・19グリッドに属する。

概要 多くの小穴が検出されている地区で、11本の柱穴からなる3間×4間の掘立柱建物跡と思われる遺構が検出された。柱穴は、北側に5本、南側に4本、東側に4本、西側に2本と不規則ではあるがほぼ長方形に配されている。それぞれの柱穴の深さは一定でないため、掘立柱建物跡として疑問も残るが、1号掘立柱建物跡として取り扱った。北東の2柱穴は古墳時代の37号住居と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。

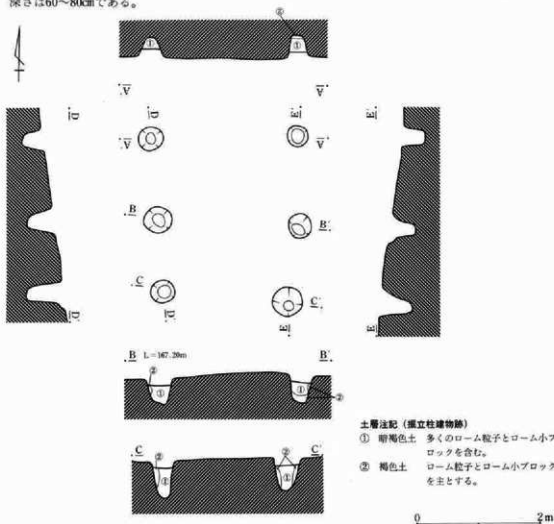
規模 東西方向6.5m、南北方向4.0mで、棟の方向はN-71°-Wであった。柱穴の大きさは直径45~70cmで深さは35~100cmと一定していない。

2号掘立柱建物跡 遺構写真図版73

位置 II区西端中央部に位置し、3号掘立柱建物跡の北に接してM-21グリッドに属する。

概要 多くの小穴が検出されている地区で、ほぼ正方形を呈する6本の柱穴からなる1間×2間の掘立柱建物跡が検出された。規模は小さいがそれぞれの柱穴の大きさや深さはほぼ一定している。

規模 東西方向2.5m、南北方向2.6mで、棟の方向はN-1°-Wであった。柱穴の大きさは直径35~40cmで深さは60~80cmである。



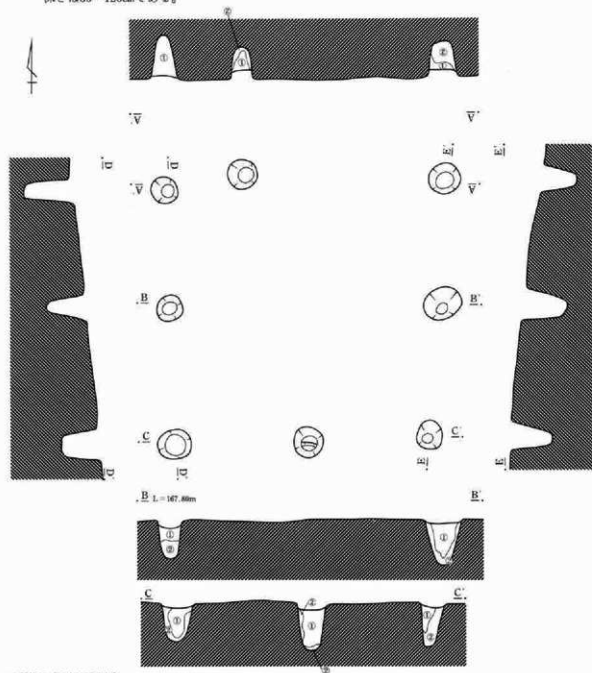
第491図 2号掘立柱建物跡実測図

3号掘立柱建物跡 遺構写真図版73

位置 II区西端中央部に位置し、2号掘立柱建物跡の南に接してM・N-21グリットに属する。

概要 多くの小穴が検出されている地区で、東西方向に少し長い8本の柱穴からなる2間×2間の掘立柱建物跡が検出された。北側中央の柱穴の位置が少しずれている。それぞれの柱穴の大きさはほぼ一定しているが深さは一定していない。

規模 東西方向4.4m、南北方向4.2mで、棟の方向はN-89°-Eであった。柱穴の大きさは直径40~50cmで深さは60~120cmである。



土層法記 (掘立柱建物跡)

- ① 暗褐色土 多くのローム小粒子を含む。
 ② 黄褐色土 ロームを主とした層。

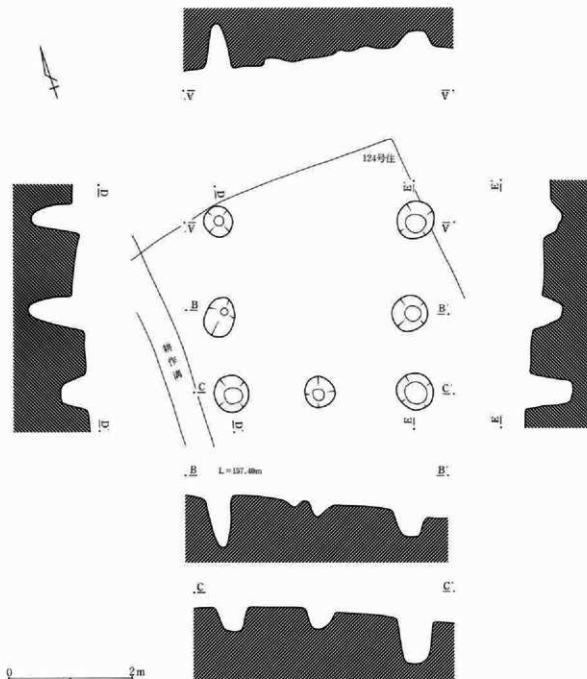
第492図 3号掘立柱建物跡実測図

4号掘立柱建物跡 遺構写真図版73

位置 I区南東部に位置し、I-4・5グリッドに属する。

概要 古墳時代の124号住居と重複して、東西方向に少し長い7本の柱穴からなる2間×2間の掘立柱建物跡が検出された。北側中央の柱穴は検出されなかった。それぞれの柱穴の大きさや深さはほぼ一定している。124号住居の残りは悪く覆土もほとんど残っていないため、掘立柱建物跡との新旧関係は確認できなかった。

規模 東西方向3.1m、南北方向2.7mで、棟の方向はN-70°-Wであった。柱穴の大きさは直径50~60cmで深さは60~100cmである。



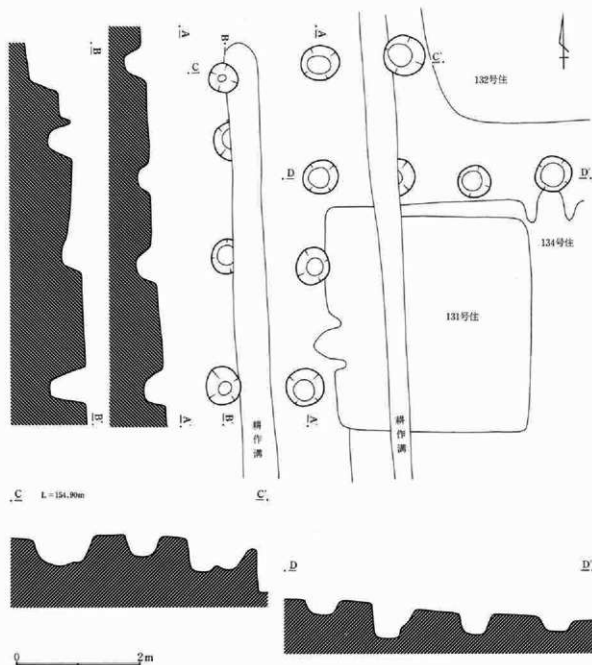
第493図 4号掘立柱建物跡実測図

5号掘立柱建物跡 遺構写真版73

位置 I区東北部に位置し、E-5グリットに属する。

概要 古墳時代の131・132・143・145号住居と重複しており、それらの住居により柱穴の一部又は全部が切り合っているため、確認できない柱穴部分が多く全体は不明である。検出された12本の柱穴から総柱または西と北側に庇をもつ建物の可能性がある。柱穴の大きさはほぼ一定しているが、深さは一定していない。住居と掘立柱建物跡との新旧関係は確認できなかった。

規模 東西方向5.3m、南北方向5.3mで、棟の方向はN-88°-Wであった。柱穴の大きさは直径55~70cmで深さは50~90cmである。



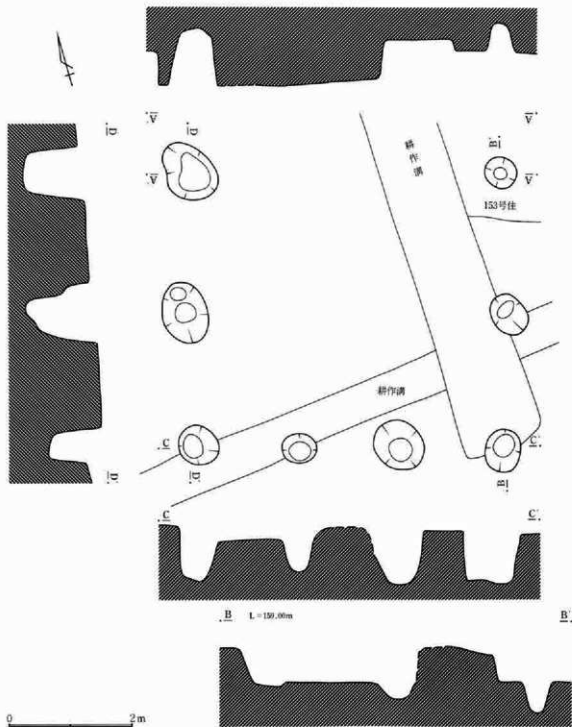
第494図 5号掘立柱建物跡実測図

6号掘立柱建物跡 遺構写真図版73

位置 I区中央部南寄りに位置し、I-6・7グリッドに属する。

概要 古墳時代の153号住居と北東部分で重複している。東西方向に少し長い8本の柱穴からなる2間×3間の掘立柱建物跡である。北側中央の2柱穴は検出できず。柱穴の大きさや深さも一定していない。

規模 東西方向5.1m、南北方向4.4mで、棟の方向はN-90°-Wであった。柱穴の大きさは直径50~70cmで深さは90~120cmである。



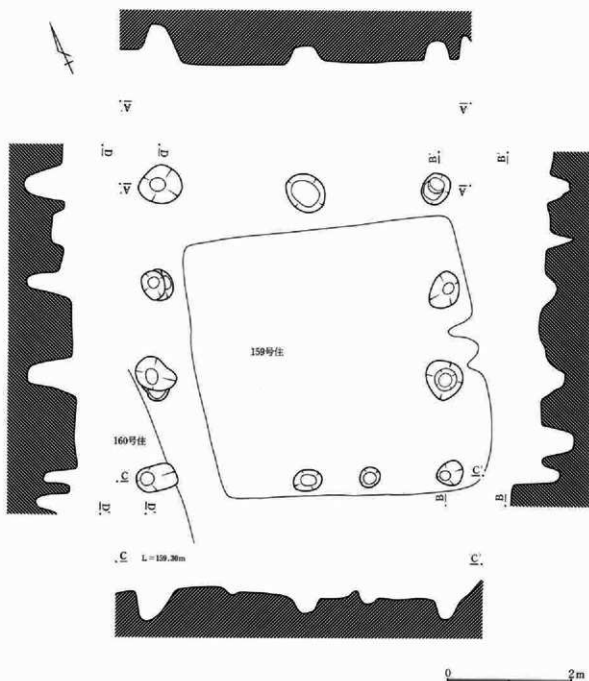
第495図 6号掘立柱建物跡実測図

7号掘立柱建物跡 遺構写真図版73

位置 I区中央部に位置し、H-9グリットに属する。

概要 古墳時代の159号住居と重複している。ほぼ正方形を呈する10本の柱穴からなる2間×3間の掘立柱建物跡である。柱穴の大きさや深さもほぼ一定している。

規模 東西方向2.4m、南北方向2.4mで、棟の方向はN-88°-Wであった。柱穴の大きさは直径40~60cmで深さは80~90cmである。



第496図 7号掘立柱建物跡実測図

第5節 土 坑

調査区のほぼ全域から35基の土坑が検出されている。平面形は大部分が円形又は楕円形を呈し、深さは一定していない。その中で1・2・28～35号土坑は調査区東端の斜面にまともな位置し、大きさや深さがほぼ一定しているため、数基は縄文時代に属する可能性がある。遺物を出土し図示できた土坑として、縄文時代で1・2号土坑、古墳時代で5・14号土坑、奈良時代で21・26号土坑、平安時代で6・8・23号土坑の9基があげられる。しかし1・2・6・26号土坑以外は出土量が少ないため他の時代に属する可能性もある。

3号土坑 遺構写真図版74

Ⅱ区中央部東寄りに位置し、L-17グリットに属する。楕円形を呈し耕作溝により北側の一部が壊されている。規模は長軸1.3m、短軸1m、深さ18cmで、底部は球状を呈する。遺物は出土していない。

4号土坑 遺構写真図版74

Ⅱ区中央部東寄りに位置し、M-17グリットに属する。少し歪んだ楕円形を呈する。規模は長軸2.2m、短軸1.7m、深さ40cmで、底部は平である。遺物は出土していない。

5号土坑

Ⅱ区中央部東寄りに位置し、O-18グリットに属する。長方形を呈し古墳時代の37号住居により南東部分の覆土上面が掘り込まれている。規模は長軸1.53m、短軸1.05m、深さ1.5mと深く、底部は平である。遺物は土師器の甕と環の破片および火打石として用いられると思われる石英の小さな石が出土した。

6号土坑 遺構写真図版74 遺物写真図版144

I区西側中央部に位置し、K-11グリットに属する。楕円形を呈する深い掘り込みと、ほぼ円形を呈する浅い掘り込みの二つから成り立っている。掘られた時期が異なる可能性もあるが、同時期の多くの土器片が出土しているため同一土坑として扱った。規模は長軸2.05m、短軸0.9m、深さ0.85mで底部は少し球状を呈する。遺物は図示した外に多くの土師器の甕と少量の環、須恵器の環や羽釜の破片が出土した。

7号土坑 遺構写真図版74

I区南西部に位置し、K-20グリットに属する。隅丸方形を呈し、深い掘り込みを持つ。底部は長方形を呈しほぼ平である。規模は長軸1.52m、短軸1.4m、深さ0.90mである。遺物は出土していない。

8号土坑 遺構写真図版74 遺物写真図版144

I区南西部に位置し、J-17グリットに属する。ほぼ円形を呈し、浅い掘り込みを持つ。規模は長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.40mである。底部は少し球状を呈する。遺物は図示した外に少量の土師器の甕と環および羽釜の破片が出土した。

9号土坑 遺構写真図版74

I区南西部に位置し、K-12グリットに属する。奈良時代の59号住居と東側でわずかに重複している。重複部分が少ないため新旧関係は確認できなかった。ほぼ円形を呈し、規模は東西が59号住居と重複しているため不明、南北1.05mで深さは0.30mである。底部はほぼ平である。遺物は土師器の環と甕と須恵器の環と甕の破片が総数で7片出土した。

10号土坑 遺構写真図版74

I区南西部に位置し、K-12グリットに属する。古墳時代の61号住居と重複し、住居の東側覆土を一部掘り込んで造られているため、新旧関係は本土坑が新しい。長方形を呈し、規模は長軸2.1m、短軸0.77mで深さは0.80mである。底部はほぼ平である。遺物は出土していない。

11号土坑

Ⅱ区中央部南側に位置し、O-19グリットに属する。1号掘立柱建物跡と平面的に重複している。ほぼ円形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.94m、深さ0.22mである。底部は球状を呈する。遺物は出土していない。

12号土坑 遺構写真図版74

Ⅱ区中央部南側に位置し、O-19グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.62m、深さ0.4mである。底部はU字状を呈する。遺物は土師器の環と甕の小破片が4片出土した。

13号土坑

Ⅱ区西端に位置し、O-22グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸1.73m、短軸1.48m、深さ0.8mである。底部はほぼ平である。遺物は須恵器甕の胴部が一片出土した。

14号土坑 遺構写真図版74

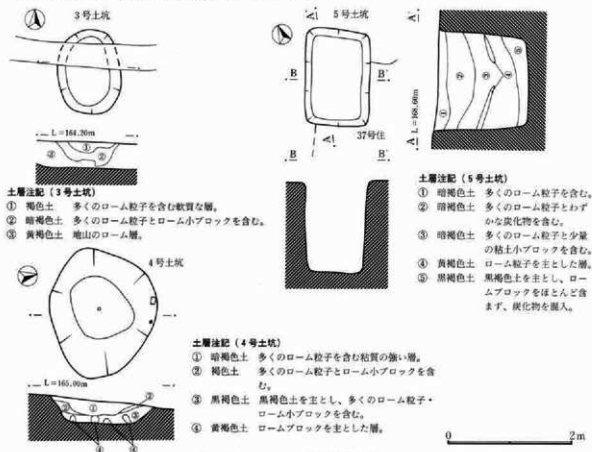
Ⅲ区北側に位置し、L-26グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸1.6m、短軸1.4m、深さ0.2mと浅く、底部はほぼ平である。遺物は土師器の甕の口縁部と胴部の破片が一片出土した。

15号土坑 遺構写真図版74

Ⅲ区北側に位置し、L-26グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸1.7m、短軸1.32m、深さは0.2mと浅く、底部はほぼ平である。遺物は土師器の甕の口縁部と胴部の破片が一片出土した。

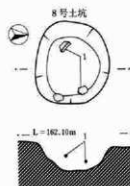
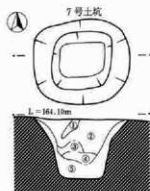
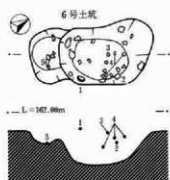
16号土坑 遺構写真図版74

Ⅲ区北側に位置し、L-26グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.76mと深く、底部はU字状を呈する。遺物は出土していない。



第497図 3・4・5号土坑実測図

第3章 検出された遺構と遺物



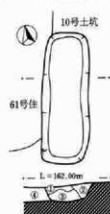
土層注記 (7号土坑)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ② 黒褐色土 黒褐色土を主とし、少量のローム小ブロックを含む。
- ③ 暗褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ④ 暗褐色土 ローム粒子を主とし、少量の暗褐色土を含む。
- ⑤ 褐色土 ローム粒子を主とした層。



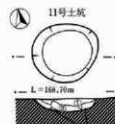
土層注記 (9号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ③ 黄褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを主とした層。



土層注記 (10号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 褐色土 多くのローム粒子を含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子とローム小粒子を含む。
- ④ 61号住居跡覆土



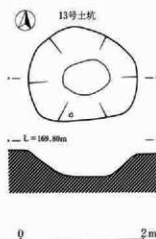
土層注記 (11号土坑)

- ① 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ② 褐色土 多くの黒褐色土中に少量のローム粒子を含む。
- ③ 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。

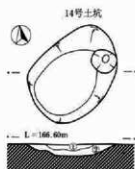


土層注記 (12号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
- ② 褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ③ 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。



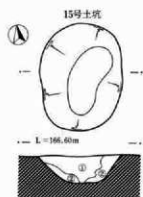
0 2m



土層注記 (14号土坑)

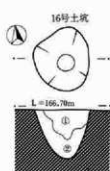
- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 多くのローム粒子を含む。

第498図 6～14号土坑実測図



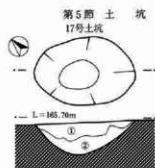
土層注記 (15号土坑)

- ① 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。
② 黄褐色土 ロームを主とした層。



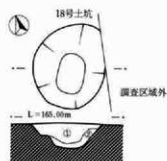
土層注記 (16号土坑)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
② 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とした層。



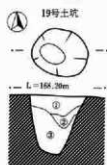
土層注記 (17号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
② 褐色土 多くのローム粒子と少量のローム小ブロックを含む。



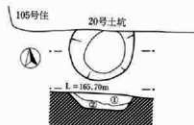
土層注記 (18号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
② 黄褐色土 ローム粒子・ローム小ブロックを主とした層。



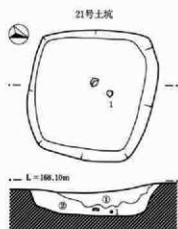
土層注記 (19号土坑)

- ① 黒褐色土 少量のローム粒子を含む。
② 茶褐色土 少量のローム粒子を含む。
③ 茶褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。



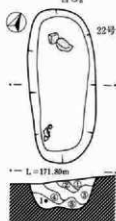
土層注記 (20号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
② 暗褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。



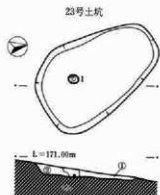
土層注記 (21号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と炭化物を含む。
② 暗褐色土 粘土小ブロックとローム小ブロックが全体に混入した層。



土層注記 (22号土坑)

- ① 茶褐色土 少量のローム粒子を含む。
② 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
③ 茶褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
④ 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
⑤ 茶褐色土 ローム粒子をわずかに含む。



土層注記 (23号土坑)

- ① 茶褐色土 少量のローム粒子を含む。
② 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。

0 2m

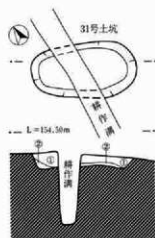
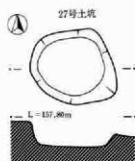
第499図 15～23号土坑実測図

第3章 検出された遺構と遺物



土層法記 (24号土坑)

- ① 茶褐色土 多くの白色軽石粒を含む。
- ② 茶褐色土 多くのローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- ③ 黒褐色土 多くの炭化物を含む。



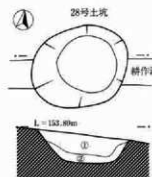
土層法記 (31号土坑)

- ① 暗褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ② 黄褐色土 ロームを主とした層。



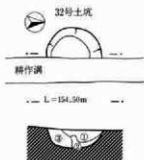
土層法記 (25号土坑)

- ① 茶褐色土 少量の焼土粒子と炭化物を含む。
- ② 暗褐色土 少量の焼土粒子を含む。
- ③ 茶褐色土 多くのローム粒子を含む。



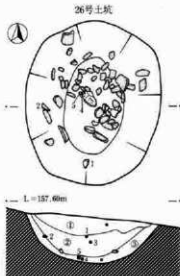
土層法記 (28号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 茶褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。



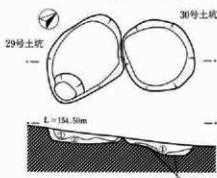
土層法記 (32号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ② 茶褐色土 多くのローム小ブロックを含む。
- ③ 黄褐色土 ロームを主とした層。



土層法記 (26号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。

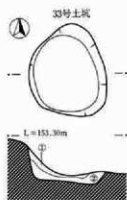


土層法記 (29号・30号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ② 黄褐色土 ロームを主とした層。

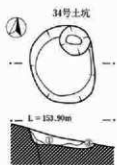
0 2m

第500図 24～32号土坑実測図



土層注記 (33号土坑)

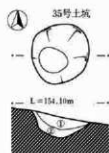
- ① 黒褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
② 黄褐色土 ロームを主とした層。



土層注記 (34号土坑)

- ① 褐色土 多くのローム小ブロックを含む。
② 茶褐色土 多くのローム粒子とローム小ブロックを含む。
③ 黄褐色土 ロームを主とした層。

第5層 土坑



土層注記 (35号土坑)

- ① 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
② 暗黄褐色土 ロームを主とした層。

第501図 33・34・35号土坑実測図

0 2m

17号土坑

Ⅲ区北側に位置し、K-26グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸1.58m、短軸1.1m、深さは0.48mで、底部は球状を呈する。遺物は出土していない。

18号土坑 遺構写真図版74

Ⅲ区北端に位置し、J-26グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸1.36m、短軸1.12m、深さ0.41mで、底部は球状を呈する。遺物は出土していない。

19号土坑 遺構写真図版74

Ⅲ区北端に位置し、N-25グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸0.9m、短軸0.72m、深さ0.95mと深く、底部はU字状を呈する。遺物は出土していない。

20号土坑 遺構写真図版74

Ⅲ区北端に位置し、K-25グリットに属する。古墳時代の105号住居と北側で重複しているが、新旧関係は確認できなかった。ほぼ円形を呈し、規模は北側が不明のため南北方向不明。東西方向1mである。深さは0.25mと浅く、底部は平である。遺物は出土していない。

21号土坑 遺構写真図版74

Ⅳ区中央部北端に位置し、P-38グリットに属する。ほぼ正方形を呈しているが、残りが悪く、本来は円形を呈していたものと思われる。規模は長軸2.00m、短軸2.05mである。深さは0.52mで、底部は平である。遺物は土師器壺の底部と胴部破片が4、須恵器壺の胴部破片が3個出土した。

22号土坑 遺構写真図版75 遺物写真図版144

Ⅳ区中央部東側に位置し、S-33・34グリットに属する。長方形を呈し、規模は長軸2.42m、短軸1.08mである。深さは0.46mで、底部はほぼ平である。遺物は須恵器の埴の完形品が出土している。

23号土坑 遺構写真図版75 遺物写真図版144・149

Ⅳ区中央部東側に位置し、Q-33グリットに属する。楕円形を呈し、規模は長軸2.05m、短軸1.35mである。深さは0.15mで浅く、底部はほぼ平である。完形の灰軸陶器埴と鉄釘が出土。墓塚か？

24号土坑 遺構写真図版75

N区中央部東側に位置し、R-32グリットに属する。隅丸の長方形を呈し、規模は長軸2.05m、短軸0.84mである。深さは0.48mで、底部はほぼ平である。遺物は出土していない。

25号土坑 遺構写真図版75

N区中央部東側に位置し、U-33グリットに属する。ほぼ円形を呈しており、規模は長軸0.76m、短軸0.63mである。深さは0.48mで、底部はほぼ平である。遺物は土師器甕の胴部が4片出土している。

26号土坑 遺構写真図版75 遺物写真図版144

I区南東端部に位置し、J-4グリットに属する。ほぼ円形を呈しており、規模は長軸2.6m、短軸2.14mである。深さは0.74mで、底部は球状を呈する。遺物の出土は多く、図示したほかに土師器甕の破片237個、環の破片68個、須恵器の環と甕の破片14個が出土している。

27号土坑 遺構写真図版75

I区南東端部に位置し、J-4・5グリットに属する。ほぼ円形を呈し、規模は長軸1.32m、短軸1.2mである。深さは0.38mで、底部はほぼ平である。遺物は土師器甕の破片8個、環の破片6個、須恵器の環・蓋・甕の破片7個が出土している。

28号土坑 遺構写真図版75

I区北東部に位置し、D-5グリットに属する。ほぼ円形を呈し、規模は長軸1.55m、短軸1.28mである。深さは0.52mで、底部はほぼ平である。遺物は出土していない。

29号土坑 遺構写真図版75

I区北東部に位置し、F-5グリットに属する。30・31号土坑に近接する。ほぼ円形を呈しており、規模は長軸1.55m、短軸1.08mである。深さは0.52mで、底部はほぼ平である。遺物は出土していない。

30号土坑 遺構写真図版75

I区北東部に位置し、F-5グリットに属する。29・31号土坑に近接する。ほぼ円形を呈しており、規模は長軸1.08m、短軸1.1mである。深さは0.2mで、底部は凹凸状を呈する。遺物は出土していない。

31号土坑 遺構写真図版75

I区北東部に位置し、F-5グリットに属する。29・30号土坑に近接する。細長い楕円形を呈している。規模は長軸1.66m、短軸0.86mである。深さは0.25mで、底部はほぼ平である。遺物は出土していない。

32号土坑 遺構写真図版75

I区北東部に位置し、E-5グリットに属する。東側半分は残っていないが円形を呈していたと思われる。規模は南北方向で0.92m、深さは0.31mで、底部は球状である。遺物は出土していない。

33号土坑 遺構写真図版75

I区東側に位置し、F-4グリットに属する。ほぼ円形を呈している。規模は長軸1.41m、短軸1.22m、深さは0.54mで、底部は平である。遺物は出土していない。東側に近接して五輪塔が出土している。

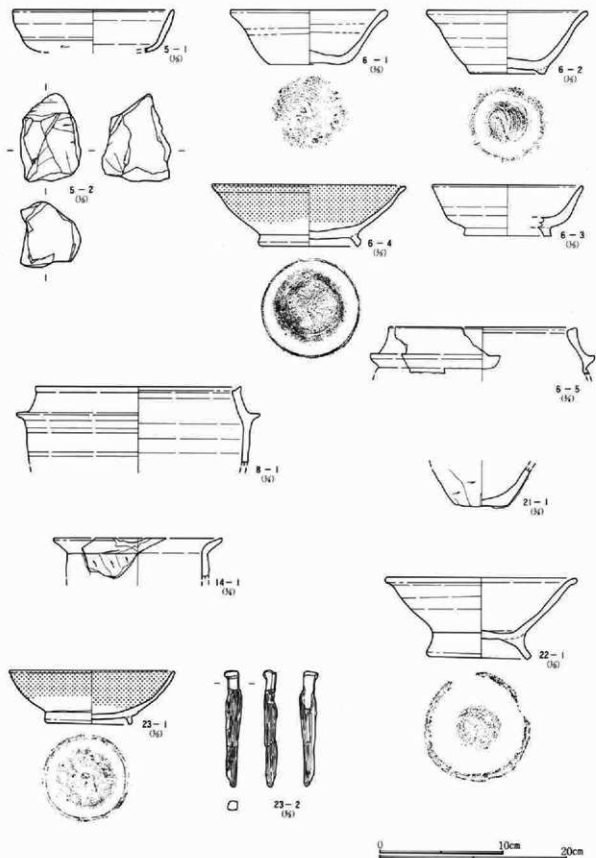
34号土坑 遺構写真図版75

I区東側に位置し、E-4・5グリットに属する。東側の低くなる傾斜面に位置し、ほぼ円形を呈し、規模は長軸1.21m、短軸1.02m、深さ0.21mで、底部は平である。遺物は出土していない。

35号土坑 遺構写真図版75

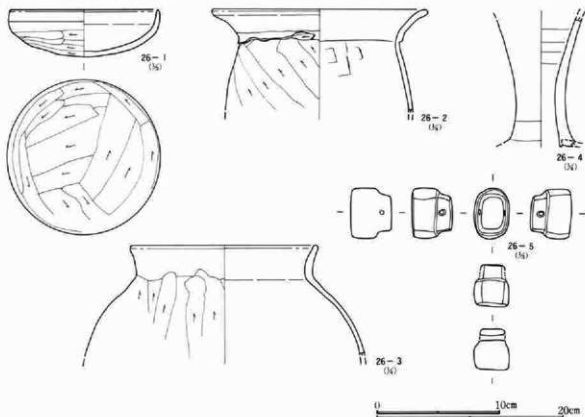
I区東側に位置し、G-4・5グリットに属する。ほぼ円形を呈している。規模は長軸0.98m、短軸0.93m、深さ0.31mで、底部は球状を呈する。遺物は出土していない。

第5期土坑



第502图 5·6·8·14·21·22·23号土坑出土土物实测图

第3章 検出された遺構と遺物



第503図 26号土坑出土遺物実測図

5・6・8・14・21・22号土坑 出土遺物観察表 (押図番号第502図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
5号土坑-1	坏 土師器	— (13.0) —	口縁部中央の器内が厚くなっている。体部と口縁部との境にわずかに稜と思われる部分あり。	①にぶい褐色②酸化③小破片④密
5号土坑-2	石	長さ7.0 幅4.7 厚さ5.2 重量219g	火打石として使用するために遺跡内に持ち込まれたものと思われる。角に使用痕は認められない。	①灰白色③完形④石英片岩
6号土坑-1 144	坏 須恵器	4.3 14.6 6.0	底部中央の器内が厚い。口縁部の器内も厚くわずかに外反する。底部に右回転糸切痕。	①灰白色②還元③完形④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
6号土坑-2 144	坏 須恵器	5.0 13.0 6.7	高台は低く貼り付けもやや雑。口縁部の器内が厚くなりわずかに外反する。高台部内側右回転糸切痕。	①にぶい赤褐色②酸化③口縁部1/4・底部定形④1mm以下の石英と長石粒を含む
6号土坑-3	坏 須恵器	4.0 (12.0) (6.8)	器高の低い坏に高台が付く。高台は坏高部より内側に付きていかに端部を削り下部が凹状を呈する。	①灰白色②還元③小破片④密
6号土坑-4 144	陶 灰釉	4.8 (15.5) 7.8	底部の器内が厚い。口縁部はわずかに外反する。高台は太く高台部内側中央にわずかに糸切痕が残る。	①赤地灰白色・釉透明～淡緑色②還元③口縁1/3・底部1/3④密
6号土坑-5 羽釜	羽釜	— (20.0) —	胴は前面三角形で短い。口縁部は大きく内傾する。口唇部は平で中央部がわずかに凹状を呈する。	①灰色②還元③小破片④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
8号土坑-1 144	羽釜	— (22.0) —	胴は前面三角形で細長い。口縁部は大きく内傾し、口唇部も内傾し中央部が凹状を呈する。	①明黄褐色②酸化③1/2④1mm以下の石英と長石粒を多く含む
14号土坑-1	甗 土師器	— (19.0) —	口唇部に最大径を持つ甗と思われる。口縁部は短く大きく外反する。胴部→上腹方向へつれり。	①褐色②酸化③小破片④2～3mmの砂粒を少量含む
21号土坑-1	甗 土師器	— — 5.4	底部内外面ともほぼ平、底部一割下腹部に使用時に付着した粘土が全面にわたり付着している。	①明赤褐色②酸化③底部完形④1～3mmの砂粒を少量含む
22号土坑-1 144	甗 須恵器	6.4 15.2 7.2	口縁部上端の器内が厚く外反する。高台は太く長く外側へ大きく開く、高台部内側回転ナデ。	①灰白色②還元軟質③ほぼ完形④1～2mmの石英と長石粒および赤色粒を含む

23・26号土坑 出土遺物観察表 (拝図番号第502・503図)

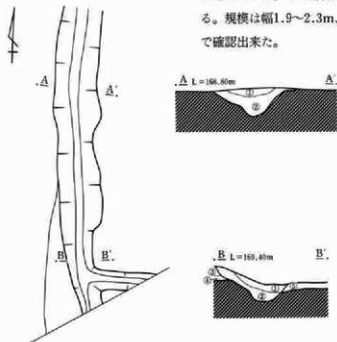
遺物番号 図版番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
23号土坑-1 144	埴 灰釉	4.2 13.2 6.8	浅い埴であり、口縁部は全く外反しない。高台は短く内彎する。刷毛による施釉。炭焼地方の製品か?	①素地灰白色・釉淡緑色②還元③完形④赤⑤6号土坑4より素地が黒色
23号土坑-2 149	釘	長さ9.1 重量10.3g	横断面が方形を呈する。頭部は折り曲げられている。表面に木質部が大量に付着している。	
26号土坑-1 144	坏 土彫器	3.7 12.0 -	丸底を呈する坏である。口縁部は短く直立する。底部へつ削り、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③4/5④密
26号土坑-2 144	塞 土彫器	- 23.2 -	胴部の器内はへつ削りにより削られて薄い。口縁部は削られていなく厚い。胴部右下へつ削り。	①褐色②酸化③口縁部完形・胴上部2/3④1~2mmの砂粒を多く含む
26号土坑-3 144	塞 土彫器	- (20.0) -	丸底を呈する器内の薄い壁である。胴部下へつ削り、口縁部は丸く仕上げている。	①によい黄褐色②酸化③口縁部1/4・胴部小破片④1mm前後の砂粒を多く含む
26号土坑-4 144	長頸色 須恵器	- - -	内面にわずかな輪横痕、胴部と頸部との接合部内側に接合痕、内面胴部と頸部に隆起による自然釉。	①灰白色②還元焼成③胴部破片④1~3mmの石英と長石粒を多く含む
26号土坑-5 144	石	長さ4.0 幅2.8 厚さ3.3 重量50g	上部中央に孔径3mmの穴が穿孔されている。表面全体は荒砥削りにより整形されている。	①灰白色③完形④須成岩

第6節 溝

溝は11条検出されている。水路としての機能のほか、地割りによる区画溝として使用されていたものと思われ、今日の地境と多くの部分で一致している。また近世陶磁器が1・8号溝のほか、遺跡内より多く出土しているため、これらの溝の中には江戸時代までさかのぼるものもあると思われる。

1号溝 遺構写真図版76

Ⅱ区南西部に位置し、N・O・P-19グリットに属する。調査区の南端から地形の傾斜方向と同じ南北方向に掘られており、途中で確認できなくなる。奈良時代の35号住居と重複しており35号住居の東側の大部分を掘り込んでいる。その部分で東西方向に掘られている溝と接続している。規模は幅1.9~2.3m、深さ0.25~0.70mである。長さは16mまで確認出来た。



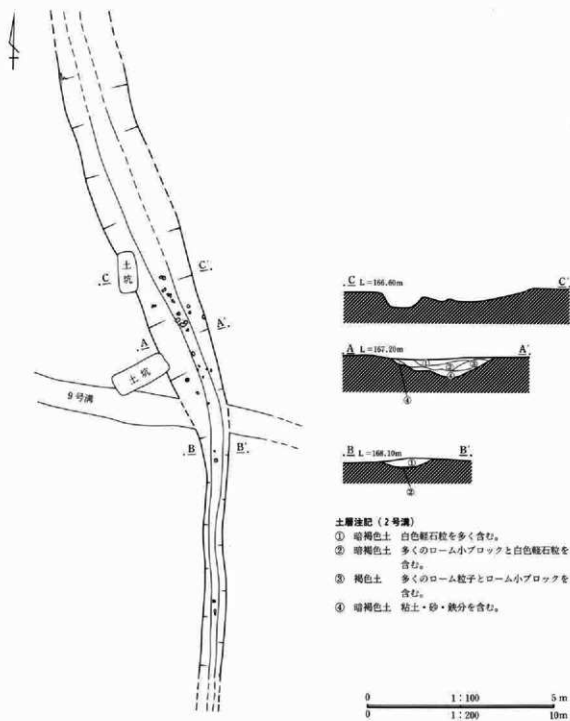
土層注記(1号溝)

- ① 褐色土 多量のローム粒子とA軽石を混入する。
- ② 褐色土 多量のローム粒子と少量のA軽石を混入する。
- ③ 暗褐色土 少量のローム粒子と多くの白色軽石粒を含む。
- ④ 暗褐色土 少量のローム粒子と白色軽石粒を含む。
- ⑤ 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。

第504図 1号溝実測図

2号溝 遺構写真図版76 遺物写真図版144・146

II区西側に位置し、L・M-23、M・N・O-22グリッドに属する。地形の傾斜方向と同じ南北方向に掘られており、南北の両側が途中で確認できなくなる。9号溝と重複しているが9号溝の掘り込みが浅く、新旧関係は明確に出来なかったが、同時期のものと思われる。西側の一部を通称イモ穴と呼ばれる土坑より2ヵ所掘り込まれている。規模は幅0.3~3.5m、深さ0.25~0.5mである。長さは35mまで確認出来た。



第505図 2号溝実測図

3号溝 遺構写真図版76

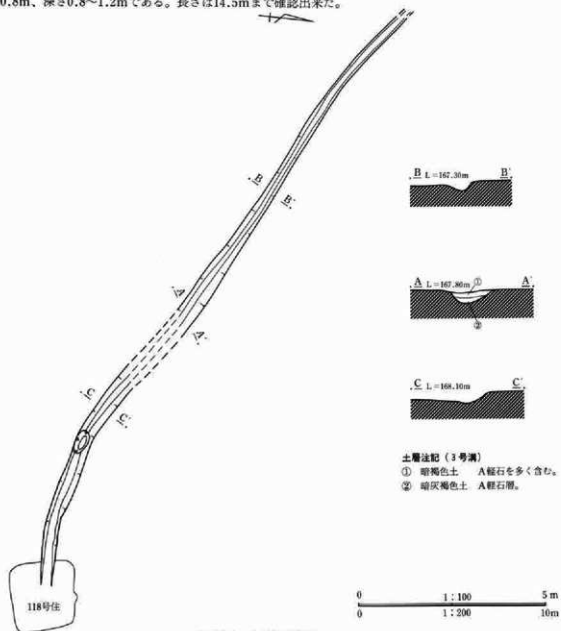
Ⅳ区西北部に位置し、P-39、Q-36・37・38グリットに属する。地形の傾斜方向にそって南東方向から北西方向に掘られており、北西側は調査範囲外まで延びて、南東側は118号住居の覆土を掘り込んだところで確認出来なくなっている。規模は幅0.55~1.05m、深さ0.22~0.3mである。長さは35.65mまで確認出来た。

4号溝 遺構写真図版76

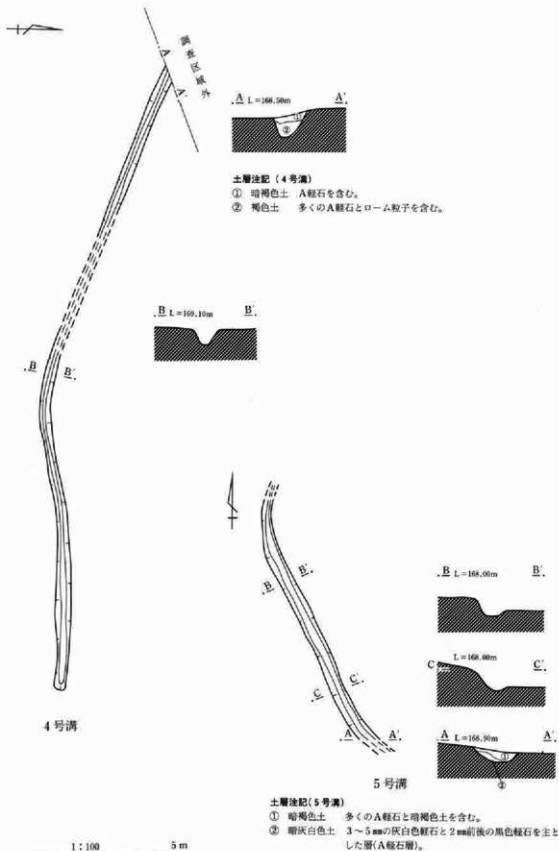
Ⅳ区北部に位置し、O-37・38、P-35・36・37グリットに属する。今日まで使われていた道路に沿ってほぼ東西方向に掘られており、西側は道路とともに調査範囲外まで延びて東側は水道の本管部分まで延びて確認出来なくなった。規模は幅0.6~0.8m、深さ0.45~0.6mである。長さは34.35mまで確認出来た。

5号溝 遺構写真図版76

Ⅳ区東北部に位置し、O・P-33グリットに属する。北東部の低くなる傾斜面に掘られていた。規模は幅0.5~0.8m、深さ0.8~1.2mである。長さは14.5mまで確認出来た。



第506図 3号溝実測図



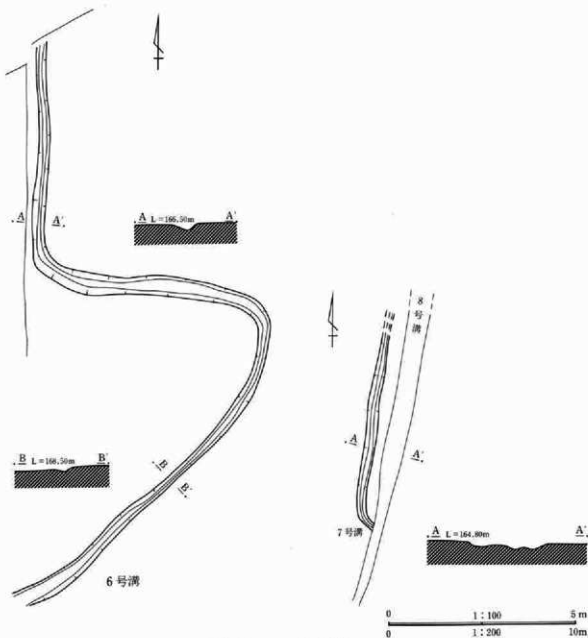
第507図 4・5号溝実測図

6号溝 遺構写真図版76

Ⅲ区北西部に位置し、M・N-30、N・O・P-29、P-30の6グリットに属する。北西部の低くなる傾斜面に蛇行して掘られており、北側は調査区域外に延びているが南側は浅くなり確認出来なかった。5号溝とつながって谷頭の周辺に掘られた溝の可能性も考えられる。規模は幅0.4~1.06m、深さ0.08~0.21mである。長さは50.5mまで確認出来た。

7号溝 遺構写真図版76

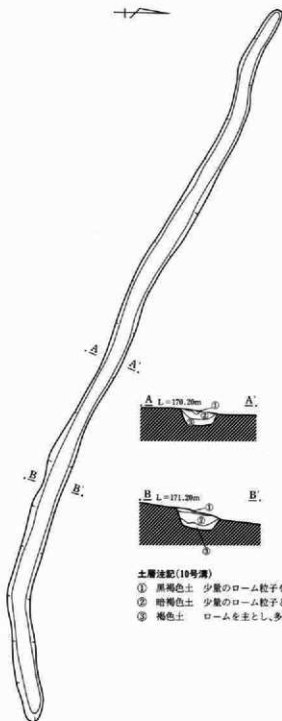
Ⅲ区北端に位置し、J・K-27グリットに属する。北側の低くなる傾斜面に8号溝と分かれて掘られており、北側は生活道路下のため一部分の調査しか出来なかった。規模は幅0.5~0.6m、深さ0.06~0.1mである。長さは10.6mまで確認出来た。



第508図 6・7号溝実測図

8号溝 遺構写真図版76

Ⅲ区中央部北側に位置し、J-26、K・L・M・N・O-27の6グリットに属する。北側の低くなる傾斜面で多くの部分が今日の道路と重なりあうように掘られていた。Ⅲ区中央部で直角に西に曲がり字境の土手の下につながりその地点で確認出来なくなった。中央部で9号溝と北側で7号溝とつながっていた。規模は幅0.3~1.15m、深さは北側の浅い部分で0.07mで南側の深い部分で0.79mである。長さは55mまで確認出来た。



9号溝 遺構写真図版77

Ⅲ区北東側に位置し、N-22・23、M-23・24・25・26・27の7グリットに属する。北側の低くなる傾斜面で地形にほぼ平行に掘られており、西側で8号溝と東側で2号溝とつながり、さらに東西に延びていたがやがて確認出来なくなった。規模は幅0.55~1.7m、深さは0.12~0.48mである。長さは52.4mまで確認出来た。

10号溝 遺構写真図版77

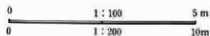
Ⅳ区南西部に位置し、T-39、U-37・38、V-36・37の5グリットに属する。北西側の低くなる傾斜面にほぼ直行するように掘られている。規模は幅0.9~1.2m、深さは0.45~0.50mである。長さは40.4mまで確認出来た。

11号溝 遺構写真図版77

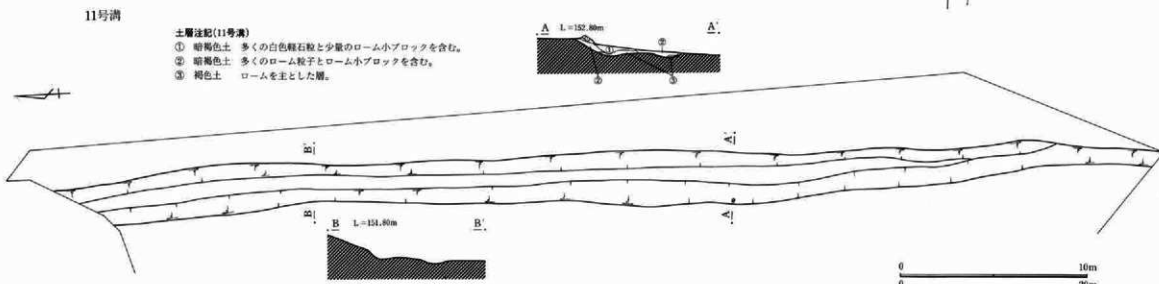
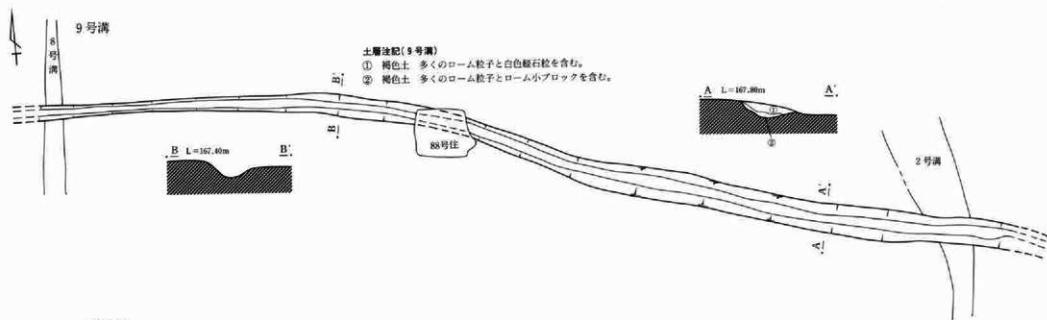
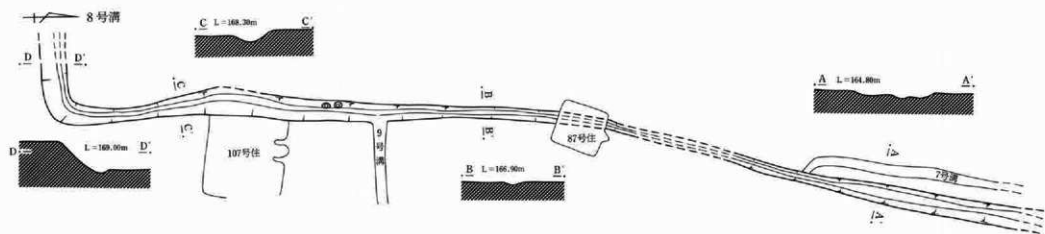
Ⅰ区の調査区西端に位置し、B・C・D・E・F・G・H-4の7グリットに属する。住居の造られている所より一段低い所に南北方向に掘られている。南側は現在の道路とぶつかり確認できなかった。北側は調査範囲の外まで延びていた。溝の東側は県道が走り調査範囲外となっていた。規模は幅2~2.65m、深さは浅く0.1~0.2mである。長さは40.4mまで確認出来た。

土層表記(10号溝)

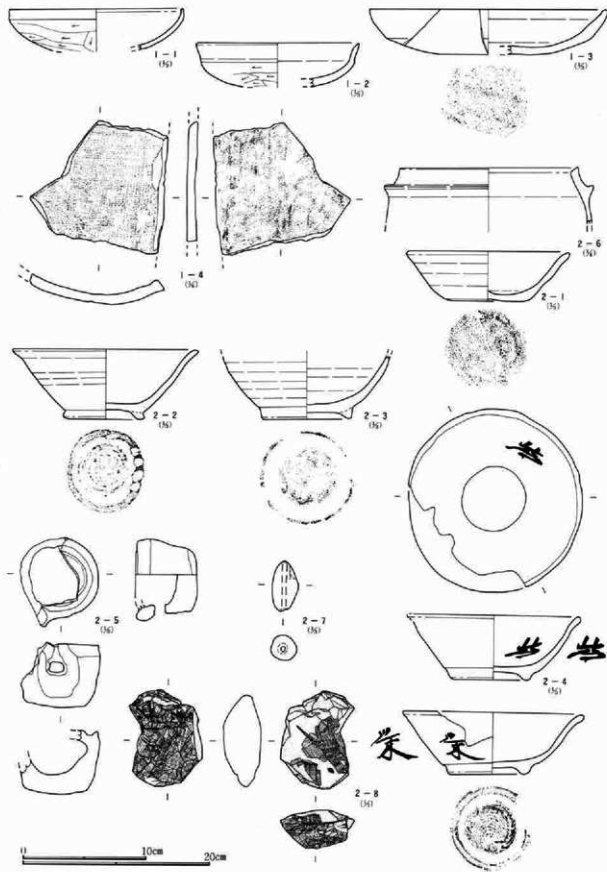
- ① 黒褐色土 少量のローム粒子を含む。
- ② 暗褐色土 少量のローム粒子とローム小ブロックを含む。
- ③ 褐色土 ロームを主とし、多くのロームブロックを含む。



第509図 10号溝実測図



第510図 8・9・11号溝実測図



第511图 1·2号清出土遗物实测图

1・2号溝 出土遺物観察表(押図番号第511図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	高さ・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1号溝-1	坏 土師器	— (14.0) —	丸底の浅い坏である。口縁部は特に短く直立する。底部へう削り、内面ていねいなナデ。	①褐色②酸化③1/6④密
1号溝-2	坏 土師器	— (13.0) —	口径の小さな丸底の坏である。底部と口縁部との境に明確な段を持つ。底部へう削り、口縁部ナデ。	①褐色②酸化③1/8④密
1号溝-3	坏 須恵器	3.6 (19.0) —	浅い口径の大きな坏である。底部回転へう削り、口縁部へ内面横ナデ。	①灰白色②還元焼成③小破片④1mm前後の石英と長石粒多く含む
1号溝-4	平瓦		内面布目、外面ナデ、側面へう削り。横骨痕認められず。器内の薄いつたである。	①灰白色②還元③破片④1~3mmの砂粒を含む
2号溝-1 144	坏 須恵器	3.9 13.0 6.8	口縁部の器内が厚く、上端で外反する。底部は磨耗しており赤切痕等の痕跡なし。全体がゆがんでいる。	①灰白色②還元焼成③口縁部2/3・底部完形④角閃石を少量含む
2号溝-2 144	埴 須恵器	5.6 (14.9) 6.2	口縁部の器内が厚く、上端で外反する。高台部下端に4本の圧痕あり。高台部内側赤切痕残る。	①灰色②還元軟質③口縁部1/2・底部完形④2~3mmの黒色鉱物粒を少量含む
2号溝-3	埴 須恵器	— — 7.3	体部が内彎しつつ立ち上がる。高台は断面三角形で難に貼り付けてある。	①灰色②還元軟質③体部2/3・底部完形④2mm内外の砂粒と片岩粒を少量含む
2号溝-4 144	埴 須恵器	5.1 (14.4) 6.5	底径の小さな埴である。内面に「器」外面に「口木」と書あり。	①灰白色②還元軟質③口縁部2/3・底部完形④2mm内外の砂粒を少量含む
2号溝-5 144	注口 土師	4.9 6.4 4.8	注口部分がはずれている。本体部分は上部周辺に溝溝を持つ。蓋が付くか？底部へう削り、断面ナデ。	①褐色②酸化③1/5④1~2mmの石英と長石粒含む⑤須恵器の胎土に近い
2号溝-6	羽釜	— (19.0) —	脚は断面三角形で短い。口縁部も短く内縮する。口唇部は平で幅広く内縮する。	①褐色②酸化③小破片④1mm前後の石英と長石粒を含む
2号溝-7 144	土師 孔鉢	長さ4.0 径1.1 孔径0.3 重さ12g	孔鉢の大きな土師である。表面はナデによりていねいに作られている。	①褐色②酸化③完形④少量の赤色粒を含む
2号溝-8	紡織車 未製品	長さ7.7 幅5.6 厚さ3.0 重量69g	表面のほぼ全面にわたって、ノミによる削り痕あり。荒削り終了前に側面欠損か。	①暗緑灰色③一部欠損④滑石片岩

第7節 石列・道路状遺構

石列 遺構写真図版77

Ⅳ区中央部西側に位置し、S-36・37・38、T-37・38の5グリットに属する。石列の南側が少し高くなっているため土留用の石垣と考えられる。多くが1~2段積みであった。今日の地境と一致する。石の大きさは12×22cm~15×25cm前後と小さく石列の長さは25.4mであった。

1号道路状遺構 遺構写真図版77

Ⅱ区南東部分で北西から南東方向に造られている現在の道路の下から、岡脇に側溝をもつ道路と思われる遺構が検出された。南東部分は削平により北西部分は谷により削り取られ検出出来なかったが、恐らく調査区

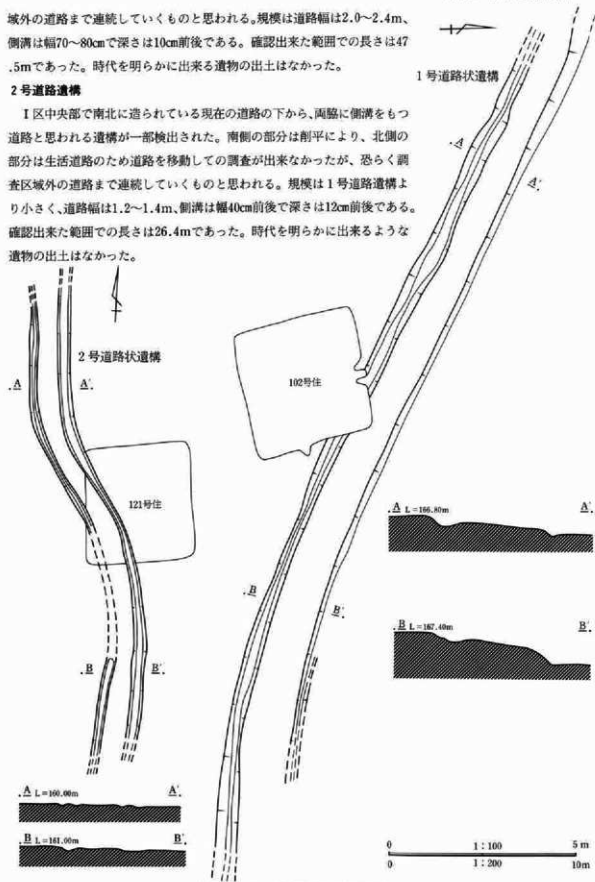


第512図 石列実測図

域外の道路まで連続していくものと思われる。規模は道路幅は2.0~2.4m、側溝は幅70~80cmで深さは10cm前後である。確認出来た範囲での長さは47.5mであった。時代を明らかに出来る遺物の出土はなかった。

2号道路遺構

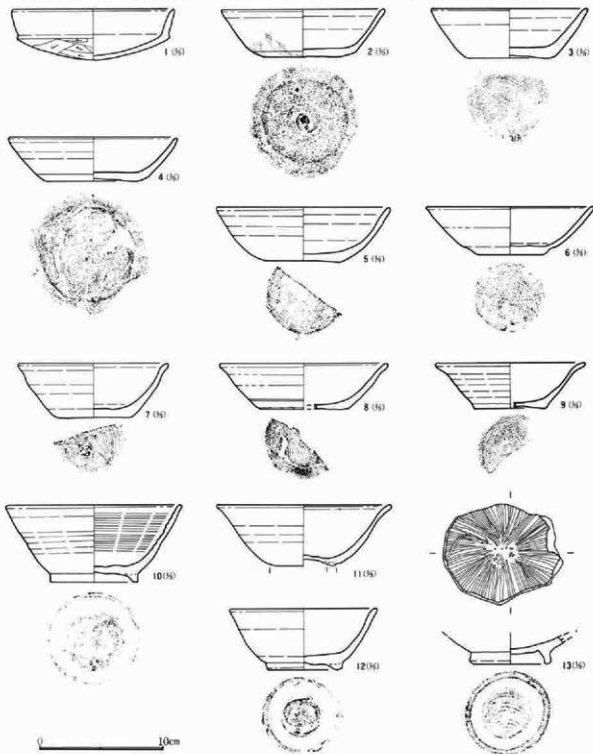
I区中央部で南北に造られている現在の道路の下から、両脇に側溝をもつ道路と思われる遺構が一部検出された。南側の部分は削平により、北側の部分は生活道路のため道路を移動しての調査が出来なかったが、恐らく調査区域外の道路まで連続していくものと思われる。規模は1号道路遺構より小さく、道路幅は1.2~1.4m、側溝は幅40cm前後で深さは12cm前後である。確認出来た範囲での長さは26.4mであった。時代を明らかに出来るような遺物の出土はなかった。



第513図 1・2号道路状遺構実測図

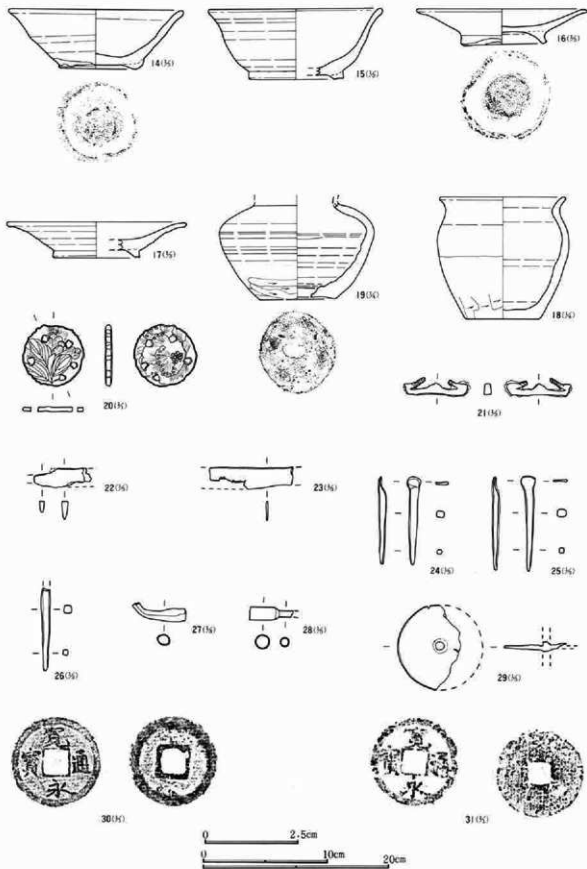
第8節 グリッド及び遺跡内出土遺物

特定の遺構に伴うことが確認できなかった遺物群をまとめて図示した。これらの中には火打石や火打金及び鉄製の紡錘車と五輪塔が含まれる。五輪塔は33号土坑西側に近接し、11号溝に落ち込むように覆土上面から出土したがいずれの遺構に伴うものか確認できなかった。11号溝セクション図に出土位置が図示してある。



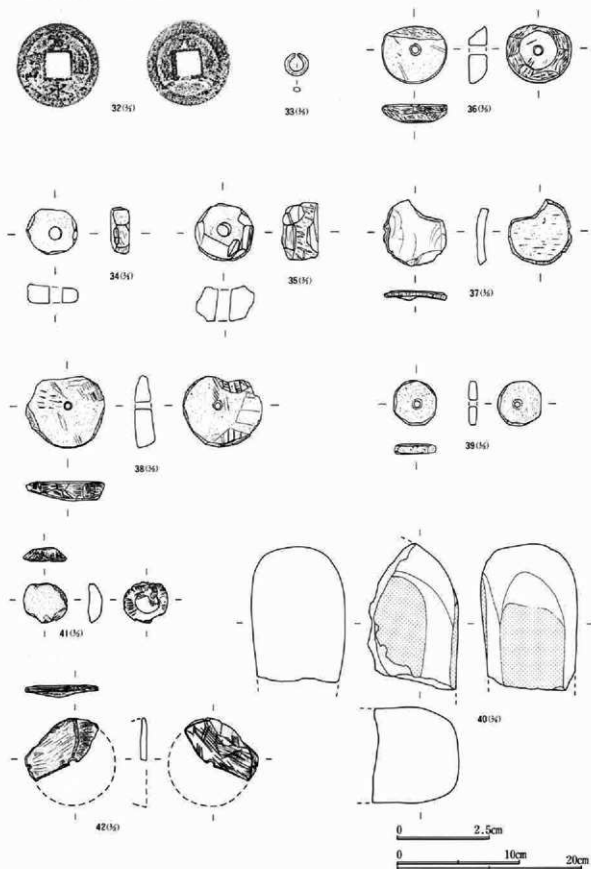
第514図 グリッド及び遺跡内出土遺物実測図(1)

第8節 グリッド及び遺跡内出土遺物

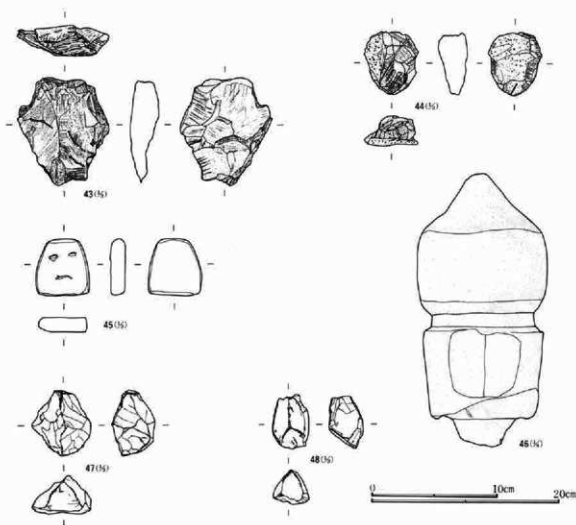


第515図 グリッド及び遺跡内出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第516図 グリッド及び遺跡内出土遺物実測図(3)



第517図 グリッド及び遺跡内出土遺物実測図(4)

グリッド及び遺跡内 出土遺物観察表 (挿図番号第514図)

遺物番号 図版番号	器形及 び種別	器高・口径・底径 (cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
グリット-1 145	坏 土部磨	— (13.0) — K-11グリット	浅い丸底の坏である。口縁部はなだらかに外傾し、口唇部は細くなる。底部と口縁部との境の線は明瞭。	①明赤褐色②焼成③残存④胎土⑤密
グリット-2 145	坏 須磨磨	3.8 (13.0) 9.0 K-19グリット	底径が大きく浅い坏である。底部中央右回転ヘラ切無調整。底部内面回転ヘラ削り。	①灰色②還元焼成③口縁部1/2・底部完形④1mm前後の石英と長石粒多く含む
グリット-3 145	坏 須磨磨	4.0 (12.6) (7.0) O-28グリット	底部と体部の器内が厚い。口縁部は外反しない。底部右回転糸切後、体部内外面にロクロ目ほとんど無。	①灰白色②還元③口縁部1/4・底部完形④1mm以下の石英と長石粒含む
グリット-4 145	坏 須磨磨	3.4 (13.5) 7.4 Q-24グリット	底径が大きく浅い坏である。体部下端回転ヘラ削り。底部右回転糸切後、両側面手持ヘラ削り再調整。	①灰白色②還元③口縁部1/6・底部完形④1mm以下の石英と長石粒含む
グリット-5 145	坏 須磨磨	4.4 (14.0) (6.2) K-14グリット	体部へ口縁部は内彎しつつ立ち上がる。底部右回転糸切後、体部内外面のロクロ目少ない。	①灰白色②還元③口縁部1/3・底部1/2④1mm以下の石英・長石粒と片岩を含む
グリット-6 145	坏 須磨磨	3.8 (13.2) 5.6 L-14グリット	底部の器内が厚く、体部との境に段を持つ。体部へ口縁部の器内は薄い。底部右回転糸切後。	①表面黒色・断面灰白色②還元軟質③口縁部1/10・体部1/6・底部完形④密
グリット-7 145	坏 須磨磨	4.2 (12.0) (6.0) I-13グリット	底部の器内が厚く、口縁部上端が外反する。底部右回転糸切後。体部へ口縁部ロクロ目少ない。	①灰白色②還元③口縁部1/3・底部1/2④1mm以下の石英と長石粒多く含む

グリッド及び遺跡内 出土遺物観察表 (押印番号第514・515・516図)

遺物番号 図版番号	形状及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部整形等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
グリット-8	環 須恵器	3.6 (13.4) 7.2 J-13グリット	口径が大きく浅い環である。口縁部上端でわずかに外反する。内面底部に重焼痕、外面に右回転糸切痕。	①灰白色②還元軟質③口縁部1/3・底部1/2④1mm以下の石英と長石粒多く含む
グリット-9	環 須恵器	3.6 (12.0) (5.8) Q-23グリット	底部と体部との境が明確な段を持つ。口縁部が大きく外反する。底部右回転糸切痕。異質な環である。	①灰白色②還元軟質③口縁部1/5・底部1/2④黒色鉱物含む
グリット-10 145	環 須恵器	6.1 (14.2) 7.0 J-14グリット	体部内側に幅約1.5mmの工具により最高8回転の渦巻状の整形痕あり。高台は断面長方形でていねい。	①灰白色②還元軟質③口縁部2/3・底部完形④赤⑤全体にていねいな作りである
グリット-11 145	環 須恵器	4.8 14.0 — K-14グリット	底径が小さく深い環である。口縁部は器内が厚くなり外反する。高台は欠損。高台内側回転ナデ。	①表面黒色・断面灰色②還元軟質③口縁部2/3・底部完形④砂粒少量含む
グリット-12 145	環 須恵器	4.8 (11.8) 6.2 M-15グリット	高台を持つ小さな環である。高台は低く杯底部に幅広く貼り付けてある。高台内側回転ナデ。	①灰白色②還元軟質③口縁部1/4・底部完形④1mm以下の小さな石英と長石粒含む
グリット-13 145	環 須恵器	— — 6.4 R-14グリット	内面は全面にわたり放射状に研磨され、吸灰により黒色を呈し光沢を持つ。高台は断面長方形で長い。	①内面黒色・断面～外面褐色②酸化③底部～高台部完形④赤色鉱物を含む
グリット-14 145	環 須恵器	4.7 14.0 7.2 P-36グリット	口縁部の器内が厚い。高台は低く不均正で著しく貼り付いている。高台内側回転ナデ。	①灰褐色②酸化③ほぼ完形④1mm前後の石英と長石粒を大量に含む粗い
グリット-15	環 須恵器	5.6 (14.0) (7.5) K-13	体部の器内が薄く口縁部で厚くなり外反する。高台は浅く太い。高台内側回転ナデ。	①灰色②還元③1/3④磨
グリット-16 145	皿 須恵器	3.0 18.8 6.6 K-13グリット	高台は断面長方形で良い。杯底部との接合面は広い。高台内側に右回転糸切痕の痕跡が残る。	①表面黒色・断面灰色②還元③ほぼ完形④石英と長石粒含む
グリット-17	皿 須恵器	2.8 14.4 6.8 L-13グリット	底部の器内が厚い。高台は短く太い。高台の作りはていねいで下面が凹状を呈する。	①灰白色②還元③口縁部～体部1/5・底部1/3④1mm以下の石英と長石粒含む
グリット-18 145	小型壺 土師器	12.9 (13.4) 7.8 P-36グリット	口縁部が短く外反する。胴上部ナデ、胴下半へつくり、底部横一定方向へ削りナデ。	①灰褐色②酸化③口縁部～胴部1/6・底部完形④1mm前後の砂粒を含む
グリット-19 145	短頸壺 須恵器	— — 8.3 U-35グリット	底部と胴下半の器内が厚い。肩部が張り、口縁が直立。焼成後に底部中央の外から打撃し底部穿孔。	①灰色②還元焼成③胴部以外ほぼ完形・底部中央欠点
グリット-20	動物具 ?	1.6×1.6 厚さ0.1 重量2g	用途及び名称不明。毛層により草花が織り込まれ潤金されている。	①金色②完形③銅製④G-7グリット
グリット-21 149	打金金	長さ5.4 幅1.4 厚さ0.5 重量5.1g	いわゆる「ねじり線」である。頂部が欠損している。打撃部中央が使用によるため凹状を呈する。打撃部裏面に山形に突出している。錆化がはげしい。M-29グリット出土。	
グリット-22	刀子	長さ4.5 幅1.5 棟厚0.4 重量4.5g	刀子の棟区と刃区部分及び室と刃部の一部分である。刃部は使用により縁が狭くなっている。全体に錆化がはげしい。K-13グリット出土。	
グリット-23	刀子	長さ6.6 幅1.7 棟厚0.15 重量5.4g	刀子の刃部の破片と思われるが明確でない。刃部は明らかにあからか棟部が薄い。全体に錆化がはげしい。I-14グリット出土。	
グリット-24 149	釘	長さ7.3 幅1.0 厚さ0.5 重量6.1g	頭部部分を叩き薄く幅広くし、片側に寄せている。折り曲げれば他に多く出されている釘と同様になる。頭部以下は横断面正方形でていねいに鍛造している。J-14グリット出土。	
グリット-25 149	釘	長さ7.5 幅1.1 厚さ0.5 重量6.2g	24の釘とほぼ同じ。J-14グリット出土。	
グリット-26 149	釘	長さ6.5 幅0.7 厚さ0.6 重量5.1g	24の釘と同様な釘で頭部部分が欠損している製品と思われる。J-14グリット出土。	
グリット-27 149	煙管 煙管	長さ4.2 幅0.7 厚さ1.0 重量0.3g	火皿部分欠損。断面はあまり湾曲しない。銅製。N-25グリット出土。	
グリット-28 149	煙管 吸口	長さ3.5 幅1.0 厚さ1.0 重量4.4g	口唇部分欠損。最大径を器口挿入口に持つ。銅製。F-5グリット出土。	
グリット-29 149	紡錘車 鉄製品	径6.8 厚さ2mm 重量21.0g	紡錘車の紡錘部分の破片と思われる。中央部の上下面に紡室の一部が残存している。紡錘を作り、中央部に穿孔し紡室を差し込んだものと観察できる。I-13グリット出土。	
グリット-30 149	銭	径2.4 重量2.7g K-35グリット	寛永通宝である。字体が31の寛永通宝より細い。	
グリット-31 149	銭	径2.4 重量2.3g J-5グリット	寛永通宝。錆化がはげしく、裏面は外区と内区の区別がつかない。	
グリット-32	銭	径2.2 重量1.9g K-14グリット	寛永通宝である。裏面上部に元と思われる文字がある。	

グリッド及び遺跡内 出土土物観察表(押図番号第516・517図)

遺物番号 図取番号	器形及び 種類	器高・口径・底径(cm) 出土位置	器形・成形・調整・底部彫り等の特色	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
グリット-33	耳環	外径1.9×1.8 内径1.1×1.2	青銅製耳環である。表面の一部は剝離している。残存している表面に金箔は認められない。 断面0.3×0.6cm 5.2g 0-19グリット	
グリット-34	白玉	幅1.2 孔径0.25 厚さ0.5 重量1.5g	側面は英砥削り、上下面は自然面で平。中央の穴は中心から少しずれている。	①淡青色②完形③滑石片岩④P-27グリット 孔径2.5mm
グリット-35	白玉	幅1.5 孔径0.3 厚さ0.9 重量3.6g	側面は英砥削り、上下面はノミを用いて削った後無調整。	①淡青色②完形③滑石片岩④K-14グリット
グリット-36	紡錘車	長さ4.5 幅5.2 厚さ1.4 重量54g	完成後、多く使用されない段階で側面が破損し、放棄か。側面荒砥削り。広狭面におそらくノミ加工痕。	①暗緑灰色②一部欠損③滑石片岩④K-14グリット
グリット-37	紡錘車	長さ5.2 幅5.0 厚さ0.7 重量30g	製作段階で彫理に当たって割れたため、放棄された未製品。側面はノミを用いた横方向からの削り。	①暗緑灰色②破片③滑石片岩④L-13グリット
グリット-38	紡錘車	長さ5.5 幅6.4 厚さ1.5 重量85g	慣内形を呈し、中央の穴が少しずれている。側面と表面ノミを用いて削る。削り込みは製品化可能。	①暗緑灰色②ほぼ完形③滑石片岩④未製品か。孔径5mm。K-14グリット
グリット-39	紡錘車 ?	長さ3.5 幅3.4 厚さ0.8 重量12g	ほぼ円形を呈し、中央の穴が少しずれている。側面と表面は砥が低くして彫り作。L-14グリット	①淡黄褐色②完形③砂岩④小さく軽量のため紡錘車としては疑問。孔径5mm。
グリット-40 145	砥石	長さ15.4 幅9.8 厚さ10.3 重量2.3kg	砥石の破片である。2面が砥石として利用されている。砥石面以外に加工面なし。大きな砥石である。	①淡黄褐色②破片③安山岩④K-12グリット
グリット-41 145	石	長さ3.1 幅3.5 厚さ1.0 重量11g	紡錘車の狭面の破片とも思われるが不明。表面の一端に荒砥削りが残るが多くは磨かれている。	①緑灰色②破片③滑石片岩④K-14グリット
グリット-42 145	紡錘車	長さ3.9 幅4.2 厚さ0.8 重量20g	紡錘車の広面の破片である。広面の半分が薄く割られている。周辺に凸状の刻目あり。表面荒砥削り。	①緑灰色②破片③滑石片岩④I-13グリット
グリット-43	紡錘車 未製品	長さ3.8 幅7.3 厚さ2.3 重量130g	形より観察して紡錘車を作るための石片と思われるが、全く未加工である。	①暗緑灰色②未製品③蛇紋岩④Q-35グリット
グリット-44	紡錘車 未製品	長さ5.0 幅4.2 厚さ2.3 重量55g	原石にノミを用いて加工途中で一部が破損したため放棄したものと思われる。ノミの削痕が残る。	①暗緑灰色②破片③滑石片岩④R-38グリット
グリット-45 145	石	長さ4.5 幅3.3 厚さ1.2 重量75g	人間の顔を表現した扁平な石製品と思われる。表面に両目と口を刻んで表現している。表面荒砥削り。	①淡黄色②ほぼ完形③砂岩④P-39グリット
グリット-46 145	五輪塔	長さ28.5 幅13.7 重量5.8kg	五輪塔上部の風・空輪である。両輪とも雫形は削まれているが、風輪の一面所に砥がざされた面あり。上面から出土	①淡黄色②完形③砂岩④F-4グリット 3号土坑西側で、11号溝西覆土上面から出土
グリット-47	大打石	長さ5.2 幅4.7 厚さ3.0 重量75g	角部の多くは、打撃により削られている。大打石として使用されていたものと思われる。	①灰白色②完形③石英片岩④表採
グリット-48	大打石	長さ4.4 幅2.9 厚さ2.6 重量35g	角部の多くは、打撃により削られている。小さいが大打石として使用されていたものと思われる。	①灰白色②完形③石英片岩④表採

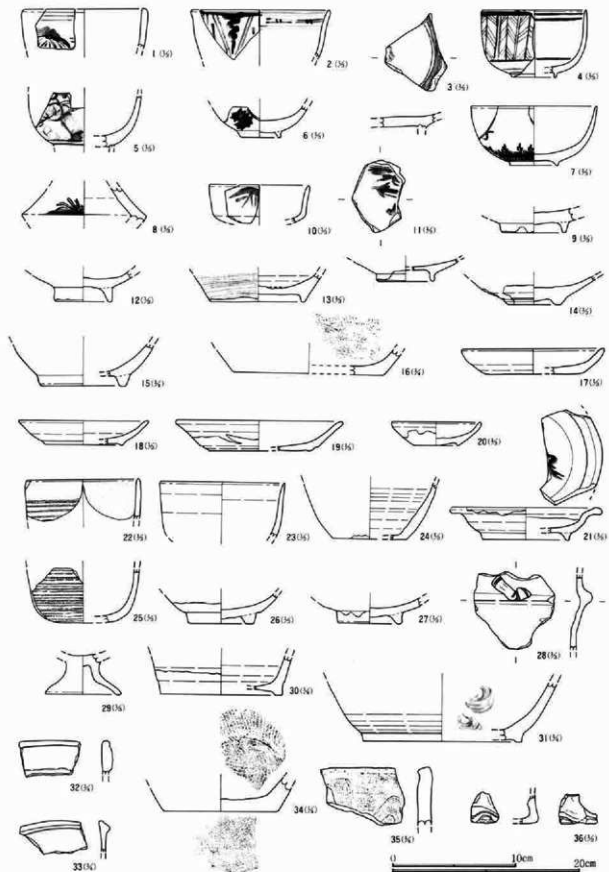
第9節 陶磁器

江戸時代と思われる陶磁器類を中心に図示した。1・8号溝より出土した4点以外は特定の遺構と結びつけることは出来なかった。陶磁器は15個体の肥前系と18個体の瀬戸・美濃系が大部分を占めている。それらの中で14番の灰釉血皿は出土例が少なく注目される。

遺跡内出土 陶磁器等観察表(押図番号第517図)

遺物番号 図取番号	陶磁器 別	産地	残存状態	大きさ	出土位置	年代	器形・文様・釉薬等の特徴
1 150	磁器	肥前	口縁部	口径(10.0)高さ 底径 —	97住覆土	18C前～ 中	陶彫染付碗。
2 150	磁器	肥前	口縁部	口径(11.0)高さ 底径 —	表採	1820～幕 末	瑠璃釉。
3 150	磁器	肥前	底部	口径 — 高さ 底径(8.0)	1区表採	18C前～ 1780年代	染付皿。五弁花。
4 150	磁器	肥前	口縁部～体部	口径(8.4)高さ 底径 —	29住覆土	天明～ 1810	碗。矢羽文様染付。
5 150	磁器	肥前	体部～底部	口径 — 高さ 底径 —	表採	18C中～ 末	染付碗。真珠で管輪が描かれている。
6 150	磁器	肥前	底部	口径 — 高さ 底径(3.2)	K-17グ リット	18C中～ 前	碗。コンニャク印。

第3章 検出された遺構と遺物



第518図 遺跡内出土陶器実測図

遺跡内出土 陶磁器等観察表(挿図番号第517図)

遺物番号 図版番号	陶磁器 別	産地	残存状態	大きさ	出土位置	年代	器形・文様・軸素等の特徴
7 150	磁器	肥前	口縁部～底部 1/3残	口径(10.0)高さ 4.7 底径 3.8	F-5グ リット	18C前～ 中	碗。芝形、宝文様。削り出し高台。
8 150	磁器	肥前	口縁部	口径 - 高さ - 底径 -	2区表採	18C	花瓶。染付
9 150	陶器	肥前	底部	口径 - 高さ - 底径 5.2	M-16グ リット	18C前～ 中	陶胎染付碗。
10 150	陶器	關西系	口縁～体部	口径(8.0)高さ - 底径 -	5住覆土	江戸後半	碗。
11 150	陶器	肥前	底部	口径 - 高さ - 底径(4.6)	2区表採	18C前～ 中	皿。京焼風。横間山水絵皿。
12 150	陶器	肥前	底部	口径 - 高さ - 底径 4.6	L-23グ リット	17C後～ 18C前	呉器手碗。内外面透明釉。
13 150	陶器	肥前	底部	口径 - 高さ - 底径(7.4)	K-11グ リット	18C	唐津系瓶。刷毛による白土。削り出し高台。
14 150	陶器	肥前	底部	口径 - 高さ - 底径 4.4	P-23グ リット	16C～17 C前	灰胎皿。重ね焼による胎土目痕あり。唐津系。
15 150	陶器	肥前	体部～底部	口径 - 高さ - 底径(10.0)	N-30グ リット	17C末～ 18C中	片口。唐津。内外面鉄泥釉。内面に刷毛による白土。
16 150	陶器	未知?	底部	口径 - 高さ - 底径(16.0)	N-17グ リット	江戸時代 ?	摺鉢。
17 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁～底部	口径(11.4)高さ 2.0 底径(7.8)	P-29グ リット	江戸時代	皿。内外面長石釉。
18 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁～底部	口径(10.4)高さ - 底径 -	89住覆土	江戸時代	皿。内外面長石釉。
19 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁～底部	口径(13.4)高さ 2.4 底径(8.5)	F-4グ リット	江戸時代	灰胎皿。削り出し高台。
20 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁～底部	口径(7.2)高さ 1.9 底径(3.6)	1区表採	江戸時代	灰胎皿。削り出し高台。
21 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁～底部	口径(12.2)高さ 2.6 底径(7.0)	1号溝 覆土	17C中	灰胎の鉄絵皿。
22 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁～体部	口径(9.0)高さ - 底径 -	122住 覆土	18C中～ 19C前	龍茶碗。
23 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁～体部	口径(10.0)高さ - 底径 -	2・3区 表採	18C前～ 中	碗。新物。
24 151	陶器	瀬戸・美 濃	体部～底部	口径 - 高さ - 底径 -	N-28グ リット	18C後半 ～19C	徳利。石垣質の陶器。外面鉄釉。底面の軸はふきとる。
25 151	陶器	瀬戸・美 濃	体部～底部	口径 - 高さ - 底径 -	F-5グ リット	18C中～ 後	龍茶碗。外面灰胎。内面銅緑釉。
26 151	陶器	瀬戸・美 濃	底部	口径 - 高さ - 底径 5.3	69住覆土	18C中～ 後	尾呂茶碗? 鉄胎。
27 151	陶器	瀬戸・美 濃	底部	口径 - 高さ - 底径 5.2	8号溝 覆土	18C中～ 後半	碗。胎釉。付高台。
28 151	陶器	瀬戸・美 濃	体部	口径 - 高さ - 底径 -	142住 覆土	江戸時代	花瓶。内面長石釉。外面胎釉(茶色)。
29 151	陶器	瀬戸・美 濃	底部	口径 - 高さ - 底径(6.0)	81住覆土	不明	仏飯器。内面鉄釉。
30 151	陶器	瀬戸・美 濃	体部～底部	口径 - 高さ - 底径(13.0)	1号溝 覆土	18C～19 C	徳利。内外面灰胎。
31 151	陶器	瀬戸・美 濃	体部～底部	口径 - 高さ - 底径(17.0)	2・3区 表採	江戸時代	鉢。内外面灰胎。内側底部に胎土目痕あり。
32 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁部	口径 - 高さ - 底径 -	8号溝 覆土	江戸時代	摺鉢。表面鉄釉。
33 151	陶器	瀬戸・美 濃	口縁部	口径(24.0)高さ - 底径 -	162住 覆土	江戸時代	摺鉢。表面鉄釉。
34 151	陶器	瀬戸・美 濃	底部	口径 - 高さ - 底径(12.0)	N-30グ リット	江戸時代	摺鉢。表面鉄釉。
35 150	軟質陶器	不明	口縁部	口径(30.6)高さ - 底径 -	N-19グ リット	不明	
36	土器	足部		口径 - 高さ - 底径 -	表採	不明	素焼の人形の足の部分。型作り。

第4章 調査成果の整理とまとめ

第1節 遺構について

(1) 遺構の検出状況

遺跡は南から北へ向かって傾斜している段丘面のため、雨水や季節風等による表土の流失が多く表土の堆積が浅い。そのため耕作土を20~30cm除去すると関東ローム層となる。遺構の掘り込みはローム層上の暗褐色土層からであるが、耕作により攪乱を受けている。そのため多くの遺構確認は暗褐色土下層からローム層にかけての層であった。住居跡は全般に南側の残りは良好であるが、低くなる北側は悪い。遺跡内に於ける住居の密度は、北北西が低くなる緩やかな斜面の調査区東側が多く西側が少ない。またいずれの地区でも傾斜の強い斜面には住居は少ない。溝も多く検出されたが、その多くは今日の地境に一致しており一部は江戸時代頃まで湧りそうである。

(2) 竪穴住居の面積・貯蔵穴・柱穴・配置の問題について

① 時期別による住居面積の変化について (第2・8表参照)

古墳~平安時代における住居規模の変化について検討してみた。住居面積の明らかな住居数が少ないため、この表と矢田遺跡での成果を併せて全体傾向を以下のように理解した。

- ア 6~8世紀間の時期は大・中・小の住居が存在するが、9~11世紀の時期では小の住居が多く中の住居も存在するが、大の住居はほとんど存在しない。
- イ いずれの時期とも小の住居はほぼ40%以上存在する。時代が新しくなるにつれて小の住居が増加する。
- ウ 特大の住居は2軒検出され44.37㎡と50.7㎡と特に大きい。7~8世紀代で検出されている。
- エ 古墳~平安時代の全体では次のとおりである。16㎡未満(一辺が基本的に4m以下)の住居が101軒中58軒で全体の50%以上を占めている。25㎡未満(一辺が基本的に5m以下)の住居で見ると101軒中87軒となり80%以上を占めている。25㎡以上(一辺5m以上)の大きな住居は目立つが101軒中14軒であり全体の僅か15%以下である。

② 貯蔵穴の問題について (第3・5・8表参照)

- イ 6~11世紀の住居より貯蔵穴が多く検出されている。また掘られていない住居も多く存在し、深さも8~80cmと大きな差があり、貯蔵穴と呼ばれているものに疑問も残る。全体傾向を以下のように理解した。
- ア 貯蔵穴の深さは20~40cmが最も多い、しかし40~80cmの深さのものも一定量存在し特定の深さに集中するといった傾向は示さないようである。
- イ 住居の規模と貯蔵穴の深さと関係は、住居規模が大きいほど貯蔵穴の深さも深い傾向を持つ。しかし住居規模が小さくとも深い貯蔵穴も存在し、また逆に住居規模が大きくとも貯蔵穴を持たない住居が40%以上存在している。
- ウ 貯蔵穴を持つ住居は各時期とも50~75%であり、貯蔵穴を持たない住居は2~4軒に一軒の割合で存在している。時期別による貯蔵穴を持つ住居の比率は、奈良時代に貯蔵穴を持つ住居が少なくなるといった傾向を示した。しかし調査対象とした住居数が少ないため不確定な要素も多い。
- エ 深さ60cm以上の深い貯蔵穴を持つ住居は古墳時代に集中し、平安時代では全く存在しない。

③ 柱穴の問題について (第4・6・8表参照)

従来より一辺4m以下の住居には柱穴は存在しない傾向があった。そこで当遺跡の住居規模と柱穴の関係及び時期別による柱穴の存在の問題について検討してみた。

《住居規模と柱穴の有無との関係》

- ア 16㎡以下（基本的に一辺4m以下）の住居には、56軒中51軒（91%）の割合で柱穴は存在しない。柱穴の掘られている住居は5軒存在し、その中の4軒は古墳時代に属し他の1軒は奈良時代である。奈良時代の住居は2本の柱穴が壁面に近接し、他の住居の柱穴の在り方と異質である。このように16㎡（基本的に一辺4m以下）の住居には、古墳時代の少数の住居以外では柱穴は掘られていない。柱穴の深さは全て40cm以上である。
- イ 16㎡以上（基本的に一辺4m以上）の住居には、23軒中17軒（74%）の割合で柱穴が掘られていた。柱穴を持たない住居は6軒存在し、6軒中の1軒の150号住居以外の5軒では短辺が4m以下である。柱穴の深さは全て40cm以上である。
- ウ 25㎡以上（基本的に一辺5m以上）の住居は、9軒存在し、全て柱穴を持つ。柱穴の深さは全て40cm以上である。
- エ 36㎡以上（基本的に一辺6m以上）の住居は2軒存在し、全て柱穴を持ち柱穴の深さも80cm以上である。
- 《時期別による柱穴の有無と深さとの関係》
- ア 時期別に分けてみた結果、柱穴を持つ住居は6世紀から9世紀迄次第に減少して行く傾向を示した。10世紀以降柱穴は全く持たない。
- イ 柱穴の深さは時期別の変化に大きな特色はなく、住居規模に大きく関係しているものと思われる。

第2表 時期別による住居規模の変化一覧表（時期の明らかな101軒）

面積	時期	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	8世紀前半	8世紀後半	9世紀前半	9世紀後半	10世紀前半	10世紀後半	11世紀										
小（0～16㎡未満）		39%	9軒	40%	6軒	56%	5軒	55%	11軒	75%	6軒	64%	7軒	83%	5軒	100%	4軒	100%	2軒	100%	3軒
中（16～25㎡未満）		61	14	20	3	—	0	30	6	25	2	36	4	—	0	—	—	—	—	—	—
大（25～36㎡未満）		—	0	33	5	44	4	10	2	—	0	—	0	17	1	—	0	—	0	—	0
特大（36㎡以上）		—	0	7	1	—	0	5	1	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0

第3表 時期別による貯蔵穴の有無及び貯蔵穴の深さとの関係一覧表
（貯蔵穴が一般的に掘られている床面が検出された131軒）

深さ	時期	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	8世紀前半	8世紀後半	9世紀前半	9世紀後半	10世紀前半	10世紀後半	11世紀										
なし		28%	7軒	29%	5軒	46%	3軒	48%	15軒	50%	6軒	25%	3軒	36%	4軒	25%	2軒	—	0軒	100%	3軒
0～30cm未満		8	2	12	2	9	1	36	11	17	2	42	5	36	4	50	4	—	0	—	0
30～60cm未満		24	6	18	3	27	3	13	4	33	4	33	4	28	3	25	2	100	1	—	0
60cm以上		40	10	41	7	38	2	3	1	—	0	—	0	0	0	—	0	—	0	—	0

第4表 時期別による柱穴の有無及び柱穴の深さとの関係一覧表
（柱穴が一般的に掘られている床面が検出された90軒・4本柱以外は柱穴なしとして扱った）

深さ	時期	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	8世紀前半	8世紀後半	9世紀前半	9世紀後半	10世紀前半	10世紀後半	11世紀										
なし		35%	6軒	36%	5軒	57%	4軒	68%	13軒	100%	8軒	80%	8軒	83%	5軒	100%	4軒	100%	2軒	100%	3軒
0～40cm未満		—	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0	—	0
40～60cm未満		24	4	14	2	29	2	11	2	—	0	10	1	17	1	—	0	—	0	—	0
60cm以上		41	7	50	7	44	1	21	4	—	0	10	1	—	0	—	0	—	0	—	0

第5表 住居規模と貯蔵穴の有無及び貯蔵穴の深さとの関係一覧表（101軒）

深さ	住居規模	小	中	大	特大				
なし		44%	26軒	32%	9軒	42%	5軒	—	0軒
0～30cm未満		20	12	25	7	—	0	—	0
30～60cm未満		27	16	11	3	42	5	50	1
60cm以上		9	5	32	9	16	2	50	1

第6表 住居規模と柱穴の有無及び柱穴の深さとの関係一覧表（90軒）

深さ	住居規模	小	中	大	特大				
なし		91%	51軒	26%	6軒	—	0軒	—	0軒
0～40cm未満		—	0	—	0	—	0	—	0
40～60cm未満		5	3	45	8	87	6	—	0
60cm以上		4	2	39	9	33	3	100	2

※住居規模は0～16㎡未満を小、16～25㎡未満を中、25～36㎡未満を大、36㎡以上を特大とした。

(3) 古墳時代から平安時代に至る集落の変遷について

調査はあくまでも集落の中の限定された一部であり、集落は明らかに南北の両側に広がっている。そのため限られた地域での発掘結果により、集落全体の内容について語ることはできない。しかし限定された地域での発掘成果の中から指摘できそうな遺跡の様子についてまとめてみた。

◎ I区～IV区における住居について

当遺跡では調査区が3本の小さな谷又は低地により区切られており、東よりI～IV区と呼称した。

I区は比較的平らであり、174軒中80軒の住居が作られ、全体の46%となり最も多かった。6世紀後半で35軒中29軒と全体の80%以上の住居がこのI区に作られ、その後も11世紀まで多くの住居が作られ続けており、当遺跡の中心的な地区となっている。住居の検出されなかった北西部は牧場により表土からローム上層の多くが削平されていたため、本来はこの部分にも多くの住居が存在していた可能性が高い。調査の結果集落はさらに調査区域外の南北に多く作られているものと思われる。

II区は北東方向に向かうなだらかな傾斜面で、39軒の住居が検出された。6世紀後半から住居が作られはじめ8世紀前半で14軒となり、この時期では遺跡内の39%を占め最も多くなっている。また10世紀前半でも7軒と多く遺跡内の70%を占めている。一時期住居が作られない時期もあるがほぼ11世紀まで継続的に住居が作られ続けているようである。

III区は南側が傾斜が強く集落は少ない。多くは傾斜の緩やかな北側に集中し、12軒重複の住居も認められた。総数で45軒検出されている。住居は6世紀後半から11世紀までほぼ継続的に作られており、住居が最も多く作られたのは7世紀後半から9世紀前半の時期である。I区の次に多くの住居が作られ続けた地区である。

IV区は南側が傾斜が強く西側中央部に谷があり、緩やかな傾斜面のローム台地が少ないため住居を作る条件としては悪く、10軒と少なかった。7世紀前半より細々と集落が営まれていたようである。

このようにこの遺跡では6世紀後半代に矢田遺跡に近いI区で中心的な集落が作られはじめ、他の地区へと次第に広がっていった様子が知られる。

第7表 時期別・地区別住居軒数の推移一覧表

地区	時期										50年毎の年代で区分できなかった住居数	合計
	6世紀後半	7世紀前半	7世紀後半	8世紀前半	8世紀後半	9世紀前半	9世紀後半	10世紀前半	10世紀後半	11世紀前半		
I区	29	15	4	9	3	2	7	2	2	1	6	80軒
II区	4	4	2	14	0	1	3	7	0	1	3	39軒
III区	2	2	5	11	10	6	2	1	0	2	4	45軒
IV区	0	1	1	2	0	4	1	0	0	0	1	10軒
合計	35軒	22軒	12軒	36軒	13軒	13軒	13軒	10軒	2軒	4軒	14軒	174軒

第8表 住居規模一覧表

遺構名	時代	時期	グッド	規模E×S×N(m)	面積(m ²)	主軸方向	遺	周溝	貯蔵穴		柱穴1 (cm)	柱穴2 (cm)	柱穴3 (cm)	柱穴4 (cm)	
									形状	径 (cm)					
1号住	古墳	7C前	H-11	3.45 × 3.30	10.58	N-93°-E	東壁	-	○	円形	69	80	-	-	
2号住	古墳	6C後	I-10、I-11	4.70 × 4.60	20.97	N-89°-E	東壁	-	○	円形	50	70	2本	50	
3号住	古墳	6C後	I-10、J-10	3.85 × 4.25	16.51	N-78°-E	東壁	-	○	円形	65	55	4本	40	
4号住	古墳	7C前	H-11、I-12	3.60 × 3.50	13.23	N-87°-E	東壁	-	○	円形	50	50	3本	25	
5号住	古墳	6C後	H-11、I-11	4.20 × 4.45	17.28	N-93°-E	東壁	-	○	円形	60	50	3本	40	
6号住	古墳	6C後	H-11、I-11	(4.00) × (4.10)	(14.94)	N-0°-E	北壁	-	-	-	-	-	-	-	
7号住	古墳	6C後	H-12、I-12	4.10 × 4.20	15.93	N-105°-E	東壁	-	-	-	3本	35	46	35	50
8号住	古墳	7C前	I-11、J-11	4.55 × 4.70	20.16	N-92°-E	東壁	-	-	-	-	-	-	-	
9号住	奈良	8C前	I-11、I-12	3.70 × 2.85	10.17	N-0°-E	北壁	-	-	-	-	-	-	-	
10号住	平安	10C前	L-12	3.28 × 2.90	9.81	N-117°-E	東壁	-	-	-	-	-	-	-	
11号住	古墳	7C前	K-10、I-11	4.80 × (4.30)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
12号住	古墳	7C前	K-11、I-12	3.80 × 4.00	14.94	N-87°-E	東壁	-	○	円形	60	47	4本	30	
13号住	平安	9C後	K-11、L-11	(4.30) × 4.20	(18.45)	N-117°-E	東壁	-	○	矩形	80×55	18	-	-	
14号住	奈良	8C後	K-11、I-12、L-11、I-12	4.35 × 3.90	16.83	N-0°-E	北壁	-	○	円形	50	21	4本	40	
15号住	平安	11C前	L-13	3.15 × 3.75	11.97	N-83°-E	南壁・石組	-	-	-	-	-	-	-	
16号住	古墳	7C後	J-16、K-16	3.70 × 3.50	11.61	N-97°-E	北壁	-	○	円形	35	12	-	-	
17号住	奈良	8C前	K-16	(3.50) × 2.80	(9.18)	N-10°-E	北壁	-	○	円形	43	21	-	-	
18号住	奈良	8C前	L-17	4.95 × 4.30	19.80	N-91°-E	東壁・北壁	-	○	円形	48	20	4本	50	
19号住	古墳	7C後	K-18、L-18	4.65 × -	4.65 × -	N-8°-E	-	-	○	円形	50	72	4本	30	
20号住	奈良	8C前	M-17	2.85 × 3.10	8.97	N-95°-E	東壁	-	○	矩形	40×60	18	-	-	
21号住	奈良	8C前	M-18	3.40 × 2.90	9.18	N-103°-E	東壁	-	-	-	-	-	-	-	
22号住	奈良	8C前	M-17、N-17	3.45 × 3.60	11.61	N-28°-E	北壁	-	○	円形	55	22	-	-	
23号住	平安	10C前	J-19、I-16、I-16	- × 4.50	-	N-87°-E	-	-	○	矩形	125×88	52	-	-	
24号住	古墳	7C前	I-10、I-11、J-10、I-11	4.70 × 5.00	22.77	N-0°-E	北壁	-	○	円形	60	60	4本	40	
25号住	古墳	7C前	I-15	4.80 × -	-	N-16°-E	-	-	-	-	-	-	-		
26号住	平安	10C前	J-15	- × (2.80)	-	N-85°-E	東壁	-	-	-	-	-	-		
27号住	古墳	6C後	J-20、I-21、K-20、I-21	5.10 × (4.85)	(24.75)	N-85°-E	-	○	-	-	-	4本	60		
28号住	奈良	8C前	K-20	3.90 × (3.90)	(15.03)	N-92°-E	東壁	-	○	円形	80	36	4本	40	

第4章 調査成果の整理とまとめ

遺構名	時代	時期	ダリッド	埋没層×S.N.(m)	面積(m ²)	土軸方向	周溝	貯蔵穴		柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)	
								形状	径(cm)	深さ	深さ	深さ	深さ	深さ	深さ	深さ	深さ
29号住	不明	8C前	K-21	2.60 × -	-	N-86°E 東壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30号住	奈良	8C前	K-20	2.90 × 3.05	8.82	N-89°E 東壁	○	円形	59	8	-	-	-	-	-	-	-
31号住	奈良	8C前	L-20・21	2.75 × 2.50	6.30	N-100°E 東壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32号住	平安	10C前	L-20	3.00 × 1.7/1.8	7.78	N-101°E 東壁	○	輪形	60×80	26	-	-	-	-	-	-	-
33号住	古墳	6C後	L-21・22	(4.60) × -	-	N-88°E 東壁	○	円形	60	48	4本	35	43	35	45	40	78
34号住	平安	10C前	N-17、O-17	3.00 × 3.10	9.18	N-107°E 東壁	-	円形	80	13	-	-	-	-	-	-	-
35号住	奈良	8C前	P-19	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
36号住	古墳	7C前	N-18・19	2.45 × 2.65	4.81	N-89°E 東壁	-	円形	45	20	-	-	-	-	-	-	-
37号住	古墳	7C前	O-18	(2.20) × 2.60	(3.60)	N-33°E 北壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
38号住	平安	8C前	O-20	3.85 × 3.65	13.32	N-120°E 東壁	-	円形	110	33	-	-	-	-	-	-	-
39号住	平安	9C前	O-20	3.45 × 3.10	10.89	N-100°E 東壁	-	円形	40	17	-	-	-	-	-	-	-
40号住	奈良	8C前	O-20	5.20 × 6.00	30.87	N-100°E 東壁	○	-	-	-	3本	65	76	30	34	40	51
41号住	奈良	8C前	M-16・17	4.90 × 3.60	17.35	N-4°E 北壁	-	-	-	-	4本	45	55	45	58	40	54
42号住	平安	9C前	O-23・24	2.90 × -	-	N-92°E 東壁	-	円形	50	25	-	-	-	-	-	-	-
43号住	古墳	6C後	M-16・17、N-16・17	6.85 × -	-	N-26°E 北壁	○	-	-	-	4本	55	79	60	66	55	61
44号住	奈良	8C前	J-16・17	4.20 × 3.90	16.29	N-5°E 北壁	○	円形	56	26	-	-	-	-	-	-	60
45号住	不明	-	J-16	(2.80) × 2.70	(7.11)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
46号住	奈良	8C前	Q-22	4.55 × (3.99)	(17.32)	N-81°E 東壁	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
47号住	平安	9C後	H-12、I-12	(3.70) × (3.20)	12.10	N-99°E 東壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
48号住	古墳	7C後	I-12	3.30 × 3.40	11.07	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
49号住	古墳	6C後	K-11・12、L-11・12	(7.70) × 7.50	(56.52)	N-109°E 東壁・北壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
50号住	平安	9C前	R-25・26	4.90 × 4.85	22.86	N-90°E 東壁	-	円形	60	50	4本	60	65	60	60	60	65
51号住	平安	9C後	L-12	(3.00) × (3.30)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
52号住	平安	9C後	K-15・16、L-15	5.50 × 5.20	27.72	N-115°E 東壁	-	円形	75	33	4本	50	40	45	60	59	45
53号住	平安	10C前	L-11・12	(3.40) × -	-	-	-	円形	70	35	-	-	-	-	-	-	-
54号住	奈良	8C後	Q-23・24、R-23・24	4.20 × -	-	N-90°E 東壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
55号住	平安	11C前	Q-22・23、R-22・23	3.10 × -	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
56号住	古墳	6C後	I-10・11、J-10・11	4.00 × 4.40	17.19	-	-	-	-	-	4本	35	35	40	39	35	42
57号住	平安	10C前	I-15	3.40 × 2.90	10.71	N-66°E 東壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

遺構名	時代	時期	グリッド	規模E×S×N(m)	面積(m ²)	主軸方向	層	貯蔵穴		柱穴1 (cm)	柱穴2 (cm)	柱穴3 (cm)	柱穴4 (cm)
								形状	径(cm)				
58号住	古墳	6C後	K-10・11	4.85 × -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
59号住	奈良	8C前	K-12, L-12	(4.50) × 4.40	16.18	-	-	-	-	-	-	-	-
60号住	平安	11C前	J-15・16	4.40 × 3.50	14.13	N-110°-E	東壁	-	-	-	-	-	-
61号住	古墳	6C後	K-12・13	2.65 × 3.00	6.93	N-110°-E	東壁	○	円形	38	20	-	-
62号住	平安	9C後	K-15, L-15	4.50 × 3.50	15.66	N-120°-E	東壁	○	円形	55	16	-	-
63号住	奈良	8C前	K-12	4.60 × 4.90	21.33	N-90°-E	東壁	○	楕円形	55×43	25	-	-
64号住	奈良	8C前	K-13, L-13	4.70 × 3.90	17.46	N-100°-E	東壁	○	楕円形	50×38	28	-	-
65号住	平安	9C?	J-17・18	3.30 × -	-	N-90°-E	東壁	○	円形	40	26	-	-
66号住	奈良	8C前	J-18	2.20 × -	-	-	-	-	-	-	-	-	-
67号住	古墳	6C後	J-18・19	3.40 × 3.10	10.39	N-110°-E	東壁	-	-	-	-	-	-
68号住	不明		L-18・19	3.50 × -	-	N-100°-E	東壁	-	-	-	-	-	-
69号住	平安	9C前	O-34	3.30 × 3.50	11.16	N-87°-E	東壁	○	楕円形	65×35	35	-	-
70号住	奈良	8C後	N-27・28	3.15 × 2.70	8.46	N-75°-E	東壁	-	-	-	-	-	-
71号住	奈良	8C後	M-28, N-28	2.50 × 2.80	6.75	N-80°-E	東壁	○	円形	30	45	-	-
72号住	不明		M-28	3.35 × 2.55	7.92	-	-	-	-	-	-	-	-
73号住	奈良	8C前	M-29	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
74号住	不明		N-28	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
75号住	奈良	8C前	M-29	- × 2.50	-	N-25°-E	北壁	-	-	-	-	-	-
76号住	奈良	8C前	M-29	- × 3.20	-	N-100°-E	東壁	○	円形	50	26	-	-
77号住	奈良	8C前	M-29・30	- × (3.60)	-	N-90°-E	東壁	○	円形	40	25	-	-
78号住	奈良	8C後	M-29・30, N-30	- × 3.20	-	N-100°-E	東壁	○	円形	40	25	-	-
79号住	不明		J-27	-	-	N-97°-E	東壁	-	-	-	-	-	-
80号住	奈良	8C後	M-27	2.85 × 2.50	6.88	N-96°-E	東壁	-	-	-	-	-	-
81号住	古墳	7C後	L-28	5.40 × 4.90	25.02	N-7°-E	北壁	○	-	-	-	4本	40 37
82号住	奈良	8C前	K-27	- × 4.85	-	N-15°-E	北壁	○	-	-	-	-	-
83号住	奈良	8C前	K-27, L-27	3.90 × 3.90	14.44	N-105°-E	東壁	○	-	-	-	-	-
84号住	平安	9C前	P-38	(3.65) × 4.05	(13.68)	N-78°-E	東壁	○	楕円形	60×70	16	-	-
85号住	古墳	7C前	P-37	(2.20) × -	-	N-60°-E	東壁	-	-	-	-	-	-
86号住	古墳	7C後	L-25	3.30 × 3.30	10.08	N-90°-E	東壁	○	円形	35	50	-	-

第4表 調査成果の整理とまとめ

遺構名	時代	時期	グリップ	縦横長×S.N(m)	面積(m ²)	主軸方向	礎	新風穴		柱穴	柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)			
								形状	径(cm)		直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ		
87号住	奈良	8C後	L-27	2.45 × 2.65	6.43	N-21°-E	北礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
88号住	古墳	7C前	M-25	2.65 × 2.40	6.30	N-91°-E	東礎	○	円形	50	24	-	-	-	-	-	-	-		
89号住	平安	11C前	M-24	3.35 × 2.75	9.36	N-100°-E	東礎・石礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
90号住	奈良	8C?	K-26・27	2.35 × 2.15	4.95	N-100°-E	東礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
91号住	平安	9C前	K-25	3.10 × 2.95	9.09	N-57°-E	東礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
92号住	平安	9C前	K-28, L-26	3.80 × 3.75	13.41	N-115°-E	東礎	○	楕円形	40×65	33	-	-	-	-	-	-	-		
93号住	奈良	8C後	K-26	3.80 × -	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
94号住	奈良	8C前	K-26・27, L-26	3.10 × 3.70	11.52	N-59°-E	東礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
95号住	古墳	7C前	K-26・27	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
96号住	奈良	8C前	L-26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
97号住	奈良	8C後	L-26・27, K-27	5.50 × 3.80	20.16	N-100°-E	東礎	○	円形	50	21	-	-	-	-	-	-	-		
98号住	奈良	8C前	L-26・27	4.15 × -	-	N-112°-E	東礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
99号住	古墳	6C後	L-26・27	4.80 × 4.65	22.65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
100号住	奈良	8C前	K-26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
101号住	平安	10C前	N-20	2.85 × -	-	N-59°-E	東礎	○	円形	35	20	-	-	-	-	-	-	-		
102号住	平安	9C後	N-20	(3.10) × -	-	N-88°-E	東礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
103号住	古墳	7C前	M-20, N-20	6.80 × 6.85	44.37	N-12°-W	北礎・東礎	○	円形	50	18%	4本	55	95	55	96	60	71	65	92
104号住	平安	10C前	T-29	2.65 × (3.50)	(10.08)	N-90°-E	東礎	○	円形	60	25	-	-	-	-	-	-	-	-	
105号住	古墳	6C後	K-25・26	3.45 × -	-	N-91°-E	東礎	○	円形	60	50	-	-	-	-	-	-	-	-	
106号住	古墳	8C前	N-26・27	- × 5.20	-	N-4°-E	北礎	○	円形	55	60	4本	35	65	40	56	40	54	35	80
107号住	奈良	8C前	M-27, N-27	- × 3.50	-	N-11°-E	北礎	○	-	-	-	3本	30	30	60	30	60	-	-	
108号住	古墳	7C後	Q-27・28, R-27・28	4.15 × 3.15	13.32	N-53°-E	東礎	○	円形	45	37	-	-	-	-	-	-	-	-	
109号住	平安	9C?	R-24・25	- × 3.45	-	N-70°-E	東礎	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
110号住	奈良	8C前	Q-35	3.60 × 3.70	13.32	N-64°-E	東礎	○	円形	50	44	4本	40	56	40	67	40	65	40	82
111号住	平安	9C前	S-25・26	2.45 × 2.95	7.47	N-65°-E	東礎	-	○	円形	40	11	-	-	-	-	-	-	-	-
112号住	奈良	8C前	R-26	5.20 × 5.10	26.38	N-5°-E	北礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
113号住	平安	9C前	Q-29	3.80 × 5.20	18.63	N-99°-E	東礎	○	楕円形	60×85	33	-	-	-	-	-	-	-	-	-
114号住	平安	9C前	S-23・24	2.50 × 3.10	7.74	N-77°-E	東礎	○	楕円形	55×65	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-
115号住	平安	9C前	Q-28	-	-	N-88°-E	東礎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

遺構名	時代	時期	グリッド	敷地面積×S(N)(m)	面積(m ²)	主軸方向	風	周溝	貯蔵穴		柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)				
									形状	径(cm)	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	
116号住	平安	9C前	Q-28・29	5.00 × 4.00	23.34	N-88°E 東風	-	○	円形	50	30	4本	35	50	40	50	40	44	45	50	
117号住	奈良	8C後	Q-28、R-28	4.30 × -	-	N-90°E 東風	-	○	円形	65	50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
118号住	奈良	7C後	Q-36、R-36	3.50 × 3.45	11.25	N-10°E 北風	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
119号住	奈良	P-28・29、Q-28・29	P-28・29、Q-28・29	2.80 × -	-	N-77°E 東風	○	○	円形	65	35	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
120号住	平安	9C後	Q-36、R-36	3.10 × 2.50	9.10	N-80°E 東風	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
121号住	不明	1-9	-	5.70 × 6.30	35.28	-	-	-	-	-	-	4本	45	84	55	83	65	103	55	104	
122号住	古墳	7C後	J-8・9、K-8・9	5.90 × 5.50	32.22	N-32°E 北風	-	-	-	-	-	4本	40	76	50	59	40	60	35	46	
123号住	平安	10C後	J-5	4.10 × 3.45	15.61	N-120°E 東風	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
124号住	古墳	1-4・5	-	5.20 × 5.30	26.37	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
125号住	不明	1-8・9	-	3.20 × 2.80	8.28	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
126号住	古墳	6C後	J-9・10	2.60 × 3.40	8.73	N-102°E 東風	-	○	円形	30	22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
127号住	平安	9C後	Q-27・28	3.20 × 2.90	8.91	N-87°E 東風	○	○	円形	65	21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
128号住	平安	10C後	C-5・6、D-5・6	2.80 × 2.65	7.20	N-91°E 東風	-	○	円形	50	31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
129号住	古墳	6C後	D-6	3.80 × 4.20	15.39	N-102°E 東風	-	○	円形	50	38	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
129号住	古墳	6C後	D-5	4.75 × 4.85	22.68	N-76°E 東風	-	-	-	-	-	4本	50	62	40	48	45	85	50	64	
131号住	古墳	7C前	E-5	3.30 × 3.65	10.44	N-52°E 西風	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
132号住	古墳	7C前	D-5、E-5	5.10 × 5.30	26.19	N-8°E 北風	-	○	円形	80	46	4本	30	48	25	35	35	30	30	30	60
133号住	古墳	7C後	D-6、E-6	5.80 × 5.80	31.77	N-7°E 北風・東風	-	○ ₁	長方形 13×50	30	30	4本	45	50	50	60	50	53	50	73	
134号住	古墳	7C前	E-5	5.70 × 5.30	29.70	N-3°E 北風	-	○ ₂	円形	50	80	4本	35	76	50	76	30	68	60	76	
135号住	平安	9C後	E-5	-	-	N-107°E 東風	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
136号住	奈良	8C前	F-5	3.80 × 3.60	11.25	N-100°E 東風	-	○	円形	35	77	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
137号住	古墳	6C後	F-5	4.00 × 3.80	14.38	N-110°E 東風	-	○	長方形	45×35	50	4本	45	50	50	60	50	53	50	73	
138号住	古墳	?	F-5・6	3.80 × 3.70	13.18	N-10°E 北風	-	○	円形	40	65	4本	40	60	40	60	40	50	25	60	
139号住	古墳	6C後	F-6	(4.80) × 5.00	(23.80)	-	-	-	-	-	-	4本	30	75	30	75	30	75	30	75	
140号住	古墳	7C前	G-5・6	5.60 × 5.70	31.50	W-18°E 北風・東風	-	○ ₁	円形	70	57	4本	45	87	45	71	55	57	55	66	
141号住	奈良	8C前	F-6	3.20 × 2.85	9.31	N-107°E 東風	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
142号住	古墳	6C後	E-6、F-6	3.60 × 4.25	15.57	N-97°E 東風	-	○	長方形	65×50	70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
143号住	古墳	7C前	E-6	4.10 × 3.55	14.08	N-0°E 北風	-	○	円形	50	84	4本	30	62	30	50	40	40	40	61	
144号住	古墳	6C後	E-6	5.00 × 5.00	24.03	N-87°E 東風	-	○	円形	50	80	4本	35	77	35	42	35	79	50	112	

第4章 調査結果の整理と検討

通称名	時代	時期	グリッド	埋没E×S×N(m)	面積(m ²)	主軸方向	遺	周溝	貯蔵穴		柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)			
									形状	径(cm)	深さ(cm)	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	
145号住	古墳	6C後	E-6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
146号住	奈良	8C前	G-6	3.95 × (3.15)	(11.86)	N-114°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
147号住	平安	9C前	H-5・6、I-5・6	4.90 × 4.95	23.53	N-115°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
148号住	奈良	8C前	H-5・6、I-5・6	7.30 × 7.10	50.71	N-5°-W	北置	○	円形	100	33	4本	55	105	50	75	50	65	55	95
149号住	不明	—	—	— × (3.40)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
150号住	奈良	8C後	H-5・6	4.40 × 4.85	20.25	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
151号住	奈良	8C後	H-5・6、G-6	3.60 × 3.15	10.66	N-115°-E	東置	○	円形	40	45	—	—	—	—	—	—	—	—	—
152号住	奈良	8C後	H-6・7	4.30 × (3.55)	(14.71)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
153号住	古墳	1・6・7	I-6・7	2.40 × 2.45	5.76	N-107°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
154号住	古墳	6C後	H-7、I-7	4.90 × 4.95	23.94	N-102°-E	東置	○	長方形	50×50	80	4本	35	81	30	62	30	65	35	89
155号住	平安	9C後	I-7	3.20 × 2.50	7.87	N-111°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
156号住	古墳	6C後	H-7・8、I-7・8	4.50 × 4.20	17.64	N-109°-E	東置	○	長方形	110×90	85	4本	30	71	30	72	35	85	35	94
157号住	古墳	7C前	H-8、I-8	5.10 × 4.20	22.14	N-96°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
158号住	古墳	7C前	H-8	5.90 × 5.35	31.45	N-107°-E	東置	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
159号住	古墳	6C後	H-8・9	4.50 × 4.40	18.83	N-108°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
160号住	古墳	6C後	H-9	4.70 × 4.10	20.29	N-11°-E	北置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
161号住	古墳	6C後	G-9、H-9	4.60 × 4.70	21.42	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
162号住	古墳	7C前	E-6・7	5.70 × 5.59	28.71	N-0°-E	北置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
163号住	古墳	6C後	E-7	4.00 × 3.70	14.49	N-109°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
164号住	古墳	6C後	E-6・7	4.45 × 3.30	16.11	N-4°-E	北置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
165号住	平安	9C前	H-8	3.00 × 3.30	9.99	N-114°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
166号住	古墳	6C後	H-8	—	—	N-107°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
167号住	古墳	6C後	H-8	4.20 × 4.20	17.37	N-52°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
168号住	古墳	6C後	D-6・7	2.50 × —	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
169号住	古墳	6C後	D-6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
170号住	古墳	7C前	H-7、I-7	2.45 × —	—	N-103°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
171号住	不明	E-7	不明	2.40 × —	—	N-15°-E	北置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
172号住	平安	9C後	E-6・7	2.45 × 3.00	7.35	N-92°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
173号住	不明	G-5・6	不明	3.85 × —	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
174号住	平安	9C後	E-6	— × 3.50	—	N-78°-E	東置	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第2節 遺物について

(1) 遺物の取り扱いについて

発掘調査を進めてゆく中で、土器を中心として多くの遺物が出土する。それらの遺物に対し、どのような意味づけを行い、どのような方法で取り上げたら最も有効な調査となり得るのであろうか。このことについて考えつつも、多くの遺構と遺物の中にあつて実施出来た方法は、多くが従来行つて来た方法と基本的には同じである。発掘調査を進めて行く中で遺構確認の出来ない出土箇所や、遺構検出面上層で出土した遺物はグリッドで取り上げ、遺構内より出土した覆土上層の小破片は、覆土遺物として取り上げた。そのため多くは平面図や断面図等において記録は取っていない。遺構覆土の下層～床面の遺物も小破片に関しては、覆土上面出土の遺物と同様に取り上げた。大きな破片や床面上の小破片を中心として柱状に残して、平面実測と写真撮影を行った。遺物出土状況台帳を用いて遺物番号・種類・器種・部位・標高値・床面よりどのくらい浮いているか又は床面下であるか等について記録した。

発掘調査の結果、住居跡や土坑さらに遺構の検出出来なかつた地区等から、土器や石器その他の遺物80756個が検出された。それらは縄文時代・奈良時代・平安時代・中近世時代と多くの時代にわたっている。その中では奈良・平安時代の遺物が多い。各遺構出土の遺物については、遺構ごとに概略を説明し、実測図と遺物観察表を用いて出来るだけ詳細な報告に努めた。

(2) 時代別出土遺物一覧表について (第9～13表)

この一覧表は、遺跡内出土遺物の中で、報告書中に実測図を載せなかつたものすべてについて、時代別に遺構名・器形・種別・残存部分の位置・非版組総数・版組遺物の種別等について、細かく分類し作成したものである。その中にはその遺構を使用した遺物の外に、遺構が放棄されてからの遺物も当然多く含まれている。それらを一切の選択なしにすべて載せたものである。この一覧表を詳しく検討すると、住居等の遺構放棄後に持ち込まれた遺物の問題についても多くのことを教えてくれる。

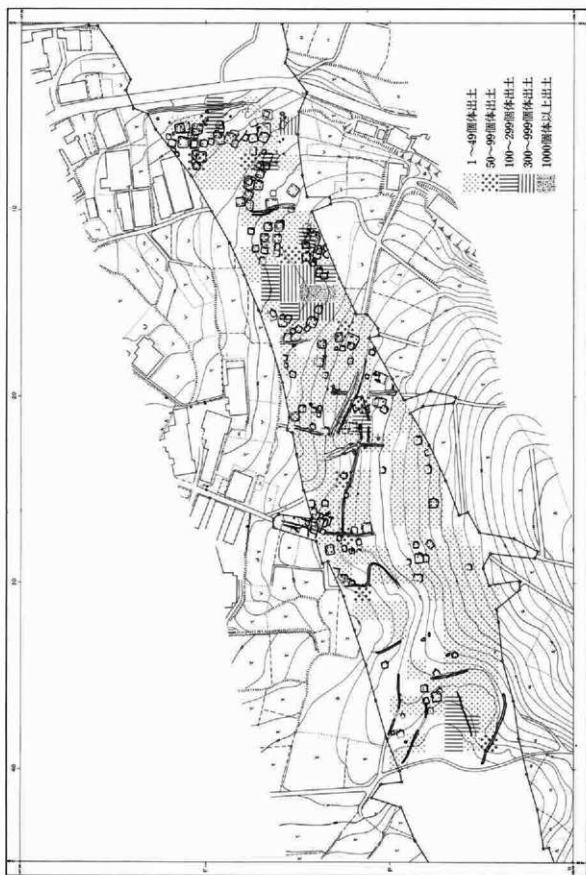
(3) グリッド遺物について

重機を用いて表土除去を行い、その後遺構確認を行う。そこで遺構の検出された場所より出土した遺物はその遺構に伴うものとして取り扱い、多くを実測図や観察表を用いて図示した。実測されない遺物は一覧表で記録した。しかしいずれの遺構にも伴わない遺物も大量に出土している。これらの遺物はグリッド遺物として扱った。その中で少量出土する地区と大量に出土する地区が認められた。そこで図を用いて出土量別に図示した(519図)。その結果10m²のグリッドの中で出土が全く認められない所と49個以下の出土グリッドが大部分を占めており、50～299個また300個以上出土したグリッドが一定の場所で集中的に認められることが明らかとなった。このように出土量には以下の一定の傾向が認められる。

- ① 出土量が0～49個出土しているグリッドは、遺跡内の大部分を占めており住居等の遺構の有無にはあまり関係無いようである。住居の多いグリッドからの遺物が少ないのは、重機を用いて表土を除去した為と思われる。
- ② 出土量が50～299個また300個以上出土している地区は3ヵ所で認められ、いずれも住居等の遺構がほとんど作られていない地区である。この3ヵ所はいずれも谷地または低地である。I区とII区間の谷からは特に多く出土し、多いグリッドは1000個以上出土している。これらの3ヵ所は遺跡内の土器捨て場としての在り方が考えられる。

第4章 調査成果の整理とまとめ

構 造 名	土 質 群										土 質 群										非 規 組 成 数	取 扱 数			時 期			
	土 質 群					土 質 群					土 質 群					土 質 群						土 鉄 石 数	土 鉄 石 数	土 鉄 石 数				
	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部	口 底 部						口 底 部		
109号住	5		2	60																			68	1	1	69	9C?	
111号住	2	4	6	10																			22	1	1	23	9C前	
113号住			39	210	3	14	3																272	6	1	7	279	9C前
114号住	21	4	6	317	3	1	3																535	10	1	11	366	9C前
115号住	26	10	32	572	11	56	6	2															792	6		6	798	9C前
116号住	15	5	91	590	8	34	16	2															746	20	1	21	767	9C前
120号住	3	2	1	9	12	1																	26	1	1	1	39	9C後
123号住	25	20	27	173	4	10	4	3															401	7	1	8	409	10C後
127号住	13		35	311	2	21	17																407	9		9	416	5C後
128号住						15	2																48	5		5	53	10C後
135号住	5		9	36	3																		58	3		3	61	5C後
147号住	208	145	385	2073	31	97	26																3110	16	4	20	3130	5C前
159号住	13	4	19	91	2	39	9	2															183	8		8	183	9C後
165号住	23	7	18	103	4																		153	3		3	158	9C前
172号住	8	6	37	252	8	50	3	2															411	17	1	18	429	5C後
174号住	1	1	17	47	5	7																	88	4	1	5	93	9C後



(4) 多胡蛇黒遺跡出土の墨書土器と漆紙

高島 英之

本遺跡では、5軒の住居跡と1本の溝から、合計8点の墨書土器が出土している。谷をはさんで隣接する矢田遺跡¹⁰に比して、住居跡の分布は大変まばらな印象を受けるが、それでも奈良・平安時代に限っても100軒以上検出されており、墨書土器の極めて少ない事例の一つと言えるだろう。

今日、1遺跡において100点を越す墨書土器の出土が報じられることが決して珍しいことではなく、なかには300点を越えるような調査例も報じられるような状況下では、48点の墨書土器をはじめ、合計62点の文字資料が出土した矢田遺跡も、調査規模や検出遺構数からみれば、文字資料の非常に少ない遺跡と言える¹¹。谷地をはさむとは言え、本遺跡は矢田遺跡と一連のものとして村落を構成していたとみてよく、墨書土器の僅少さもこの付近一帯に展開していたであろう村落の特質の一つとして指摘できよう。なお、本遺跡の西南に位置し、同じく多胡郡の韓級郷の故地の一つとして考えられている長根羽田倉遺跡でも、検出遺構の規模に比して墨書土器の出土量は大変少なく、本遺跡周辺—あるいはそれにとどまらず相当広い範囲を想定する必要があるのかもしれないが—の地域的特色と言えるのかもしれない。村落内における墨書土器は、村落・単位集団、あるいはさらに狭く一住居跡内における祭祀や儀礼に際して使用されたものが多いと考えられるが、墨書土器が大量に出土した遺跡が注目を浴びるなかで、こうした非常に少量しか出土しない遺跡についても、それとの対比で注意していくべきであり、用途・機能・使用形態など墨書土器全般のあり方を考えていく上で、出土遺跡ごとの墨書土器の相密の問題も考慮に入れていく必要があろう。また、先にも述べたように墨書土器は一つの村落内、あるいは単位集団、さらにはもっと狭く一住居内といった非常に限定された空間・人的関係の中における祭祀や儀礼行為に伴って使用されたものであり、墨書行為や文字の有する意味は、おそらくそれぞれの限定されたエリアの中でのみ通用するものであったと考えられている。すなわち、こうした細部を重視することと同様、一郡とか一国内といった相当広い領域の中での墨書土器出土遺跡の趨勢にも着目し、地域全体もしくは各地域間など巨視的な観点で墨書土器の動向を検討することも、墨書土器論の構築にむけて不可欠であろう。

本遺跡出土の墨書土器は、何分にも少ない上、確実に判読できるのは全8点中5点にすぎず、特色とか傾向を示すことは無理であるが、強いて特記事項として2・3あげてみよう。まず、墨書土器が出土した住居跡の分布については、全体数が少ないので何とも言い難いが、10号と13号、16号と52号というように各々が近接しているようである。だが、調査区全体における住居跡の広がりからみれば、特定の部分に墨書土器出土の住居跡が存在しているわけではない。また、記載してある文字については、隣接する矢田遺跡と共通するものは全く存在せず、また矢田遺跡では体部内面に文字を有するものが多かったが、本遺跡では体部外面に墨書するものが殆んどある。矢田遺跡と共通する文字が全くみられない点については、矢田遺跡でも同一の文字が複数出土する事例が非常に少ないので、その点とも関連しようが、集落遺跡出土の墨書土器の全体的傾向の中では、同一の文字を数世代にわたって書き継いでいる事例が多いので、その点も特異な傾向と言えることができる。文字内容では、52号住居跡出土の「得万」が注意されよう。この「得万」は極めて特色ある字形で、「得」をあたかもアルファベットの「B」に似た書式につくが、すでに平川南氏も指摘しておられるように¹²「得」の草書体で、中国の居延漢簡等にも見える字体であり、「得万」という語を記した墨書土器も近年東日本各地—例えば山形県道伝遺跡・千葉県永吉台遺跡群・福島県台畑遺跡など—から出土しており、古代ではかなり広範囲で熟語として使用されたものであったようである。また、39号住居跡出土の5「甘」は、隣郡である甘楽郡との関連が想定できるかもしれない。いずれにしても一文字のみの記載であり、一文

字だけではその意味はいかようにも解釈できるので、本遺跡のように墨書土器全体の量が少ない事例では文字の意味を問うことは無理である。

ところで、この39号住居跡出土の5の内面には漆紙の付着が確認されている。この漆紙についての自然科学的な分析や検討については国立歴史民俗博物館・永嶋正春助教教授にお願いしているが、最後に若干触れておくことにしたい。

周知のように、漆紙とは、漆の状態を良好に保つためのふた紙に、漆がしみこんだために腐食することなく地中に遺存したものである。本遺跡出土の漆紙は、平安時代初期・9世紀前半と考えられる須恵器環の底部に付着して発見された。茶褐色をなし、表面は大きく波打っている。表面の剥落が甚しい上、剝片状に割れており、遺存状態は非常に悪く、現状では勿論、赤外線テレビカメラを使用しても文字は全く確認できなかった。

なお、漆紙文書は、1978年に宮城県の大賀城跡ではじめて確認されて以来、現在までに東北各地の城柵遺跡をはじめ全国でおよそ50遺跡を越える出土例が報じられているが、これに伴い、一方でこうした文字の全く確認できない漆紙の出土事例も近年ではかなり増加しつつある。因みに群馬県内でも、新田郡蔵本町の六地藏遺跡、同新田町中江田遺跡、勢多郡粕川村宇通鹿寺、藤岡市上栗須寺前遺跡、などで文字の記載が全く確認できない漆紙が出土している。こうした文字が確認できない漆紙については、すでに平川南氏も指摘しておられるように、決してふた紙に白紙を用いたのではなく、風化や剥落によって文字が全く滅失してしまったものと考えるべきであろう。紙の極めて貴重な当時、漆塗りの作業に伴って用いられる漆容器のふた紙に、わざわざ未使用の白紙を使用したことは、常識的にも考えにくい。以下は平川氏の論考からの引用であるが、正倉院文書中には写経所等の紙の購入史料が存在しており、とくに天平宝字4年[760]12月30日付の法華寺阿弥陀浄土院金堂の造営にかかわる「造金堂所解」(『大日本古文書』16-301)には、

(前略)

「三 貳 六 五 七 五十六」

三貫九百七十文買紙六千九百四張直

「三

四 五十六」

八十一文×別三張

二貫八百七十四文買凡紙五千八百廿九張直

「二 十九」

六百二文買麻紙八十六張直 別別七文

二貫七百九十三文別二張

四百九十四文買本古紙九百八十九張直 文別二張

(後略)

とあり、凡紙(普通紙)は張別(1枚)0.3ないし0.5文、麻紙(高級紙)は1枚7文、本古紙(反故)は1枚0.5文である。反故紙が凡紙とほぼ同等の値ではあるが、本史料によれば、白米1升が5ないし6文、雇夫の功銭は1日につき10ないし14文ということであり、ここから考えてもいかに紙が高値であったかが判明するわけである。

註

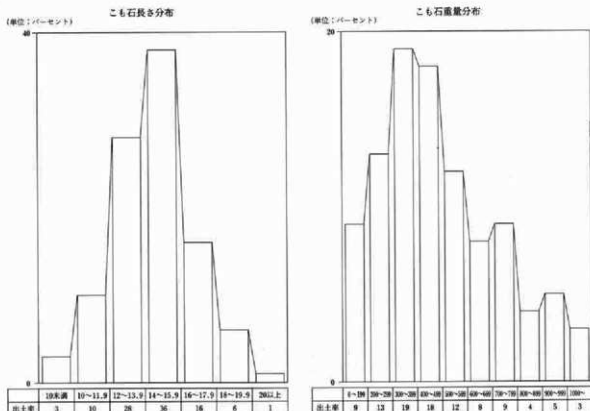
- (1) 朝鮮馬泉埋蔵文化財調査事業団「矢田遺跡」I～III 1990～92。
- (2) 拙稿「矢田遺跡出土の平安期における文字資料について」(「矢田遺跡」III 1992)。
- (3) 本遺跡では西側の方が強いという地形上の制約があるためかもしれないが、遺跡地東端の矢田遺跡に接する部分に近くなるほど遺構の分布が濃密であるという点からもそのように考えられる。また関口功一氏も八田郷の「領域」について、本遺跡西側の大沢川まで展開していた可能性を指摘しておられる(同氏「地理的環境及び歴史的環境」「矢田遺跡」II 1991)。
- (4) 鹿沼栄輔「出土の文字資料について」(朝鮮馬泉埋蔵文化財調査事業団「長根羽田倉遺跡」1990)。墨書土器は10点出土している。
- (5) 平川南「墨書土器とその字形」(「国立歴史民俗博物館研究報告」35 1991)、宮瀧文二「墨書土器と集落遺跡」(「藤沢市史研究」24 1991)。
- (6) 註(2)と同じ。
- (7) 平川南・天野努・黒田正典「古代集落と墨書土器」(「国立歴史民俗博物館研究報告」22 1989)。
- (8) 平川南氏註(5)前掲論文。
- (9) 平川南「漆紙文書に関する基礎的研究」(同氏著「漆紙文書の研究」1989)。
- (10) 拙稿「下小島遺跡出土の漆紙文書について」(朝鮮馬泉埋蔵文化財調査事業団「下小島遺跡」1991)。
- (11) 平川氏註(9)前掲論文。

第14表 多胡蛇黒遺跡出土の墨書土器一覧表

番号	掲載頁・図番号	出土遺構	契文	種別	器種	墨書の部位・位置	時期	備考
1	51-5	10号住居跡	□	須恵器	坏	体部 外面	10世紀前半	小破片
2	58-7	13号住居跡	□	須恵器	坏	体部 外面 正位	9世紀後半	
3	58-8	#	金	須恵器	埴	体部 外面 逆位	9世紀後半	
4	69-7	16号住居跡	□	須恵器	坏	体部 外面	7世紀後半	小破片
5	124-2	39号住居跡	甘	須恵器	坏	体部 外面 正位	9世紀前半	内面に漆紙付着
6	158-7	52号住居跡	金	須恵器	坏	体部 外面 正位	9世紀後半	
7	160-35	#	得万	土器	埴	体部 外面	9世紀後半	
8	511-2-4	2号 溝	□ 木 杵	須恵器	埴	体部 外面 正位 体部 外面 正位	10世紀前半	同一遺体の2ヶ所に墨書

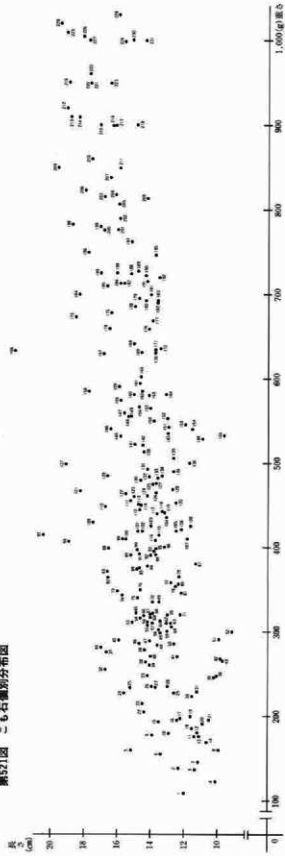
(5) こも石について

住居内より長さ15cm前後で重さ400g前後の細長い石が、一定の場所からまとまって出土している。従来よりこの石について「こも石」「薦編石」「薦編石状」「薦石状」等と呼ばれていた。この報告書の中ではこも石と呼称した。実際これに似た河原石で、薦（こも）を編んでみると実に手頃な大きさであり、効率的に薦を編む事ができた。またこのような石を用いて薦や炭俵を編んでいるのを見たこともある。しかし住居内より出土している石をよく観察すると、かならずしも大きさが重さが一定でないことがわかる。また住居内より出土するこも石は、特定の住居では大部分が軽量であるのに対し、他の住居では特に重量のあるこも石が集中的に出土するといった傾向がある。そこでこのこも石の大きさと重量について調べ、その結果を第520・521・522図と第11表に示した。図や表で明らかのように、こも石で最も多いのは長さ12cm以上で17.9cm以下、重量では200g以下である。しかし個々でみれば石の長さは9.1~22.1cmで、重量は109gから1400gと一定していない。これらのバラツキは長さに関してはほぼ2倍であるが、重量に関しては12倍以上の差がある。このようにこも石は長さに関してはほぼ一定の制約があるようであるが、重量に関しては大きな差があり、同じ目的で使用されたものとしては疑問である。一方で個々の住居内では、同じ目的のため使用し、重量がほぼ一定しているものと思われる。そこで住居別の平均重量と長さの違いから第522図を作成し、重量の違いの意味について調べてみた。その結果一定の住居には一定の長さや重量をもつこも石が存在している事が明らかになり、さらに重量の違いからおおよそ2つのグループに別れる事も明らかとなった。そのグループをA(12軒)・B(6軒)グループとした。この違いが何を表わしているか明らかでないが、平均した重量はAグループが374.7gでBグループが17.9gとなり、両グループの間に約20倍の差がある。通常の薦（こも）はAグ

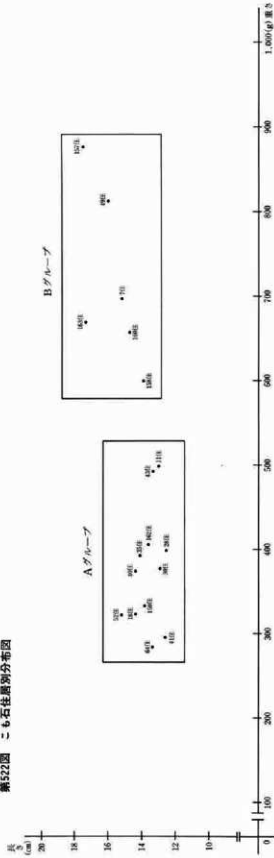


第520図 こも石の長さや重量分布図

第521図 こも石層別分布図



第522図 こも住居別分布図



第4章 調査成果の整理とまとめ

第15表 住居別にも石一覽表 (Noは第○図の番号を表わす。)

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
197	7号住-11	15.1	8.5	4.5	763
207	12	16.4	8.2	3.4	839
194	13	16.0	6.1	4.5	725
217	14	16.1	9.4	4.3	900
168	15	15.0	7.8	3.5	641
79	16	12.3	7.9	2.0	364
185	17	16.6	9.1	3.5	710
215	18	17.0	8.0	3.8	900
176	19	14.1	8.8	3.4	639
127	20	13.7	7.7	4.6	477
平均		15.2	8.2	3.8	697.8

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
182	11号住-7	13.6	8.4	4.1	690
192	8	13.5	9.0	5.3	720
20	9	10.9	4.7	2.7	190
143	10	13.0	5.9	4.2	535
196	11	17.7	7.0	3.8	751
150	12	13.8	7.3	3.1	552
170	13	13.7	8.5	3.8	630
7	14	11.2	3.5	2.6	146
43	15	9.7	5.3	3.3	217
平均		13.0	6.6	3.7	497.9

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
74	18号住-16	15.7	4.5	3.5	344
111	17	15.2	5.9	4.1	457
130	18	14.6	5.3	4.9	480
123	19	15.0	6.7	3.9	460
46	20	14.7	5.5	3.0	286
82	21	16.6	4.0	3.6	365
65	22	14.9	4.5	3.7	322
12	23	11.2	5.9	2.3	180
1	24	12.0	4.3	1.3	109
2	25	12.3	5.7	1.5	138
73	26	16.0	5.7	2.6	348
62	27	13.1	7.2	3.0	310
119	28	13.2	6.7	2.9	441
29	29	12.6	5.0	2.6	227
96	30	13.2	6.7	3.5	400
108	31	11.6	6.5	3.7	425
69	32	13.5	5.9	3.4	335
68	33	13.9	5.2	4.1	321
80	34	12.3	6.1	3.4	356
5	35	15.2	4.2	2.2	160
55	36	14.2	6.0	2.5	308
18	37	11.5	4.1	2.7	185
28	38	13.0	6.0	2.6	235
148	39	15.3	6.5	3.7	355
平均		14.4	5.6	3.1	322.8

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
67	28号住-18	14.0	6.4	2.1	320
51	19	9.9	6.5	3.0	390
52	20	9.1	6.1	3.6	300
93	21	13.8	6.4	2.4	395

35	28号住-22	10.2	9.2	2.0	246
114	23	14.6	6.5	3.2	450
201	24	16.0	5.8	5.1	777
106	25	12.2	6.8	3.1	420
平均		12.5	6.7	3.1	399.8

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
115	30号住-8	13.5	4.7	4.2	415
87	9	11.3	5.2	4.1	380
22	10	14.4	4.8	2.7	205
34	11	14.1	5.1	2.5	260
38	12	14.3	5.2	3.0	264
61	13	13.4	6.0	2.3	313
76	14	14.6	5.5	3.4	350
132	15	14.1	5.5	4.1	484
72	16	13.9	4.4	3.0	335
165	17	14.6	5.9	4.1	602
95	18	13.7	6.2	4.3	398
118	19	13.3	6.3	3.3	442
81	20	12.2	4.9	3.5	345
平均		12.9	5.4	3.4	368.7

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
66	35号住-6	14.4	5.6	2.6	319
229	7	15.5	8.0	5.0	999
85	8	14.7	7.0	2.5	375
83	9	16.6	6.4	2.0	371
8	10	9.9	5.1	2.0	160
174	11	16.5	7.4	4.0	659
13	12	11.1	5.5	2.2	175
49	13	11.6	6.7	2.4	200
14	14	17.0	4.8	3.6	281
平均		14.1	6.3	2.9	383.2

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
36	60号住-20	10.1	4.9	3.0	247
100	21	15.5	6.1	3.5	410
92	22	14.0	6.0	2.8	390
84	23	14.8	7.4	2.3	374
213	24	18.8	6.5	4.5	910
99	25	15.7	5.9	2.7	410
4	26	10.1	4.8	1.6	123
27	27	13.7	4.0	3.2	235
121	28	18.2	4.8	3.9	466
10	29	12.9	5.1	2.0	179
平均		14.4	5.6	3.0	374.4

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
57	41号住-3	14.0	6.8	2.3	317
107	4	11.8	7.3	3.3	411
53	5	15.1	5.0	3.4	311
26	6	13.9	5.2	3.3	235
90	7	14.8	5.7	3.5	397
105	8	12.5	6.8	3.5	419
48	9	13.6	5.4	2.9	284
14	10	10.5	5.3	1.9	195

42	41号住-11	9.8	6.6	3.0	267
21	12	10.6	5.9	1.6	170
3	13	11.3	4.0	2.2	137
116	14	13.7	6.6	2.7	409
平均		12.6	5.9	2.7	296

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
16	43号住-8	12.4	4.7	2.1	195
112	9	14.7	5.6	3.4	444
144	10	10.9	6.7	3.7	528
157	11	14.0	6.3	3.9	564
163	12	14.1	6.9	3.5	580
147	13	15.6	5.9	4.9	560
139	14	12.6	5.4	4.3	506
63	15	12.8	6.2	2.5	310
138	16	14.4	8.2	3.0	513
152	17	13.0	7.5	4.4	533
134	18	11.5	7.1	4.2	540
151	19	14.2	5.8	4.5	492
130	20	15.2	4.8	3.1	390
117	21	13.6	6.9	3.2	440
133	22	13.6	7.1	3.4	482
178	23	15.0	6.6	4.3	866
120	24	12.5	6.4	3.7	453
169	25	14.5	8.1	3.5	631
128	26	12.7	7.8	4.0	468
145	27	9.8	5.7	5.2	532
平均		13.3	6.5	3.7	493.4

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
228	49号住-8	15.9	9.9	5.0	1300
187	9	15.6	8.0	4.5	714
216	10	16.3	9.3	3.8	900
230	11	15.1	8.2	5.6	1090
210	12	17.5	9.5	3.6	860
156	13	14.7	7.0	4.7	566
103	14	14.0	7.2	3.3	425
200	15	16.8	9.8	3.3	776
171	16	13.7	6.7	3.9	634
199	17	17.0	8.3	4.1	781
202	18	15.8	8.8	3.8	791
225	19	19.0	9.2	3.9	1100
193	20	17.0	7.3	3.5	725
平均		16.0	8.4	3.8	813.2

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
47	52号住-64	14.1	4.8	3.3	288
40	65	14.0	3.9	3.1	270
25	66	15.2	4.6	2.9	234
24	67	15.6	4.1	2.7	227
45	68	15.9	5.5	2.2	290
109	69	17.5	5.3	3.5	429
184	70	18.3	5.6	4.0	700
137	71	19.1	5.5	3.2	498
39	72	14.4	4.6	2.6	278
54	73	14.6	5.1	3.3	316
6	74	13.4	5.3	2.0	155
9	75	13.9	3.8	3.1	188

第2節 遺物について

110	52号住-76	16.7	5.2	3.6	448
49	77	13.4	4.7	3.0	298
56	78	14.2	5.1	2.7	311
50	79	12.6	5.5	2.9	285
37	80	16.6	5.1	2.3	275
75	81	14.8	5.8	3.1	340
平均		15.2	5.0	3.0	323.9

209	157号住-14	19.5	7.0	5.3	850
219	15	18.9	8.6	4.9	950
223	16	16.4	7.2	5.9	950
206	17	17.9	7.0	4.7	824
224	18	19.4	6.6	5.0	1200
32	19	16.7	3.7	2.6	255
205	20	15.9	7.9	3.8	808
平均		17.5	7.1	4.3	868.2

189	160号住-19	14.8	7.7	4.1	728
161	20	14.7	8.0	3.4	595
177	21	13.9	6.4	4.5	669
平均		14.7	7.6	4.0	657.9

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
60	64号住-22	13.9	6.1	2.3	310
23	23	14.5	5.4	2.2	215
17	24	12.2	5.3	2.2	197
59	25	13.0	5.1	2.6	300
149	26	15.2	5.4	3.8	555
30	27	11.5	6.0	2.7	223
15	28	13.5	3.7	2.7	193
平均		13.4	5.3	2.6	284.7

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
153	158号住-11	11.9	6.8	3.8	545
183	12	13.6	8.2	3.7	692
175	13	16.4	7.2	4.0	678
142	14	14.5	6.6	4.2	521
190	15	14.3	7.6	4.5	723
172	16	13.4	7.4	4.3	636
136	17	11.7	6.4	3.8	590
208	18	14.2	8.3	3.8	814
188	19	15.2	8.2	3.7	724
151	20	12.9	5.7	5.1	542
78	21	12.5	6.9	2.8	354
141	22	15.0	8.6	2.8	522
204	23	16.1	6.4	4.8	819
125	24	13.9	6.0	3.9	475
134	25	13.3	7.7	3.5	484
平均		13.9	7.2	3.9	601.9

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
102	162号住-12	14.5	6.3	3.0	420
41	13	12.4	4.2	3.9	270
179	14	14.7	8.2	3.7	695
86	15	14.2	5.9	3.3	378
101	16	14.8	6.6	2.5	419
104	17	13.1	6.8	3.4	435
64	18	12.7	5.7	3.1	306
124	19	14.2	7.6	3.3	461
58	20	13.5	6.0	2.6	301
71	21	12.2	5.8	2.6	320
126	22	13.7	6.0	2.9	464
平均		13.6	6.3	3.1	406.3

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
33	150号住-13	14.2	5.4	2.7	248
31	14	11.2	6.0	2.6	229
77	15	12.8	6.1	4.3	358
97	16	10.4	5.9	2.8	415
11	17	11.4	4.7	2.1	175
91	18	14.7	6.3	2.9	392
135	19	12.7	6.6	3.6	490
70	20	13.0	5.3	2.8	300
94	21	13.7	7.3	2.2	391
平均		13.8	6.0	2.9	335.3

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
180	160号住-8	14.3	9.0	3.4	693
195	9	13.7	7.8	4.7	746
164	10	13.1	7.0	3.6	581
191	11	14.2	7.2	4.5	716
182	12	14.5	8.3	3.5	585
155	13	15.8	5.9	4.6	575
113	14	14.7	6.7	3.1	451
160	15	15.0	8.2	3.3	581
181	16	14.0	8.5	4.1	700
227	17	17.6	8.5	4.8	1000
159	18	15.8	7.8	3.7	591

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
98	163号住-7	18.9	5.9	2.5	407
167	8	16.8	7.8	3.3	630
140	9	15.8	6.1	3.7	532
221	10	12.6	6.6	5.0	950
158	11	17.7	6.8	3.5	586
212	12	19.0	9.0	3.5	920
214	13	18.3	7.2	4.3	910
198	14	18.7	7.4	4.2	784
88	15	16.5	4.7	3.3	399
211	16	15.8	8.1	4.3	850
218	17	14.8	6.5	5.9	900
122	18	15.5	4.4	3.9	463
129	19	16.6	6.0	3.4	485
186	20	15.8	8.6	3.2	713
146	21	16.4	6.9	3.3	541
166	22	22.1	6.2	3.1	632
平均		17.3	6.8	3.8	668.9

No	住居 遺物No	大きさ (cm・g)			
		長辺	短辺	厚さ	重量
203	157号住-8	16.8	7.3	4.5	816
220	9	17.6	7.3	5.2	950
222	10	17.6	6.8	5.2	960
226	11	18.0	7.9	5.6	1050
231	12	14.3	9.2	5.0	1000
173	13	18.5	6.2	3.9	673

ループの石で十分編むことができるため、倍近い重い石を選び、また経ひもを縛り付けて蓄えておくには不便となる幅の広い石をあえて選んで使用しているため、同じ製品を編んだものとは考えにくい。おそらくBグループではAグループより重い重量を必要とした別な製品を編むために、このような石が必要とされていたものと思われる。今後遺跡内より多く出土している紡錘車の問題も含め、編む・織る文化について追及してみたい。

また従来よりこも石は加工されていない自然石が使われていると考えられてきた。しかし詳しく観察してみると、すべてのこも石ではないが多くのこも石で、両側面の中央部に2〜3カ所の小さな打ち欠いたような痕跡が観察できた。この側面中央部の欠損部は、経ひもを縛り付けて蓄えておくとき、石が左右にずれて落ちないように滑り止めの役割を果たしており、その効果は大きい。この欠損部は石と石を打ち付けることにより、簡単に作ることが出来組織である。

付表 群馬県内出土の紡錘車一覧表

① この表は、中沢 悟 春山秀幸 関口功一「古代布生産と在地社会」『群馬の考古学』(群馬県埋蔵文化財調査事業団1988)で提示した【群馬県内出土の紡錘車集成】を基礎とし、1988年以降1992年12月までに増加した報告書分の資料を追加し、一部修正し作成したものである。

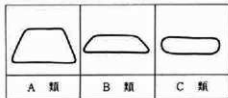
② 遺跡は市町村別に配列し順序は、前橋市・勢多郡・高崎市・群馬郡・渋川市・北群馬郡・藤岡市・多野郡・富岡市・甘楽郡・安中市・碓井郡・沼田市・利根郡・伊勢崎市・佐波郡・太田市・新田郡とした。

③ 形状の分類はA・B・C類とし、以下の基準で前回と基本的に同様であるが、D類は採用しなかった。

A：断面の形状が台形を呈する類。

B：断面の形状がA類に比して著しく扁平な台形を呈する類。

C：断面の形状は長方形に近い円盤状を呈する類。



④ 時期に関しては報告書に記載されている内容を基本的に記入している。報告書に記載されていない場合は、筆者の判断により便宜上時期を記入した。誤認もあると思われるため、掲載した遺跡はすべて末尾に文献を記載してあるので、正確には報告書で確認してほしい。

⑤ 材質や石材名称についても報告書に記載されているものを記入した。

⑥ 「No-」の項に付されている数字は、末尾に付した文献の番号と一致する。

⑦ 内容に不備も多いと思われるが、今後資料の追加とともに修正してゆきたい。

第16表 群馬県内出土の紡錘車一覧表

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考
1	豊野	C 4号住	石(蛇紋岩)	B	4.1/2.4	1.05			9 C後半	未製品
		C 8号住	土	B	5.3/3.4	1.5	1.0		"	
2	鳥羽 G・H・I区	包含層	石	B	5.2/	2.0	0.8			
		G-9号住	鉄		5.4	0.5			10C前半	
		G-23号住	石(燐石安山岩)	A	6.3/3.9	3.9	0.9		9 C前半	
		G-45号住	鉄						10C前半	
		G-81号住	石(蛇紋岩)	B	4.9/4.0	1.1	0.9		10C前半	
		H-38号住	石(角閃石安山岩)	A	7.2/5.0	3.0	1.3		10C前半	
		I-92号住	石(蛇紋岩)	B	5.1/4.0	1.4	0.9		8 C後半	
3	鳥羽 I・J・K区	J-97号住	石(蛇紋岩)	B	4.0/2.9	1.4	0.8		9 C前半	
		K-56号住	鉄		5.0				8 C後半	
		K-65号住	石(蛇紋岩)	A	4.4/3.0	2.0	0.8		7 C前半	
		I区工屑跡	石(蛇紋岩?)	B	4.5/3.3	1.4	0.7	39.5		
4	鳥羽 L・M・N・O区	M-37号住	鉄		4.4	0.3			6 C後半	
		M-59号住	石(燐石膏結晶片岩)	A	3.8/2.7	2.15	0.8	44.2	7 C前半	
		L-185号住	石(燐石)	C	4.8	1.1	0.8		9 C後半	
		"	土	C	6.4	0.9	0.9		"	燐石膏片転用
		L区第4台地	石(燐石)	A	4.2/2.4	2.2	0.7			
		H区	石(角閃石安山岩)		6.9	2.8	1.2	111.0		
		"	石(角閃石安山岩)	A		3.0	1.4	48.7		
		K区	石(燐石)		4.0/1.5	1.8	0.5			
5	前田	17号住	石	B	4.2/3.1	1.4	0.8	22.25	不明	
		18号住	石		4.5/3.4	1.0	0.8	35.41	平安	
		グリッド一属	石	A		1.5				
		"	石	A		1.4				
6	内郷遺跡群Ⅳ	35号住	土	C	5.5	1.7	0.6	37.0	古墳前期	
		45号住	土	C	4.4	1.3	0.7	13.0	"	
		59号住	土	C	4.6	1.2	0.6	34.0	"	
		61・62号住	土	C	4.0	2.0	0.7	26.0	"	
		一坊	土	C	6.5	1.3	0.7	32.0		
7	荒砥洗橋	74号住	鉄					9 C後半		
8	飯土井二本松	1号住	石(安玄武岩)		(4.2)	0.9	0.4	5.1	古墳中期	
		8号住	石(砥沢石)	B	5.4/4.6	1.8	1.0	68.4		
		11号住	石(砥沢石)	A	3.3/2.5	1.8	0.8	20.8	8 C後半	
		20号住	石(流紋岩質凝灰岩)	B	5.3	1.3	0.8	27.8	"	
		"	石(砥沢石)	A	4.0/	1.5	0.7	24.0	"	
9	荒砥上川久保	4区15号住	石(塊状性結晶片岩)	B	4.9/	1.0	0.7		9 C	
		5区29号住	石	A	6.0/3.4	2.4	1.0		古墳	
		6区15号住	石(角閃石安山岩)	B	(6.3/4.5)	1.8	1.0		古墳	
		6区20号住	石(燐石)	A	6.4/3.6	1.9	1.1		6 C後半	
10	下東西	S J 163	石(蛇紋岩)	B	6.0/5.2	1.5	1.0		9 C後半	
		S K 248	石(流紋岩)		4.7	4.0				未製品
		S J 189	鉄		5.5	0.4				
11	荒砥北原	表探	石(角閃石安山岩)	C	3.35	1.25	0.7	6.0		

第4章 調査成果の整理とまとめ

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考	
12	二之宮千足	2区22号住	石(蛇紋岩)	B	4.8/3.0	1.5	0.9		8 C後半		
		60号溝	石(蛇紋岩)	C	3.8	1.6	0.6				
13	風砦天之宮	C区21号住	石	A	4.75/3.4	1.5	0.7			刻書あり	
		D区47号住	石	A	3.5/2.5	2.6	0.8	47.5			
		D区52号住	石	A	4.6/2.7	1.9	0.65	36.8	11C		
		D区73号住	石	B	5.2/3.1	1.2	0.7	48.3	6 C前半		
		E区5号住	石	A	4.0/	1.8	0.75	13.6	6 C前半		
		＃	石	A	4.2/2.1	1.4	0.8	29.9	＃		
14	高城北三木堂Ⅰ	2区15号住	石(燔石)	A	3.8/2.7	1.8	0.7	42.2	6 C前半		
		2区30号住	石(燔石)	C	4.0	0.9		17.6	6 C前半		
		2区31号住	土	C	3.1	1.2				弥生	
		4区19号溝	土	C	5.0	0.8	0.7	19.3		羽形/磁器	
		5区23号土坑	鉄		4.0	0.8					
		5区83号土坑	鉄		4.5	0.7				刺突紋	
		表探	土	C	5.9	2.0		64.4		刺突紋	
		＃	土	C	5.0	1.2		15.2		刺突紋	
15	内堀遺跡群Ⅲ	H-10号住	土	C	6.3	2.4	0.7			古墳前期	
		＃	土	C	7.2	2.1	0.9			＃	
		＃	土	C	2.5					＃	
		H-14号住	土	C		2.1				＃	
16	内堀遺跡群Ⅱ	H-15号住		A	4.5/2.6	1.7	0.6			弥生	
		＃		B	5.2/4.4	1.4	0.6			＃	
		H-17号住		B	5.4/4.6	1.4	0.6				
		地割れ		C	3.8	1.4	0.6				
17	荒子小学校Ⅱ・Ⅲ	18号住	石(凝灰岩)	A	3.6/2.7	2.3	0.6				
		20号住	石	A	4.5/3.0	1.5	0.9	57.0	8 C後半	線刻あり	
		＃	石	A	4.6/3.5	1.4	0.8	48.0	＃	線刻あり	
18	柳久保遺跡群Ⅳ	9号住	鉄		5.8	0.25	0.4			9 C後半	
		57号住	石(凝灰岩)	B	5.4/4.8	1.4	1.0			10C前半	
		63号住	石(燔石)	B	4.1/2.8	1.3	0.6			8 C後半	
		65号住	石(燔石)	B	4.8/3.2	1.6	0.9			＃ 文字線刻	
		＃	石(燔石)	B	4.9/3.6	1.2	1.0			＃	
		＃	石(燔石)	A	5.6/3.6	1.6	0.9			＃	
		66号住	石	B	4.7/3.6	1.2	1.3			10C	
		81号住	石(凝灰岩)	A	3.6/2.4	2.4	0.6			6 C後半	磁石転用
				石	B	4.5/3.5	1.5	0.7			
19	陸奉		石	B	5.0/3.7	1.9	0.9				
			石	B	4.4/3.8	1.3	0.7				三叉線痕
20	芳賀東部団地Ⅰ	H-270号住	土	C	6.2	1.4	0.8			遺書あり	
		H-272号住	石(蛇紋岩)	B	4.8/4.0	1.6	0.8	66.3	9 C後半		
		H-278号住	石(輝石安山岩)	A	6.4/3.6	2.6	0.8	118.4	8 C後半		
		H-294号住	石(燔石)	B	4.1/3.6	1.0	1.0	18.3	8 C後半		
		H-304号住	石(流紋岩)	A	5.0/3.6	1.8	0.7			8 C後半	
		H-308号住	石(蛇紋岩)	A	3.8/2.4	1.3	0.7	29.5	9 C前半		
		H-312号住	石				2.3			9 C後半	

第2節 遺物について

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考	
20	芳賀東部団地Ⅰ	H-314号住	石(頁岩)	A	4.6/2.4	1.5	0.7	48.5	7C前半		
		H-364号住	石(蛇紋岩)	A	3.5/3.0	1.3	0.9		8C後半		
		H-375号住	土			4.2	0.9	0.8		9C後半	須恵器片つまみの形用
		H-383号住	石(蛇紋岩)	A	4.1/3.0	1.2	0.9			9C後半	文字線刻
		製鉄址	石							破片	
21	芳賀東部団地Ⅱ	H-15号住	石(角閃石安山岩)	B	7.5/6.5	2.3	0.9		9C中葉		
		H-50号住	鉄			8.0	0.7		9C前葉		
		H-81号住	石(凝灰岩)	B	4.4/3.8	1.4	0.8		9C後葉	砥石転用	
		#	石(蛇紋岩)	A	3.7/2.7	1.5	0.9		9C後葉	文字線刻	
		#	石(角閃石安山岩)	C	6.1	2.5	0.9		9C後葉		
		H-65号住	土	C	4.2	1.3	0.8		8C後半	須恵器製転用	
		H-77号住	石	B	5.6/4.5	1.4	0.9		9C後葉	刻書	
		H-79号住	石	B	5.6/4.7	1.6	1.0				
		H-122号住	石(かんらん岩)	A	4.3/2.8	2.1	0.6			7C前半	
		H-132号住	石	A	5.7/4.5	2.2	1.2			9C前葉	
		H-140号住	石(凝灰岩)	A	4.3/3.0	2.4	0.8			8C前葉	
		#	石	A	4.7/3.1	1.6	0.7			8C前葉	鏡刻あり
		H-157号住	石(かんらん岩)	A	4.1/2.1	2.2	0.6			7C前半	
		H-191号住	石(蛇紋岩)	A	4.2/2.9	1.5	0.7			9C前葉	
		H-194号住	石(かんらん岩)	A	4.6/3.1	1.5	0.9			8C後葉	
		H-197号住	鉄			5.1	0.6	0.5		9C後葉	
		H-212号住	石(かんらん岩)	A	3.2/1.5	1.5	0.7			9C後葉	
		H-217号住	石(蛇紋岩)	B	3.9/2.4	1.0	0.8			9C前葉	
		H-229号住	石(蛇紋岩)	B	3.8/3.3	1.5	0.7			7C前半	
		H-245号住	鉄			4.1	0.4			11C前半	
		H-253号住	石(蛇紋岩)	B	5.6/4.0	1.5	0.9			9C中葉	
		H-344号住	石(かんらん岩)	B	4.4/3.6	1.1	0.8			9C後葉	
		H-345号住	石(滑石)	C	4.1	0.9	0.9			9C中葉	
H-350号住	石(滑石)	B	4.1/3.0	1.4	0.8			8C後葉			
H-482号住	石(蛇紋岩)	A	4.7/3.0	1.3	0.75			8C中葉			
H-487号住	石(滑石)	A	4.3/3.1	2.0	0.8			9C前葉			
H-216号住	鉄			3.4	0.4			9C前葉			
		竪立柱建物跡	石		3.8/2.6	1.4	0.6			文字線刻	
22	柳久保遺跡群Ⅲ	H-10号住	石(軽石)	C	4.8	1.1	0.6	14.0	和泉期		
		H-20号住	石(かんらん岩)	A	4.5/2.6	1.3	1.2	43.0	真岡期		
		H-34号住	石(蛇紋岩)	A	3.7/3.1	2.2	1.0	45.0	真岡期		
		T-10号懸穴状	石(かんらん岩)	A	4.9/2.6	1.2	0.8	18.0	和泉期		
		表探	石(かんらん岩)	A	4.7/2.6	1.6	0.6	42.0			
23	引切塚	9号住	石(蛇紋岩)	A	3.9/2.5	2.2	0.8	22.78	6C後半		
24	梅木	3号住	石(滑石)	A	5.0/2.0	1.7	0.7	29.0	6C		
25	鳥羽A・B・C ・D・E・F区	F-3号住	鉄			5.0	0.4		9C後半		
		F-21号住	土	C	5.0	0.7	0.7		9C後半	土師器底部転用	
		F II 17号住	石(緑泥片岩)	A	4.8/2.0	1.9	0.8	53.0		線刻	
		表探	石	B	5.1/3.9	1.4	0.9	44.7			

第4章 調査成果の整理とまとめ

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考	
南	26 元純社明神	H-30号住	石	A	3.3/2.1	1.6	0.6		6C前半		
		H-37号住	鉄			3.6	0.4	0.6		11C以降	
	27 天神	22号住	鉄			4.4	0.6			11C前半	
		2号井戸	石	A	4.8/3.2	2.0	0.8			10C後半	線刻あり
	28 寺田	D-3土坑	石	C	4.4	1.7	0.7			古墳	
		C-2ドリッド	土	C	5.6	0.8	0.3			古墳	土器部転用
		D-6土坑	土	C	6.3	1.0	0.9			古墳	土器部転用
		C-4ドリッド	石	A	4.4/2.4	2.1	0.8				
	29 塚越	3号住	石	A	4.5/2.5	1.8	0.9				
	30 富田・西大室	69号住	石	A	4.5/2.5	2.3	0.4				
		96号住	土	C	6.5	1.3	0.6			弥生	
		97号住	土	C	5.2	1.5	0.7			弥生	
31 荒砥北部	H-43号住	石	B	4.8/3.6	1.2	0.9				毛彫り	
	H-40号住	石									
	H-61号住										
	H-73号住										
32 閑泉榎南	4号住	石(滑石)	A	4.4/2.6	1.5	0.7	41.8	古墳			
33 草作	H-20号住	鉄		5.1	0.2	0.2		10C前			
34 前箱田	表探	石	B	4.6/3.1	0.7	0.9				尖鋭鎌穿孔	
	#	石	B	4.1/2.7	1.2	1.0				#	
35 元純社		土		(3.1)	0.7					裏側面研磨	
36 山王庵寺	皿層	石	A	3.8/2.2	1.1	中断				角閃石宝山首	
37 青柳寄居	H-6号住	土		5.8	2.0	0.4		10C前		高台部転用	
38 鶴谷		石	A	4.35/2.7	1.8	0.75				欠田焼割	
	29号住		B	3.9/2.3	1.2	0.75					
	1号住	石		2.6	1.8	0.3				滑石	
39 小神明	BH 9			3.3/1.7	1.0	0.6			古墳		
	1号住			4.0/2.6	0.9	0.7			8C後		
	52号住	石	A	3.6/2.35	1.6	0.65			古墳	滑石	
40 横久保 I	H-3号住	石		7.78	1.4			古墳		円盤状磁石	
41 宮跡島原	E区16号住	石	A	3.8/							
42 白藤古墳群	A-1号墳	石	B	4.3/2.7	1.0	0.8	28.9				
	BH-40号住	石	B	4.3/2.4	1.1	1.0	28.2		6C前半		
	HH-6号住	石	A	5.1/2.4	1.55	0.8	42.9		6C前半		
43 西畑	12号住	石(滑石)	A	4.4/2.7	1.9	0.9	55.9		9C後半		
	32号住	土	C	4.6	1.3				弥生		
	#	土	C	5.5	1.6	0.6	54.6		弥生		
	33号住	土	C	5.2	2.1		44.0		弥生	へう磨き	
44 堤頭	F 4-4号住	土	C	4.2	1.3	0.5			弥生		
	F 4-6号住	土	C	2.6	1.0	0.4	7.7		弥生	径が小さい 滑石か?	
	#	土	C	5.0	1.5	0.6	49.0		弥生		
	#	土	A	4.5/3.3	2.0	0.5			弥生		
	F 4-10号住	石(頁岩)	B	5.2/4.0	1.5				9C後半		
	F 4-12号住	土	C	3.7	1.5	0.6			古墳中期		
	F 4-16号住	土	C	3.9	1.5	0.8	24.0		弥生		

第2節 遺物について

	No	遺跡名	出土遺構	材 質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備 考					
船川村	44	堤頭	F 4-16号住	土	C	7.0	1.5	0.8	98.5	弥生						
			F 5-17号住	石(角閃石安山岩)	A	5.6/4.4	1.9	0.8		8 C後半	安山岩					
	45	前田F-1	2号住	土		4.4	4.2	0.7		6 C前半						
新里村	46	南天笠	41号住								古墳前期					
			8号住	石(礫石)	A	4.5/3.2	1.6	0.7	50.0							
			16号住	土	C	7.2	2.5	0.7			古墳初					
			27号住	石(礫石)	A	3.9/3.8	1.7	0.85	42.0		9 C後半					
赤城村	48	勝保沢中ノ山	16号住	石(礫石)	A	4.3/2.6	1.5	0.7	37.1	5 C前半						
			49	寺内	祭祀遺物	石(礫石)	A	3.5/2.8	1.5	0.8		古墳中期				
富士見村	50	田中田	1号住	土	A	4.8/3.9	2.6	0.9			古墳前期					
			13号住	石(礫石)	B	5.1/3.3	0.9	0.8			古墳前期	縁刻あり				
			53号住	石(礫石)	A	4.3/2.1	1.8	0.8			7 C前半					
	51	見取	5号住	石(礫石)	A	4.2/1.8	1.8	0.8			9 C前半					
			#	鉄		4.6	0.2				9 C前半					
52	向吹張	11号住	石	A	3.5/1.8	1.2	0.8			8 C前半						
53	天神風呂	26号住	石(礫石)	A	4.8/2.8	3.6	0.85			10 C後半	礫石加工					
高崎市	54	熊野堂(I)	表塚	土	C	4.6	1.7	0.7								
			55	熊野堂(II)	47号住	石(蛇紋岩)	B	5.0/3.3	1.4	0.8	51.2	9 C後半	縁刻に縁状文字確認あり			
					66号住	土	C		1.2		17.0	10 C前半	1/4程度の縁に削り痕			
					75号住	鉄					8.8	7 C末	縁部			
					81号住	石(蛇紋岩)	B	4.8/3.1	1.6	0.8	56.4	9 C後半	縁刻に縁状文字確認あり			
					#	石(蛇紋岩)	B	4.1/3.0	1.2	0.8	35.3	9 C後半	縁刻に縁状文字確認あり			
					145号住	石(礫石)	A	4.1/1.9	1.9	0.6	40.0	6 C前半	縁刻に縁状文字確認あり			
					188号住	石(蛇紋岩)	A	4.2/2.0	1.4	0.7	33.6	6 C前半	上面に縁状文字確認あり			
					4区2号住	石(蛇紋岩)	A	5.5/1.4	1.6	0.6	55.1	5 C後半				
					4区10号住	鉄			0.6		55.0	11C第1百千				
					4区18号住	土	C	5.0	1.4	0.8	38.9	弥生後期				
					33溝	土	C	2.8	0.8	0.3	3.3					
					遺構外	鉄			0.1							
					#	鉄			0.6							
					高崎市	56	藏通寺	1区8号住	石(蛇紋岩)	A	4.5/2.4	1.6	0.6	47.5	8 C後半	
								1区122号住	石(蛇紋岩)	A	4.7/2.7	1.7	0.7	53.0	8 C後半	
								2区58号住	鉄						9 C後半	
2区27号溝	石	B	4.9/3.3	1.0				0.9	39.7							
4区8号住	土	C	7.3	1.0				0.9	61.6	11C前半	遺構外/溝部に縁					
4区21号住	石	C	4.7	1.4				0.8	35.6	9 C前半	縁部あり/断面不規					
4区50号住	鉄		4.0							9 C前半						
4区19号溝	土	C	5.0	0.8				0.7	19.3		遺構外/溝部に縁					
5区23号土坑	鉄		4.0	0.8												
5区83土坑	鉄		4.5	0.7												
高崎市	57	新保II	114号住	土	C	5.5	1.2	0.6			弥生中期後半					
			126号住	土	C	5.5	1.2	0.6			弥生後期					
			263号住	土	C	5.5	1.4	0.5			弥生後期					

第4章 調査成果の整理とまとめ

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考		
57	新保Ⅱ	141号住	石	C	5.6	1.0	0.6		古墳前期			
		151号住	石	C	4.0	0.8	0.2		古墳前期			
		282号住	土	C	6.1	1.2	0.9		古墳前期			
		1号房溝墓	土	C	4.0		0.2		弥生後期			
		100号溝	石		5.0		0.3		弥生後期			
		2号遺物群	土	C	8.0		1.0		古墳前期			
		包含層	石	C	3.9		0.15		弥生~古墳			
		#	石	C	5.7		0.3		#			
		#	土	C	5.3		0.6		#			
		#	土	C	6.7		0.9		#			
		#	土	C	5.6		0.6		#			
		#	土	C	10.7		1.1		#			
		#	土	C	2.6		0.3		#			
		#	土	C	5.5		0.7		#			
		58	下齊田	4号住	石(鹿紋岩)	A	4.6/3.4	2.0	0.6	43.9	9C前半	
表探	石			A	5.1/4.2	2.3	0.8	28.8				
C-62号住	石			B	5.5/3.8	1.4	0.8		9C後半			
D-61号住	石			C	4.0	1.8	0.6		8C後半			
D-64号住	鉄											
D-98号住	石			B	4.0/3.4	1.2	0.7		8C後半			
E-6号住	石			B	4.4/3.2	1.4	0.8					
井戸19	土			C	4.0	1.1	0.6					
60	田端			寺家33号住	石(滑石)	A	4.4/2.6	2.0	0.7	30.4	6C後半~7C	表層に三角形の フニフニ模様
61	船橋			4区2号住	石(滑石)	B	5.0/3.0	1.0	0.8	35.97	5C前半	
				5区3号住	石(滑石)	B	4.4/2.1	1.0	1.2	27.16	5C前半	
				5区14号住	土	C	4.5	0.6	0.6		11C前半	遺物群付遺跡 利用
				6区3号住	石(蛇紋岩)	A	4.1/2.2	2.1	0.6	47.22	6C後半	
62	下佐野			1地区B38号住	石(滑石)	A	4.2/3.3	1.8	0.6		6C末~7C初	
				1地区A区11号住	土	A	5.0/3.0	1.6	0.5		10C	
		1地区B34号住	鉄									
63	下佐野Ⅱ	3区4号住	石(滑石)	C	3.9	1.3	0.8		9C前半	表層に放射線 状模様		
		4区14号住	石(蛇紋岩)	A	4.9/3.1	1.8	0.8		9C中葉	上面に刻字・ 刻痕あり		
		5区4号住	石(蛇紋岩)	A	4.5/2.7	1.8	0.8		古墳後期			
64	熊野堂Ⅲ南壁	道路状遺構6	石(滑石)	A	4.5/2.7	2.3	0.7					
		14号住	鉄		3.2	0.2						
65	新保田中村前Ⅱ	9号住	土(砥沢石)	B	5.2/3.2	0.9	0.9	28.2	9C後半			
		166号住	土	C	4.2	2.1	0.9		弥生後期	表層に縦5~11 刻痕あり		
		167号住	土	C	5.2	0.8			弥生後期			
		169号住	土	C	5.2	1.5	0.8		弥生			
#	土	C	5.8					弥生後期	1/4残存			

第2節 遺物について

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考	
高	66 新保I	大溝	土	C	4.6	0.8	0.7				
		#	土	C	5.0	1.0					
		#	土	C	5.0	1.0					
		#	土	C	5.2	0.9					
		#	土	C	5.2	1.3	0.7				
		#	土	C	5.8	1.0					
		#	土	C	6.0	1.5				片蓋に放射状 瓦割	
		#	土	C	4.5	1.0	0.7				
		#	土	C	5.0	1.2				鉄土表出竹筒 銅瓦割	
		#	土	C	5.5	1.1					
		#	土	C	4.0	1.5	0.7				
		#	土	C	4.8	1.4	0.8				
		#	土	C	5.0	1.4	0.7				
#	土	C	5.0	1.1	0.6						
#	土	C	4.1	0.8							
崎	67 八幡中原	156号住	石	B	4.2/2.4	1.8	0.6				
		住居址内	石	A	4.1/1.8	0.9	0.8				
		#	石	A	3.9/1.8	1.4	0.8				
		#	石	A	4.1/1.8	1.7	0.8				
		#	石	A	4.0/2.1	1.7	0.8				
		#	石	A	4.5/2.4	1.2	0.6				
#	石	A	4.4/2.4	2.0	0.6						
市	68 石原稲荷山	玄室	石	A	3.5/3.0	1.8	0.4		古墳後期	紡塞は鉄芯	
	69 引間	41号住	土	C	4.4	1.7	0.6		古墳中期		
		45号住	土	C	4.2		0.6		弥生後期		
	70 天神	表掘	石	A	4.8/2.8	2.0	0.8				
	71 妻附	3A住	土		5.4				弥生後期	刺突紋	
	72 大島原	2号住	石	A	4.7/2.7	1.8	0.9			5C後	
		#	石	A	4.5/2.4	1.5	0.6			5C後	
		#	石	B	4.7/2.3	0.9	0.9			5C後	
		#	石	A	4.1/2.1	1.8	0.9			5C後	
	73 大八木箱田地	1号住	石	A	4.0/1.3	1.2	0.6			5C後	
74 日高	表掘	土	C	2.9	0.6	0.6					
群 馬 町	75 上野国分僧寺・ 尼寺中部地域(2)	F区25号住	鉄		3.8			13.6			
		F区50号住	鉄		5.4	0.2		29.3	10C前半		
		F区57号住	石(滑石)	A	4.3/2.1	2.2	0.7	50.0	7C末-8C前		
		G区21号住	鉄		6.0	0.2		26.0	9C前半		
		#	鉄		4.6	0.2		16.1	9C前半		
		G区29号住	土	C	5.9	1.1	0.9	42.8	9C前半		
		G区50号住	石(蛇紋岩)	A	3.3/2.6	1.6	0.7	20.8	9C前半		
		G区66号住	鉄		4.3	0.3	0.5	19.1	9C前半		
		G区103号住	土	C	6.8		0.9				遺棄銅片磁器 瓦割
		H区56号住	鉄		4.6	0.3	0.5	15.7	9C後半		
	76 上野国分僧寺・ 尼寺中部地域(3)	H区128号住	石(滑石)	B	3.6/3.0	1.0	0.6	22.0			
H区130号住		石(蛇紋岩)	A	3.8/2.7	1.4	0.6	40.0				

第4章 調査成果の整理とまとめ

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考	
群	77 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域 (4)	C区37号住	石(蛇紋岩)	A	5.1/2.1	1.2	0.7	39.5	7C後半		
		C区46号住	鉄					30.7	10C中葉		
		C区76号住	石(蛇紋岩)	A	3.8/2.7	2.1	0.7	42.3	9C中頃		
		C区遺構外	鉄		4.5			14.2			
		J区36号住	石(角閃石玄岩)	C	7.4	3.5	0.3	139.6	8C後半		
		B区105号住	鉄		4.8			6.5	9C前半		
	78 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域 (5)	B区116号住	石(蛇紋岩)							9C後半	
		A区118号住	石(滑石)		4.4/2.4	1.7	0.5			7C前半	
		B区遺構外	土	C	6.0						遺棄跡/高塚 転用
		#	石(滑石)	A	4.5/	1.1	0.6				
		#	土	A	5.7/3.4	1.7	0.8				
		D区1号住	鉄					54.1			
		B区61号住	土	C	7.7	0.6	0.8				遺棄跡/高塚 転用
		B区78号住	石(蛇紋岩)	B	5.1/3.2	1.5	0.9	60.0			
B区95号住		石(蛇紋岩)	A	4.2/2.7	1.6	0.8					
B区115号住		石(滑石)	B	4.0/3.0	1.6	0.6	40.0				
79 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域 (6)	A区53号住	石(蛇紋岩)	B	4.6	1.0	0.8			9C後半		
	A区54号住	石(蛇紋岩)	A	4.2/3.0	1.9	0.8			9C前半		
	A区80号住	石(蛇紋岩)	A	3.9/2.4	1.9	0.7					
	Z区45号住	石(滑石)	B	2.4/1.5	0.7	0.3			6C後半		
	A区土坑	土		6.3	1.0	0.8				土器転用	
	80 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域 (7)	I区1号住	鉄							9C後半	
I区76号住		鉄							7C後半		
I区211号住		石(砥沢石)	A	4.5/3.2	1.7	0.4	49.1		8C前半		
I区6号獨立		石(滑石)		4.1	1.9		19.4				
201土坑		石(砥沢石)		3.4	2.0		31.4			未製品	
表探		石(深山前層凝灰岩)	B	5.2/	1.6	0.5	19.3				
#		石(滑石)	C	5.5	1.0	0.5	49.9				
#		石(霞貫玄武岩)	A	4.4/2.1	2.0	0.6	52.7				
#		石(かんらん岩)	B	5.0/3.9	1.6	0.9	68.0				
町		81 因分横	B区72号住	土	C	5.5	2.0	0.8			
	C区10号住		石(滑石)					32.9	9C		
	C区13号住		鉄						9C		
	C区50号住		石(滑石)	B	3.4/2.7	0.8	0.6	14.9			
	C区61号住		石(蛇紋岩)	A	4.0/2.3	2.0	0.9	51.1	8~9C		
	C区64号住		石(蛇紋岩)	A	3.6/	1.8	0.8	23.5	9C		
	B区トレンチ		石(滑石)		3.6/			16.6			
	11号住		石(褐色滑石片岩)	B	4.3/3.1	1.1	0.8	35.7	10C前半		
	82 北原	18号住	石(凝灰岩)	B	5.5/4.7	1.7	0.9	68.0	8C後半		
		27号住	石(滑石片岩)	B	5.0/3.5	1.4	0.9	58.1	9C前半		
#		石(凝灰岩)	A	4.5/3.6	2.2	0.9	78.0	9C前半			
32号住		鉄						10C前半			
57号住		石(凝灰岩)	A	5.5/4.3	2.1	0.7		9C前半			
60号住		石(凝灰岩)	A	4.8/2.7	2.0						

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考
馬	82 北原	90号住	鉄						9 C後半	
		#	鉄						9 C後半	
		#	鉄						9 C後半	
		#	鉄						9 C後半	
		98号住	鉄		6.1	0.3			9 C後半	
	99号住	鉄						10 C後半		
	83 三ッ寺 I	表採	石	B	5.6/3.0	2.0	0.8			
			石	A	3.6/2.0	1.5	0.7			
	84 三ッ寺 II	1区1号住	土	A	4.4/2.4	3.0	0.6	22.7	6 C	
		3区6号住	石(滑石)	A	4.0/2.3	1.9	0.6	43.7	古墳後期	
		3区30号住	土	C	4.1	1.45	1.0	27.3	弥生後期	
		3区31号住	石(滑石)	A	3.9/2.4	1.7	0.65	38.5	7 C前半	
		3区62号住	石(滑石)	A	4.1/2.6	1.7	0.7	42.9	6 C前半	
		4区14号住下	石(滑石)	B	4.4/2.3	1.2	0.6	32.4	古墳後半	
		4区72号住	石(滑石)	A	3.4/2.2	1.3	0.6	29.4	6 C後半	
5区41号住		石(滑石)	A	4.2/2.4	1.7	0.6	38.9	6 C前半		
85 三ッ寺 III	60号住	石(角閃石安山岩)	C	4.9	1.2	0.6		6 C後半		
	27号住	石(石英安山岩)	A	4.1/3.0	2.0	0.7				
	表採	石(輝緑岩)	B	4.4/2.8	1.4	0.7				
86 上野国分寺築地城	B地点	鉄								
87 西園北	D 6号住	土	C	5.4	0.7	0.9		古墳時代		
	D 3溝	土	C	4.3	1.2	0.6		弥生時代		
88 保渡田 Ⅱ(1)	10号住	土	C	4.4	1.0	1.1		弥生後期	瓶底部転用	
89 西園中E	H-5号住	石	B	4.8/4.4	0.8	0.4				
90 保渡田東	7区6号住	石(滑石)	A	5.0/2.9	1.5	0.7		8 C前半		
町	91 井手村東	20H	石	A	3.1/2.1	1.4	0.5			
		28H	石	A	4.2/2.4	1.5	0.6			
		46H	土	C	4.0	1.2	0.6			
	92 保渡田 荒神前血掛	E-5号住	土	C	5.5	1.5	0.7		古墳前期	
		G-6号住	石(滑石)	A	4.0/2.2	2.2	0.7		奈良	
E-3号住		鉄	C	6.6	0.4	0.6		平安		
D-2号住		石(流紋岩)	A	4.2/3.2	1.7	0.9				
#		石(滑石)	A	4.2/3.5	1.4	0.6				
93 中林	48号住	石(滑石)	A	3.8/2.0	1.8	0.5				
94 小池	H-15号住	石	A	4.1/3.3	1.5	0.8		7 C前半		
	H-31号住	石	A	4.0/2.5	2.0	0.7		8 C前半		
箕郷町	95 生原・善徳寺	E区S B 22	石	A	4.2/2.1	1.5	0.6			
	96 海行A・B	A区S B 7	石(蛇紋岩)	A	3.9/2.1	1.8	0.6			
浜川市	97 有馬 Ⅱ	201号住	土		5.0	1.3			古墳前期	
		254号住	石(流紋岩質凝灰岩)			2.0			弥生後期	
		包含層	土	C	4.8	1.2				
		#	土	C	4.3	1.2	0.9			
	98 有馬桑塚Ⅰ	368号住	土	C	4.1	0.7			弥生後期	
382号住	石	C						古墳前期		

第4章 調査成果の整理とまとめ

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考		
99	有馬桑理Ⅱ	1号住	石(燧石)	A	4.7/3.5	1.9	0.7		平安	「有馬公口」の 縁起あり		
		33号住	鉄						9 C後半			
		#	鉄						9 C後半			
		113号住	石(角閃石夾山岩)	B	6.8/3.2	2.0	0.6		10 C後半			
		188号住	鉄		6.8				10 C前半			
		120号住	土	C			1.2		10 C後半			
		231号住	石	A	4.0/2.4	2.0	0.6		7 C前半			
		250号住	石	A	3.8/2.0	1.4	0.6		7 C前半			
		342号住	骨	C		6.0	0.8	1.1			鹿の角	
		100	有馬Ⅰ 大久保 B	15号住	石	A	4.5/2.3	2.1	0.6			10 C前半
				101号住	鉄							11 C前半
				107号住	石	A	3.9/2.4	1.9	0.6			6 C後半
		101	有馬桑理	H H-22号住	鉄		5.0	0.8	0.7		40.0	10 C後半
				H H-25号住	石	B	5.1/3.0	1.6	0.9		54.0	10 C後半
E-2グリッド	石			B	4.5/3.7	1.4	0.9	40.0				
H D-37号土坑	石			B	4.3/3.3	1.1	0.9	32.0				
102	神宮寺西	1号住	石(砂岩)	C	4.5	0.7	0.25	12.0	弥生後期			
		#	石(砂岩)	C	7.0	0.8	1.0	10.0	弥生後期			
		3号住	石(流紋岩)	C	5.2	0.8	0.6	39.0	弥生後期			
		6号住	石	C	(8.5)	2.15			8 C後半			
103	中村	7号住		C	3.55	0.9	0.8	19.0	8 C後半			
		#		B		1.05	0.5	11.0	8 C後半			
		25号住			3.9/2.3	1.65	0.7	36.0	8 C後半			
		31号住		C	(4.5)	1.0	1.0	10.12	8 C後半			
		3号住		C	3.8	2.1	0.8	48.0	8 C後半			
									織期			
104	大久保AⅠ区	6号住	鉄		3.8	0.25	0.6	11.1	9 C後半			
		28号住	鉄		4.9				7 C前半			
		36号住	土		4.7/3.6	2.1	0.6	42.9				
	105	大久保AⅡ区	31号住	鉄					13.3			
			51号住	石(流紋岩)	B	4.8/3.9	1.4	1.0		10 C後半		
			58号住	鉄						10 C後半		
			#	鉄					21.2	10 C後半		
			61号住	石(流紋岩)	A	4.4/3.3	2.0	0.95		8 C前半		
			62号住	土						10 C後半		
			75号住	鉄					20.6	11 C前半		
106	七日市	92号住	石(凝灰岩質砂岩)	B	5.7/5.35	1.7	0.65		9 C後半			
		94号住	鉄					7.0	10 C後半			
		118号住	石(流紋岩)	A	3.95/2.8	1.55	0.9	43.3	10 C後半			
		Ⅱ区グリッド	石(流紋岩)	A	4.9/	2.4	0.9	74.0				
		#	土	C	6.8	1.4	1.5			土器質の 転用		
		25号住	土	C	6.4	0.8	0.9	25.0	10 C後半	坪産部転用		
		71号住	鉄		3.6	0.2			9 C後半			
		80号住	鉄		5.8	0.15	0.5	20.0	10 C前半			
107	黒井峯	4号住	石	A	5.1	1.7	0.7		6 C中頃			

第2節 遺物について

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考
108	竹沼	E H-1号住	石	A	4.2/2.8	1.4	0.8			
		#	石							未製品
		#	石							未製品
		#	石							未製品
109	藤岡市道路詳細 分布調査(II)	No.2 遺跡表探	石(凝灰岩)	A	2.8/1.2	0.85	0.3	4.9		
110	温井	5号住	石(滑石)	A	5.6/2.4	1.6	0.75		6 C前半	
		16号住	石(滑石)	B	4.4/2.2	1.4	0.7			
		17号住	石	A	5.6/3.2	2.6	0.5		6 C前半	
111	本郷山根	4号住	石	A	4.2/2.6	1.7	0.8	48.1	9 C中頃	
		5号住	石					100.4	6 C後半	未製品
		11号住	石					55.5	6 C中頃	未製品
112	上栗須 下大塚 中大塚	I区28号住	石(蛇紋岩)	A	4.4/3.0	1.3	0.7	333.0	9 C後半	
		I区44号住	石(滑石)	A	4.6/2.2	1.5	0.8	51.3	9 C後半	
		III区1号住	石(蛇紋岩)	A	4.2/2.4	2.2	0.7	70.0	8 C前半	
		III区50号住	石(蛇紋岩)	B	5.0/4.0	0.8	0.9	50.0	8 C後半	
113	本郷尺地	IV区粘採坑	土	A	4.5/	2.1	1.0			
114	B 4 株木	H 2号住	鉄			6.3	0.4		9 C後半	
		H16号住	石(滑石)	A	4.4/3.0	1.2	0.8		9 C後半	
		1号建物	鉄			7.5	0.7	0.8	9 C後	
		#	石	B	4.4/3.3	1.2	0.6		9 C後	
		#	石	A	4.0/2.3	1.4	0.7		9 C後	
		#	石	A	4.4/2.5	1.7	0.8		9 C後	
115	A 1 堀之内	GH44号住	石(凝灰岩)	B	4.5/2.7	1.2	1.2		10 C前	
		#	鉄							軸
		#	鉄							軸
		F区M15号住	石	A	4.9/2.5	2.3	0.7			
		表探	石	A	4.1/2.4	1.4	0.6	40.15		
116	森	2号住	石	A	4.0/2.3	2.5	0.7		5 C後半	
			石	A	4.3/2.8	1.7	0.6		5 C後半	
		10号住	石	A	4.1/2.7	2.0	0.6		8 C	
117	川堀	5号住	石	A	6.6/3.6	3.0	1.2		9 C前半	
118	川内	53号住		C	5.7	1.0	0.8			
		74号住		C	4.8	1.1	0.6			
119	東吹上	1号住	土	A	6.0/3.6	2.8	1.0			
		#	石(滑石)	B	6.4/3.2	2.0	1.2			
120	入野	# 3号住	土	B	4.0/3.3	1.2	0.7		古墳中期	
		# 15号住	石	A	3.5/1.9	2.1	0.5			
		3号住	石	A	4.2/1.8	1.9	0.6	38.9	6 C後半	
		6号住	石(滑石)	A	3.8/2.2	1.8	0.8	38.5	7 C前半	
		21号住	石(蛇紋岩)	A	4.2/2.2	2.1	0.6	46.0	6 C後半	
		1号土坑	鉄		4.3	0.3	0.7			

第4章 調査成果の整理とまとめ

No.	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考	
121	柳田	2号住	石	A	4.2/2.0	2.1	0.6	40.0	7C後半		
		5号住	石(蛇紋岩)	B	6.8/5.0	1.4	0.8	100.0	8C後半	荒い摩滅	
		#	石(蛇紋岩)	A	5.4/3.2	2.2	0.7	80.0	8C後半	刃物取	
122	黒熊	2区16号住	石	A	4.6/3.0	2.2	0.6				
		# 25号住	鉄			4.9	0.4	0.3	14.0	10C後半	
		# 35号住	石(滑石)	C		4.8	1.2	0.6		8C後半	
		# 13号住	石	C		4.7	1.4	0.6			
		4区24号住	石(蛇紋岩)	B		7.8/6.2	1.6	0.8	120.0	6C後半	「下家一」
		#	石(蛇紋岩)	B		7.5/6.6	2.2	1.0	66.2	6C後半	
		5区10号住	石	B		3.2/2.6	1.5	0.9			
		5区41号住	石	A		4.4/3.2	1.9			7C後半	未穿孔
		6区12号住	土			(7.2)	1.2	0.8		弥生後期	調査へらさき
		123	橋谷戸	2号住	石(滑石)	B	4.0/2.8	1.2	0.6	32.0	8C前半
#	石(滑石)			A	4.4/1.4	2.2	0.6	56.0	8C前半		
124	東沢	9号住	石(滑石)	A	4.1/1.7	1.6	0.7	33.2	古墳後期		
		32号住	石(滑石)					40.6			
		グリッド	石	A	4.2/2.6	1.8	0.6	36.6			
125	羽田倉	9号住	石(滑石)	A	4.4/3.0	2.6	0.8		7C後半		
		42号住	石(滑石)	A	4.6/2.5	2.2	0.6	66.0	6C後半		
		74号住	石(滑石)	A	3.8/2.4	1.8	0.8	36.0	7C前半		
		98号住	土	A	7.1/5.3	1.7	0.8	28.0	9C後半		
		#	石(蛇紋岩)	A	5.2/3.0	1.5	0.7	86.0	9C後半		
		113号住	石(安山岩)			6.0	2.5		100.0	8C後半	未製品
		117号住	石(蛇紋岩)			5.8/5.3	2.1		100.0	11C前半	未製品
		118号住	石(滑石)	A	4.9/2.7	2.1	0.7	70.0	8C後半		
		#	石(滑石)	B	4.3/3.1	1.3	0.7	42.0	8C後半		
		#	石(滑石)	B	4.2/3.2	1.5	0.7	50.0	8C後半		
		#	石(滑石)			(4.0/1.7)	0.9		6.0	8C後半	未製品
		122号住	石(緑色片岩)			6.0/4.2	1.4	0.7	32.0	8C後半	未製品
		#	石(緑色片岩)			長3.2、幅1.8	1.0			8C後半	未製品
		#	石(緑色片岩)			長3.4、幅1.1	0.4		3.5	8C後半	未製品
		128号住	石(緑色片岩)			3.5/2.4	0.6	0.6	8.1	9C後半	破片
		134号住	石(かんらん岩)			4.1/2.7	1.9		3.0	8C後半	未製品
		69号住	石(蛇紋岩)	B		5.7/3.0	1.3	0.8	59.0	10C前半	
		#	石(蛇紋岩)	B		4.7/4.0	1.3	0.9	56.0	10C前半	
		#	石(蛇紋岩)	B		4.9/2.4	1.2	0.7	52.0	10C前半	
		#	石(蛇紋岩)	B		4.1/3.6	1.1	0.5	15.0	10C前半	破片
		2号溝	石(滑石)			7.1/6.6	2.3		170.0		未製品
		2区グリッド	石(滑石)			4.1/3.3	0.9	0.8	23.0		
		#	石(滑石)			(2.8/2.4)	0.6		6.3		破片
		#	石(蛇紋岩)			5.7/3.9	1.3		47.3		
		#	石(蛇紋岩)			(5.2/4.0)	1.3		2.1		破片
		#	石(蛇紋岩)			(5.1/3.8)	1.3	0.7	17.0		破片
		#	石(蛇紋岩)			(4.3/3.6)	1.7	0.8	27.0		破片

第2節 遺物について

No	遺跡名	出土遺物	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考	
吉井町	126 矢田 I	59号住	石(蛇紋岩)	A	4.56/2.33	1.94	0.7	49.2	10C後半	産別あり	
		75号住	石(蛇紋岩)	A	4.59/2.94	1.30	0.72	42.3	9 C前半		
		79号住	石(蛇紋岩)	A	4.67/2.32	1.87	0.72	52.3	11C前半	産別あり	
		83号住	石(蛇紋岩)	B	3.87/3.24	1.1	0.69	27.6	9 C前半		
		#	石(蛇紋岩)	B	7.11/5.0	1.83	0.81	145.9	9 C前半	産別あり	
		90号住	石(蛇紋岩)	A	4.26/2.68	2.05	0.67	55.4	11C前半		
		#	鉄			4.14	0.21	0.26	9.9	11C前半	
		134号住	石(凝灰岩)	A	4.77/2.07	2.17	0.75	54.0	10C前半		
		135号住	鉄			4.13	0.18	0.4	6.1	10C前半	
		#	石(蛇紋岩)	B	4.12/3.52	0.74	0.56	9.2	10C前半		
		143号住	石(緑泥片岩)				1.27	0.8	42.7	9 C後半	
		189号住	石(蛇紋岩)	A	5.07/3.05	1.64	0.81	54.8	9 C前半	産別あり	
		191号住	石(蛇紋岩)	B	4.40/3.55	0.98	0.72	32.4			
		201号住	石(蛇紋岩)	A	4.71/3.11	1.03	0.66	35.2	10C後半		
	#	石(蛇紋岩)	B	4.20/2.80	1.74	0.66	25.8	10C後半			
	264号住	石(蛇紋岩)	A	4.65/2.96	1.79	0.70	60.3	平安			
	309号住	石(蛇紋岩)	A	4.10/2.40	1.35	0.7	39.0	9 C後半			
	127 矢田 II	12号住	石(蛇紋岩)	B	4.59/3.37	1.43	0.86	51.5	9 C後半	産別あり	
		#	石(千枚岩)				0.8	63.3	9 C後半	未製品	
		#	鉄			6.2			51.1	9 C後半	
		23号住	石(礫石片岩)	B	5.0/4.6	0.87	0.9	18.0	9 C後半		
		283号住	石(礫石片岩)	A	3.82/2.53	1.58	0.69	34.9	10C前半		
		356号住	石(砂岩)	B	4.11/3.66	0.95		18.4	9 C後半	未製品	
	128 矢田 III	364号住	石(緑泥片岩)			5.27	1.12		63.9	9 C前半	未製品
		63号住	石(礫石片岩)	B	4.5/3.2	1.5	0.8	19.7	9 C後半		
		428号住	鉄			6.4	0.2	0.5	17.2	11C前半	
513号住		石(砂岩)	C	6.7	1.5	1.0	95.2	9 C後半			
585号住		石(礫石片岩)	A	3.8/2.9	1.7	0.8	44.1	9 C後半			
679号住		石(礫石片岩)	A	5.2/3.6	1.7	0.8	74.2	9 C	産別あり		
129 神保下塚	表標	石(礫石)	C	4.2	1.0	0.7	32.1	平安			
富	130 本宿・郷土	8号住	石(結晶片岩)	B	5.2/3.6	1.6	0.8		8C末~9C		
		44号住	石(流紋岩)	A	3.6/2.0	1.8	0.6	38.0	6 C前半		
		45号住	石(結晶片岩)	A	4.4/2.6	2.0	0.6				
		78号住	石(流紋岩)						7 C末	紛失	
		81号住	鉄						8C末~9C		
		96号住	石(凝灰岩)	A	4.2/3.2	2.6	0.8		7 C末		
		9号溝	石(結晶片岩)	A	5.1/1.6	1.4	0.8			古墳	
		18号住	鉄			5.6	0.4		150.0	9 C後半	
市	131 原田圃	13号住	石(礫石)	A	4.2/2.0	1.8	0.8		6 C		
		9トレンチ	石	A			1.4				
		2 Bグラッド	石	B	4.2/	2.0	0.6				
	132 内匠	1号住	鉄		4.3	0.7		15.3	9 C後半		
	133 野上堀入	1号住	鉄		4.3	0.7		15.3	9 C後半		
134 田藤上平		10号住	石(礫石)	B	4.8/3.7	1.6	0.4		8 C前半		
		11号住	石(礫石)	B	5.1/3.3	1.1	0.3		7 C後半		
	19号住	石(凝灰岩)	A	3.8/2.9	2.1	0.7		8 C後半			

第4章 調査成果の整理とまとめ

	No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考			
富岡市	135	内匠諏訪前	A区1号住	土	A	4.2/1.9	1.8	0.8	27.0	6C				
	136	横瀬古墳群	13号墳	石	A	4.2/	1.4	0.7			古墳終末期			
			5号墳	鉄			4.1	0.3	0.5			古墳終末期		
甘泉	137	笹	罐号住	石(滑石)			7.1	2.2				古墳	未製品	
			罐号住	石(滑石)									古墳	未製品
			W-II号住	石(滑石)	A	4.2/2.1	1.8	0.65					古墳	
			W-I号住	土	C	4.3	0.55							未製品?
	138	甘泉条埋	6号住	石(蛇紋岩)	A	5.0/2.6	1.5	0.8	55.9					
			9号住	石(滑石)	A	4.0/2.8	1.9	0.75	17.75				古墳後期	
			21号住	石(滑石)			4.9	1.55		61.5			6C前半	未製品
			27号住	石(砥沢石)	A	4.9/3.5	2.1	0.75	58.9				6C	
			30号住	石(滑石)	B	5.2/4.1	1.0	0.7	36.35				7C	
			31号住	石(滑石)	B	4.3/3.6	1.3	0.7	39.1				古墳前期	
			38号住	石(蛇紋岩)	A	4.1/1.7	1.7	0.6	31.3				古墳前期	
			46号住	土	A	6.6/4.0	3.2	0.7	150.0				6C	
			65号住	石(滑石)	A	4.9/2.6	1.65	0.9	49.7					
			75号住	石(滑石)			3.8	1.2		27.5			6C前半	未製品
			76号住	石(滑石)	A	4.5/2.5	1.95	0.6	51.6				6C後半	
			81号住	石(滑石)	A	4.4/3.1	1.5	0.7	45.1				6C	
			"	石(滑石)	A	5.1/1.7	1.4	0.6	37.5				6C	
			"	石(滑石)	A	4.0/2.0	2.05	0.6	22.7				6C	
			83号住	石(滑石)	A	4.1/2.5	1.4	0.8	29.3					
			84号住	石(滑石)	B	4.3/1.9	0.9	0.9	25.8				6C	
93号住	石(滑石)	A	(5.0)/2.5	1.8	0.6	33.55								
"	石(滑石)	A	3.7/1.3	1.2	0.8	21.8								
108号住	石(滑石)	B	(5.0)/	0.9		10.95				6C				
安中市	139	榎木畑	H-7号住	石(滑石)	A	4.0/2.4	1.7	0.4				8C前半		
	140	新寺地区	AH-12a号住	鉄			3.7	0.5	0.7	43.6			9C後半	
			BH-11号住	石(滑石)	B	4.1/3.6	1.1	0.8	40.1					
			AH-4号住	鉄									9C後半	軸のみ
			"	鉄									9C後半	軸のみ
			"	鉄									9C後半	軸のみ
AH-8号住	石(安山岩)	A	4.8/4.2	1.7	0.9	50.0				10C前半				
砂置町	141	高島井	8号住	石	A	4.9/2.1	2.1	0.8						
			9号住	石(滑石)	A	4.4/2.8	2.2	0.65				7C前半		
松井田町	142	松井田工業団地	B-2号住	鉄			4.0	0.23		15.0			磨良?	紡基欠
			B-54号住	鉄			5.6			60.0			9C後半	紡基損失
			B-81号住	石(滑石)	B	4.6/3.4	1.5	0.75	52.0				弥生後期	
			D	石(燧岩母片岩)	A	3.9/1.2	2.2	0.7	43.0					
			E-55号住	石(滑石)	B	4.8/3.5	1.5	0.9	53.0				8C後半	
			I	石(滑石)	A	4.4/2.2	2.1	0.7	53.0					
143	愛宕山	3号住	石									8C後半		
		"	石									8C後半		
		4号住	鉄									8C後半		
		"	石									8C後半		

第2節 遺物について

No	遺跡名	出土遺構	材 質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備 考	
144	大釜	7号住	石	A	4.5/2.7	2.0	0.5	47.5	8 C後半		
		22号住	鉄		6.3				10 C前半	結露欠	
		23号住	土	B	6.4/6.0	1.4	0.7		9 C前半		
		26号住	石	B	4.7/3.0	1.4	0.7	43.4	9 C前半	刻書あり	
	145	戸神諏訪	10号住	石(蛇紋岩)	A	4.48/3.05	1.58	0.72	49.1	9 C前半	
			58号住	石(蛇紋岩)	B	4.8/4.08	1.40	0.69	30.4	8 C後半	刻書あり
			63号住	石(流紋岩)	B	5.35/4.62	2.12	0.69	79.2	9 C前半	
			84号住	鉄		6.5			23.4	9 C後半	
			118号住	石(流紋岩)	A	4.91/3.36	2.43		63.2	9 C前半	未製品
			129号住	石(流紋岩)	A	4.76/3.45	1.68	0.74	59.1	9 C前半	刻字
			136号住	石(蛇紋岩)		4.88/3.85	1.56	0.68	67.0	9 C後半	刻字
	146	戸神吉田	1号住	土	C	4.2	0.8	0.7	17.0	弥生後期	
	147	奈良田向	3号住	石	B	4.8/3.0	1.2	0.9	46.0	10 C前半	
	148	奈良原	2号住		C	5.4	1.8			弥生後期	
5号住				C	4.5	1.5	0.9				
149	町田小沢	9号住		B	4.8/3.6	1.5	0.8		9 C前半		
150	石罫	A区6層	土	C	5.6	1.1	0.7				
		B区6層	土	C	5.4	1.2	0.7	35.5			
		#	土	C	4.7	1.0	0.6	29.8			
		#	土	C	5.2	1.1	0.7	26.0			
		#	土	C	5.7	1.0	0.7				
		#	土	C	4.3	1.1	0.7				
		#	土	C	(5.2)	1.0	0.5				
		#	土	C	4.2	1.0	0.6	18.2			
		#	石(砂岩)	C	(4.0)	(1.0)	0.7				
		#	石(蛇紋岩)	C	4.8	1.2	0.8	44.6			
		A区14号住	土	C	(5.0)	1.0	0.6	11.5		古墳前期	
		B区23号住	土	C	4.0	0.8	0.5			弥生後期	十五台
		C区4号住	石(磨石)	A	3.6/1.7	2.4	0.6	44.1	6 C		
		#	石(磨石)	A	4.5/2.6	2.4	0.6	59.0	6 C		
		B区10号住	土	B	5.2/3.5	1.4	0.7	34.0	8 C後半		
		A区4号住	鉄		4.3	0.2	0.4			9 C前半	
		C区12号住	石(蛇紋岩)	C	4.4	1.4	0.6	45.0	9 C後半		
		C区16号住	鉄		(5.0)	0.2	0.3			9 C後半	
		#	鉄		6.1	0.2	0.5			9 C後半	丸幅22.6cm
		D区13号住	土		7.3	1.0	0.8			9 C後半	坏底部転用
		#	石(砂岩)		5.1/3.2	1.2	0.7	38.2	9 C後半	砂岩覆土	
		#	鉄		5.4/5.0	0.4	0.6			9 C後半	輪9.8cm
		A区10号住	土		5.5	1.1	0.5	43.8		弥生後期	
		A区12号住	土		3.4/3.1	1.1	0.45	12.0		弥生後期	
		#	土		3.9/3.5	0.7	0.5	9.0		弥生後期	住居外
		B区11号住	土		4.8	1.1	0.7	25.0		弥生後期	
B区16号住	土		5.7	0.9	0.4	32.0		弥生後期			

第4章 調査成果の整理とまとめ

	No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考		
月	151	師・鎌倉	S J 40	石(蛇紋岩)	A	4.2/2.4	1.9	0.6	44.4	6 C前半			
			S J 50	石(蛇紋岩)	A	3.9/2.1	1.5	0.6	35.5	6 C			
	152	後田 II	S J 17	土			4.5	1.65	0.8	30.76	平安	円筒形・土師質	
			S J 18	土	C		5.1	1.0	0.76	34.88	6 C	土師質	
			S J 51	石(蛇紋岩)	A		3.9/2.7	2.1	0.75	51.87	6 C前半		
			S J 63	石(蛇紋岩)	A		3.9/3.0	1.8	0.6	38.9	6 C		
			S J 77	土	A		3.9/2.1	2.4	0.6	39.21		土師質	
			S J 76	石(蛇紋岩)	A		4.0/2.6	1.9	0.6	42.19	6 C		
			S J 79	石(蛇紋岩)	B		5.5/3.6	1.5	0.9	70.10			
			S J 93	石(蛇紋岩)	A		3.8/1.5	1.6	0.6	27.57	6 C		
			S J 98	石(蛇紋岩)	A		3.7/2.0	2.0	0.8	33.2	7 C前半		
			S J 114	土	A		5.0/2.8	2.5	0.6	54.68	6 C前半	土師質	
			S J 132	石(蛇紋岩)	A		4.3/2.1	2.2	0.7	53.59			
			S J 160	石(蛇紋岩)	A		3.6/2.4	2.1	0.7	39.38	6 C		
			S J 231	石(蛇紋岩)	A		3.8/2.1	1.8	0.6	40.35	6 C前半		
			S J 257	石(蛇紋岩)	A		3.9/1.7	1.5	0.6	25.92	9 C前半		
			S J 271	石(蛇紋岩)	A		3.8/2.1	1.3	0.7	32.22	6 C前半		
			S J 305	石(蛇紋岩)	A		4.2/2.1	1.8	0.6	40.15	6 C前半		
			S D158C	石(蛇紋岩)	A	4.3/					56.94		
			2Q~2R46	石(蛇紋岩)	A	4.5/	2.1				58.49		
			S D45	石(蛇紋岩)	A	4.4/	1.2				34.18		
			B区表探	石(蛇紋岩)	A	4.8/	2.5				78.20		
	S K14	石	A	5.2/	2.5				56.56		土師質		
	45D24	土	C	(5.0)	(2.4)				41.60		土師質		
	S D178	土	C		3.9			0.73	37.40		須恵勝		
	C45~49	土	C		5.6			0.6	24.18		須恵勝転用		
	町	153	十二原	グリッド	土	C		5.2	1.8	0.7			
		154	村主	6号住	石(滑石)	A	4.5/3.8	(1.5)	0.8	45.0	6 C前半	上部欠損	
				33号住	鉄			6.3	0.4			10 C前半	丸形25.5cm、点付書
		155	藪田東	4号住	石(滑石)	A	4.5/2.4	1.5	0.9			9 C後半	
				7号住	鉄			6.5				9 C後半	
		156	城平・諏訪	1号住	土	C		4.4	1.5	0.7	27.9	弥生後期	
				#	土	C				0.9			弥生後期
				7号住	鉄			6.4	0.2	0.5			9 C前半
		157	沢 I	O区目層	土			5.9	0.8	0.4			須恵勝F転用 須恵勝F転用
				#	土			(7.4)	0.7	(0.45)			
158	藪田	遺構外	土			5.9	1.6	0.6		弥生後期	笠形		
川 嶋 村	159	高野京	2号住	土	B	6.0/3.2	1.5	0.6	28.05	古墳前期			
			#	土	C		3.0	0.9	0.6	6.1	古墳前期		
			#	土	C		5.2	1.2	0.6	40.4	古墳前期		
			#	土	B	5.4/4.2	1.2	0.6				古墳前期	
			3号住	土	B	5.4/3.9	1.7	0.6	52.4	古墳前期			
			4号住	土	B	5.4/4.8	1.4	0.9	56.1	古墳前期			
			5号住	土	C		4.5	1.5	0.6	27.9	古墳前期		
#	土	C		4.5	1.1	0.6	26.5	古墳前期					

第2節 遺物について

No	遺跡名	出土遺構	材 質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備 考	
川 場 村	高野原	6号住	土	C	5.1	1.7	0.6	51.0	古墳前期		
		7号住	土	C	5.0	1.1	0.6	34.8	弥生後期		
		#	土	C	5.8	1.2	0.6	(16.0)	弥生後期		
		11号住	土	B	4.3/2.1	1.1	0.75	29.7			
昭 和 村	永井宮前 I	25号住	鉄						10C前半	丸軸27cm	
		26号住	石	A	4.8/2.6	1.6	0.7	55.0	10C前半		
		71号住	土	C	5.0	1.0	0.6		古墳前期		
161	中棚	NY 1号住	土	A	4.2/2.8	2.0	0.4		古墳前期		
		#	土	A	3.6/2.4	1.6	0.6		古墳前期		
伊 勢	162	書上上原之塚	6号住	石	A	5.1/3.6	1.7	0.7			
			41号住	石	A	5.0/	1.8	0.7			
			43号住	石(滑石)	A	5.1/3.6	1.7	0.8		9C中頃	透野皿、 ¹⁾ 美、
	163	上榎木宮町田	地下式土壇	石(滑石)	A	3.6/2.0	1.7	0.7			溝割
			164	上榎木元仙房	2号住	石(蛇紋岩)	B	4.4/2.1	1.5	0.8	38.1
	7号住	石(蛇石)			B	5.1/4.3	2.1	1.0	55.2	9C後半	
	#	土			B	6.0/4.0	1.6	0.9	65.4	9C後半	須恵器転用
	8号住	石(流紋岩)			B	5.5/4.0	1.9	0.9	64.7	9C	
	12号住	石(蛇紋岩)			B	4.9/3.9	1.4	0.8	51.1	9C後半	
	36号住	石(蛇紋岩)			B	5.2/3.6	1.5	0.9	67.4	9C後半	透野文字 ²⁾ 王、
	37号住	石(蛇紋岩)			B	5.0/3.6	1.5	0.9	56.7	9C後半	透野文字 ²⁾ 天、 ³⁾ 矢、海
	91号住	石(蛇紋岩)			B	5.4/4.0	1.5	0.9	68.3	10C前半	透野文字 ²⁾ 全、
	116号住	石(蛇石)			B	6.0/3.4	2.0	1.2	60.8	9C後半	
田区表探	土	B			(5.0)/3.4	1.8	(0.9)				
田区表探	石(流紋岩)	B	4.6/3.4	1.9	0.9	42.5					
165	掘下八幡	22号住	鉄					8.9	8C後半		
		68号住	鉄					48.1	9C後半		
		69号住	鉄					31.5	9C後半		
		1号住	石(安山岩)	C	5.7	1.4		32.9	9C後半		
166	書上本山	2号住	石(蛇紋岩)	A	4.3/2.2	1.9	0.7	43.8	古墳後期		
167	中組	1号住	石(滑石)	A	4.2/2.2	2.2	0.6		8C前半		
		#	石(滑石)	A	3.8/2.2	2.0	0.7		8C前半	炭化櫛残存	
		#	石(滑石)	A	4.5/3.3	3.3	0.7		8C前半		
168	八幡町	3号住	石(蛇紋岩)	B	4.6/1.8	1.1	0.8		古墳中期		
		18号住	石(蛇紋岩)	B	4.0/2.5	1.0	0.7		古墳後期	溝割	
169	原之城	8号住	石	A	4.0/2.9	1.4	0.8		6C	漆を塗付	
		10号住	石	A	4.0/2.0	1.5	0.8		6C	表面に4個の丸あぶり	
170	西太田	5号住	土	C	4.4	1.8	0.6		弥生後期		
		#	土	C	5.0	1.6	0.6		弥生後期		
		186号住	土	C	5.2	1.7	0.6		弥生後期		
		#	土	C	5.3	2.9	0.5		弥生後期		
		204号住	土	B	6.5/4.4	1.8	0.8		9C		
171	東流通 団地	1-5-2号住	土	B					古墳前期		
		2-19-54号住	土						9C	埴輪部転用	
		2-12-9号住	石(滑石)								
		表探	石								

第4章 調査成果の整理とまとめ

	No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考
玉村町	172	上之手八王子	BH-39号住	石(滑石)	A	4.4/2.4	1.4	0.9		9C後半	
			BH-127号住	石	A	3.6/1.8	1.5	0.6		9C後半	
			BH-142号住	石	A	3.9/1.8	1.5	0.8		8C後半	
赤	173	下船向井	15号住	石	B	4.9/3.5	1.3	0.7			
			27号住	石	B						
			#	石	A						
			33号住	石	C						
	174	洞山古墳群 北浦・鹿嶋	2号住	石(滑石)	A	4.5/3.0	1.5	0.6		9C後半	
			15号住	石(安山岩)							
			1号棟	土	A	4.2/2.1	1.8	0.6			
	175	多田山東	3号住	石(滑石)	A	4.4/2.5	1.4	0.6			
			7号住	土	A	4.0/2.5	1.5	0.8			
			41号住	土	B	4.0/3.8	0.8	0.6			
43号住				A	6.0/3.2	1.7	0.6		古墳		
49号住				A	4.3/2.5	1.5	0.4				
176	下船牛伏	9号住	石(滑石)						6C		
177	今井	1号住	石(滑石)	A	3.6/1.8	1.4	0.6		6C		
		2号住	石(滑石)	A	3.6/2.0	1.6	0.6		6C		
		11号住	土	A	4.0/2.4	2.2	0.6		6C		
178	柳田	1号住	石(滑石)	A	4.4/2.8	1.6	0.4		6C		
		6号住	石(滑石)	B	4.7/3.6	1.5	0.8		9C後半		
		31号住		A	4.0/2.8	1.6	0.8		9C後半		
		#		C	5.4	1.4	1.0		9C後半		
		40号住		A	4.2/2.8	1.6	0.6		7C		
境	179	下瀬名塚遺	II145号住	石(蛇紋岩)	A	4.1/2.7	2.0	0.8			
			#	土	A	4.3/3.3	2.4	0.7			
			III29号住	石(磁沢石)	B	4.4/3.7	1.2	0.75		10C	
			III46号住	石(凝石)	A	4.5/2.6	3.1	0.8		古墳前期	
			III49号住	石(磁沢石)	A	4.3/2.9	2.4	0.8		10C後半	
			III53号住	石(磁沢石)	B	4.8/4.3	2.1	1.0		10C後半	
			IV3号溝	土	C	4.6	1.1				
			表探	石(滑石)	A	4.2/2.2	1.2	0.6	28.6		
	180	西今井	7号住	石(凝灰岩)	A	3.6/2.4	1.6	0.8	32.0	8C後半	
			22号住	石(滑石)	B	4.3/2.4	1.2	0.7		9C前半	
			80号住	石(蛇紋岩)	B	4.2/3.0	1.0	0.8	37.0	9C	
			87号住	石(蛇紋岩)	B	4.0/2.6	1.4	0.8	36.0	9C後半	
			165号住	土	A	4.8/4.0	1.8	0.7	71.0	9C	須恵器片粘用
181	上瀬名真神谷	1号古墳	石(蛇紋岩)	A	4.6/2.7	1.6	0.7		6C前半		
182	三室間ノ谷	II2号住	石(滑石)	A	3.3/1.6	1.4	0.75	16.7	6C前半		
183	三ッ木(早川)	100号住	土	C	6.9				11C	須恵器片粘用	
184	三ッ木	49号住	石(滑石)	A	3.8/2.85	1.4	0.83	56.1	6C前半		
		68号住	土	A	5.55/2.90	2.37	0.63	64.4	6C		
		150号住	土	A	5.77/3.60	2.19	0.86	68.2			
		216号住	土	樽形	5.7	1.96	0.1	77.1	9C前半	須恵器片粘用	
185	十三宝塚		鉄		5.0	0.4	0.6			輪4.3cm	

第2節 遺物について

No	遺跡名	出土遺構	材質	形状	径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	時期	備考			
東 村	八寸大道上	034遺構	石(蛇紋岩)	A	4.0/2.0	1.8	0.6		6C				
		041遺構	石(蛇紋岩)	A	4.4/3.2	1.6	0.6		6C				
		表扉	石(蛇紋岩)	A	4.0/2.1	2.0	0.5						
太 田	187	八幡	S J 12	石(蛇紋岩)	B	6.7/5.7	2.3	0.9		9C後半			
	188	成塚石橋	第3河道	土	A	4.3/3.5	3.8	0.8					
	189	庚塚・上雷	1号住	土	C	4.7	1.6	0.5	32.0		古墳前期		
			#	土	C	4.8	1.7	0.6	46.0		古墳前期		
			#	土	C	(3.9)	1.2	(0.4)			古墳前期		
	190	安房田	S B 02	石	A	(5.0)	1.8	1.0	83.0				
	191	塚井	2号墳	石(滑石)	A	4.4/2.2	1.6			6C	形状に類似		
	192	清水田	S B 023	土	C	5.1	0.9	0.6			平安	表面磨製跡あり	
			S B 101	石	A	4.5/2.6	1.7	0.6					
			S B 113	土	C	4.5	1.8	0.5					
193	賀茂	7号住	石(安山岩)	B	5.6/2.6	1.3	1.0			9C後半			
194	小町田	43号住	石	A	4.6/2.2	2.1	0.7			6C			
		8号住	土	C	4.5	0.5	0.7			9C	表面磨製跡あり		
		6号住	土	C	6.0	0.8				9C	表面磨製跡あり		
		34号住	土	B	6.7/5.6	1.0	1.1			9C後半	表面磨製跡あり		
		72号住	土	A	5.6/4.2	1.6	0.9			10C後半			
195	胸形 成塚往宅団地	N-17号住	石										
		5号住	土	B	5.1/3.0	1.4	1.0			9C初期			
		34号住	土	B	5.3/3.9	1.4	0.9	43.0		9C後半			
		#	土	C	6.0	1.0	1.0	40.3		#			
		6号住	石(滑石)	A	4.0/3.1	2.1	0.7			6C中頃			
		13号住	石(蛇紋岩)	A	5.2/3.3	1.6	0.7			8C前半			
197	歌舞伎	A-1号住	石	A	4.5/2.4	2.1	0.8			7C前半			
		A-86号住	石	A	4.5/2.4	2.1	0.9			7C前半			
		B-9号住	石	C	4.8	1.2	0.9						
		2号溝		C	5.7	0.9							
		198	東田	8号住	石(滑石)	B	5.1/2.4	1.0	0.8			6C	
				#	石(滑石)	B	5.2/2.4	1.2	0.6				
199	台	62B区2号住	石(蛇紋岩)	A	5.0/3.4	1.5	1.0			9C後半	形状「甲」/「入」 「口」中頃		
尾 島 町	小角田前	127号住	石	A	3.5/(1.6)			0.8		7C前半			
		150号住	土	A	5.7/4.0	1.8	1.2	63.0		6C			
		#	土	A	5.2/2.9	2.2	1.2	51.0					
		#	土	A	5.7/3.5	2.3	1.0	68.0					
		207号住	石	C	5.9	2.4	1.0	72.5		8C前半			
		231号住	石	A	3.9/2.1	2.2	0.7	43.5		6C後半			
坂 倉 町	伊勢ノ木・小保呂	3号住		A	5.2/4.8	2.8	0.9						
		10号住		A	5.8/4.3	2.2	1.0						
		4号住	石(滑石)	A	6.0/2.4	3.0	1.0						

第4章 調査成果の整理とまとめ

群馬県内における助産車出土遺跡 文献 (No.は一覧表と対応する)

- (1) 「寛野・下田中・矢場遺跡」群馬県企業局 1991
- (2) 「鳥羽遺跡 G・H・I区-問題自動車道(新高線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 本文編-」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (3) 「鳥羽遺跡 I・J・K区-問題自動車道(新高線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第21集 本文編-」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- (4) 「鳥羽遺跡 L・M・N・O区-問題自動車道(新高線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第31集 本文編-」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (5) 「前田遺跡 東善住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
- (6) 「内堀遺跡群Ⅳ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1991
- (7) 「荒砥洗橋遺跡 荒砥宮西遺跡 昭和55年度県営橋場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (8) 「飯上井二本松遺跡 下江田前遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (9) 「荒砥上川久保遺跡 昭和50-51年度県営橋場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- (10) 「下野西遺跡-問題自動車道(新高線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 本文編-」群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県考古資料普及会 1987
- (11) 「荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥町柳遺跡 昭和56年度県営橋場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (12) 「乙之宮千足遺跡(本文編) 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (13) 「荒砥天の宮遺跡 昭和55年度県営橋場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- (14) 「荒砥北三木堂遺跡Ⅰ 昭和56年度県営橋場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (15) 「内堀遺跡群Ⅲ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990
- (16) 「内堀遺跡群Ⅱ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1989
- (17) 「荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡」山武考古学研究所 1990
- (18) 「群馬県前橋市柳久保遺跡群Ⅲ発掘調査報告書」山武考古学研究所 1988
- (19) 「松本遺跡発掘調査報告書」前橋市教育委員会 1982
- (20) 「芳賀東部団地遺跡Ⅰ(古墳～平安時代編その1) 芳賀団地遺跡群第1巻」前橋市教育委員会 1984
- (21) 「芳賀東部団地遺跡Ⅱ(古墳～平安時代編その2) 芳賀団地遺跡群第2巻」前橋市教育委員会 1988
- (22) 「柳久保遺跡群Ⅱ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988
- (23) 「引切塚遺跡」前橋市教育委員会 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988
- (24) 「梅木遺跡」前橋市埋蔵文化財調査団 1986
- (25) 「鳥羽遺跡 A・B・C・D・E・F区-問題自動車道(新高線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第30集 本文編-」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (26) 「元総社明神遺跡Ⅴ 土地地区面整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
- (27) 「群馬県前橋市天神遺跡発掘調査報告書」山武考古学研究所 1987
- (28) 「寺田遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 前橋市教育委員会 1987
- (29) 「群馬県前橋市埋蔵文化財発掘調査報告書」山武考古学研究所 1988
- (30) 「富田遺跡群 西大室遺跡群 土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報」前橋市教育委員会 1982
- (31) 「昭和59年度 荒砥北部遺跡群発掘調査概報」群馬県教育委員会 1984
- (32) 「閑泉榎南遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1986
- (33) 「草作遺跡(59A-3)」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985
- (34) 「前田田遺跡」前橋市教育委員会 1983
- (35) 「元総社明神遺跡Ⅰ」前橋市教育委員会 1983
- (36) 「山王崎寺跡第5次発掘調査報告書」前橋市教育委員会 1979
- (37) 「青柳寄居遺跡群」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1984
- (38) 「輪谷遺跡群Ⅱ」前橋市教育委員会 1982
- (39) 「60C-1 小神明遺跡Ⅳ 湯気遺跡 九科遺跡」前橋市教育委員会 1986
- (40) 「61C-4 小神明遺跡Ⅴ」前橋市教育委員会 1987
- (41) 「柳久保遺跡群Ⅰ-昭和59年度調査概要-」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985

- 90 『筑前島原遺跡—昭和35年度皇宮園地整備事業筑前南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 91 『白藤古墳跡 船川村文化財報告第10集』船川村教育委員会 1989
- 92 『西津遺跡 船川村文化財報告第11集』 船川村教育委員会 1990
- 93 『堤浜遺跡—昭和35年度皇宮園地整備事業船川地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—』船川村教育委員会 1988
- 94 『南田下1—昭和35年度皇宮園地整備事業に伴う発掘調査報告(1)—船川村文化財報告第2集』船川村教育委員会 1982
- 95 『南天笠遺跡発掘調査報告書—図版編—』新里村教育委員会 1981
- 96 『茅渚遺跡—里榎み草の発掘調査—』新里村教育委員会 1985
- 97 『勝保田中ノ山遺跡Ⅰ—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第22集—』群馬県教育委員会 朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 98 『寺内遺跡—二ツ岳浮石棚下の古墳時代集第—』群馬県勢多郡赤城村教育委員会 1975
- 99 『富士見遺跡跡 田中田遺跡 宜谷戸遺跡 見取遺跡 昭和38・59年度皇宮園地整備事業富士見地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』群馬県富士見村教育委員会 1986
- 100 同 上
- 101 『富士見遺跡跡 向吹雲遺跡 岩之下遺跡 田中遺跡 寄居遺跡 昭和60・61年度皇宮園地整備事業富士見地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』群馬県富士見村教育委員会 1987
- 102 『天神風呂遺跡発掘調査報告書』大古町教育委員会 1981
- 103 『熊野堂遺跡①—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第3集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 104 『熊野堂遺跡②遺構編Ⅰ—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第14集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 105 『熊野堂遺跡(第1分冊)—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第15集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 106 『新保遺跡Ⅱ 弥生・古墳時代集第編—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 本文編—』群馬県教育委員会 朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 107 『下野田・瀧川A遺跡 瀧川B・C遺跡—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第17集—』群馬県教育委員会 朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 108 『中尾(遺構編)—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集—』群馬県教育委員会 朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 109 『田原遺跡(第4分冊)—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第9集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 110 『舟塚遺跡—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第12集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 111 『下佐野遺跡Ⅰ Ⅰ地区・寺前地区① 縄文時代・古墳時代編①—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第11集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 112 『下佐野遺跡Ⅱ Ⅱ地区(縄文時代・古墳時代)—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第6集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 113 『熊野堂遺跡第Ⅱ地区 附書遺跡 泉道柏木沢・高崎線改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』群馬県考古資料普及会 1984
- 114 『新保田中村前遺跡Ⅱ 一級河川染谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2分冊』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 115 『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大講編—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集—』群馬県教育委員会 朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 116 『八幡中原遺跡—中学校建設に伴う調査概報—高崎市文化財調査報告書第31集』高崎市教育委員会 1982
- 117 『石原稲岡山古墳 高崎市文化財調査報告書第34集』高崎市教育委員会 1981
- 118 『引間遺跡 高崎市文化財調査報告書第5集』高崎市教育委員会 1979
- 119 『山島・天神遺跡 高崎市文化財調査報告書第56集』高崎市教育委員会 1984
- 120 柿沼志介『東野遺跡』『群馬県史 資料編2 原始古代2』1986
- 121 鬼形芳夫『大島原遺跡』『群馬県史 資料編2 原始古代2』1986
- 122 『大八木箱田遺跡(Ⅰ) 高崎市文化財調査報告書第55集』高崎市教育委員会 1984
- 123 『日高遺跡(晋)—昭和36年度園地整備事業に伴う日高・新保田中地区の調査概報—』高崎市文化財調査報告書 高崎市教育委員会 1982
- 124 『上野田分指寺・尼寺中間地域②—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県教育委員会 1988
- 125 『上野田分指寺・尼寺中間地域③—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 126 『上野田分指寺・尼寺中間地域④ 本文編Ⅰ—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第33集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県教育委員会 1990
- 127 『上野田分指寺・尼寺中間地域⑤—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第36集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県教育委員会 1991
- 128 『上野田分指寺・尼寺中間地域⑥—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第37集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県教育委員会 1992
- 129 『上野田分指寺・尼寺中間地域⑦—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第38集—』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県教育委員会 1992
- 130 『因分墳遺跡—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第34集—』群馬県教育委員会 朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990

第4章 調査成果の整理とまとめ

- 83 『北原遺跡 本文編-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-1)-』群馬県群馬町教育委員会 1986
- 84 『三ツ寺I遺跡(本編)-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集-』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 85 『三ツ寺II遺跡 資料編1-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第13集-』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 86 『三ツ寺II遺跡 資料編2-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第13集-』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 87 『三ツ寺III遺跡 保護田遺跡 中里天神塚古墳(第1分冊)-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集-』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 88 『三ツ寺III遺跡 保護田遺跡 中里天神塚古墳(第2分冊)-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集-』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 89 『上野田分寺岡後地域発掘調査報告 奈良・平安時代の整穴住居跡等の調査』群馬県教育委員会 1979
- 90 『西湖北遺跡 群馬町埋蔵文化財調査報告第25集』群馬県群馬町教育委員会 1989
- 91 『保護田遺跡群 第3次発掘調査報告(1)』群馬町埋蔵文化財調査報告第24集。群馬県群馬町教育委員会 1989
- 92 『西国分遺跡群 土地改良総合整備事業西国分地区に係る埋蔵文化財発掘調査 群馬町埋蔵文化財調査報告第28集。群馬県群馬町教育委員会 1990
- 93 『保護田東遺跡 群馬町埋蔵文化財調査報告第17集』群馬県群馬町教育委員会 1986
- 94 『井手村東遺跡。群馬町井手村東遺跡調査会 1983
- 95 『保護田・荒神前遺跡 三排遺跡 群馬町埋蔵文化財調査報告第21集』群馬県群馬町教育委員会 1988
- 96 『中林遺跡調査概報 群馬町埋蔵文化財調査報告第6集。群馬県群馬町教育委員会 1983
- 97 『小池遺跡 群馬町埋蔵文化財調査報告第33集。群馬県群馬町教育委員会 1992
- 98 『生原・善徳寺前遺跡。其郷町教育委員会 1986
- 99 『海行A・B遺跡 泉宮園地整備に伴う生原遺跡群の調査。其郷町教育委員会 1988
- 100 『有馬遺跡II 本文編-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第32集-』群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 101 『有馬来里遺跡I-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第29集-』群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 102 『有馬来里遺跡II-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第35集-』群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 103 『有馬遺跡I 大久保B遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第26集-』群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 104 『有馬来里遺跡 神田地区 第2分冊 平安時代 渋川市発掘調査報告書第7集』群馬県渋川市教育委員会 1983
- 105 『神宮寺西遺跡発掘調査報告書-渋川市発掘調査報告書第21集-』群馬県渋川市教育委員会 1988
- 106 『中村遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-III)-』1986
- 107 『大久保A遺跡I区-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書・K・C・II(第一分冊)-』群馬県北群馬郡吉岡町教育委員会 1986
- 108 『大久保A遺跡II区-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書・K・C・II(第二分冊)-』群馬県北群馬郡吉岡町教育委員会 1986
- 109 『七日市遺跡 滝沢古墳 女塚遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書・K・C・II(第三分冊)-』群馬県北群馬郡吉岡町教育委員会 1986
- 110 『黒井家遺跡I-群石下の古墳時代集落の調査-子持村文化財調査報告第2集』群馬県北群馬郡子持村教育委員会 1985
- 111 『F1群馬県藤岡市竹沼遺跡。群馬県藤岡市教育委員会 1978
- 112 『藤岡市遺跡詳細分布調査(II) 美土里地区。群馬県藤岡市教育委員会 1983
- 113 『温井遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第2集-』群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 114 『本郷山橋遺跡 一般河川荒川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 115 『上草原遺跡 下大塚遺跡 中大塚遺跡-主要地方道前橋・長野線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 116 『本郷尺地遺跡 一般河川荒川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 117 『B4株木遺跡 都市計画道路小林立一立石線第1期事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』群馬県藤岡市建設部都市施設課 1984
- 118 『A1堀ノ内遺跡群 国道254号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 本文編。群馬県藤岡市教育委員会 1982
- 119 『森・中I・中II遺跡-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第2集-』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 120 『川福遺跡調査報告書。吉井町教育委員会 1986
- 121 『川内遺跡発掘調査報告書。吉井町教育委員会 1982
- 122 『東吹上遺跡 群馬県立博物館研究報告第8集。多野郡吉井町教育委員会 1974
- 123 『入野遺跡。尾崎喜左衛門。吉井町教育委員会 1962
- 124 『入野遺跡 入野中学校校舎新築に伴う埋蔵文化財調査報告書。吉井町教育委員会 1985
- 125 『入野遺跡III 入野中学校校舎体育館建設に伴う埋蔵文化財調査報告書。吉井町教育委員会 1986
- 126 『柳田遺跡発掘調査報告書 吉井町文化財調査報告書第21集。吉井町教育委員会 1989

- 00 『黒瀬遺跡群発掘調査報告(1)』吉井町教育委員会 1981
 『黒瀬遺跡発掘調査報告書』吉井町教育委員会 1982
 『黒瀬遺跡群調査報告書(3)』吉井町教育委員会 1984
 『黒瀬遺跡発掘調査報告書(3)』吉井町教育委員会 1983
 『黒瀬遺跡群調査報告書(4)-本文編-』吉井町教育委員会 1985
 『黒瀬遺跡群調査報告書(5)-図版編-』吉井町教育委員会 1985
- 01 『櫛宮戸遺跡発掘調査報告書』吉井町教育委員会 1989
- 02 『東沢遺跡 折茂東遺跡』吉井町教育委員会 1987
- 03 『長根羽田倉遺跡 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第3集』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 04 『矢田遺跡 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 05 『矢田遺跡Ⅱ 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集』群馬県考古資料普及会 1991
- 06 『矢田遺跡Ⅲ 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第9集』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 07 『神楽下降遺跡 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集』群馬県考古資料普及会 1992
- 08 『本宮・郷土遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会 1981
- 09 『上田藩古墳群・原田塚遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会 1984
- 10 『内沼遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会 1982
- 11 『野上塩之久遺跡 塩之久城遺跡 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 12 『田積上平遺跡 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 13 『戸沼原古墳遺跡 内沼日影地遺跡 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 14 『橋瀬古墳群 昭和62、63年度橋瀬地区土地改良総合整備事業に伴う橋瀬古墳群の発掘調査報告書 富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集』富岡市教育委員会 1990
- 15 『笹塚遺跡 關川流域における磨石製品出土遺跡の研究』群馬県立博物館 1966
- 16 『甘楽系土器遺跡 昭和61年度吾妻岡場整備事業甘楽北部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 甘楽町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集』甘楽町教育委員会 1989
- 17 『榎木畑遺跡-安中市特別養護老人ホーム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』群馬県安中市教育委員会 群馬県安中市福祉事務所 1990
- 18 『新寺地区遺跡群-一般県道湯部停車場妙義山線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』安中市教育委員会 1991
- 19 『群馬県甘楽郡妙義町 妙義東部遺跡群(Ⅱ)-発掘調査報告書-』妙義町教育委員会 1989
- 20 『松井田工業団地遺跡(遺構編)』松井田町教育委員会 群馬県企業局 1990
- 21 松島英治『愛宕山遺跡』『群馬県史 資料編2 原古代2』群馬県 1986
- 22 『大室遺跡-金山古墳群-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集-』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 23 『戸神原遺跡 奈良・平安時代編-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第30集-』群馬県教育委員会 00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 24 『戸神吉田遺跡 渡辺林産工業株式会社工場移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1988
- 25 『奈良地区遺跡群(奈良田向遺跡) 土地改良総合整備事業奈良地区に係る埋蔵文化財発掘調査の概要』沼田市教育委員会 1990
- 26 『奈良地区遺跡群(奈良京遺跡) 土地改良総合整備事業奈良地区に係る埋蔵文化財発掘調査の概要』沼田市教育委員会 1991
- 27 『町田小沢遺跡 有限会社戸部組産業廃棄物中間処理施設設置に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1990
- 28 『石巻遺跡 本文編-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書・K. C. Ⅵ-』群馬県沼田市教育委員会 1985
- 29 『藤原遺跡・鎌倉遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第28集-』群馬県教育委員会 00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 30 『飯田遺跡Ⅱ 本文編-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第23集-』群馬県教育委員会 00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 31 『十二原・大原・前中原遺跡-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第1集-』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 32 『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡 一般国道17号線(月夜野バイパス)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-Ⅲ-』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 33 『飯田東遺跡 国道291号支路改良工事地域埋蔵文化財発掘調査報告書』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 34 『城平遺跡・真跡遺跡 一般国道17号線(月夜野バイパス)改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-Ⅰ-』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 35 『岡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第7集-』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 36 『飯田遺跡-上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第4集-』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 37 『門前橋跡・河内戸遺跡 高野原遺跡 公共開発関連出土品等整理報告書』00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 38 『赤井宮内遺跡Ⅰ-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第8集-』群馬県教育委員会 00群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 39 『中環遺跡・長井坂遺跡-関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-6)-』昭和村教育委員会 1985

第4章 調査成果の整理とまとめ

- 90 「書上下吉祥寺遺跡 書上土原之横遺跡 上植木屯町田遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 91 同 上
- 92 「上植木光仏母遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 93 「堀下八幡遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 94 「書上木山遺跡 波志江六反田遺跡 波志江天神山遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 95 「中根遺跡—県立伊勢崎商業高校セミナーハウス建設に伴う発掘調査—」群馬県教育委員会 1985
- 96 「八幡町遺跡(B地区) 伊勢崎市都市計画道路3・3・3号北部階状跡建設工事に伴う発掘調査報告書」伊勢崎市 伊勢崎市教育委員会 1987
- 97 「原之城遺跡発掘調査報告書」伊勢崎市教育委員会 1987
- 98 「西太田遺跡」伊勢崎市 伊勢崎市教育委員会 1983
- 99 「伊勢崎・東(あずま)流通団地遺跡」群馬県企業局 1982
- 100 「上之平八王子遺跡」群馬県佐波郡玉村町教育委員会 1991
- 101 「下柳町井遺跡発掘調査概報—今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告— 群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告13」赤堀村教育委員会 1980
- 102 「岡山古墳群及び北通、鷹巣遺跡発掘調査概報—伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告— 群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告20」赤堀村教育委員会 1983
- 103 「多田山東遺跡発掘調査概報—今井北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告— 群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告17」赤堀村教育委員会 1982
- 104 「下柳中伏遺跡 身体障害者スポーツセンター建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 105 「今井柳田遺跡発掘調査概報—今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告— 群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告18」赤堀村教育委員会 1982
- 106 同 上
- 107 「下柳名塚遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 108 「西今井遺跡—一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 109 「西今井遺跡 早田河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 110 「上郷金満神谷遺跡 三笠間ノ谷遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 111 同 上
- 112 「三ッ水遺跡 早田河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 113 「三ッ水遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1985
- 114 「十三宝遺跡発掘調査概報Ⅱ」群馬県教育委員会 1976
- 115 「八寸大道遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 116 「太田市八幡遺跡」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 117 「成塚石橋遺跡Ⅱ 一級河川蛇川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 118 「成塚・上・雷遺跡 国道122号(太田バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1980
- 119 「太田東部遺跡群」群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県教育委員会 1985
- 120 同 上
- 121 同 上
- 122 「貫茂遺跡 国道122号(太田バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」群馬県考古資料普及会 1984
- 123 「小町田遺跡 国道122号(太田バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 124 「群馬・太田市駒形遺跡南地区発掘調査概報」駒形遺跡調査会 1983
- 125 「成塚住宅団地遺跡Ⅰ [成塚住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書]」太田市教育委員会 1990
- 126 「歌舞伎遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 127 「東田遺跡 新田町文化財調査報告書第9冊」群馬県新田町教育委員会 1987
- 128 「台遺跡—高尾尾ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—新田町文化財調査報告書第10冊」新田町教育委員会 1988
- 129 「小角田前遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 130 「伊勢ノ木・小保呂遺跡発掘調査報告書」飯倉町教育委員会 1985

第3節 科学分析

多胡蛇黒遺跡出土の漆紙について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 永嶋正春

1 はじめに

標記遺跡の39号住居跡から、「甘」という墨書銘を有する須恵器の内面に、漆紙様のものが付着して出土した。漆紙と確認できれば、その遺跡で何らかの漆作業が行われていたと考えることができる。これは遺跡や遺構の性格を考える上で大変重要である。

漆紙様のものの遺存状態は悪く、調査時に於いては既に須恵器内面より剝離しており（カラー図版1-1）、しかも本来残るはずの量の、面積にして数分の1くらいが細片化して残存するに過ぎない（カラー図版1-2～4）。ところでこれらの断片を実見するに、その色調や薄手でしかも細かな褶曲を有する点など、まさに漆紙的ではあった。しかしながら、あまりに細かな破片であったため、顕微鏡的な確認を行った上で結論を出すべきものと考えて調査を実施した。

2 調査結果

調査は、光学顕微鏡による表面及び断面の観察を主体としたが、併せて墨書文字の有無を確定するための赤外線テレビカメラによる断片の観察も行った。

墨書文字の有無 資料は後述の様に漆紙であり、当然ながら反放紙を利用したものと考えられる。しかしながら、全ての残存断片の表裏を、赤外線テレビカメラにより丁寧に観察した限りに於いては、墨書文字あるいはその痕跡は検出されなかった。元の漆液の蓋紙の形態で考えれば、残存量はごく一部に過ぎず、したがって、このことを以て元々の蓋紙に文字が無かったとは必ずしも断定できない。

表面及び断面観察 資料の外面を金属顕微鏡で丹念に観察したところ、一部にはあるが、細く溝状に走る空洞部が認められた（カラー図版1-5）。これは資料表面に存在した紙の繊維が腐朽消滅して、周囲の漆に丘状の痕跡を残したものである。他部に認められないのは、紙を漆が覆った状況に有るためと考えてよい。

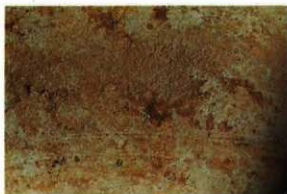
褶曲状の部分と最も薄手の部分とから、ごく小さな試料を採取し、ポリエステル樹脂にて埋法固定後、切斷研磨し、最終的には薄片に仕上げた試料について、その内容を検討したところ、本資料はくろめ漆の蓋紙と判断できた。褶曲状部分の層断面（カラー図版1-6）では、空隙部に粘土状の汚れが見られるものの、本来の部分は黄褐色で透明な、ほぼ均質な漆としての色調と性状を有しており、その漆層のなかに円形ないし長円形の空洞断面を認めることが出来る。最も薄手部分の資料断面（カラー図版1-7, 8）についても色調や性状は同様であり、生漆的な不均質さは全く認められない。

3 おわりに

調査の結果、標記の資料は漆紙しかもくろめ漆の蓋紙と判断できた。須恵器内外面の漆の付着状況からすると、この須恵器が漆液容器すなわちくろめ漆のバレットと考えるのは困難である。したがって、この漆紙は他の容器の蓋紙であり、漆紙を廃棄する時に、要らなくなった須恵器内にこれを投棄したのものと考えるのが合理的である。そう大きくない蓋紙と考えられる。

くろめ漆は上塗りに適した漆である。したがって、この遺跡に於ては、上塗りを必要とするような繊細な漆作業を行っていたのものと考えることができる。

カラー図版 1



1. 須恵器内面 漆附着状況

2.5×



2. 剥落した漆紙片 外面

0.8×



3. 漆紙片 最大片 外面

2.5×



4. 同左 裏面

2.5×



5. 漆紙片 表面の紙の痕跡

60×



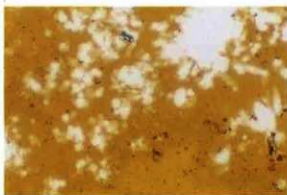
6. 漆紙 褶曲状部分の層断面

30×



7. 漆紙 薄い部分の層断面

30×



8. 同左 紙の繊維断面と漆

125×

第4節 まとめ

昭和61年より平成3年までの6年間におよぶ上越線の発掘調査が終了し、調査開始より7年経過した本年3月27日に、上信越自動車道が藤岡インターチェンジから佐久インターチェンジまで開通する。調査されたすべての遺跡は工事が完了し調査時の面影はない。ひとつの時代が終わった。そんな気がする。

ここでは調査により明らかになった点を整理し、あわせて今後の検討課題をあげてまとめたい。

旧石器時代は、I区とIV区の2ヶ所より石器群の出土が確認された。

縄文時代は矢田遺跡に近いI区で土坑が2基発掘されているが、住居跡は確認されていない。弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物は出土していない。

古墳時代後期の6世紀後半以降になると、多くの竪穴住居跡が発掘されるようになる。それらは西に接する矢田遺跡に近いI区から多く検出され、集落の始まる時期の大部分がこのI区に集中していることが明らかとなった。矢田遺跡でも大部分の住居がほぼ同じ時期より作られ始めているため、両遺跡には大きな関連があったものと思われる。奈良時代以降になると、古墳時代にみられたようなI・II区を中心とした集落の展開といった傾向は示さないでI区からIV区まで住居が作られる。これら住居の時期別の推移や規模の変化、さらに柱穴や貯蔵穴の問題について、第4章第1節(2)「竪穴住居跡の面積・貯蔵穴・柱穴・配置の問題について」(3)「古墳時代から平安時代に至る集落の変遷について」の中で検討した。

特徴的な遺物として、石製紡錘車を製作してゆく段階で出来たと思われる大量な滑石の剥片と紡錘車の未製品があげられる。この紡錘車は生活の中で使用する布のほかに、古代の租税である調庸布の生産に深く関係する。付表として群馬県内出土の紡錘車一覧表を載せた。今後この表の分析や紡錘車を出土している多くの遺跡の検討、さらに文献資料の活用により、古代における布生産の問題について考えてみたい。

従来から多くの遺跡で出土しているにもかかわらず、ほとんど研究対象とされてない「こも(鷹)石」について第4章第2節(5)「こも石について」の中で検討し、重量の違いからA・Bの2つのグループの存在を想定した。今後より多くの資料から、こも石の分類やそれにより編まれた品物の種類等について検討してゆきたい。

奈良時代の住居内より出土した須恵器環の中から漆紙が出土した。残念ながら紙の部分はほとんど残ってなく、文字の検出も出来なかった。この漆紙は国立歴史民俗博物館情報資料研究部の永嶋正春先生に分析をお願いし、第4章第3節「多胡蛇黒遺跡出土の漆紙について」として掲載した。

当遺跡の性格と特徴を理解するには、東に接する大集落遺跡である矢田遺跡を抜きにして語れない。この遺跡は『続日本紀』と銅四年三月辛亥条や「多胡碑」、あるいは「倭名類聚抄」等の記述にみられる上野国多胡郡八(矢)田郷の故地に比定されている。発掘の結果750軒近い古墳時代～平安時代を中心とした住居と、「八田郷」や「八田」と書かれた紡錘車等が出土している。多胡蛇黒遺跡も同じ八田郷に含まれると考えられるため、この矢田遺跡の調査結果と比較しながら当遺跡の特色について検討してみたい。しかし矢田遺跡では、平安時代の住居の整理作業は終了し報告書が刊行されているが、古墳時代と奈良時代の住居やほかの遺構については整理途上であり、総合的な報告はなされていない。そのため古墳時代～平安時代の集落遺跡としての比較検討は出来ない。現在行われている整理作業の進行の中で当遺跡の特色と性格について検討してゆきたい。

最後に発掘調査の中で多くの地元の人のご協力と、厳しい暑さや寒さの中で献身的に発掘作業を進めてくれた作業員の皆様のおかげをもって発掘調査が無事に終了し、また整理作業を精力的に進めてくれた整理補助員の方々の協力があって、この報告書が完成したことを記しておわりとしたい。

参考文献

本書を作成するにあたって主に以下の文献を参考にした。

- 春山秀幸・関口功一・富田一仁『矢田遺跡』Ⅰ～Ⅲ 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990～1992
- 鹿沼栄輔『長根羽田倉遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 右島和夫『神保下條遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 木村 取『内匠諏訪前遺跡・内匠日影周知遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 新井 仁『野上塩之入遺跡・塩之入城遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 木津博明・桜岡正信『上野国分僧寺・尼寺中間地域』1～7 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986～1992
- 徳江秀夫『荒砥天之宮遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 中沢 悟『清里・陣場遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 中沢 悟『大原Ⅱ・村主遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 『都城の土器集成』 古代の土器研究会編 1992
- 西 弘海『土器様式の成立とその背景』 1986
- 井川達雄『古墳時代・奈良時代の土器について』『三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 坂口 一『古墳時代後期の土器の編年』『群馬文化』 208号 1986
- 坂口 一『榛名山ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器』『荒砥北原遺跡』 1986
- 茂木由行『群馬県における鬼高式土器の編年』『群馬考古通信』 1984
- 田中広明『古墳時代後期の土師器生産と集落への供給』『埼玉考古学論集』 1991
- 神谷佳明『暗文土器』、三浦京子『住居跡出土土器の変遷』「S D59・46出土土器の様相」『下東西遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 桜岡正信『群馬県内出土の暗文土師器について』『群馬県史研究』 第30号 1989
- 渡辺 一『南北企業群の須恵器の年代』『埼玉考古』 第27号 1990
- 水口由紀子『考古遺物からみた中世成立期の様相』『文化財の保護』 第21号別冊 1989
- 鈴木徳雄『古代北武蔵における土師器製作手法の画期』『土曜考古』 第7号 1983
- 服部実喜『関東地方における平安時代後半期の土器の様相』『神奈川考古』 第24号 1988
- 酒井清治『武蔵国における須恵器年代の再検討』『研究紀要』 第9号 埼玉県立歴史資料館 1987
- 前田光雄『奈良・平安時代の「環状鈕」を有する須恵器坏蓋について』 武蔵考古学研究会 1990

発掘報告書抄録

フリガナ	タゴジャグロイセキ
書名	多胡蛇黒遺跡
副書名	関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第16集
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第146集
編集者名	中沢 悟
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦 1993年3月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
タゴ ジャグロ 多胡蛇黒	タノグン ヨシヤマチ オオアザタゴ 多野郡 吉井町 大字多胡	10363	10005- 00289	361421	1385930	19881101- 19890425 19900514- 19910621	24,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
多胡蛇黒	石器ブロック	旧石器時代	石器ブロック	ナイフ形石器	古墳時代後期～ 奈良・平安時代 を中心とした集 落遺跡	
				エンドスクレイパー		
	土坑 集落	縄文時代中期 古墳時代後期 奈良時代 平安後代 古墳～平安 奈良～平安	土坑	2		石核 剥片
				5		五領ヶ台式土器
				69		土師器坏・甕
				50		土師器坏・甕
				44		土師器坏・須恵器坏
				11		土師器坏・須恵器坏
				7		掘立柱建物跡
				32		土師器坏・甕・羽釜
土坑 溝 石列 道路状遺構	奈良～平安 近世 近世～昭和 近世～昭和	土坑	11	土師器坏・須恵器坏		
			1	石列		
			2	道路状遺構		

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第146集

多胡蛇黒遺跡

〈本文編〉

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第16集

平成5年3月25日印刷

平成5年3月31日発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北横村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北横村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社